HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小川未明の総合的再考 ： 詩業と思想展開を中心として
Author(s)	増井, 真琴
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13409号
Issue Date	2019-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13409
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74469
Type	doctoral thesis
File Information	Makoto_Masui.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

二〇一八年度

北海道大学大学院　博士論文

小川未明の総合的再考
――詩業と思想展開を中心として

文学研究科言語文学専攻　博士後期課程

〇五一七五〇一八　増井真琴

凡例……1

序論　本論の課題　――大正童話中心主義を超える……2
一　小川未明研究史の現状と課題　2
二　本研究の目的と方法　4
三　本研究の特色と意義　7
四　本論の構成と概要　10

Ⅰ部　詩業　――漢詩と口語自由詩

一章　漢詩　――高田中学時代の五言絶句・七言絶句……18
はじめに　18
一　血肉化する漢籍　――少年期の漢詩・漢文受容　19
二　雑誌『中学世界』への投書　――漢詩六篇　22
三　飯田庄八宛書簡　――漢詩四篇　26
四　飯田庄八宛書簡（2）　――漢詩四篇　29
五　未明漢詩の技巧と思想　――押韻・平仄・出典／赤・鳥・南北対比　32
六　日本近代漢詩史上の位置　――明治期漢詩ブームの外縁　35
小括　37

二章　口語自由詩　――詩集『あの山越えて』……44
はじめに　44
一　詩集『あの山越えて』　――書誌・同時代評・背景　44
二　テキストの異同　――初出（初収）と詩集の間　48
三　「淋しい暮方の歌」　――冬の叙景詩　53
四　日本近代詩史上の位置　――口語自由詩運動の傍系　55
小括　58

Ⅱ部　社会主義　――アナキズムと共産主義

三章　ユートピアンの夢　――童話「時計のない村」……63

はじめに　63
一　革命待望　――大正一〇年一月前後の未明　64
二　日本社会主義同盟の創建　――アナボル未分化の大同団結　67
三　童話「時計のない村」　――標準時と近代時間秩序の編成　72
四　変奏される時計童話　――近代否定・前近代肯定の反復　76
五　未明の童話観　――童話という夢　79
小括　80

四章　反テクノロジーという基層　――小説「血の車輪」……86
はじめに　86
一　マルクス主義への共鳴　――大正一一年一〇月前後の未明　87
二　小説「血の車輪」　――民衆を轢殺する「1362」　89
三　同時代の汽車・鉄道表象　――人間を襲撃する「魔物」　93
四　他作家との比較　――萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石　95
小括　99

五章　革命的知識人の挫折　――「童話作家宣言」……106
はじめに　106
一　未明の知識人批判　――二つの視点　107
二　小説における展開・破綻　――孤独な知識人像　110
三　「童話作家宣言」解釈史の陥穽　――未明＝アナキスト図式の誤り　113
四　知識人と革命　――大正期「知識人論」の流行　116
小括　121

III部　国家主義　――転向と国策協力

六章　転向者の軌跡　――階級闘争から八紘一宇へ……127
はじめに　127
一　社会主義の影響　128
二　「ブルジョアを脅威せよ！」　――階級闘争の鼓吹　131
三　国家主義の影響　136

四　「アジア共同体が真理なのであります」——聖戦のプロパガンダ　140
五　日本近代転向史上の位置——日中戦争を契機とした完全同調　145
小括　149

七章　満州事変下の後退——童話「青空の下の原つぱ」……156
はじめに　156
一　社会主義思想の持続——柳条湖事件から塘沽停戦協定まで　157
二　童話「青空の下の原つぱ」——残留する階級意識　160
三　転向の萌芽——日中戦争への道行き　164
四　文学者と満州事変——プロレタリア文学運動の敗北　167
小括　170

八章　国民精神総動員運動への傾倒——童話「僕も戦争に行くんだ」……176
はじめに　176
一　高揚するナショナリズム——昭和一二年一〇月前後の未明　177
二　童話「僕も戦争に行くんだ」——国民精神総動員運動下の転向　180
三　雑誌『お話の木』の児童表象——理想的愛国少年の造形　184
四　文学者と日中戦争——迫りくる総翼賛体制のただ中で　187
小括　193

九章　日本少国民文化協会への結集——童話「頸輪」……199
はじめに　199
一　「児童読物改善ニ関スル指示要綱」から日本少国民文化協会設立まで　200
二　日本少国民文化協会での発言・行動——打倒米英の扇動　204
三　童話「頸輪」——アジアを統べる母　209
四　文学者と大東亜戦争——「大東亜共栄圏」構想の魔力　213
小括　220

Ⅳ部　戦後リベラリズム——再転向と晩年

一〇章　再転向者の軌跡——反戦・民主主義への旋回……228

はじめに　228
一　戦後民主主義の影響　228
二　「戦争が悪いのだ！」――反省なき反戦　234
三　日本近代転向史上の位置（2）――社会的制裁を免れた新生リベラル　239
小括　244

一一章　反転するイデオロギー――童話「兄の声」……251
はじめに　251
一　海鷲と陸鷲――昭和一九年の国策協力童話　252
二　童話「兄の声」――空疎な遺言　255
三　秘匿された聖戦賛美――八・一五後の未明　258
四　文学者と敗戦――「大日本帝国」の崩壊　261
小括　266

一二章　老いゆきてなお国士――童話「ふく助人形の話」……272
はじめに　272
一　警世する老国士――最後の一〇年間　273
二　童話「ふく助人形の話」――世直しの文学　276
三　知識人と民族――竹内好「国民文学論争」の興隆　279
四　童話伝統批判――少国民世代による告発　284
小括　287

結論　本論の成果――三代を生きた文人……295
一　詩業――明治詩人としての未明　295
二　社会主義――革命的知識人としての未明　297
三　国家主義――転向者としての未明　300
四　戦後リベラリズム――再転向者としての未明　303
五　小川未明の転向とは何だったのか――表層と深層の二重構造　306
六　今後の課題　310

初出一覧 315
参考文献 316

凡例

一、本論は、全体で**約三三万二〇〇〇字**、四〇〇字詰め原稿用紙換算で**約八三〇枚**に相当する。書式は、Ａ４縦書き設定とした。

二、注と図表は、各章の末尾に付した。

三、単行本・雑誌・新聞の表題は『』、作品・論文のタイトルは「」で括った。資料の副題は、適宜省略した。

四、小川未明のテキストは、原則として、初出紙・誌から引用した。ただし、初出紙・誌が不明な場合や、どうしても入手できない場合は、初収の単行本に拠った。

五、引用文中の旧字は、原則として、新字に改めた。また、ルビはおおむね省略した。ただし、本文・引用文を問わず、判読が難しいと思われる漢字には、筆者の判断で、適宜ルビを振った。

六、引用文中の省略は、（中略）と記した。詩の改行は、／で示した。

七、本論の傍点・傍線は、基本的に、筆者が付したものである。ただし、引用文中の傍点で、原著者の手によるものは、（傍点原著者）と明記した。

八、本論では、原則として、和暦を使用した。ただし、引用文中に西暦が用いられている場合は、引用文の表記に従った。

九、巻末の参考文献は、全集→書誌→事典→単行本→雑誌掲載・単行本収載論文→ウェブサイトの順序で、配列した。全集は発行年月順、それ以外は著者名五十音順で並べている。ただし、同一著者の文献が複数ある場合は、発行年月順に配置した。

序論　本論の課題　――大正童話中心主義を超える

一、小川未明研究史の現状と課題

作家・小川未明は、「日本児童文学の父」「日本のアンデルセン」と敬称される、児童文学界の巨人である。本研究は、没後半世紀を経てなお、いまだ探求されざる未開拓領域を多数有する、この日本近代童話の巨匠について、総合的な再考を試みんとするものだ。はじめに本節では、これまでの小川未明研究史を振り返り、その現状と課題を見据えることで、筆者の研究の方向性を明らかにしたい。

結論から先に述べる。小川未明研究において克服されるべき積年の課題――それを端的に言い表すならば、**「書誌の未整備」「大正童話中心主義」**という二つの言葉に集約できる**（図1）**。すなわち、従来の未明研究においては、未明の全文業中、書誌情報の相当数が欠落していたのであり、その作家・作品分析は、傑作と名高い大正期のロマンチシズム童話を中心として展開されるのが常だったのである。

まず、**「書誌の未整備」**について説明する。未明は、明治一五年から昭和三六年まで、七九年間生き、生涯を通して、約一二〇〇篇の童話、約六五〇篇の小説、約一四〇〇篇の評論・随筆等を書き著した大作家だが、前述の通り、これまでその膨大な数の作品の書誌は、十分明らかになってはいなかった。従来、未明研究の書誌は、講談社版『定本小川未明童話全集』第一四巻（昭和五二年一二月）、『定本小川未明小説全集』第六巻（昭和五四年一〇月）巻末の作品年表を参照するのが基本だったのだけど、これには如何せん、記載・収録の漏れが多かった。つまり、研究をしようにも、未明がいつ、どこで、どのような作品を、どれだけの数著述していたのか、全容を把握できていなかったのである。

だが、この一点目の課題は、近年、上越教育大学の小埜裕二によって克服された。小埜は、日外アソシエーツから、二冊の書誌本『小川未明全童話』（平成二四年一二月）、『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（平成二八年六月）を編み、立て続けに出版したのである。これによって、講談社版全集発行時には定かではなかった、初出紙・誌の情報が大量に追記されるとともに、新たに約一二〇〇篇の童話・小説・評論・随筆等が発掘された。没後五〇年を経て、「未明文学の森」（小埜）の全容が、ようやく書誌的には定まったのである。未明研究史を画する偉業である。

加えて小埜は、同じく日外アソシエーツから、『小川未明新収童話集』全六巻（平成二六年一～三月）を発行し、先の講談社版全集には採録されていなかった童話四五四篇を、

編年体で分割掲載した。講談社版・日外アソシエーツ版の両童話集を合算すると、未明の童話はほぼすべて、書籍のかたちで収録されたことになる。こちらも画期的な業績という他ない。

昨今の小埜の仕事振りについて、宮川健郎は「小埜裕二は、未明研究において、めざましい仕事をかさねている」「小埜裕二の仕事を見ると、小川未明を読み直す季節が、もうはっきりとやってきたことがわかる」（「未明童話を読み直す季節　小川未明研究の現在」『小川未明文学館紀要』平成二八年三月）と絶賛しているが、筆者もまったく同じ気持ちである。私の小川未明研究は、小埜の書誌本がなければ、成立していない。今後、小埜の労作を踏み台にして、未明研究は飛躍的な進展を遂げるだろう。

さて、二つ目の課題は、**「大正童話中心主義」**であった。序論の論題にも記した通り、「書誌の未整備」が処決された今、これこそが、本研究によって克服されるべき課題である。どういうことか。再び、小埜裕二に登場願おう。

小埜は、従来の小川未明研究史を捉え、「小説家・童話作家である未明の二つの側面のうち、童話作家の側面は今も息づいているが、その側面も前半期の大正期童話に光があたっているのみである」（「解説」『小川未明新収童話集』第一巻、日外アソシエーツ、平成二六年一月）、「未明の小説家・随想家としての側面は閑却されがちであるが、小説家としての未明の存在と意義は、明治末期から大正期にはよく知られていた」（「概説」『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』日外アソシエーツ、平成二八年六月）と述べ、未明の「小説家」「随想家」としての側面や、「大正期童話」以外の童話が、全体として閑却されている旨、指摘している。つまり、必ずしも「童話作家」の枠には収まらない、文人・未明に対し、これまでの先行研究は童話、それも「赤い蝋燭と人魚」「野薔薇」「牛女」「金の輪」等の代表作が煌めく大正童話のみに照準が合わせられていたというのが、小埜の問題意識だ。

筆者はこの問題意識を完全に共有する。旧来の小川未明研究が、大正期のロマンチシズム童話を中心に蓄積された結果、大正童話以外の童話や、漢詩・口語自由詩・小説・評論・随筆といった他ジャンルの文業への目配りが欠けていた点――すなわち、大正童話中心主義に陥っていた点――は否定できない事実だからである**（注1）**。

このことの傍証となっているのが、未明の研究書だ。未明研究の単著は、現状、船木枳郎（しろう）『小川未明童話研究』（宝文館、昭和二九年二月）、上笙一郎『未明童話の本質』（勁草書房、昭和四一年八月）、高橋美代子『小川未明童話論』（新評論、昭和五〇年一〇

月）、続橋達雄『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）の四冊があるのみだけれど、これらの著作がいずれも、タイトルに「未明童話」の名を冠していることは、この間の研究の傾向（偏向）を如実に象徴していよう。実際、内容に目を転じても、四冊が論及の対象としているのは、その多くが大正童話であり、童話以外のテキストは、十分に論及されているとは言い難いのである（注２）。

未明否定派の言説においても、事情は異ならない。昭和二〇・三〇年代、後に「童話伝統批判」と呼ばれる論争が、早大童話会出身の鳥越信や古田足日によって封切られたことは、つとに知られている史実だが、反未明派が槍玉に挙げたのは、主に大正期の童話だった。例えば古田は、評論「さよなら未明」（『現代児童文学論』くろしお出版、昭和三四年九月）で、未明童話の呪術・呪文性（非散文性）を批判しているけれど、その際、論の素材としたのは、「赤い蝋燭と人魚」を始めとする大正童話である。未明という権威を打ち、戦後児童文学の体制（レジーム）を変革することが、彼ら若手作家の目的である以上、全盛期の作品に批判が集中するのは、当然と言えば当然だ（注３）。

しかし、肯定するにせよ、否定するにせよ、未明をめぐる言説が、常に大正童話を揺るぎない中心点として展開されてきた現象は注目に値しよう。これは裏を返せば、論者の視野に、終始ある一定の死角があることを示してもいるからである。私が問題視しているのは、皆が馬鹿の一つ覚えのように「赤い蝋燭と人魚」を論じる反面、漢詩（五言絶句・七言絶句）については誰も正面から向き合わない／向き合おうとしない視野の狭隘である。

かくして、「書誌の未整備」「大正童話中心主義」という二つの主要課題の内、前者は小埜裕二によって解決を見たわけだが、後者は依然、未解決のままとなっている。私たちは、小川未明の多彩な文業に今一度目を向けることで、未明研究史の悪しき慣習である大正童話中心主義を克服しなければならない。

二、本研究の目的と方法

したがって、本研究の目的は、大正童話以外の童話や、漢詩・口語自由詩・小説・評論・随筆等、童話以外の文業を積極的に論の対象に据えることで、従来の小川未明＝童話作家という単一的な措定を破砕し、もって、明治・大正・昭和という三代を生きた文人の、埋もれた横顔を照射することにある。「小川未明の総合的再考」とは、これだ。

さて、そこで重要なのが、研究方法である。筆者は、先述の「大正童話中心主義」を克服するべく、熟慮を重ねた結果、**表１**のような通観的アプローチを採用することにした。すな

わち、未明が生きた明治一五年から昭和三六年の間の七九年間を、明治・大正・昭和戦前・昭和戦後の四期に大別し、各時代ごとに再考が必要と思われる主要なテーマを抽出したのである。それぞれのテーマは、これまでの未明研究史において、十分に深掘りされていないトピックであり、考究は必須である。以下、各期の研究テーマについて、それがどのような内容であり、何故今、論じられる必要があるのか、具体的に説明したい。

①明治期の「詩業」は、未明が明治年間に著していた漢詩（五言絶句・七言絶句）および口語自由詩を再考する試みである。というのも、漢詩にせよ、口語自由詩にせよ、従来、未明の「詩人」としての文筆活動は、ほとんど注目されてこなかったからである。

とりわけ漢詩は、文壇処女作「漂浪児」（『新小説』明治三七年九月）から遡ること約四・五年前に書かれた、文学創作の起点であるにもかかわらず――そしてその起点には後年の未明の文学世界と通底する要素が複数伏在しているにもかかわらず――いまだ先行研究の蓄積がない未開拓領域である。したがって、①詩業では、長らく忘却されてきた漢詩・口語自由詩に着目することで、未明が優れた明治詩人として活動していた事実を明らかにしたい。

②大正期の「社会主義」は、大正年間の未明のアナキズム・共産主義思想を再考する試みである。というのも、大正期の未明の社会主義への接近は、これまで反マルクス主義的なアナキズムの範疇で理解するのが通例だったのだが、実際は相当程度、マルクス主義への親和性を有していたからである。

そして一度、マルキストとしての未明という視座を得るや、この時期の未明のテキストに対する解釈は一変するだろう。そのもっとも象徴的な例は、従来、マルキストに対するアナキストの敗北として読み続けられてきた、大正一五年の「童話作家宣言」である。したがって、②社会主義では、「童話作家宣言」以下、大正期の事績・文業に着目することで、この間、アナキズム一辺倒で理解されてきた未明のアナキズム・共産主義思想の内容を再検討したい。

③昭和戦前期の「国家主義」は、昭和戦前の未明の転向・国策協力を再考する試みである。というのも、戦後、文化功労者や芸術院会員として表彰されるなど、世俗の権威を恣（ほしいまま）にしてきた未明――あるいは未明を崇める児童文学界の追随者（エピゴーネン）――にとって、戦時下の国策追従は秘すべき汚点であり、これまでその来歴が十分に明るみになっているとは言い難いからである。

しかし、大正期、社会主義者として鳴らした未明が、満州事変以降、「アジアモンロー主

義」「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」の理念に共鳴・心酔する国家主義者へ変貌を遂げたのは紛れもない事実であり、この劇的変貌は、未明を論ずる上で、避けては通れない論題であろう。したがって、③国家主義では、昭和戦前期の事績・文業に着目することで、従来、未明史の恥部として無視・黙殺されてきた未明の転向・国策協力の実態を再検討したい。

④昭和戦後期の「戦後リベラリズム」は、昭和戦後の未明の再転向・晩年を再考する試みである。というのも、日中開戦後、社会主義思想を清算し、国策協力の姿勢を鮮明化した未明が、こと敗戦に至るや、またしても恥じらいなき再転向を遂げた——反戦・民主主義思想へ急接近した——経緯は、これまで十分に論及されてこなかったからである。そして、その延長線上にある、晩年の営みも同様だ。

だが、全盛期を過ぎていたとはいえ、未明は戦後もなお、現役作家として渡世を送っていたのであり、十全な未明理解にあたっては、この時期の文筆活動を黙過すべきではない。したがって、④戦後リベラリズムでは、昭和戦後期の事績・文業に着目することで、現状、歴史の彼方へ埋没している未明の再転向・晩年の軌跡を再検討したい。

つまり、総じて言えば、本論の研究手法は、小川未明という作家の実人生と作品を丹念に追跡し、「作品」の分析を通して「作家」の思想や人間性を考察する、極めて伝統的（オーソドックス）な作家作品研究である。もちろん、個々のテキストには、作家のみならず、当時の文壇の潮流や、政治・経済・文化等、同時代の外部領域の影響が濃厚に認められるわけで、テキストを規定するその種の社会的コンテクストについては、自覚的でありたい。だから、文化研究的・歴史社会学的なアプローチも、部分的には採用している。しかしいずれにせよ、本論は基本的には実証研究の枠内にあり、「作品」の起源ないし生産者としての「作家（作者）」の存在を意図的に消去するような研究手法——例えば、テクスト論やニュー・クリティシズム——とは、一切無縁である。一次資料を徹底的に渉猟し、史実に即して立論する——それが筆者の立場だ。

もっとも、このような研究スタンスは、必ずしも筆者の趣味の問題ではない。大杉重男が、「テクスト論が成立するのは、テクストが正典化され、テクストの外部と内部の境界が明確に線引きされている限りにおいてである」（『小説家の起源　徳田秋聲論』講談社、平成一二年四月、二四六頁）と指摘するように、テクスト論以下、読みの可能性を追求する文学理論が効果を発揮するのは、実証的な先行研究が十分に蓄積されている作家・作品のみだからある。未明のような、先行論が貧小な作家に対し、実証的・歴史家的な立場で接することは、好むと好まざると、一定やむを得ない側面があるのではないか。

なお、本論の部立て・章立ては、おおむね時系列順であるものの、その内容が決して評伝でない点は、あらかじめお断りしておきたい。すなわち、小川未明の詳細な伝記を書くことが筆者の目的ではない。筆者の考案した多角的な切り口（**表1**）から、未明の人と作品を――ネガティブな面も含めて――洗い直し、「日本児童文学の父」の影に光を当てること、それが本研究の企図するところである。

三、本研究の特色と意義

では、上記の研究目的・方法に基づき、研究を遂行した結果生じる、学問的な貢献は何か。本研究は、従来の小川未明研究史や日本児童文学研究史に対し、一体いかなる利得をもたらすのだろうか。本節では、筆者の研究の特色（独自性）と意義について、確認しておく。

まず、筆者の研究の特色だが、これは先般来、繰り返し述べている通り、未明研究史の悪しき慣習である「大正童話中心主義」を、克服すべき課題として析出した点に尽きる。すなわち、大正期の創作童話のみが焦点化されがちだった、これまでの研究史を問題視し、文人・小川未明の多彩な文筆活動を、今一度考証し直そうとする姿勢だ。それは未明を「童話作家」という硬直した鋳型から解放するための試みでもある。大正童話以外の童話や、漢詩・口語自由詩・小説・評論・随筆といった多彩な文業を、明治から昭和戦後期に至るスパンで、総合的に再考しようとする本研究の取り組みは、従来の先行研究には見られない独自性を有していると自負する。

次に意義だが、こちらは小川未明研究史上の意義、日本児童文学研究史上の意義を、双方分けて考えたい。と言っても、前者は改めて説明するまでもないかもしれない。日本近代童話の巨匠たる未明の緻密な考証作業を通して、先行研究の致命的な欠落が補填されることは請け合いだからである。本研究によって、漢詩人としての未明、小説家としての未明、政治的イデオローグとしての未明等、今まで見たことのない未明の相貌が露わになり、旧来の未明＝童話作家という単一的な図式は、一新されるはずだ。

翻って、後者の説明は、もう少し言葉を尽くさねばならない。結論から先に言うと、日本の児童文学研究の基盤を豊かにし、歴史回帰の重要性を再認識せしめること、それが本研究の持つ日本児童文学研究史上の意義である。どういうことか。

話は戦後の児童文学研究史の流れを俯瞰するところから始まる。戦後の児童文学研究の先鞭をつけた代表的な人物は、言うまでもなく鳥越信である。『日本児童文学史年表』全二巻（明治書院、昭和五〇年九月～同五二年八月）、『日本児童文学大系』全三〇巻（ほるぷ出

版、昭和五二年一一月～同五三年一一月）、『日本児童文学大事典』全三巻（大日本図書、平成五年一〇月）の編集や、大阪府立国際児童文学館の設立（昭和五九年）――鳥越が資料一二万点あまりを寄贈した――は、鳥越の業績の最たるものと言えよう。近代文学研究と比べて立ち遅れていた戦後の児童文学研究業界にあって、研究の土台となる書誌や事典、児童文学史の整備を積極果敢に行った功労者が、鳥越なのである。

その鳥越の研究スタンスが、明確に表れているのが、児童文学研究の四領域構想と呼ばれるものだ。これは、日本児童文学学会編『日本児童文学概論』（東京書籍、昭和五一年四月、二六二～二六五頁）に発表された構想で、四領域とは、「文芸学」「作家・作品論」「文学史」「文献・書誌学」の四つのジャンルを指す。各領域の解説をここでは行わないが、着目するべきは、先に紹介した業績からも明らかなように、鳥越が「文学史」や「文献・書誌学」といった史実の発掘・編纂に多大な価値を認めている点だろう。換言すれば、鳥越は、考証を旨とする歴史家的な立場で、児童文学研究を行っていたのである。

一方、現在の児童文学研究は、鳥越とはまったく対蹠的な方向性で進行していると、宮川健郎は指摘している。すなわち、史実の探究から概念の問い直しへ、というパラダイムシフトである。

> 鳥越信の死をきっかけに鳥越の仕事を見直すと、その後の、そして、今日の児童文学研究の向かおうとしているところが、「四領域」構想とは根本的にちがうことに気づく。「四領域」構想が、実体としての児童文学を研究対象にしようとしたのに対し、現在、問題として意識されているのは、児童文学という考え方（概念）そのものである。児童文学は、近代になって、子どもが大人とはちがった価値をおびた存在として発見されたとき、その子どもに読み物をとどけようとして生まれたものだろう。
>
> 宮川健郎「児童文学という概念、テクストとしての児童文学」
> （『日本近代文学』平成二六年一一月）

昨今の児童文学研究は、「実体としての児童文学」を自明視せず、むしろ「児童文学という考え方（概念）」そのものを学際的な観点から検討している、というのが宮川の見立てである。近年、宮川ら日本児童文学学会の人々が編んだ『研究＝日本の児童文学』全五巻（東京書籍、平成七年八月～同一五年七月）は、上記の方針に基づいて編集された研究叢書だ（**注4**）。

ところで、宮川は明示していないが、このパラダイムシフトの先駆けとなったのは、間違いなく、柄谷行人の『日本近代文学の起源』（講談社、昭和五五年八月）であろう。柄谷は、本書の「児童の発見」で、一章を割き、児童（子ども）とはアプリオリに存在する「実体的」な概念ではなく、明治政府が敷いた学制等に伴い、近代になって発見された「方法的」な概念であることを論述している。

柄谷の著作は、「文学」という制度を成り立たせている様々な装置の「起源」を掘り起こした名著であり、大学アカデミズムを含め、既存の文学研究に与えた影響は計り知れない。宮川の論稿も、依然、柄谷の構築したパラダイムの中にあると言える。史実の探究から概念の問い直しへ、人格的には、鳥越信から柄谷行人へ、というのが、戦後の児童文学研究の大まかな見取り図なのである。

しかし、筆者は、柄谷以後の学会の潮流に半ば懐疑的だ。無論筆者は、柄谷的な概念の問い直しの学問的意義を否定するつもりはまったくないのだが、他方、近年、鳥越的な史実の探究が、軽視されているような気がしないでもないからである。

例えば、未明の書誌本を完成させたのは、前述の通り、小埜裕二だけれど、日本近代童話の創始者である未明の書誌が、二〇一〇年代に至るまで存在しなかった事実、そしてそれが、元々必ずしも児童文学畑ではない小埜によって編まれた事実は、それ自体、ひとつの驚きである。プロパーの児童文学研究者は、この間、一体何をしていたのだろうか。あるいは、日本近代児童文学の開拓者である巌谷小波――小波はお伽噺作者であると同時に、硯友社の小説家であり、随筆家であり、俳人でもある――の完全な書誌や全集は、今に至るまで存在しない。彼らは何故、つくらないのだろうか。

書誌も全集もない小波のように、歴史家の到来を待っている児童文学作家は、今なお、たくさんいる。地味で、外連味のない考証作業＝肉体労働を、おろそかにしてはいけないと私は思う。

したがって、筆者の小川未明研究は、柄谷より鳥越の立場に近い。本研究は、未明の埋もれた史実を明らかにするための、原則的な実証研究だ。そこには、派手なスタンドプレーはない代わりに、旧来の未明像を塗り替え、日本児童文学史に厚みを加える、堅実な歴史考証がある。昨今、古臭い「国文学」研究として疎んじられがちな、個別の児童文学作家の包括的検証の重要性が、本研究によって再認識されるのではないかと――幾分希望的観測ながら――筆者は考えている。

四、本論の構成と概要

以上述べた通り、本研究は、小川未明研究史上の桎梏である「大正童話中心主義」を打ち破るべく企図された、極めて原則的な実証研究である。この実証性の強度によって、本研究は、従来の未明研究史・日本児童文学研究史に対し、少なからぬ貢献をもたらすことだろう。最後に本節では、全Ⅳ部一二章にわたる、本論の構成と概要を明らかにしたい。

既に二節で記したように、本論は明治・大正・昭和戦前・昭和戦後の四期に対応した、四つのブロックを統合して、構成されている（**表1**）。考察するスパンが長い故、選択と集中に欠けた総花的な印象を与えるかもしれないが、論の対象を特定の時代に絞らないのは、各時代ごとに再考が必須なテーマが遍在しているからである。各期の研究テーマのあらましや、それが今論じられなければならない必然性については、従前述べた通りだ。したがって、ここでは重複を避けるべく、各部の説明は、なるべく簡略な記述を心掛けたい。

Ⅰ部「詩業」は、明治期に未明が著していた漢詩および口語自由詩を再考する試みである。未明＝童話作家という通念が先行するあまり、彼の詩人としての活動は、これまで十分に検討されてこなかったわけだが、キャリア最初期に書かれたこれらの詩群は、質が高く、また、後年の文学世界と連なる要素を内在させていた。再評価は必須である。

一章「漢詩」では、新潟・高田中学時代（明治二八～三四年。一部、東京専門学校時代を含む）に、未明――当時の健作少年――が紡いでいた、漢詩（五言絶句・七言絶句）の検証を行う。

日本近代（児童）文学の研究者に、漢詩を読みこなす素養が欠けている事情も関係しているのだろう。これらの漢詩は、長年、訓読文（読み下し文）すら付されることなく、ほぼ白文のまま放置されてきた。が、筆者は今回、新たに発見した新資料を含む、すべての漢詩に、訓読文・語釈・通釈・押韻・平仄・出典を注記するとともに、これらの基礎作業から窺い知れる、後の文学作品との質的連続性を指摘しようと思う。また、明治維新以後、欧化政策の中で、失われゆく教養であった漢詩を、明治一五年生まれの未明が物すことのできた背景事情や、未明漢詩が占める日本近代漢詩史上の位置についても、考察を加えたい。

二章「口語自由詩」では、未明が生涯に著した唯一の詩集である『あの山越えて』（尚栄堂、大正三年一月）の検証を行う。

まず前提として押さえておかなければならないのは、本書は大正期の出版物であるものの、本書に収載されている六九の詩篇は、その多くが明治三〇・四〇年代に書かれた小説を初出としているという点である。つまり、明治期の小説に内包されている詩歌・地の文・会

話文から、適宜字句を抽出し、再構成したものが、本書の詩作なのである。したがって本章では、この再構成がいかなるものであったかを知るべく、テキスト改変の型を無改稿・部分改稿・全面改稿の三つのタイプに類型化するとともに、全体に占める各類型の割合を算出する。また、本書所収の詩の題材的な特徴や日本近代詩史上の位置についても、考察を加える。

Ⅱ部「社会主義」は、大正期の未明のアナキズム・共産主義思想を再考する試みである。従来、未明の社会主義への接近は、反マルクス主義的なアナキズムの枠組みで理解するのが通例だったのだが、実際は相当程度、マルクス主義への親和性を有していた。両思想の雑居性に着目しつつ、この時期の未明のテキストを再解釈することが、今切に求められているのである。

三章「ユートピアンの夢」では、未明の童話「時計のない村」(『婦人公論』大正一〇年一月)に関する作品分析を、作中の時計表象へ着目しつつ、行う。

明治五年の「改暦ノ布告」(定時法の導入)や、明治一九年の勅令「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」(標準時の導入)以来、時計は、全国津々浦々に共通の時間を行き渡らせる、近代時間秩序の編成者として機能していた。とすれば、村人による作品末の時計廃棄――「お太陽様(てんと)」への回帰――は、アナキズムと近接した、反近代的なユートピア志向と見做し得るのではないか、というのが、筆者の推論である。一方、作品発表当時の評論類に目をやると、この時期の未明が、唯物史観や階級闘争を肯定するマルクス主義的な側面を備え併せている点も目に付く。また彼は、同時期に発足した社会主義者の大同団結組織である日本社会主義同盟の創立・運営に深い関わりを持っていた。本章では、以上の点を視野に入れながら、アナとボルが未分化のまま併存していた、当時の未明の思想のあり方を再検討したい。

四章「反テクノロジーという基層」では、未明の小説「血の車輪」(『文学世界』大正一一年一〇月)に関する作品分析を、作中の汽車表象へ着目しつつ、行う。

本作の汽車は、人間――とりわけ、無産階級――に敵対する暴力的な「魔物」として表象されているのだが、このような汽車表象は、三章で扱う童話「時計のない村」の時計表象と同様、近代文明に対する未明の畏怖・嫌忌が露わになった結果と見て間違いない。それでは、基本的には反戦小説の系譜に位置付けられ得る本作の、かかる反近代文明的志向は、一体何を意味するのだろうか。本章では、作中の汽車表象から垣間見える、未明の文明批評の精神と、社会主義者としての思想的限界を併せて指摘したいと思う。また、この時期の未明の共産主義思想へのシンパシーについても、今一度確認しておく。なお、未明の汽車表象を論じるに際しては、同時代の他作家(萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石)のそれとの比較を行い、

両者の差異を明らかにしたい。

五章「革命的知識人の挫折」では、大正期の未明の知識人批判を糸口に、小川未明史上の一大事件である「童話作家宣言」の再解釈を行う。

小説の筆を折り、童話へ専心することを誓った、この「宣言」は、従来、初期プロレタリア文学運動の開拓者で、アナキスト系作家の未明が、折からのマルクス主義の台頭に融合できず、童話へ逃れたとする解釈が一般的だったのだが、未明がアナキストであることを前提としたそのような通説は、果たして本当に正しいのだろうか。本章では、同時代的には稀有な「大卒」のエリートであり、マルクス主義に親和性を有していた革命的知識人が、階級闘争における自己＝知識人の役割を熱心に見定めようと試みながらも、その同定作業に失敗した帰結として「宣言」へ行き着いた――このような解釈を提唱したいと考えている。また、大正半ば以降、日本の文壇・論壇で流行（ブーム）となっていた各種の知識人論を通観することで、未明の知識人言説の同時代的位置並びに背景を明らかにしたい。

Ⅲ部「国家主義」は、昭和戦前期の未明の転向・国策協力を再考する試みである。大正期、自他ともに認める社会主義者だった未明が、日中・大東亜戦争下、「八紘一宇」を叫ぶ国家主義者へ変貌したことは、紛れもない事実だが、これらの国策協力は秘すべき汚点として、長年の間、封印されてきた。Ⅲ部では、この封印を紐解く。

六章「転向者の軌跡」では、未明が大正から昭和戦前にかけて辿った転向の軌跡を、通史的に振り返る。

周知の通り、大正期の未明は、日本社会主義同盟の設立発起人に名を連ねるなど、社会主義者として八面六臂の活躍を見せていたわけだが、昭和戦前期へ入るや、内務省の行政官僚と連携して児童図書の統制を企てる、国家主義者へ転身してしまう。言説面でも、「階級闘争」の鼓吹は鳴りを潜め、「八紘一宇」の喧伝が前面化していった。故に本章では、大正・昭和戦前両時期の未明の行動・発言を分析の上、比較検討することで、彼のドラスティックな転向の歩みを追跡したい。また、大正・昭和初期、左派論客だった者が、その後、弾圧等によって「転ぶ」例は決して珍しくないわけだが、同時代の他の転向者と比して、未明の転向がどのような特徴を有しているのか、日本近代転向史上の位置についても、考察を加える。

七章「満州事変下の後退」では、満州事変時の未明の動向を知るべく、柳条湖事件から塘沽（とうこ）停戦協定、そして盧溝橋事件へかけての歩みを包括的に検証する。

この時期の未明は、大正期に入れ込んだ左翼ラディカリズムとは距離を置きつつも、社会主義思想を、まだ完全には放棄していなかった。したがって、童話「青空の下の原っぱ」（『週

刊朝日』昭和七年一月三～二四日、全四回）を始めとする、当時のテキストには、同思想の余香が濃厚に認められる。他方、この間の言動をつぶさに見つめると、五・一五事件や天皇制の評価等、後の転向・国策協力の伏線となる右派的言説も、ごく僅少ながら視認できる。故に本章では、社会主義から国家主義へ徐々に移行しつつあった、十五年戦争初期の未明の思想状況を明らかにしたい。転向前夜の諸相を考究するのである。満州事変下の文学者の動向と未明のそれの相関関係についても、併せて考察する（**注５**）。

八章「国民精神総動員運動への傾倒」では、日中戦争時の未明の動向を知るべく、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）に関する作品分析を、作中の戦争表象へ着目しつつ、行う。

日中戦争開戦直後に書かれたこの童話は、未明の国策協力の嚆矢と評価し得る作品で、主人公の小学生が「小さな国士」へ成長を遂げてしまう単純さを持つ。本章では、大和田健樹作詞の軍歌「日本陸軍」他、作中の戦争表象を手掛かりに、本作が第一次近衛文麿内閣で発動された「国民精神総動員運動」の影響下にある、極めて時局的な転向・国策協力文学であることを明らかにしたい。また、童話を児童教化の手段と見做す当時の未明の童話観が、本作および同時期の童話を、極めて教化色の強い内容に染め上げていた事実を論証する。銃後の少年少女へ、勇んで国家の方針を教え広めようとする国策追随者の姿を、私たちは目にすることになるだろう。日中戦争下の文学者の動向と未明のそれの相関関係についても、併せて考察したい。

九章「日本少国民文化協会への結集」では、大東亜戦争時の未明の動向を知るべく、彼が児童文化分野の国策協力団体である日本少国民文化協会と、どのような接点を有していたのか、包括的な検証を行う。

少文協は、「戦中において唯一存在を許された公的な児童文化団体」（浅岡靖央「１９４０年体制の児童文化」『別冊　子どもの文化』平成一八年七月）であり、その創立・運営には未明も深い関わりを持っていたわけだが、両者の関係を洗った先行研究は、現状存在しないからである。よって本章では、まず、少文協発足の起点である「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）から、「児童文化新体制懇談会」（同一五年九月）を経て、同団体設立（同一六年一二月）へ至る全過程において、未明が果たした役割を考究する。次に、童話「頸輪」（『少国民文化』昭和一七年六月）以下、少文協の機関誌類に発表されたテキストを、逐一分析の俎上へ載せることで、「大東亜共栄圏」構想に心酔してやまない、当時の未明の右傾化を検証する。大東亜戦争下の文学者の動向と未明のそれの相関関係について

も、併せて考察したい。

Ⅳ部「戦後リベラリズム」は、昭和戦後期の未明の再転向・晩年を再考する試みである。戦時中、紛うことなき国家主義者として、自由と民主主義を否定していた未明が、敗戦後、反戦・民主主義を唱えるリベラリストと化した事実は、これまであまり論及されてこなかった。Ⅳ部では、戦後憲法体制へ順応し、世俗の権威を勝ち取っていく、老未明の足取りを追う。

一〇章「再転向者の軌跡」では、未明が昭和戦前から昭和戦後にかけて辿った再転向の軌跡を、通史的に振り返る。

Ⅲ部で記したように、昭和戦前期の未明は、国策へ全面追従して恥じない、堂々たる国家主義者だったわけだが、八・一五を迎えるや、この国策追従は鳴りを潜め、変わって、反戦・民主主義思想の呼号が開始された。社会主義の放擲に次ぐ再転向である。故に本章では、六章「転向者の軌跡」の内容を踏まえつつ、昭和戦後期の未明の行動・発言を分析することで、またもや生起した彼の再転向の歩みを、追駆したいと考える。加えて、敗戦は「猫も杓子も自由主義といひ、民主主義といふ」（本多秋五「芸術 歴史 人間」『近代文学』昭和二一年一月）、一億総転向時代とも呼ぶべき状況を招来したわけだが、他の作家・知識人と比した際、未明が占める日本近代転向史上の位置についても、見定めておきたい。

一一章「反転するイデオロギー」では、敗戦後の未明の動向を知るべく、童話「兄の声」（『子供の広場』昭和二一年四月）に関する作品分析を、戦中・戦後の航空兵（特攻隊）表象の比較を通して、行う。

というのも、昭和一九年に書かれた国策協力童話の航空兵が、猛々しい戦意を有し、敵国・米英を憎む、愛国烈士として造形されているのに対し、敗戦の翌年に書かれた本作の航空兵は、自由や平和といった戦後民主主義的価値を志向する、心優しい平和主義者として造形されているからである。八・一五を挟むわずか一・二年の間に、作中の航空兵表象は、一変してしまったのだ。本章では、かかる航空兵表象の乖離に着目することで、真摯な反省を経ることなく、ＧＨＱ施政下の時局に便乗していった、未明の再転向の実態を照射したいと思うのである。また、同時代の児童文学関係者の無批判が、未明の思想的旋回に免罪符を与える結果となっていた経緯を、併せて確認したい。敗戦後の文学者の動向と未明のそれの相関関係についても、考察を加える。

一二章「老いゆきてなお国士」では、未明が没するまでの最後の約一〇年間――昭和二六～三六年／満六九～七九歳の期間――を「晩年」と定義した上で、この晩年における未明の

人と作品を包括的に検証する。

哀しいかな、老衰で半ば寝たきりになっていた最末期の未明――全盛期とはもっとも遠い場所にある――に焦点を当てた研究は、ほとんど皆無に等しいからである。故に本章では、絶筆となった童話「ふく助人形の話」(『日本児童文学』昭和三二年五月)以下、晩年の文業の検討を通して、この時期の未明が、リベラリストとしての側面と自国家・自民族中心主義者としての側面を包有する老国士として余生を送っていた事実を、明らかにしたい。また、晩年の未明の民族賛美言説の背景にどのような歴史的文脈があるのか、中国文学者の竹内好が主導した「国民文学論争」を分析することで、つまびらかにする。さらに、この時期に勃発した、鳥越信・古田足日らの「童話伝統批判」が、単なる表現形式上の批判に留まらない、過去の戦争協力に対する政治的(倫理的)批判という側面を備え併せていた事実を新たに提示し、同運動の再評価を図る。

結論「本論の成果」では、以上数十万字にわたって、縷々論述した結果行き着いた、本論の到達点を示す。具体的には、本稿で詳説した全Ⅳ部の議論を、各部ごとに今一度整理し直すとともに、これらの総合的再考によって顕在化した、新たな未明像の提示を行う。明治・大正・昭和の三代を通観した末、要は何が明らかになったのか、という話だ。最後に、残念ながら、本稿では未消化のまま終わってしまった、今後の課題も記す。

さて、本論はおおよそ右記のような構成によって、論を展開していくわけだが、そもそも没後五〇年以上を経た今日、改めて小川未明を問い直すことの現代的意義は一体何だろうか。それは換言すれば、本研究の掲げる「大正童話中心主義の克服」が、学問上の課題であると同時に、今を生きる私たちのアクチュアルな課題たり得るのかという問いでもある。小川未明など、遠い過去の古めかしい童話作家に過ぎないではないか、何故今さら、そのような人物の(あまり褒められたものではない)過去を博捜しなければならないのか、との疑問を持つ方も、あるいはおられるかもしれない。至極もっともな疑問である。

私が未明を読んでいて思うのは、彼は、明治維新以後、常に動乱の渦中にあった近代日本人のある種の「標本」とも言える人物なのではないかということだ。時宜に応じて、言うことをコロコロ変え、自己の発言の責任に向き合わず、状況が一変するや、新しい体制(レジーム)へ何事もなかったかのように便乗していく。その一方、天皇制には拝跪し続け、愛国心だけは人一倍ある――明治・大正・昭和に未明が歩んだ生々流転の転向人生は、まさしく、私たち日本人の祖先の多くが歩んだ道のりに他ならない**(注6)**。

だから、未明の三代にわたる営みの問い直しを図ることは、近代日本人の自画像と向かい

合う行為でもあるのである。未明の弱さ・愚かさは、そのまま、近代日本人の弱さ・愚かさでもあるのだ。

隣国・北朝鮮の核武装や、中国の覇権主義、イスラム原理主義者のテロの頻発等に伴い、対外的には国防力の増強が、対内的には治安維持活動の充実が、官民挙げて叫ばれ、国家のプレゼンスが否応なく増している現在、「安全への不安」を媒介として、国民国家のナショナリズムは、静かに高揚しつつあるように思われる。また、新自由主義とグローバリゼーションの進展によって、日本国内の経済格差は広がっており、自信を失い鬱屈した中間層が、一部政治家の勇ましい愛国主義的・排外主義的言説に釣られやすくなっている現実も、間違いなく存在する。憲法改正は、おそらく秒読みだろう。

そんな中、そう遠くない過去、国家の施策に右往左往し続けた小川未明の立居振る舞いを批判的に捉え返すことは、葦のように弱い私たちが時代の奔流へ流されないための、重要な手掛かりを与えてくれるはずだ。

注

1　木村小夜は、「研究動向　小川未明」（『昭和文学研究』平成二一年三月）で、「しかし、周辺事情を追う新たな論点の模索は、逆に言えば、作品解読の行き詰まりを示してもいよう。作品そのものを論じようとすれば、未明作品では、多彩だが単純な色、音楽、船、森、少年と死、異界、輪廻転生、結末の明暗など、頻出する事象やモチーフが目につくため、それらを並べ見ることから解読の鍵を見出したくもなる。しかし、そうした先行論の大部分は既存の研究、未明の自己言及を追認すべく作品群をなぞるような結果となっている」と述べ、お馴染みの切り口が作品解読に繰り返し多用される、昨今の未明研究の行き詰まり・マンネリズムを指摘しているが、かかる停滞の背景には間違いなく、筆者の主張する「大正童話中心主義」の問題がある。このような十年一日の如き偏向を脱し、大正童話以外の諸作品へ目を向ければ、新しい問題系は自ずと見つかるはずだ。

2　船木と上は、未明と付き合いのある児童文学評論家・研究家であり、高橋と続橋は、大学の児童文学研究者である。執筆者四氏のキャリアを踏まえると、これらの著作の論及対象が童話に偏っている理由が理解できる。

3　鳥越もまた、自らの編著の「解説」（『新選日本児童文学』第一巻、小峰書店、昭和三四年三月）で、「なぜ未明が残らなかったか、答は至極簡単である。一口でいえば、そのテー

マがすべてネガティヴなもの――人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびる等々――であり、その内包するエネルギーがアクティヴな方向へ転化していない点で児童文学として失格であること、従って読物としての面白さも全然なく、加えて誨渋（ママ）な文章に大きな抵抗を感じたことである。むしろ私たちには、なぜこのような作品が、日本児童文学の主流として今日まで生命を保ちえたのか、どうしても理解できなかった」と、大正期の未明童話を徹底批判している。高嶺としての大正童話を打つことは、後続世代にとって、一定の戦略的意味があったに違いない。

4　宮川は、「私たちは、どこにいるのか、どこへ行こうとしているのか」（『児童文学研究、そして、その先へ』上巻、久山社、平成一九年一一月）で、同叢書の方針について、次のように語っている。「この『研究＝日本の児童文学』は、横川寿美子さんや私も編集委員になっているのだが、この研究叢書には、「事実」や「実体」としての児童文学の研究ではなくて、「児童文学」という考え方の研究へ向かうモチーフが見てとれる」「『研究＝日本の児童文学』は、思想史、社会史、表現史やメディアという観点から児童文学を問い直そうとしているし、「近代以前」の児童文学ということを想定して、既存の「児童文学」という枠組みの外へ出ようと試みている」

5　本論七・八・九・一一章の四節「文学者と満州事変」「文学者と日中戦争」「文学者と大東亜戦争」「文学者と敗戦」は、十五年戦争および敗戦下の未明の事績・文業を、当時の文学史の潮流との相関において捉えようとする試みだが、各節の執筆に際しては、日本近代（児童）文学史・戦争文学関連の概説書や研究書（論文）を数多く参照した。その内、主だったものは注へ記したけれど、紙幅の都合上、挙げられていない文献も相当数ある。記してお断りしておきたい。

6　例えば、袖井林二郎『拝啓マッカーサー元帥様　占領下の日本人の手紙』（大月書店、昭和六〇年八月）は、八・一五以前、「鬼畜米英」「一億玉砕」と叫んでいた日本人が、連合国軍最高司令官のダグラス・マッカーサーへ、「吾等の偉大なる解放者　マックアーサー（ママ）元帥閣下」（一一四頁）などと阿諛追従する手紙を多数紹介している。袖井は、かかる擦り寄りについて、「権力者と対決することなく一体化するというこの行動様式は、占領期に初めて見られたのではなく、他に逃げ場のない島国日本に、あるいは封建的集落という小宇宙に長い間生きてこざるを得なかった日本民族にとって、ほとんど本能化していたのではないか」（九頁）と分析しているが、その時々の権力者と進んで同衾しようとする行動様式は、未明においても、見て取れよう。

図１　小川未明研究史の課題

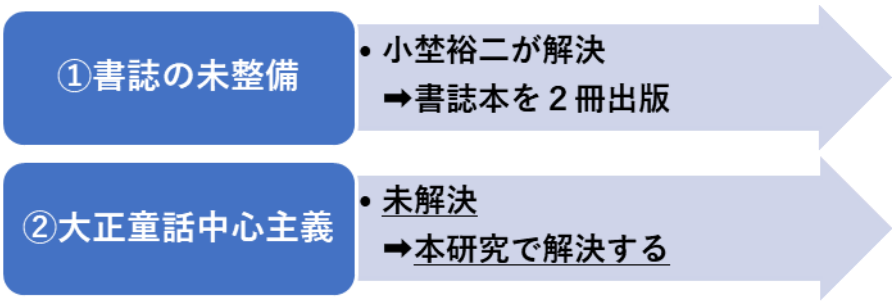


表１　本研究のアプローチ

〈元号〉	〈西暦〉	〈テーマ〉	〈主な内容〉
①明治	(1882-1912)	詩業	漢詩・口語自由詩の再考
②大正	(1912-1926)	社会主義	アナキズム・共産主義思想の再考
③昭和戦前	(1926-1945)	国家主義	転向・国策協力の再考
④昭和戦後	(1945-1961)	戦後リベラリズム	再転向・晩年の再考

Ⅰ部　詩業　――漢詩と口語自由詩

一章　漢詩　――高田中学時代の五言絶句・七言絶句

はじめに

夏目漱石にせよ、森鴎外にせよ、作家研究において、漢詩はもっとも遅く手が付けられる研究領域であろう。研究者と言えども、和語を読むようには、漢語は読めないからであり、端的に言ってしまえば、読解が難しいからである。

小川未明研究においても、事情は異ならない。高田中学時代の未明（明治二八～三四年）が漢詩を物していたことは、これまで、福田清人「少年未明の漢詩　――「中学世界」の投稿」（『定本小川未明童話全集』第三巻月報、講談社、昭和五二年一月）や、上笙一郎「小川未明」（高田文化協会編『郷土の小川未明』さ・さ・ら書房、昭和四七年一二月）、「中学時代の未明作品」（『定本小川未明童話全集』第一六巻月報、講談社、昭和五三年二月）によって報告されてきた。福田は、雑誌『中学世界』へ投書されていた五篇の漢詩を、上は、友人・飯田庄八宛の書簡に封入されていた四篇の漢詩を、それぞれ紹介している。が、これらの論考は結局のところ、資料紹介の域を出ていないのが実情だ。語釈・通釈・評釈は無論、読みの基本である訓読文（読み下し文）すら、施されていないからである。

福田は、未明の漢詩について、「未明の漢詩がどのような個性の閃きを示しているか判断することはむつかしい。それは漢詩というかなり形態的なものが先行する文学ジャンルにもよる」と論評しているが、解釈以前の基礎的作業を行っていない以上、「個性の閃き」など、わかるはずなかろう。筆者は、文壇処女作「漂浪児」（『新小説』明治三七年九月）から遡ること、約四・五年前に書かれた高田中学時代の詩業――初期習作群――に、後年の未明の文学世界と連なる「個性の閃き」が潜在していると考える。

そこで本章では、従来、正面切って分析されることが皆無だった少年未明の漢詩について、新資料も交えながら、鑑賞を試みるとともに（**二～四節**）、その技巧（技術的な質）と思想（内容的な特質）を見定め、後の文学作品との質的連続性を指摘したい（**五節**）。さらに、これらの漢詩が、日本の近代漢詩史上、どのような位置を占めているのか、文学史的な観点から考察を加えたい（**六節**）。なお、上記の作業に先立って、明治一五年生まれの未明が、少年期に漢詩・漢文を如何にして学習していたのか、明治中期の「漢学」受容も明らかにする（**一節**）。

つまり、小川未明研究の範囲（レンジ）を「漂浪児」以前に遡行・拡張させること――それが本稿の目的だ。夏名漱石や森鴎外の漢詩がそうであるように、未明の漢詩もまた、足の踏み入れがいのある沃土である。

一、血肉化する漢籍　――少年期の漢詩・漢文受容

本節では、小川未明の漢詩を読み解く前段として、少年期の未明が、漢詩・漢文をどのように学んでいたのか、明治中期の「漢学」受容をつまびらかにする。

新潟県高田の下級士族の家庭に生まれた未明は、小学校へ上がる以前から、地元の私塾で漢学を学んでいた。その塾は、旧高田藩（榊原藩）御書物係で、高田師範学校書記を務めていた秋山重明という人物が経営していた小私塾で、上笙一郎によれば、「小川家からは道ひとつをへだてた近くにあった」（「小川未明」高田文化協会編『郷土の小川未明』さ・さ・ら書房、昭和四七年一二月）らしい。

未明はこの近所の塾で、『日本外史』や『論語』を読み込んでいた。後年、未明は当時を振り返って、「私は少年の頃、村の老先生について、漢学を学びました。学校から帰ると、懐中へ日本外史や、論語を入れて、その先生の塾へ通つたものです」（「青年に与ふ」『日本の子供』文昭堂、昭和一三年一二月）、「私は子供のころから漢学じゅく（塾）で漢詩や漢籍を学び民族的な精神文化に興味を持ち東洋精神とでもいうか自分を理想にまで高め世道人心につくすという考え方を持っていたが、これは一生私を支配した」（「児童文学」の夜明けへ」『読売新聞』昭和二八年八月二四日）と、私塾での学習歴を回想している。

合山林太郎によれば、明治三〇年代以降、「漢学塾」の減少等に伴い、「青年たちの漢文学についての知識・素養は減退してゆく」（『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』和泉書院、平成二六年二月、六頁）わけだが、その点、明治一五年生まれの未明は、少年期に私塾で漢学的素養を刷り込まれた、最後の方の世代にあたると言えよう。

とりわけ、頼山陽が著した歴史書『日本外史』の印象は強烈だったようだ。未明は雑誌の企画で、愛読書や影響を受けた思想を問われた際、『日本外史』の名をたびたび挙げている（注1）。また、戦中の座談会では、「私は子供の時分に一番感銘の深かつたものは日本外史ですな、良く今でも覚えてゐますが、楠氏の章などを見る時は泪が出て止まなかつた。何度となく読みました。外史を懐に入れて歩きました。感慨無量だつたですな」（「小川未明先生に訊く　創作童話の座談会」『新児童文化』昭和一七年五月）とも語っており、「楠氏の章」――おそらく「桜井の別れ」の下り（注2）――では、感涙さえしたそうだ。

漢文体で綴られた本書の勤王思想が、若き未明を感化した点は疑い得ない（注3）。そしてその感化は、日中戦争・大東亜戦争下の天皇制賛美の伏線ともなっていたはずである（注4）。

地元の高田中学校では、江坂香道と北沢乾堂に漢文を教わった。北沢は、幕末の思想家・佐久間象山の高弟で、小笠原諸島の島司を務めたこともある人物である。後年、未明自ら、「私は此人から漢詩の作り方など教はつた。後では此人の家に下宿して、其処から学校に通つた。そんな風だから、漢学には非常に趣味を持つて居た」（「三度中学を落第す」『文章世界』明治四二年一二月）、「当時、土地で有名な学者の家に、寄寓して、親しく、詩の添削をしてもらひました。詩では、年少に似合ず、うまいといつて褒められた」（「漢詩と形なき憧憬」『文章倶楽部』昭和四年三月）と回顧している通り、未明は北沢宅に下宿し、漢詩の指導を受けていたのである。

幸い、筋は良く、「学校で漢学の教師が違つた発音をしたのを、自分が咎めたこと」（「襲の音を聞きながら　いやないやな中学時代」『文章倶楽部』大正六年六月）もあったらしい。「試験の時は大抵 cunning で、通つて居た」（「三度中学を落第す」同前）ほど、数学ができず、落第を繰り返していた未明にとって、漢詩・漢文は、劣等生たる自己が矜持とし得る、唯一の得意科目であっただろう（注5）。

だからこそ、と言うべきか。漢詩・漢文に対する未明の向学心は、極めて旺盛だった。朝鮮人の亡命客が、高田に来訪した際は、自作の漢詩を携え、訪問。論評を求めている（「其の雄勁とさびしさ」『中央公論』大正一三年二月）。同郷の小田嶽夫によれば、この朝鮮人が滞在した宿は、「柳糸郷」という旅館らしい（『童話のおじさん　小川未明物語』理論社、昭和三九年五月、六一頁）。言葉が通じないため、会話は筆談で行った（「漢詩と形なき憧憬」同前）。朝鮮人は未明の漢文を、笑いながら手直ししてくれたそうだ。漢詩・漢文への学習意欲がもたらした、若々しい行動力である。

課外活動としては、学校の文芸部に所属し、健筆を揮った。当時の高田中学には、先述の江坂・北沢といった漢学者の他に、下村千別という歌人がおり、これらの教師を慕う学生が、文芸部を構成していたのであった。未明および同級の相馬御風も、そのひとりである。丸山敏子作成の「小川未明年譜」（日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書3　小川未明』野島出版、昭和五二年一〇月）には、「学校では文芸部に入部。白洲・越声などの号を用いて、和歌・俳句・新体詩・紀行文・論評などを執筆」（明治三〇年）との記述がある。未明は「白洲」「越声」といった雅号を用いて、漢詩に留まらない、多様なジャンルの文章

を執筆していたらしい（注6）。しかし、未明に関わる、これら最初期の習作は散逸が激しく、文芸部の部誌（に類するもの）は、現状、確認できていない。

その他、未明は、地元の少年グループ・切偲会にも所属し、機関誌『江碧山青』へ、複数の作品を寄せている。切偲会は、旧高田藩（榊原藩）の下級士族が数多く居住した、高田五分一の子弟を中心として結成された少年グループで、小川一族もまた、五分一出身であった。未明はこの団体について、次のように追思している。

> その頃は今のやうな言文一致でなく、漢文直訳体で難しい文字を喜んで使つた。特に漢詩を好んで読んだ。そして、自分でも詩を作つて少年雑誌に投書したこともある。文章を好む結果、いろいろな会を立てた。例へば文章研究会のやうなもので、「切偲会」と云つて、同好の少年が集つて、各自文章のことを研究したり、作つた文章を出し合つて一冊の本に綴ぢ、それを廻読して批評し合つたり、又村の学校に演説討論会と云ふものを設けて、演説の練習を為し、討論の筆記を拵らへて、それを各自に廻したりなどした。
>
> 「文章上達の順序」（『新文壇』明治四二年一二月二一日）

要は、五分一という地縁を共通の基盤としつつ、文芸と政治討論を活動の主軸に据える団体。それが、切偲会である。

切偲会における未明の文筆活動については、上笙一郎の調査が詳しい。上によると、機関誌『江碧山青』は、「椽取りのある和紙に墨書きされた詩文類を集めて綴じ厚紙の表紙を附けた一部限りの雑誌」（「小川白洲」と「切偲会」」『信州白樺』昭和五五年四月）で、発行は季刊。計一一号が刊行されているけれど、文芸部誌と同様、散逸があり、上が視認しているのは、四・五・七・九・一一号の五冊である。

この内、未明の文章が載っているのは四号のみで、「白洲曰」で始まる、短評が掲載されている（注7）。批評の対象となっているのは、仲間内の漢詩二篇（無署名「月夜剣舞」、越海生「今ノ時節柄ニ就テ」）、和歌一篇（越海生「秋の木の葉のちりをるは実にさびしき始なりける」）、評論一篇（無肋骨生「上杉輝虎論」）の計四篇。漢詩に対しては、「字ニ平仄ナク句ニ韻ナシ」などと、なかなか手厳しい。上は、この漢詩評を捉えて、「当時の未明がその文学的表現に際してもっとも自信を持っていたのは漢詩であり、それだからこそ、上杉謙信論に次いで仲間たちの漢詩に批評・感想を加えないではいられなかったのだ――と見て誤たぬであろう」と、未明の漢詩への自負心を指摘している。

数学試験のカンニングを摘発され、三度目の落第を余儀なくされた未明は、結局中学校を中退し、明治三四年、東京専門学校（後の早稲田大学）へ進学する。だが当初は、早稲田ではなく、二松學舎で「漢学」を学ぶことを希望していたようだ（「三度中学を落第す」同前）。早稲田の試験に落ちた場合は、二松學舎で「支那文学」を修めるつもりだった旨の発言も残っている（「小川未明先生に訊く　創作童話の座談会」同前）。

ことほど左様に、少年未明の漢詩・漢文への熱意は、一方ならぬものがあったのである。

二、雑誌『中学世界』への投書　――漢詩六篇

少年未明の漢詩に対する熱意は、雑誌への投書というかたちでも、火を吹いた。舞台となったのは、博文館発行の投書・受験雑誌『中学世界』である。

『中学世界』は、明治三一年九月、『少年文集』と『外国語雑誌』という、博文館の二つの雑誌を統合して生まれた中学生向けの読み物だ。紅野謙介によれば、『中学世界』創刊の背景には、明治一九年の第一次中学校令以来、中学校がエリートの登竜門と位置付けられ、中学生およびその志願者が急増し、彼らを対象とした市場（マーケット）が成熟していた事情があるという（**注8**）。

本誌の目玉は、雑誌全体の三分の一ほどを占める投書欄「青年文壇」である。これは、普通文・書簡文・和文・漢文・英文・新体詩・漢詩・和歌・俳句等、様々なジャンルの文章を募集の上、良作を掲載する欄で、特に優れた作品には「優等者懸賞品」が授与された。一種のインセンティブと言えよう。

かくして、「青年文壇」は活況を呈し、創刊翌年の明治三二年からは、全編投書で構成した臨時増刊号が、年四回、季刊で発刊されるに至った。関肇が指摘するように、「投書という行為は、雑誌メディアへの自主的自発的な参加形態であり、それに注がれた青年たちの情熱は、学校教育において抑圧された自己表現への欲求の開放であった」（「明治三十年代の青年とその表現の位相　――『中学世界』を視座として」『学習院大学文学部研究年報』平成六年三月）のである。

そして、数学と教師を嫌い、「学校は極めて不快な厭な処でありました」「毎日出るのが厭でたまりませんでした」（「予の廿歳頃　大変化のあつた歳」『中学世界』大正七年一月）と語る劣等生未明も、同誌に「自己表現」を求めたひとりであった（**注9**）。未明が高田中学に在籍していたのは、明治二八年四月から三四年三月――満年齢にして一三歳から一八歳――までの六年あまりだが、今回、明治三一年九月（一巻一号）から三四年四月（四巻五号）

までの『中学世界』を調査したところ、漢詩六篇、和歌一篇、俳句三篇の、計一〇篇の作品が確認できた（注１０）。この内、福田清人「少年未明の漢詩　――「中学世界」の投稿」（『定本小川未明童話全集』第三巻月報、講談社、昭和五二年一月）で紹介されている漢詩五篇を除く諸作品は、本稿で初めて公にされる新資料である。

以下、本節では、これまでほぼ白文のまま放置されてきた五篇の七言絶句と、今回新たに発見された一篇の五言絶句に、訓読文（読み下し文）・語釈・通釈を施すとともに、押韻・平仄の形式を明らかにしたい（注１１）。漢詩脇の○は平を、●は仄を、それぞれ表す。なお、編集部によって、あらかじめ題が設けられている場合は、題詠と記した。

① 越後・小川健作「梅溪棹舟（梅溪舟に掉さす）」（『中学世界』明治三二年三月二〇日）

○○●●●○○斉　香雲十里棹梅溪　香雲十里　梅溪に棹さす
○●●○○●○斉　山秀水清魂欲迷　山秀で　水清く　魂迷わんと欲す
○●●○●○●　知是洞天距非遠　知る是れ洞天（どうてん）　距（へだ）つること遠からざるを
○○○●●○○斉　綿蠻聴得一鶯嘐　綿蠻（めんばん）聴き得たり　一鶯（いちおう）の嘐（な）くを

※渓・迷・嘐は上平の斉。題詠。

【語釈】▼香雲　芳しい雲。▼梅溪　梅の咲く渓谷。▼洞天　神仙のいる場所。洞天福地の略か。▼綿蠻　小鳥、またはその囀る声。『詩経』小雅・綿蠻篇に「緡蠻黄鳥」とあり、朱熹『集伝』に「緡蠻鳥聲」とある。▼嘐　「啼」と同じく、なくの意。

【通釈】芳しい雲が十里にたなびく中、梅渓に舟を進める。山は美しく、水は清い。私の魂は恍惚とし、体から彷徨い出てしまいそうだ。この分だと、神仙の世界も遠くはなかろう。鳥の鳴き声が聞こえた。一羽の鶯が鳴いているのである。

② 越後・小川健作「哭友死（友の死を哭す）」（『中学世界』明治三二年九月二五日）（注１２）

●●○○●●○尤　冷雨蕭々転惹愁　冷雨蕭々　転（うた）た　愁いを惹く
○○●●●○○尤　何堪此際失良儔　何ぞ堪えん　此の際　良儔（りょうちゅう）を失うを
●○○●●○●　墓前来濺満腔涙　墓前来たり　濺（そそ）ぐ　満腔の涙
○●○○○●○庚　風拂禪林聴雨声　風は禪林（ぜんりん）を拂い　雨声を聴く

※愁・儔は下平の尤、声は下平の庚。

【語釈】▼蕭々　物寂しい音の形容。▼良儔　良い友人。▼禪林　禅宗の寺院。

【通釈】冷たい雨が物寂しく降り、いよいよ、愁いを感じる。このような時に、良き友の死を、どうして堪え忍ぶことができようか。私は友の墓前へ来て、満腔の涙を流す。風は禅林の間を吹き抜けている。雨声が聴こえる。

③　越後・小川健作「初冬偶成」（『中学世界』明治三二年一二月三日）

●●●●●○○微　老媼不語織棉機
●●●○○●○微　朔雪帯風窓外飛
●●○○○○●　落魄多年南北客
○○●●●○○微　何時業就故郷帰

老媼語らず　棉機を織る
朔雪は風を帯び　窓外に飛ぶ
落魄多年　南北の客
何れの時か　業就りて　故郷へ帰らむ

※機・飛・帰は上声の微。題詠。

【語釈】▼老媼　年老いた女。ここでは老母の意。▼織棉機　出典は、劉向『列女伝』、李瀚『蒙求』等に見られる「孟母断機」の故事か。▼朔雪　朔は北の謂。北の雪。▼落魄　落ちぶれて、志を得ないさま。杜牧「遣懐」に「落魄江南戴酒行」とある。▼南北客　杜牧「漢江」に「南去北来人自老」とある。▼業　学問。

【通釈】老母は黙したまま、棉機を織っている。北の雪は風に乗り、窓の外を飛んでいる。一方、私はと言えば、落ちぶれて志を得ず、諸方へ放浪中の身だ。いつの日か学問を成し遂げ、故郷へ帰ることができるだろうか。

④　越後・小川健作「吉野懐古」（『中学世界』明治三三年四月五日）

○○●●●○先　孤笻吊古意凄然
○●○○●●○先　花落花開五百年
●●●○○●●　一鳥不鳴春寂莫
○○○●●○○先　南山空鎖御陵煙

孤り笻つきて古を吊えば　意凄然たり
花落ち　花開き　五百年
一鳥鳴かず　春寂莫
南山空しく鎖ざす　御陵の煙

※然・年・煙は下平の先。

【語釈】▼吉野懐古　吉野は奈良県吉野町の吉野山を指す。同所の自然や南朝への感傷を歌った著名な日本漢詩（七言絶句）に、藤井竹外・河野鉄兜・頼杏坪（あるいは梁川星巌）の「芳野三絶」、國分青厓・加藤天淵・土屋竹雨の「後芳野三絶」がある。未明が好む頼山陽

も「芳山三首」を残した。▼笻　竹の杖。▼凄然　寒々しく、傷ましいさま。▼寂莫　非常に物寂しいさま。▼南山　吉野山。鎌倉末期、同地に南朝を開いた後醍醐天皇は、「玉骨ハ縦(たとえ)南山ノ苔ニ埋ルトモ魂魄ハ常ニ北闕(ほっけつ)ノ天ヲ望ント思フ」（『太平記』巻二一）と遺言したとされる。▼御陵　吉野山の後醍醐天皇陵。▼煙　春霞。

【通釈】独り、竹の杖をついて古都・吉野山を訪れたところ、私の心は、凄絶な傷ましさに満ちる。この地の桜は、南北朝の統一後、五百年あまりも、開花と落花を繰り返してきたのだ。鳥は一羽として鳴かず、春はひっそりとしている。後醍醐天皇陵の春霞が、吉野山を人知れず包み込んでいる。

⑤ 小川白洲「題嵐峡図巻（嵐峡の図巻に題す）」（『中学世界』明治三三年五月五日）

●●●○●●○尤　一抹彩雲翠壁頭　一抹の彩雲　翠壁(すいへき)の頭(とう)
○○●●●○○尤　櫻花萬朶映清流　櫻花萬朶(おうかまんだ)　清流に映る
●○○●○○●　滿山烟雨空濛裏　滿山の烟雨(えんう)　空濛(くうもう)の裏(うち)
●●●○●●○尤　欵乃一聲棹片舟　欵(かん)として乃ち一聲　片舟に掉さす

※頭・流・舟は下平の尤。

【語釈】▼嵐峡　京都市・桂川の亀岡より嵐山渡月橋に至る間の山峡。▼彩雲　朝焼け雲。▼翠壁　木々が翠(みどり)に芽吹く、春の山肌。▼頭　ほとり。あたり。▼萬朶　たくさんの花びら。▼滿山　山全体。▼烟雨　煙るように降る雨。霧雨。▼空濛　霧雨が降って薄暗いさま。▼欵　何かを叩く音。

【通釈】空にはひとはけの彩雲がたなびき、山峡の木々は翠に芽吹いている。桜の花びらは、あまた、清流の水に映し出されている。山全体に満ちる烟雨は、辺りを薄暗くしている。と、その時、何かを叩くカーンという音がして、船は出発した。

⑥ 越後・小川健作「江村霜暁（江村暁の霜）」（『中学世界』明治三三年一一月二五日）

●○○●●　暁鶏何處所　暁鶏(ぎょうけい)　何れの處所(ところ)ぞ
●●●○○麻　寂々路傍家　寂々(じゃくじゃく)たり　路傍の家
●●○○●　橋上霜如雪　橋上　霜は雪の如し
○○○●○麻　山頭残月斜　山頭　残月は斜(ななめ)なり

※家・斜は下平の麻。題詠。

【語釈】▼江村　大河や入江のほとりの村。▼暁鶏　夜明けを告げる鶏。▼寂々　寂しく静かなさま。▼山頭　山の頂。山頂。▼残月　夜明け方の月。

【通釈】暁鶏はどこにいるのだろうか。路傍の家々は静寂この上ない。橋の上の霜は、雪のように堆積している。山頂の残月は、斜めに傾いている。

最後に、資料的価値を考慮し、雑誌『中学世界』へ掲載された未発表の和歌・俳句を紹介しておこう。これらはいずれも、越後・小川健作名義で、和歌が「五月雨の晴間も見えず谷川は岩うつ水の音高くして」（明治三二年六月二〇日）の一篇、俳句が「五月雨や窓外に落つ梅の音」（明治三二年八月一〇日）、「夕ひばり高く茜に入りにけり」（明治三三年三月二五日）、「水枯れて古池埋む散り紅葉」（明治三三年一一月二五日）の三篇である。

なお、未明漢詩が有する全体的（トータル）な特質については、三・四節の八作品と併せて、五節で詳述したい。その際は、右記の新資料も参照する。

三、飯田庄八宛書簡　――漢詩四篇

さらに、もう四つ、未明漢詩を精読しよう。明治三三年三月、当時、満一七歳の小川未明が、高田中学の同級生で同じ文芸部員の、飯田庄八へ送った書簡に封入されていた漢詩である。飯田は、高田中学の定期試験で成績一位を取るほどの秀才であり、未明や相馬御風の共通の友人でもあった（**注13**）。

この漢詩を発見したのは、児童文学研究家の上笙一郎である。書簡の入手経緯について、上は次のように記している。

> 当時〈小川白州（ママ）〉の雅号を用いて未明の書いたこれらの詩文は、大半がすでに失われて伝わらないが、しかし近年、未明が同級生の飯田庄八に送った書簡数通が発見され、そのなかに封入されていた十数篇の詩文を、遺族の好意でわたしは複写させてもらうことができた。それらに依ってみると、当時の未明の作品は、和歌・俳句・新体詩は平凡極まるものばかりで、漢詩にやや才能のひらめきが見られるように思われる。
>
> 上笙一郎「小川未明」
>
> （高田文化協会編『郷土の小川未明』さ・さ・ら書房、昭和四七年一二月）

上は「遺族」――誰の遺族かは明示されていないが、飯田庄八の遺族であると思われる（**注**

14）――の保有する「書簡数通」を閲覧した後、「十数篇の詩文」を複写し、「やや才能のひらめきが見られるように思われる」漢詩二篇（⑦⑧）と「美術に於ける画と文章」（明治三三年八月四日）と題された評論一篇を、本書へ全文引用した。

時を追って上は、「中学時代の未明作品」（『定本小川未明童話全集』第一六巻月報、講談社、昭和五三年二月）で、新たに別の漢詩二篇（⑨⑩）と、「いささ川」（明治三三年三月二二日）という題の新体詩一篇、俳句三篇（「夜嵐に椿の落つる音志きり」「詩なきものは無用と榜す梅が庵」「里川に女水くむ月夜かな」）の計六点の新資料を一般公開している。

上によると、これらの諸作品は、評論一篇を除き、いずれも明治三三年三月二四日付の書簡に収められていたものだ。手紙には冒頭、「然ては追手ながら近作二三差上候　何れも自分ながら感心の作とて一つも無之　誠に汗顔の次第に有之候」という断り書きが付されているが、これが率直な真意なのか、型通りの謙遜なのかは、見極めの難しいところである。また、上が筆写した「十数篇の詩文」の内、公表されていない詩文は他にもあったと思われるけれど、書簡の所在は現状確認できていない。

したがって、以下、本節で検討する未明漢詩の詩句は、上の論稿に依拠しており、一次資料（史料）で裏取りができているわけではない点は、あらかじめお断りしておきたい。

⑦ 小川白洲「春江夜曲」（飯田庄八宛書簡、明治三三年三月一七日作）

●○●●●○○真　夢醒始覚客中身　夢醒め　始めて覚ゆ　客中の身たるを
●●○○○●●○真　水気如烟照月濱　水気　烟の如く　月濱を照らす
○●○○○●●　誰奏関山風外曲　誰ぞ奏でん　関山風外の曲（かんざんふうがい）
○○●●●○○真　春愁未盡憶家頻　春愁（しゅんしゅう）　未だ盡きず　家を憶（おも）うこと頻なり

※身・浜・頻は上平の真。

【語釈】▼春江夜曲　「春江花月夜」は楽府題（がふだい）。『唐詩選』には、張若虚の同名の詩がある。本作の出典か。▼客中　旅の間。▼水気　水煙。水蒸気。▼烟　春霞。▼関山　郷里の四境をめぐる山々。故郷。▼風外　風概の誤りか。景色。**注14**の中村昌司の翻刻には「風夜」とある。▼春愁　春の日の物憂い心持ち。

【通釈】夢から覚め、自分が旅の身の上であることを、ハッと思い出した。水蒸気は、春霞のように立ち籠め、月明かりの浜を照らしている。郷愁を誘う楽曲を奏でているのは、一体誰だろう。かくして、私の春愁は尽きることがない。故郷が、ただひたすら偲ばれる。

⑧ 小川白洲「春夜宿山寺（春夜山寺に宿す）」（飯田庄八宛書簡、明治三三年三月一七日作）

●●●○●●○尤　一鳥不啼日没楼　一鳥啼かず　日は楼に没す
●○●●●○○尤　晩来冷気似初秋　晩来の冷気　初秋に似たり
○○○●○○●　山椿花散仙林静　山椿　花散りて　仙林は静なり
○●○○○●○尤　雲伴高層幽更幽　雲　高層に伴いて　幽更らに幽なり

※楼・秋・幽は下平の尤。

【語釈】▼晩来　日暮れ方。▼初秋　秋のはじめ。陰暦の七月。▼山椿　山に自生している椿。春の季語。『万葉集』（巻七）には、「あしひきの山椿咲く八峯越え鹿待つ君が斎ひ嬬かも」（詠み人知らず）の歌がある。▼仙林　世俗離れのした林。

【通釈】鳥は一羽として鳴かず、日は楼に没した。日暮れ方の冷気は、初秋のように冷たい。山椿の花は散って、仙林は静かである。空を見上げると、雲が高層に立ち昇って、山の雰囲気はいよいよ幽玄である。

⑨ 小川白洲「哭外山博士死（外山博士の死を哭す）」（飯田庄八宛書簡、明治三三年三月一二日作）

●○○●●○○尤　客年来説語悠々　客年来説　語悠々たり
○○○○●●○尤　誰知英雄死別秋　誰ぞ知る　英雄死別の秋
●●○○○○●●　雪暗霏々春寂寞　雪暗く霏々として　春寂寞
○○○●●○○尤　悲風行盡四方州　悲風行き盡す　四方の州

※悠・秋・州は下平の尤。

【語釈】▼外山博士　明治期の学者・外山正一（嘉永元年～明治三三年）のこと。雅号は丶山。東京大学総長・貴族院議員・文部大臣等の要職を歴任した他、井上哲次郎らと詩集『新体詩抄』（明治一五年）を著し、従来の伝統詩形（漢詩・俳句・和歌）に代わる新体詩を創出。日本近代詩の先駆をなした。▼客年　去年。▼来説　来訪して講演すること。▼悠々　ゆったりと落ち着いているさま。▼秋　時。▼霏々　雪や雨が頻りに降るさま。『詩経』小雅・采薇篇に「雨雪霏霏」とある。▼寂寞　④語釈参照。▼悲風　悲しみを催させる風。▼州　国。

【通釈】昨年来訪の上、講演した外山正一博士の語り口は、実に貫録に満ちた、悠々たるものであった。その外山博士のような英雄が、突然逝去するなんて、一体誰が予測し得ただろ

う。雪はあたりに暗く降り積もり、春なのに寂寥感が漂う。悲しみを催させる風が、日本中へ吹き荒んでいる。

⑩ 小川白洲「春郊矚目　其ノ二（其一者君既見）」（飯田庄八宛書簡、作成日不明）

○●○○○●○尤
行客呼舟江渡頭　行客舟を呼ぶ　江渡の頭
●●○●●○○尤
月照残柳水空流　月　残柳を照らし　水空しく流る
○○○●○○●
前程猶遠春昏恨　前程猶遠く　春昏恨とす
●●○○○●○尤
隔霧前村燈火幽　霧を隔てたる前村　燈火幽なり

※頭・流・幽は下平の尤。

【語釈】▼春郊　春の郊外。▼行客　旅人。▼江渡の頭　入江の舟渡し。▼残柳　生え残っている柳。▼前程　旅の前途。▼昏恨　昏昏。暗く、先が見えないさま。▼前村　前方にある村。▼燈火　あかり。ともしび。

【通釈】旅人が入江の舟渡しで舟を頼んだ。舟に乗ると、月は残柳を照らし、水は空しく流れている。旅の前途はいまだ遠く、春なのに極めて物暗い。舟と前村との間を霧が隔て、村の燈火が淡く光っている。

四、飯田庄八宛書簡（2）　――漢詩四篇

最後に四つ、未明漢詩を細読したい。前節と同じく、地元の友人・飯田庄八へ宛てた書簡に記載されていた漢詩である。ただし、先に分析してきた漢詩群と異なり、これらの作品は、高田中学時代のものではない。未明が高田中学を中退し、東京専門学校（早稲田大学）へ入学した明治三四年の夏に制作された漢詩である。

この漢詩を発見したのは、高田の高校教員・中村昌司である。中村は、「エッセイ　小川未明（文学）の故郷」（小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふる里の百年』小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月）の注で、これまで知られていなかった七言絶句四篇を、新たに紹介した。中村によれば、「上京後、東京専門学校に入学した健作は、その年（明治三四・七）の暑中休暇に郷里春日山に帰省し、東頸城・菖蒲の友人飯田庄八宛（ハガキ）に、近作の「漢詩」四首を書き送っている」。中村は、この葉書の手蹟を翻刻したのである。

手紙には冒頭、「謹啓　炎暑の候雅兄幸に筆硯御優勝の段奉賀候　此程玉什に接し一層

御発達の程見受申候　近作二三記載致し候間御照覧被下度候」との挨拶書きが付されているが、この文面からは、中学中退後も、郷里の友人とそれなりの交友を続けていた様子が窺えよう。そして、上記の挨拶書きに続いて記されるのが、下記の漢詩四篇である。御多分に洩れず、これまで白文のまま放置されてきた初期習作である故、以下本節では、なるべく丁寧な玩読を試みたい。

なお、本書簡は、一般には公にされていない未公開資料である。したがって、前節と同様、一次資料（史料）を用いた漢詩の詩句の裏取りができていない点は、あらかじめお断りしておきたい。また、中村の注は、住所・氏名等を含めた葉書の全文を翻刻したものではないため、葉書の差出人の名義が、本名の「健作」なのか、「白洲」等の雅号を用いていたのかは、現状不明である。併せて、お断りしておきたい。

⑪「途上即吟」（飯田庄八宛書簡、明治三四年七月）

○○○●●○○尤　山河千里八青州　山河千里　八青州
○●○○●●○尤　何處今宵洗馬郵　何れの處（ところ）ぞ今宵　洗馬の郵（せば　しゅくば）
○●●○○●●　遊尽仲秋帰洛日　仲秋　遊び尽して　帰洛の日
●○○●●○尤　漸親燈火読書樓　漸（ようや）く燈火に親しむ　読書の樓

※州・郵・樓は下平の尤。

【語釈】▼八青州　関東八州のこと。武蔵・相模・常陸・安房・上総・下総・上野・下野の八ヵ国を指す。▼洗馬　長野県塩尻市にあった中山道の宿駅。昭和七年の大火で、ほぼ消失した。▼郵　宿場。▼仲秋　陰暦の八月。▼帰洛　都へ帰ること。

【通釈】山河が千里に広がる、緑豊かな関東八州の地を、私は後にした。今夜宿泊する予定の洗馬の宿場は、一体どこだろう。帰省後、八月の間は、ただひたすら遊んでいたが、いよいよ都へ戻る日がやってきた。ようやく明かりを灯して、楼で読書をした。

⑫「過碓氷嶺（碓氷の嶺を過ぐ）」（飯田庄八宛書簡、明治三四年七月）**（注15）**

●●○●●○冬　蹈破飛雪第幾重　飛雪を蹈破すること　ただ幾重
●○○●●○冬　岸頭留馬夕陽春　岸頭に馬留むると　夕陽春（うすず）く
●○○●○○●　八州青野山川遠　八州の青野　山川遠し
●●●○●●○冬　一点眼中妙義峯　一点眼中するは　妙義の峯（みね）

※重・春・峯は上平の冬。

【語釈】▼碓氷嶺　長野県軽井沢町と群馬県安中市の間にある碓氷峠のこと。高田出身の未明が上京する際は、この峠を越える必要があった。▼蹈破　踏破と同じ。踏み歩くこと。▼飛雪　風に吹き飛ばされながら降る雪。▼岸頭　岸のほとり。▼春　夕日が没する。▼八州　関東八州のこと。⑪語釈参照。▼妙義峯　群馬県南西部にある妙義山のこと。上毛三山・日本三大奇勝の一つに数えられている。

【通釈】吹きすさぶ雪の中を、ただひたすら歩く。ようやく碓氷峠を越え、岸のほとりに馬を留めると、折しも夕日が没しようとしていた。緑が繁る関東八州は、山川に隔てられていて、依然遠い。一点、眼に入るのは、名勝として名高い、あの妙義山である。

⑬「客舎偶成」（飯田庄八宛書簡、明治三四年七月）**（注16）**

●●●○●●○庚　駿馬一鞭萬里征
●●○●●○○庚　月魄風物異郷情
●○●●●○●　夏天過得水村客
○●○○○●○庚　今夕初聞孤雁鳴

駿馬　一たび鞭（むちう）てば　萬里を征く
月魄（げっぱく）の風物　異郷の情
夏天に　水村を過ぎ得たるの客
今夕　初めて聞く　孤雁の鳴くを

※征・情・鳴は下平の庚。

【語釈】▼駿馬　足の速い優れた馬。▼月魄　月。▼風物　風景。景色。▼夏天　夏の空。▼水村　水辺の村。▼孤雁　群れから離れてしまった一羽の雁。

【通釈】駿馬に一鞭して、万里の道を駆ける。月に照らされた景色は、まさしく、異郷の趣きである。旅人の私は、今日は夏天の中、水辺の村里を通り過ぎた。夕方、一羽の雁が鳴くのを初めて聞いた。そろそろ秋である。

⑭「夏日閑居（夏日に閑居す）」（飯田庄八宛書簡、明治三四年七月）

○○●●○○○先　山村晝靜思徒然　山村　晝静かにして　徒然（つれづれ）に思う
○●○●●●●潸　潺咽溪水又惹眼　潺（さん）として咽（むせ）ぶ溪水　又眼を惹く
○●○○○●●　終日沈吟詩未得　終日沈吟するも　詩未だ得ず
●○●●●○○先　乱蟬萬樹夕陽天　蟬　萬樹に乱る　夕陽の天（そら）

※然・天は下平の先、眼は上声の濊（仄字）。

【語釈】▼潺　水の清らかに流れるさま。▼咽　咽び泣くような音を立てる。▼溪水　谷川の水。溪流。▼沈吟　静かに口ずさむこと。▼天　空。

【通釈】山村の昼は静かであり、じっと物思いにふける。谷川の水は、清らかに咽び泣くような音を立てており、目を惹き付ける。一日中、あれこれと口ずさんではみたものの、詩はいまだにできない。夕暮れの空の下、蝉が、あまたの樹木で乱れ鳴いている。

五、未明漢詩の技巧と思想　――押韻・平仄・出典／赤・鳥・南北対比

以上、七言絶句・五言絶句を併せて、一四篇の未明漢詩を鑑賞してきた。次いで、本節では、これらの漢詩が具有する技巧（技術的な質）と思想（内容的な特質）を分析するとともに、習作期の漢詩と後年の小川未明の文学世界との間を結ぶ質的連続性を指摘したい。

技巧に関しては、押韻・平仄・出典の三つの観点から検討する。押韻とは、句の末字に脚韻を施すことで、偶数句＋七言詩の場合は初句で韻を踏むのが、作詩の基本的な約束事となっている。平と仄の二つの音の内、韻で使用していいのは平だけ。しかも、上平一五、下平一五の計三〇種の韻のグループ――「韻目」と呼ぶ――の中から、同じグループの漢字を用いて、全体を統一しなければならない。なかなかルールが細かいわけだが、未明の押韻は、右記の条件をほとんど完璧にクリアしている。意識的な努力の賜物だろう。

例えば、①「梅溪棹舟」の結句で、「嘵」（上平・斉）という見慣れない漢字（異体字）を使っているのは、韻目を揃えるために違いない。通常の「鳴」（下平・庚）を使った場合、統一が乱れてしまうからである。また、②「哭友死」は、起句・承句（下平・尤）と結句（下平・庚）で韻目を異にするものの、同じ下平ということで、ギリギリ足並みを揃えている。あるいは、⑩「春郊矚目　其ノ二」の転句「昏恨」は、本来「昏昏」の字が正確だが、「昏」（上平・元）が平字のため、仄字である「恨」を、あえて当て字風に使用しているのである。未明の苦心の痕跡が窺える。

次いで、平仄は、漢詩の詩句に課せられた、音の規則性のことである。平と仄の関係は、五言詩の場合、二四不同、七言詩の場合、二四不同・二六対でなければならない。その他、五言詩の二字目、七言詩の四字目が平の場合、その前後を仄で囲んではいけない孤平（●○●）の禁や、下三字を同じ音にしてはいけない下三連（○○○／●●●）の禁というルールがある。内、すべてのルールに関して、いくつか例外はあるものの、未明の漢詩は、基本的には、これらの制約に準じたものだ。未明は漢詩を創作する際、『古詩韻範』『詩語粋金』『詩韻群玉』といった教本を参照していた由、回想しているが（**注17**）、勉強の成果であろう。

技量は高い。

出典は、詩句の背景にある題材のことである。和歌の本歌取りのように、先行する漢詩・漢学の素養を踏まえて、自作を構築できれば、学が深いと言える。その点、③「初冬偶成」は注目に値しよう。起句の「老媼語らず棉機を織る」は、劉向『列女伝』、李瀚（りかん）『蒙求』等に見られる「孟母断機」の故事を参照していると考えられるからである。これは、勉強をやめて帰宅した孟子を見た母が、機織り中の織物を切り裂き、「お前が途中で学問を投げ出すのは、私が作りかけの織物を断ち切るのと同じである」と、息子を叱責したエピソードで、機織りに励む母と学業を怠ける息子という構図が、「初冬偶成」と酷似している。本詩の起句は、二四不同・二六対の法則が崩れているのだけれど、未明は「孟母断機」の故事を引くために、あえて禁を破っているのである。

また、転句の「落魄多年南北の客」は、杜牧「遣懐」「漢江」（語釈参照）あたりが典拠だろう。さらに、④「吉野懐古」は、「吉野三絶」「芳山三首」（語釈参照）といった日本漢詩の伝統を踏まえた作詩であろうし、⑦「春江夜曲」は、未明が『唐詩選』の愛読者だった事実に照らすと（注１８）、張若虚「春江花月夜」を下敷きにした作詩であると考えられる。未明の学は深い（注１９）。

さて、それでは、これらの技巧巧みな漢詩群には、如何なる思想（内容的な特質）が胚胎し、それは後年の未明の文学世界と、どのような質的連続性を有しているのだろうか。ここでは三点、特性を指摘したい。

第一の特性は、赤（紅）色に対する嗜好である。①「梅溪掉舟」の「梅溪」、④「吉野懐古」の「花落花開」、⑤「題嵐峡図巻」の「彩雲」「櫻花萬朶」、⑥「江村霜暁」の「暁鶏」、⑧「春夜宿山寺」の「日没楼」「山椿」、⑩「春郊矚目其ノ二」の「燈火」、⑪「途上即吟」の「燈火」、⑫「過碓氷嶺」の「夕陽」、⑭「夏日閑居」の「夕陽」と、未明の漢詩作品には赤色が横溢している。新資料として二節末で紹介した、雑誌『中学世界』投書の俳句や、三節で紹介した、飯田庄八宛書簡封入の俳句を見ても、「梅」「夕ひばり」「茜」「散り紅葉」「椿」「梅が庵」と、赤色の点在が確認できよう。

翻って、私たちの知る後年の未明も、自作に赤のモチーフを多用していたのであった。今、試みに、任意の作品を挙げれば、「赤い船」（明治四三年）、「紅い入日」（明治四四年）、「鮮血」（大正三年）、「野薔薇」（大正九年）、「赤い蝋燭と人魚」（大正一〇年）、「血の車輪」（大正一一年）、「黒い人と赤い橇」（同上）、「赤いガラスの宮殿」（昭和四年）、「赤土へ来る子供たち」（昭和一四年）、「赤いげた」（昭和二七年）等、その実例は枚挙に暇がない（注２０）。

未明の赤好みは、既に少年の日の習作時代から、芽吹いていたのである。

第二の特性は、鳥（鶏）に対する嗜好である。①「梅溪掉舟」の「綿蠻」「一鶯」、④「吉野懐古」の「一鳥」、⑥「江村霜暁」の「暁鶏」、⑧「春夜宿山寺」の「一鳥」、⑬「客舎偶成」の「孤雁」と、鳥は、未明漢詩の舞台を彩る主要な役者として頻出している。前掲の俳句「夕ひばり高く茜に入りにけり」は、未明の鳥と赤への嗜好が混淆する、極めて特色溢れる一句と言えよう。

そして、赤と同様、鳥もまた、後に作家として名を成した未明が愛用する重要語なのであった。「海鳥の羽」（明治四〇年）、「燕と乞食の児」（明治四三年）、「木と鳥になつた姉妹」（大正九年）、「小鳥の死」（大正一一年）、「駒鳥と酒」（大正一三年）、「兄弟の山鳩」（大正一五年）、「幸福の鳥」（昭和三年）、「雀と鶸（ひわ）の話」（昭和五年）、「子鶯と母鶯」（昭和一一年）、「よろこびがらす」（昭和三一・三二年）等、こちらも例証には事欠かない。未明はエッセー「小鳥の思ひ出」（『野鳥』昭和一一年七月）で、幼少期以来続く、鳥への愛心を語っているが（「私は、夜の明けるのを待つて、幾たび、飼つてゐる小鳥を逃がしてやつたか知れません」）、その愛念は、早くも中学時代の詩句の上に反映されていたのである。

第三の特性は、前二者ほど一般化できないのだが、一部の作品に、南北の対比構造が窺える点である。滑川道夫はかつて、「「南」と「北」の対比構造が未明の一つの美学といいますか、未明自身の表現のレトリックの基本的なパターンの一つとして、あるような気がするわけです」（「未明童話における南と北の思想」『日本児童文学の軌跡』理論社、昭和六三年九月）と述べ、「港に着いた黒んぼの話」（『童話』大正一〇年六月）等を例示しながら、未明の表現形式の基本形（プロトタイプ）に、南北対比がある旨、指摘した。滑川によれば、「南」には都会・理想・富・陽気・退廃・春といった要素が、「北」には故郷・現実・貧困・陰鬱・冬といった要素が、それぞれ象徴されているのだという**（注２１）**。

③「初冬偶成」は、この分析を援用して読み解くことが可能だろう。すなわち、「老媼」が「綿機」を織る「朔雪」の世界（北）には、故郷・現実・貧困・冬のイメージが、目下「落魄多年」中でありながら、学業で成功し、故郷へ錦を飾らんとする青年（「何れの時か業就りて故郷へ帰らむ」）の世界――高等教育機関のある都市空間――（南）には、都市・理想・富・退廃のイメージが、各々仮託されているのである。未明の南北対比のレトリックは、少年期の漢詩において、その原型が確認できる。

このように、高田中学時代の小川未明は、押韻・平仄・出典を巧みに駆使する、大変優れた漢詩の詠み手であった。また、それらの詩作には、後年の未明の文学世界と通底する要素

が複数伏在していた。未明の教養の核が漢学であり、文学創作の起点が漢詩であるという事実を、私たちは再評価しなければならない。

六、日本近代漢詩史上の位置　――明治期漢詩ブームの外縁

さて、ここまで筆者は、少年未明の五言絶句・七言絶句について、なるべく精細な鑑賞と評価を行ってきた。最後に本節では、視点を少し引き、これらの漢詩が、日本近代漢詩史上において、どのような位置を占めているのか、巨視的な視座から考察を加えたい。

まず、明治維新以降の日本近代漢詩史の流れを、簡単に整理しよう。明治期の漢詩史を捉えるに際し、重要なポイントは、その頃、漢詩は存外に廃れていなかった、いやむしろ、流行ってさえいたという点である。

この点について、猪口篤志は「明治の時代は西洋の文物輸入に急であったから、漢文学もその影響を受けて衰微の一途を辿ったように考えられがちであるが、事実は逆で、詩学に於ては空前の進展を遂げた」（「日本漢詩概説」『新釈漢文大系　日本漢詩』上巻、明治書院、昭和四七年八月）と、村山吉廣は「明治維新と言えば「文明開化」が同義語のように思われ、旧時代の学問の中心であった漢学は一斉に退潮したと考えられがちであるが、事実そうではない。むしろ明治は中期ごろまで「漢学愛好」の時代であった」（『漢学者はいかに生きたか』大修館書店、平成一一年一二月、三頁）と、それぞれ述べ、一見反時代的な漢詩・漢文の隆昌を指摘している（**注22**）。維新以後、欧化政策によって漢文学が一掃されたと見るステレオタイプは、完全な誤りなのである。

では何故、この時期、漢詩は「空前の進展を遂げた」のだろうか。猪口は、同書で、その要因を四つ挙げている。すなわち、①統治者層の漢詩愛好、②私塾・詩社の創立、③出版ジャーナリズムの発達、④中国の文士との交流の四点である。

①は、当時、社会的影響力のあった指導者層の多くが、漢詩愛好者であった事実を指す。政治家では、西郷隆盛・大久保利通・伊藤博文、文人・学者では、鷲津毅堂・三島中洲・岡鹿門等、漢詩好きの実力者は各界に遍在していた。②は、漢詩・漢学の私塾や詩社が、相次いで設立・運営されていた事実を指す。私塾では、安井息軒の三計塾、大沼枕山の大沼学舎、島田篁村の双桂精舎、詩社では、森春濤の茉莉吟社、鱸松塘の七曲吟社、成島柳北の白鷗吟社等が、それにあたる。③は、出版ジャーナリズムの進展に伴い、創作と批評の往還を可能にする発表媒体が次々と創刊されていた事実を指す。専門雑誌では、森春濤の『新文誌』、佐田白茅の『明治詩文』、大江敬香の『花香月影』等が生まれ、新聞では、『毎日新聞』

『日本新聞』『朝野新聞』他多数が、漢詩の投書欄を設置していた。④は、主に、清国の公使館員との交遊を指す（注２３）。

右記のような諸要因が絡み合った結果、明治の漢詩壇は、森春濤・槐南親子を中心として、空前絶後の活況を呈することとなる。さながら、百花斉放の様相と言ってよい。同時期、大町桂月は「ただ廃滅するなるべしと期したりし漢詩が、却つて盛になり、且つ上手になりしことは、吾人の不思議に思はざるを得ざる所也。漢籍入りてより二千年、漢詩を作る伎倆の発達せると（ママ）、未だ明治時代の如きものあらず。（中略）明治二十年代は、実に漢詩全盛時代なりき」（「明治文壇の奇現象」『筆のしづく』文禄堂、明治三六年七月）と評しているが、この同時代評は、かかる時代の趨勢を如実に伝えていよう（注２４）。

だが、上記の漢詩ブームは、決して長くは続かなかった。木下彪（ひょう）が「我が王朝以来、千年の伝統を有する漢詩は、明治に至つて未曽有の発展を遂げ、明治十年前後から三十年代初期まで其の全盛を極め、以後は衰落の一途をたどつた」（「森槐南と国分青厓」『明治文学全集』第六二巻月報、筑摩書房、昭和五八年八月）と指摘するように、明治三〇年代中頃以降、漢詩愛好者の数は減少の一途を辿り、新聞や雑誌の漢詩欄は相次いで廃止されていったからである。結果、漢詩創作は国民的なメディアを失い、大正・昭和期へ入ると、一部の好事家の手遊びに過ぎなくなってしまう（注２５）。

このような地位転落の背景には、欧化教育の本格化に伴う漢学塾の衰退や、日清戦争の勝利によって生じた中国文化への蔑視が考えられよう（注２６）。いずれにせよ、燈滅せんとして光を増す最後の輝きを経て、漢詩はメジャーな文芸からマイナーな文芸へと凋落してしまったのである。

さて、以上が、明治維新以降の日本近代漢詩史のおおまかな見取り図であるが、ここで話を未明に戻したい。本節の課題は、かかる詩史における未明漢詩の位置を、抜かりなく測定することであった。筆者の結論は、少年未明の漢詩は明治期漢詩ブームの外縁に位置付けられ得る、というものである。どういうことか。

一節でも記したように、未明は明治一五年生まれの明治人なわけだけれど、その少年・青年初期は、上述の漢詩絶頂期と一致していた。未明が雑誌『中学世界』や友人・飯田庄八へ自作を送っていたのは、ちょうどこの時期（明治三二～三四年頃）なのである。逆に、東京専門学校（早稲田大学）入学後の創作の主戦場はもっぱら小説であって、上記の期間以外に物した漢詩は、現状確認されていない。してみれば、未明は明治中期、漢詩が流行している最中、漢詩に熱中し、流行が去るや漢詩を捨てた、明治期漢詩ブームの落とし子とも言える

存在であることが確認できよう。

ただし、未明は何分、地方住まいの若輩者であったから、投書先は青年誌・地方紙に限定されていたし、中央の漢詩壇のお歴々から評価を受けていたわけでもない。未明の詩作が、明治期漢詩ブームの中心ではなく外縁に位置付けられ得るというのは、まさしく、その意味においてである。

ところで、未明のような作詩能力を持つ若者は、同時代的に見て、決して特異な例外ではなかった。その点、『中学世界』の他の投書者もさることながら、永井荷風や河上肇といった同世代（明治一二年生まれ）の文人が、優れた漢詩を残している事実は、注目に値する。永井家は、父・永井禾原（かげん）、外祖父・鷲津毅堂ともに漢詩を紡ぐ、漢詩一家であったし、河上は未明同様、幼少期に漢学者のもとで頼山陽の歴史書『日本外史』を学んでいた（注27）。三者とも、物心が付く以前から、漢学を体得せざるを得ない環境に身を置いて／置かされていたのである。家風や家柄にもよるけれど、ある時点までの日本では、そのような教育環境が、ごくあたり前に存在していた。

入谷仙介は「明治一〇年ごろを境に、それ以後に出生した人人は、漢学的教養がそれ以前に比べて稀薄になってき（ママ）、新しい漢詩人が生まれにくくなる」（『近代文学としての明治漢詩』研文出版、平成元年二月、二〇二頁）と、森岡ゆかりは「明治十年、明治二十年と、生まれ年が後になればなるほど、漢詩を作る人が減少します。子どもの時の学習すべき内容に占める漢詩漢文の比率が相対的に減っていくことも、漢詩漢文が自由に扱えなくなる要因となりました」（『文豪だって漢詩をよんだ』新典社新書、平成二一年四月、三七頁）と、それぞれ指摘しているが、明治一〇年代初・中期に生まれた彼らは、幼少時、漢籍へ親しみ、漢学的教養を血肉化した、最後の方の世代であると言えよう。

無論、明治一〇年代生まれの漢学的教養は、幕末から明治初期に生まれ育った夏目漱石・森鴎外・徳富蘇峰・幸田露伴・正岡子規・中野逍遥らのそれに、到底及ぶものではない（注28）。しかし、『懐風藻』以来受け継がれてきた日本の漢学の伝統は、小川未明の内部に確かに息づいていたし、その学知は、後続の児童文学作家には決定的に失われてしまった前近代の教養であったのである。

小括

以上、本章では、新潟・高田中学時代（明治二八～三四年。一部、東京専門学校時代を含む）に、小川未明――当時の健作少年――が紡いでいた、漢詩（五言絶句・七言絶句）の検

証を行った。

これらの漢詩は、従来、未明が作家になる以前の習作として、顧みられることなく、ほぼ白文のまま放置されてきたのだが、今回、新たに発見した新資料を交えて、分析の俎上へ載せたところ、次のような事実が明らかになった。すなわち、中学時代の未明は、押韻・平仄・出典を使いこなす、大変優れた漢詩の詠み手であったこと、また、この時期の詩作には、赤（紅）好み、鳥（鶏）好み、南北対比といった、後年の未明の文学世界と連なる要素が複数備わっていたこと、日本近代漢詩史上、未明の漢詩は明治期漢詩ブームの外縁に位置付けられ得るということである。

夏目漱石・森鴎外・徳富蘇峰ら、江戸と明治の狭間に生まれた明治の文人は、漢詩・漢文の素養を豊かに保持していたけれど、明治三〇年代以降、漢学塾の減少等に伴い、これらの漢学的素養は知識階級の間から失われていく。その点、幼少期に漢学塾で薫陶を受けた明治一五年生まれの未明は、明治一二年生まれの永井荷風や河上肇――二人とも漢詩を物した――と並び、かかる旧世代の教養を血肉化した、最後の方の世代に当たると言えるだろう。

小川未明の教養の核が漢学であり、文学創作の起点が漢詩であるという事実を、私たちは再評価しなければならないのである。

注

1　「愛読書の憶ひ出」（『新潮』明治四三年四月）、「余の愛読書と其れより受けたる感銘」（『中央文学』大正八年四月）、「予の一生を支配する程の大いなる影響を与へし人・事件及び思想」（『中央公論』大正一二年二月）参照。

2　晩年の随想「童話を作って五十年」（『文藝春秋』昭和二六年二月）には、「私は、敵に塩を送つた上杉謙信を崇拝して、神社を建てた父の影響を受け、塾へいつても、日本外史を泣いて教へる先生の薫陶を受けました。私も楠木正成が正行と別れる條りなどでは、泣いたものです」との記述がある。

3　未明は、戦時期の評論「青年に与ふ」（『日本の子供』文昭堂、昭和一三年一二月）で、「「外史子曰く」と、老先生が声を上げて読まれる時、眼から涙が流れたのです。そして、私もまた泣いてゐました。終つて、家へ帰る道すがら、感憤して足は土に着かず、頭は茫然としてゐました。当時少年の胸にも、忠節のために、一身を犠牲にして惜まざる念が、烈々としてあつたのです」と、書き記している。また、戦後の随想「童話と私」（『改造』昭和二

九年六月）でも、「今から思えばこの本もかなり封建的なものだつたかも知れない。しかし当時の私にとつては、そこに見られる正義のシンボルともいうべき烈々たる勤王の志と、そのうちに秘められた思想・精神の高さや人間の真実を追求してゆこうとする鋭い気魄が好もしかつた」と、書き残している。

4　十五年戦争下の天皇制賛美（家族国家観の信奉）については、六章四節と七章三節で論じた。

5　同様の指摘は、森岡ゆかりも、『文豪だって漢詩をよんだ』（新典社新書、平成二一年四月）で行っている。「登校拒否をしなくてすんだのは、得意な科目があったからでした。それが漢文だったのです」（六九頁）、「小川未明は数学が不得意でも、劣等感の塊になったりしませんでした。未明は漢文によって自負心を維持することができたのです」（七一頁）。

6　上笙一郎は「〈未明〉に至るまで」（『定本小川未明小説全集』第六巻月報、講談社、昭和五四年九月）で、未明が坪内逍遥にその名を与えられる以前、白洲・越声・桃涯という三つの雅号を遍歴していた旨、報告している。上は、「〈白洲〉は太陽の直射を受けた砂洲が眼前に浮かんで陰翳がなく、〈越声〉は〈越後の住人の声〉というので意味が勝ちすぎ、そして〈桃涯〉は、情感ありとはいうもののセンチメンタルに傾いていて底が浅い」と述べ、「意味と影像を持ち過ぎず」「余韻を感じさせ」る未明の名を、もっとも高く評価している。

7　機関誌『江碧山青』が発見された高田・金光寺の住職・峰箇祐俌は、「昭和初年代から十年代にかけての時期までは全冊が欠けることなく揃っており、その創刊号をはじめ初期の号にはあきらかに小川健作と署名のある文章作品が載っていた」由、上笙一郎に語っていたらしい。

8　紅野謙介「『中学世界』から『文章世界』へ　――博文館・投書雑誌における言説編成」（『文学』平成五年四月）参照。紅野は、同論文で、「知的エリートへの「立身」の夢を抱きつつ、流動的で階級未分化な、しかも漸層的にふくれあがりつつあるこの宙づりの世代／集団が雑誌市場の消費者として狙い撃ちにされたのである」と述べ、同種の雑誌として『文庫』『中学文壇』の名を挙げている。

9　中学時代の投書歴について、後年、未明は「そこで、そういう自分の考えや気持（貧富の格差への憤懣など――引用者注）を文章に書いたり、漢詩にうたったりして、地方の新聞や、東京の雑誌、あるいは交友会誌に投稿したりしました。もちろん学校の作文にも自分の思うままに自由に書きましたが、それが当時の文章の型にあてはまっていなかったので、よく先生にしかられました。しかし、私は何度しかられても自由にものを書くことをやめませ

んでした」（「常に希望をもつ」『中学時代』昭和二九年六月）と、書き残している。『中学世界』以外の投書先としては、丸山敏子「小川未明年譜」（日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書３　小川未明』野島出版、昭和五二年一〇月）が『新少年』を、岡上鈴江・滑川道夫「年譜」（『定本小川未明童話全集』第一四巻、講談社、昭和五二年一二月）が『高田新聞』を、それぞれ挙げており、今回筆者は、両新聞・雑誌の投書欄も調査してみたが、管見の限り、未明の作品を発見することはできなかった。ただし、『高田新聞』に関しては、バックナンバーに相当な散逸があるため、筆者が未見の号に未明の初期習作が掲載されている可能性は十分あり得る。

１０　岡上・滑川作成の講談社版全集の年譜には、「『中学世界』には漢詩・俳句・新体詩を投稿、たびたび掲載される」との記述があるが、新体詩の掲載は確認できなかった。

１１　押韻・平仄の調査や語釈の作成に際しては、大修館書店の『大漢和辞典』や小学館の『日本国語大辞典』等、各種の辞典・事典類を大量に参照した。改めて断るまでもないことかもしれないが、念のため、お断りしておく。

１２　当該の『中学世界』（二巻二一号）は、日本近代文学館・神奈川近代文学館のいずれも、マイクロフィルムに抜けがあり、原文を確認できていない。なお、同詩は、小川未明文学館編『御風と未明』（上越市、平成一九年二月、五頁）にも掲載されているが、ここでは二句目の冒頭が「何堪」ではなく「何湛」、四句目の末尾が「聴雨声」ではなく「落葉秋」となっている。

１３　中村昌司「エッセイ　小川未明（文学）の故郷」（小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふる里の百年』小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月）、小川未明文学館編『御風と未明』（同前）参照。

１４　何故、そう考えるのかと言えば、同じ書簡を翻刻掲載した中村昌司の「エッセイ　小川未明（文学）の故郷」（同前）に、次のような記述があるからである。なお、中村は高田の高校教員である。「資料は、上越市仲町三に住む、飯田家ご縁類の海津誠一氏所蔵のもので、すでに上笙一郎氏によって、「定本　小川未明童話全集　第十六巻　月報１６」に紹介ずみであるが、原所蔵者の紹介がなく、三、四の誤謬もみられるので、訂正をかねて、ここに紹介する」

１５　中村は詩の表題を「過確水嶺」と翻刻しているが、「確水」では意味が通らないことから、筆者の判断で「碓氷」と表記した。中村の翻刻ミスか。

１６　中村は詩の二句目を「月魂風物異郷情」と翻刻しているが、「月魂」では意味が通ら

ないことから、筆者の判断で「月魄」と表記した。中村の翻刻ミスか。

17　「その頃から私は、「初学便覧」だの「詩語粋金」だのを頼りにして、漢詩を作つては、青年雑誌や田舎新聞に投書した」（「曩の音を聞きながら　いやないやな中学時代」『文章倶楽部』大正六年六月）／「日本外史」「古詩韻範」などは、中学時代、暑中休暇に山間の温泉へ行く時分にも提へて行つたものです」（「余の愛読書と其れより受けたる感銘」『中央文学』大正八年四月）／「詩語粋金や、詩韻群玉などといふ書物に縋つては、詩を作つた時分は、たとへば、梅花に対しては、春寒とか、凌屑とか、花如雪とか、いふ語句が、限りない詩情をそそつたのであつた」（「其の雄勁とさびしさ」『中央公論』大正一三年二月）。なお、版元は複数あるが、いずれの教本も実際に出版されている。

18　「ずつと少年時代には「唐詩選」や頼山陽の「日本外史」「山陽詩抄」などを愛読した。以上挙げた書物は、私の文章を書く上に、最も大きな影響を与へたものである」（「文章上達の順序」『新文壇』明治四二年一二月二一日）／「しかし、白楽天の詩、李白の詩、高青邱の詩、その他詩経、古詩などは好きである。子供の時代には三体詩や、唐詩選などを愛誦したものである。詩はどちらかと云へば支那の詩が日本の詩よりも好きである」（「漢詩の面白み」『文章倶楽部』大正七年五月）／「童話を読んで特に感じたといふことはないですな、私は子供の時分には、やはり童話よりも寧ろ漢詩ですな、唐詩選とか三体詩とか……」（「小川未明先生に訊く　創作童話の座談会」『新児童文化』昭和一七年五月）／「私があの時分に読んだものは、頼山陽の「日本外史」「唐詩選」「四書五経」などの漢書でした。その時分に朗詠した詩は今も思い出します。少年期の読書の影響は大きなものがあると思います」（「童話に生きる」『中学時代』昭和二六年八月）

19　出典と用例の判別は難しいのだが、これ以外にも、未明漢詩の詩句が、先人のそれを巧みに学び盗んだ結果である可能性は大いにあり得る。例えば、②「哭友死」の「蕭々」は李白「送友人」で、⑤「題嵐峡図巻」の「彩雲」は李白「早発白帝城」、「烟雨」は杜牧「江南春」、「空濛」は武元衡（ぶげんこう）「嘉陵驛」で、それぞれ使用されている。

20　続橋達雄は、「戦後の未明童話序説（2）」（『野州国文学』昭和五八年一二月）で、「第一童話集のタイトル『赤い船』（一九一〇・一二）とか初期の小説「紅雲郷」（一九〇五・一一～〇六・一）などを例に挙げるまでもなく、赤・紅色のもえるような強烈な色彩は、未明の作品をさまざまな情感をこめていろど」っていると、指摘している。また、詩人・清水哲男は、「未明の赤」（『定本小川未明童話全集』第一六巻月報、講談社、昭和五三年二月）で、童話「赤い蝋燭と人魚」（『東京朝日新聞』大正一〇年二月一六～二〇日）や「黒い人と赤い

橇」（『赤い鳥』大正一一年一月）を例に挙げながら、未明文学の基調をなす赤色に対する強烈な印象を語っている。安房直子「未明童話の中の赤」（『定本小川未明童話全集』第一五巻月報、講談社、昭和五三年一月）も同様である。

２１　滑川は、「一般化していうと、「北」は「北国」であり「北方」であり、自分のふるさとの地域であり、その「現実」が「北」によって象徴化されています」「南」は理想の国としても扱われるが、地方に対する都会でもあり、一面退廃の花の咲くところでもあった」などと、自説を展開。中村三春は、滑川の分析について、「滑川説は、人物・主題中心に著しく偏っている未明童話研究のなかで、唯一、テクスト全体の構築性を考慮に入れた卓見と思われる」（「未明童話の様式論　――『赤い蝋燭と人魚』を読み直す」日本児童文学学会編『研究＝日本の児童文学』第三巻、東京書籍、平成七年八月）と、高く評価している。

２２　同趣旨の発言は、安藤英男も、『日本漢詩百選』（大陸書房、昭和五二年一二月）で行っている。「明治時代は、いわゆる欧化主義が社会の各層に滲透し、西欧の文物が急速に移入された時代であるが、しかし漢詩については、廃されることなく、むしろ、いよいよ普及して、漢詩人口を広げていった」（二六四頁）

２３　この点について、三浦叶は「明治の漢詩壇を見る時、その詩運を隆昌にした一因に、日支両国の文人の交遊、殊に清国公使館員とわが国の詩人たちとの交遊の影響があったことを逸してはならない。詩の本場の清国の公使館員と多勢の詩人たちが、度々一堂に会して詩酒の会を開いたことは、詩人たちの喜び楽しんだところで、そのわが詩壇に与えた刺激ははなはだ大きなものがあったであろう」（『明治漢文学史』汲古書院、平成一〇年六月、三頁）と述べ、日本の詩壇に与えた清国公使館員の影響の大きさを指摘している。

２４　明治期における、漢詩壇の意外な活況は、他の同時代評でも伝えられている。「漢詩が辞藻の形式に於て殆ど未曽有の発達をなせるは実に此等の評家と共に衆のうなづく所、就中槐南寧斎を始とし星社一門の人々が各自の特色を具へ措辞の縦横自在なるは何人も認むる事実なるべし」（無署名「彙報　漢詩人」『早稲田文学』明治二八年九月）

２５　入谷仙介は、大正以後の漢詩の凋落について、「大正から昭和にかけて、もはや国民的基盤を喪失した漢詩は、幕末から明治初年生まれの生残りの老人を中心とした一部の愛好者の間に細々と存在を維持することになる」（『近代文学としての明治漢詩』研文出版、平成元年二月、八五頁）と、記述している。

２６　漢詩の衰微と日清戦争の勝利を関連付ける発言としては、次のようなものがある。神田喜一郎「明治も二十年あたりになると、漢文学の大家といわれた長老が、ぼつぼつ凋落し

はじめ、そこへ日清戦争によって、日本が清国に勝ったことは、これまで中国の文化に対して日本人がもっていた尊敬の念を雲散せしめ、日本の漢文学は、俄かに衰滅してしまうのである」（「日本の漢文学」『岩波講座　日本文学史』第一六巻、昭和三四年一月）／村山吉廣「明治二七・二八年（一八九四―五）における日清戦争の勝利は日本の国際的地位の向上をもたらした反面、朝鮮や中国との民族的対立を深め、勝利感によってこれらの諸国を蔑視する風潮を広めてしまった。新聞や雑誌で全国的支持を得ていた「漢詩欄」もこのころから次第に衰退に赴き、やがては廃止されるに至り、漢詩漢文作家も急速に減少することとなった」（『漢学者はいかに生きたか』大修館書店、平成一一年一二月、一二頁）

２７　永井荷風『下谷叢話』（春陽堂、大正一五年三月）、河上肇『自叙伝』第一巻（世界評論社、昭和二二年九月）参照。

２８　例えば、一海知義は、『漱石と河上肇』（藤原書店、平成八年一二月）で、両者の作詩技術には雲泥の差がある旨、次のように記している。「ただし、漢詩人としての夏目漱石と河上肇を、同じレベルで論ずることはできない。漢詩の作者として、技術の面から論ずれば、漱石の方が数等すぐれているといわねばならないだろう。漱石が、平仄はもちろんのこと、対句という高度な技巧を必要とする律詩に、多くのすぐれた作品をのこし、河上肇の遺作にはほとんど律詩がないということだけを較べても、技術面、あるいはその到達点での二人の差は、おのずから明らかであろう。また、詩中に用いられた典故の量と質、という点などからも、同じことがいえる」（三〇頁）

※なお、漢詩の読解に際しては、二松學舎大学の牧角悦子先生より、多大なご指南を賜った。記して、御礼申し上げたい。

二章　口語自由詩　――詩集『あの山越えて』

はじめに

詩集『あの山越えて』（尚栄堂、大正三年一月）は、小川未明が生涯に著した唯一の詩集である。未明を評するに際し、「小川未明の本質はハーンがそうだったように詩人なのです」（原子朗「ラフカディオ・ハーンと未明を語る」『ネバーランド』平成一八年七月）というような、未明の詩人性に着目した本質規定は少なくないが（注1）、彼は「本質」以前に、文字通り、詩を紡ぐ詩人であったのだ。

しかるに、未明の詩人としての活動は、従来、必ずしも注目されてきたとは言えない。例えば、『あの山越えて』の先行研究は、論文が一本（畠山兆子「未明文学における「詩」の意味　――『詩集あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に」『梅花女子大学文学部紀要』昭和六〇年一二月）、準論文が一本（若林敦「詩集『あの山越えて』　――小説との対応」『小川未明文学館館報』平成二一年五月）（注2）、エッセーが一本（紅野敏郎「エッセイ　未明の詩集『あの山越えて』」『未明ふる里の百年』小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月）の、計三点があるのみである。小埜裕二は、未明の童話作家としての側面に比して、「小説家・随想家としての側面は閑却されがちである」（「概説」『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』日外アソシエーツ、平成二八年六月）と指摘しているけれど、詩人としての側面も、事情は同様である。

そこで本章では、未明研究史の影のひとつとも言うべき、詩人・未明の行状に光を当てるべく、詩集『あの山越えて』の考察を試みたい。具体的には、まず、これまでの先行研究では存外無視されてきた、詩集にまつわる基本的な情報――書誌・同時代評・背景――の精査を行うとともに（一節）、本書の詩篇と、その基となった明治三〇・四〇年代の小説群に、どのような対応関係があるのか、両テキスト間の異同を比較検討する（二節）。また、詩「淋しい暮方の歌」の精読を通して、本書の内容的特質を押さえるとともに（三節）、本詩集が『新体詩抄』（明治一五年八月）以来の日本近代詩史において、どのような位置を占めているのか、文学史的検討を加える（四節）。

明治期の口語自由詩に着目することで、小川未明＝童話作家という単一的な図式を相対化する視座を得る――それが本稿の企図するところだ。

一、詩集『あの山越えて』　――書誌・同時代評・背景

詩を読解するに先立ち、本節では、詩集『あの山越えて』の書誌および同時代評を確認しておきたい。また、詩集が発行された大正三年一月前後の、未明の文壇的位置も見定めておく。

『あの山越えて』の詩は全部で六九篇。出所のわからない二篇を除き、初出はいずれも、明治三七～四五年の間に集中している（注3）。したがって本書は、大正三年の発行でありながら、実質、明治三〇・四〇年代の詩業であると見做せよう。

だが、この詩集の特異な点は、その初出が総じて、完成した「詩」ではなく、「小説」に内包されているという点である。つまり、小説の登場人物の吟唱する詩歌や、小説の地の文・会話文がそのまま――あるいは、幾分かの修正を加えられて――、「詩」として収録されているのである。若林敦が、「私たちが〈近代詩〉を読み解くしかたで近づくかぎり、これらの詩の意味はまるでちんぷんかんぷん」（「詩集『あの山越えて』――小説との対応」『小川未明文学館館報』平成二一年五月）と指摘するように、小説という文脈（コンテクスト）抜きに、詩を単体で理解しようとすることは、極めて困難と言ってよい（注4）。両者の関係については、次節で詳しく検討する。

同時代評はどうか。管見の範囲では、新聞広告が一点、雑誌の新刊紹介が二点、文芸評論家の新聞での論及が一点の、計四点が存在する。一様に、先行研究では言及されていない論評なので、以下、順を追って引用・検討したい。

まずは、新聞広告である。

> 未明氏は詩集はただこれ一つだけである。すべて初期時代の彼の『愁人』や『緑髪』を書いた頃の詩作であつて、悲しい日本海の色を思はせるやうな、荒れた裾野に淋しく行く白雲を思はせるやうな単純な、素朴な、一種の牧歌である。このきれぎれの歌の裡にもローマンテックの不思議な霊魂は流れてゐる。北方の自然を懐かしみ、北方の海の色を愛するやうな人々に、この詩集をすすめる。
>
> 新聞広告（『東京朝日新聞』大正三年一月二一日）

これはおそらく、発行元の尚栄堂が書いた広告文だろう。この短い広告文で、尚栄堂は、未明の詩集が本作しか存在しないこと、第一創作集『愁人』（隆文館、明治四〇年六月）や第二創作集『緑髪』（隆文館、明治四〇年一二月）を著した明治期の詩作であること、未明の郷土である「日本海」や「北方の自然」を喚起させる作風であることをアピールしている。

もっとも、紅野敏郎が指摘するように、「尚栄堂という本屋自体、他にどういう本を出しているのか、あまり馴染みのない名」（「エッセイ　未明の詩集『あの山越えて』」小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふる里の百年』小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月）ではある（注５）。

次は、雑誌の新刊紹介。どちらも、匿名のため、書き手は不明だ。

詩集である。可憐な童謡風のものもあれば、しほらしい里謡風のものもある。其の何れも諄朴なる作者の感情が極めて自然に流露して、一篇の詩となつたものである。作者は、巻頭に序して、「自然に対して偽りない自分の幼い詠嘆であり、また思慕である」と云つて居る。現下の文壇に於て最も詩人的要素に富んだ未明氏の端的なる感情の流露たる詩を我等の前に示されたことは、未明其の人を知る上に好個の鍵を与へられたやうな気がする。

「新刊紹介」（『新潮』大正三年二月）

小川未明氏の詩集である。未明氏は小説家といふよりも詩人である。曠野のやうに悲しい寂しい人生に立つて、その曠野のやうに悲しい寂しい人生を歌ふ詩人である。本集に収められたものは氏の旧作である。「けれど私には捨てがたい懐しみを覚える。自然に対して偽りない自分幼（ママ）い詠嘆であり、また思慕であれば」と著者は言つて居る。一句一章悉く作者の内心本然の叫びである。暗い淋しい恐ろしい風の吹くやうな夜、之を吟唱すればそぞろに涙の滲み出るを覚えるのであらう（ママ）。

「新刊紹介」（『文章世界』大正三年三月）

『新潮』と『文章世界』の書評に共通して存するのは、未明の詩人性を強調する文章である。すなわち、「現下の文壇に於て最も詩人的要素に富んだ未明氏」「未明氏は小説家といふよりも詩人である」といった評言がそれだ。

これは、未明の文学的感性の鋭さを褒賞する、ある種の修辞（レトリック）と考えてよかろう。同種の言い回しには、例えば、片山伸の「小川君は小児の心を失はない詩人である。私は君が益々本能的に生き、益々諄に生きることを切望するものの一人である」（「序」『白痴』文影堂書店、大正二年三月）といった人物評がある。

最後は、相馬御風の文芸評論の一節。彼は本書に関する、唯一の実名評者でもある。

此の間は本を送つてくだすつて、有難う。「あの山越えて」を読んで居ると、ずつと以前の君を思ひ出すと共に、僕は小供の頃の自分や越後の自然が思ひ出されて、たまらなく好い気持になる。そしてあの頃の君や僕と、今の君や僕を思ひ合せて、そのあまりに違ひ方の烈しいのに自分ながら驚かざるを得ないのだ。でもまだ君の方は僕などに比べると、多分に幼い頃からの心持を失はないで居る。

相馬御風「三月の作品を読んで　五作家に寄する手紙（四）」

（『読売新聞』大正三年三月一八日）

未明と御風は、新潟の高田中学から早稲田大学へともに進んだ、旧知の間柄である。互いに「竹馬の関係」（未明「無責任なる批評　生方・白石両君に」『読売新聞』大正二年九月三日）、「中学校に通つてゐた以来の友人」（御風「序」『底の社会へ』岡村書店、大正三年九月）と認め合うほど仲がよい（**注6**）。

その御風が、未明から献本を受けて、綴っているのが右記の一文である。御風は、本書を紐解くと、過去が懐古され、「たまらなく好い気持になる」一方、「あの頃の君や僕と、今の君や僕を思ひ合せて、そのあまりに違ひ方の烈しいのに自分ながら驚かざるを得ない」と、昔日との乖離を痛感している。

加えて未明もまた、本書の序文で「あの時分の思想である。旧作である。けれど私には捨てがたい懐しみを覚える。自然に対して偽りない自分の幼ない詠嘆であり、また思慕であれば。（中略）君（樋口斧太――引用者注）が絵をかくところから、あの時代を紀念（ママ）にするために、君の絵を入れて此の詩集を出すことにした」と書き記していたのであった。「あの頃」「あの時分」「あの時代」がいつなのか、具体的には明示されていないけれど、両者とも、『あの山越えて』の世界と、現在の自分たちの境遇に、ある種の断絶感を感じている様子が窺える。

では、その断絶とは何か。言うまでもなく、それは、詩が紡がれた「明治」と「大正」という時間の断絶であるだろうし、詩が表象する郷土「新潟」――この点については、三節で詳述する――と「東京」という距離の断絶でもあるだろう。そして未明は、この二つの断絶を経て、この時期、小説家としてのキャリアの転換を行っていた。すなわち、本書が発売された大正三年一月前後は、後から振り返った時、未明が社会主義思想・運動へ接近する起点とも言うべき時期であることが明らかなのである。

まず、文壇的な史実を述べるならば、大正二年六月、大杉栄は、雑誌『近代思想』の「小

説三編」で、未明の小説「嘘」を取り上げ、大杉が未明宅を訪れるなど、両者の間に交友が生まれた（注７）。荒畑寒村も、同年一二月の『近代思想』の書評で「嘘」へ言及。「「嘘」に至つては、その真実と深刻とは、驚くべき力で読者に迫り、その徹底的にして辛辣鋭利なる批評のメスは、直ちに入つて社会組織の根底を作せる不正邪悪を貫き抉つて居る。（中略）自分は此の「嘘」の一篇を以て、今年の文壇に於ける傑作の一だと云ふに躊躇しない」と激賞する。

さらに同時期、御風は「人間性の為めの戦ひ　『廃墟』を読んで」（『読売新聞』大正二年一一月三〇日）で、未明の新刊『廃墟』（新潮社、大正二年一〇月）を論じるのだが（注８）、この書評を機に、御風と大杉の間には、「個人革命」と「社会革命」の優劣を論じる論争が巻き起こった（注９）。未明は、突如周囲で勃発した論戦に対し、「思想上の貴族主義者と平民主義者との争ひが起りさうです」（「最近の感想」『読売新聞』大正三年一月一八日）と、鋭敏（ビビッド）に反応している。

思想的には、御風が、先に紹介した文芸評論「三月の作品を読んで　五作家に寄する手紙（四）」で、「虐げられた人々の生活を書くやうになつて居る君の心持にはたしかにこれ迄には見られなかつた一種の温かみが出て来たやうに思ふ。ダスタエフスキーやゴーリキーなどの胸に燃えて居た一種のヒユーマニタリアニズム（人情主義）が、仄ながらに君の攪き乱された胸の中にも芽を吹きかけて来たのではないか。僕はそこに最近の君の芸術の一新境到（ママ）を認めたい」と述べ、社会的弱者を注視するようになった、未明の変化を指摘している点にも、注目したい（注１０）。

事実、未明は「貧富の隔絶最も甚しき社会にあつて、吾等は死力を尽して働いてすら、尚ほ普通の生活をつづけて行くことが困難である。日々社会から肉体上にも、精神上にも、深い傷を受けつつある」（「我が実感より」『時事新報』大正三年一月五～七日）と語り、持つ者と持たざる者の絶望的な格差を嘆いている（注１１）。この辺りの『近代思想』グループとの接点および下層階級への憐情が、「小川未明なども早稲田派にして比較的早稲田派其の物に囚はれて居らぬ」（ＸＹＺ「文壇団体評論　早稲田派を論ず（二）」『新潮』大正三年二月）などと評される所以だろう（注１２）。

明治から大正へかけて、小川未明は断絶を意識せざるを得ないような思想的変貌を、間違いなく遂げていたのである。

二、テキストの異同　――初出（初収）と詩集の間

さて、先に述べた通り、大正期、発行された『あの山越えて』の詩篇には、その詩を内包する、明治三〇・四〇年代の小説群が存在するのであった（注13）。本節では、先行する初出紙・誌（初収本）と詩集の間にどのような差異があるのか、テキストの異同を確認したい。

この点を突いた先行研究としては、畠山兆子「未明文学における「詩」の意味 ――『詩集あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に」（『梅花女子大学文学部紀要』昭和六〇年一二月）がある。畠山は、論考で、小説と詩の対応関係を、Ⅰ型「行替えはあるが、小説の中にそのままの形で含まれているもの」、Ⅱ型「何箇所かに語句の訂正があるもの」、Ⅲ型「内容的にはほぼ同じだが、移動や省略、加筆などがあるもの」の三つに類型化し、各型の事例を表のかたちで引用・紹介した。この作業は、もちろん意義深い仕事なのだが、と同時に、何点か、その限界も指摘せざるを得ない。

一つは、各型の定義が曖昧な点である。例えば、Ⅱ型の「何箇所かに語句の訂正があるもの」と、Ⅲ型の「移動や省略、加筆などがあるもの」の違いは何なのか、今一つはっきりしない。二つは、報告されている事例が、一類型あたり、わずか一、二に過ぎない点である。これでは、全六九篇の中で、各類型が何割程度の比率を占めているのか、全容がわからない。三つは、表で使われている小説のテキストが、『定本小川未明小説全集』第一巻（講談社、昭和五四年四月）から引かれている点である。畠山は表を作成するにあたって、初出の新聞・雑誌はおろか、初収の単行本にもあたっていない可能性が高い。

そこで本稿では、上記の限界を止揚するべく、以下の対応を取ることにした。まず、詩の三類型の定義を、次の通り、明確化する。

Ⅰ型　初出（初収）の中に詩の原形をそのまま維持しているもの
Ⅱ型　基本的に原形を維持しているが、部分的に、加筆・修正が見られるもの
Ⅲ型　大幅な改稿が見られ、原形を維持していないもの

何のための定義かと言えば、要は、初出紙・誌（初収本）から詩集へ移行する際の変化の度合いを、測るためのクラス分けである。なお、いずれの場合も、句読点・括弧・三点リーダーといった言語文字以外の表記の変更や、誤植、改行、漢字の送り仮名の相違は修正点と見做さない。

次に、各類型が『あの山越えて』の中で占める比率を知るべく、詩の基となった、すべて

のテキストにあたる。ただし、詩「ひまわり」（一三）**（注14）**は、今に至るも典拠となった作品が定かでないので、調査対象は「ひまわり」を除く六八篇の初期形態だ。

最後に、テキストの調査に際しては、六八篇中、初出が判明している六三篇は初出紙・誌を、初出が判明しているが雑誌を入手できない四篇――「暗愁」（一八）「赤い旗」（二八）「お江戸は火事だ」（四四）「風景」（五三）――と、初出が不明な一篇――「春の夜」（二〇）――は初収の単行本にあたった。

さて、調査の結果は**表1**のようなものであった。Ⅰ型は、六八篇中、「寂寥」（六）「怨み」（一七）「春の夜」（二〇）「唄」（二三）「唄」（二四）「木樵」（二五）「人と犬」（二七）「古い絵を見て」（三七）「お江戸は火事だ」（四四）の九篇が当てはまる。全体に占めるⅠ型の割合は、一三％だ。

Ⅰ型は大きく三つのタイプに分かれる。一つは、小説に登場する詩歌が、そのまま詩集へ抜粋されているもの（六・二三・二四・二五・二七・三七）。二つは、小説の地の文・会話文の一節が詩集へ抜き書きされているもの（一七・二〇）。三つは、もともと単品の童謡として発表されたものだ（四四）。Ⅰ型は、元来、小説内部において、相対的に自律していた詩歌のテキストが目立つ。

Ⅱ型は、「西の空」（一）「冬」（二）「木枯」（三）「唄」（四）「曠野」（七）「闇」（八）「夜」（九）「淋しい暮方の歌」（一一）「白雲」（一五）「暗愁」（一八）「梨の花」（一九）「幻影」（二一）「街頭」（二二）「糸車」（二六）「夕暮」（三〇）「木立」（三二）「天気になれ」（三四）「童謡」（三五）「水鶏」（三六）「星」（三八）「菜種の盛り」（三九）「トツテンカン」（四二）「沙原」（四三）「童謡」（四五）「烏金」（四六）「景色」（五〇）「曩降る」（五一）「風景」（五三）「童謡」（五五）「子守唄」（五六）「海」（五八）「童謡」（六〇）「無題」（六二）「妙高山の裾野にて」（六三）「太鼓の音」（六六）「草笛の音」（六八）「あの男」（六九）の三七篇が当てはまる。全体に占めるⅡ型の割合は、五五％だ。

Ⅰ型と同様、Ⅱ型も、小説内の詩歌（一・二・三・四・九・一一・二一・三四・三五・三六・三九・五一・六二・六三）、地の文・会話文（七・八・一五・一八・一九・二二・二六・三〇・三二・三八・四二・四三・四六・五〇・五三・五八・六六・六八・六九）、童謡（四五・五五・五六・六〇）へ手を加えた、三つのタイプに分かれる。数的には、詩歌・童謡に対して、地の文・会話文を詩化したものが、やや多い。

では、小説と詩の間には、具体的にどのような変化が生じているのだろうか。詩歌→詩のタイプを、それぞれ比較してみよう。

森の腐れから、孵化した蚊が幾万となく合奏し始めた。（中略）而して彼等は歌つた。

「生温い夜、少し赤味と紫味を帯だ夜の色。この世界は皆、血色に関連する。赤錆の出た、平な、一枚の鉄板のやうな夜の世界、其の色は、断頭台の血に錆びた鉄の色に似てゐる。残酷な料理をする……吾等は、夜の色を賛美する。」

「森の暗き夜」（『新潮』明治四三年八月）

生温い夜。／赤味と紫味を帯んだ夜の色。／この世界が皆、血色に関連する。／赤錆の出た、／平な、一枚の鉄板のやうな／夜の世界。／其の色は、断頭台の血に錆びた／鉄の色に似てゐる。残酷な料理を／する……。／吾等は、夜の色を賛美する。

「夜」（『あの山越えて』尚栄堂、大正三年一月）

小説の引用箇所は、森の中の蚊の一群が、「酸漿（ほおずき）のやうに腫れ上るまで生血を吸ひたい」と感じ、一斉に高唱する場面である。

両者とも大筋に相違はないが、「少し赤味と紫味を帯だ」→「赤味と紫味を帯だ」といった副詞や、「この世界は皆」→「この世界が皆」といった助詞に、若干の違いがある点が確認できよう。また、あらかじめ断っておいた通り、変化としてはカウントしていないけれど、句読点の打ち方、送り仮名の振り方、三点リーダーの数も、微妙に異なる点は注意しておきたい。

Ⅲ型は、「白い棺」（五）「月琴」（一〇）「菅笛」（一二）「古巣」（一四）「水星」（一六）「赤い旗」（二八）「アイルランド」（二九）「午後の一時頃」（三一）「茶売る舗」（三三）「おもちや店」（四〇）「お母さん」（四一）「黒い鳥」（四七）「明日はお天気だ」（四八）「森」（四九）「さびしい町の光景」（五二）「汽車」（五四）「厭な夕焼」（五七）「上州の山」（五九）「黄色な雲」（六一）「解剖室」（六四）「ある夜」（六五）「帰途」（六七）の二二篇が当てはまる。全体に占める、Ⅲ型の割合は三二%だ。

Ⅰ・Ⅱ型と異なり、Ⅲ型は、そのすべてが、小説内の地の文・会話文を詩へ転化したものである。以下、具体的に見てみよう。

ああ、彼（か）れのアイルランドは灰色の空ではなくて、青う澄み渡つてゐる空であつたかと自分は始めて思つた。露けき星の光を見れば、彼（あ）の星はアイルランドの空に輝いてゐるのであらう。而して其の先の北の方が曾（かつ）て書物に聞いたグリーンランドであらう……

と思ふ。春の青い空を見れば、アイルランドが懐かしい！　自分も一度子供の身となつて、其のやうな緑色の湖水や、草の繁つてゐる牧場で夢見るやうな心地で長閑の日を暮らして見たいと思ふ。而して其の度に老宣教師の身の上を思ふのである。

「老宣教師」（『太陽』明治三九年四月）

アイルランドは、灰色の空でなくて、青う澄み渡つてゐる空であ／る。／露けき星の光を見れば、／あの星はアイルランドの空に輝いてゐるのであらうと思ふ。／春の青い空を見れば、／やはり、アイルランドが懐しい。／私に英語を教へてくれた、宣教師の産れた国。／なつかしい、アイルランドよ！

「アイルランド」（『あの山越えて』尚栄堂、大正三年一月）

小説の引用箇所は、かつて「英語学者」になることを夢見たものの、現在「一個の行商人と落ぶれてしまつた」主人公が、中学生時代敬慕した、老宣教師の母国・アイルランドへ、空想の翼を拡げる場面である。ちなみに、この「六十近い、赤ら顔の、背の高い」老宣教師は、未明が早稲田大学時代に私淑した、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）を想起させる人物だ。

前回と同じく、小説と詩の共通する部分に傍線を付したが、逆に言うと、傍線を付されていない箇所は、両者に直接対応する点がないテキストである。本書執筆時に、小説を参照しつつ、未明が書き加えたものであろう。

かくして、『あの山越えて』全六九篇――「ひまわり」を除く――の内訳は、Ⅰ型九篇（一三％）、Ⅱ型三七篇（五五％）、Ⅲ型二二篇（三二％）であった（図1）。また、詩の形態としては、小説内の詩歌が転用された作品が二〇篇（三〇％）、地の文・会話文を詩化した作品が四三篇（六三％）、もともと単品の童謡として発表された作品が五篇（七％）であった（図2）。

加えて、本稿で詳述する機会はなかったが、初収本にも隈なくあたったところ、Ⅰ型においては、総じて初出＝初収＝詩集の関係が確認できた（注15）。さらに、Ⅱ型においても、初収本であればテキストの差異がないもの、すなわち、初出＝初収＝詩集の関係を持つ作品が複数確認された。また依然、初出・初収≠詩集であっても、初出に比べ、初収の方が、詩集とのテキストの差異が減じる作品も少なくなかった（注16）。

してみれば、小川未明は本書の詩を織り成すにあたって、初出紙・誌ではなく、初収本を参照して、複写・改稿していたものと推量するのが、妥当であろう（注17）。

三、「淋しい暮方の歌」　――冬の叙景詩

次なる課題は、詩を具体的に読み解くことである。本節では、詩「淋しい暮方の歌」（一一）の精読を行い、もって、『あの山越えて』という詩集の持つ特性を考えたい。まずは、詩の全文を引用しておく。

寒い風が吹きや、枯葦の葉がそよそよと鳴り、／灰色の空が、暮れるとすれば、／里の小川のちよろちよろ水に、一つ星の影がさす。／しぎ一羽、飛んで行く／向うの山を見ると寂しさうだ。／野にも、森にも、雪ふりつもり、／夕飯を焚く麓の里には、薄青い煙が上る。／町の鳥屋へ獲物を売つて、／塩買うて、米買うて、我が家へ戻る。／嬶や、子供が嘸待つてゐやう。／犬の遠吠幽かに、／雪は凍つて石のやう。

この詩はもともと、小説「沈黙」（『東京日日新聞』明治三九年三月一九日）に内包されていたテキストであり、先の三区分で言うと、Ⅱ型にあてはまる。「小川のしよろしよろ水」が、「ちよろちよろ水」に変化した以外は、全文初出・初収の通り。したがって本作は、詩集発行の約八年前、明治三九年三月頃――未明弱冠二四歳頃――の作品と見做してよい一品だろう。

詩の原形は詩歌だった。「雪の降る晩方、一人の寂しさうな乞食が（中略）銭を請願為に」「厳然しい或る家の前」で詠じた、物乞いの歌である。だが、「琴の音」とともに奏でられたこの歌は、「貴族や、金持や、都の人達が曾て聞いたこともない素朴な歌」であり、この邸宅の婦人・富子をして、「覚えず涙を落」とさせるほど、感銘を与えた。結果、富子――ないし富子の家の者――は、「幾何かの銭」を乞食へ喜捨することになる。

詩の内容は、冬の叙景詩と言ってよかろう。それも都会ではない、田舎の冬である。各所に点綴されている、雪に関連する語句（「灰色の空」「野にも、森にも、雪ふりつもり」「雪は凍つて石のやう」）や、里・山・野・森といった字句（「里の小川」「麓の里」「向うの山」「野にも、森にも、雪ふりつもり」）からは、十分に近代化されていない、雪国のイメージが喚起される。

翻って、降雪は詩の世界だけではなかった。乞食が琴を掻き鳴らし、富子が感涙する小説の世界でも、雪は降りしきっているのであった。

飜々と、さも面白さうに軽く手を拍つて、接吻をしたり、囁いたり、狂ひつ、舞ひつ、

見上ぐれば茫々たる天の原から下界の方を志して真白な雪が漲り落ちるのである。（中略）ああ、若し雪に目があつたならば、どんな気持で下界の様を見下すであらう。雪は屹度物哀れに下界の夢の領土を見下すに相違ないと思ふ。自分（語り手――引用者注）も雪の身となつて暫時たりとも熱閙（ねっとう）の下界を清浄な塵のない天国から、清らかな、恵み深い心を以て眺めたいものである。

「沈黙」（『東京日日新聞』明治三九年三月一九日）

ただし、詩の世界と異なり、富子は地方の住人ではない。富子の夫――三年間のドイツ留学を命ぜられた哲学研究者――は、「今夜は雪も降るのに……横浜へ行つて未だ帰つて来ないのである」とあるから、富子夫婦は、大学にほど近い都市の住人であろう。雪が見下ろす「熱閙（ねっとう）の下界」という表現からも、その点は推量できる。

してみれば、「淋しい暮方の歌」とは、雪降る都会で奏でられた雪降る田舎の歌なのであり、都市住民たる富子は、この都市と地方の二重構造の中で、乞食の「素朴な歌」の持つある種の郷土性に感応し、落涙したと考えられる。

そして、筆者の考えでは、本詩に象徴されるこのような雪国の郷土性の中にこそ、詩集『あの山越えて』の特徴はある。一節で紹介した通り、未明と同郷の相馬御風は、本詩集を捉え、「「あの山越えて」を読んで居ると、ずつと以前の君を思ひ出すと共に、僕は小供の頃の自分や越後の自然が思ひ出されて、たまらなく好い気持になる」（「三月の作品を読んで　五作家に寄する手紙（四）」『読売新聞』大正三年三月一八日）と感嘆していたのであった。

何故、「小供の頃の自分や越後の自然が思ひ出され」るのかと言えば、それは未明の詩句に、鋭く郷里を喚起させる力が宿っているからに他ならない。例えば、未明が詩の二行目で使った「灰色の空」という言葉は、御風にとって、越後の「陰鬱な自然」以外の何物でもなかった。

北国――わけても越後の自然は、驚くべく単調な、そして陰鬱な自然である。春は花が咲き、夏は空晴れて野は緑に、秋は他の国々と同じく紅葉を以て鮮やかに色どられるには違ひないが、さう云ふ色彩の鮮明な期間は、一年のうちでもほんの僅かの間で半年以上は単調な灰色を以て蔽われた自然である。（中略）毎年十月から翌年の四月までの間は、殆んど毎日のやうに重たい、灰色の空が北越の平野を蔽ふ。

相馬御風「小川未明論」（『早稲田文学』明治四五年一月）

乞食の歌う「灰色の空」が、どこの土地の空であるか、詩や小説には一言も明示されていない。しかし、にもかかわらず、それが豪雪をもたらす「越後の空」であること――少なくとも、越後を基底にしていること――は、御風にとって自明の事実なのであった。

もちろん、このような北越を想起させる詩は、「淋しい暮方の歌」に留まらない。詩集『あの山越えて』には、明治三〇・四〇年代の初期小説において、二〇代の未明が繰り返し描出していた越後の自然が、存分に表象されていた。

例えば、小説「寂寥」（『文章世界』明治四四年一月）は、越後を思わせる雪国の猟師・瀧吉が主人公の三人称小説だけれど、この小説から編み出された三篇の詩――「寂寥」（六）「曠野」（七）「月琴」（一〇）――には、いずれも「雪」「白」という字句が多用されている。あるいは、「妙高山の裾野にて」（六三）では、「妙高山」という越後のローカルな地名が、そのまま詩材化されている。詩集発売元の尚栄堂が、「北方の自然を懐かしみ、北方の海の色を愛するやうな人々に、この詩集をすすめる」（『東京朝日新聞』大正三年一月二一日）といった、詩集と「北方の自然」を直結させる広告文をためらいもなく打つことができたのは、おそらくそのためだ。

そして、一節で紹介した序文や書評に露見している通り、大正三年、三十路を過ぎた東京暮らしの小川未明と相馬御風は、その郷土性に、二律背反的な懐旧と断絶を感じていたに違いないのである。

四、日本近代詩史上の位置　――口語自由詩運動の傍系

さて、ここまで筆者は、詩集『あの山越えて』（尚栄堂、大正三年一月）の書誌情報・改稿過程・内容的特質について、論を展開してきたわけだが、本節ではもう少し俯瞰したアプローチを採用したい。すなわち、『新体詩抄』（明治一五年八月）以来の日本近代詩史において、本詩集がどのような位置を占めているのか、歴史の中に布置してみたいのである。

そこでご覧いただきたいのは**表2**だ。この表は、本書の詩の文体と定型の有無を分別した一覧表である。一瞥してわかる通り、本書の詩は口語で書かれたものが圧倒的に多く、純然たる文語詩は、「木樵」（二五）以外、見当たらない。詩の形式は、一部に七五調や都々逸（どどいつ）風（七七七五）の音数律が混在しているものの、定型のない詩が大半である。つまり、本書の六九の詩篇は、その大部分が「口語自由詩」であると判断できよう。

では、未明の詩に口語自由詩が多いのは、一体何故だろうか。それは、本書の詩（の基となったテキスト）が初出掲載された、明治四〇年前後の詩壇の動向と無縁ではない。この時

期、詩壇では、小説における自然主義の流行を背景として、文語定型詩から口語自由詩への移行を促す運動が、賛否入り交じりながらも、着実に進行していた(注18)。川路柳虹「塵溜(はきだめ)」(『詩人』明治四〇年九月)は、本邦初の口語自由詩として、あまりにも有名であるが(注19)、相馬御風「痩犬」(『早稲田文学』明治四一年五月)や三木露風「暗い扉」(同上)等、雅語や古語、あるいは韻律に依らない作詩の試みは、「塵溜」以外にも、複数展開されていたのである(注20)。未明の詩の多くが、文語ではなく口語、定型ではなく非定型で書かれているのは、かかる口語自由詩運動の趨勢が影響した結果と見て間違いない。

とりわけ、人間関係的には、相馬御風の影響は大なるものがあったのではないかと、筆者は考えている。先にも記した通り、未明と御風は、新潟・高田中学から早稲田大学へともに進んだ同郷・同窓の親友だが、他でもない、この御風は、明治期口語自由詩運動における、もっとも先鋭的な論客(オピニオンリーダー)のひとりでもあったからである。

明治四〇年三月、三木露風・野口雨情・人見東明ら早大閥の詩人と、新詩の運動体である早稲田詩社を結成した御風は、以後、名うての詩論家として、旧来の文語定型詩を鋭く批判する立場に立つ。具体的な発言を見てみよう。

> 現今の新体詩は、いかなる弁護を以てするとも、その根本が形式的であると云ふ一事は、どうしても争ふ事が出来ない。或は人生観に、或は新詩風の態度に、その他さまざまなる新主張を公言する人があつても、いざ詩作となると、凡て旧来の因襲に囚はれて、形式を先にして居る事は、事実である。(中略)わが新体詩をして真に価値ある文芸の一部面たらしめやうとするならば、今の所謂新体詩を根本から破壊してかからねばなるまい。
>
> 相馬御風「詩界の根本的革新」(『早稲田文学』明治四一年三月)

「旧来の因襲に囚はれ」た新体詩を「根本から破壊」せよ――本論の大意はこれだ。そして、この目標を実現するために、御風は、作詩における①口語の使用、②詩調(リズム)の革新、③行・連の自由の必要性を説いている(注21)。

この他にも、御風は「自ら欺ける詩界」(『早稲田文学』明治四一年二月)、「『有明集』を読む」(『早稲田文学』明治四一年三月)、「蒲原有明氏の新詩形観に就て」(『新潮』明治四一年一〇月)等で、詩界の変革の重要性を繰り返し論じ、口語自由詩運動の中核を担った。御風の詩論や実作は、一部の論者から手厳しい批判に晒されたものの(注22)、三木露風が

「口語詩の勃興は詩界現今のメンカアレントとなつた。当初に於て受けた攻撃と非難と嘲笑とは遂に此新しい発展を妨げることが出来なかつた」（「口語詩の現状に就て」『ハガキ文学』明治四二年三月）と自負するように、文語定型詩から口語自由詩への趨向そのものは、誰にも逆らえない、不可逆な流れとなる。

乙骨明夫が「口語詩に関する賛否の論争は明治四十一年で終った感があった」（「口語自由詩論その他」『日本近代詩論の研究』角川書店、昭和四七年三月）、佐藤伸宏が「明治四十二年の時点で口語自由詩が詩壇における主流の形式となるに至るのである」（『詩の在りか 口語自由詩をめぐる問い』笠間書院、平成二三年三月、三四頁）と、それぞれ指摘している通りだ。

さて、このような運動の立役者である御風に対し、「竹馬の関係」（「無責任なる批評　生方・白石両君に」『読売新聞』大正二年九月三日）を自任する未明が何らかの影響を受けていたことは、想像に難くない。

例えば、未明は同時期、自らも口語詩を著す他、雑誌『秀才文壇』で、読者が投稿した口語詩に対する選評を開始していた。河井酔茗（すいめい）は、この試みについて、「口語詩の興るべき機運に向いたと見えて、方々で口語詩が試みられる、本誌でも未明君が選者となつて、諸君の口語詩を見やうと云ふ、誠に好い企である」（「口語詩是非」『秀才文壇』明治四一年八月）と誌面にて報告している。

また、未明自身、三十一（みそひと）文字の韻律を持つ短歌について、「併し現代に於て、若し思想本位、内容本位として考へたならば、自然に短歌の形式はくづれて行かなければならないと思ふ。其れが生活中心の文学である限りは、其時代に適応した形をとらなければならない。時勢と思想とが推移して尚ほフォームの動かぬ文学は既にクラシックではあるまいか」（「現代四歌人に対する批評」『創作』明治四三年一〇月）と、その牢固な形式性を批判してもいた。

だが、かかる未明の取り組みは、極めて同時代的ではあっても、詩壇を牽引する性質のものではなく、後世に名を伝えているとも言い難い。御風が日本の口語自由詩運動の先駆者（フロントランナー）であるとするなら、未明は同運動の随伴者的な役割を担っていたと評価できよう。

以上見てきた通り、詩集『あの山越えて』は、一部に時代的制約と言うべき、文語や定型が混在しているものの、基本的には口語と非定型からなる、口語自由詩の詩集であった。そして、これらの詩篇が生まれるに至った背景には、明治四〇年前後に詩壇を席巻した口語自由詩運動や、この運動で第一線を担っていた、親友・相馬御風の影響があると、強く推定さ

れる。御風や柳虹と異なり、未明は詩壇をリードする詩論や実作を残すことはなかった――したがって、文学史にも名を留めていない――けれど、明治期口語自由詩運動に随伴する脇役として、ひっそりと、本書を産み落としていたのである。

相馬御風や川路柳虹の業績を、日本の口語自由詩運動の直系とすれば、小川未明の詩集『あの山越えて』はその傍系として、日本近代詩史の中に位置付けることができるだろう。

小括

以上、本章では、小川未明が生涯に著した唯一の詩集である、『あの山越えて』（尚栄堂、大正三年一月）の検証を行った。未明＝童話作家という通念が先行してか、これまで本詩集の研究は、必ずしも進展しているとは言い難い状況にあったからである。

検証の結果、明らかになったのは、本書の六九の詩篇と明治三〇・四〇年代に書かれた初出（初収）の小説（一部、童謡を含む）との間には、無改稿（Ⅰ型）・部分改稿（Ⅱ型）・全面改稿（Ⅲ型）の三つのテキスト改変の型が存すること、本書の詩句には、未明の郷土である越後（新潟）の自然が存分に表象されていること、日本近代詩史上、本書は明治期口語自由詩運動の傍系に位置付けられ得るということである。マイナーな版元ながら、版は最低、五版を重ねており、売れ行きは上々だったようだ。

現在、小平霊園に眠る未明の墓碑には「詩筆百篇憂国情」との碑文が、郷里・春日山の父母の慰霊碑には「故山長（とこし）へに父母を埋（うず）めて我が詩魂日本海の波とならん」との碑文が、それぞれ自署で刻まれている。童話を主戦場とする散文作家でありながら、自身の文学活動、ないしは文学精神を、「詩筆」や「詩魂」と形容している点に、詩という表現形式への一方ならぬ愛念が看取されよう（**注２３**）。

そして実際、漢詩や口語自由詩を紡ぐ詩人として、小川未明は明治年間を生きていたのである。

注

1　例えば、戦後、未明が芸術院会員へ選ばれた際の新聞記事には、次のような記述がある。「初めのうちの夢見るようなロマンティシズムから、徐々に社会主義的な正義感が表面に現れて来たが、昭和十年ごろになると更に生活童話とでもいえるリアリズムへ移っていった。しかしその底に流れているものは常に温いヒューマニズムであり、その意味では本質的

には詩人である」（「時の人　小川未明」『毎日新聞』昭和二八年一一月一五日）

2　若林敦の文章は、小川未明文学館の館報へ寄稿されたもので、「それにしても、未明の詩には、これまでお目にかかったことがないよなぁ…」「こりゃ、小唄だよね」等、文体は一部エッセー風である。が、収録されている詩と小説の対応リストには、十分な学術的価値が認められるため、本稿では「準論文」と区分した。

3　初出紙・誌の判別に関しては、**注2**の若林敦のリストに負うところが大きい。謝して、お断りしておきたい。ただし、若林が「未詳」としている作品の初出が、その後刊行された、小埜裕二編『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（日外アソシエーツ、平成二八年六月）で判明した例も、三件あった。

4　このような読み手側の制約にもかかわらず、『あの山越えて』は順調に版を重ねていた。畠山兆子は、大正七年一〇月時点で、本書の奥付が五版へ到達していたとし、「発行部数にもよるが、毎年増刷されており、結構売れていたと予想される」（「未明文学における「詩」の意味　――『詩集あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に」『梅花女子大学文学部紀要』昭和六〇年一二月）と指摘している。

5　ちなみに、『あの山越えて』と一緒に掲載されている尚栄堂の新聞広告には、吉田俊男『英語前置詞用法正解』、小林鶯里『現代紀行文』、高野弦月『美文の花』『若き人々の美文的書翰文』『名家名文』がある。いずれも実際、尚栄堂から出版されている書物である。

6　未明の著書『北国の鴉より』（岡村盛花堂、大正元年一一月）の巻頭には、「少年時代よりの学友相馬昌治君に献ず」との献辞があり、この一文からも、二人の親交の深さは窺い知れる。中村星湖は、「殊に最近に於て、混沌たる君の思想に灯を掲げた人は相馬君であらうと思ふ。よく喧嘩もするやうであるが、これ位ゐ美くしい友情は我文壇稀れに見る所である」（中村星湖・岩野泡鳴・徳田秋声他「小川未明論」『新潮』大正三年一〇月）と述べ、両者に介在する「美くしい友情」を指摘している。

7　未明と大杉の接点については、五章一節や六章一節で論じた。

8　御風は『廃墟』について、「人間性の為めの新しい戦ひを常に吾々に向つて求めて居る、苦しい訴への声」「物質力の暴圧力の為に極度に虐げられつつある哀な人間の叫び声」が聞こえる点が、「私の心を動かす所以」であると、高評価を下している。また、青頭巾は、「未明の『廃墟』」（『新潮』大正三年一月）で、「『廃墟』一篇は暗鬱な情調で貫かれてゐる。十一篇のどの篇を見ても、病気とか生活難とか此生存の苦痛を描いたものならぬは無い」「どの篇にも、社会組織の不完全を憤る弱者の叫びといふやうなところがある。彼を現実に触れ

てゐないなどとは今は何人も云ひはしまい」と語り、本書の基底には「社会組織の不完全を憤る弱者の叫び」が流露している旨、指摘している。

9　御風と大杉の論争については、六章一節で論じた。

10　凌宵花「小川未明氏の平生」（『文章世界』大正三年三月）によれば、当時未明は、「下層社会の人々の生活」を観察するべく、「神楽坂や江戸川、山吹町の貧民窟」を「毎夜のやうに」散歩したり、「労働者や、若くは卑しい女などから、人生の何物かの刺激を受けやうと思つて」、浅草の「バア」へ出入りしていたらしい。未明は「彼等の言葉こそ本当に人生の真を語つて居ると思ふ」と主張していたそうだ。

11　やや時代は下るが、この嘆きについて、中村狐月は「未明氏の創作が、常に新時代の傾向を有つて描かれるにかかはらず、其思想の主張に他を実行に導く権威のないのは、未明氏の其ういふことは、単に窮迫せるもの、貧しいものが今日の如な状態に在るのは適当に待遇されて居ないと言ふのに止つて居るからである。其等の人々の待遇せられて居る状態が正しくないならば、如何いふ待遇にしなければならぬか、其れを実行するのには如何に為なければならぬといふことは、一度も明かにされて居ない」（「小川未明論」『文章世界』大正四年九月）と述べ、貧困を批判しても、それを解決する具体的なビジョンを示すことのできない未明の限界を指摘している。

12　この時期、未明は、自身がいわゆる「早稲田派」と見做されることについて、「党を作り、派を作つてゐる如く言はれるのは迷惑である」（「無責任なる批評　生方・白石両君に」『読売新聞』大正二年九月三日）と述べ、露骨に迷惑がっている。また、文壇内の学閥についても、「由来文芸上に党とか派とかが出来るものとしたなら、それは早稲田とか赤門とか三田とかいふ学校出身で分けられるべきものでない。寧ろ各自の芸術に対する主義の上からであらう」と語り、批判的な姿勢を示している。

13　本稿における「小説」の分類は、原則として、小埜裕二の書誌本『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（日外アソシエーツ、平成二八年六月）の「作品ジャンル」欄に準じる。

14　「ひまわり」以下、括弧内の詩の番号は、詩集掲載順に付した。適宜、**表1**を参照されたい。

15　本文で断っている通り、「春の夜」（二〇）と「お江戸は火事だ」（四四）に関しては、初出紙・誌が不明・入手不能だったため、初めから初収本にあたっている。

16　「夜」（九）「菅笛」（一二）「童謡」（三五）「星」（三八）「森」（四九）等。

17　初収本を参照したとする根拠には、戦後の新聞記事「書斎めぐり　作家・小川未明氏」

（『毎日新聞』昭和二八年一一月二三日）の存在もある。この記事によると、未明は昔から割合すぐ、書籍を捨てるタイプだったようだ（「小川さんはむかしから本をたくわえない習慣だという話なので後の本だなに目をやりながらそれに触れると「ここにある本はほとんど寄贈されたものばかりで今でも読むとすぐ処分するよ」という」）。とすると、未明が既に単行本化された初出紙・誌を、いつまでも手元に残しておいた可能性は低いと考えられよう。

１８　とは言え、文語定型詩から口語自由詩への移行は、そう生易しいものではなかった。この点について、大岡信は「つまり、明治四十年の川路柳虹による口語詩試作からはじまった「口語自由詩」の歴史は、文語から口語への転換と、韻律の自由化という二つの手続きを一挙になしとげてしまったのであり、用語自体の変質という深刻な課題までは背負う必要のなかった西欧の自由律詩歌の場合よりも、はるかに困難な課題を背負いこんでしまったのだ」（『蕩児の家系』思潮社、昭和四四年一二月、一七頁）と述べ、文語→口語、定型→非定型という二つの作業を同時に成し遂げなければならなかった、日本の口語自由詩運動の困難を指摘している。なお当時は、「口語詩」の他、「自由詩」「散文詩」といった呼称も併せて使用されていた。

１９　ところで、**注１８**とも関連するが、「塵溜」には、依然旧来の定型詩の律格が残存していた。関良一は、本詩の形式について、「実はなお五七・七五律に依存しており、かなり定型詩的」（「文語詩と口語詩」『国文学　解釈と教材の研究』昭和四五年九月）であると分析している。時代的な限界という他ない。

２０　例えば、本文記載の早稲田詩社や、詩草社（明治四〇年三月～）、自由詩社（明治四二年五月～）といった結社に集った、若き詩人たちの活動が挙げられる。池川敬司「文語定型詩から口語自由詩へ」（和田博文編『近現代詩を学ぶ人のために』世界思想社、平成一〇年四月）参照。

２１　この主張について、羽生康二は「相馬御風の三つの要求は、口語を使い、外的な制約から自由なリズムにより、行の長さ一連中の行数もまったく自由な詩、つまり完全な口語自由詩を明確な形で要求したものだった。川路柳虹の「塵溜」が書かれてから半年ほどおくれて、口語自由詩の主張がはっきりした理論として示されたのである」（『口語自由詩の形成』雄山閣、昭和六四年一月、八二頁）と述べ、口語自由詩運動に果たした本論の役割を高く評価している。

２２　例えば、岩野泡鳴は、御風の詩論について、「氏が踏襲する抱月氏の口語説の如きは、殆ど門外漢的空論」（「文界私議」『読売新聞』明治四一年三月一五日）であると批判してい

る。また、ＲＴＯ（折竹蓼峰）は、「御風氏の云ふが如き絶対的の自由などと云ふものは到底存在し得べからざることで、若し強ひて絶対的の自由を求めんとするならばこれ一種の自殺である。（中略）絶対的自由は御風氏の目的であらうが、其は根本から誤つて居ると云はねばならぬ」（「解放せられたる詩歌」『帝国文学』明治四一年四月）と述べ、詩の形式を破壊せんとする御風の主張を徹底批判した。さらにＲＴＯは、御風の実作「痩犬」に対しても、「吾等をして忌憚なく語らしむるならばこれ詩歌たり得べからざるものである。某人はこれを評して「詩歌を侮辱せんが為めに作られたる」者であると云ふ。不幸にして此評言は一半の真理を語れるものではなからうか」（「新しき詩歌」『帝国文学』明治四一年六月）と語り、全面否定の立場を取っている。

２３　未明の詩への愛念は、早くも高田中学在学中には、芽生えていたようである。明治期の「自伝」（『早稲田文学』明治四五年一月）には、彼が中学時代から「詩人」を志していた由、振り返る記述がある。「此の時分父は、高田の家を引払つて、春日山に崇拝する謙信の神社を建て其処に移つた。父は、私をして自分の後を継がせやうと思つてゐたが、私は、詩人たらんとした。もつと、人生の為めに戦ひ、尽すやうなヒーローたらんとした」

表1　詩集と初出・初収の対応表

／	『あの山越えて』	元のテキスト	初出	初出との関係	初収	初収との関係	詩の原形
1	西の空	水車場	『早稲田文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
2	冬	牧羊者	『東京日日新聞』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
3	木枯	水車場	『早稲田文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
4	唄	幽霊船	『新古文林』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
5	白い棺	柩	『早稲田文学』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
6	寂寥	寂寥	『文章世界』	Ⅰ	『北国の鴉より』	Ⅰ	詩歌
7	曠野	寂寥	『文章世界』	Ⅱ	『北国の鴉より』	Ⅱ	地の文・会話文
8	闇	闇の歩み	『新潮』	Ⅱ	『闇』	Ⅱ	地の文・会話文
9	夜	※森の暗き夜	『新潮』	Ⅱ	『闇』	Ⅱ	詩歌
10	月琴	寂寥	『文章世界』	Ⅲ	『北国の鴉より』	Ⅲ	地の文・会話文
11	淋しい暮方の歌	沈黙	『東京日日新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
12	菅笛	鉄片	『新声』	Ⅲ	『北国の鴉より』	Ⅲ	地の文・会話文
13	ひまわり	（未詳）					
14	古巣	燕	『新潮』	Ⅲ	『北国の鴉より』	Ⅲ	地の文・会話文
15	白雲	雲の姿	『中央公論』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話文
16	水星	空想家	『早稲田文学』	Ⅲ	『愁人』	Ⅲ	地の文・会話文
17	怨み	暗愁	『ハガキ文学』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	地の文・会話文
18	暗愁	煎餅売	『女子文芸』	（未見）	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話文
19	梨の花	暗愁	『ハガキ文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話文
20	春の夜	寂しみ	（未詳）		『愁人』	Ⅰ	地の文・会話文
21	幻影	森の妖姫	『東京日日新聞』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
22	街頭	出稼人	『趣味』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話文
23	唄	人生	『早稲田文学』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	詩歌
24	唄	暗愁	『ハガキ文学』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	詩歌
25	木樵	叔母の家	『むさしの』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	詩歌
26	糸車	盲目	『早稲田学報』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文
27	人と犬	柩	『早稲田文学』	Ⅰ	『緑髪』	Ⅰ	詩歌
28	赤い旗	歌の怨	『新古文林』	（未見）	『愁人』	Ⅲ	地の文・会話文
29	アイルランド	老宣教師	『太陽』	Ⅲ	『愁人』	Ⅲ	地の文・会話文
30	夕暮	老婆	『新声』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話文
31	午後の一時頃	霰に霙	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
32	木立	笛の声	『新古文林』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文
33	茶売る舗	漂浪児	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
34	天気になれ	漂浪児	『新小説』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
35	童謡	憧がれ	『新潮』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
36	水鶏	水車場	『早稲田文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
37	古い絵を見て	盲目	『早稲田学報』	Ⅰ	『緑髪』	Ⅰ	詩歌
38	星	深林	『趣味』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文
39	菜種の盛り	深林	『趣味』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
40	おもちや店	長二	『読売新聞』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
41	お母さん	遠き響	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
42	トツテンカン	遠き響	『新小説』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文
43	沙原	日触	『早稲田文学』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	地の文・会話文
44	お江戸は火事だ	お江戸は火事だ	『秀才文壇』	（未見）	『赤い船』	Ⅰ	童謡（単品）
45	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅰ	童謡（単品）
46	烏金	烏金	『趣味』	Ⅱ	『闇』	Ⅱ	地の文・会話文
47	黒い鳥	不思議な鳥	『趣味』	Ⅲ	『闇』	Ⅲ	地の文・会話文
48	明日はお天気だ	遠き響	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
49	森	森の暗き夜	『新潮』	Ⅲ	『闇』	Ⅲ	地の文・会話文
50	景色	森の暗き夜	『新潮』	Ⅱ	『闇』	Ⅰ	地の文・会話文
51	霙降る	雪来る前	『新小説』	Ⅱ	『闇』	Ⅰ	詩歌
52	さびしい町の光景	烏金	『趣味』	Ⅲ	『闇』	Ⅲ	地の文・会話文
53	風景	悪魔	『新文芸』	（未見）	『闇』	Ⅱ	地の文・会話文
54	汽車	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話文
55	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅰ	童謡（単品）
56	童謡	子守唄	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅱ	童謡（単品）
57	厭な夕焼	酒肆	『新小説』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話文
58	海	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	地の文・会話文
59	上州の山	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話文
60	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅱ	童謡（単品）
61	黄色な雲	北の冬	『新小説』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話文
62	無題	捕はれ人	『文章世界』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	詩歌
63	妙高山の裾野にて	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	詩歌
64	解剖室	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話文
65	ある夜	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話文
66	太鼓の音	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文
67	帰途	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話文
68	草笛の音	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文
69	あの男	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話文

※詩「夜」(9)の基となった小説は、「夜の喜び」(『早稲田文学』明治44年9月)であると、若林敦のリストには記載されているが、正しくは「森の暗き夜」(『新潮』明治43年8月)であることが、今回の調査で判明した。

図１　Ⅰ～Ⅲ型の比率

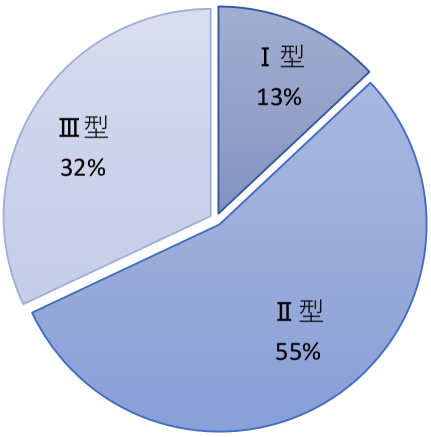


図２　詩の原形の内訳

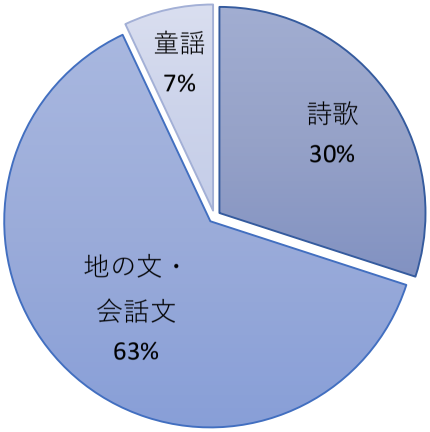


表2　詩の文体と定型の有無

	『あの山越えて』	詩の文体	定型の有無
1	西の空	口語	有（7×n＋5）
2	冬	口語	無
3	木枯	口語	無
4	唄	口語	無
5	白い棺	口語	無
6	寂寥	口語	有（7・7・7・5）
7	曠野	口語	無
8	闇	口語	無
9	夜	口語	無
10	月琴	口語	無
11	淋しい暮方の歌	口語	無
12	菅笛	口語	無
13	ひまわり	口語	無
14	古巣	口語	無
15	白雲	口語	無
16	水星	口語	無
17	怨み	口語	無
18	暗愁	口語	無
19	梨の花	口語	無
20	春の夜	口語	無
21	幻影	口語	無
22	街頭	口語	無
23	唄	口語	無
24	唄	口語	有（7・7・7・5）
25	木樵	文語	有（七五調）
26	糸車	口語	無
27	人と犬	口語	無
28	赤い旗	口語	無
29	アイルランド	口語	無
30	夕暮	口語	無
31	午後の一時頃	口語	無
32	木立	口語	無
33	茶売る舗	口語	無
34	天気になれ	口語	無
35	童謡	口語	無
36	水鶏	口語	有（7×n＋5）
37	古い絵を見て	口語	有（7・7・7・5）
38	星	口語	無
39	菜種の盛り	口語	有（7・7・7・5）
40	おもちや店	口語	無
41	お母さん	口語	無
42	トツテンカン	口語	無
43	沙原	口語	無
44	お江戸は火事だ	口語	有（一部、7・7・7・5＋七五調）
45	童謡	口語	無
46	烏金	口語	無
47	黒い鳥	口語	無
48	明日はお天気だ	口語	無
49	森	口語	無
50	景色	口語	無
51	霙降る	口語	有（7・7・7・5）
52	さびしい町の光景	口語	無
53	風景	口語	無
54	汽車	口語	無
55	童謡	口語	無
56	童謡	口語	有（七五調）
57	厭な夕焼	口語	無
58	海	口語	無
59	上州の山	口語	無
60	童謡	口語	無
61	黄色な雲	口語	無
62	無題	口語	有（一部、七五調）
63	妙高山の裾野にて	口語	無
64	解剖室	口語	無
65	ある夜	口語	無
66	太鼓の音	口語	無
67	帰途	口語	無
68	草笛の音	口語	無
69	あの男	口語	無

Ⅱ部　社会主義　――アナキズムと共産主義

三章　ユートピアンの夢　――童話「時計のない村」

はじめに

小川未明「時計のない村」は、大正一〇年一月、雑誌『婦人公論』へ掲載された童話である。小埜裕二編『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、平成二四年一二月、四二頁）によれば、本作の概要は次の通りである。

> 時計のない村に、金持ちが時計を買ってきた。もう一人の金持ちも時計を買ってきた。甲の時計と乙の時計が三十分違っていて、どちらが正しいか争いになる。やがて甲の時計がこわれ（ママ）、乙の時計も壊れる。村にまた平和が戻った。

初出後は、同年五月発行の童話集『赤い蝋燭と人魚』（天佑社）へ初収されたのを皮切りに、数多くのアンソロジーへ採録されている。約一二〇〇編ある未明童話――忘れられたものも多い――の中にあって、人気作の部類に数えられる作品と言えよう（注1）。

収録本の中で、とりわけ興味深いのは、『小川未明全集第二巻　時計のない村』（フタバ書院成光館、昭和一八年九月）である。これは大東亜戦争中、二巻だけ刊行された「幻の全集」（注2）の内の一冊で、「時計のない村」が巻名に選ばれた唯一の単行本だ。編者の「あとがき」には、「『時計のない村』といふお話も、面白いたとへ話になつてゐますが、これもその時代の空気のよく出てゐるもので、人間がだいじな心に頼らずに、機械に頼つたために起るばかばかしいをかしみを書かれたもの」と解説が付されている。また戦後には、本作と内容が酷似した、童話「正しい時計」（『五年の学習』昭和二八年六月）が発表されている。おそらく抄録だろう（注3）。本作に関しては、未明自身も自負するところがあったに違いない。

しかるに、「時計のない村」の先行研究は、驚くべきほど少ない。続橋達雄『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）で、一節を設けて論じられているのが、ほとんどすべてである。だが、後で詳しく述べる通り、この続橋論には、「時計のない村」本文のテキスト分析が一切ないという、致命的欠陥がある。続橋は、古代中国の「撃壌歌」の世界観との類似という切り口から、他の未明作品を列挙、内容紹介して行くのだけれど、全体として印

象批評の風が否めない。筆者は、印象批評ではなく、テキストや同時代の一次資料に基づいた、実証的な分析を試みたい。

本章は「時計のない村」の新たな読みの可能性を開くためにあるが、その論述の一切は、作品末の解釈に帰着する。つまり、村人は何故時計を捨てたのか、あるいは、未明は何故村人に時計を捨てさせたのかという問いだ。以下、本作が発表された、大正一〇年一月前後の未明の社会主義思想・童話観や、本作および関連する他童話の「時計」表象に着目しながら、この点を明らかにしたい。

村人が時計を捨てる行為は、近代への決別であり、前近代への回帰であった。そしてその回帰は、小川未明の夢以外の何物でもなかった――というのが、さしあたり、本論の結論である。

一、革命待望 ――大正一〇年一月前後の未明

先述の通り、童話「時計のない村」が『婦人公論』へ掲載されたのは、大正一〇年一月である。本節では、作品解釈の前段階として、大正一〇年一月前後の小川未明の文壇上の位置および思想傾向を見定めたい。

大正年間は、一般に、未明が社会主義思想・運動へ接近した時期として知られている。例えば、山室静「小川未明論」(『現代日本文学全集』第七〇巻、筑摩書房、昭和三二年二月)は、未明の作家人生を新浪漫主義時代・社会主義時代・童話作家時代の三期に分け、大正初年から「童話作家宣言」までの、おおよそ一四・五年間を、社会主義時代と分類した。

だが、より焦点を絞れば、「時計のない村」が発表された大正一〇年一月前後は、未明の社会主義への接触が、とりわけ本格化していた時期であったと言えよう。前年、大正九年九月には、日本社会主義同盟へ結集を表明し(「社会主義同盟に六文士加入」『東京朝日新聞』大正九年九月九日)、設立発起人に名を連ねているし、一二月には、官憲の猛弾圧の最中、創立大会を挙行している(「社会主義大会は予定通り直ぐ解散された」『読売新聞』大正九年一二月一一日)。また、翌大正一〇年四月には、第一次日本共産党の起源のひとつとなった暁民会の講演会へ、エロシェンコや加藤一夫と出席したりもした**(注4)**。未明は文字通り、革命を待望していたのである。

このような社会主義への傾斜は、未明に限らない。当時の文壇の流行でもあった。例えば、未明とともに日本社会主義同盟へ参加した江口渙は、「今度私が日本社会主義同盟に加はつたといふ事に対しては格別大した感想もない。何となれば今や広義に於ける社会主義は、新

しい時代の常識となつて仕舞つた以上自分もさういふ新時代の常識を以て進んで行くといふ事に不思議はない」（「文学者の眼から観た社会主義同盟」『読売新聞』大正九年九月一八・二〇日）と述べ、社会主義を「新時代の常識」と形容している。

あるいは、有島武郎は「私は決して社会主義の理解者だなどと大きな口をきく事は出来ませんが、僅かばかり聞き噛つたり、読みかじつたりした所から云つても、社会主義といふものが当然将来の社会生活を指導す可きものであるのを疑ふことが出来ません」（「最近文壇のいろいろ」『文章倶楽部』大正九年一二月）と語り、近未来における社会主義の指導性を確信していた。菊池寛も「どんなイズムが文芸の中心となるか」という『新潮』編集部の問いに、「社会主義的の思想を背景にした新らしい文芸だが、その中心となることは疑ひが無いのだが、果してそれが文芸上の進歩になるか退歩になるか、其処までは明かにわからない」（「大正十年文壇予想」『新潮』大正一〇年一月）と答え、文芸上の効果については留保しつつも、社会主義の影響力自体は疑いの余地がないものとしている。

実際、社会主義の影響力は、社会運動・労働運動の現場のみならず、文学という芸術領域の場にも波及しつつあった（注5）。例えば、無産階級へ依拠する階級文学の今日的意義を説いた、中野秀人の評論「第四階級の文学」が、雑誌『文章世界』の懸賞論文に入選したのは、大正九年九月のことである。神戸の貧民窟で貧乏人の救済に取り組む青年を描いた、賀川豊彦の自伝的社会小説『死線を越えて』（改造社、大正九年一〇月）が、一〇〇万部を越えるベストセラーとなったのも、同じ年だ。また、この年の文壇では、文学（者）の社会性の重要さを強調する「文芸の社会化」に関する議論が、未明・有島・江口らによって、活発に展開されていた（注6）。つまり、文学者の左傾化は、ひとつの流行現象だったのである。

そんな中、未明は文壇内部で、どのような評価を下されていたのだろうか。宮島新三郎は「欧州大戦の結果が導いた大きな思潮の一つは明かに社会改造の四字に尽きる理想主義である」と時代を概括し、「単独に自己の境地を開いて来た中堅といふよりも大家の列に入るるを至当とする作家」に、未明と谷崎潤一郎の名を挙げている。

> 小川未明氏の頭脳は常に急行列車の如き焦燥を以て埋められてゐる。停止する所を知らず、何時他の列車と衝突しないとも限らぬ。然し進まねばやまぬのだ。何物かの力を感ぜしめるのは全く其の為めである。氏は昨年社会主義同盟に加入した。然し氏は飽くまでも北国の詩人である。吾人は氏に於て詩人的社会主義者の好典型を見る。
>
> 宮島新三郎「文壇の現状を報ずる書」（『文章倶楽部』大正一〇年一月）

宮島は「急行列車」や「詩人的社会主義者の好典型」という評を通して、社会主義の理想へ向かって猪突猛進する、未明の活力や純な心意気を指摘したかったのだろう。一言で言えば、ピュアでエネルギッシュな大物左翼文学者といったところか。

文芸評論家の平林初之輔も、未明の左傾化を指摘した同時代人のひとりである。平林は、「昨年から本年へかけて、社会運動に刺激された所謂労働文学が文壇の一部に提唱さるることとなつた」（「大正九年の文壇を評す」『新潮』大正九年一二月）と、昨今の労働文学の台頭に触れた上で、「従来の文壇から転じて最近社会小説の色彩を濃厚にしたものに宮地嘉六、小川未明、江口渙等の諸氏がある」と、未明の方向転換を伝えている（注7）。周知の通り、平林は、初期プロレタリア文学運動を代表する左翼文芸評論家だが、未明の社会主義受容の本格化は、当然、この辛口批評家の目にも留まっていたのである。

さて、ここで未明自身の言説を確認しておきたい。この時期、未明は、社会変革を牽引する民衆運動のダイナミズムに、多大な期待を寄せていた。例えば、「最早時代の潮流は知識階級の駄眠を決して許しはしない、総ては旋風の渦巻の中に巻き去られるだらう。民衆の運動の火の手は総てを焼き尽す」（「真の民衆文芸の勃興を明年文壇に望む」『読売新聞』大正九年一二月一〇日）、「今日の民衆運動は、真理が当然その赴くところに行く過程の一つだ。而も、曾（かつ）て見なかつた力強い運動である。ブルジョアの文化と、プロレタリアの文化の、闘争にある。而もその両立を同時に許さないほどの緊張と真理の躍進がある」（「感想一二」『新潮』大正一〇年一月）、「翻つて一方民衆運動如何と見るのに、其処には人道主義の流れがある。社会主義思想の瀰漫しつつあるものがある。何といつても未来の社会はこれ等の新しい主義の時代であらう。これは信念であり信仰である。燎原を焼き尽さんとする火のやうに激しい」（「醜陋　民意に反ける今日の議員政治の赴く所は何処？」『読売新聞』大正一〇年三月二一日）といった発言が、それである。過激である。

加えて、「唯物史観」や「階級闘争」という語を、肯定的文脈で使用している事実も、無視すべきではない。

> 唯物史観は、近世社会経済組織の崩壊を予言する。而して、真理である。一定の方針に進んで来た過去の歴史が其れを実証する如く未来がまた其れに基いて実証されなければならぬものです。（中略）人間性の解放と愛護の戦は、階級闘争の事実が認められるに到つた当初から、真の民衆の心を心とする民衆的芸術家によつて開始されて来たのです。今も、戦はされつつあるし、将来に於ても戦は（ママ）つづけられる。理性が地上のすべ

てを征服し、而して全く、人間性の勝利に帰せざる限りは、恐らくこの戦は、止む時がなからうと思はれるのであります。

「来る可き文壇と主観の客観化」（『読売新聞』大正九年一二月二七・二八日）

テキストの内容に関して、特段の解説は不要だろう。ちなみに、この文章が発表されたのと同じ月、未明は民衆詩派の詩人である福田正夫に、ロシア革命の立役者であるレーニンの肖像画が描かれた絵葉書を送ったりもしている（注８）。いずれも、興味深い事柄だ。

というのも、これまでの未明研究は、アナボル対立の結果、昭和初年以降、未明がアナ派の旗印を鮮明にしていった経緯から、大正期の未明をも、遡及的にアナキズムやヒューマニズムの系譜に位置付けるのが常だったからである（注９）。しかし、大正期の未明が「唯物史観」や「階級闘争」を是認したり、マルクス・レーニン・ロシア革命を賛美するなど、マルクス主義に親和性を有していた点は、注意が必要だろう。両思想は、言わば未分化のまま、併存していたのである（注１０）。

ところで、童話「時計のない村」掲載時の未明の創作力には、凄まじいものがあった。まず、数の話で言えば、大正一〇年一月、未明は六本の小説（「浮浪者」「馭者」「戦慄」「老旗振り」「雪の上」「風の鞭」）、六本の童話（「時計のない村」「殿様の茶碗」「金の魚」「世界一の幸福者」「善いことをした喜び」「青い着物を来た子供」）、七本の評論・随筆類（「感想一二」「芸術の蘇生時代」「此意味の羅曼主義」「私の好きな露西亜の三作家」「興味を惹いたもの」「恋愛によつて何を教へられたか」「私の好きな小説戯曲中の女」）を発表している。小説集『赤き地平線』（新潮社）も出版した。多作である。質の面から言っても、「時計のない村」や「殿様の茶碗」は、その後、未明童話のアンソロジーへ度々採録される、好篇だ（注１１）。

そして、代表作として名高い童話「赤い蝋燭と人魚」が発表されたのは、翌大正一〇年二月（注１２）。後から振り返れば、大正一〇年一月前後は、小川未明の左傾化が本格化するとともに、創作の質がもっとも高まった、生涯随一の全盛期とさえ言えるかもしれない。

二、日本社会主義同盟の創建　――アナボル未分化の大同団結

童話「時計のない村」発表時の小川未明の動向および時代状況を、もう少し細かく押さえておこう。本節で取り上げたいのは、大正九年一二月に誕生した社会主義者の統一組織・日本社会主義同盟である。前節で記した通り、未明はこの団体の創立発起人を務めており、両

者の関係は一方ならぬものがあった。関係の追跡は必須である。

まずは、同盟創立前後の歴史的背景を一瞥しておきたい。幸徳秋水ら二四名の社会主義者・無政府主義者が死刑判決を受けた、大逆事件（明治四三年）以降の「冬の時代」を経て、当時、左翼は完全な復活を遂げつつあった。転機となったのは、言うまでもなく、大正六年のロシア革命である。世界初の社会主義革命が追い風となり、以後、我が国では、米騒動・労働争議・普選運動等の民衆運動が盛り上がりを見せるようになる。いわゆる、大正デモクラシーである。第一回メーデーが上野公園で打ち抜かれ、マルクス『資本論』の翻訳が高畠素之の手によって始まったのも、同盟創立と同じ、大正九年のことだ。社会主義は、疑いなく、時代を席巻し始めていたのである。

このような状況下、新旧の社会主義者・労働組合関係者を糾合する一大団結組織として、日本社会主義同盟は生誕した。同盟の設立準備会が発足したのは、大正九年八月のことである。未明ら創立発起人が同年一一月に頒布した、結成趣意書を見てみよう（注13）。

> 社会主義者の間に何等の団体の組織をも有しないのは、世界を挙げて唯だ日本のみであると云つても差支ありませぬ。内外の形勢は、今や何等かの形に於て、吾々の間に団体の実現を迫つてゐる事は、何人と雖も均しく痛感してゐる所であります。この必要に応ぜんが為め、吾々発起人となり、日本社会主義同盟創立の計画を進め、既に全国に亘つて続々加盟の申込を受けて居ります。同盟の性質は、広き意味にて一切の社会主義者を包括するものであります。現に発起人中には種々の労働団体（例へば友愛会、信友会、正進会、交通労働組合、日本時計工組合、坑夫総同盟、労働運動同盟等）に属する人々、各大学の学生団体（例へば建設者同盟、扶信会等）に属する人々、諸種の思想団体（例へば著作家組合、新人会、暁民会、文化学会、自由人連盟、労働組合研究会等）に属する人々、及び従来の各社会主義者、其他労働階級及び知識階級の人々を網羅してゐます。（中略）同盟は政治結社でありませぬ故、加盟者には男女、年齢、職業等、一切の制限はありませぬ。

同盟は広汎な自称・社会主義者の受け皿でありたい――趣意書の論旨はこれである。発起人らは、現在の日本に社会主義者の結集軸が存在しないことを問題視し、その構築の必要性を説いているのである。目指すのは、「社会主義」という大義に賛同する者ならば、誰でも参加可能な――イデオロギー等でメンバーシップの選定を行わない――ゆるい政治連合体だ。

実際、未明以下、創立発起人の顔触れは多種多様であった。堺利彦・山川均といった古参のマルクス主義者、大杉栄・岩佐作太郎といった札付きのアナキスト、麻生久（友愛会）・布留川桂（正進会）といった労働組合幹部、赤松克麿（東大新人会）・和田巌（早大建設者同盟）といった学生団体指導者、未明・加藤一夫といった文士、総計三〇名が、一堂に名を連ねていたのである。要は、ごった煮である。余所から見れば些末な事柄で、激烈な内紛を繰り広げる「内ゲバ」は日本左翼のお家芸だが、この時点では、アナもボルも社会主義という錦の御旗のもとに同居し、大同団結を遂げていたのである。大正期的なゆるさ、大らかさが、看取できよう。

したがって、未明の同盟結集は、ボル派の闘士からも歓迎されていた。例えば、堺利彦は、

「社会主義同盟が其の加盟者中に知名の文士数人を数へる事を得たのは、我々の深く喜びとし、且つ誇りとする所である」「小川未明君については、私は幾許の知る所もない。只だ私は、彼が気分の上に於いて確かに一個の社会主義者たる事を信じてゐた。そして彼自身も亦た其の通り云つて居られる。正直な心を持つ人が義憤を発した時、遂に此の道に到達するは洵に自然である」（「文芸家と社会主義同盟に就て」『人間』大正九年一一月）と述べ、未明ら文学者の同盟参加について、手放しで賛意を表している。マルクス主義の理解の深浅等、細かな思想の精査を行う姿勢は、まったく見せていない。

かくて同盟は、大正九年一二月一〇日、東京神田のキリスト教青年会館（ＹＭＣＡ）で創立大会を挙行した（**注１４**）。会場は満員御礼。場外へ締め出される者が出るほどの盛況振りだったという。当日付けで公表された同盟の宣言文は以下の通りである（**注１５**）。

我々は現代の資本家制度を根本的に破壊せんとする。我々は資本家制度に付随する各種の制度、組織、習慣、思想、芸術等、ブルジョア文化を破壊せんとする。我々は、我々の真の人間らしき生活を創造せんがために、貧富のない社会、階級のない社会、即ち総ての人が労働して総ての人が衣食住の安全を得る新社会の実現を期する。我々は世界的人類的に、自由の社会、平等の社会、平和の社会、正義の社会、友愛の社会の実現を期する。我々は資本家階級と其の付随者に対し、あらゆる有効なる闘争手段を取る。

我々は此の階級闘争に於ける我々の主要なる実力が、各種の労働者にある事を信じ、其の覚醒と団結と訓練とに努力する。又外観上、若しくば形式上、中流階級であつて、実質上には労働者である所の、諸種の俸給生活者、小企業者、自由職業者等が、一般に無産階級として我々の運動に来り加はる事を望み且つ信ずる。かくて我々は、日本無産階

級及び其の付随者を結束して、プロレタリヤの新社会、新組織、新文明に向つて、大胆勇敢なる不断の前進を継続する。

一読してわかる通り、宣言は、労働者階級の階級闘争によって、資本家階級（およびブルジョア文化）を打倒することを謳っている。階級闘争史観に貫かれた、極めて原則的な左翼政治路線である。岡本宏と藤井正は、日本社会主義運動史上、本宣言がこれまでにない戦闘的性格を有している由、指摘しているが、正しい指摘だろう（注16）。

なお、この日の創立大会には、未明も参加していたようだ。未明と同じく、同盟に結集した江口渙は、大会当日の彼の様子について、次のように記述している。

十二時半になるかならないのに、ＹＭＣＡの赤煉瓦の塀の前は、黒山の人である。見ると半分近くが巡査である。それも、帽子のあごひもをおろしゲートルをつけ、剣を麻ひもでつっているものものしい非常警戒の装備である。（中略）開会前からはやくも殺気立っていた。群衆の中に私は私と同じく二重まわしをきている小川未明を見つけた。顔を上向きにして何かしきりとしゃべっている。となりに立っている背広の若い紳士に話しかけているのだ。だが、まわりのさわぎがひどいので何をいっているのかわからない。その紳士が赤松克麿だということを、そのとき小川未明の紹介ではじめてしった。

江口渙『続・わが文学半生記』（春陽堂書店、昭和三三年三月、八・九頁）

未明と赤松は、後に社会主義から国家（社会）主義へ、階級闘争から天皇制賛美へ移行した転向者だが、この時はまだ、急進左派として、仲良く肩を並べていた。雑談の席上、赤松は「どうしても天皇をやっつけなけりゃダメだあ」（一一頁）と叫び、天皇の爆殺を主張していたそうだ。転向者の前史である。

結局、一二月一〇日の集会（昼）と講演会（夜）は、所轄警察署の判断で、いずれも中止を命じられた。冒頭、司会者が挨拶を始めるや、打ち切りを宣告されたのである。警官は、いきり立つ聴衆へ襲いかかり、大杉栄以下、約八〇名を検束（後に一三名を起訴）。赤松もこの日、検束されているが、上手く立ち振る舞ったのだろうか、未明は拘束の憂き目にあっていない。管見の限り、生涯を通して、未明に逮捕歴はないようである。

さて、ここで同盟の組織と事業を概観しておこう。まず、組織について。同盟は個人加盟と組織加盟を併用した集合体で、加入人数は諸説あるが、おおよその実数は約千数百人であ

ると言われている（注１７）。なかなか多い。文学者では、先に挙げた面々の他、秋田雨雀・新井紀一・島田清次郎・内藤辰雄・新居格（にいいたる）・藤森成吉・宮地嘉六といった文士が参集していた（注１８）。初期プロレタリア文学の猛者は、おおむね決起していたと見て間違いないだろう。また、北京大学教授で、中国共産党の結党に参加した李大釗（りたいしょう）など、中国・朝鮮・台湾の人士も少数ながら加入していた。同盟は、部分的にではあれ、国際連帯を勝ち取っていたのである。

次に、事業について。同盟の主事業は、おおよそ、①機関誌の発行、②講演会の開催、③例会の開催、④メーデーへの参加の大きく四つに大別される。もっとも同盟は、設立準備会の発足（大正九年八月）から治安当局による解散命令が下る（同一〇年五年）まで、僅か一年足らずの、短命に終わった団体であるから、いずれも十分な業績を蓄積しているとは言い難い。しかしそれでも、それなりの奮闘と成果はあったのである。例えば、②講演会の開催では、堺利彦・麻生久ら同盟の弁士が、京阪神へ遠征し、社会主義思想の宣布と同盟員の獲得に努めた（注１９）。

ただし、こと未明との絡みでもっとも重要なのは、①機関誌の発行であろう。彼は同盟の定期機関誌『社会主義』の編集委員へ就任するとともに（注２０）、自ら創作を発表してもいたからである。同誌に掲載された童話「S爺さんの話」（大正九年一一月）や小説「冷酷なる記憶」（同一〇年五月）は、金銭批判・有産階級批判をモチーフとした作品で、どちらも当時の未明の問題意識を反映した社会派的な作風となっている。無論、プロの作家であるから、掲載媒体に合わせて作風を調整していた、とも言えるだろう。

この他、同誌は、「団体消息」欄や「海外時潮」欄で、国内外の社会運動シーンの動向を随時紹介していた。海外からは、片山潜ら「在米日本人社会主義団」が、同盟は第三インターナショナル（コミンテルン）へ加盟するよう、「決議文」（大正一〇年五月）を送ったりもしている。惜しいかな、同盟解散に伴い、雑誌は結局、九号で廃刊となってしまったけれど、アナボル双方の執筆者を擁した『社会主義』は、幅広い問題意識と豊かな国際性を有する革新的な――そしてある種、思想的に無秩序（カオス）な――メディアだったのである。

国家権力による強制解散後、同盟内部の各思潮は分岐し、その一部は日本共産党の結党へと向かう。同盟から第一次共産党へ進んだ荒畑寒村が、「同盟は発起人の代表する団体が多種多様であったように、その抱懐する思想もまた千態万様であって、アナーキストもあればコミュニストもあり、シンディカリストもあれば民主主義者もあり、あらゆる色彩の社会主義的な集団に過ぎなかった。（中略）要するに、あらゆる反資本主義的な思想と運動との諸

系統が、抽象的な社会主義の総称のもとに包括されていたのであって、たとえ同盟が十年五月の第二回大会で禁止されなかったとしても、発展の過程において当然に分化しなければならぬ運命であったに違いない」（『寒村自伝』論争社、昭和三六年二月、二七〇頁）と回顧する通り、同盟は種々雑多な思想の持ち主が集う連合体であり、その分裂は避けられない必然だったのである（注21）。

してみれば、同盟の歴史的意義と限界は、良くも悪くも、この思想の多様性の許容にこそあったと言うべきだろう。それこそが、新旧の社会主義者や労働組合関係者の大同団結を可能にするとともに、指導部（前衛）による一元的な指導・管理を不可能にしていたのである。同盟の意義と限界、長所と短所は、まさしく、コインの裏表の関係にあったのだ。

そして、一節で論じた小川未明の社会主義思想の未分化性――アナ的要素とボル的要素の混在――は、かかる日本社会主義同盟の形態と類似の関係にある、というのが、筆者の結論である。大正期の社会主義は、同盟という政治組織においてすら、雑多な思想的立場の人間が群居する寛容なものであった。他者の思想を厳密に問わない、このような大正期社会主義のゆるさは、そのまま、未明の社会主義思想の曖昧さとも直結していたと考えられる。未明の思想は、時代の潮流と有機的に連関しているのである。

三、童話「時計のない村」――標準時と近代時間秩序の編成

それでは、このような小川未明の文壇・思想上の立ち位置を踏まえ、童話「時計のない村」を読んで行こう。

まず先行研究だが、管見の限り、本作の作品論を著しているのは、続橋達雄しかいない（注22）。続橋論の要点は、次の文章にある。

> しかし、もっとも印象深いのは、作品の冒頭と末尾の照応関係であり、とくに終末の部分が強烈である。というのは、時計に象徴される近代・現代の技術文明を拒否し否定した生活様式を肯定し賛美しているかに見えるからである。これが空想上の、虚構の世界であるにしても、作者の想像力のありようを考えないわけにはいかない。
>
> 続橋達雄『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月、一七七頁）

続橋は、時計を「近代・現代の技術文明」の象徴と捉えている。そして、作品末、それが村人に捨てられたことをもって、「近代・現代の技術文明」への拒否・否定と見做す。

さらに続橋は、「唐突のことながら、わたしはここで、次のうたを思い出した」（一七八頁）と述べ、古代中国の撃壌歌を引用。「日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力于我何有哉」（日出て作し、日入りて息う、井を鑿ちて飲み、田を耕して食う、帝力我に于いて何か有らんや）というような自然生活の賛美が、「未明の夢想」として、本作や他のいくつかの童話――例えば、「自分の造つた笛」（『小さな草と太陽』赤い鳥社、大正一一年九月）、「幸福に暮した二人」（『童話』大正一二年一月）――に通流していると指摘している（注23）。

だが、続橋の立論は、一部本質を突いているように思える箇所は存するものの、全体として印象批評の風が否めない。前者に関しては、「時計のない村」本文のテキスト分析がまったくなされていないし、後者に関しては、続橋自身、「現在わたしが目睹し得た範囲内では、未明が右の詩文に直接言及していることはない」と認めている通り、未明と撃壌歌の関係が不明だからである。筆者としては、早急な推断を下す前に、もう少し作品に寄り添った解釈を試みたい。

本作読解の鍵は、未明が「時計」を、どのような存在として表象させているかにあるだろう。続橋は「時計に象徴される近代・現代の技術文明」（傍点引用者）と言うが、私は時計単体で、何を意味するか考えたい。結論から先に言うと、本作において時計は、近代時間秩序の編成者として表象されている。どういうことか。

そもそも、この物語の村は「町から遠く離れた田舎」にあり、村人は長い間「太陽の上り具合を見て、凡その時刻をはか」っていた。しかし、村の金持ちのひとりが「この文明の世の中に時計を用ひなくては話にならぬ」と考え、ある日、町で時計を仕入れて来た。

金持ちの企図は、語り手によって、次のように語られる。

> 其の金持は、今自分は沢山の金を払つて、時計を求めることを心の中で誇りとしました。今日から、村の者達は、万事集りや、約束の時間をこの時計に依つてしなければならぬと思つたからであります。

この金持ちにとって時計は、村人の「万事集りや、約束の時間」を規定する文明の利器であり、一面においては、村人を管理・支配する道具だった。何故時計がそのような力を持つのかと言えば、それは時計の刻む刻限が、村以外の共同体――例えば、町――でも通用する普遍性を有しているからに他ならない。

小島健司『明治の時計』（校倉書房、昭和六三年二月、一八頁）によれば、日本で時計が普及するきっかけとなったのは、明治五年の改暦である。夜明けから日暮れ、日暮れから夜明けを各六刻（計一二刻）に分ける太陰暦＝不定時法から、一日を二四時間に分ける太陽暦＝定時法へ切り替えることによって、「洋時計が実用の道具としてつかわれる条件はととのった」（一九頁）。また、明治一九年の勅令第五一号「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」によって、イギリス・グリニッジ天文台を「本初子午線」とし、「東経百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム」ことが決せられた。

不定時法から定時法への移行、標準時の導入という二つの契機によって、日本には時計が広まり、日本国民は、全国津々浦々、共通の時間を有する――強制される――に至ったのである。この全国的に統一化された時間が、日本人の生活や労働を律する、不可欠な指標となったことは言うまでもない。時計・定時法・標準時は、日本の近代化と直結していた（注24）。

「時計のない村」に時計が持ち込まれることは、この近代的な時間秩序の中に村が組み込まれることを意味する。だからこそ、本作の二人の金持ちは、時計購入の際、その時計の時間が正確なものであるかどうか、執拗に気にしていたのだし（「この時計は、狂ふやうなことはないだらうな」「この店の時間は、間違ひがないだらうな」／「この時計は狂はないだらうか」「この時計の時間は、合つてゐるだらうか」）、時計屋の番頭から標準時と同一であると聞いて（「決して、間違つてゐません。標準時に合つてゐるのでございます」／「標準時に合つてゐます」）、安心するのである。また、二人の時計に三〇分のズレが生じ、両者が正統性を主張する根拠としたのも、標準時との同一性であった（「この時計は狂つてゐない。標準時に合つてゐるのだ」／「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちやんと合はして来たのだ」）。

換言すれば、本作の時計は、単なる「村の時計」ではなく、標準時と連なる「町の時計」「国の時計」であることによって、権威を有していたと言える。二人の金持ちは、その点に極めて自覚的だった。

一方、村人は時計をどのように受容していったのだろうか。村人の時計受容は、驚異→信頼→不信→拒否の四段階で推移している。まず、驚異の段階の村人は、「毎日のやうに其の金持の家へ押しかけ」、「独りでに動く針を見て不思議に思ひ」、「圃（はたけ）に行つても、山に行つても寄ると時計の話をした」。次に、信頼の段階へ入ると、村人は、二人の金持ちの時計をそれぞれ信じ、両者の派閥抗争へ参戦する。この時点で、時計は「貴い掟」や「神様」のよ

うになっていた。ほとんど、物神崇拝である。

しかし、乙の金持ちの時計が壊れると、乙派の村人は「其の日から真暗になつたやうに、全く時間といふものが分らなく」なり、「壊れるやうな時計は、もう信用することが出来ない」と、時計への不信を露わにする。さらに、甲の時計も壊れるに及んで、村人は「時計があつたつて、なくたつて、この一日には変わりがないぢやないか」と原点回帰し、「時計なんか、いらない。お太陽様さへあれば沢山だ」と、時計を拒否するに至る。かくして、「皆なは、また昔のやうに一致して、いつとなく村は平和に治つた」。

以上見てきた通り、本作の時計は、不定時法から定時法へ移行し、標準時と連なるための近代時間秩序の編成者として表象されている。そして村人は、一度は「神様」のように時計を信奉したものの、最終的に拒否し、前近代の「お太陽様」の世界へ戻る。定時法や標準時を定めるものが、近代国家以外の何物でもない以上、時計の拒否はそのまま、近代国家が推進する近代化の拒否を意味するだろう。村人は最後、時計という近代を捨て、未開の村落へ引きこもったのである。

それでは、この結末と一節で見た未明の社会主義思想には、一体どのような関係があるのだろうか。再び大正一〇年一月の時点へ戻るならば、この月、未明は次のような発言を行っていた。

> 街頭を散歩する時、漫然一種の反抗と憎悪とを覚えるのは、何故かと考へる時、其は、世の中は段々と文明に赴いて行くにも拘らず、それが為に人類の生活は決して進歩してやしないといふ事だ。否寧ろ反つて文明の為めに、処を同じうし、時を同じうして生存する人々の間に生活が著しく懸隔を生じて来てゐるといふ事だ。不老不死の薬が発見され、癌の新治療法が工夫され、例へ一時間に幾百哩を疾走する急行列車が出来てもそれ等が極めて低廉な費用にて行はれない限り、一般民衆には何等の幸福をも齎しはしない。寧ろ生活の懸隔が出来る計りだ。これは原始時代にはなかつた現象だ。人類平等の幸福を外にして、人類の進歩はない訳ではないか。私は昔の民族生活に憧れる牧歌精神を諒とする。未来をかけて、何者かを翹望する見込がなかつたら、今日の生活の不平等を来した物質文明を呪詛し、都会を憎悪し、機械を呪ふ彼等の精神を諒とする。
>
> 「此意味の羅曼主義」（『時事新報』大正一〇年一月一九日）

ここで未明は、文明の恩恵が一般民衆へ行き渡らず、かえって格差を拡げてしまうだけの現

状に対し、「これは原始時代にはなかつた現象だ」と憤っている。そして「人類平等の幸福」の観点から、「昔の民族生活に憧れる牧歌精神を諒とする」「物質文明を呪詛し、都会を憎悪し、機械を呪ふ彼等の精神を諒とする」と、反近代・反文明的精神を称賛している。

貧富の差を撲滅しようと意気込んでいる限りにおいて、未明の立場は社会主義的なのだが、その解決策として、高度に発達した生産手段の共有化ではなく、格差なき「原始時代」を対置してしまう点に、未明の社会主義の異質性があるだろう。つまり、未明の社会主義には、近代より前近代をよしとする指向、進歩主義的というより退化主義的な側面が垣間見られるのである（注２５）。

童話「時計のない村」は、このような小川未明の社会主義の異質性――前近代への夢――が刻印された、ユートピア童話であったと言えよう。

四、変奏される時計童話 ――近代否定・前近代肯定の反復

ところで、小川未明の時計に関連した作品は、「時計のない村」だけではない。彼は、時計を主要な題材とした童話を、数多く執筆している。

今仮に、それを「時計童話」と呼ぶなら、その作品群は、「青い時計台」（『処女』大正三年六月）、「時計物語」（『婦女新聞』大正七年一月四日、初収時「時計の話」）、「時計とよつちやん」（『ある夜の星だち』イデア書院、大正一三年一一月）、「おじいさんの時計」（『サンデー毎日』大正一五年一一月一四・二一日）、「小さい針の音」（『解放』昭和二年五月）、「街の時計」（『スキート』昭和四年四月一五日）、「よいどれの時計」（『未明童話集』第五巻、丸善、昭和六年七月）、「正二君の時計」（『台湾日日新報』昭和一五年二月八～九日夕）、「みどり色の時計」（『幼年ブック』昭和二三年六月）、「時計と窓の話」（『小学五年生』昭和二六年九月）の一〇作が挙げられよう。先述の抄録「正しい時計」（『五年の学習』昭和二八年六月）を加えれば、一一か。いずれにせよ、未明は童話創作の初期から晩年まで、時計という素材を好んで多用していたことがわかる（注２６）。

その中にあって、筆者が特に注目したいのは、「時計物語」と「街の時計」の二作品である。というのも、両作は、「時計のない村」と極めて類似した物語類型を持つからである。つまり時計が、定時法や標準時と連なるための近代時間秩序の編成者として表象され、作品末、人間から捨てられる話だ。以下、細かくテキストを見て行こう。

「時計物語」は三人称童話。登場人物は、小さな工場を経営するお爺さんと、工場で働く村人である。この物語の村は「まだよく開けてゐない、淋しい田舎」にあり、村人は「太陽

の上り具合で仕事を始めて、また太陽の下り具合で仕事を止めて家に帰」っていた。

しかし、お爺さんが「遠い町」から時計を買って来ると、労働時間は「午前は八時から、午後は四時まで」と、厳密に管理されるようになる。

「どうだな、時計といふものは便利なものだらう。きちんと仕事を始める時がきまつて、また止める時がきまる、今迄のやうに、早かつたり、遅かつたりすることはなくて、誠に結構なことだ」と、お爺さんは、大きな腹を抱へて笑ひながら言ひました。

お爺さんの狙いは、時計を使った労務管理、すなわち、八時間労働制の施行に他ならない。その結果、それまで「皆なの都合の好いやうに帰ることが出来た」この工場は、「時計が来てからは一分も早く帰すことはし」なくなってしまう。

労働を、時計の刻む刻限によって縛るのは、近代に特有の現象だろう**（注27）**。「時計のない村」と同様、本作において時計は、村人を定時法の世界へ組み込む、文明の利器として表象されている。

加えて、作中人物が、最終的に時計を拒否する点も、「時計のない村」と同じである。ただし、「時計のない村」の村人が、一時的にではあれ、時計を信頼していたのと異なり、本作の村人は、始めから、時計という存在に相容れないもの＝抑圧性を感じている（「皆は時計が来てから何となく窮屈で叶ひません」「皆なは却つて規則が六ケしくなつたので内心に困つてゐました」）。そして、村祭り参加のための早退を断られたことを機に、村人は反抗を開始。お爺さんが居眠りした隙に、時計の針を早め、二日続けて、定時より早く退勤してしまう。

最後、皆に誤魔化されたことを知ったお爺さんは、「やはり、今迄通り、お日様できめることにしやう」と言い、「時計を柱から取りはづして、何処へかやつてしま」った。「其れで、この村には、全く時計といふものは無くなつてしまひました」。時計によるタイトな労務管理は破綻し、村人は「お日様」の世界へ、再び回帰して行ったのである。

「街の時計」は三人称童話。登場人物は、時計台の「大きな時計」と、会話相手の雀である。この時計は「十字街のにぎやかな畔り」に立つ、「正確な標準時計」であり、人間の視線を感じては、「あの男は、おれを見て、自分の時計の時間を直すのだな」「あの人は、約束の時間に、まだ間があるので、安心して行くのだな」と独語している。そして、人の役に立つことに、「なんとなく誇らしい気持」を感じていた。「時計のない村」には、自身の時計の

正確さを訴える金持ちが、「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちやんと合はして来たのだ」と発言する場面があるが、本作の時計はまさしく、そのように人々から参照される「町の時計」に他ならない。共同体を統べる標準時の体現者として、本作の時計は表象されている。

だが、この「正確な標準時計」は、「おれには、春も、冬も、ない」状況、すなわち、自然からの疎外や、「自分が、忠実に働いてゐることを誰もあたりまへのやうに思つてゐる」他者からの感謝なき現状などに、「馬鹿馬鹿し」さを感じ始める。そして、「あまり正直にすると損ですよ。ちつとは、狂つて、有がたみを教へておやんなさい」という雀の口車に乗り、「よし、おれは、おくれてやらう」と決意。サボタージュを開始した。

結果起こるのは、町の秩序の混乱である。

> 相変わらず街の中は雑沓しました。人々は、時計を仰いで、往つたり来たりしました。しかし、正確な、標準時計が狂つたので、其日は、汽車におくれたり、取引に差支を生じたりして、大変なことが生じました。時計は、復讐をしましたが、同時に、とり下されて、明日から、廃物となつてしまつたのです。

標準時が乱れると、時刻表で動く「汽車」や一分一秒を争う「取引」は、支障を来さざるを得ない。近代時間秩序の編成者は一転、秩序破壊者へと転落してしまうのである。待ち受けるのは、「廃物」化のみだ。より物語に即して述べるならば、この擬人化された主人公は、近代を生きる人間に殺されてしまったのである。

とすると、「街の時計」の末尾は、「時計のない村」「時計物語」の末尾と、やや位相を異にしていると言わなければならない。時計が人間の手で捨てられる点は三作とも共通しているが、前二作の時計が、「お太陽様（てんと）」「お日様」の世界へ帰るべく、ポジティブに放棄されていたのに対し、本作の時計は、標準時の世界を存続するために、ネガティブに遺棄されてしまっている（追って、新しい標準時計が時計台へ嵌められることだろう）。前近代への回帰がユートピアなら、近代の継続は、まるでディストピアのようだ。前節で詳述した、「時計のない村」の近代否定・前近代肯定は、他の時計童話でも、かたちを変えて変奏されているのである。

それは、作者・小川未明に深く根を下ろした思想だからこそ、繰り返し反復されたに違いない（**注２８**）。

五、未明の童話観 ——童話という夢

さて、では、そんな近代への嫌忌、前近代への渇求溢れる「時計のない村」を、小川未明が童話という形式を通して物語ったのは、一体何故だろうか。それを童話として物語ることに、固有の意味はあったのだろうか。

三度、大正一〇年一月時点へ立ち戻り、この時期の未明の童話観を確認したい。

> 自分自身の、最早や取り返すことの出来ない、輝かしい、そして決して帰つて来ない子供の時分の、自然及人間に対するいろいろの交渉を、再び眼の前に真実に画くことに於て、そこに芸術の世界を造るよりほかに、童話のゆくべき途はない様に思はれる。（中略）もし、それがほんとうの芸術であつたなら、大人が読んでも面白ければ、又子供が読んでもそれを理解し得ないことはない筈である。何となれば、作者の子供の時分の真実なる感想は、今もなほ子供の魂に触れ、神経に通ずるからである。
>
> 「序」（『赤い蝋燭と人魚』天佑社、大正一〇年五月）

「童話」といふ言葉は、かの「おとぎばなし」といふ言葉のやうに、子供のために（ママ）文学と、ややもすれば解せられるやうでありますけれど、私自身は独り子供のために語るのでなく、其れに対して、一つの主張を持つてゐるのであります。子供の心をなほ忘れずにゐる、すべての人々に向つて、作者である私が、また子供の心持に立ち帰つて、ある感激を訴へるといふことに、このことは過ぎないのである。子供の時の心程、自由に翼を伸ばすものは他にありません。また汚されてゐないものもありません。

「私が童話を書く時の心持」（『早稲田文学』大正一〇年六月）

ここで未明は、作者自身が子どもの心に立ち返って童話を創作する必要性（「子供の時分の、自然及人間に対するいろいろの交渉を、再び眼の前に真実に画く」／「子供の心持に立ち帰つて、ある感激を訴へる」）と、子どものみならず大人にも伝わり得る童話の芸術性（「大人が読んでも面白ければ、又子供が読んでもそれを理解し得ないことはない」／「子供の心をなほ忘れずにゐる、すべての人々に向つて」）を、両論に跨って主張している。そして未明が、子どもを純真な存在と捉えていたことは論を俟たない（「子供の時の心程、自由に翼を伸ばすものは他にありません。また汚されてゐないものもありません」）。

してみれば、この時期の小川未明にとって童話とは、あらゆる人へ向けて、自己の純真な

夢を訴える文学形式だったと言えよう。「時計のない村」の村人が「お太陽様（てんと）」の世界へ帰る時、それは未明の夢でもあったのである。

小括

以上、本章では、小川未明の童話「時計のない村」（『婦人公論』大正一〇年一月）に関する作品分析を、作中の時計表象へ着目しつつ、行った。

その結果、明らかになったのは、本作の時計が近代時間秩序を生み出す編成者として表象されていること、したがって、村人による作品末の時計廃棄は、近代への決別――前近代への回帰――を意味しているということである。童話を自己の純真な夢と捉えていた当時の未明の童話観に照らせば、この反近代的なユートピア志向は、未明自身の夢でもあったと言えるだろう。一般に、大正期の未明の思想は、アナキズムの枠組みで理解されており、本作のユートピア志向を、そのような文脈で理解することは十分可能だ。

一方で、当時の評論類に目を凝らすと、この時期の未明が、唯物史観や階級闘争を肯定するマルクス主義的な側面を保持していた事実がわかる。文学史上、アナキストとマルキストの分岐が鮮明化するのは、青野季吉「自然成長と目的意識」（『文芸戦線』大正一五年九月）や日本プロレタリア芸術連盟の成立（大正一五年一一月）以後だが、未明においても、大正年間は、アナとボルの二つの要素が未分化のまま併存していたというのが実情ではなかろうか。

実際、未明はこの時期、日本の社会主義者の大同団結組織である日本社会主義同盟の創立発起人となり、新旧の社会主義者や労働組合関係者の糾合に努めていた。同盟は、堺利彦・山川均といったマルクス主義者から、大杉栄・岩佐作太郎といったアナキストまでをも包含する、ごった煮の政治団体だったわけだが、このような同盟の思想的雑多性と未明のイデオロギーの未分化性は、同時代上、密接に連関していたと判断できるだろう。

私たちは、小川未明のマルクス主義的な側面を再評価するとともに、両思想の雑居性を注視するべきなのである。

注

1　小埜裕二「概説」（『小川未明全童話』日外アソシエーツ、平成二四年一二月）の「童話集収録頻度表」によれば、「時計のない村」の収録回数は一三回。全体では一〇位と高順位

にある。ちなみに、上位三作は「月夜と眼鏡」（『赤い鳥』大正一一年七月、二九回）、「赤い蝋燭と人魚」（『東京朝日新聞』大正一〇年二月一六～二〇日、二六回）、「港に着いた黒んぼ」（『童話』大正一〇年六月、二三回）で、いずれも大正一〇・一一年の間に集中している。

2　小川未明文学館ＨＰの「所蔵品紹介⑤　幻の全集」より。昭和一八年に刊行開始された、フタバ書院成光館版のこの全集は、当初全二二巻の企画だったが、戦局悪化のため、二巻のみで中断された。二巻とも、装丁を有島生馬、挿絵を初山滋が担当している。

3　「正しい時計」（『五年の学習』昭和二八年六月）は、小埜裕二編『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（日外アソシエーツ、平成二八年六月、四四四頁）に、「感想」という区分で書誌が記載されている。しかし、同作には明確な物語性があり、感想ではないだろう。

4　その他、この時期の未明は、佐野学・加藤一夫・新居格（にいいたる）らと「文芸、思想問題の雑談を目的」とする「青空会」を起こしたり（「よみうり抄」『読売新聞』大正九年八月一七日）、堺利彦・野依秀一・山崎今朝弥らと著作家組合の懇親会へ参加する（「著作家組合懇親会」『読売新聞』大正九年一二月二六日）等、社会運動界隈の人士と積極的に交流している。「盆栽によらず、骨董によらず、あまりに静的で瞑想的なものは、何だか今の自分の気持と合はなくなつたやうだ」（「壺の話　小川未明氏」『読売新聞』大正九年一〇月一九日）とは、当時の未明の言葉らしいが、「静的で瞑想的」ではいられないほど、社会変革の志に燃えていたと推察されよう。

5　松村友視「解説　一九二〇（大正九）年の文学」（『編年体　大正文学全集』第九巻、ゆまに書房、平成一三年一二月）参照。

6　『読売新聞』の連載記事「合評　文芸の社会化」（大正九年五月二一日～六月五日）参照。

7　さらに平林は、本論で「社会的良心をもつたものには、曖昧な妥協的態度は堪へられなくなつて来た。民衆の一人になるか民衆の敵となるか以外に、立場が許されなくなつた。利害のまるで反対する二つの階級に社会がわかれかかつて来た。文学が社会と絶縁することの出来るものでない限り、たとひ作品に於て如何なる題材をとり扱はうとも、文学者自身は立場をきめねばならぬことになつてきた。此岸にたつか彼岸にたつかといふ一点で文学の将来は定まるのである」と述べ、文学者に対し、階級の選択を突き付けている。折からの民衆芸術論は、中野秀人「第四階級の文学」（『文章世界』大正九年九月）によって、階級意識を闡明化させていったわけだが、平林の論はこの方向性に掉さすものと言えよう。

8　安田杏子「収蔵資料紹介　福田正夫宛小川未明書簡」（『小川未明文学館館報』平成二一

年五月）参照。

９　例えば、山室静は、大正期の未明の社会主義思想への接近について、「その立場は人道主義とクロポトキン流の相互扶助を基調にするもので、マルクス流の唯物論と階級闘争説にはほとんどまったく無縁だった」（「解説」『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五一年一二月）と語っている。また、上笙一郎は「ネオ・ロマンティシズムの作家として自己形成してきた未明は、マルクス主義思想とリアリズムにはなじめず、ロマンティシズムを許すアナーキズムに親炙していったのであった」（「小川未明」日本児童文学学会編『日本の童話作家』ほるぷ出版、昭和四六年九月）と、猪熊葉子は「根本的には理想主義に根ざすヒューマニストであった未明が、その思想の帰点として辿りついたのは、詩の原理としてのアナーキズムであった」（「小川未明」続橋達雄他編『講座日本児童文学』第六巻、明治書院、昭和四八年九月）と、それぞれ解説している。

１０　例えば、林政雄は、「小川未明氏の近業二つ」（『新興文学』大正一二年四月）で、「未明氏の思想はボルシエヴイストの思想であるか、トアナアキストの思想であるか私達は斯の『人間性のために』全編を通じては知る由もない。或は部分はボルシエヴイズムの声であり或る個処はゼアナアストの叫びである」と述べ、大正一二年当時、未明の思想が、アナボルどちらにも解釈し得る、未分化なものであったことを指摘している。その他、大正期の未明のマルクス主義への親和性については、四章や五章で詳述した。

１１　**注1**と同じ、「童話集収録頻度表」によれば、「殿様の茶碗」（『婦人公論』大正一〇年一月）の収録回数は一六回。全体では七位である。

１２　岡上鈴江『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）によると、「赤い蝋燭と人魚」の原稿依頼へ訪れたのは、当時、朝日新聞社の社員だった岡本一平らしい。岡本は「大正十年の一月のある日、羽織はかま姿で父を訪問すると、なにか中編ものを書くように頼んだ」（七六頁）そうだ。

１３　趣意書の本文は、大和田茂「発掘・日本社会主義同盟名簿　（付）趣意書、規約草案、宣言等」（『初期社会主義研究』平成二〇年二月）より引用した。

１４　なお、創立大会と記したが、同盟発足の手続きは、厳密には、前日の一二月九日に前倒しして行われている。当日は、警察当局が即、解散命令を下すことが予想されたため、急遽、九日の懇談会を同盟立ち上げの場としたのである。が、本稿では会の規模を鑑み、一〇日の大規模集会および講演会を創立大会と記述した。

１５　宣言の本文は、「資料（１）　日本社会主義同盟報告　（付）成立後の同盟の活動・

加盟団体の概況」（『初期社会主義研究』平成二〇年二月）より引用した。

１６　岡本宏『日本社会主義政党論史序説』（法律文化社、昭和四三年一一月）、藤井正「日本社会主義同盟の歴史的意義　「大同団結」から「共同戦線」へ」（増島宏編『日本の統一戦線』上巻、大月書店、昭和五三年五月）。

１７　**注１６**で挙げた藤井正の論稿の他、大久保利謙『日本全史１０　近代Ⅲ』（東京大学出版会、昭和三九年一一月）、廣畑研二「山辺健太郎旧蔵「日本社会主義同盟名簿」」（『大原社会問題研究所雑誌』平成二一年一〇月）、同「もう一つの日本社会主義同盟名簿」（『初期社会主義研究』平成二二年六月）参照。

１８　大和田茂「同盟名簿から見た文学者」（『初期社会主義研究』平成二〇年二月）、廣畑研二「もう一つの日本社会主義同盟名簿」（『初期社会主義研究』平成二二年六月）参照。

１９　大和田茂「一枚の写真から　同盟結成に向けた関西・名古屋遊説の意味」（『初期社会主義研究』平成二二年六月）等参照。

２０　橋浦時雄「編集室より」（『社会主義』大正九年一一月）参照。

２１　荒畑と同じく、創立発起人の加藤一夫も、同盟の分裂が必然である由、かなり早い段階から認識していた。「社会主義同盟に対して多くの人が疑懼するところは、それが余り雑多な分子を抱含して居るが故に、直き分裂するであらう、と云ふ事であるが、それは自分達も始めから知つて居る、知つて居ながら尚進んで加入する所以は、今は何よりも先きに現社会に反抗する事に於いて一致する者が、互に結束して、其の共同の敵に当るべきだと信ずるからである。それが成功するかしないかは自分の問ふところでない」（「社会主義同盟に加入した理由」『人間』大正九年一一月）

２２　独立した作品論ではないが、周辺情報として「時計のない村」に言及している論考は、いくつかある。例えば、佐藤宗子は、「児童文学における「音」・試論」（『千葉大学教育学部研究紀要』平成三年二月）で、「「いつとなく村は平和に治つたといふことであります」と昔話のしめくくりのように結ばれているが、現実に「時計」なしで生活することが不可能であるなかで、せめて児童向に、そんな非現実の村を語ろうとしたのだろう」と述べ、作者・未明が児童向けに、時計のない生活という非現実なファンタジーを提示して見せたとする考えを示している。また木村小夜は、「小川未明「赤い蝋燭と人魚」とその周辺」（『福井県立大学論集』平成一九年七月）の注で、本作は「複数の時計の出現によって村が分裂するが、どちらも壊れて再び平和が戻る、という話だが、ここでは時計によって計測可能な時間の存在を否定しているわけでなく、時計を金持ちしかもてないことが問題だとする。多少不正確

でも皆がもてることの方が大事だ、という側面に焦点が当てられている」と論じ、本作で提起されているのは、時計という「計測可能な時間の存在」の否定ではなく、貧富の差に関係なく、集団の構成員が同じ時間を共有することの重要性であると主張している。その他、教材研究の分野では、中川智弘「小川未明の童話作品における時間描写の特性」(『福井大学初等教育研究』平成二八年三月)がある。

２３　以下、該当箇所。「一九二〇年から二三年ごろにかけて発表した童話において、未明が語った自然のままの生活とは、「時計のない村」「自分の造った笛」「幸福に暮した二人」に代表される世界であったと思われる。それは、古代中国人の夢想し伝承した「撃壌歌」の世界に通じながら、一方では自然の生命にこもる美を発見しそれを共有しようとする世界であった」(一九一頁)

２４　歴史学者の岡田芳朗は、『明治改暦』(大修館書店、平成六年六月)で、「文明開化とは西欧化とほとんど同意語であったから、欧米諸国の使用している太陽暦を採用することは、次第に当然と思われるようになっていた。福沢諭吉は『改暦弁』のなかで、改暦に賛成しない者は時代遅れの大馬鹿者だと、反対派を叱っているが、このような考え方が政府の首脳部や啓蒙家たちの大勢であったであろう」(一五一・一五二頁)と述べ、明治の施政者や知識人が、文明開化の一環として、太陽暦の採用を必然視していた旨、指摘している。また、日本初の鉄道である、品川・横浜間の仮営業が始められたのは、改暦直前の明治五年五月だが、この鉄道は運行当初から、分刻みで発着時間が決められていた。原田勝正は、『明治鉄道物語』(筑摩書房、昭和五八年一〇月)で、「いずれにしても鉄道の運転時刻は、人びとの生活時間を「分」の単位におきかえるという点で大きな意味をもった」(九三頁)と記し、定時法に基づく鉄道の時刻表が、日本人の時間意識に変容をもたらしたとする見方を示している。

２５　未明の前近代的傾向を指摘した論考としては、秋山清「アナキスト・小川未明」(『文学』昭和三六年一〇月)がある。ここで秋山は、未明の感想「彼等流浪す」(『矛盾』昭和三年九月)を引き、「未明の前近代な郷土主義はアナキズムとはいいがたい」「未明の憧憬が、しばしばかつて在りし郷関の静寂と平和を志向しているかに見えることは、退化論的でさえある。儒教における理想が、つねに堯舜(ぎょうしゅん)の栄光に立還えろうとする以外には、社会と生活との進歩について考えようとしなかったことと似通っている」と分析している。

２６　時計を主要な素材として扱う小説は、私見の範囲では、見当たらなかった。

２７　角山栄は、『時計の社会史』(吉川弘文館、平成二六年三月)で、時計出現以後、人々

の労働が、作品中心から時計中心のそれ、すなわち賃労働に変容した旨、指摘している。「ところが近代的時間の成立とともに、仕事はいまや時間に縛られた賃労働へと変わってゆく。重要なことは、機械時計の示す人工的時間で表示された労働時間が、いまや労働を規定するようになるということである」（二二頁）

28　この反復は、もちろん、時計童話以外でもなされている。例えば、感想「単純な詩形を思ふ」（『時事新報』明治四五年七月一日）では、「物質文明」に反抗し、人間の「原始的感情」を鼓吹することが、詩人の役割であると主張している。また、童話「金歯」（『文芸』昭和一〇年三月）では、主人公の絵描き・令二に「ああ、なんでも単純に限る。単純で、素朴なものは、清らかだ。ちやうど、文明人より、原始人の方が、誠実で、感覚的で、能動的で、より人間らしいのと同じだ。近世になつてから、人間は、堕落した。だんだん本当の美といふものが分らなくなつた」と、「文明人」に対する「原始人」の人間的優位を語らせている。

四章　反テクノロジーという基層　――小説「血の車輪」

はじめに

小川未明「血の車輪」は、大正一一年一〇月、雑誌『文学世界』創刊号へ掲載された小説である。物語は二部構成の短編で、前半は、村出身の老婆と孫の少年が都会の「ぺ市」で汽車見学をする話。後半は、その数年後、青年となった孫や一般民衆が、兵士の輸送を司る老将校によって、前記の汽車に轢殺される話である。総じて言えば、民衆へ戦争を強いる国家の残虐性を告発した、一種の反戦小説と呼んでいいだろう。

初出後は、小説集『彼等の行く方へ』（総文館、大正一二年二月）へ初収された。戦後刊行された講談社版の小説全集のみならず、生前発行の選集類にも軒並み収録されているから、未明自身、自負するところのある作品であったに違いない。

しかし、今日までの小川未明研究史を振り返ってみると、小説家としての未明の活動に対する注目や評価は、全体として必ずしも高いとは言えない状況にある。大正一五年の「童話作家宣言」以前、未明は小説と童話を並行して書き分ける両刀使いだったわけだが、戦後長らく、童話中心の未明受容が続いた経緯もあって、これらの小説は、もはや忘れ去られつつある感が否めない。全集に採録されていない未収録作品は、今なお大量に眠っているし、運よく採録されている本作にしても、個別の作品論は著されていないのが現状だからである。紅野敏郎が『定本小川未明小説全集』第五巻（講談社、昭和五四年八月）の「解説」で若干の論評を試みている他、続橋達雄が『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）の「野薔薇」の節で触れているあたりが関の山だ。

故に筆者は、今回、小説「血の車輪」と正面から向き合うことで、本作が論及するに値する好篇である事実を証明したい。何が面白いのか、と言えば、それは本作や同時代の汽車表象に顕現する反近代文明的志向である（二・三節）。萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石といった他作家の汽車表象とは趣きを異にする、この反近代性は、明治維新以来、近代化を推進してやまない帝国日本に対するエッジの効いた文明批評であると同時に、大正・昭和初期、社会主義者として名を轟かせた未明の左翼思想のある種の弱点を告げ知らせてもいた（四節）。

以下、本章では、当時の一次資料から窺い知れる、小川未明の社会主義思想の知られざる内実も視野に入れながら（一節）、これらの点を明らかにしたいと思うのである。本章が、小説家・未明を再評価する一助となれば、嬉しい。

一、マルクス主義への共鳴　――大正一一年一〇月前後の未明

本節では、作品解釈の前段として、小説「血の車輪」が発表された大正一一年一〇月前後の小川未明の文壇的位置および思想傾向を見定めたい。

周知の通り、大正一一年という年は、大正デモクラシー下、日本の社会（主義）運動が著しい高揚を見せた一年である。この年、本邦では、全国水平社（三月）、日本農民組合（四月）、日本共産党（七月）など、無産階級を指導する強力な運動体が複数登場した。山川均らの『前衛』（一月）、市川正一らの『無産階級』（四月）、東大・新人会系の『社会思想』（四月）、早大・建設者同盟の『建設者』（一〇月）、日本共産党系の『農民運動』（九月）『労働新聞』（一〇月）といった、左派系の定期刊行物が相次いで創刊されたのもこの年だ。他方、世界に目を転じれば、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・ザカフカースの四共和国は、年の暮れ、ソビエト社会主義共和国連邦を樹立している。当時の「現代思想」たる社会主義は、文字通り、時代を席巻していたのである。

このような情勢は、当然、文壇とも無縁ではなかった**（注1）**。宮島新三郎は、「今年の創作界の印象」（『新潮』大正一一年一二月）で、大正一一年の文芸に波及した「最も大きな影響の一つはプロレタリア文学の主張」であると述べ、「それが漸時（ママ）意義を齎（もたら）して論議の中心となつたのは、今年のことに属します」と述懐している。また、小島徳弥は、「大正十一年創作壇の人々」（『早稲田文学』大正一一年一二月）で、「本年度に於ける我が文壇の最も著しい現象といへば、それは文壇が階級を発見したことである。階級といふものは、一般の社会だけにあつて文壇にはないのだとされてゐたのが、本年に入つて文壇にも矢張り階級の厳存してゐることが知られた」と述べ、作家の依って立つ帰属階級の闡明化を、本年文壇の特徴として挙げた。つまり、この時期、社会主義という思想に対する、個々の作家のスタンスが、厳しく問われるようになっていたのである**（注2）**。

そんな中、未明は文壇内部で、如何なる評価を受けていたのだろうか。前掲の論文において、宮島は、「ブルジョア生活に対して極度の反抗を試み」、「プロレタリアのために大気焔をあげた」作家として、未明の名を筆頭に掲げている。小島もまた、「小川未明氏は、早くより社会主義的精神の詩化といふことを心掛けて、それに向つて一意専心努力した人である」と記し、未明の芸術の基底に「社会主義的精神」が流露している旨、指摘した。津田光造は、ブルジョアに阿諛追従する作家が多い中、「独り未明氏は、飽迄も無産者の友人として、無産者の幸福な世界の創造の事に一命を挙げて努力しつつ敢然たる歩みを続けて来た」（『血に染む夕陽』『種蒔く人』大正一一年四月）と、無産者に寄り添う未明の姿勢を賞

美している。プロレタリアート解放に尽くすべテラン作家、というのが、当時の最大公約数的な見解と言えようか（注3）。

実際、大正一一年の未明の足跡は、「無産者の友人」の名に恥じないものだった。まず、この年の三月、未明は山川均・平林初之輔・江口渙ら、文士三〇名あまりとともに、自由思想家組合を立ち上げている（「自由思想組合を組織し過激思想取締に反対の気勢」『読売新聞』大正一一年三月一二日）（注4）。これは、高橋是清内閣が、第四五回帝国議会へ提出した「過激社会運動取締法案」――共産主義・無政府主義など「朝憲を紊乱（びんらん）する事項」の実行者・宣伝者を懲罰するための法案。治安維持法の先駆けとなった――を批判し、廃案に追い込むための運動体だ。

五月には、「労働祭は、全世界の無産階級の結束すべき日だ。正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）と叫びながら、出版従業員組合の組合員として、第三回メーデーへ参加。友愛会の鈴木文治と言葉を交わしている（亮平老史「未明管見」『種蒔く人』大正一一年六月）。

その他、未明は、八月、商業会議所の主催する「節約デー」に反対する「御馳走デー」を企画したり（「節約デー反対に文壇のプロさん達が黒石氏の宅で御馳走デー」『東京朝日新聞』大正一一年八月二九日）、九月、ロシア飢饉救済を目的とする東大新人会の演説会へ出演したりもした（「学芸たより」『東京朝日新聞』大正一一年九月二〇日）。時事問題に対応した、アクチュアルな闘争の現場へ、積極的に参加している様子が窺える（注5）。

一方、本業の文筆はどうか。この時期の未明の言説で、特に注視すべきなのは、大正期の未明＝アナキズム系作家という従来積み重ねられてきた通説とは逆に（注6）、彼が共産主義の思想・運動に対して、極めて好意的な態度を示している点である。

例えば、ロシアの一〇月革命――グレゴリオ暦では一一月七日――五周年に合わせて寄せた、次のような文章を見てみよう。

私達はまた露西亜によつて、正義の国が必ずしもこの地上に建設されることの不可能でない事実を知つた。露西亜の革命は、全世界の無産階級の気力と、精神とを一洗したばかりでなく、萎靡（いび）から蘇生さした。露西亜の存在は、全世界の無産階級の強みである。露西亜は、全世界の無産階級のために存在しなければならない。

「露西亜は存在す」（『東京朝日新聞』大正一一年一一月八日）

この時期、未明は、共産主義革命を成し遂げたロシアを、「正義の国」「全世界の無産階級の強み」と称賛している。「今日では、レーニンを殺伐な組織の上の革命家とのみ見るものは少なくなつたやうです。彼は、殉教者であり、熱烈な無産階級の代弁者であり、また、実に其のものであるのです」（「民衆芸術の精神」『生活の火』精華書院、大正一一年七月）、「レーニンは死んでも、その精神は死なない。後から、後からレーニンは産れる」（「レーニン若し死なば」『解放』大正一一年八月）と、国父・レーニンの精神を賛美してもいた。

また、評論「力を有せざる運動」（『時事新報』大正一二年二月二七・二八日）では、「思ふに、茲（ここ）にロシヤに於けるが如き共産主義と、純粋のアナーキズムと、又人間運動としてのダダイズムがあるとする。そしてどれを取りどれを正しいかと問はれた時に、私は容易に何れであるかを答へることが出来ない。（中略）本当に全的の人間として生きる上にはこれらの思想は一人に於ても共有さるべきものだ」と述べ、共産主義・アナキズム・ダダイズムの三思想に、甲乙付け難い、三者三様の正義を看取している（注7）。

文壇の人々も、未明の共産主義への親和性を認識していた。前田河広一郎は、「小川未明の場合には、ボルシエヴィズムの一部否定と一部肯定とをもつて、「プロレタリア」其自身の政治に参与している」（「小川未明論」『早稲田文学』大正一二年四月）と、ボルシェビズムを部分肯定する未明の姿を捉えているし、林政雄は、「未明氏の思想はボルシエヴイストの思想であるか、トアナアキストの思想であるか私達は斯の『人間性のために』全編を通じては知る由もない。或は部分はボルシエヴイズムの声であり或る個処はゼアナアスト（ママ）の叫びである」（「小川未明氏の近業二つ」『新興文学』大正一二年四月）と、アナボルどちらにも解釈し得る、未明思想の両義性を指摘している。

水守亀之助は、「マルクスなぞよりはクロポトキンの方が、ボルシエヰズムなどよりはアナーキズムの方を歓びさうに思つてゐた」未明が、「いつしか、マルキシストとして、又、ボルシエヰズムの信奉者としての旗色を鮮やかにして来られた」近況を報告している（「昔の小川未明氏と今の小川未明氏」『読売新聞』大正一二年六月一〇日）（注8）。

先にも述べた通り、これまで、大正年間の小川未明の社会主義への接近は、アナキズムの範疇で理解するのが通例であり、共産主義への親和性は等閑に付されてきたわけだけれど、実際は、アナもボルも含み合わせた、未分化の状態にあったと言うべきであろう。小川未明史の抜本的な書き換えが必要だ。

二、小説「血の車輪」――民衆を轢殺する「1362」

それでは、このような小川未明の文壇・思想上の立ち位置を念頭に置きつつ、小説「血の車輪」を読んで行こう。

まず、先行研究だが、管見の限り、本作に関する独立した作品論は見当たらない（注９）。紅野敏郎と続橋達雄の二氏が、全集の解説等で、部分的に論及しているのみである。紅野は、「解説」（『定本小川未明小説全集』第五巻、講談社、昭和五四年八月）で、「血の車輪」には、近代文明の生み出した象徴的産物である汽車の魔物性にふれつつ、さらにその汽車に、無理やりに父や夫や子供が乗せられ、「祖国の危急には換へられない」という論理のもとに、目的地に向って進む姿が描かれ、しかも進行する汽車にわれとわが体をぶっつけ、阻止しようとした青年が登場する」と、その内容を概括している。だがしかし、概括以上の批評・分析があるかと言われれば、ない。

一方、続橋は、『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月、一六七頁）で、本作には、「国家権力が祖国の危機の名において民衆の自由・幸福をふみにじる非常冷酷を告発」する国家権力批判と、小説「柩」（『早稲田文学』明治四〇年八月）や、童話「眠い町」（『日本少年』大正三年五月）以来続く機械文明批判の、二つの異なるモチーフがドッキングされている旨、指摘している。続橋の論評は、紅野に比べれば精緻だし、贅言を要さず核心を突いているとも思うけれど、全体として、大掴みな印象は否めない。具体的なテキスト分析が、ほとんどないからである。以下、本節では、作品本文へ寄り添いつつ、「血の車輪」の読み直しを図りたい。

読解の鍵となるのは、テキストの「汽車」表象である。作中、各所に点綴される、この汽車表象の中にこそ、「血の車輪」の批評性と、大正一一年一〇月前後の未明の近代文明観が凝縮されていると筆者は考える。どういうことか。

本作において汽車は、人間に敵対する、禍々しいほどの暴力性を帯びた存在として描出されている。それが端的に表れているのが、老婆が汽車を名指しする際に繰り返し使う、「魔物」という言葉だ。老婆は「お前、誰が、こんなに怖しげな魔物を造つたのか知つてゐるか」と汽車を畏怖し、「人間ちゆものは、何といふ身の程を知らねえ馬鹿だかのう。いんまに、自分の造つた、この魔物に命を取られるといふことが分かんねえだかのう」「おらあ、気のせえか、この魔物が沢山こと人間を喰ひ殺すやうな気がしてなんねえだが……」と、汽車が人々を惨殺する末路を予言している。地の文＝語り手もまた、「婆さんの眼には、この文明が算出した器械が、さながら生きてゐる魔物になつて見えたことになんの不思議がなかつた」と述べ、老婆の汽車＝魔物という認識を是認している。

最終的に、この「魔物」が、線路へ横たわる「人間の枕木を片端から轢き砕いて」「幾百人、幾千人の人間の骨と肉とを砕き尽して」「戦地の国境」へ驀進する――文字通り「血の車輪」である――のは、先に述べた通りだ。汽車は、兵士を戦場へ送り、その家族を圧殺する、二重の殺人機械として表象されているのである。

そしてこの殺人機械は、紅野が指摘するように、近代が生み出した文明の「象徴的産物」以外の何物でもなかった。日本の公共鉄道史は、明治五年の、新橋・横浜間の開通をもって嚆矢とするが（注10）、その輸入元は、当時の鉄道先進国のイギリスである。宇田正『近代日本と鉄道史の展開』（日本経済評論社、平成七年五月）によれば、「欧米先進資本主義諸国に追いつくための急速な「近代化」政策の推進装置として、否、むしろ「近代化」それ自体の象徴といえるほどに、鉄道はそのネットワークを通じて国内の政治的統一把握、国民経済の市場形成、国民文化の平準的発達などにきわめて重要な役割を果たしてきたのであった」（一頁）。日本が近代化を成し遂げるにあたって、鉄道の受容・開発は必須事項だったのである（注11）。

「血の車輪」の汽車表象を顧みる時、鉄道と近代の密接な連関について、未明は自覚的だったと言うべきだろう。本作の汽車の車体には、「ぴかぴか光る金文字で1362という番号」がナンバリングされているわけだが、作中、すべての数字が漢数字で記される中で、唯一「1362」という数字だけが横書きのアラビア数字で表記されているのは、汽車と西洋近代を接合する暗喩に他ならない。そして、かつて「遠方の町」へ行く汽車に「眼を輝やかし」、汽車を魔物視する老婆を「くすくす笑」っていた青年（「なあ、おばあや、そんなことはねえだよ。安心さつしやい。（中略）人間が造つたのだもの、やはり人間の方が偉いにきまつてゐる」）が、轢殺される直前、最後に目にし、「恐怖と混乱」を感じたものは、迫り来る「〃1362〃のぴかぴか光る番号」であった。皮肉と言うべきか、青年は、自らが拝跪した西洋近代文明＝「1362」に虐殺されてしまったのである。

小説「血の車輪」の批評性は、近代日本が近代化を国是とするが故に、ともすれば閑却されている文明の暴力という問題を、卓抜な汽車表象や身体的（フィジカル）な畏怖感覚を通して、グロテスクなまでに露見させた点にあるだろう。冒頭述べた通り、本作は、基本的には、国家対民衆の二項対立図式を大枠とした一種の反戦小説だが、単なる反戦主義には回収できない文明批評も展開していたのである。

創作の背景にあるのは、おそらく未明の実体験だ。未明は、雑誌『中央公論』のアンケート「今年中一番私の心を動かした事」（大正一一年一二月）の「今年中一番私に嫌忌の念を

起さした事」という設問に対して、「上り屋敷にゐた時武蔵野線で、青年の轢死者があり、その血がガードに流れてゐるのを洗はずに五六日もそのままにしてあつたこと」と回答している。岡上鈴江・滑川道夫作成の「年譜」（『定本小川未明童話全集』第一四巻、講談社、昭和五二年一二月）によれば、未明一家が上り屋敷駅（現在は廃駅）近くの豊島区雑司ヶ谷に住んでいたのは、大正一一年六月から八月の二・三ヵ月ほど。本作の一次資料の巻末には「一九二二、八作」の文字があるから、未明は直近の体験に触発されて、筆を執ったに違いない。彼はまさしく、現実の「血の車輪」（の残骸）を目撃していたのである。

加えて、これは作品発表以後の話だが、大正一二年五月のメーデーの日にも、未明は本物の「血の車輪」と遭遇した。この日の朝、未明は、前田河広一郎・島中雄三と連れ立って、芝公園のメーデーへ向かっていたところ、飯田橋付近で、電車が自転車に乗った「小僧」と衝突。

当時の様子を、前田河は次のように回想している。

> 「轢いた、轢いた！」乗客は総立ちになつた。小川君は、「電車を出ろ、出ろ！」と叫んだ。（中略）運転士に掻きあげられて、黄ろな土ぼこりを浴びた、くたくたな躰が、血、血、血、……べろべろと、口から鼻から顎から、鮮々（あざあざ）しい血を吐いて、人形のやうな二本の足を投げ出してゐる。
>
> 前田河広一郎「メーデー印象記」（『種蒔く人』大正一二年七月）

この凄惨な事故については、未明も感想「自動車を停める」（『解放』大正一二年七月）で言及している。事故後、未明は「無産者の子供であるばかりに、あんな目に遇つたんです。もしブルジョアの子供なら、あの年頃では、みんな学校に行つてゐて、こんな場処を走り廻はつてゐることもなかつたでせう」というS君＝島中の意見に、「深い感動」を覚えたそうだ。

かくて本文中では、「最近科学が進歩を重ねるにつれて、いろいろの機械が発明された。そして、喜ぶものは、畢竟有産階級ばかりであつた」「独り、自動車ばかりでなく、すべての発明品は、却つて、それ等があることのために、人類を益したといふよりは、大衆、無産階級と、有産階級との差別をいよいよ隔絶ならしめたといつた方が至当である」と、自らの近代文明観を披瀝している。

つまり、煎じて言えば、特権階級のみを利し、無産階級を迫害するものであるというのが、

大正一一年一〇月前後の小川未明の近代文明観だ（**注１２**）。そしてこの文明観は、老将校（特権階級）に支配される汽車（文明）に轢殺される――あるいは戦地へ輸送される――民衆（無産階級）というかたちで、抜かりなく、「血の車輪」に形象化されていたのである。

三、同時代の汽車・鉄道表象　――人間を襲撃する「魔物」

ところで興味深いのは、大正期の小川未明には、汽車・鉄道を題材化した文学作品が、「血の車輪」以外にも、複数存在することである。そして、それらの作品における汽車・鉄道表象は、「血の車輪」におけるとそれと、極めて類似した内容を持つ。本節では、小説「文明の狂人」（『文章世界』大正七年四月）、「停車場近く」（『新興文学』大正一一年一一月）、「踏切番の幻影」（『中央公論』大正一三年一一月）の三編を取り上げ、比較の俎上に載せたい。

「文明の狂人」（『文章世界』大正七年四月）は一人称小説。主人公は新聞夜勤記者の「私」だ。私は老母と、「母一人、子一人の貧しい生活をしてゐた」が、ある時、親孝行として、老母に温泉旅行をプレゼントする。しかし、その道すがら、老母は温泉地のＳ駅のプラットホームで足を踏み外し、汽車から転落してしまった。

私は、負傷の原因である汽車に対して、次のように憤激する。

> あの巨大な鋼鉄で造られてゐる機関車と、黒い煙を吐いて、グラグラ煮え沸つてゐる釜が絶えず怖しい呻りを上げてゐるのに、而して幾台となく、莫大な重量を載積する列車とが連結してゐる、文明の怖しい魔力のある利器と、年老つたしかも力の衰へた母と相撲になると思はれるのか？

私にとって、年老いた母を傷付けたのは、運転を誤った運転手である以上に、汽車という「文明の怖しい魔力」だった。だからこそ私は、「汽車が黒い煙を上げて鉄橋に差しかかる刹那、轟然と脱線して河中に墜落する光景を眼に描いて、思はず声を立てんばかりに胸を躍らした」などと、汽車の破壊を妄想せずにはいられない。

しかし、「連夜の睡眠不足から、神経衰弱の症状が著しくなつた」私は、作品末に至ると、逆に、汽車によって圧殺される民衆の姿を妄想するようになる。思い浮かべるのは、奉公人の少年・広吉や行商人のその父親といった、総じて、かつて出会い、既に息絶えた社会的弱者である。

……次に……次に……私は、いづれもこの世の中から虐げられて、黙々として死んで行つた人々の姿をこの線路の上に認めたのであつた。（中略）汽車が来た！　汽車が来た！　私は、あ危ない！　危ない！　早く早く其処を退け！　と心で叫んだ。しかしもう遅かつた。彼等は気付かなかつた。轟然とした響きを立て、貨物列車が構内に突進して来た。而して、厚い重い、鉄の車輪の下に彼等を一人残さず轢殺してしまつた。

私の幻覚の中で、私の知る薄命の人民は、「一人残さず轢殺」されてしまったのである。汽車を人間に敵対する暴力的な「魔物」と捉え、汽車＝文明は無産階級を迫害するものであると見做す「血の車輪」のモチーフは、本作においても、顕現していよう（注13）。

「停車場近く」（『新興文学』大正一一年一一月）は三人称小説。主人公は電信技手のHだ。「文明の狂人」の私と同様、Hは神経衰弱に悩む、陰鬱な男である。彼は「生の享楽を感ずるよりは、寧ろより多く苦痛を感」じ、「いつも、暗い停車場の構内に光つてゐるレールを見ると死を考へる」自殺願望保持者でもあった。

Hはある日の早朝、町を散歩していたところ、材木屋の前で倒れる瀕死の労働者を発見する。聞けば、この労働者は病気で働けなくなってしまい、宿へ泊る金もないらしい。つまり、病持ちの生活困窮者なわけだが、材木屋の肥った主人は、冷淡にも、彼を自らの敷地内から追放してしまう。主人の雇い人は、警察に通報しようとさえする。周囲の見物客も、誰ひとりとして手助けしない。それから数日後、この「青白い顔」の男は「轢死者」――自殺か事故かは不明――として発見されたのである。

本作には、先の二作品と異なり、汽車を「魔物」視する描写は認められないけれど、Hにせよ、労働者にせよ、登場人物の死のイメージがすべて鉄道と関連している点は、注目に値しよう。社会から見捨てられた無産者は、最後、汽車によって、肉体を粉砕されるのである。

「踏切番の幻影」（『中央公論』大正一三年一一月）は三人称小説。主人公は踏切番の老人だ。老人はある日の夕方、線路の上を歩く、「背のひよろ高い青年」を発見し、「あ、もし、もし、線路道を歩るいてはならない（ママ）！」と声をかける。青年はその時は指示に従うが、数時間後、鉄道自殺をしてしまった。青年を轢殺した列車が、本文中、「大きな魔物」と形容されている点は、「血の車輪」と同様である。そして、町の人々の立ち話によれば、この「魔物」が轢き殺した青年は、食にこと欠き、見知らぬ人に金をたかる貧民だったという（「二三日前に、角の八百屋さんへはいつて、腹が空いて歩けないから、飯を食はしてくれろと言つたのです」「昨日は、荒物屋さんへ入つて来て、三拾銭ばかり借してくれろといつたさう

です」）。

最終的に、この青年の死が、かつて戦地で倒れた老人の息子の死と二重写しになり、老人が青年――あるいは人間一般――に対する慈悲心を回復するというのが、この物語の着地点なのだけれど、それは本稿の論旨とは関係ない。ここで筆者が問題にしたいのは、汽車が「魔物」視され、無産者たる青年がそれに轢殺される「血の車輪」との類似性である。

以上見てきた通り、小説「文明の狂人」「停車場近く」「踏切番の幻影」の三編の汽車・鉄道表象は、「血の車輪」のそれと、極めて似た内容を保持していたのであった。すなわち、「血の車輪」において、汽車は人間に敵対する暴力的な「魔物」として、あるいは無産階級の迫害者として表象されていたわけだけど、再三繰り返してきたように、そのような汽車表象はかなりの部分、前記の三作品にも散見されるのである。また、やや時間を遡ることをお許しいただけるなら、大正元年の著作集『北国の鴉より』（岡村盛花堂、大正元年一二月）には、髑髏が線路上で横死する、**図1**のような扉絵を発見できたりもする。系統は同じだ（**注14**）。

では何故、かかる汽車表象は繰り返されたのだろうか。それは、未明が汽車という西洋近代文明を、もっと言えば、汽車を含めた西洋近代文明全般を、畏怖・嫌忌していたからに他ならない（**注15**）。人間未明の根底には、科学技術の進歩を忌み嫌う、反テクノロジーという基層がある。この点については、**三章「ユートピアンの夢　――童話「時計のない村」」**でも論じた。

「血の車輪」のみならず、同時代の諸作品においても、小川未明は身体的（フィジカル）な畏怖感覚を催させてやまない、暴力的な汽車表象を通して、近代文明への厭悪を露わにしていたのである。

四、他作家との比較　――萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石

さてでは、汽車を「魔物」視する、このような汽車観は、同時代的に見て、とりわけ小川未明に固有のものなのだろうか。また、かかる汽車＝近代文明観は、一節で論じた未分化の社会主義思想と、如何なる連環を有しているのだろうか。本節では、汽車・鉄道を題材にした文学作品を複数例示し、他作家との偏差を辿ることで、未明の汽車表象の固有性と同時代性を明らかにするとともに、そのことの持つ思想的意味について、考察を加えたい。

比較の対象は、萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石の三名とする。何故か。三者はいずれも、汽車・鉄道をモチーフにした作品を多数著した、未明と同時代の作家であり、詩・童話・小説という相異なる表現形式で、それぞれ独自の汽車像を提起しているからである。偏差を探

るには打ってつけだ。

まずは、萩原朔太郎から検討したい。高橋世織が、「朔太郎テキストに〈汽車〉のヴァリエーションが登場することは、彼を論ずる者は程度差はあれ、気づき意識せざるをえなかったことだ」（「「夜汽車」からの眺め」『日本文学』昭和六〇年一一月）と指摘するように、朔太郎は、汽車・鉄道を素材にした作品を数多く残した作家である（注16）。例えば、彼の文壇デビュー作である、詩「みちゆき」（『朱欒』大正二年五月）は、汽車上の男女を描いた詩篇だが、その後、「夜汽車」と改題の上、第四詩集『純情小曲集』へ収録された。朔太郎は、文壇デビュー当時から、自身のテキストに汽車表象を織り交ぜていたのである。

では、本作において、汽車はどのように表象されているのだろうか。詩の末文を引用してみよう。

まだ山科は過ぎずや／空気まくらの口金をゆるめて／そつと息をぬいてみる女ごころ／ふと二人かなしさに身をすりよせ／しののめちかき汽車の窓より外をながむれば／ところもしらぬ山里に／さも白く咲きてゐたるをだまきの花。

萩原朔太郎「夜汽車」（『純情小曲集』新潮社、大正一四年八月）

本詩で描かれているのは、目下、男女が夜汽車で、東海道線を下っている光景である。この詩について、佐々木幸綱は、「一篇は、人妻と男が夜汽車に乗って、かりそめの恋の時間を過している、という設定である」「この一篇は、いわば姦通を素材にした詩である」（「夜汽車」『国文学　解釈と教材の研究』昭和五三年一〇月）と、簡にして要を得た――身も蓋もない――解説をしているが、そう読んで、さしあたり間違いはなかろう（注17）。明け方の車中で、密通する二人は身を寄せ合い、白く咲く「をだまきの花」を共視しているである（注18）。

つまり、本詩において汽車は、男女が世上に認められない恋を貫徹するためのロマンスの舞台として、表象されている。初出誌の『朱欒』には、同月、萩原咲二の名で、「しののめのまだきに起きて人妻と汽車の窓よりみたるひるがほ」との短歌が掲載されているが、ここでも男と人妻は、車中から窓外の「ひるがほ」――花言葉は「情事」――を共視している。両詩歌において、汽車は、大人の色恋を潤色するモダンな舞台装置として機能していると言えよう。人間の肉体を粉砕する「魔物」では、断じてない。

朔太郎同様、宮沢賢治もまた、自作に汽車・鉄道を多用した作家である。「銀河鉄道の夜」

「シグナルとシグナレス」「青森挽歌」「樺太鉄道」「岩手軽便鉄道の一月」等、その類例は枚挙に暇がない。信時哲郎によれば、賢治の鉄道に対する愛好は「ファンあるいはマニアと言ってもよいくらいのレベル」（「宮沢賢治論」『国文学　解釈と鑑賞』平成二一年六月）であり、賢治は在所である岩手近辺に鉄道が開通すると、すぐさま試乗しに出掛けていたという（注19）。そして、そのような乗車体験は賢治の文学創作の重要な糧となっていた、いやむしろ、汽車に乗るのが主目的で、その結果作品が生まれたに過ぎない場合も一方ならずあったと、信時は指摘している（注20）。今風に言えば、賢治は相当な「乗り鉄」だったようだ。

さて、そんな「鉄道ファン」（信時）たる賢治の汽車表象をすべて論じ尽くすことはできない故、ここでは彼の代表作である、童話「銀河鉄道の夜」に話を絞りたい。周知の通り、本作は生前未発表の遺稿であり、樺太への鉄道旅行――教え子の就職依頼と夭折した妹・トシとの交信を目的とする――の翌年、すなわち、大正一三年頃に起筆されたテキストである。「血の車輪」の執筆・掲載時期と近い。

異世界へ行ける箱――それが本作の汽車表象の核心である。例えば、乗客の鳥捕りは、ジョバンニの汽車の切符を見て、次のように語りかける。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれぁ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまでででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね」

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」（最終形）

石炭や電気で動いているわけではない、この動力源不明の汽車は、「天上へさへ行ける」「どこまでででも行ける」汽車である。そのことは、ジョバンニ自身、「僕たちどこまでだっていける切符持ってるんだ」と自負している点からもわかる。本作の汽車は、この世ならぬ宇宙空間（死者の国）をひた走る、異世界への交通手段に他ならない。

大澤真幸は、本汽車の越境性について、「銀河鉄道の切符によって「どこにでも行ける」という空想に具体的な現実感を付与していた社会的な背景は、ネーションからの溢出の段階にある大正期の鉄道であったということを確認しておかなくてはならない」（「ブルカニロ博士の消滅」『現代詩手帖』平成八年一一月）と述べ、「満鉄」（南満州鉄道株式会

社）など、同時代の帝国主義的植民地支配の現実が、賢治の想像力の基盤をなしていた由、指摘しているが、それはその通りなのであろう。いずれにせよ、汽車によって「ここではないどこか」へ飛翔せんとする、越境の想像力は、未明の暴力的かつ反人間的な汽車表象からは到底看取されない性質のものだ。

かくして、朔太郎・賢治と未明の汽車表象は、そのロマンスや越境性の有無の点で、明確に位相を異にしているわけだが、一方、未明と類似した汽車観を持っている人物もいた。夏目漱石である。やや時代は遡るが、小説「草枕」の一節を見てみよう。

> 汽車の見える所現実世界と云ふ。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつてさうして、同様に蒸汽の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。人は汽車で行くと云ふ。余は運搬されると云ふ。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み付け様とする。
>
> 夏目漱石「草枕」（『新小説』明治三九年九月）

引用箇所は作品末、主人公の青年画家が、停車場の茶店で、独自の「汽車論」に耽る場面である。汽車は「二十世紀の文明を代表する」利器であると同時に、人間を積み荷の如く無機的に運搬する、個性の軽蔑者である――主張の論旨はこれだ。

続けて画工は、「轟と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇が蜿蜒（のたくっ）て来る。文明の長蛇は口から黒い烟りを吐く」と、汽車を気味の悪い「長蛇」に譬えてもいた。小関和弘は、この隠喩について、「鉄道のおどろおどろしいイメージ、それは西欧近代社会の追究する近代的合理性に対する異和へとストレートにつながると言えそうである」（『鉄道の文学誌』日本経済評論社、平成二四年五月、二九二頁）と述べ、汽車を蛇に譬えるグロテスクな汽車表象は、近代文明に対する違和へと直結していた旨、指摘している。正しい指摘だろう。暴力性の程度等、その表象の中味は若干異なるものの、汽車を素材にした文明批評を行っている点で、漱石と未明は同一の地平に立っていると言える**（注２１）**。

しかしここで問題となるのは、未明は社会主義者で、漱石はそうではないという点である。つまり、社会主義者である未明が、汽車＝文明を嫌忌することには、それ固有の問題があっ

た。というのは、共産主義にせよ、アナキズムにせよ、本来の進歩思想としての社会主義は、資本主義下の卓越した生産手段を、資本家階級の私物から労働者階級の共有物へ奪取する思想であり、発達した文明は積極的に利用すべき「革命の条件」以外の何物でもないからである。社会主義者は、その定義上、文明の革新性に依拠する存在であるべきなのだ。

例えば、マルクス主義の歴史観（唯物史観）においては、生産様式の発達こそが歴史的発展の唯一の原動力であり、生産力の拡大に伴って、社会はより高次の次元――原始共産制→奴隷制→封建制→資本主義→社会主義――へ推移していくとされる。

したがって、マルクスが、「しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係（社会的生産過程におけるブルジョアジーとプロレタリアートの間の敵対――引用者注）の解決のための物質的諸条件をもつくりだす」（『経済学批判』岩波文庫、昭和三一年五月、一四頁）と語ったように、あるいは、レーニンが、「共産主義とはソビエト権力に全国的電化を加えたものである」と語ったように、マルクス主義者にとって、生産力の拡大をもたらす文明（テクノロジー）の進歩は、何ら忌むべき事柄ではない。「科学的社会主義」を標榜する旧ソビエト連邦や日本共産党が、戦後長らく、「原子力の平和利用」の名の下に、原発を推進・擁護してきたことは周知の事実である。

チェルノブイリ原発事故以降、その科学神話に強烈な疑問符が突き付けられているとは言え、ある時点までの左翼にとって、文明は否定の対象では決してなかった。今でもない。だから、「血の車輪」以下、前記の諸作品で反復された、汽車＝文明をネガティブな存在――畏怖すべき「魔物」――として捉えてしまう反科学技術的心性（テクノフォビア）は、小川未明の思想的特徴であると同時に、社会主義者としての限界でもあるだろう**（注22）**。一節で論じた未明の未分化の社会主義思想には、あらかじめその限界――社会主義ならざる要素――が内包されていたと見るべきなのである。それは、後年の転向を必然化させる、ひとつの遠因でもあったかもしれない。

小括

以上、本章では、小川未明の小説「血の車輪」（『文学世界』大正一一年一〇月）に関する作品分析を、作中の汽車表象へ着目しつつ、行った。

その結果、明らかになったのは、本作の汽車が人間――わけても、無産階級――に敵対する暴力的な「魔物」として表象されていること、未明が汽車を始めとする西洋近代文明全般――もちろん、前章で論じた、童話「時計のない村」の時計を含む――を畏怖・嫌忌してい

ること、そして、上記の汽車表象は、萩原朔太郎・宮沢賢治・夏目漱石といった同時代の作家のそれと比較した時、ある特異な異質性と一定の同時代性を示してもいたということである。

したがって本作は、基本的には、国家対民衆の二項対立図式を大枠とした一種の反戦小説でありつつも、単なる反戦主義の鼓吹に留まらない、近代文明への批評性を具備した作品であると評価できる。また、共産主義にせよ、アナキズムにせよ、本来の進歩思想としての社会主義は、発達した文明（テクノロジー）を「革命の条件」として積極活用する思想であるから、かかる近代文明嫌い（反科学技術的心性（テクノフォビア））は、社会主義者としての限界を告達していたと判断できる。

とは言え、大正期の未明が、革命を希求する社会主義者として活動を展開していた事実は、今一度吟味されるべきだろう。とりわけ、従来、アナキズム一辺倒の解釈が通説化している未明においては、当時の評論や同時代評から垣間見える、共産主義思想に対するシンパシーを見過ごすべきではない。

国内的には日本共産党が、世界的にはソビエト社会主義共和国連邦が創立・樹立されたこの年、小川未明は自らの思想に限界を内包させつつも、時代の風潮と呼応して、疑いなく赤化していたのである。

注

1　日高昭二「解説　一九二二（大正十一）年の文学」（『編年体　大正文学全集』第一一巻、ゆまに書房、平成一四年七月）参照。

2　例えば、「所謂プロレタリア文学と其作家」（『新潮』大正一二年二月）は、文壇の諸作家にプロレタリア文学・作家の是非を問う企画で、菊池寛・芥川龍之介・徳田秋声・上司小剣・近松秋江・豊島与志雄・久保田万太郎といった人々が回答を寄せている。菊池が、「所謂プロレタリアなるものは、現在では何人もが否定し難い事実である。丁度、朝が来たので、太陽が昇るといふのと同じ位、間違ひのない、近い将来の事実である。又、その台頭するプロレタリアを中心としたプロレタリア文芸なるものが、僕は勃興することも否定し難い事実であると思ふ」と認めざるを得ないほど、社会主義思想は一世を風靡していた。一方、広津和郎は、「二三年後の期待」（『解放』大正一二年一月）で、「自分は今の文学者――と云ふよりも文壇の人達を大分知つてゐる。そして所謂「ブルジョア文士」と云ふ攻撃の言葉が、大体に於いて叫ばれても差支へない程度の生活気分に文士達がゐるのを知つてゐる」と記

し、そんな階級選択を強いる文壇の風潮を批判している。当の未明は、「私達はもつと痛切にプロレタリアの味方であるか、ブルジョアの味方であるか、その態度を決すべきである」（木村毅・本間久雄・伊藤貴麿他「文壇漫評」『早稲田文学』大正一二年四月）と叫んでいた。

3　「苦闘の三氏へ」（『種蒔く人』大正一二年七月）は、未明・秋田雨雀・中村吉蔵の文壇二〇周年を記念して、作家たちが寄せた三人の人物評である。この内、加藤一夫は「小川君は不断の感激に生きて居る人のやうです。鋭敏なる直覚でもつて、また、純真な人道的精神でもつて、プロレタリアのために戦つて来たことを尊敬しなければならぬと思ひます」と、山内房吉は「小川未明氏、鋭い直観と性格的なフューマニズムと純な正義感とが氏をして今日あらしめたのだと思ふ。氏が時代と共に新しい所以だ。世渡り上手の、悧巧な作家などは正直者の運動であるプロレタリヤ運動の戦線に立つやうな損なことはしないであらうから」と述べ、プロレタリア運動に献身する未明の歩みを評価している。

4　自由思想家組合に関する新聞報道――未明の情報を含む――は、他に「思想家会合　二度解散を命ぜられ遂に数名検束される」（『東京朝日新聞』大正一一年三月一二日）、「過激思想取締に反対の自由思想組合生る」（『読売新聞』大正一一年三月一三日）がある。加えて、未明自身、「過激主義と現代人」（『読売新聞』大正一一年二月二四日）や「過激法案の不条理」（『東京朝日新聞』大正一一年三月一四日）といった文章で、過激社会運動取締法案を厳しく批判していた。

5　その他、未明は婦人運動家で、後に参議院議員を務めた奥むめをが主宰する婦人問題の集まりにも参加し、講話していた由、「職業婦人の研究会」（『東京朝日新聞』大正一二年五月三〇日）は報じている。また、これはほとんど知られていない事実だと思うが、未明は同時期、女性文筆家の指導も行っていたようだ。「小川未明氏に私淑　階級組織の欠陥が課題「墓を発く」の作者藤村千代夫人語る」（『読売新聞』大正一一年五月一五日）には、「私が文壇で尊敬してゐるのは小川未明氏で、これまでも上京毎によくお伺ひ致しましたが、あの創作に対する真摯な態度、そのお話振りなどに接しますと、涙ぐましい位の感動を与へられます。それらのことから違つた意味で、或ひは、思想的にも氏の影響を受けてゐるかも知れません」との藤村（宇野千代）の発言が、「小説に筆を染め出した小森多慶子さん」（『読売新聞』大正一一年一一月二八日）には、「小森多慶子さんは以前から小川未明氏に師事して既に『銀の兎』と『星の子供』という二冊の童話集を出版して居ます」との一文が、それぞれある。

6　例えば、山室静は、大正期の未明の思想傾向について、「彼は上杉謙信の崇拝家の父君ゆずりの精神家で、正義と真理のために戦うべく筆をとったのだが、その立場は人道主義とクロポトキン流の相互扶助を基調にするもので、マルクス流の唯物論と階級闘争説にはほとんどまったく無縁だった」（「解説」『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五一年一二月）と断じている。西本鶏介も、「未明がアナーキストとして社会主義の立場に立ったのも、大衆運動の指導者たらんとするためではなく、あくまで貧しい人々への共感と同情であり、すべての人間が平等に幸福であってほしいと願う理想主義的な思いからである」（「解説」『定本小川未明童話全集』第九巻、講談社、昭和五二年七月）と述べ、大正・昭和初期の未明を「アナーキスト」として位置付けている。続橋達雄が執筆した、『日本児童文学大事典』第一巻（大日本図書、平成五年一〇月）の小川未明の項は、「大杉栄と知りアナーキズム思想の影響を受け、また、クロポトキンの相互扶助論に共鳴する」以上の思想解説を、大正年間中、行っていない。

7　「芸術とは何ぞや　余が童話に対する所見」（『小学校』大正一一年八月一日）でも、未明は「ほんとうに子供を理解したら何もかも一切が子供にあるといふことを知らなければならぬ。ブルジョアに恐怖される共産主義の哲学も、純一なる美の世界も、無差別の社会も皆子供に存する」と述べ、「共産主義」という言葉を肯定的に使用している。この他、大正期の未明の共産主義への親和性については、三章や五章で論じた。

8　吉田金重も、「苦闘の三氏へ」（『種蒔く人』大正一二年七月）で、「しかし氏はまだまだ、社会的にも生活的にも、その渾身の努力を致されるであらうし、また致して貰はなくてはならんと思ふのです。それは氏がボルセビストであらうと、またアナアキストであらうと、敢て問ふところではありません。ただ氏はいつまでも、正義の味方であると言ふことは、言い得らるるのであります」と語り、未明のボル派的な傾向を一定認めている。

9　同時代評としては、林政雄「小川未明氏の近業二つ」（『新興文学』大正一二年四月）と、吉田金重「抗弁　作品の印象（下）」（『東京朝日新聞』大正一二年五月四日）の二つがある。林が、「「血の車輪」は、私は一番好きだつた。表現派の舞台面のやうな展出と前後の関係とは、極単（ママ）な、而も大胆な主観であつて、作者の表示を有効ならしめてゐた」と本作を評価するのに対し、吉田は、「誰かは「血の車輪」を表現的だなぞと言つて、非常に推賞してゐた様であつたが、私らとしては寧ろ「黒い河」や「地底を歩く人」を取るものである」と述べ、さほど評価していない。

10　堤一郎『近代化の旗手、鉄道』（山川出版社、平成一三年五月、一二頁）によれば、

産業鉄道は、明治二年に敷設された、北海道柏村・茅沼炭鉱の石炭輸送線（約二・二キロメートル）がもっとも古い。

11　日本の鉄道建設に主導的な役割を果たした、大隈重信・伊藤博文ら明治政府幹部は、「中央集権制強化」と「殖産興業の「牽引車」的役割」の二つの効果を主に期待していたと、原田勝正『日本の鉄道』（吉川弘文館、平成三年三月、一一・一二頁）は記している。

12　その他、未明は「死の凝視によつて私の生は跳躍す」（『中央公論』大正一一年一一月）で、文明の恩恵が庶民には行き渡らない現実を、次のように嘆いている。「私は、自分の生活を顧みた。この世の中の文明や、幸福が自分達の上にも分かたれただらうか。自分の子供等は、欠乏を感じずに暮らしただらうか。妻は、そして、両親は？　そればかりでない。私の半生に於て相知つた、其等の貧しい人達は、どんな暮らしをしただらうか。屈辱に、いつまで甘んじなければならぬといふのだらうか？」

13　紅野敏郎は、本作について、「「文明の狂人」は、汽車という乗り物、「文明」なるものの「魔力」を力強く描いた、アナーキーな分子の混入した作品で、この時期の未明の時代認識をよく物語っている作品である」（「解説」『定本小川未明小説全集』第三巻、講談社、昭和五四年六月）と論評している。

14　**図1**の扉絵は、『北国の鴉より』収録の小説「鉄片」（『新声』明治四二年一月）を元にしていると考えられる。この小説の主人公は村の少年・太吉。父親の孫六が、車夫の仕事中、「二十二哩（マイル）の全速力」で疾駆する汽車に轢殺されてしまい――客の「吝嗇（けちんぼ）大臣」は助かる――、汽車を憎む太吉がその転覆を企てるものの、結局失敗に終わる話である。この他、汽車が何らかのかたちで人間を殺傷する小説・詩に、「鉄道線路」（『新小説』明治三九年一一月）、「柩」（『早稲田文学』明治四〇年八月）、「断詩」（『未明感想小品集』創生堂、大正一五年四月）等がある。

15　例えば、未明は「私は、あの怪物にも等しい大きな物体が、よくも、私達民衆の歩いてゐる狭い道の間を図々しく疾走されるものだと思ふのである」「人間の肉体で、この鋼鉄で造られた機械と衝突し、抵抗することができるものでない」（「自動車をとめる」『解放』大正一二年七月）と自動車を怖れたり、「私は、いかなる名曲であつても、これを蓄音機で聞くことに興味を有しない。何のためといふに、それから、真の感激が得られないと思ふからである。飾られた室の裡で、みんなが礼儀正しく座つて、この物を言ふ機械の前に耳を傾けるよりは、街塵を浴びて、汗に汚れ、日に焼けた乞食が通る人々に対して弾くバイオリンや、尺八の音の方に、より痛切な何ものかを感ずるからである」（「塵埃と風と太陽」『早稲

田文学』大正一一年八月）と蓄音機を批判している。

１６　「夜汽車の窓に」（『新しき欲情』アルス、大正一一年四月）、「旅上」（『純情小曲集』新潮社、大正一四年八月）、「地下鉄道にて」（『氷島』第一書房、昭和九年六月）、「帰郷」（『氷島』同前）、「猫町」（『セルパン』昭和一〇年八月）等。

１７　高橋世織は、初出当時、世間を賑わせていた北原白秋の姦通事件が、本詩のモチーフになっているのではないかと、「「夜汽車」からの眺め」（『日本文学』昭和六〇年一一月）で指摘している。「この詩を投稿した詩誌「朱欒」（この号で終刊）は白秋主宰であり、この詩集『純情小曲集』は白秋にデジケートされたものだ。当時の白秋の人妻事件は世上に知られていて、そこに朔太郎の自己劇化も重ね合わせられたのかもしれぬ」

１８　以下、高橋。「この「夜汽車」の中にあっても、二人身をすり寄せてお互い、見つめ語らうわけではない。共にひとつの外なるもの、光景を視ることを共有する。いくぶん強要気味の〝まなざしの同伴〟は〈をだまきの花〉へと焦点が結ばれる」「車窓から人妻とまなざしを共有し、白い〈をだまきの花〉に視点が統合される秀抜なエンディング。会話らしきものは聞こえず、ここでも消音された世界が展開された」

１９　同じ論稿で、信時は、「賢治は新しい路線が開業すると（新しい区間が開業された場合も含めて）、少々遠くてもわざわざ乗りに行っていたことが年譜や作品日付を検討することから明らかで、開業直後の橋場軽便線（大正十年六月）、東横黒軽便線（大正十年十一月）をはじめ、山田線（大正十二年十月）、八ノ戸線（大正十三年十一月）、五所川原線（大正十四年五月）、大船渡線（大正十四年七月）などに乗っていることが確認できる」と指摘している。

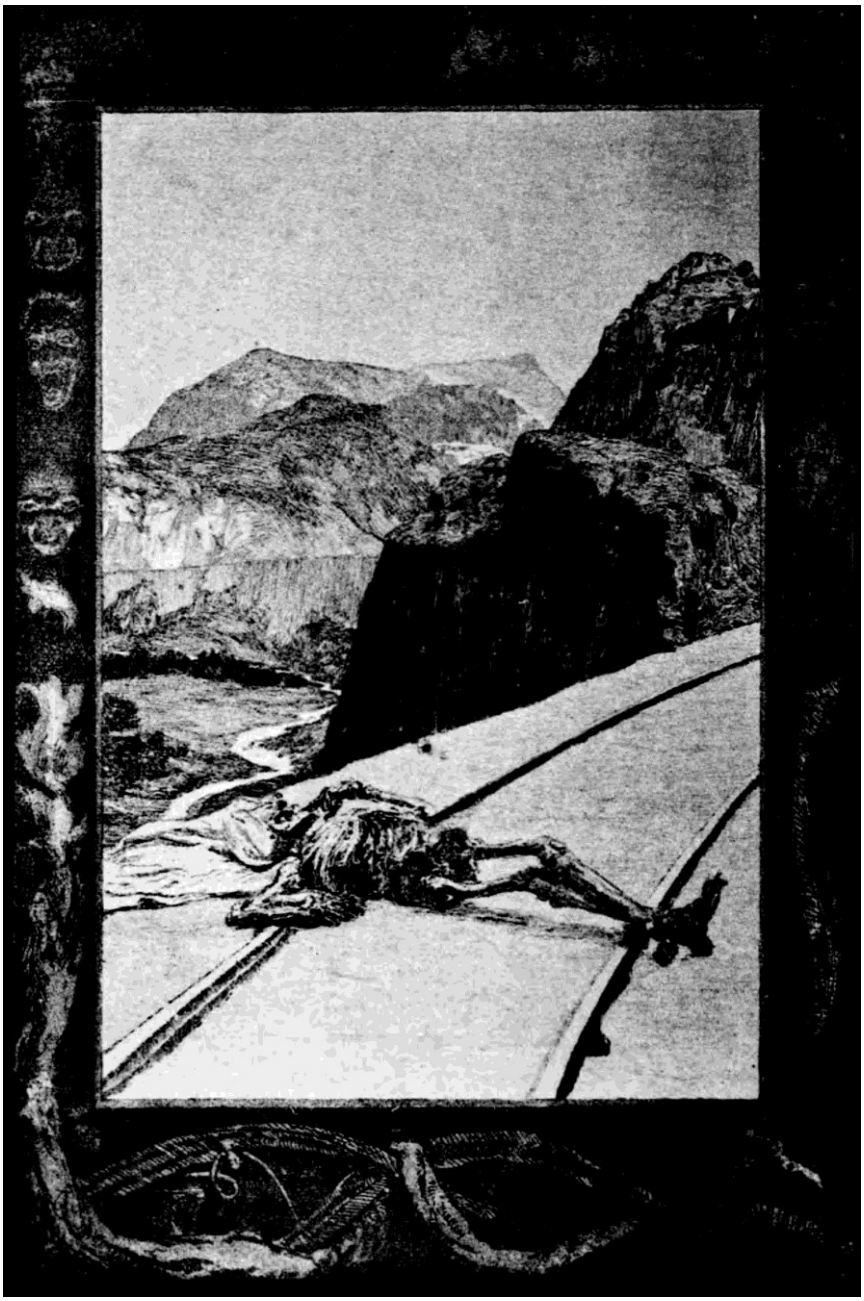
２０　信時の「鉄道ファン・宮沢賢治」（『賢治研究』平成一七年七月）には、「鉄道に乗りたいがために敢えて用事を作ったという側面もあったのではないだろうか。つまり鉱物の採集や見学、創作の方が手段であり、鉄道に乗ることの方が目的である旅も多かったように思うのである」との記述がある。

２１　加藤禎行は、「「汽車論」の隠喩　夏目漱石「草枕」をめくって」（『日本近代文学』平成一二年五月）で、本作の汽車が、文明批評の一環として、痛烈な批判の対象になっていた由、次のように指摘している。「夏目漱石「草枕」（『新小説』一九〇六〈明治３９〉年九月）は、旅行小説という側面を持ちつつも、明治期の旅行とは親密な関係だったはずの汽車を、徹底して否定的に書こうとしている。すなわち、「鉄道をかけて一儲けする了見」（一）、「汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼儀で疲れ果て」（一）と記述される汽車は、営利的な

経済活動を示す典型的事例であり、画工をうんざりさせる二十世紀的生活の代名詞なのである」

２２　山田稔は、「小川未明における思想と美学」（『文学』昭和三六年一〇月）で、「文明の発展にともないますます分化、肥大していく欲望（贅沢の欲求）を十分に充足しうる社会」、すなわち「快楽社会」こそが、「アナーキズムが未来にえがく理想社会のイメージ」であるのに対し、未明の思想は「禁欲主義」と結びついた「貧血のアナーキズム」であると批判している。「アナーキズム」を「共産主義」の語に置き換えても事情は同様だろうが、いずれにせよ、未明は、本来社会主義が肯定している人間の欲望やそれを充足させるための文明（テクノロジー）を肯定的に捉えられなかったとする山田の指摘は正しい。筆者の主張する「社会主義者としての限界」は、山田論の延長線上にある。

図１　線路上で横死する髑髏（作者不詳）



五章　革命的知識人の挫折　――「童話作家宣言」

知識人なくして近代史における主要な革命は存在しなかった。だが逆に、知識人なくして主要な反革命運動も存在しなかった。知識人は、こうした運動の父であり母であり、もちろん息子であり娘であり、さらには甥であり姪であった。

エドワード・W・サイード『知識人とは何か』
（平凡社ライブラリー、平成一〇年三月、三六・三七頁）

はじめに

本章が射程に入れるのは、小川未明「童話作家宣言」（「今後を童話作家に」『東京日日新聞』大正一五年五月一三日／「事実と感想」『早稲田文学』大正一五年六月）の歴史的読み替えである。小説の筆を折り、童話へ専心することを誓った、この「宣言」は、従来、初期プロレタリア文学運動の開拓者で、アナキスト系作家の未明が、折からのマルクス主義の台頭に融合できず、童話へ逃れた――あるいは積極的に選択した――とする解釈が一般的だった。

例えば、山室静は「結論的に言へば、これは結局自由と美との使徒であり、人間性の善意と愛情に深く信頼する未明のヒューマニズムが、社会思想としては当然アナキズムの方向をとつて、当時やうやく支配的になりつつあつたマルクス主義の中央集権的強権主義と階級闘争の主張とに同調することができず、それがもたらす運動の分裂と人間性の狭隘化に絶望を感じた結果と言へようか」（「解説」『小川未明作品集』第四巻、講談社、昭和二九年一〇月）と、論じている。

しかし、この解釈は根本的に誤りである。巷間、流布しているように、未明＝アナキストではないからである。大正年間の未明は、「階級闘争は必然であり、すべての人間的運動は、資本主義的文明の破壊からはじまる」（「芸術は革命的精神に発酵す」『解放』大正一一年一月）と語る階級闘争主義者であり、むしろマルクス主義と近接した地点にいた**（注1）**。そして、自己を知識人と見做す未明は、階級闘争の中へ、熱心に自己＝知識人の役割を見出そうとしていた。

本章で筆者が目指すのは、小川未明の知識人批判を手掛かりとした、宣言の読み直しである。大正期、未明は知識人論を量産しているが、評論と小説の知識人表象の間には、重大な差異がある。詳しくは後述するけれど、この差異には、階級闘争に対する、未明の信

仰と棄教がアンビバレントに胚胎していると言えるだろう。私は宣言を、アナキストのマルキストに対する敗北ではなく、階級闘争に自己を同定できなかった知識人の敗北として読みたい。以下の文章は、この仮説を論証するためにある。

一、未明の知識人批判 ――二つの視点

小川未明は大正期、資本主義を強烈に批判する。資本主義は、平等とかけ離れた富の偏在をもたらす制度だと考えたからである。未明の資本主義批判の根底には、持つ者と持たざる者の格差へ憤るヒューマニズムがあった（注2）。民衆の困窮を座視し得ない未明は、この時期、資本家階級か労働者階級の「一方が征伏（ママ）せらるるまでは争闘が続けられべく（ママ）考へらるる」（「本然的の運動」『新潮』大正八年九月）と主張する、階級闘争の唱道者となって行く。

しかしここで問題となるのは、未明本人は、資本家はもとより、労働者でもない点である。早稲田大学在学中、坪内逍遥に認められて作家デビューした未明は、一般社会での就労経験がほとんどない（注3）。また、未明が教育を受けた明治期の学制において、（私立大学を含む）「大学」進学者は、数の上では極めて僅少な、知的エリートだった（注4）。未明は自らを、労資どちらの階級にも属さない「知識階級」であると認識していた。このような両階級の狭間にあって、知識人はどのように振舞うべきか、未明はその立ち位置を見定めようと試みる。それは、未明自身の自己探求とも言えるだろう。本節では、当時の評論から垣間見える、未明の知識人批判の視点を二つ抽出したい。

第一は、知識人＝階級闘争の妨害者という視点である。

> 私は、真の敵が、常に対立した、反主義者にばかりあるとは考へない。たとへば社会主義に、対立する真の敵は、もとより資本主義には相違ないが、これあるがために、闘争的意志は強められ、信念は、益々浄化される。しかし、其の間に介在する灰色の階級や、主義者は、却つて相互の争闘的精神を鈍らせるばかりでなく、真理に向つての前進を阻止する妨害をなすことを知らなければならない。一般に知識階級が、ある時期に際して憎視され、甚しき反感を買ふのは、これがために他ならないのであります。
>
> 「芸術は革命的精神に発酵す」（『解放』大正一一年一月）

ここで未明は、社会主義の「真の敵」が資本主義であることは前提とした上で、両階級の「争闘的精神を鈍らせる」「灰色の階級」として、知識人を批判の対象に挙げている。知識人はブルジョアの階級支配の補完勢力であるとの見立てである。

同様の批判は、他のテキストでも確認できよう。例えば、「闘争を離れて正義なし」（『中央公論』大正一一年七月）では、「知識階級の崩落は近づいた。そして、彼等が、社会運動に対して、肯定か、否定か、其の態度と旗色を鮮明にしなければならなくなつた。階級闘争の激波が上るたびに、中間の浅瀬は浚はれて行く」と、「プロレタリヤの正義、芸術」（『解放』大正一一年八月）では、「彼等（今日の文化生活主張者――引用者注）は、死せる宗教、歴史の偶像崇拝者であつて、知識階級の名によつて、旧文化を擁護しつつある、階級闘争の邪魔者であるのである」と、それぞれ知識人を「中間の浅瀬」「階級闘争の邪魔者」の語であげつらっている。本来、階級闘争を通じて、社会主義を実現しなければならないのに、既存秩序の擁護者に甘んじている知識階級。彼らの幇間振りが、未明には我慢ならなかったのだ。

ところで、このような批判の切り口は、未明オリジナルのものではないだろう。ひとつには、大杉栄の思想的影響があったと、筆者は考える。後年、未明本人が、随想「童話を作って五十年」（『文藝春秋』昭和二六年二月）で語っている通り、大正期、未明と大杉は近しい関係にあった（注5）。

交友のきっかけは、大正二年六月、大杉が自身の主宰する『近代思想』誌上で、未明の短編小説「嘘」を取り上げたことによる。同年八月には、大杉が未明宅を初訪問した。「大正五年文壇の予想」（『新潮』大正五年一月）で、大杉は「従来僕が最も嘱目してゐた作家」に未明を挙げているから、お互い共鳴するところがあったのだろう（注6）。以後二人は、渡辺政太郎が主催する労働問題研究会に参加する、日本社会主義同盟の設立発起人へ名を連ねるなど、文壇・論壇のみならず、社会運動の現場でも行動をともにするようになる。大正一二年、大杉がフランスから国外追放処分を受け、送還された際は、帰国歓迎会の呼びかけ人となった。また、関東大震災後、大杉が憲兵隊に虐殺された折は、葬儀に出席した（注7）。ことほど左様に、両者の交友関係は篤い。

思想上の接点はどうか。大杉は、「征服の事実」（『近代思想』大正二年六月）で、マルクス・エンゲルスの「共産党宣言」を紹介し、歴史を貫く階級対立の存在を主張している。そして、両階級の「中間に在る諸階級の人々」、すなわち知識階級は、征服階級による「組織的暴力と瞞着との協力者となり補助者となつてゐる」と難じている。「謂ゆる評

論家に対する僕等の態度」（『労働運動』大正九年四月）では、知識人を「奴等は、いつでも、権力階級の擁護者であり、被圧政階級の欺瞞者である」と痛罵している。大杉の主張の反復を未明に見ることは容易い。

第二は、知識人＝革命家という視点である。

> 知識あることを誇らんとする者があつたなら、其の人は、同時に、真理を解するが故に、社会革命家でなければならない。知識があつて、もし其の心がなかつたなら、其の人は、あまりこの社会に価値のない人間であります。（中略）もし今日の知識階級と名の付く者の中に、社会主義的精神の分らない者があつたなら、其者は馬鹿とか利巧とか評される前に恐らく良心がないかを疑はれるであらう。
>
> 「草木の暗示から」（『時事新報』大正一〇年四月二七・二八日）

先述の通り、未明は知識人を、ブルジョアとプロレタリアの両階級の中間に位置する勢力と捉え、その多数をブルジョアの提灯持ちとして批判していた。しかし決して、それでこと足れりとしていたわけではない。知識人は労働者階級と連帯し、階級闘争において独自の役割を果たすべきだと、未明は考えた。先の引用文では、知識人は、社会主義の「真理を解するが故に、社会革命家でなければならない」と熱く語っている**（注８）**。革命家でない者は、「この社会に価値のない」「恐らく良心がない」とまで断罪している。

「再び「私学の精神」に帰れ」（『早稲田大学新聞』大正一四年一月二一日）も、同趣旨の一文である。この文章で未明は、官学（帝国大学）がブルジョアの養成機関であるのに対し、私学（私塾・私立学校）は元来、民衆のための学府であったし、またあるべきと、その存在意義を強調している。そして、私学の創立者と、ロシア革命の立役者であるマルクスやレーニンを重ね合わせ、彼らを「民衆の前の光り」「民衆のための父兄」「真理の伝播者」「真理の維持者」と称えている。知識人＝革命家の具現化した姿こそ、彼らなのだ。

「知識階級雑感」（『中央公論』大正一二年六月）では、知識人＝革命家の役割として、「無産階級教化」が挙げられる。無産階級教化とは、理論・研究・教育の各方面から、労働者階級を教導することである。知識階級の大半は「功利主義的、個人主義的思想」の持主だが、その一部は、「熾烈なる真理の擁護者」として労働者階級を知的に援助してきたと、未明は誇る。階級闘争における知識人の役割を過大に見積もろうとしていた未明の意

気込みが窺えよう。なお、この点に関して、大杉は抑制的であり、未明と比べ、指導者意識は格段に低い（注9）。

二、小説における展開・破綻 ――孤独な知識人像

本節では、評論において主張された小川未明の知識人批判――二つの視点――が、小説でどのように展開、あるいは破綻しているか、その異同を確認したい。

第一は、知識人＝階級闘争の妨害者という視点であった。結論から先に言うと、この視点は小説でも再現されている。

「虚を狙ふ」（『中央公論』大正一〇年七月）は一人称小説。語り手は「私」だ。職業は「精神労働者」とされるのみで、詳しい職種は定かではない。私が、「無産者大会」へ参加し、そこで出会ったセルロイド工場の労働者と会話を交えるのが、おおよその物語の筋である。この労働者は貧困のあまり、かつて一〇歳の娘を早世させてしまった過去を持つ人物だ。彼は「其時から、命を復讐のために捧げるべく決心した」と、支配階級への憎しみを募らせる。しかし、「学者達は、いろいろ理屈を言」うものの、「この感じ（支配階級への憎しみ――引用者注）は全く分らない」人々だと怒る。本編では、労働者と感情的共有をできない不信の対象として、知識人が描かれている。

「彼等の行く方へ」（『中央公論』大正一一年一一月）は三人称小説。主人公は新聞記者の石田だ。彼は取材と自身の興味から、経済学者・Kのうちを訪ねる。Kは世間から、「無産者の頼み甲斐のある味方」と目されているインテリゲンチャである。しかしKの自宅は、「何となく余裕のある生活振りを示」す高級住宅地であり、彼の語る社会時評もラディカルな変革を謳うものではなく、したがって、石田にとって「何となくもの足りな」いものだった。石田は、Kと無産者の生活には「何の共通点もない」と結論付ける。本編では、一見労働者の味方と思しき知識人が、その実、感情・生活・理論の諸点で、労働者と離隔した存在である現実が描出されている。

このように、評論で示されたブルジョアの階級支配の補完者、既存秩序の擁護者――「灰色の階級」「中間の浅瀬」「階級闘争の邪魔者」――としての知識人像は、小説においても造形されていると言えよう。

第二は、知識人＝革命家という視点であった。が、こちらは完全に破綻している。未明は評論のように、知識人を革命家として描けていない。

「無産階級者」（『中央公論』大正九年七月）は一人称小説。語り手は、新聞記者の「私」

だ。作中、私は、新聞記者として見聞きした、様々な無産階級の悲劇を語る。例えば、日露戦争で両足を失った廃兵、工場で右手を失った機械工、トンネル工事の事故で死んだ工夫がそれである。このような無産者の惨禍を知った私は、「私は、知識階級の中堅である現在の新聞記者生活をして、いつまでもかうしてゐられない気が起つたのです」と、知識人として一念発起する決意を語る。だが結局、この決意は決意として語られるのみだ。私は、特に行動を起こすことなく、新聞社をやめてしまう。階級闘争に参加したり、「無産階級教化」に励む姿は、最後まで描かれない。

「自殺者」(『早稲田文学』大正一一年一月)は一人称小説。語り手は職業不明の「私」だ。私は詩人のHとの会話で、近々ドイツへ行くと語るHに、ドイツやオーストリアが目下飢饉である現状――作中明示されていないが、題材となった史実は、第一次世界大戦の折のイギリス軍によるドイツ封鎖か――を伝え、洋行をたしなめる。その際に持ち出したのが、オーストリアのある大学教授のエピソードだ。教授は、「年寄や、小供が、食を求めて、しかもそれを得られずに、叫びつづけて、死んで行く有様を見ると、どうしても、自分は、口に食物を入れる気になれなかつた」故、絶食し、餓死してしまったのだという。

「彼等の行く方へ」で描かれた豪奢な生活を送る経済学者と異なり、本編の教授は、飢饉に喘ぐ無産階級の辛苦をともに受忍しようとしている。その意味で、知識人としての高潔な良心は認められよう。しかし決起の帰結は自殺であり、民衆を誰ひとり救えていない。

「土地繁栄」(『中央公論』大正一二年一〇月)は三人称小説。とある田舎の山を舞台とした群像劇だ。この山の付近はもともと平凡な土地だったが、H石油会社が油田の採掘に成功することで、一挙に活気づく。だが、石油はまもなく枯渇。町は存亡の危機に立たされる。会社の主任技師・Kは、解雇に直面した坑夫組合員に、新たな採掘候補地を会社へ進言するよう、けしかけられる(「知識階級が、立場を明かにしなければならない時です。私は、ただあなたの良心に、訴へるのであります」)。

結局Kは進言し、石油は湧出するのだけれど、ここで新たな問題が発生する。新客を当て込んだ土地の者が、料理屋の開業資金を得るために、娘を女郎・女工として売り飛ばしていたのだ。Kは、「飽迄執拗な資本主義の力と、其の力の及ぶところ、大した影響のあることを考へさせられたのであつた」「有望な鑿掘(ママ)区域だ！　と言つた、自分は、果して、この悲惨な事件に、間接的に、責任を持たぬだらうか？」と沈思する。本編におけ

る、知識人の善意の行動は、皮肉な帰結ながら、労働者の救済ではなく、資本主義の延命と結びついてしまっている。

かくして、評論で呼号された知識人＝革命家の像は、小説では実を結んでいない。小説中の知識人は、決意の宣言のみで終わる者（「無産階級者」）、単身決起して非業の死を遂げる者（「自殺者」）、資本主義の延命に加担してしまう者（「土地繁栄」）といった、革命の敗残者だ。

もちろん、評論と小説との間には、表現形式に根本的な違いがある。評論で語る理想的な知識人像が、小説の作中人物（ましてや主人公）に直截に反映されていなかったとしても、とりたてて不思議はないだろう。優れた作家であれば、なおのこと、そういった公式主義は避けるはずである。しかし一方、階級闘争における知識人の役割を、未明がもし本当に確信していたなら、もう少し革命の萌芽を予見させる知識人を表象することができたのではないだろうか。前記の小説の知識人たちが、総じて未来への希望を欠いた人物であることは、未明の知識人＝革命家論のつまずきを示して余りある。

代わりに小説では、評論では論じられていない、新たな知識人表象が浮かび上がってくる。それが第三点の視点、すなわち知識人＝孤独な存在という視点だ。知識人を革命家として描き得ない未明は、この時期、民衆との間に断絶を感じる孤独な知識人の姿を、繰り返し描出している。

「幻影と群衆」（『著作評論』大正九年六月）は三人称小説。主人公は職業不詳のKだ。Kは社会問題を扱う講演会に弁士として参加している。Kは聴衆に向かって熱弁し、「拍手が湧いて、其の建物が震へるばかり」の反響を得るが、演説の途中、「群衆の顔が、知覚のない髑髏が積み重ねられてあるやうに見え」てしまう。そして、恐怖を感じる。講演会後、Kは、数多くの左派団体が社会に存在しながら、一向社会が変革されない現実に「寂寥」を感じ、群衆で賑わう町が「墓場よりも、もつと寂しい場所」に映る。本編の知識人・Kは、本来仲間であるはずの聴衆を「髑髏」に幻影したり、運動の現状に「寂寥」を感じる鬱屈した人物だ。評論で示された歯切れのよい革命家像とは、かけ離れている。

「堤防を突破する波」（『中央公論』大正一四年六月）は一人称小説。語り手は作家の「私」だ。この小説では、私が様々な人物の訪問を受け、議論を吹っ掛けられる。議論のテーマはおおむね、日本社会内部の階級問題、とりわけ「知識階級」評価だ。ある貧しい画家の青年は、知識階級を「彼等は、寄生虫の癖に、上品振つたり、何一つ自分のものを持たない癖に、高慢な顔付をしてゐるのです」と激しく罵る。また、ある困窮した労働者は私に借金を断ら

れると、「さういふことを言はれるのは、ほんたうのタワリシチ（ロシア語で「同志」の意――引用者注）でないからです。やはり、知識階級なんだ」と非難する。「同志」でないと断じるのは、左翼の人間にとって、最大の拒絶だろう。

ラスト、メーデーのデモ隊列を見た私は、労働者と知識人の彼我の隔絶を感じ、「それにしても、この知識階級の一人である私の心は限りなくさびしかつた」と孤独感に襲われる。未明は評論で、「自分たちの同志である、民衆」（「再び「私学の精神」に帰れ」）など、労働者と知識人の団結をアジテーション的に謳う反面、両者の懸隔を察し、寂寞を覚えていたのではないか（注10）。

ちなみに、この小説のタイトル「堤防を突破する波」の「堤防」は知識階級、「波」は労働者階級の謂いで、「波」には知識階級の制動を突破する労働者階級の力強さが仮託されている。

三、「童話作家宣言」解釈史の陥穽 ――未明＝アナキスト図式の誤り

以上見てきた通り、小川未明の知識人描写には、評論と小説との間で、重大な乖離があった。未明は一方で知識人を「革命家」と規定しながら、他方でそれを「孤独な存在」として表象してしまっている。筆者は、この評論と小説との間のアンビバレントな矛盾の中に、大正一五年の「童話作家宣言」へ至る道が暗示されていると考える。どういうことか。

冒頭述べた通り、この「宣言」は、大正一五年五・六月に発表された二つの文章からなる。一つは「今後を童話作家に」（『東京日日新聞』大正一五年五月一三日）、もう一つは「事実と感想」（『早稲田文学』大正一五年六月）である。

この中で未明は、「多年私は、小説と童話を書いたが、いま、頭の中で二つを書き分ける苦しさを感じて来ました。「未明選集」六巻の配布も、去る四月に完了したのを好機として、爾余（じよ）の半生を専心わが特異な詩形のために尽したいと考へてゐます」（「今後を童話作家に」）、「「未明選集」の六巻目がこの四月にて完了した。材の取り扱ひ方、見方共に、小説と童話とは異なつてゐる。そして、いま、私の頭は、同じ月のうちに、どちらをも書くといふことがだんだん苦しくなつた。故に、この選集を機会として自らもまた本領と信ずる童話に、余生の全体を尽さうかと考へてゐます」（「事実と感想」）と、それぞれ語っている。

小説を止め、童話一本へ切り替える理由として、双方に共通して挙げられているのは、①小説と童話という異なるジャンルを書き分けるのが苦しくなったこと、②『小川未明選集』全六巻（未明選集刊行会、大正一四年一一月～同一五年四月）の発行をもってこれまでの創

作活動に一区切りついたこと、③自己の真骨頂と信じる童話に専念したいことの、大きく三点である（注11）。

この宣言について、友人の平林初之輔は、「何もそんな声明なんか出さなくても、今までどおりに両方を適当にかき分けていけばいいじゃないか」と疑問を呈したらしいが（注12）、未明が何故、あえて宣言を発したのかは、多くの人にとって釈然としない点であり、これまでその真意が、度々検討されてきた。現在、通説となっているのは、ボル派に左派運動・文壇の主導権（ヘゲモニー）を握られたアナ派の未明が、マルクス主義の台頭に融合できず、消極的ないし積極的に童話へ移行したとする説である。

例えば、山室静の解釈は次のようなものだ。

> 運動の進展が次第にマルクシスト系とアナキスト系に分裂し、やがて前者の圧倒的優位のうちに、多分に浪漫主義的理想主義だった初期社会主義の文学が、ここにはっきりと唯物史観と階級闘争説に立つプロレタリア文学の方向をとるにつれて、未明の立場はいたって困難なものとなり、そのことが遂にこの日本社会主義文学の先駆者をして戦線を放棄せしめ、童話の世界に自己の夢を託させるにいたる。
>
> 山室静「小川未明論」（『現代日本文学全集』第七〇巻、筑摩書房、昭和三二年二月）

ここで山室は、アナキスト系作家の未明が、アナボル対立の敗北の結果、童話という「夢」に退避したと宣言を分析している（注13）。

このような読みは山室に限らない。例えば、秋山清は「アナキストに諸情勢が不利のなかでアナキスト小川未明の、童話宣言即ち小説文壇との絶縁が、後退であったことを見誤ってはならない。（中略）アナキズム運動の急な頽勢がなく、アナキストの文学運動がもっと実力的だったら、未明の「童話宣言」は形をかえたであろう。それは一つにはアナキストとして未明の限界でもあった」（「アナキスト・小川未明」『文学』昭和三六年一〇月）と解析しているし、猪熊葉子も「根本的には理想主義に根ざすヒューマニストであった未明が、その思想の帰点として辿りついたのは、詩の原理としてのアナーキズムであったが、それが現実の社会主義運動のなかでは、マルキシズムに敗北したことから、未明が「自己の道を彼本来の行きかたにみとめて、ネオ・ロマンチシズムの中から出なおし」（瀬沼茂樹「小説家としての小川未明」）だとして、小説を捨て、童話に専心することを宣言した未明の行動の意味をそこから説明しようとする瀬沼茂樹の意見は、未明の思想の変化を辿るかぎり、妥当な説

といえよう」（「小川未明」続橋達雄他編『講座日本児童文学』第六巻、明治書院、昭和四八年九月）と、論を展開している。

先行論は他にもあるが、多くの識者は、未明に元来、童話作家たる天分が存した点は認めた上で、宣言を、マルキストに対するアナキストの訣別の書と捉える点で一致していよう（注１４）。

しかし、ここで問題となるのは、果たして未明は本当にアナキストだったのかという点である。従前、繰り返し確認しているように、大正期の未明は「自己の悩みは、即ち自己の属する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならない」（「闘争を離れて正義なし」『中央公論』大正一一年七月）と語る階級闘争主義者なのであった。山室は、マルクス主義的な階級闘争への忌避感が童話への転換を決定付けたと主張しているけれど（注１５）、当の未明はそれを賞美している。まるっきり正反対だ。

また未明の思想を探る手掛かりとして、彼がマルクスやレーニンを高く評価していた点は、軽視すべきでない。一節で紹介した通り、未明は私学の創立者とマルクス・レーニンを重ね合わせ、「民衆の前の光り」「民衆のための父兄」「真理の伝播者」「真理の維持者」と称賛している（「再び「私学の精神」に帰れ」）。あるいは、「今日では、レーニンを殺伐な組織の上の革命家とのみ見るものは少なくなつたやうです。彼は、殉教者であり、熱烈な無産階級の代弁者であり、また、実に其のものであるのです」（「民衆芸術の精神」『生活の火』精華書院、大正一一年七月）、「レーニンの哲学は、今迄の学者の取り扱つた哲学とは問題が異ふ。物を食つて生き、着て寒さを凌ぎ、働き、眠る、血の流れてゐる人間其のものの哲学だ」（「戦争に対する感想」『太陽』大正七年六月）とレーニンを称えている（注１６）。

ロシア革命も賛美の対象である。「露西亜の革命は、全世界の無産階級の気力と、精神とを一洗したばかりでなく、萎靡（いび）から蘇生さした。露西亜の存在は、全世界の無産階級の強みである」（「露西亜は存在す」『東京朝日新聞』大正一一年一一月八日）と絶賛している。

これらのテキストを一読してわかるのは、未明がマルクス主義に対し、極めて親和的な態度を取っていたということである。確かに未明は、階級闘争の立場から物事を一元的に裁断しようとするマルクス主義者のあり方を、「強権」（「新興童話の強圧と解放」『童話文学』昭和四年八月）、「残忍」（「児童のために強権主義者と戦へ」『黒色戦線』昭和四年八月）、「窮屈」（「新文芸の自由性と起点」『東京朝日新聞』昭和四年一一月一五・一六日）であると批判している。しかし、これらの批判はおしなべて昭和期以降であり、大正年間

の未明は、むしろマルクス主義と近接した地点にいた（注17）。したがって、従来通説化している未明＝アナキストという単一的な図式は、多分に誤謬を含んでいる。

この誤りは、未明自身が生んだミスリードでもあるだろう。後年彼は、大正期の社会主義思想への接近を、「空想的社会主義者」（「童話を作って五十年」『文藝春秋』昭和二六年二月）、「空想的社会主義」（「児童文学」の夜明けへ」『読売新聞』昭和二八年八月二四日）、「私はと言えば、その頃アナーキズム的主張に捉われていた」（「童話と私」『改造』昭和二九年六月）と回顧している。だが、これらはどれも遡及的な自己評価というべきで、正確ではない。未明がアナキストであることを前提とした宣言解釈は、すべて誤りだ。

「童話作家宣言」の真意は、未明の知識人批判の中にこそある。これまで見てきた通り、未明の知識人描写には、評論と小説との間で、甚大な齟齬があった。両者とも「階級闘争の妨害者」という叙述は共通するものの、未明は評論で断言したようには、知識人を「革命家」として描き得ていない。むしろ、労働者と団結できない「孤独な存在」として、知識人を表象してしまっている。

この評論と小説との間のエクリチュールの揺らぎが意味するものは何か。私は、階級闘争というドグマに同一化できない知識人の蹉跌が、この差異には、刻印されていると考える。小川未明は階級闘争における知識人の存在意義（革命家・無産階級教化）を熱心に論じながら、その実、まったく確信できていない。誤解を恐れずに言えば、未明はアナキストとしてマルキストに敗れたのではなく、マルキストとして階級闘争に挫折し、童話を通して人心を変える道を選んだのである。

四、知識人と革命 ――大正期「知識人論」の流行

さて、ここまで筆者は、大正期の知識人批判を手掛かりに、「童話作家宣言」の再解釈を行ってきた。しかし、この時期、知識人のあるべき姿を模索し、煩悶したのは、ひとり小川未明のみではない。本節では、大正中期以降、日本の文壇・論壇で数多く生み出された、各種の知識人論を通観することで、未明の知識人言説の同時代的位置並びに背景を明らかにしたい。

まずは、日本で知識人論が量産されるに至った、時期と背景を押さえておこう（注18）。この点に関して、社会学者の濱口晴彦は、「インテリゲンチャの問題が自覚的にとりあげられるようになるのは一九二〇年代はじめからである。この時期に新中間層の形成とマルクス主義の台頭という二つの契機が重なりあって、新中間階層論やインテリゲンチャ論が運

動論としてはじめて問題となった」(『日本の知識人と社会運動』時潮社、昭和五二年一〇月、一四七頁、傍点原著者)と指摘している。つまり、知識人論流行の時期は、大正半ば以降、その背景には、新中間層＝ホワイトカラー層の誕生や、ロシア革命の勝利に伴う、マルクス主義の影響力拡大が背景にあるというのが、濱口の見立てである。正しい分析であろう。

もう少し丁寧に説明すれば、こういうことだ。第一次世界大戦は、日本の資本主義を、飛躍的に発展せしめた。そして、戦時下の好況は、教員・事務員・技術者・自由業者等、従来のブルーカラーの肉体労働者とは異なる、ホワイトカラーの非肉体労働者＝知識階級(インテリゲンチャ)を層として成立せしめた。しかし、折から台頭したマルクス主義は、階級の二極分解を主張し、かかる新興階層の没落を予言していた。第一次大戦後の恐慌は、この予言に現実味を与えていた。

このような状況下、労働運動・社会(主義)運動における、知識人の役割や存在意義を問う声が、知識人の間で盛んに上がるようになる(**注19**)。古今、人間がもっとも関心を抱くのは、我が身に直接関係のある物事だ。知識階級の一員を自負する人々にとって、「知識人は如何にあるべきか」という問いは、「自分は如何に生きるべきか」という問いでもあったのである。

百家争鳴の舞台となったのは、大正デモクラシー下、かつてない賑わいを見せていた出版ジャーナリズムである。例えば、「現代知識階級問題」(『早稲田文学』大正八年九月)、「中間階級の研究」(『解放』大正一〇年三月)、「プロレタリアの専制的傾向に対するインテリゲンツィアの偽らざる感想」(『中央公論』大正一〇年九月)、「知識階級の研究」(『解放』大正一二年四月)、「知識階級と無産階級の相互抱合論」(『中央公論』大正一二年六月)といった、大手雑誌の特集がそれだ。これらの特集には、作家・評論家・学者・左翼活動家・国会議員等、様々な分野の識者が寄稿し、各々、自らが信じる理想の知識人像を提示した。一節でも若干紹介した通り、『中央公論』の二つの特集には、未明も論稿を寄せている(**注20**)。

もちろん、大正期の知識人論ブームは、総合誌の特集のみに見られる現象ではない。日本近代文学史上、もっとも知られているのは、有島武郎が引き起こした「宣言一つ」論争であろう。これらの知識人論は、論者によって千差万別であり、その内容は一様ではないが、ある種の類型化は可能である。

そこで以下、本稿では、上記の知識人言説を、①指導者論、②協同論、③不要論の大きく三つに大別した上で、各型の特徴を論じてみたい。また、三つの型の内、未明がどの型に位置付けられ得るか、考えてみたい。なお、各型の類型化にあたっては、奥田修三と濱口晴彦

の先行研究を参照した（注２１）。

まず、第一のタイプは、指導者論である。これは、第三者的な中立の立場から、労働者階級を指導する存在として、知識人を捉える見方である。大正デモクラシーを牽引した民本主義者・吉野作造の発言を見てみよう。

> 然し乍ら知識階級は全然労働運動に無用とされるのではない。労働運動は労働者の運動であるけれども、自分の利害に直接関係のある問題については、兎角判断が一方に偏し易いので、階級的利害を社会全体の進歩の上に如何に調節すべきかは、寧ろ局外者の公平なる判断に待つを必要とする事がある。此点に於いて労働階級が如何に発達をしても、彼等が階級的利益の伸長と共に、又社会全体の発達に貢献するの責任を果さんとするには、何うしても知識階級の批判を待つの必要があり、知識階級また労働者をして常に正しき道を歩ましめる為めに不即不離の関係を取つて、間接の援助を提供するの責任がある。
>
> 吉野作造「プロレタリアートの専制的傾向に対する知識階級の感想」
> （『中央公論』大正一〇年九月）

蒙昧な労働者を「正しき道」へ導く公平無私の「局外者」――それが吉野の理想とする知識人像である。ここで想定されているのは、労働者階級に対する垂直的な指導や援助であって、水平的な連帯や団結ではない（注２２）。言ってみれば、上から目線なのである。

この吉野の知識人観について、奥田は「要するに吉野は知識階級と労働者階級とをはっきり区別し、知識階級は労働運動を指導すべきものとする。労資両階級に超越した第三階級として、知識階級はもっとも公正な立場をとりうるものであり、その立場から労働運動への指導と助言をする任務をもっているとするわけである」（「大正期「知識階級」論」『立命館大学人文科学研究所紀要』昭和三九年三月）と、濱口は「吉野作造の新中間階級論は以上にみるとおり、中間階級の指導によって運動の正常な発展が保証されるというエリート論の典型である」（『日本の知識人と社会運動』九七頁）と指摘しているが、いずれも正鵠を得た分析だろう。つまり吉野は、階級闘争の激化――既存秩序の破壊――は否定した上で、インテリ主導の穏健な社会改良を説いているのである。

ところで、このような階級協調主義に基づく、知識人指導者論の提唱者は、傾向としては、非左翼の既成勢力（エスタブリッシュメント）の住人に多い（注２３）。周知の通り、吉野は東京帝国大学の教授であ

り、官学の権威であった。あるいは、法学者で京都帝国大学教授の仁保亀松（にほ）は、「知識階級の使命は指導にあるのであつて、これを具体的に云へば、知識階級は政治、経済教育軍事其他社会各方面の文化運動の指導をなすことがその使命となるのである」（「社会運動に対する知識階級の使命」『解放』大正一〇年三月）と断言。社会的使命の大なる知識階級を、政府・社会は優遇するよう呼びかけた。これらの指導者論は、既存秩序内部における知識人の存在意義を微塵も疑っていない点で、極めて自己肯定的なエリート主義であると評価できる。

第二のタイプは、協同論である。これは、労働者階級と階級闘争をともに闘う存在として、知識人を捉える見方である。第一次日本共産党の幹部である佐野学の発言を見てみよう。

> 社会革命は無産階級の解放を目的とすると同時に、無産階級を根本の行動者とするのである。フランスのサンヂカリストが革命原理として徹底純粋のプロレタリア主義を掲げ、知識階級を排撃し、その怯懦と無気力とを難んじ（ママ）たことは、決して理由のない事でなかつたのである。しかし吾人は知識階級が社会革命にとりて全く無用の長物、若くは邪魔者であるとは考へない。一般的に革命原理に目醒めた知識階級は社会革命の原動者たるものでない事は勿論であるが、有力なる遊撃隊であり、補助者たる使命を有すると考へる。社会革命は純無産階級的に行はれねばならぬ。しかし現実の社会革命の道程上に於て、全然、無産階級の手のみによりて是を完了することは明白に困難である。
>
> 佐野学「社会革命と知識階級」（『解放』大正一二年四月）

この文章で佐野は、無産階級が革命の「原動者」である点は踏まえた上で、知識階級を革命の「遊撃隊」「補助者」として位置付けている。無産階級の闘いと積極的に連帯し、持ち前の知力を用いて、彼らの闘いを輔翼することこそが、佐野の考える、知識人の使命（ミッション）なのである（**注２４**）。

平林初之輔の見解も同様である。平林は、「近世社会に於ける唯一の革命階級はマルクスが言つたやうにプロレタリヤのみである。けれども、社会の進化を最も明確に理解し、洞見する人々が、階級闘争の切迫につれてプロレタリヤの陣営に投じ、プロレタリヤ大衆の中に融合して、無産階級に思想的武器を供給するやうになることもマルクスの言つたとほりである」（「知識階級の分解」『解放』大正一二年四月）と述べ、「プロレタリヤ大衆の中に融合」し、「無産階級に思想的武器を供給する」革命の助っ人としての生き方こそが、知識人

のあるべき姿であると論じている。先に見た、第一類型の吉野や仁保が、階級間の融和をもたらす、中立的な指導者として、知識人を捉えていたのとは対照的だ。

さて、革命推進の立場からなる、このような知識人協同論の提唱者は、言うまでもなく、左翼の住人に多い（注２５）。未明もまた、第二のタイプに分類され得る。一節で見てきた通り、未明は、ブルジョアの階級支配の補完勢力としての知識人のあり方を否定し、知識人はプロレタリアへ加勢する革命家であらねばならないと主張していた。そして、労働者階級を知的に援助する「無産階級教化」の必要性を説いていた。知識人と無産階級の共闘を積極的に勧奨している点で、未明の知識人観は、協同論の範疇に入ると評価できる。

ただし、あえて偏差を挙げれば、未明は他の協同論者と比べて、階級闘争における知識人の指導的役割を、若干、過大評価している向きがあるかもしれない。一節で紹介した、未明の知識人＝革命家という視点には、一種のエリート意識・前衛意識が見え隠れする。この知識人の指導性の問題を、肯定する方向で突き詰めると、福本和夫の福本イズムへ（注２６）、否定する方向で突き詰めると、大杉栄のアナルコ・サンディカリズムへ、それぞれ行き着くだろう。いずれにせよ、巨視的（マクロ）な視点で見れば、どちらも協同論の枠内ではある。

第三のタイプは、不要論である。これは、労働者の運動に余計な害悪をもたらす存在として、知識人を捉える見方である。有島武郎の発言を見てみよう。

> 労働者はクロポトキン、マルクスのやうな思想家をすら必要とはしてゐないのだ。却つてそれらのものなしに行くことが彼等の独自性と本能力とをより完全に発揮することになるかも知れないのだ。
>
> どんな偉い学者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭梁であれ、第四階級的な労働者たることなしに、第四階級に何物をか寄与すると思つたら、それは明らかに僭上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によつてかき乱されるの外はあるまい。
>
> 有島武郎「宣言一つ」（『改造』大正一一年一月）

有島によれば、第四階級以外の階級の人間が、各種の民衆運動へ参加することは、分不相応な「僭上沙汰」であり、運動の進展を阻害する悪事である。マルクスやクロポトキンのような、一流かつ不世出の天才思想家であっても、その例外ではない。第一・二類型の論者と異なり、有島は、知識人が無産者の運動へ参入する意義を、一切認めていないのである（注２

7）。

もっとも、このような例外なき知識人不要論者は、当時の知識人論全体から見れば、極めて少数派である。伊豆俊彦が、「有島の議論はあまりに飛躍しすぎ、断定的でありすぎた。しかもその論理は一種自閉的であり、知識人の世界を拡大発展させるものではなく、狭い世界に閉じこめようとするものであった。それ故たちまち、周知のように四方八方からの批判にさらされなければならなかった」（「知識人の問題　「宣言一つ」前後」『日本文学』昭和五四年一月）と指摘するように、「宣言」を発した有島は、広津和郎・堺利彦・片山伸等、数多くの論者から非難・駁撃を浴びることになる（注２８）。いわゆる、「宣言一つ」論争である。

しかし、たとえ批判の対象としてであれ、有島の宣言に多くの知識人が反応した／せずにいられなかったのは、「知識人と革命」の関係をめぐる問題が、大正期の知識人にとって、痛切な関心事であったからに他ならない。あるいは革命へと至るかもしれない、無産階級の運動に対し、知識人はどのように応答するべきなのか――有島が答えを出そうとした、この問いが、当時の知識人の問題意識と完全に合致していたからこそ、「宣言一つ」は、かくまでに激しい論争の種となったのである（注２９）。「知識人と革命」という論題は、大正後期の言論界を席巻する、重要テーマであったのである。

かくして、大正期の日本では、ホワイトカラー層の形成やマルクス主義の台頭を背景に、知識人の労働運動・社会（主義）運動への関与のあり方を問う、様々な知識人論が百出していた。これらの議論は、大別すると、①指導者論、②協同論、③不要論の三つに整理でき、未明の立場は、②協同論に該当する。同時代の社会主義者の大多数も協同論であり、その選択は、決して物珍しいものではなかった。

ともあれ、一・二節で見た、小川未明の知識人言説・表象の背後に、このような同時代の潮流が存在している事実は、見過ごすべきではないだろう。「知識人と革命」の関係をめぐる問題は、大正期の知識人――特に左翼知識人――にとって、向き合わずにはいられない課題であり、旬のネタであったのである。未明はそのネタに喰い付いたのだ。

小括

以上、本章では、小川未明の知識人批判を糸口に、未明史上の一大事件である「童話作家宣言」の再解釈を行った。

小説の筆を折り、童話へ専心することを誓った、この「宣言」は、従来、初期プロレタリ

ア文学運動の開拓者で、アナキスト系作家の未明が、折からのマルクス主義の台頭に融合できず、童話へ逃れたとする解釈が一般的だったのだが、筆者は、マルクス主義に親和的でありつつも、自己を階級闘争へ同定し切れなかった革命的知識人の敗北として、宣言を読み解いた。つまり未明は、アナキストとしてマルキストに敗れたのではなく、マルキストとして階級闘争に挫折し、童話を通して人心を変える道を選んだ、というのが、本章の結論である。

ロシア革命後の労働運動・社会（主義）運動興盛の渦中にあって、これらの運動をどのように評価し、身を処するかは、大正期の知識人に突き付けられた倫理的課題であった。吉野作造・佐野学・平林初之輔等、この時期、多くの知識人は、民衆運動への関与のあり方を問う知識人論を書き記している。文学史的には、有島武郎の「宣言一つ」（『改造』大正一一年一月）が、もっとも知られているところだろう。

そして小川未明もまた、明治末に私立大学を卒業した知識階級の一員として、運動における自らの役割を見定めようと、熱心に模索していたのである。

注

1　大正期の未明の思想傾向については、Ⅱ部の各章の他、六章一・二節で論じた。

2　例えば、「人間愛と芸術社会主義」（『野依雑誌』大正一一年二月）では、「私の良心」の観点から、富の不均衡およびその大本たる「資本主義制度」を批判している。「正直なものも、誠実なものも、又善く働くものも、決して酬ひられてゐないばかりか、又社会の下積みとなり、卑しめられ馬鹿にされてゐるやうな有様である。この一事に見ても私の良心は憤激せざるを得ない。私の眼は容易く、そのこれ等の悪弊の源因（ママ）がその源をすべて資本主義制度の上に発してゐることを知つてからは、事毎につけてその事実が服（ママ）に映ずるやうになつた」

3　未明の就労経験は、明治三八年七月に早稲田大学を卒業してから、早稲田文学社・読売新聞社を経て、明治四三年七月に文光堂を退くまでの、約五年のみだ。いずれも、作家業との兼務である。しかし、この記者生活は肌に合わなかったようで、未明は「言辞にならはず訪問ぎらひの私には、殊に、始めての名家を訪問することが苦しかつた」（「私の記者時代」『文章倶楽部』大正一〇年六月）と回想している。

4　文部省編『学制百年史　資料編』（帝国地方行政学会、昭和四七年一〇月）の「教育統計」参照。未明が早稲田大学の前身、東京専門学校へ入学したのは明治三四年だが、同校が「大学」を名乗ることを許されたのは、その翌年である。「同年十月、同校は早稲田大学と

改称し、盛大な記念式典をあげた。貴顕紳士の列席する中で、大隈重信・天野為之・高田早苗ら同校の首脳部たちは、オックスフォード型のガウンを着用して、「大学」の開校を祝った」（寺崎昌男・成田克矢編『学校の歴史』第四巻、第一法規出版、昭和五四年五月、七八頁）。これは当時、二〇歳の学生だった未明にとって、誇らしい出来事だったかもしれない。

5　同エッセーによると、未明と大杉の出会いは、次女・鈴江が生まれた大正二年五月ころだったという。この文章で、未明は、「私の考へ方も、社会機構の改革によつて社会をよくするよりも、まづ人間の人格を尊重し、理解してゆくはうがよいといふ、空想的社会主義者だつたわけですから、大杉君のサンジカリズムとかアナーキズムのはうに、合ふものを感じました。それで大杉君の影響を受けて、クロポトキンのものを読み、前にトルストイを読んだ時と同じやうに、非常に温いものを感じました。人道主義にうたれたのです」と、大杉への思想的シンパシーを語っている。

6　箕輪真澄は、「小川未明」（日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書2　社会派の文学』野島書店、昭和五一年七月）で、未明と大杉が同じ越後出身者であること（高田／新発田）、青年期退学経験があること（高田中学校／陸軍幼年学校）、性格が神経質であることの共通点を見出しており、「思想的共鳴と並行して、より強く人間的親近感を覚えたのではないか」と指摘している。

7　「遺骨の代りに写真を捧げて　大杉氏等三名の葬儀」（『東京朝日新聞』大正一二年一二月一七日）参照。

8　「塵埃と風と太陽」（『早稲田文学』大正一一年八月）にも、同様の記述がある。「民衆の桎梏の苦しみを他所に冷視して、自己享楽に耽る彼等に、何の芸術ありや。芸術家は、須らく革命家でなければならない」

9　大杉は、「知識階級に与ふ」（『労働運動』大正九年一月）で、知識人が労働運動へ関わる際の心構えを三つ挙げている。①労働運動の主体はあくまで労働者である点を認識すること、②知識人が歴史的に階級支配の擁護者であった点を反省すること、③今後は「被圧制階級の真実の友達になるのだと云ふ新しい覚悟」を徹底することの三点である。未明のような教化の意識は見られない。

10　亮平老史は、「「未明」管見」（『種蒔く人』大正一一年六月）で、メーデーに参加した未明の様子を報告している。細密な描写がないのでハッキリしたことはわからないが、未明は官憲によるデモ参加者の拘束に、十分な抗議をしなかったようだ。老史は、「然しながら僕はこの点に於て、未明に一味の飽足らなさを感じずにはゐられない。芸術で創作のペンを

持つと同様に街頭でも検束されて行かうとする労働者の手を握つて欲しかつた」と嘆いている。ここにも未明と労働者の距離感が示唆されていると言えよう。また、「小川さんとは随分古馴染」だという水守亀之助の人物評「昔の小川未明氏と今の小川未明氏」(『読売新聞』大正一二年六月一〇日)によると、未明は「感情的の詩人」ではあるが、「実行家」「巷に出て仕事の出来る人」ではなく、「大衆運動に加はつたりしたら、屹度無能」であると断定している。もしこの評価が正しいとすると、未明が現実の社会運動の中で労働者と統一行動を担ったり、信頼関係を構築することはできなかったはずだ。であれば、未明の孤独は、決して解消されないだろう。

11　続橋達雄「小川未明の童話宣言・覚え書」(『野州国文学』昭和五〇年三月)参照。

12　岡上鈴江『父小川未明』(新評論、昭和四五年五月、一三〇頁)参照。

13　渋谷百合絵は、「小川未明「白刃に戯る火」論　――「童話作家宣言」の文学史的意義をめぐって」(『東京大学国文学論集』平成二六年三月)で、アナボルの分裂が決定化したのは大正一五年一一月の日本プロレタリア芸術連盟成立時であること、プロレタリア文学理論に与えるマルクス主義の影響が鮮明化したのは大正一五年九月の青野季吉「自然成長と目的意識」(『文芸戦線』)以後であること、山室静のプロレタリア文学運動参入が昭和二年以降であることを根拠に、山室説は「ナップ成立以降のプロレタリア文学の趨勢から、遡及的に未明の宣言を解釈している可能性が高い」と指摘している。本稿の山室説批判の切り口とは異なるが、宣言とアナボル対立を関連付ける山室に対し、両者の時間的ズレを突き付けた渋谷の指摘は、正しいだろう。

14　例えば、船木枳郎(しろう)は「未明はアナーキスト派に目されていたが、彼がついに大正十五年になってマルキスト派と袂をわかったのは、マルキスト派のように文学を政治的イデオロギーの具にして実践的行動を目的とすることに疑問を抱いたためである。そして、文学には文学の独自性があって、作家の実践的行動は作品すなわち実践であるという、先にいったところの考えが熟して来たためである。(中略)そして、これが契機となって、彼は小説の筆をなげすて、童話に専心するようになったのである」(『増補　小川未明童話研究』八木書店、昭和四二年四月、一二頁)と述べ、政治優位のマルクス主義者に対する疑念が、アナ派の未明に文学の独自性への認識を深らしめ、積極的に童話へ専心する契機となった由、指摘している。他に、山田稔「小川未明における思想と美学」(『文学』昭和三六年一〇月)、本山恭子「小説家としての小川未明論　――『童話作家宣言』を中心に」(『立教大学日本文学』昭和三九年一一月)、上笙一郎「小川未明」(日本児童文学学会編『日本の童話作家』ほるぷ

出版、昭和四六年九月）、高橋美代子『小川未明童話論』（新評論、昭和五〇年一〇月）、続橋達雄「解説」（同編『日本児童文学大系』第五巻、ほるぷ出版、昭和五二年一一月）、砂田弘「評伝　小川未明」（同編『新潮日本文学アルバム　小川未明』新潮社、平成八年三月）等。

15　紅野敏郎も、宣言の背景には、階級闘争へ参入することへの忌避感があったと論じている。「おりからのプロレタリア文学運動が、マルクス主義文学にのみ純粋結晶しようという傾向に同調することを嫌っての行為であったと察せられる。未明の素朴にして善良なヒューマニズムが、激烈な階級闘争の場内にずかずかと入ることを、かたくなに禁じたともいえる」（「小川未明入門」『日本文学全集』第四二巻、講談社、昭和四一年一二月）

16　その他にも未明は、雑誌『解放』（大正一一年八月）の特集「レーニン若し死なば」に、次のようなコメントを寄せ、革命国家・ロシアの前途に明るい未来を見ている。「いま露西亜は飢饉によつて、非常な危機に立つてゐるが、やがて、その試練を経た暁には、共産主義的国家の建設に向かつて急ぐに違ひない。レーニンは死んでも、その精神は死なない。後から、後からレーニンは産れる」

17　林政雄は、「小川未明氏の近業二つ」（『新興文学』大正一二年四月）で、「未明氏の思想はボルシエヴイストの思想であるか、トアナアキストの思想であるか私達は斯の『人間性のために』全編を通じては知る由もない。或は部分はボルシエヴイズムの声であり或る個処はゼアナアストの叫びである」と述べ、大正一二年当時、未明の社会主義思想が、アナボルどちらにも解釈し得る、未分化なものであったことを指摘している。

18　大正期、知識人は、「知識階級」「インテリゲンチャ」「中間階級」等の言葉で、名指されることもあった。これらの語の意味内容は、それぞれ若干異なるが、本稿では、いずれも知識人の類義語として扱い、定義上、厳密な区別は行っていない。

19　坂本多加雄『知識人　大正・昭和精神史断章』（読売新聞社、平成八年八月）参照。

20　小川未明「人間本来の愛と精神の為めに」（『中央公論』大正一〇年九月）、「知識階級雑感」（『中央公論』大正一二年六月）。

21　奥田修三「大正期「知識階級」論」（『立命館大学人文科学研究所紀要』昭和三九年三月）、濱口晴彦『日本の知識人と社会運動』（時潮社、昭和五二年一〇月）。

22　吉野は、「両者の正しい関係と間違つた関係」（『中央公論』大正一二年六月）でも、同様の知識人観を披瀝している。

23　森本厚吉「中流階級の研究」（『中央公論』大正一〇年二～四月）、永井柳太郎「直訳

的態度を排す」（『中央公論』大正一〇年九月）、三宅雪嶺「群衆運動と其統率者」（『中央公論』大正一〇年九月）等参照。

２４　佐野は、「社会の進化と中間階級」（『解放』大正一〇年三月）でも、同様の知識人観を披瀝している。

２５　堺利彦「有島武郎氏の絶望の宣言」（『前衛』大正一一年二月）、河上肇「個人主義者と社会主義者」（『改造』大正一一年五月）、山川均「無産階級と知識分子」（『解放』大正一二年五月）等参照。

２６　小森陽一「〈知識人〉の論理と倫理」（『講座昭和文学史』第一巻、有精堂出版、昭和六三年二月）、栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代　増補新版』（インパクト出版会、平成一六年一月）参照。

２７　結果、「宣言一つ」は、長らく、労働運動・社会（主義）運動における、インテリゲンチャの敗北を宣言した文章として読まれるのが、通例となってきた。平野謙「「政治の優位性」とは何か」（『近代文学』昭和二一年一〇月）、臼井吉見『近代文学論争』上巻（筑摩書房、昭和三一年一〇月）等参照。

２８　広津和郎「有島武郎氏の窮屈な考へ方」（『時事新報』大正一一年一月一～三日）、堺利彦「有島武郎氏の絶望の宣言」（『前衛』大正一一年二月）、片山伸「階級芸術の問題」（『改造』大正一一年二月）等参照。

２９　木村政樹「〈知識人〉言説の歴史を再考する」（『有島武郎研究』平成二五年六月）参照。「この論争には、当時の代表的な階級論の担い手が登場している。河上肇や堺利彦といった、議論に関わった社会思想家は、立場や考え方は違っていたが、有島と重なり合う関心を抱いていた」

Ⅲ部　国家主義　――転向と国策協力

六章　転向者の軌跡　――階級闘争から八紘一宇へ

はじめに

これから私が問題にしようとするのは、小川未明の「転向」についてである。未明は大正期、社会主義運動が盛んな時期は社会主義を、日中・大東亜戦争下、軍部の力が強まった時は国家主義を、戦後、日本国憲法下の新体制が確立されるようになると反戦と民主主義をそれぞれ表立って支持しており、その時々の時局に合わせ、変節を繰り返した作家だ。

例えば、戦中・戦後の次のような文章を見比べてみると、その一端はよくわかる。

いま、日本が先頭に立つて、暴慢な英米と戦ひ、世界秩序の建直しに邁進してゐることをご存じでせう。もし、さうしなかつたならば、私達のアジア民族は、彼等のために苦しめられて、終には身動きすら出来なくなる運命にあつたのです。さう聞くならば皆さんは、歯ぎしりをして、早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか。（中略）私達は、もはや自身の幸福について考へる時でない。すべからく国家の安危を考へなければならぬ時である。

「子供達に」（『僕はこれからだ』フタバ書院成光館、昭和一七年一一月）

戦争中はいかなる言葉をもつて、子供たちを教へたか。指導者らには何の情熱も信念もなく、ただ概念的に国家のために犠牲になれといひ、一億一心にならなければならぬとかいつて、形式的に朝晩に奉仕的な仕事を強制して来た。そして日本は一番正しいのであるし、敵は残忍であり醜悪であるといふことを言葉に文章に信ぜせしめようとして来た。それが終戦後の態度はどうであるか、今までの敵を賛美し、まちがつてゐたことを正しいといひ、まつたく反対のことを平然として語つてゐる。（中略）子供たちにかかる大人の態度いひかへれば指導者の態度がどう映るか。必ずや嘘つきであり厚顔無恥としてうつるにちがひない。

「子供たちへの責任」（『日本児童文学』昭和二一年九月）

時宜に応じて「まったく反対のことを平然として語ってゐる」のは当の未明に他ならない。未明には、同時代に政治的影響力を誇った勢力と添い寝する便乗犯的傾向があった。

しかるに、未明の「転向者」としての側面は、従来必ずしも注目されてきたとは言えない。鳥越信は、この点について、「ともかくこんなにはげしくゆれ動いた作家は珍しいと思うが、もっとふしぎなのは、そうした未明への否定的・批判的な評価はほとんどなく、常に未明はその時々の日本児童文学の頂点に立つ作家として、高い評価を与えられてきた点である」（「小川未明」『鑑賞日本現代文学』第三五巻、角川書店、昭和五七年七月）と述べ、その際立った転向歴にもかかわらず、存外なまでに批判が少ない――評価が高い――来歴を訝っている。

確かに未明は、昭和三六年に逝去するまで、児童文学者協会（現、日本児童文学者協会）の初代会長や文化功労者、芸術院会員へ推挙されるなど、長らく「日本児童文学の父」として君臨してきた。山中恒は「日本の児童文学最高の作家とされてきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月、二五〇頁）と、鳥羽耕史は「戦後にも高い地位を保ちつづけた未明の戦争責任の問題は、他の多くの文学者と同様に曖昧なまま今に至っている」（「傷痍軍人」石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』ひつじ書房、平成二五年三月）と、それぞれ指摘している。

もちろん、「文学者の戦争責任」は戦後喧しく議論された論題であり、戦時中の国策協力に関して、未明も後進から批判を受けることはあった。しかしその多くは、断片的な分析や感情的な指弾に留まるもので、中長期的な思想遍歴を追うという意味での「転向」という視座から行われたものではなかった（注1）。

私の問題意識は、これまで未明神話の陰に隠れ、断片的にしか論じられてこなかった未明の「転向者」としての側面を、通史的に明らかにすることにある。大正・戦中・戦後を通して、未明は如何に自己の言説の装いを変えて行ったのか、また上記のような変遷を経ても変わらなかった未明という人間の思想的核は何か、考えたい。

本章では、大正から戦中に時期を絞って論じる。

一、社会主義の影響

明治期、新浪漫主義の旗手として文壇に登場した小川未明は、大正から昭和初期にかけて、社会主義思想の影響を受けるようになる。本節では、この時期の未明の足跡を追いたい。

未明が社会主義思想の影響をこうむる前史として、まず早稲田大学時代のロシア文学の

洗礼が挙げられる。改造社版『現代日本文学全集』第二三篇（昭和五年四月）の自筆年譜には、明治三四年の項目として、「この頃より、ロシア文学を愛読し、また、ナロードニキの思想を好めり」という記述がある。若き未明は、ツルゲーネフやトルストイを耽読し、ロシアの人民主義思想への共感を深めていた。

また、早大卒業後の明治三九年には、戸張孤雁（とばりこがん）の紹介で、東洋経済新報社に片山潜を訪ねている。片山はアメリカのイェール大学を卒業後、幸徳秋水らとともに日本初の社会主義政党である社会民主党を結成した、日本の社会主義運動の先駆者と言える存在である。

大正期に入ると、未明と社会主義の接触は本格化する。その端緒となったのが大杉栄との出会いである。大正二年、大杉が雑誌『近代思想』の「小説三編」（六月）で、未明の小説「嘘」を論評したのを機に、二人の交友は生まれた。大杉は初対面の際、未明の熱情に触れ、荒畑寒村を想起したという（注2）。一方未明は、大杉の感化でクロポトキンを愛読するようになる。彼は後年、「私が思想的な影響を受けた人として、片山潜、大杉栄の名を逸することは出来ない」「震災（関東大震災――引用者注）の時大杉君が殺されたという報に接し、私はまさしく暗然たる想いであつた。交遊の頻僅によらず、何と言つても私には忘れられぬ友人である」（「童話と私」『改造』昭和二九年六月）と回想している。

さらにこの年、未明の短編集『廃墟』（新潮社、大正二年一〇月）が刊行されると、同郷の相馬御風が「人間性の為めの戦ひ」（『読売新聞』大正二年一一月三〇日）で、同書を書評。翌年大杉が「時が来たのだ」（『近代思想』大正三年一月）で反論し、両者の間に論争が巻き起こった。これは未明作品に「物質生活の圧迫の為めに虐げられて行く現代民の運命」を見、「社会組織の革新」を促す御風と、それに一定同意しつつ、曖昧な革新論ではなく、「社会科学的知識」に基づいて、より精緻に「現社会組織のあやまりつくられたる所以を、痛撃しなければならぬ」と主張する大杉の対立だった。論争そのものは未明から離れたが、大杉の階級対立の歴史観と知識人批判の思想は、以後の未明に流入している。

加えて、自身が直面した生活苦と愛児の死も社会主義へ向かう下地となった。既に明治末の自然主義全盛期から貧乏に苦しみ、大切にしていたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）やメーテルリンクの蔵書を売り払っていた未明だが、大正期においても「売るに着物もなく、書物もなく、妻が指にはめてゐた指輪を抜き取らせて」（「貧乏線に終始して」『婦人之友』大正一五年一二月）生活費の足しにしていたという。そして困窮下、大正三年に疫痢で長男・哲文を、大正七年に結核で長女・晴代を失ってしまう。夭折した我が子の死に、未明は激しく消沈し、数ヶ月の憂鬱病にかかる。

未明は後に、次のような自責の言葉を書き記している。

私は、最も逆境時代に生れた、二人の子供を亡しました。若し、健康であたならば、二人は、いかにこの世の中が苦しいところであらうとも、また幾多生を享楽すべきこともあつたのにと考へると、親として、悔恨の深いものがあります。

「貧乏線に終始して」（『婦人之友』大正一五年一二月）

だが逆に、こういった不幸の実体験は、未明の社会的弱者への想像力を豊かにした。片山社秀は、大正七年の小説「戦争」（『科学と文芸』大正七年一月）における未明の第一次世界大戦――近代史上初の世界戦争で大量の戦死者が出た――への想像力は「ひとえに長男の死のみを架け橋にしてヨーロッパとつながっている」（『未完のファシズム』新潮社、平成二四年五月、二三頁）と指摘している。

折からの大正デモクラシーの高揚と呼応し、左派系の文化・政治団体、労働組合での活動も目立つようになる。例えば、大正五年には、島中雄三の組織した文化学会の会員となった。大正八年には、大庭柯公（おおばかこう）らが知識人組織として立ち上げた著作家組合の組合員となる。大正九年には、堺利彦や山川均らとともに日本社会主義同盟の設立発起人に連名（**三章一・二節参照**）。同団体の機関誌『社会主義』の編集委員へ就任した。大正一〇年には、第一次日本共産党の起源のひとつとなった暁民会の講演会に出席し、エロシェンコや加藤一夫と講演している。大正一一年には出版従業員組合の組合員としてメーデーに参加。警官の暴力に対し、靴で蹴り返したと、後に関英雄へ述懐したという（**注3**）。

文壇においては、大正八年、自身の起こした青鳥会を母体に雑誌『黒煙』を創刊。未明は顧問を務める。新井紀一や内藤辰雄が参加した同誌は、労働文学の拠点となった。その後の未明は、『労働文学』『種蒔く人』『解放』『新興文学』『文芸戦線』『社会主義』『虚無思想』『矛盾』『黒色戦線』等、数多くの左派系文芸・思想雑誌へ寄稿している。また並行して、『早稲田文学』『中央公論』『新潮』『太陽』『大観』『文章世界』『文章倶楽部』『中央文学』『文藝春秋』『改造』『婦人公論』『婦人之友』といった一般誌でも旺盛に執筆した。

文学団体では、大正一四年に日本プロレタリア文芸連盟が設立されると、これへ参加。ただし翌年にはアナボル対立の一環として、早くも排除されてしまう。以降、未明はアナ派＝アナキズムの立場に立ち、ボル派＝マルクス・レーニン主義への不信感を強めながら、日本無産派文芸連盟（昭和二年）、日本左翼文芸家総連合（同三年）、新興童話作家連

盟（同三年）、自由芸術家連盟（同四年）と活動の場を移して行く。なお、昭和八年に設立された解放文化連盟には、壊滅する昭和一〇年まで陰で資金提供を行っていたと、秋山清は証言している（注４）。

話は前後するが、未明は大正一五年に「今後を童話作家に」（『東京日日新聞』大正一五年五月一三日）を発表した。爾後小説の筆を断ち、童話のみに専心する旨を綴った、いわゆる「童話作家宣言」である。この宣言の真意は、これまで多くの識者によって検討されてきた。例えば山室静は、初期プロレタリア文学運動の先駆者だったアナ派の未明が、ボル派に運動上・文学理論上のヘゲモニーを握られた結果、童話へ退避したのではないかと捉えている（注５）。筆者の見方は異なるが（五章参照）、この山室説は通説化し、現在までおおむね踏襲されていると言えよう。

ところで、未明の次女・岡上鈴江によると、未明の自宅には大正一一年頃から特別高等警察の刑事が定期的に訪問するようになっていたという。当初は玄関前の「通りをへだてた向い側の塀のあたりに背をもたせかけて、煙草をすったり、何気なく道いく人をながめる様子をしながら、ちらっ、ちらっと鋭い目つきで探るように私の家の方を見ていた」（『父小川未明』新評論、昭和四五年五月、九四・九五頁）だけだったのが、その内、「毎日同じ時刻、玄関の戸をあけ、大っぴらに訪問するようにな」り、「今日はどこへでかけたかとか、誰々がたずねてきたかなど聞いて、いちいちメモをしていった」そうだ。

岡上は、刑事が「いつしか父の淡白で正直な人柄に好感をいだくようになり、特高課の刑事という職業をはなれていろいろ世間話をしていくようになった」（九六頁）と述べているが、これは多分に身贔屓であろう。情報収集を効率よく進めるために相手と打ち解けた関係を構築するのも刑事の仕事だからである。むしろ、弾圧の当事者として、当時の「アカ狩り」の第一線に立っていた――自らの同志を攻撃していた――特高警察と融和的な態度を取れてしまうところに、未明の社会主義者としての不徹底さが窺える。

大正一二年の関東大震災直後は、自警団の襲来を恐れて、一家で数日間、坪田譲治宅へ避難した。

二、「ブルジョアを脅威せよ！」――階級闘争の鼓吹

このように、小川未明は大正期、社会主義と急速に接近していった。知友・大杉栄の虐殺や、特高刑事の自宅訪問等、社会主義運動に関係することで生ずる苦痛・圧迫は確実に存在したが、それでも彼は昭和初期まで、各種左派団体との接点を失わずにいる。本節ではこの

時期の未明の思想の特徴を、作品に即して分析してみたい。

第一の特徴は、資本主義の否定である。

> 資本主義制度の下に、私達は、もはや正義が存在しないといふことを知つた。そして、階級闘争が決定せざる限り、この社会に、真の平和は見られないといふことを知つた。（中略）資本主義の道徳は、無産者に、特権階級の犠牲者たることを強めるばかりでなく、それを正当たりとするものである。資本主義制度の下には、正義がない。道徳がない。宗教がない。芸術がない。
>
> 「プロレタリヤの正義、芸術」（『解放』大正一一年八月）

> 併し、私は敢て云ふ。真実に真理の進行と供に、人間愛を感ずるものであつたなら、今日の社会に於て社会主義者たらざるを得ない。（自分さい（ママ）善ければ善い）と云ふ資本主義の精神と、（社会を善くすることに於てのみ自分を善くする）と云ふ社会主義精神とは、其の根底から倫理的に非常に相違がある。この二つの思想は到底相容るべきものではない。
>
> 「人間愛と芸術社会主義」（『野依雑誌』大正一一年二月）

未明が資本主義を批判するのは、それが「無産者に、特権階級の犠牲者たることを強める」ため、すなわち、持つ者と持たざる者の格差を必然化するためである。資本主義は、平等とかけ離れた富の偏在をもたらす制度として認識されている。だから、貧者に対する「人間愛」を持つ者は、彼らの救済を目指す「社会主義者たらざるを得ない」。未明はこう考える。

未明の社会主義への入り口は、このような格差批判のヒューマニズムだった。しかし、秋山清が「ヒューマニズムから社会主義にはいっていった人には論理的な解剖は弱いですからね」（「《聞き書き》社会思想家としての小川未明」『日本児童文学』昭和四九年一月）と語るように、あるいは続橋達雄が「その感想や小説において、社会の不合理・矛盾への怒りは繰り返されても、社会科学的分析の深化や未来社会への具体的なプランを明示することはなかった」（「解説」『日本児童文学大系』第五巻、ほるぷ出版、昭和五二年一一月）と語るように、未明の社会主義思想は没理論的だ。

資本主義を激しく否定する文章は数多くあるのだが、これらは総じて短文であり、内容的にも、マルクス経済学や史的唯物論といった科学的社会主義の理論的素養は感じられない。

情緒と修辞で資本主義社会の理不尽を感情的に訴えるのが未明の手法である。この苛烈なアジテーションに読み手は圧倒されてしまうのだが、繰り返すように、理論はない。

やや先取りして言うと、その時々の流行思想を身にまとい、躊躇のない断定を繰り返すのが未明の思想的文章の特徴で、この特徴は戦時下の国家主義、敗戦後の戦後リベラリズム期においても確認できる。

第二の特徴は、階級闘争の推進である。

私は、クラシック芸術の精華に対して、尊敬を怠る者でない。すべての美に対し、善に対し、また生活に対して、感激を有しないのでない。しかし、いま眼前に生起しつつある階級闘争の事実より、更に、偉大なる感激を強ゆるものが他にあらうか？　これより、正義と、愛と、憤怒とを感ぜしめるやうな、偉大な事実が他に存するであらうか？　たとへ階級闘争といふ現象が、人生の永久に負はなければならぬところの、性の事実といふ如きものに比較して、一時的の現象であらうとも、事は、世界の上に住居する幾億の無産階級の死活問題にかかつてゐる。（中略）政治に於いては、プロレタリアの独裁が予想される。

「近き文壇の将来」（『読売新聞』大正一一年一月一九・二〇日）

この社会には、いつの間にか、搾取する階級と搾取される階級とが出来てしまつた。私達が正直に、誠実に、勤勉に働き、また人生のために思索しつつある間にいつの間にか、この社会には、正義も、人道も、良心も無視して、私達が正直なるがために、誠実なるがためにいいことにして頭から押へ付ける権力階級といふものが生じてしまつたのだ。（中略）労働祭は、全世界の無産階級の結束すべき日だ。正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！

「労働祭に感ず」（『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）

正義といひ、人道と呼ぶものは、畢竟、闘争を離れて、それを考へることが出来ない。理想に殉じて、多数の衆俗と争つた事実を他にしてはないからである。強者と弱者の戦は常に階級闘争であつた。最も勇敢なる階級闘争の戦士を措いて、私達は、正義について、また人達（ママ）（人道――引用者注）について考へることが出来ない。自己の悩みは、即ち自己の属する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつは

る鉄鎖を切断しなければならない。

「闘争を離れて正義なし」（『中央公論』大正一一年七月）

「ブルジョアを脅威せよ！」「階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならない」とは、革命家のような物言いである。この時期、階級対立の存在を鮮明に自覚した未明は、その対立を実力で解消すべく、階級闘争の推進者となって行く。未明は一般にアナ派の論客として知られており、その思想は、アナキズム（空想的社会主義）の範疇におけるものと理解されているけれど、歴史を貫く階級対立の存在は信じていた。これは当時交流のあった大杉栄の影響が大きいだろう（注6）。

さらに、未明は知識人を、ブルジョアの階級支配を補完する提灯持ちとして批判していた。

私は、真の敵が、常に対立した、反主義者にばかりあるとは考へない。たとへば社会主義に、対立する真の敵は、もとより資本主義には相違ないが、これあるがために、闘争的意志は強められ、信念は、益々浄化される。しかし、其の間に介在する灰色の階級や、主義者は、却つて相互の争闘的精神を鈍らせるばかりでなく、真理に向つての前進を阻止する妨害をなすことを知らなければならない。一般に知識階級が、ある時期に際して憎視され、甚だしき反感を買ふのは、これがために他ならないのであります。

「芸術は革命的精神に醗酵す」（『解放』大正一一年一月）

知識階級は、プロレタリアの「争闘的精神を鈍らせ」る「灰色の階級」である、というのが未明の見立てである。その上で彼は、自己を知識階級の一員として認識しており、知識階級が無産階級の闘いへ連帯し、共闘することに階級闘争の展望を見出している。

これは大杉が相馬御風との論争において、御風らを「紳士閥の進歩思想家」と規定し、芸術家的な「観照の法悦」に留まらない、社会運動の実践を求めていた論旨と重なる（注7）。前節で述べた通り、大杉の階級対立の歴史観と知識人批判の思想は、未明に流入していたと考えられる。

第三の特徴は、反戦意識である。

人を殺し合ふといふ事実のいかに不合理で、罪悪であるかをこれによつて痛感することがないのか。現状に於ては、戦争が仕方のないこととしても、人生からこれを除く、

其の理想に向つて尽さうとはしないのか。子供を持てゐるすべての親は、子供の可愛いことを知るであらう。年老つた親を持つてゐるすべての子は、親の身の上について思ふだらう。この至情の全くない輩は、私は人間として取扱はない。其等の子供が戦場の野に於て殺された時の親の心、親が敵兵に虐殺されたのを知る時の子供の心、自からの経験でなくとも其れを察することが出来る筈である。

「戦争に対する感想」(『太陽』大正七年六月)

戦争、それは、決して空想でない。しかも、いまの少年達にとつては、これを空想として考へることができない程、現実の問題として、真剣に迫りつつあることです。帝国主義の復産物(ママ)として、戦争を避け得られないことは、説明すべく、あまりにはつきりとした事実であります。そして、いま、世界の事情を観考するのに、第二の世界戦争が太平洋を中心として、次第に色濃く、萌しつつあるが如くです。(中略)かう思つて、何も知らずに、無心に遊びつつある子供等の顔を見る時、覚えず慄然たらざるを得ないのであります。朝に、晩に、寒い風にも当てないやうにして、育てて来た子供を機関銃の前に、毒瓦斯の中に、晒らすことに対して、ただこれを不可抗の運命と視して考へずにゐられやうか?

「男の子を見るたびに「戦争」について考へます」(『婦人之友』昭和三年五月)

ここで未明は「子供が戦場の野に於て殺された時の親の心、親が敵兵に虐殺されたのを知る時の子供の心」を推し量り、「子供を機関銃の前に、毒瓦斯の中に、晒らす」辛さを語っている。

国家主義時代に入ると、未明は施政者の目線で「聖戦」の意義を強調するあまり、実際に戦いの現場で流血し、命を落とす人間への想像力を失っていくが、この時期はまだ民衆の目線から、戦争がもたらす惨禍を見つめていた。例えば、童話「強い大将の話」(『読売新聞』大正九年一一月一五～一八日)では、大戦に勝ち凱旋する大将を欺く女性たちの虚言を通して、英雄の名誉の裏にあまたの名もなき民衆の死と、遺族の苦しみがあることを剔抉している。

また未明は、「帝国主義の復産物(ママ)として、戦争を避け得られないことは、説明すべく、あまりにはつきりとした事実」であると述べ、戦争とは国家の利益のために罪のない民衆を翻弄するものだ、という戦争観を提示している。これは童話「野薔薇」(『大正日日新聞』大正

九年四月一二日夕刊）や小説「血の車輪」（『文学世界』大正一一年一〇月）でも反復されるモチーフである。

「野薔薇」では、国境警備を担う隣国の青年と老人が描かれる。二人は国の違いを超えて仲良くしているが、その内「この二つの国は、何か利益問題から戦争を始め」、青年の国の兵士は「みなごろし」（傍点原著者）にされてしまう。本作では、恨みのない善人同士に殺し合いを強いる国家権力の恣意性が描出されている。

「血の車輪」では、「祖国を救へ！」という掛け声の下、「手足の立つ働き盛りのもの」は、ことごとく戦争に動員されようとしている。家族らは反対し、戦地へ出発間際の汽車を取り囲むが、老将校は「祖国の危急には換へられない！」と断じ、汽車を発車。民衆を引き殺し、車輪は血に染まる。「野薔薇」と同じく、国家の都合で民衆に戦争を強いる国家権力の残虐性が告発されている（**四章参照**）。

これらの作品から明らかなように、社会主義時代の小川未明は、戦争における国家と民衆の利害を相反するものとして捉え、民衆側の受難に寄り添う姿勢を堅持していた。

三、国家主義の影響

大正期、「ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）と煽り、社会主義の立場を鮮明にしていた小川未明だが、昭和一〇年代に入ると一転、「私達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある」（「新しき児童文学の道」『都新聞』昭和一六年五月一二・一三日）と語る国家主義者へ変貌してしまう。本節では、この時期の未明の軌跡を辿りたい。

昭和初期の未明は、まだ社会主義の影響下にいた。反資本主義の姿勢、階級対立の世界観は、健在だったと言えよう。例えば、未明が結集した新興童話作家連盟の「声明書」（『童話運動』昭和四年一月）や、童話「労働祭の話」（『童話の社会』昭和五年五月）には、それらの思考が如実に表れている（**注8**）。

とは言え、当時の未明は、階級闘争を通じた社会変革を、大正期のようにストレートに訴えることはなくなっていた。代わりに、階級闘争の立場から文学や社会を一元的に裁断しようとするマルクス主義者のあり方を、「強権」（「新興童話の強圧と解放」『童話文学』昭和四年八月）、「残忍」（「児童のために強権主義者と戦へ」『黒色戦線』昭和四年八月）、「窮屈」（「新文芸の自由性と起点」『東京朝日新聞』昭和四年一一月一五・一六日）であると批判している。言わば、未明のアナボル論争だが、かつて「自己の悩みは、即ち自己の属する階級

的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならない」（「闘争を離れて正義なし」『中央公論』大正一一年七月）と断じ、階級闘争の正義性を確信していた彼の階級闘争観に、ある後退が生じている点が認められよう。

実際未明は、ボル派との方針の相違から、新興童話作家連盟が発足してすぐ、脱退してしまう。ボル派の論客・大河原浩は、未明脱退後の『童話運動』誌上で、次のような未明批判を展開している。

> 吾々は、マルクス主義的に社会を見得ない朦朧イデオロギスト、民主々義者を排撃しなければならない。彼等は労働者農民を裏切る。――裏切者を殺せ！　吾々が、小川未明を排撃する所以である。
>
> 大河原浩「小川未明論（二）」（『童話運動』昭和四年八月）

未明は芸術家の立場から、童話における「批判と詩化との釣衡」（「童話文学について」『童話運動』昭和四年二月）を主張していた。しかし、大河原のような純正のマルクス主義者にとって、階級闘争の立場に立ち切らないこのような未明の態度は、小市民的な、中途半端なものとして映った。

この頃、昭和四年は、小林多喜二と徳永直が小説「蟹工船」（『戦旗』五・六月）や「太陽のない街」（『戦旗』六～一一月）を発表し、プロレタリア文学が流行を見せる反面、前年の三・一五事件から四・一六事件へと、共産主義運動に対する官憲の弾圧が本格化していた時期でもある。他方の未明は、翌昭和五年、円本ブームで多額の収入を得て、高円寺に初の持ち家を購入。未明の次女・岡上鈴江は、当時の父の様子を次のように回想している。

> しかし、ながい貸家ずまいに終止符を打って、小さいながらも総檜づくりの家に移り、はじめて自分の家の檜の風呂に入った父はたのしそうだった。たっぷりお湯をわかして、ざぶりと入り、お湯がどっとあふれでるのが好きだった。
>
> 岡上鈴江『父未明とわたし』（樹心社、昭和五七年五月、八一頁）

治安維持法適用で、多喜二らが大量投獄される中、未明は逮捕されることなく、生活の安定を勝ち取っていった。逆に言うと、逮捕を伴うような血みどろの革命運動とは無縁だった。

しかし未明の社会主義が、結局、書斎の人のそれであったにせよ、昭和六年九月の満州事

変を経て、日本社会にファシズムが台頭していく中でも、彼は「研屋の述懐」（『民政』昭和九年九月）等、反戦的なヒューマニズムに溢れる作品を書いている。若干の思想的後退を見せつつも、未明はなお、社会主義思想を捨て去ってはいなかったのである（**七章参照**）。

ところが、昭和一二年七月、盧溝橋事件が起き、日中戦争が勃発すると、未明は反戦を放棄する。同年一〇月、自身が主宰する雑誌『お話の木』に、童話「僕も戦争に行くんだ」を発表したのだ。これは小学生の主人公・勇ちゃんが、溶接工場のおじさんの出征を見送り、「万歳」「僕も、戦争に行くんだ！」と叫ぶ内容で（**八章参照**）、山中恒と小埜裕二は、未明の国策協力の嚆矢の作品と位置付けている（**注９**）。日中戦争後の突然かつ急激な右旋回には、「国難」に機敏に反応してしまう、明治人特有のナショナリズムが背景にあるというのが、山中や小埜の他、多くの識者の見立てだ（**注１０**）。

昭和一三年に入ると、四月に国家総動員法が施行され、戦時体制は一層強化された。そんな中、内務省警保局図書課は、国家による児童図書の統制を企てる。中心となったのは図書課担当官の佐伯郁郎で、佐伯はまず、当時「俗悪」と批判の声が大きかった絵本（赤本）類を、検閲や発売禁止の処分で取り締まった。次に、未明・百田宗治・城戸幡太郎・波多野完治ら民間有識者に、児童図書改善のための答申を依頼した。

未明は次のような答申書を提出する。

> 児童教化によつて、社会の矛盾を除去し、善美の国家を建設したいと思ひます。国家の力にて、児童にとりて、有害なるものを除き、健全な教化に邁進したならば、今後十年にして日本精神を体得した立派な国民が養成されることによつて面目を一新するでありませう。（中略）日本精神を基礎とする教育は、道徳国家の建設であつて、これまでの物質至上の資本主義や、功利主義の線の上では、教育なされぬものであつて、第一歩から出直して児童を教化しなければなりません。今迄の物質第一、精神第二であつたのを精神第一、物質第二に価値を転換するのであります。此の如きは国家の力にしてはじめてなされるものです。これまでの教育が、立身出世を目指したとすれば、これからの教育は滅私奉公の信念にあります。従つてこれまでと正義感も異なれば、幸福感の内容すら異なる訳であつて、読物の統制が必要であります。
>
> 「児童雑誌に対する理想案」（『出版警察資料』昭和一三年七月）

ここで未明は、政府主導の言論統制に諸手を挙げて賛成し、「日本精神」をもって児童を教

化するべきだと説いている。昭和初年代、マルクス主義イデオロギーによる、児童への硬直した指導を批判していた未明が、ここに至って「日本精神」の名の下に同様の押し付けを行っていることは、皮肉だ。

この時期、未明は盛んに「日本精神」を鼓吹していたらしい。未明とともに民間有識者を務めた波多野完治は、戦後、次のような追想を行っている。

> 昭和十三年十月ごろ、例の内務省の児童図書の浄化措置という時に、内務省で第一回の会合やったんです。その時はじめてお目にかかった。その時の印象は、小川先生はさかんに日本精神、日本精神といいまして、ほかのこと何もいわないんですね。非常に議論の好きな、しかしその議論というのは展開しない議論なんですね。（笑）テーマだけを強調するという。
>
> 波多野完治他「座談会　小川未明の人と文学」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）

前節で、秋山清と続橋達雄は、未明の社会主義思想の没理論性を指摘していた。主張の内容は異なれど、それは波多野が目撃した「テーマだけを強調する」「展開しない議論」と、見事に符合していよう。

ともあれ、彼はここで時代に便乗し、国家統制の一翼を担う役回りを演じている。未明の協力もあり、同年一〇月には、児童図書の浄化指令書「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が完成。児童図書における教育・啓蒙的側面は一段と強まった（注11）。

昭和一五年は、皇国史観で皇紀二六〇〇年に該当する。この年は、九月に日独伊三国同盟が調印され、一〇月に大政翼賛会が発足するなど、戦時の色合いがますます濃くなっていった年だ。未明もまた、『夜の進軍喇叭』（アルス、四月）、『新日本童話』（竹村書房、六月）、『赤土へ来る子供たち』（文昭社、八月）といった、時局色の強い童話・随筆集を立て続けに出版している。一二月には、児童文化団体の統一を目指す、日本児童文化協会の創立準備懇談会が、大政翼賛会主催で開催された。未明も委員として関与したこの統一運動は、情報局主導のもと、幾多の会合を重ね、後の日本少国民文化協会へ発展を遂げる。

滑川道夫によると、設立準備会での未明の口吻は勇ましいものであったという。

> 少国民文化協会設立の会合などでしばしば目撃したところであるが「われわれ日本人は、この非常時局にあたつて……」と卓を叩かんばかりに愛国的熱情を吐露して少国民

文化建設を叫んでゐる氏の姿は、実に国民生活童話建設の先駆者といつた感銘を与へる。明治の小波氏に対比すべき童話の先覚者であり先駆者であり得たばかりでなく、今なほあくことなき前進に前進を続けようとする意欲は、全くたくましきかなである。

滑川道夫「現代の童話文学と童話作家」

（『少国民文学試論』帝国教育会出版部、昭和一七年九月）

日本少国民文化協会は、総則に「本会ハ皇国ノ道ニ則リ国民文化ノ基礎タル日本少国民文化ヲ確立シ以テ皇国民ノ錬成ニ資スルヲ目的トス」（「設立趣意書・定款並諸規定」）と定める、天皇制国家主義が教義（ドグマ）の児童文化団体である。

昭和一六年一二月、皇太子の誕生日に合わせて、日本少国民文化協会は発足。翌一七年二月、今度は紀元節に合わせて、発会式を開催した。この式には、時の東条英機首相も参列し、祝辞を述べている。日本少国民文化協会は、官許の御用団体として、華々しいスタートを飾ったのである。以後、未明はこの協会の役員（文学部会相談役）として、巡業の講演会に参加したり、機関誌『少国民文化』『少国民文学』や会報『日本少国民文化協会報』へ作品を発表する等、銃後で戦意高揚に努めた（**九章参照**）。昭和一九年一〇月には、第一回少国民文化功労賞を受賞している。

だが、「皇国」は負け、小川未明は敗戦の日を、高円寺の自宅で妻と迎えた。

四、「アジア共同体が真理なのであります」——聖戦のプロパガンダ

かくして小川未明は、日中戦争を機に右旋回し、内務省警保局や日本少国民文化協会といった国家機関へ協力。児童図書統制と皇民育成に努めた。本節では、この時期の未明の思想傾向を、作品に即して検討してみたい。

日中戦争以後の未明の文章を彩っているのは、第一に、天皇制の賛美である。

すでに、いまの日本は個人主義を許さない。全体の利福のために行動しなければならぬ。職能の別はあつても、共に同じ陛下の赤子で、兄弟である。始めから、貴賤の別も、階級の別ちのあらう筈がない。かうした矛盾から生ずる、対立と反目を除去することが急務だ。

「日本的童話の提唱」（『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）

従前述べているように、大正期の未明は階級闘争主義者だった。それがこの段階では一転、階級の存在を否定している。ブルジョアもプロレタリアも「陛下の赤子」であり、天皇という極点のもと、階級対立が溶解してしまっているのである。

これは未明が、家族国家観を有していたからだろう。彼は同じ文章で、「日本の家族制度は、日本精神を中軸とする、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか？　上下三千年、これがために和協一致が保たれたのである」とも語っている。天皇を「国民の父」に、国民を「陛下の赤子」に見立て、国家を一つの家族に準える家族国家観は、まさしく、天皇制国家の支配イデオロギーだった（注12）。ファナティックで非科学的な国体論を、この時期の未明は信奉していたのである。

そして国民は、「陛下の赤子」として、国家に忠誠を尽くすべきであると説く。

国家に対する愛は、即ち自己犠牲である。母親は子供のためには、我身の細ることも苦痛と感じないであらうし、大君のために、国民は殉ずることを至上の喜びとしてゐる。いづれも清純にして、熾烈の愛を感ずるがためです。

「創造の歓喜に生きよ」（『祖国』昭和一五年四月）

君に忠にし、親に孝にし、国家を愛することは、人間としての、日本人としてのよろこびがあることを高調し、滅私奉公の精神の中にこそ、真の幸福があるといふ、最高の倫理観を、自己に確立すると共に、児童達にも説かねばならないのであります。

「指導者自らが燃え立たずば」

（『新しき児童文学の道』フタバ書院成光館、昭和一七年二月）

「大君のために、国民は殉ずることを至上の喜びとしてゐる」「君に忠にし、親に孝にし、国家を愛することは、人間としての、日本人としてのよろこび」。あるいは未明は、「苟（いやし）くも生を皇土に享けるものは一木一草と雖も皇土のために役立つべき」（「当面の児童文化」『報知新聞』昭和一五年一二月一～五日）とも記している。

こういったお上への滅私奉公を是とする感覚は、高田の旧下級士族の家で生まれ育った出自に由来するだろう。続橋達雄は、未明の「士族意識の強さは、かれの人間観や倫理意識をその根底から支えているものの一つ」（『未明童話の研究』明治書院、昭和五二年一月、一四・一五頁）であると分析している。

しかし、生育環境からなる士族意識が、家族国家観とどれだけ親和性の高いものであったとしても、士族意識だけがこの時期の未明の言説を規定したわけではない。そこにはやはり、国策への屈服、時代への便乗があったのだ。文部省が皇国思想を宣布する目的で編んだ『国体の本義』（文部省、昭和一二年三月）や『臣民の道』（文部省教学局、昭和一六年三月）を読むと、未明の文章が、当時の施政者の要請に、優等生的に即応したものであることがわかる（注13）。

かつて未明は、「意義ある作家は、常に其の時代に孤立しなげ（ママ）ればならない。思潮とか、主義に漂つて、同じ方向に流れてさへ行けば、安全だと思ふような卑怯な作家に、決して、永遠に残る作品は書けない」（「我が感想」『早稲田文学』大正七年二月）と断じていたが、この時期の未明はまったく社会的に孤立していない。「思潮とか、主義に漂つて、同じ方向に流れて」行く、国家の提灯持ち以外の何者でもなかった。

第二の特徴は、日中戦争・大東亜戦争の推進である。

> 然るに今度の事変は、私達に民族的の自覚を促した。私達は、誰も彼も今や新しい世界観の上に立つて、新しい文化の建設に向つて再出発をしなければならなく要請されてゐる。即ち、私達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある。それ故にすべての作家は、文学行動を通して、翼賛し協力しなければならぬのだ。
>
> 「新しき児童文学の道」（『都新聞』昭和一六年五月一二・一三日）

ここで使われている「東亜新秩序」の語は、昭和一三年一一月に近衛文麿内閣が発した第二次近衛声明「東亜新秩序建設の声明」（内閣情報部編『支那事変に関する政府声明及総理大臣演説集』第一輯、内閣情報部、昭和一四年二月、四四・四五頁）に由来する。

この声明で近衛は、日中戦争の目的を「帝国の冀求（きゝゆう）する所は、東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り」と定義、「今次征戦究極の目的亦此に在す」と大義を与えた。そして、この新秩序建設にあたっては、「日満支三国相携へ（中略）東亜に於ける国際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、経済結合の実現を期す」べきだと説く。反共思想に基づく、大アジア主義だ。

未明はこの時期、アジア共同体の理想に燃えていた。

> すべて、革新的の理論は、その境遇上の必要から生れて来る。ユデヤ民族にとつて、唯

物史観が真理なる如く、東洋民族にとつて、アジア共同体が真理なのであります。しかもこの結合の様式と、八紘一宇の精神こそ、全人類を救ふに足るものでありませう。

「我を思はば国家を思へ」（『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）

東亜の新秩序は、日満支蒙の国家が、不可分一体とみることに始ります。是等の共同体は機械的に、強制的に、結合される形だけのものでなく、実に道徳的感情にまで、融合する有機体でなければなりません。そこに東洋人としての愛が、根底をなしてゐます。他面には、地域的に、歴史的に、また利害関係に立つ、現実の諸問題から、自然互に相依る本能を有するに至つたのであります。

「新組織新感情」（『新しき児童文学の道』フタバ書院成光館、昭和一七年二月）

思ふに、国家として、独立、自由の矜持なくんば、何の国家と称し、民族といひ得よう。我が日本は、実にそれ故に東亜後進諸民族のために、これまで搾取と暴戻（ぼうれい）を恣（ほしいまま）にしたる、米英の鉄鎖を断ち、永遠にその禍根を絶たんとして立上つたのである。

「解放戦と発足の決意」

（日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）

日本を中心とした、政治的・精神的なアジアの統一を説くアジア共同体の考えは、防共を旨とする近衛内閣の「東亜新秩序」から、欧米列強の植民地支配との対峙を説く東条内閣の「大東亜共栄圏」の理念に引き継がれて行った。それは表面上、アジア諸民族の共存共栄を謳う美辞麗句でありながら、実際は皇民化教育や資源の接収等、日本帝国主義の利害と打算に基づく植民地支配に過ぎなかった。

しかし、日中戦争以後の未明には、こういった自国の侵略的側面に対する批判の目はない（**注14**）。続橋が「政府の口吻そのまま」（「未明童話集『夜の進軍喇叭』序論」『野州国文学』昭和五四年一一月）と指摘するように、ここには国家の施政者と同じ目線で時局を語る国策追随者の姿がある。大正期、童話「野薔薇」（『大正日日新聞』大正九年四月一二日夕刊）や小説「血の車輪」（『文学世界』大正一一年一〇月）で、国家の都合に翻弄される民衆の惨禍を描いていた未明とは対照的だ。

第三の特徴は――社会主義時代と同じく――資本主義の否定である。

私は、日本の今後の文化が、日本精神に立還るに当つて、もう少し資本主義の弊害をここにいつて置く必要がある。人間が、金や物質に縛られることによつて、永い間人間性を無視してきたのだ。（中略）資本主義は、いろいろの分業を産み、人間を機械に隷属せしめ、人間を退化せしめたのだ。

「日本的童話の提唱」（『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）

たとへば、酒や煙草の害毒をよく弁へるものでも、これを禁絶するとなると、並ならぬ苦痛を感ずるのが常であります。なぜこんなことを言はなければならぬか、金銭が人心を腐食し世道を頽廃したことは、到底酒や、煙草の比でなかつたのを反省なさしめるためです。アルコール中毒や、ニコチン患者は、半身不随意となり、普通は、痴呆となるが、金銭中毒者は、物に対する正視を失ひ、何を見、何を考へても、貨幣価値しか浮んで来ないのであります。

「美しき夢を持て」（『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）

いつしか金銭に隷属し、職業意識に囚はれたる自己を反省し、敢然として之を捨て、自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである。思ふに、人類が、曾（かつ）ての素朴なる自給自足の原始性を喪い、畸形に機械化された重なる原因は、資本主義が分業を課して、利潤の増進をはかつたがためである。そのために、著しく天賦の創造力も、冒険心も、勇気も、決断も、衰へたのである。

「解放戦と発足の決意」

（日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）

社会主義を捨て、国策協力へ走った未明だが、大正期に見られた資本主義批判は、依然健在である。ただし、相違点が二つ指摘できよう。

一つは、社会主義時代の資本主義批判には、根底に持つ者と持たざる者の格差への義憤が存したのに対し、国家主義時代には、そういったヒューマニズムが見られない点である。代わりにこの時期は、資本主義に伴う、全体的（トータル）な人間性の堕落が問題視されている。

二つは、かつての未明は、資本家階級の強圧に対して、「ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）と叫び、資本家階級か労働者階級の「一方が征伏（ママ）せらるるまでは争闘が続けられべく（ママ）考へらるる」（「本然的の運動」『新潮』大正八

年九月）と階級闘争を呼び掛けていたのに対して、階級闘争を捨てた点である。代わりにここでは、「日本精神に立還る」ことをもって、資本主義とその悪風を一掃しようと説いている。

山中恒は、二点目の推移の要因について、「還暦を迎えた未明が時勢に乗るために、これまでの公教育思想や文化財を資本主義の悪しきものと批判するためには、唯物史観や社会主義以外に拠り所を求めるとすれば、これはもう国体原理主義に依るしかなかった。せっぱつまった未明としては、そこへ避難せざるを得なかったのだろう」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月、二〇六頁）と分析しているが、確かに、昭和初年以来、官憲の弾圧により、社会主義運動が徹底的に鎮圧されていた以上、階級闘争の力で資本の運動に制約をかけることは期待できなかった。代わってこの時代は、労働者階級ではなく天皇制国家が、資本の活動を制限し得る絶大な権力を有していた。社会主義を諦めた還暦老人が、資本主義を批判するための方便として「国体原理主義」へ接近したとする山中の見立ては、あながち的外れではなかろう（注15）。

しかしその接近の程度は、決して「避難」の語で尽きるような、軽いものではなかった。

五、日本近代転向史上の位置　――日中戦争を契機とした完全同調

さて、ここまで筆者は、大正―昭和戦前期の小川未明の足跡と思想的変遷について、その推移を辿ってきた。最後に本節では、かかる未明の転向が、日本の近代転向史において、どのような位置を占めているのかという問題を、俯瞰的な視座から考察したい。

まず問いたいのは、転向の時期である。転向研究の第一人者である鶴見俊輔は、近代日本の転向には、転向者が続出した、大きく四つの「時期的な山」があると指摘している。

> 現代日本思想史における転向をあつかうのには、いくつかの時期的な山がある。それらの中で最も大きな山は、第一は、昭和六年の満州事変開始以後の国家権力による強制力発動の系列で、昭和八年の集団転向に明白な頂点をもつ。第二は、昭和十二年の北支事変開始から大東亜戦争に至る時期であって、昭和十五年の新体制運動に頂点をもつ。第三の山は、敗戦による権力の移動にともなう新しい方向づけをもつ強制力発動の系列であって、これは昭和二十年八月十五日終戦決定にその頂点をもつ。第四の山は、戦後の逆コースの開始であって、昭和二十七年の血のメーデーの弾圧直後の時期が転向の頂点である。

鶴見俊輔「転向の共同研究について」
（思想の科学研究会編『共同研究転向　改訂増補版』上巻、平凡社、昭和五三年二月）

つまり、鶴見によれば、①満州事変（昭和六年～）、②日中戦争（昭和一二年～）、③敗戦（昭和二〇年～）、④逆コース（昭和二五年～）の四期が、転向者の大量発生した主要な「山」ということになる。

この区分を援用するなら、大正―昭和戦前期の未明の転向は、②日中戦争の時期になされたものと見るのが、妥当であろう。三節でも述べた通り、①満州事変の段階では、未明はまだ十分に右傾化していないからである。

当時、雪崩を打って転向したのは、主に、日本共産党の人々であった。例えば、同党幹部の佐野学と鍋山貞親が、思想検事に慫慂（しょうよう）されて発した「共同被告同志に告ぐる書」（『改造』昭和八年七月）は、天皇制の擁護、コミンテルンの指導からの離脱、満州事変の正当化を旨とする、一国社会主義への転向声明であり、党の内外に多大な衝撃を与えた（**注16**）。藤田省三が指摘する通り、「不動の星座としての共産党の人格的シンボルであった佐野・鍋山の転向を、知識人の多くは、鍋山が言った意味を超えて「党の敗北」だと考えた」（「昭和八年を中心とする転向の状況」『共同研究転向　改訂増補版』上巻）のである。特高警察による徹底的な弾圧――昭和八年二月に発生した小林多喜二の拷問死は、そのもっとも陰惨な事例である――への恐怖も相俟って、以後共産党では、上は三田村四郎・高橋貞樹・田中清玄等の幹部から、下は平の党員に至るまで、離党者・脱党者が相次ぐようになる。

しかし未明は何分、共産党員ではないし、被逮捕経験もないから、この時期の弾圧↓転向の系譜に名を連ねているとは言い難い。そのことは、彼が満州事変を賛美せず、昭和一〇年まで、アナキスト系の解放文化連盟に毎月カンパを寄せていた事実（**一・三節参照**）からも確認できよう（**注17**）。未明が国策協力へ舵を切るのは、日中戦争より後、作品的には、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）以降のことである（**八章参照**）。そしてその背景には、第一次近衛文麿内閣で発動された「国民精神総動員運動」の存在があると考えられる。日中開戦という国家的危難を前に、明治人特有のナショナリズムを高揚させた未明は、国家主導の挙国一致体制にすんなりと取り込まれてしまったのだ。

精動は結局、新体制運動＝大政翼賛会へと帰着するわけだが、②日中戦争期は、共産主義者のみならず、無政府主義者・社会民主主義者・自由主義者・宗教者にまで有形無形の圧力が加えられており、同時代的に見て、未明の旋回は決して珍しい現象ではなかった。藤田は、

日中戦争以降の国内の思想状況について、「「積極的」な「報国」行動が要求され、その限りにおいて「無為」も「勝手」も「妄想」も許されない。傍観主義、自由主義、観念的態度から特定の行動そのものへの転向が迫られたのである」（「昭和十五年を中心とする転向の状況」『共同研究転向　改訂増補版』中巻、平凡社、昭和五三年四月、傍点原著者）と述べ、①満州事変の段階を遥かに上回る、強大な同調圧力の存在を指摘している（注18）。

次に問いたいのは、転向の程度である。ここでは、昭和一一年に制定された、思想犯保護観察法――釈放された思想犯の改悛・更生を目的とし、日常生活の監視を行う――における転向の五段階区分を参照したい。

第一段階　（運動から離れながらも――引用者注）マルクス主義の正当性を主張し又は是認する者
第二段階　マルクス主義に対しては全く又は一応無批判的にして今尚ほ自由主義、個人主義的態度を否定し得ざる者
第三段階　マルクス主義を批判する程度に至りたる者
第四段階　完全に日本精神を理解せりと認めらるるに至りたる者
第五段階　日本精神を体得して実践躬行の域に到達せる者

森山武市郎『思想犯保護観察法解説』（昭徳会、昭和一二年三月、六二～六五頁）

これは、当時の検察当局がマルクス主義者に適用していた転向の尺度で、第四段階が「一応目標」に定められている。一方の極にマルクス主義を、他方の極に「日本精神」＝国体（天皇制）を置く、単純な図式だ。

思想検察の尺度を用いて、人の思想を云々するのは、あまり気持ちのよい作業ではないが、学問上、あえて論断すれば、日中戦争後の未明は、完全に第五段階へ到達していたと見て、間違いないだろう。かつて、「階級闘争」を叫ぶ社会主義者だった未明が、「日本精神」を唱える国家主義者へ変貌を遂げ、戦後、波多野完治から「小川先生はさかんに日本精神、日本精神といいまして、ほかのこと何もいわないんですね」（「座談会　小川未明の人と文学」『日本児童文学』昭和三六年一〇月）と回顧されていたのは、既に論述してきた通りである。検察当局の基準に照らして、未明が模範的な転向者であった点に、疑いの余地はない。

ところで、誤解してはならないのは、かかる転向は、およそ偽装転向その他の「ためにする」転向ではなかったという点である。例えば河上肇は、保釈や執行猶予判決を勝ち取るた、

めに、獄中で、運動の第一線から手を引くことを誓約したが、検事の求めたマルクス主義思想の積極的否定には、決して肯じなかった（注19）。あるいは、古在由重は、早期出獄するために、舌先三寸の供述調書を書いたが、出獄後はゾルゲ事件の首謀者・尾崎秀実（ほつみ）の弁護活動に奔走している（注20）。しかし、未明の転向は、このような高度な戦略的立場からなされた、妥協の産物ではない。文字通り、赤心から、それまでの社会主義思想を清算（リセット）し、国家の総力戦体制へ忠誠を誓ってしまっているのである。秋山清の戦時下の詩に見られるような、芸術的抵抗の痕跡がまったく残されていないことも、その傍証となろう。

最後に問いたいのは、転向後の反省の有無である。転向後、自らの変節を恥じ、悔やむプロレタリア文学作家は決して少なくない。中野重治はその筆頭である。

> 僕が××（革命――引用者注）の党を裏切りそれに対する人民の信頼を裏切つたといふ事実は未来にわたつて消えないのである。それだから僕は、あるひは僕らは、作家としての新生の道を第一義的生活と制作とより以外のところにはおけないのである。もし僕らが、自分で呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯綜を文学的綜合のなかへ肉づけすることで、文学作品として打ち出した自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加はれたならば、僕らは、その時も過去は過去としてあるのではあるが、その消えぬ痣を頬に浮べたまま人間および作家としての第一義の道を進めるのである。
>
> 中野重治「「文学者に就て」について」（『行動』昭和一〇年二月）

中野にとって、転向とは、「党」と「人民」に対する「裏切り」以外の何物でもなかった（注21）。中野が著した転向文学の白眉「村の家」（『経済往来』昭和一〇年五月）では、権力に屈服して執行猶予判決を得た主人公のインテリ青年・勉次が、父・孫蔵によって、厳しく叱責されている（「それじやさかい、転向と聞いたときにや、おつ母さんでも尻餅ついて仰天したんじや。すべて遊びじやがいして。遊戯じや。屁をひつたも同然じやないかいして」）。

同時代の転向文学に目を転じても、村山知義「白夜」（『中央公論』昭和九年五月）や高見順「嗚呼いやなことだ」（『改造』昭和一一年六月）では、主人公格の男性が、「壁に頭を打ちつけて自責した」り、「私如き裏切者」と卑下しており、当の作者自身、自らの転向体験に罪悪感を感じている様子が濃厚である。

他方、未明のテキストには、転向に伴うこのような恥の意識や裏切りの意識は、微塵も表象されていない。過去と現在の言動に、明確な矛盾・乖離が生じている点に、痛痒を感

じている形跡がない。自己肯定感が強いのだろうか、とにかく徹底して、無反省なのである。この自己批判精神の著しい欠如は、未明の転向を捉えるに際し、重要なポイントだろう。恥じらいなき転向者と評価する他ないのである。

かくして、大正―昭和戦前期の小川未明の転向は、日中戦争以後の挙国一致体制にやすやすと与した完全同調型として、また自己の思想的変節に批判的眼差しを向けない無反省型として、日本の近代転向史の中に位置付けることができるだろう。

小括

以上見てきた通り、大正から戦中にかけて、小川未明は社会主義者から国家主義者へと変身を遂げた。思想的には一八〇度の「転向」である。本章では最後に、この間の未明の転向を、大きく三つの観点から整理したい。

一つは、階級対立の認識が家族国家観によって融解した点である。未明は大正期、ブルジョアとプロレタリアの間の階級対立を自覚し、後者の立場から「階級闘争」を推進していた。例えば、「自己の悩みは、即ち自己の属する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならない」（「闘争を離れて正義なし」『中央公論』大正一一年七月）といった発言は、その一端である。

しかし、昭和初年以降、社会主義運動・思想を徐々に放棄した未明は、日中戦争に至ると、天皇制の賛美を始める。その賛美の仕方は、天皇という至上の権威を持ち出すことで、国民間の階層差を無化し、日本国を一つの家族に見立てることで、国民をあまねく包摂しようとするものだった。階級闘争の主役である労働者階級は、「陛下の赤子」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）へ、転じてしまったのである。

二つは、民衆の受難に寄り添う反戦意識が、施政者目線の聖戦賛美によって一掃された点である。大正期の未明は、戦争における国家と民衆の利害を相反するものとして捉え、主に後者の立場から作家的想像力を働かせていた。例えば、童話「強い大将の話」（『読売新聞』大正九年一一月一五～一八日）では、戦争指導者の栄誉の裏にある、無数の屍と、遺族の悲嘆が描出されている。

翻って、戦中期の未明はどうか。彼は「東亜新秩序」「アジア共同体」「八紘一宇」といった国是のスローガンを復誦し、「早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか」（「子供達に」『僕はこれからだ』フタバ書院成光館、昭和一七年一一月）と、子どもに戦争協力を焚き付けている。かつての反戦作家は、忠実なる帝国の臣民へと様変わりして

しまった。

三つは、資本主義批判の動機が、格差批判のヒューマニズムから資本主義がもたらす人間性の堕落へとシフトした点である。大正期の未明は、まずもって富の偏在の観点から、資本主義を批判していた。例えば、「富む者は益々富み、貧しく、働く者は、益々苦しくなるといふのが現時の状態である。子供が病気をしても、思ふやうに手を尽してやることが出来ず、また、親が病気でも仕事を休むことすら出来ないのが、吾等、無産階級の有様である」（「本然的の運動」『新潮』大正八年九月）と、一般勤労者の貧困を嘆いている。

だが、戦中期の未明は、資本主義が人間の金銭・物質への崇拝を生み、結果、「金銭が人心を腐食し世道を頽廃したことは、到底酒や、煙草の比でなかつた」（「美しき夢を持て」『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）点、換言すれば、資本主義に伴う人々のモラルの変質を問題視している。もっともこれは、前景化していなかっただけで、大正期にも伏流していた未明の思想的特徴だ（注22）。

そして、上記三点に特徴付けられる未明の転向は、日本の近代転向史上、次のような位置を占めていると言えるだろう。すなわちそれは、時期的には、非共産党系の合法左翼さえ許されない時代になりつつあった日中戦争以後の変心であり、程度的には、当時の思想検察基準で、もっともハイレベルな――偽装転向を疑う余地のない――完全同調型であった。また、未明の転向は、他の転向作家に散見されるような自責の念がほとんどパーフェクトに欠落した、無反省型であった。

長年、小川未明を「日本児童文学の父」として権威化してきた人々にとっては受け入れ難い事実かもしれないが、大正―昭和戦前期の事績をつぶさに渉猟した時、見えてくるのは、時代の奔流に押し流される――あるいは、進んでその尻馬に乗ろうとする――転向者の姿なのである。

注

1　上笙一郎「戦後の小川未明の思想」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）、乙骨淑子「小川未明ノート　――文学革命のゆくえ」（『文学』昭和四〇年五月）、五十嵐康夫「戦後の小川未明」（『日本児童文学』昭和四七年一月）参照。なお近年、山中恒が著した『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）は、昭和戦前期の未明の国策協力を詳述した労作だが、本書は戦中を単独で取り上げているため、大正や戦後との比較はなされていない。

2　大杉栄「大久保より」（『近代思想』大正二年九月）には、「僕は未明と云ふ人には始めて会つたのだが、その頗る真面目なしかし激越な、心の底から湧いて出るやうな感情の声を聞いて、ちよつと寒村を思ひだした。相馬も「いや、全くさうですよ」と同感してゐた」との記述ある。

3　以下、関の発言。「それから大正十一年、第一回メーデーに参加された思い出を話しておられましたが、あのころはメーデーに参加するデモの人たちよりも、警官の数が多い時代ですから、警官が寄ってきて小川先生を列の外へひっぱり出そうとしたんだそうです。何か叫んだかどなったかしたんでしょう。（笑）「ぼくははいてた長靴でけとばしてやったよ」（笑）ずいぶん先生も若いころは、そういう行動的な時代もあったんだと感じましたね」（関英雄・坪田譲治・波多野完治他「座談会　小川未明の人と文学」『日本児童文学』昭和三六年一〇月）

4　以下、秋山の発言。「昭和八年の八月からアナキストの文化運動が初めて全国的な統一団体を組織したことがあるんです。それが十年十一月まで続いて、無政共産党事件の大検挙でだめになったんですが、そのときに、じつは私は、そこにいまして、あれこれと事務的なことをやっていたんですが、小川未明はかくれた経済的なシンパだったんです」「毎月金をくれました。当時裕福ではなかったと思うんです。今月はまことにわずかで申し訳ないと言いながら、欠かしたことはなかったんです。そういうことに対する協力という精神ははっきりしていたと思います」（「《聞き書き》社会思想家としての小川未明」『日本児童文学』昭和四九年一月）／「そのころアナキズム系の全国的な文化団体で解放文化連盟というのがあり、新居格さんと未明さんはそこに加わらなかったが、大切なシンパで、毎月私が、新しく出来た機関紙を届けかたがたきまったカンパを受けて来ることになっていた」（「あおぞらと未明さん」『定本小川未明童話全集』第一二巻月報、講談社、昭和五二年一〇月）

5　山室静「解説」（『小川未明作品集』第四巻、講談社、昭和二九年一〇月）、「小川未明論」（『現代日本文学全集』第七〇巻、筑摩書房、昭和三二年二月）参照。

6　例えば、大杉の「征服の事実」（『近代思想』大正二年六月）では、「歴史は複雑だ。けれども其の複雑を一貫する単純はある。たとへば征服の形式はいろいろある。しかし古今を通じて、一切の社会には、必ず其の両極に、征服者の階級と被征服者の階級とが控へてゐる」と、歴史を貫く階級対立の存在が主張されている。

7　大杉栄「再び相馬君に与ふ」（『近代思想』大正三年二月）参照。大杉は「征服の事実」（同前）でも、「征服階級と被征服階級との中間に在る諸階級の人々は、原始時代の彼の智

識者と同じく、或は意識的に或は無意識的に、此等の組織的暴力と瞞着との協力者となり補助者となつてゐる」と述べ、支配階級の補完勢力に過ぎない知識人のありようを批判している。

８　「声明書」（『童話運動』昭和四年一月）には、「資本主義は政治的経済的に有らゆる者を蹂躙して余さぬ。我等の児童も亦その毒牙を免れては居らぬ。（中略）本来、児童文学作家の役割は、児童を一切の害悪より庇護し健康なる成長を遂げしむるにある。今やそれをなし得るものは我ら反資本主義児童文学作家のみである」との記述があり、自分たちを「反資本主義児童文学作家」と位置付けている。また、「労働祭の話」（『童話の社会』昭和五年五月）には、五月一日も稼働させられている煙突が「「おれたちの親方は、わからずやで、メーデーなんかしなくていいといつてる人だからな」と、悲しさうに、いひわけ」し、休業中の煙突に「まだ、そんなわからずやが、この世間におるのかなあ」と同情される寓話的エピソードがある。

９　山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二三年一一月）、小埜裕二「解説」（『小川未明新収童話集』第四巻、日外アソシエーツ、平成二六年二月）参照。

１０　菅忠道「日本の児童文学と小川未明」（『文学』昭和三六年一〇月）、上笙一郎「戦後の小川未明の思想」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）、砂田弘「評伝　小川未明」（同編『新潮日本文学アルバム　小川未明』新潮社、平成八年三月）参照。

１１　鳥越信は、「日本少国民文化協会について」（『文学』昭和三六年八月）で、「この要綱が日本に於ける最初の児童文化統制であるばかりでなく、まさにそれゆえに、終戦までの児童文化を規制した根本的理念」であると述べ、「要綱」が児童文化の国家統制に与えた、影響力の大きさを指摘している。

１２　藤田省三『《新編》天皇制国家の支配原理』（影書房、平成八年三月）参照。

１３　『国体の本義』（文部省、昭和一二年三月、三八頁）には、「抑々（そもそも）我が国は皇室を宗家とし奉り、天皇を古今に亙る中心と仰ぐ君民一体の一大家族国家である。故に国家の繁栄に尽くすことは、即ち天皇の御栄えに奉仕することであり、天皇に忠を尽くし奉ることは、即ち国を愛し国の隆昌を図ることに外ならぬ。忠君なくして愛国はなく、愛国なくして忠君はない」と、『臣民の道』（文部省教学局、昭和一六年三月、四一・四二頁）には、「皇国臣民は、畏くも皇室を宗家と仰いで、一国一家の生活を営んでゐる。（中略）万民愛撫の皇化の下に億兆心を一にして天皇にまつろひ奉る、これ皇国臣民の本質である。天皇への随順奉仕するこの道が臣民の道である」と、それぞれ記述されている。いずれも家族国家観をもって、

国民の精神的一体化を図っていると言えるだろう。

14　岡上鈴江は、『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）で、戦中の未明の様子を次のように振り返っている。「自分が生まれた郷土、祖国を愛する念が人一倍強かった父は、また純情で単純で信じやすい性格だったから、「アジアの諸民族は欧米とは本質的に異なる特性を持っている。欧米の植民地支配下で苦しむアジアの弱小国をすくい団結して新しいアジアをきづこう」という東亜共栄圏の理念がとなえられると、強い関心をもってその記事をのせた新聞に見入った。「おとうさんはほんとうに信じていられたんだよ。小さな国が大きな強い国に支配され、しぼられているけれど、どんな民族もその国はその民族の手で治められるべきだ。日本はそれに力をかしてやろうとしているのだっていわれてねえ」と、母は後年、私に語ってくれた」（一八一・一八二頁）。つまり岡上は、未明が「郷土、祖国を愛する念が人一倍強」く、「純情で単純で信じやすい性格」故、「大東亜共栄圏」の理念に賛同したのだと解釈しているわけだが、親族の戦争責任を小さく見せたいためか、やや善意の解釈過ぎる嫌いがあろう。いずれにせよ、未明は「童話文学作家たるもの、現下の自然現象に対して、もつと感情が鋭敏でなければならぬし、国策に対して、殉教者的態度に出なければならぬのであります」（「童話精神の昂揚」『日本少国民文化協会報』昭和一八年一月一五日）とまで語ってしまっており、当時の国策に、何ら批判精神を発揮できていなかった点は確かである。

15　外池力は、戦中、多くの左派知識人が、大河内一男の生産力理論を信奉し得た理由について、「ここで述べたことは「社会主義→反資本主義→ファシズム」という構図になるが、中間項（反資本主義・反市場経済・反利己主義・反個人主義・反政党政治）が媒介となることによって、転向しやすくなるという構図は、すべてを変えるという意識では転向しにくいが、変えないものがあるから、変えられると言い換えることができる。その場合、正義感や倫理的立場は一貫していると自ら判断してしまうことになる」（「転向論」『政経論叢』平成二六年三月）と述べ、転向を容易ならしめる、不動の「中間項」の存在を挙げている。その点、未明においても、変わらない反資本主義の信念が、立場の転換を正当化する「中間項」として機能したのかもしれない。

16　佐野・鍋山の転向声明が既存のプロレタリア文化運動に与えた影響について、野間宏は、「この間に佐野学、鍋山貞親が転向声明書を発表し、それはプロレタリア文化運動に大きな影響を与えることとなった。コップ常任中央協議会ではただちに「ファシスト佐野、鍋山等の裏切りに際して声明す」という檄文を発表した。しかしそれはコップ内の動揺をすべ

ておさめるということはできなかった。これによって転向にみちびかれるものも、次第にでるようになって行った」（「解説」『日本プロレタリア文学大系』第六巻、三一書房、昭和二九年一一月）と、その影響の大きさを指摘している。また、荻野富士夫も「共産党の指導的立場にあるこの二人が「転向」声明を出したのだから、影響ははかりしれないものがあった」「はたして、佐野・鍋山の「転向」声明の影響は大きかった」（『思想検事』岩波新書、平成一二年九月、六四・六五頁）と述べ、両者の声明後、追随者が続出した由、報告している。平田勲ら検察当局は、メディアを使って、この声明を最大限演出し、思想犯の改悛に利用したようだ。その他、高畠通敏「一国社会主義者　――佐野学・鍋山貞親」（思想の科学研究会編『共同研究転向　改訂増補版』上巻、平凡社、昭和五三年二月）にも同様の記述がある。

１７　加えて、未明はこの時期、「アナーキズム文学は如何に進むべきか」（『アナーキズム文学』昭和七年六月）というアンケートへ回答するなどしており、全体として、アナキズム思想を放棄しているとは見做し難い。

１８　以下、藤田。「高度国防と総力戦の要求が社会の万物の活動形態を決定づけねばならないとき、すべての立場は目標をあたえられ、その目標に向けて転進することを強いられる。かくて、転向は以前のように単にマルクス主義・反国体主義・革命運動「からの」転向ではありえなくなり、総力戦があたえる目標「への」転向となった」（「昭和十五年を中心とする転向の状況」思想の科学研究会編『共同研究転向　改訂増補版』中巻、平凡社、昭和五三年四月、傍点原著者）

１９　藤田省三「あるマルクス主義学者　――河上肇」（思想の科学研究会編『共同研究転向　改訂増補版』上巻、平凡社、昭和五三年二月）、荻野富士夫『思想検事』（岩波新書、平成一二年九月）参照。

２０　鶴見俊輔「国民というかたまりに埋めこまれて」（鶴見・鈴木正・いいだもも『転向再論』平凡社、平成一三年四月）、藤田省三『『共同研究転向』中・下巻の総論についての補注」（思想の科学研究会編『共同研究転向』第六巻、東洋文庫、平成二五年三月）参照。

２１　中野の獄中転向の条件については諸説あるが、栗原幸夫は、「天皇制打倒のスローガン」を取り下げた――天皇制を是認した――点が、その内容的核心ではないかと、『プロレタリア文学とその時代　増補新版』（インパクト出版会、平成一六年一月）で、推察している。「私は中野の転向の最大の、そして恐らく党籍の承認よりも決定的な条件は、作品のどこにも現われてはいないし、また表わすこともできなかっただろうが、天皇制打倒のスローガンの否認ということだったろうと思う」（二六九頁）

２２　例えば、「金と犠牲者」（『東京朝日新聞』大正一一年三月一五・一六日）には、「ただ、金をやる者、また金を受ける者、みんなが金の前に奴隷となつてゐればこそ、万事が金によつて解決が付いてゐるのであります。この意味に於て、私は、金は、階級を産んだに過ぎずして、人間性までも腐朽せしめたものと考へて憎まざるを得ないのであります」との記述があり、金が人々の人間性を「腐朽」させる原因として、指弾されている。

七章　満州事変下の後退　――童話「青空の下の原つぱ」

はじめに

鶴見俊輔が、かつて自戒を込めて警告したように、転向問題を論じる際には、ある種の危険性が伴う。それは論者が、ともすれば、一方的な糾弾者・断罪者に陥りかねない危険性である。鶴見は、「同時代の非転向者の場所に自分をおいてそこから（転向者を――引用者注）裁くという態度」（「転向の共同研究について」『共同研究転向　改訂増補版』上巻、平凡社、昭和五三年二月）を固く戒めているが、これは学問的にも、倫理的にも、正しい姿勢だろう。

その戒めを踏まえた上で、筆者はあえて断言したいのだが、小川未明は転向者である。それも、社会主義から国家主義へ、国家主義から戦後リベラリズムへと、二度にわたって変節を繰り返した転向常習者である。本稿で筆者が検証したいのは、未明の思想的変遷に関することだ。

というのも、これまでの小川未明研究史において、十五年戦争下の転向や国策協力は、十分に検討されてこなかったからである（注1）。とりわけ、十五年戦争の序盤にあたる、満州事変（柳条湖事件―塘沽停戦協定）から日中戦争（盧溝橋事件）へかけての動向は、未明の本格的転向の契機が日中戦争――作品としては、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）――以降であるという事情もあって、先行研究の蓄積が、ほとんど皆無に等しい。

研究史上、かかる空白地帯が生まれてしまった背景には、「赤い蝋燭と人魚」「野薔薇」「金の輪」等、名作と名高い大正期のロマンチシズム童話のみを、もっぱら考究の対象として来た、（児童）文学研究者の慣習の問題があるだろう。筆者は、上記の慣習を「大正童話中心主義」と名付けている。そして、明治・大正・昭和の三代を生き、詩人・小説家・政治的イデオローグ等、様々な相貌を持つ文人・未明の十全な理解にあたっては、「大正童話中心主義」は克服されなければならないと考えている。

そこで本章では、今回、満州事変から日中戦争へ至るまでの約六年間を射程に据え、十五年戦争初期の未明の思想動向を解明したい。故に筆者は、まず、柳条湖事件から塘沽停戦協定までの足跡を包括的に検証するとともに（一節）、この時期の代表的作品である童話「青空の下の原つぱ」（『週刊朝日』昭和七年一月三～二四日、全四回）を分析することで（二節）、満州事変下の未明が、大正期に顕著だった左翼ラディカリズムを後退させつつも、いまだ社会主義思想の影響下にあった事実を明らかにする。次に、塘沽停戦協定から日中開戦へ至る

までのテキスト群の検討を通して、当時の未明に芽吹きつつあった、転向の萌芽を確認する（**三節**）。さらに、満州事変後の文学者の動向の包括的な素描を通して、このような隠微な右傾化をもたらした、文学史的背景を考察する（**四節**）。

右へ行くべきか、左に留まるべきか――転向数歩手前の地点で揺らぐ、昭和一〇年前後の小川未明の動向をつまびらかにすることが、本章の課題となる。

一、社会主義思想の持続　――柳条湖事件から塘沽停戦協定まで

満州事変下、小川未明は、如何なる政治思想を有していたのだろうか。本節では、石原莞爾ら関東軍の謀略によって勃発した柳条湖事件（昭和六年九月）から、蒋介石ら国民党政府によって、「満州国」が事実上、黙認されるに至った塘沽（とうこ）停戦協定（同八年五月）までの約一年九ヵ月の事績・文業を分析することで、この間の未明の思想動向を明らかにしたい。

総じて言えば、満州事変下の未明は、依然、社会主義思想の影響下にあった、と言える。というのも、当の未明自身、自らアナキストをもって、任じていたからである。新聞の文芸欄で、自己の思想遍歴を問われた際、未明は「新ロマンチシズムより、アナーキズムへ」（「文芸思想　Who's Who 28」『読売新聞』昭和七年二月六日）と回答。自身がアナ系の左翼であることを、決して隠してはいない。

また、雑誌のアンケートで愛読書を問われた折は、「生物学に関するもの。原始人の生活研究。自由思想の研究。等のものは、なるべく最新の真面目なものを愛読します」（「童話家と修養」『童話研究』昭和六年九月）と断った上で、帝政ロシアのアナキスト、ピョートル・クロポトキンの『相互扶助論』の名を挙げている。本アンケートでは、愛読書の他に、崇拝する人物についても、回答を求められているのだが、未明がそこで挙げた唯一の人名もクロポトキンだった。「人類愛に輝く、偉大なる先覚者として」、未明はこの異国の革命家を尊敬していたらしい。

さらに未明は、アナキズム文学の進むべき道について、「排理論、排指導、しかして個性を尊重し、常に人生に対する正義、友愛善美の感激より出発し多様なる生活を活写する情緒主観の文学を提唱します」（「アナーキズム文学は如何に進むべきか」『アナーキズム文学』昭和七年六月）と、自身のアナキズム文学観を披瀝したりもしている。アナキズムに関しては、一家言あったのである。

無産者階級と資本家階級の利害を対立的に捉える階級意識も、いまだ、健在である。この頃、昭和六・七年は、いわゆる昭和恐慌によって、不況が深刻化し、都市では労働者の馘首

が、農村では女子の身売りが、横行していたわけだが、かかる世相の原因を問われて、未明は次のように回答している。

政治の職業化、資本家の横暴、政党の無益な勢力争ひ、搾取階級の無反省、これ等が原因して、貧富の懸隔はますます甚しくなり、共労共楽の人生の理想、道徳より遠ざかり、勤労者の生活は、日々不安に襲はれたる結果に他なりません。ロシアの千八百六十年代の恐怖時代を想起します。

「組織の合理的変革」（『青年』昭和七年四月）

「資本家」や「搾取階級」の専横――あるいは、既成政党の無能――が「貧富の懸隔」を生んでいる、というのが、未明の情勢認識である。資本主義制度下の階級格差に対する批判は、これ以外にも確認できる（注2）。

文筆のみならず、実践面においても、未明は若干の関与を試みていたようだ。当時の新聞記事「プロ託児所　左翼文壇人等も片棒担いで」（『読売新聞』昭和七年三月三日）は、未明がこの時期、プロレタリアートの子弟のための「無産者託児所」を設置する運動に、一枚噛んでいた事実を報じている。この運動は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）等、左派系の諸団体が主導した運動で、中條（宮本）百合子・大宅壮一・貴司山治といった日本共産党系の文壇人も、賛助人に名を連ねていた。昭和初年以降、未明はアナ派の立場を鮮明にする過程で、ボル派との分岐を決定化させて行くわけだが、ボル派の人々と共闘する場面も、なお一定程度、存在したのである。

とは言え、全体として見れば、当時の未明は、マルクス（共産）主義に対して、極めて批判的なスタンスを取っていた。例えば、次のような発言から、その立場は看取できる。

ロシアは、強制によつて、児童時代から、共産主義的教育を施してゐます。共産主義の制度についても、道徳についても、一面の真理があるにちがひないが、主義の上から空想を排し、自由を奪し、機械化することを見る時、児童の将来に対して憐れまざるを得ないでありませう。（中略）ロシアの共産主義に指導さるる教育が、やがて、新味を失し、形式化し、硬化した時、それが、一層、自由精神に乏しきだけ、どれ程不具者の人間を産出するか分らないのです。

「児童教育とヂャナリズム」（『童話雑感及小品』文化書房、昭和七年七月）

周知の通り、マルクス主義は、史的唯物論や階級闘争理論によって、人類の歴史の発展法則を明らかにした思想だが、ここで未明は、そのイデオロギーの「真理」を一定認めつつも、かかる教義に基づいたロシア（ソビエト連邦）の教育制度を批判している。それは、「自由」や「空想」を排除しているが故に、人間を「不具者」たらしめる可能性があるというのである（**注3**）。

しかし、右記のようにマルクス主義と距離を取る未明が、大正期、マルクス主義――あるいは、革命ロシア――に一方ならぬシンパシーを抱いていた経緯は、既に**Ⅱ部「社会主義――アナキズムと共産主義」**で記した通りである。大正・昭和初期の未明の社会主義思想への接近が、もっぱらアナキズムの観点からのみ語られ、未明＝アナキズム系作家という図式が、現在に至るまで通説化しているのは（**注4**）、この時期のマルクス主義批判に拠るところが大きいだろう。昭和初期の段階で、未明のマルクス主義（およびソビエト連邦）への評価が、相当変化している点には注意が必要である。

同時代の児童文学界の人々も、未明をアナキストとして認識していた。例えば、尾関岩二は、「さういふ意味で彼は愛すべきアナアキストである。徹頭徹尾、戦ひ、主張するアナアキストである。（中略）社会民主々義や、共産主義やが、野心あるダラ幹に毒せられてしまつてゐる今日、小川未明氏の社会正義の訴へは永遠に、その純潔を失はない」（「童心久遠」『童話研究』昭和六年一〇月）と、アナキスト・未明の偉大を讃えているし、蘆谷蘆村（あしやろそん）は、「多年資本主義の横暴と闘つて来た小川さんは、またボルシエヴイズムの横暴と闘はねばならなかつた。小川さんの心や悲壮である。しかし、日本の子どもたちは、永久に子供の自由の擁護者小川未明に感謝するであらう」（「明治以来最大の散文詩人」『童話研究』昭和六年一〇月）と、未明を反ボル派の闘士として持ち上げている。

一方で、当時の未明評をつぶさに読むと、彼が穏健な「人類愛（主義）」に傾斜する反面、左翼としての闘争をほとんど放棄している旨、指摘した同時代評も散見される（**注5**）。大正期、「階級闘争」を高らかに謳い上げ、日本社会主義同盟の設立発起人に名を連ねるなど、現実の社会主義運動にコミットしていた未明の左翼ラディカリズムが、この時期、一定の後退を見せていたことは、疑い得ないだろう。それは明確な転向ではないが、後の転向の伏線となる、確実な退歩であった。

未明の政治的後退は、彼が何を言ったかではなく、何を言わなかったかによっても、窺い知ることができる。それは、小林多喜二の拷問死（昭和八年二月）や京大・滝川事件（同四月）等、当時ますます厳しさを増していた国家権力の言論・思想統制に対して、知識人・未

明が如何に身を処したのか、という問題である。昭和八年の治安維持法による検挙者数は、戦前最多であった。

結論的に言えば、未明はこれらの国家暴力に対して、何ら非難や懸念の言葉を口にしていない。時の政治状況がそれを許さなかった――と言ってしまえば、それまでであるが、ここには間違いなく、弾圧を回避しようとする、大人としての処世が働いている。別言すれば、先の同時代評で称賛されているほど、未明の左翼思想は純粋真直なものではなかった、と言える。逮捕されても国家権力と対峙する、というほどの気概と覚悟を、未明は持ち合わせていなかった。

かくして、満州事変下の小川未明は、大正期から引き続き、社会主義思想の影響下にあった。そして、その思想傾向は、反マルクス主義的なアナキズムの系譜に位置付けられ得る性質のものであった。しかし、時の政治情勢の厳しさも関係しているのだろう。昭和七年に五〇歳を迎えた、未明の左翼ラディカリズムが、一定の衰えを見せていることは、否定できない事実である。

二、童話「青空の下の原っぱ」――残留する階級意識

満州事変下の小川未明が、持ち前のラディカリズムを後退させつつも、社会主義思想を持続的に保持していた、という前節の論旨は、この時期に書かれた童話作品からも、論証され得る。本節では、日本人僧侶襲撃事件を経て、第一次上海事変が勃発した昭和七年一月に発表された、童話「青空の下の原っぱ」（『週刊朝日』一月三～二四日、全四回）を読み解くことで、この時期の未明の思想動向を明らかにしたい。

本作の主人公は、雑誌記者の息子で、翌年、中学校へ進学予定の小学生・正二である。年齢は、一一歳ほどか。正二には、秀吉と立雄という同級生の友人がおり、秀吉は廃品の売買で生計を立てる屑（くず）屋の息子、立雄は会社の重役の息子と、それぞれ貧富の格差が激しい。物語は、彼ら三人の家族や、彼らの遊び場となっている近所の原っぱの大人たちの人間模様を織り交ぜつつ、少年間の友情（とその破綻）を描いている。

創作ジャンルは、リアリズム的な筆致で子どもの日常を綴る、生活童話と言って差し支えないだろう。プロレタリア児童文学から生活童話への流れは、昭和七年前後の児童文学界の潮流でもあった（**注6**）。

本作に関する独立した作品論は、現状、存在しないが、同時代評や先行研究における部分的論及は、いくつか存在する。

まず、外形的な話として興味深いのは、本作の尺に関する指摘である。槇本楠郎は、「「青空の下の原っぱ」は、本集中の圧巻で、また稀に見る長編である」（「現童話壇と小川未明の存在」『生活学校』昭和一一年六月）と述べ、本作が、短編作家の未明としては、異例の長さを誇っている旨、指摘している。原稿用紙換算で、約六〇枚といったところだろう**（注７）**。確かに、未明にしては、長い。

そして、この尺の問題とあるいは関係しているかもしれないのが、作中へ織り交ぜられている、時代表象に関する指摘である。小埜裕二は、「本童話集でもう一つ注目されるのは「青空の下の原っぱ」に見られる童話世界の拡充である」（「青空の下の原っぱ」『解説　小川未明童話集４５』北越出版、平成二四年三月）と述べ、凶作によって深刻化していた東北飢饉の状況等、「当時の時代状況を俯瞰的に描こうとする未明の姿勢」を、本作の注目点として挙げている。つまり、時事的な素材を、紙幅を割いて作内に取り込んだことが、「童話世界の拡充」として、一定評価されているのである。

しかし、こと内容に関して、筆者がもっとも重要だと考えるのは、本作を少年間の階級対立的なドラマとして捉えた、高瀬嘉男や続橋達雄の指摘だ。高瀬は「三人の少年は、それぞれの名において、別個の階級を代表してゐる」（「「青空の下の原っぱ」を読む」『童話研究』昭和七年八月）と、続橋は「会社重役の子の立雄が上流家庭、古道具屋兼屑屋（廃品回収業）の子の秀吉が貧しい家庭を代表しているとすれば、正二はちょうどその中間に属している」（「解説」『定本小川未明童話全集』第八巻、講談社、昭和五二年六月）と述べ、正二・秀吉・立雄の三人の登場人物に、三者三様の階級的役割が仮託されている由、指摘している。

すなわち、立雄＝上層階級（ブルジョアジー）、秀吉＝下層階級（プロレタリアート）、正二＝中間階級という役回りである。正二の父の職業が、雑誌記者として設定されている点を踏まえれば、正二は中間階級のみならず、知識階級（インテリゲンチャ）の分身であると言えるかもしれない。

なお、高瀬は、本作について、「本輯（しゅう）に収められた数多の作品の価値は、この中篇一つに代表されてゐる。（中略）本年度上半期における佳篇として推賞さるべきであらう」と述べ、その作品としての質を讃えているが、先に紹介した槇本の「本集中の圧巻」という評言を含め、同時代的に、この中篇童話が極めて高く評価されていた事実が見て取れよう。プロレタリア児童文学理論の代表的論客である槇本が、本作を高く評価したのは、本作が左派好みの階級対立的枠組みを有していたからに違いない**（注８）**。

したがって、以下、本稿では、作中人物が代行する階級表象の分析を掘り下げることで、この時期の未明の社会主義思想のあり方を再検討したいと考える。

本作において、着目するべきは、上層階級の所属者が、徹底的な唾棄の対象として描かれている点であろう。主人公の正二は、立雄を「青瓢箪（あおびょうたん）」と罵り、立雄の母を「婆（ばばあ）」と侮蔑的な呼称で嘲弄してやまない。何故、立雄一家がかくまでに嫌悪されているのかと言えば、それは彼らが、下層階級の出身者を見下し、平然と足蹴にする、差別主義者であるからに他ならない。

例えば、自宅を訪ね、遊びの誘いをかける貧児の秀吉に対し、立雄が与えた応えは、冷酷なる拒絶であった。

秀公は、正ちやんから、立雄が素敵な飛行機を持つてゐるときいたので、平常は、めつたに遊びに行つたことはないが、どんなのだらうと、見たいばかしに、立雄の家へやつて来ました。「立雄君」と、秀吉は、門のところで、呼びました。けれど、誰も返事をしなかつたのです。「立雄君遊ばない？」と、彼は、家の方を向いて、叫びました。けれど、やはり、誰も出て来なければ、また返事をしませんでした。秀吉は、日ごろから、立雄が、なるだけ自分と遊ばないやうにしてゐるのを知つてゐました。けれどもう一度、呼んでみたのです。「立雄君、ゐない？」すると、窓の戸を開けて、立雄が顔を出して、「あとで」と、一言いつて、すぐに顔を引込めて、戸を閉めてしまひました。

秀吉の遊びの誘いに対し、立雄は居留守を使って、無視を決め込み、最後は冷然と窓からあしらったのである。本作において、立雄は、貧福の如何によって遊び相手を選別する、陰湿なブルジョア子弟として造形されている。

もっとも、立雄がこのような態度を取るのは、彼個人の個性というより、一家の教育方針に拠るところが大きい。立雄の母は、「うちで、やかましく、あんな下卑た古道具屋の子や、屑屋などと遊んではいけないと、いひきかせます」と語り、秀吉のような社会的底辺に位置する人々との接触を、堅く戒めているからである。目下の者に対しては、殊更厳しい家庭なのだろう。彼女は、家の女中に対しても辛く当たり、泣かせるなどしていた。正二が、「やな、婆（ばば）あだな」と感じる通り、確かに、あまり気持ちのよい人物とは言えない。立雄同様、その母もまた、出自や職業によって人を差別する、陰険なブルジョア婦人として造形されている。

一方、中間階級（知識階級）に位置する正二の姉は、当初、立雄の学校の成績が優れていることを理由に立雄を称賛、同じ理由で秀吉を軽蔑していたのだが（「あちらの立雄さんを

ごらん、お前のやうにさう遊んで許りゐなさるか。よくお出来なさるといふのに、さういふ子供とは、お友達とならずに、古道具屋の秀公とか、そんなやうな、勉強ぎらひな者とばかり、友達になつて、それで、偉い人間になれると思つてゐるのかい」)、弟から立雄一家の所業を聞くに及んで、「いつたい、ああいふブルジョアには(ママ)、さういふところがわるいんだよ」と、ブルジョア批判を展開するようになる。そして、「だんだん見え坊の金持よりも、貧乏でも裏表のない生活をする人々の方が、いいといふことを、判つて来」るようになり、秀吉の再評価を始める(「姉さんは、秀吉が、立雄よりも、正二よりも、また他のいい暮らしをしてゐる家の、どの子よりも感心な、いい子に心のうちで思ひました」)。

つまり、正二の姉における、立雄＝立派な優等生、秀吉＝無能な劣等生という序盤の認識は、終盤へ至って、立雄＝心の汚いブルジョア、秀吉＝心の美しいプロレタリアへと、一八〇度転換して行くのである。姉の改心に象徴される、かかるブルジョア否定、プロレタリア肯定こそ、本作において未明が提示したかった、主要メッセージと言えよう(**注9**)。

その点、重要なのが、本作のラストシーンである。作品発表当時の未明の政治的立場を考える上で、このシーンは、極めて暗示的な意味を帯びる。以下、正二・秀吉・立雄の三人で出向いた童話劇――劇の売り上げは東北飢饉救済のためのカンパとなる――観劇の帰路の場面である。

三人が、肩を並べて歩き出すとどこか、うしろの方から、「立雄、立雄……」と、呼ぶ声がしました。三人は、振むくと、一台の自動車が止つて、扉を開け、立雄のお父さんが、手招きをしてゐられたのです。「お父さんだ!」と、立雄と正二は、迎ひに来て下さつたのだと思つて、走つて行つて、その車に乗りました。しかし、つづいて駆けて来るはずであつた、秀吉は、見えませんでした。「秀吉君は?」と、正二は、あわてて、動き出した自動車から、飛び下りました。「かまはん、下りなくてもいいぢやないか」と、立雄のお父さんのいはれた、言葉をきき流して、彼は、秀公を追つて、雨の中を駆け出して行つたのです。

立雄の父は、悪天候のため、急遽劇の会場まで、子どもたちを車で迎えに行った。しかし、立雄一家から白眼視されていることを認識している秀吉は、その車に乗らず、ひとり夜の街へ姿を消した。それに気づくや、正二はすぐさま、立雄の車を飛び下り、雨の中、秀吉を追つて走り出したのである。

ここには、雨が象徴する厳しい政治状況の中でも、ブルジョア＝立雄ではなく、プロレタリア＝秀吉に連帯しようとする、知識人・未明の心意気が、如実に反映されていよう。童話「青空の下の原つぱ」には、満州事変へ突入してなお、残留していた小川未明の社会主義的階級意識が、疑いなく流露しているのである。

三、転向の萌芽　――日中戦争への道行き

しかし、ここまで一・二節で確認してきた、社会主義思想の残滓は、時の経つるにつれ、徐々に小川未明の内部から一掃されて行く。本節では、塘沽停戦協定から日中戦争へ至るまでの、未明の思想動向を追跡したい。

現在、未明の転向が、日中戦争を契機として始まったとする見解は、評価が定まった観がある。例えば、山中恒と小埜裕二は、日中開戦直後の童話「僕も戦争に行くんだ」(『お話の木』昭和一二年一〇月)を、未明の戦争協力の嚆矢の作品と位置付けているし(注10)、筆者自身、次の**八章「国民精神総動員運動への傾倒　――童話「僕も戦争に行くんだ」**では、同様の見解を記した。しかし、未明の言動をつぶさに観察すると、彼の転向が、実は日中戦争へ至る前の段階から、着々と準備されたものであることが確認できる。言わば、転向の萌芽とも呼ぶべき右派的言説を、この時期の未明は書き残しているのである。

もっとも、誤解なきよう申し添えると、日中戦争以前の未明は、まだ社会主義の影を引きずっていた。昭和一〇年まで、アナキスト系の解放文化連盟に毎月カンパを寄せ、アナキズムへの共感を吐露していたと振り返る秋山清の証言は、その傍証である(注11)。したがって、これらの右派的言説は、当時の未明のテキスト全体から見れば、ごく例外的な一部分に過ぎない。また、掲載先が雑誌のアンケート等であるため、全集はおろか、単行本に収録されていないものも少なくない。だが、それだけに、後の転向を予見させる符牒として重要な意味を帯びている、とも言える。ここでは三点、その内容を紹介したい。

第一は、五・一五事件に対する評価である。周知の通り、この事件は、帝国海軍の青年将校が、犬養毅首相ら政府要人を暗殺・襲撃し、日本の政党政治に終止符を打ったテロルだが、未明はこのテロの実行犯へ、極めて同情的な態度を取っていた。公判記事に対する感想を問われ、未明は「常に正しく働いて酬いられず人道なく、良心なく、正義なき今日、五・一五事件は、むしろ××の感情であり憤怒であつたと信じ、××××であると云ふより他に感じはないのであります」(「五・一五」の公判記事を見て」『政界往来』昭和八年九月)と回答している。伏字箇所は、前者が「革命」、後者が「階級闘争」であろうか。いずれにせ

よ、未明は、昭和恐慌下、腐敗を深める既成政党や財閥に対し、天誅を下さんとした青年将校らの決起を、一定評価しているのである。

また、裁判終了後は、「五・一五事件の軍人等が死刑を免れたのは、正義の上からいつても、また人道上からいつても、いいことであつた」（「この頃食卓にあつた話」『婦人之友』昭和九年一月）と述べ、「正義」「人道」の観点から、被告人の死刑回避を言祝いでもいた。度重なる弾圧によって、左派の政治運動が社会変革の主体となり得なくなっていたこの時期、未明は、大川周明ら国家社会主義者の思想的影響を受けた軍人らの義挙に、多少の痛快さを覚え、現状変革の希望を見出していたに違いない。戦中、軍部の暴走へ追随して行く下地が、ここにはある。

第二は、天皇制に対する評価である。未明は当時、家族国家観の信奉を明言していた。

> 皇室と臣民との関係は、宗教的であり、信仰であります。この特異の美風は、やがて一家より一村へ、一村より国家に及ぶといふ風に、理論でなく、愛情によつて結合されたるものです。そして、そこには、外国の異なる事情の下に発生した、いかなる理論も、必然性はないのであつて、ここに、天下無比の国体が存在する所以であります。故に、国内八千万の同胞の間に、不当なる貧富の別があつていい筈がない。すべからく、共労、共楽を則（のり）とした、相互扶助の精神に立ち、平和の実を挙げなければならぬと信じます。
>
> 「二三感ずること」（『日本及日本人』昭和八年七月一日）

天皇と国民を親と子の関係に準え、両者の情緒的一体性を統治の原理に据える、家族国家観は、戦前日本の有力な支配イデオロギーだった。日中・大東亜戦争期に入ると、未明はこのイデオロギーの鼓吹を全面化し、天皇を日本のみならず世界の家長へ戴く「八紘一宇」のスローガンを唱えるにまで至るが（**注12**）、その起点は早くも、昭和八年の時点で確認できるのである。

「ケフハ　日本ノ国ヲ　シロシメス　テンノウ　ヘイカ　ノ　オウマレナサレタ　メデタイ日デス」の文言で始まる幼年童話「天長節」（『コドモアサヒ』昭和九年四月）が書かれたのも、この時期のことだ。

ところで、同時代的に見て、かかる天皇制賛美は、ひとり未明のみに起こった現象ではない。日本共産党幹部の佐野学と鍋山貞親は、昭和八年夏に発表した獄中転向声明「共同被告同志に告ぐる書」（『改造』昭和八年七月）で、コミンテルン（第三インターナショナル）が

「三二年テーゼ」で掲げた天皇制の打倒を否定し、天皇制を基礎とした一国社会主義への転向を明言していた。国体変革の試みが即死刑を意味する、改正治安維持法下の日本にあって、「天皇の下の平等」を説く、一君万民的な平等主義へシフトした左翼は、当時、一定程度存在したのである。先の五・一五事件に対する評価とも関連するが、俯瞰して見れば、未明もまた、その流れに掉さしていたと言えよう。

第三は、アジアモンロー主義に対する評価である。この主義は、またの名を、東洋モンロー主義、東亜モンロー主義とも言い、アジアにおける日本の排他的な権益を確保しようとする志向を指す（注13）。昭和九年四月、外務省情報部長の天羽英二（あもう）が発した「天羽声明」によって、広く世界へ知られるところとなった。後の「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の源流ともなった外交方針である。

さて、以下は、旧仮名旧漢字等に関する、国字改革の必要性を述べた文章だが、未明は国字の改善は、「今日、提唱されつつある、東洋モンロー主義の上から見ても、極めて緊切なる問題」であると断った上で、次のように持論を展開している。

> 我国の国字改良が、将来に於て、文化促進の目的からして、必ず行はれなければならぬ運命にあるとしたら、いまはまさにその時期でなければならない。そして、東洋諸国結合の理想を有する上からいつたなら、遅きに失するの感をすら抱かせられるのであります。日本人、自から、その煩瑣に困りつつあるものを、満州や、朝鮮の児童等にまで、強ひるといふことは、まことに不合理な話であります。東洋の親善と理解と平和を希念するならば、国字改良は急務に属してゐます。強権に終始した、百千の政策よりも真に永遠の平和を考へ、精神的の融和と結合をはかるために、新鮮なる国字によつて、新文化建設の実をあげるの優れるに如かずと、いはなければなりません。
>
> 「国字改良と時期」（『童話と随筆』日本童話協会出版部、昭和九年九月）

ここで未明が語っているのは、国字の簡易化によって、アジアの人々の日本語学習の負荷を軽減せしめることは、アジアの友好や団結に資する、という話である。

今日的な観点から言えば、旧字であれ新字であれ、自国の言語を他国（植民地）の人々に押し付けることは、帝国主義的な文化侵略以外の何物でもないわけだが、未明は日本語をアジアの住人に教え広めることを、アジアモンロー主義を推進する立場から、素朴（ナイーブ）に肯定してしまっていた。日本をアジアの指導者と信じて疑わない、このような宗主国意識を内面化し

たアジア主義志向は（注１４）、その後の未明が、「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の理念に傾倒して行く出発点として、理解可能だろう（注１５）。

以上見てきた通り、①五・一五事件、②天皇制、③アジアモンロー主義に対する評価の三点が、塘沽停戦協定から日中戦争へ至るまでの間に芽吹いた、小川未明の転向の萌芽である。従前、繰り返し断っているように、それはただの萌芽に過ぎないが、後の軍閥政治・皇国史観・アジア共同体の礼賛へ繋がる伏線として、重要な意味を帯びているのである。

四、文学者と満州事変　――プロレタリア文学運動の敗北

かくて、満州事変から日中戦争へかけての小川未明は、社会主義から国家主義への移行を極めて隠微なかたちで成し遂げつつあった。それでは、未明における、かかる社会主義思想の後退――国家主義思想への接近――は、時の文壇の潮流と、どのような連関を有していたのだろうか。本節では、満州事変後の文学者の動向を素描し、文学史の主潮を視野に収めることで、未明の右傾化をもたらした文学史的背景を明らかにしたい。

昭和初期、破竹の勢いで、文壇を席巻した日本共産党系のプロレタリア文学運動は、三・一五事件、四・一六事件という二つの大弾圧を経てなお、軽視すべからざる勢力を有していた。昭和六年一一月、プロレタリア文化団体の統一組織である全日本無産者芸術連盟（ナップ）は、ソ連帰りの蔵原惟人の指導により（注１６）、日本プロレタリア文化同盟（コップ）へと組織的編成を遂げ、中央協議会をピラミッドの頂点とする、強力な中央集権体制を確立する（注１７）。

中央協議会の委員を務めたのは、小林多喜二・中野重治・中條（宮本）百合子・壺井繁治・村山知義といった面々である。海外からは、マクシム・ゴーリキー（ロシア）、アンリ・バルビュス（フランス）、魯迅（中国）らが、名誉協議員として名を連ねた。コミンテルン（第三インターナショナル）―日本共産党の系列下にあるコップは、国際共産主義運動と緊密な連携を取る、文化組織だったのである（注１８）。

コップが、自らのイデオロギーを宣伝するために発行した出版物は、質量ともに目覚ましい。すなわち、中央機関誌『プロレタリア文化』や婦人啓蒙誌『働く婦人』、大衆啓蒙誌『大衆の友』等が、それである。また、コップ所属の各文化団体も、各々自前の出版物を発行していた。例えば、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の『プロレタリア文学』、日本プロレタリア美術家同盟（ヤップ）の『プロレタリア美術』、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）の『プロット』等が、それにあたる。総合すると、これらコップ関連の出版物は、一

月一四～一六万の部数を誇る月もあったようだ（注１９）。飛ぶ鳥を落とす、往時の勢いが窺える。

もとより、未明は共産党員ではないが、満州事変後もなお、彼が社会主義思想を持続し得た背景に、このような現実の社会主義運動の存在があることは、間違いないだろう。日本共産党は、未明の左翼思想を支える重要な物理的根拠（のひとつ）だったのである。

しかし、こういった共産党系フロント団体の勇躍を、日本の国家権力が黙って見過ごすはずはなかった。昭和七年三月、官憲は治安維持法によって、中野重治・中條百合子・壺井繁治ら、コップ関係者の一斉検挙を図る。四月には蔵原惟人、五月には徳永直・貴司山治らも監獄送りとなり、逮捕者は、総計約四〇〇名に及んだ。危うく難を逃れた、小林多喜二・宮本顕治・杉本良吉といった幹部連は、非合法の地下生活へ突入し、組織を再建するべく、獅子奮迅の働きを見せる。未曾有の弾圧を経てなお、指導部は決してめげてはいなかったのである。

だが、誰もが小林や宮本のような勇の者ではあり得ない。国家権力の容赦ない仕打ち――小林の惨殺（昭和八年二月）をその頂点とする――に動揺を覚える作家も、次第に目立つようになった。そして、この頃から、コップ指導部の極端な政治主義を非難する声が、ナルプ内部で公然と上がるようになる。林房雄と徳永直が代表的論客である（注２０）。彼らは、ナルプ構成員に課される工場・農村でのサークル活動や、党公認の文学理論である「唯物弁証法的創作方法」等を、作家の自由な創作活動を妨げる障害として、指弾し始めた。要は、政治と文学を峻別し、文学の独自性を尊重せよ、というのが、批判の大意である。発言の背景に弾圧への恐怖があるのは間違いないとしても、それ自体、もっともな批判だろう（注２１）。

とは言え、「政治の優位性」を絶対不可侵の教条とするコップ指導部が、林らの主張を受け入れることはなかった。指導部の芸術観は、おおよそ次のような、妥協の余地ないものであったからである。

> 我々は以上のことから、文化活動と政治的、経済的闘争の結合、特に、文化に対する政治の優位性をはつきり認識しなくてはならぬ。文化に対する政治の優位性は、経済に対する政治の優位性と同様に、理論戦線におけるレーニン主義の闘争が一段と強調して照映したところのものである。そして文化闘争が政治闘争に従属しなければならぬと云ふことのレーニン的理解を発展させて行くとき、芸術、文化は党のものとならなくて

はならぬ。

宮本顕治「政治と芸術・政治の優位性に関する問題」
（『プロレタリア文化』昭和七年一〇月～同八年一月、傍点原著者）

ここで宮本が語っているのは、芸術・文化は政治（党）の従属物に過ぎない、という純レーニン主義的な見解である。つまり、芸術至上主義の完全否定だ。そして、この原則を理解しない文士は、「右翼的偏向」「右翼的逸脱」「日和見主義」等の悪罵をもって、指導部から徹底弾劾された。文学青年泣かせと言うべきだろう。

コップ指導部とナルプ所属の作家たちの間の溝は、いよいよ極まった。国家権力の圧制という外在的要因と、コップ指導部の行き過ぎた政治主義という内在的要因により、昭和九年二月、ナルプは解散を余儀なくされる（注２２）。組織の主力部隊を失ったコップは、追って自然消滅した。コップとは長年敵対関係にあった、労農派系の労農芸術家連盟（機関誌は『文芸戦線』）も、同年一二月、解散を決定する（注２３）。大正期以来、社会変革を志す革命勢力として文化的ヘゲモニーを握ってきた、戦前日本のプロレタリア文学運動は、無残な敗北を遂げ、文学史の表舞台から姿を消したのである。はっきり言おう。左翼は負けたのだ（注２４）。

プロレタリア文学の衰退と軌を一にして、文壇では、「文芸復興」と呼ばれる現象が巻き起こった。文芸復興とは、マルクス主義失墜後の文芸の隆盛振りを表わす用語で、昭和八年から一二年の約五年間を指すのが、文学史上の定説である。主要な出来事としては、①新人・中堅・ベテラン作家の広範な活躍、②『文学界』『行動』『文芸』といった（商業）文芸雑誌の相次ぐ発刊、③芥川賞・直木賞を始めとする各種文学賞の創設等が挙げられる。

例えば、①について説明すると、この時期、文学の世界では、第一回芥川賞を「蒼氓（そうぼう）」（『星座』昭和一〇年四月）で受賞した石川達三を始め、太宰治・北条民雄・岡本かの子といった気鋭の新人が、多数登場していた。小林秀雄・横光利一・川端康成ら中堅作家も、健筆を揮い、存在感を示した。川端の小説「雪国」（『文藝春秋』昭和一〇年一月～）は、文芸復興期を代表する作品である。ベテラン勢では、谷崎潤一郎が名作「春琴抄」（『中央公論』昭和八年六月）を著す他、島崎藤村・志賀直哉の二大家が、未完の長編「夜明け前」「暗夜行路」を、それぞれ完結させた。中野重治・徳永直・村山知義といった旧プロレタリア文学作家も、転向文学という新しいジャンルを開拓し、文芸復興に花を添えた。

つまり、文壇を見渡せば、右から左まで、まさに百花繚乱の様相を呈していたのである。

しかし、本稿の主役である未明はと言えば、残念ながら、とりたてて、めぼしい大作・傑作の類は残していない。彼は、成人男女がほとんど一顧だにしない、児童文学界というニッチな業界で、あまりパッとしないリアリズム童話を書きながら、ひとり、密かに右傾化していたのである。

ちょうど同じ頃、大衆児童読み物の領域では、戦争に材を取った軍事物が好評を博していた。もっとも作品化された実話は、爆薬を抱えて敵陣へ突撃し、自爆した、第一次上海事変の英雄「爆弾（肉弾）三勇士」のエピソードである（注２５）。「大東の鉄人」（『少年倶楽部』昭和七年八月～同八年一二月）等、山中峯太郎の軍事冒険小説も子どもたちの胸を躍らせた。ただし、未明以下、芸術系児童文学の書き手が国策の渦に飲み込まれるのは、日中戦争以降のことである。

左翼・リベラルにとっては、冬の季節となりつつあったが、社会の右傾化に抗う運動も、なお一定程度存在した。例えば、昭和八年七月に発足した学芸自由同盟が、それである。この団体は、前掲の京大・滝川事件やナチス・ドイツの焚書事件といった国内外の言論・思想統制に対抗するべく組織された集団で、幹事長は徳田秋声。菊池寛・久米正雄・林房雄・青野季吉・三木清ら、約三五〇名の文学者・知識人が結集した、反ファシズム統一戦線である（注２６）。が、未明は時局柄、重要な意味を持つと思われるこの反ファッショの人民戦線運動に、関与していない。いや、それどころか、ナチスを肯定するような文章さえ、書いていたのである（注２７）。

このように、満州事変後の文学史の主潮は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）・日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の奮闘から、両団体の退潮を経て、文芸復興へと至る、プロレタリア文学運動衰滅の流れであった。それは、日本共産党の敗北の歴史であると同時に、労農派やアナキストを含めた、日本のすべての左翼の敗北の歴史でもある。そして、思想の物理的根拠となる現実の運動を喪失した社会主義者・小川未明は、時の経るにつれ、徐々に、しかし確実に、右傾化していった。本式の転向までは、あともう数歩であった。

小括

以上、本章では、十五年戦争の初期、すなわち、満州事変（柳条湖事件―塘沽（とうこ）停戦協定）から日中戦争（盧溝橋事件）へかけての約六年間、小川未明が如何なる思想状況にあったのか、当時の事績・文業の分析を通して、検証を行った。

検証の結果、明らかになったのは、満州事変下の未明が、一定の思想的後退を見せつつも、

なお自他ともに認める、反マルクス主義のアナキスト系作家として渡世を送っていたこと、この時期の代表作である童話「青空の下の原っぱ」（『週刊朝日』昭和七年一月三～二四日、全四回）には、かかる未明の社会主義的階級意識が、疑いなく流露しているということである。

ただし、繰り返すが、警視庁の特高（特別高等警察）が「課」から「部」に昇格され（昭和七年六月）、小林多喜二が築地警察署で虐殺された（同八年二月）、当時の厳しい言論・思想統制下にあって、未明の左翼ラディカリズムが、大正期ほどの光彩を放っていない点は、否定するべくもない事実である。

そして、だからこそ、と言うべきか。塘沽停戦協定以降のテキストに目を向けると、転向の萌芽とも呼ぶべき右派的言説が、極めて僅少な数ではあるが、確認できるのである。すなわち、①五・一五事件、②天皇制、③アジアモンロー主義に対する評価の三点が、それだ。これらの言説は、後の軍閥政治・皇国史観・アジア共同体の礼賛へ繋がる伏線として、そのまま直結していると筆者は考える。

もとより、上記の右傾化は、時の文壇の動向と無縁な現象ではない。満州事変後の文学史の主潮は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）・日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の奮闘から、両団体の退潮を経て、文芸復興へと至る、プロレタリア文学運動衰滅の流れだが、このような潮流は、左翼作家が自己の思想を固守し続けることを著しく困難にしていた。ロシア革命以来、日本の文学シーンを席巻していた左派勢力は、その存在を一掃されつつあったのである。

小川未明にとって、十五年戦争初期の約六年間は、左翼思想からの撤退と国家主義思想への接近が徐々に進む狭間の季節であった――本章ではそのように結論付けたい。

注

1　検討の不十分さに関する指摘としては、例えば、次のようなものがある。鳥越信「ともかくこんなにはげしくゆれ動いた作家は珍しいと思うが、もっとふしぎなのは、そうした未明への否定的・批判的な評価はほとんどなく、常に未明はその時々の日本児童文学の頂点に立つ作家として、高い評価を与えられてきた点である」（「小川未明」『鑑賞日本現代文学』第三五巻、角川書店、昭和五七年七月）／鳥羽耕史「戦後にも高い地位を保ちつづけた未明の戦争責任の問題は、他の多くの文学者と同様に曖昧なまま今に至っている」（「傷痍軍人」

石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』ひつじ書房、平成二五年三月）

2　「かりに、どれ程、近代的の様式をとりいれた広壮な建築がなされやうとも、それが私人のものであり、或は、資本家群の所有に属してゐるなら、そして、そこには、食ふに物なく、住むに家なき人々が、この冷たい建物の影を彷徨するならば、かかる現象こそ、この人類の目的にとつて、虚偽であり、虚飾であると言ふことができる」（「新芸術の個条」『童話雑感及小品』文化書房、昭和七年七月）

3　当時書かれた、類似のマルクス主義批判には、例えば、次のようなものがある。「生活することの内容は、極めて、複雑であつて、多姿多様であり、幸福といふやうな問題も各人によつて、解釈を異にするかぎり、マルクス主義者の如く、すべてを一元的に見ることは不可能であります。ロシアでは、児童の教育から、空想的、非現実的のものを排除する方針であると噂されるが、一面から見れば、独り、児童のみでなく、人間の本能を無視するものです」（「生活の妙味」『政界往来』昭和七年四月）

4　秋山清「アナキスト・小川未明」（『文学』昭和三六年一〇月）、上笙一郎「小川未明」（日本児童文学学会編『日本の童話作家』ほるぷ出版、昭和四六年九月）、山室静「解説」（『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五一年一二月）、同「小川未明」（『日本近代文学大事典』第一巻、講談社、昭和五二年一一月）、続橋達雄「小川未明」（『日本児童文学大事典』第一巻、大日本図書、平成五年一〇月）等参照。

5　高瀬無絃（嘉男）「思想家としての氏はトルストイ、ガンヂイ、キリスト等の無抵抗主義、人類愛主義に讃じて、闘争と強権を極力排している」（「未明童話集（第五巻）を読む」『童話研究』昭和六年一〇月）／前田晃「一時は闘争にも関心を持つたりしたが、今は正義を深く沈滞させて、高い人類愛に燃え立つ心で児童を眺めてゐるやうである。これが詩人としての君の本領であらう」（「偉大なる小児」『童話研究』昭和六年一〇月）／山内秋生（やまのうちしゅうせい）「氏の思想を探る為の一例として、何故氏が社会主義から転向したかについて考へてみよう。思ふに科学的根底に立つ現代の社会主義なるものは、あまりに理知に遍（ママ）し過ぎてゐる所に不満があつた。（中略）一言で云へば氏は真実の意味の詩人だつたのである」（「小川未明氏の近業その他」『童話研究』昭和七年九月）

6　以下、菅忠道。「プロレタリア児童文学運動は一九三二年（昭和七年）を境に解体期に入ったが、このころからの後期の段階では、民主的芸術的児童文学運動が統一の方向をたどるようになり、作風においては子どもの現実生活を描くリアルな作品が主流を占めてきた。「生活童話」と呼ばれるジャンルが、ここに形づくられたわけである」（「解説」『日本児童

文学大系』第三巻、三一書房、昭和三〇年六月）

7　続橋達雄「解説」（『定本小川未明童話全集』第八巻、講談社、昭和五二年六月）参照。なお、続橋も、本作の尺が未明としては異例の長さである旨、指摘している。

8　菅忠道は、槇本の「青空の下の原っぱ」評について、「槇本の批評の前提には、たしかに社会主義リアリズムの立場が読みとれる。そういう観点からいっても、この作品が高く評価されたわけである」（『日本の児童文学　増補改訂版』大月書店、昭和四一年五月、二二三頁）と述べ、槇本の高評価の背景には、「社会主義リアリズムの立場」がある由、指摘している。

9　紙幅の都合上、詳述できないが、本作では秀吉以外のプロレタリアート、すなわち、原っぱに住む屑屋の老爺やのっぽの青年も、心の美しい人々として、等しく好意的に描かれている。他方、未明が、立雄のようなブルジョアの子弟に批判的な眼差しを向けていたことは、同時期の評論を見ても明らかである。「さらば、ブルジョアの家庭にあつては如何。経済的からは、家庭教師を雇ひ、思ふがやうに教育されるであらうけれど、それは、畢竟、子供を我儘にして、個人主義者たらしめるの他はないでありませう」（「小学教育の任務を考へる」『教育・国語教育』昭和六年一一月）

10　山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）、小埜裕二「解説」（『小川未明新収童話集』第四巻、日外アソシエーツ、平成二六年二月）参照。なお、同時代を生きた作家の証言としては、関英雄が、それまでの反戦・人道主義的な作風とは異質な同作に大変な衝撃を受けた由、『体験的児童文学史』後編（理論社、昭和五九年一二月、二〇五・二〇六頁）で綴っている。

11　秋山清「《聞き書き》社会思想家としての小川未明」（『日本児童文学』昭和四九年一月）、「あおぞらと未明さん」（『定本小川未明童話全集』第一二巻月報、講談社、昭和五二年一〇月）参照。

12　六章四節参照。

13　江口圭一『十五年戦争小史　新版』（青木書店、平成三年五月）、『十五年戦争研究史論』（校倉書房、平成一三年五月）、井上寿一『アジア主義を問いなおす』（ちくま新書、平成一八年八月）等参照。

14　未明は当時、欧米列強のアジアに対する植民地支配を苦々しい思いで見つめ、被支配者の代弁者たらんと欲していたようである。「欧州諸国は、行詰れる打開をアフリカやアジヤの未開大陸に求めつつあるは、既に久しい間の黙契であつて、それがために決して、正義

に殉ずる国はない。国際連盟の態度に見ても分るのであります。日本の今後は、少なくも同種族のために、実力ある代弁者であらなければならぬ」（「エチオピヤを憐れむ」『祖国』昭和一〇年一〇月）

１５　未明の「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の理念への共鳴については、六章と九章で論じた。

１６　蔵原惟人「プロレタリア芸術運動の組織問題」（『ナップ』昭和六年六月）、「芸術運動の組織問題再論」（『ナップ』昭和六年八月）参照。

１７　創立時、コップに加盟したのは、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）、日本プロレタリア美術家同盟（ヤップ）、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）、日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）、プロレタリア科学研究所（プロ科）等、一一団体である。

１８　例えば、コップ傘下の日本プロレタリア作家同盟は国際革命作家同盟（モルプ）、日本プロレタリア演劇同盟は国際労働者演劇同盟（ＩＡＴＢ）に加盟し、それぞれ、その日本支部となっていた。

１９　野間宏「解説」（『日本プロレタリア文学大系』第六巻、三一書房、昭和二九年一一月）、平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭和三八年一二月）参照。

２０　林房雄「プロレタリア文学の再出発」（『改造』昭和八年一〇月）、徳永直「創作方法上の新転換」（『中央公論』昭和八年九月）等参照。

２１　平野謙は、林の一連の発言を、文学上の正論として、極めて高く評価している。「今日林房雄の文章を読みなおせば、それはほとんど文学のイロハを語ったものにすぎない。文学の常識がそのまま最大の敵とうけとられるようなところに、ナルプの末期的現象は明らかである」（『昭和文学史』筑摩書房、昭和三八年一二月、一三一頁）／「当時の林房雄の主要な論文としては、昭和七年五月から昭和八年十一月にかけて発表された『作家のために』『文学のために』『作家として』『プロレタリア文学の再出発』『一つの提案』などがあげられるが、今日読みかえしてみると、ことごとく正論であって、みなわかりきった文学論のイロハにちかい」（『文学・昭和十年前後』文藝春秋、昭和四七年四月、三三頁）

２２　日本プロレタリア作家同盟第三回拡大中央委員会「ナルプ解体の声明」（昭和九年二月二二日）参照。

２３　労農芸術家連盟は、昭和七年五月に一度解散しているが、その後、昭和九年二月に第二次労芸が再結成されている。本稿で言及したのは、後者の解散である。

２４　ナルプの崩壊は、戦前日本のプロレタリア文学運動における致命的な敗北であると

同時に、運動上の束縛や危険から逃れられるという点で、作家たちにある種の解放感や安堵感をもたらす出来事でもあったようだ。亀井勝一郎「だから作家同盟が解散して、自分たちで雑誌を始めたとき、今こそ自由を得たという気持がありましたね」（中野重治・林房雄他「座談会　ナルプ解散前後と「転向」の問題」『近代文学』昭和二九年四月）／高橋春雄「高見や本庄だけでなく、ギリギリのところまで追いつめられていた同盟員の中には、ナルプの解体によって、挫折感とともに微妙な安堵感や解放感を心の奥に感じとった者も少なくなかったにちがいない」（「転向文学の季節」吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）

２５　山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）、『少国民戦争文化史』（辺境社、平成二五年一〇月）参照。

２６　文芸家協会編『文芸年鑑　一九三四年版』（改造社、昭和九年六月）参照。

２７　未明は、日本民族・文化の独自性を擁護し、その発展を期する立場から、ナチスに一定の評価を与えていた。「私達は、独逸に於ける、ナチスのとりつつある行動を悉く肯定するものではないが、自国民族の精神文化を危機より救ひ、正しき伝統の上に、創造と躍進を叫びつつあるは、萎靡（いび）せる人心を興起し、国民に理想と真に行ふべき進路を与へるものとして同感すべきものがあります」（「最近の教育問題を通しての感想」『教育時論』昭和八年七月一五日）

八章　国民精神総動員運動への傾倒　――童話「僕も戦争に行くんだ」

はじめに

小川未明「僕も戦争に行くんだ」は、日中戦争開戦直後の昭和一二年一〇月、未明の主宰雑誌『お話の木』に掲載された短編童話である。物語は「光る玉」「飛行機」「戦場へ」の三部構成。主人公の少年・勇ちゃんの銃後の日常が縷々綴られた後、彼が「万歳」「僕も、戦争に行くんだ！」と叫ぶところで幕は閉じる。初出後は『未明童話集　お話の木』（竹村書房、昭和一三年四月）へ初収された。講談社版『定本小川未明童話全集』全一六巻（昭和五一年一一月～同五三年二月）を初め、戦後の童話集には一切採録されてこなかった――すなわち、隠蔽され続けてきた――国策協力文学である（注1）。

日本の児童文学研究者の関心の偏りとでも言うべきだろうか。今日までの小川未明研究史を振り返ってみると、「赤い蝋燭と人魚」など、煌びやかな傑作が集中する大正期の童話は数多く論じられてきた反面、昭和期、なかんずく満州事変以降、十五年戦争下の文業が検討に付されることは、ほとんどなかったと言ってよい（注2）。本作もその例外に洩れず、独立した作品論は一本も著されていないのが現状である。山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）や小埜裕二「解説」（同編『小川未明新収童話集』第四巻、日外アソシエーツ、平成二六年二月）等が、部分的な論及を試みているのみだ。

後で詳しく見る通り、「僕も戦争に行くんだ」を未明の国策協力の嚆矢の作品と位置付け、その要因を明治人特有のナショナリズムに求める山中や小埜の指摘は鋭いのだけれど、作品本体のテキスト分析が行われていない以上、その主張の説得力には如何せん限界がある。また、未明の国策協力の要因を「明治人」という世代論だけに還元してしまう発想は、幾分乱暴過ぎるような気もする。つまり本作が、敗戦まで綿々と続く、未明の国策協力の起点を占める問題作であるなら、その検証はもう少し精緻に行われるべきではないのか、というのが筆者の問題意識だ。日中戦争下の未明の動向を把握するための一里塚として、本作の分析は重要であり、必須の課題と言える。

そこで本章では、以下、「僕も戦争に行くんだ」が発表された昭和一二年一〇月前後の未明の事績・思想傾向を洗い直すとともに（一節）、本作が第一次近衛文麿内閣で発動された「国民精神総動員運動」の影響下にある、極めて時局的な転向・国策協力文学であることを明らかにしたい（二節）。また、雑誌『お話の木』（昭和一二・一三年）へ掲載された他の未明童話の児童表象や、同時期の未明の童話観の検証を通して、日中戦争を是認・翼

賛する子どもを描いた童話が本作以外にも存在すること、そしてそのような作品が多産されるに至った背景には、童話を児童教化の具と見做す、教育者としての意識が働いていたことを論証したい（**三節**）。さらに、日中戦争下の文学者の動向の包括的な素描を通して、未明の国策協力者としての歩みが、時の文壇の主潮に掉さす、同時代的な道行きであった事実をつまびらかにする（**四節**）。

対象に対するいたずらな権威化を排し、一次資料を愚直に渉猟した結果、見えてくるのは、日中開戦後の小川未明は凡庸な転向者に過ぎなかった、というあまりにも殺伐とした結論である。この結論は決して胸躍るものではないが、それが「日本児童文学の父」のあられもない実相なのだから仕方がない。

一、高揚するナショナリズム　――昭和一二年一〇月前後の未明

本節では、作品解釈に先立って、童話「僕も戦争に行くんだ」が発表された、昭和一二年一〇月前後の小川未明の事績・思想傾向を辿りたい。また、同作が掲載された雑誌『お話の木』と未明の関係についても論じる。

昭和一二年といえば、日中戦争である。この年の七月に勃発した盧溝橋事件、そしてその後の日中開戦は、未明を穏健なヒューマニストから好戦的な国士へと変貌させた（**注3**）。「僕も戦争に行くんだ」と同月に発表された、随想「若き日本」（『中央公論』昭和一二年一〇月）には、事変下、高揚する未明のナショナリズムが鮮明に露見している。

明治一五年生まれの未明は、少年期に日清戦争を経験した世代なわけだけれど、この随想で初めに語られるのは、そんな小学生時代の思い出である。地理の老教師は、授業中、神国・日本の勝利を説き（「我国は、斯様に四方海であつて、軍艦の数も少ないが、神国でありますから、神の助けと、日本魂で、戦つてもきつと打勝つでありませう」）、唱歌の女性教師は、未明ら生徒に、帝国陸海軍の礼式歌「三千余万」（芝葛鎮（ふじつね）作詞）を歌わせていた（「三千余万の兄弟共よ守りに守れ君ガ御代（ママ）を」この歌を、私達は、悲壮な気持で、声を張り上げてうたつたのであります」）（**注4**）。

そして、若き日の日清戦争と、現下の日中戦争を二重写しにし、国家的危難を前に発奮興起する愛国の情を吐露するのが、本エッセーの山場（クライマックス）である。

三千余万の兄弟は、いつしか八千余万となりました。爽涼たる秋色を帯びた天心に、眼を向けてゐると、当年の記憶が、生々として甦つて来るのでした。しかも、日本は、二

たび支那と戦はなければならぬとは。昨日も、今日も、門前に立つて、出征の兵士を見送つたのであります。子供も、大人も、手に、手に、日の丸の小旗を打振りながら、「天に代りて不義を討つ、忠勇無双のわが兵は、歓呼の声に送られて……」と、歌ひつづけて行く。私は、はからずも四十年前の同じ情熱と感激を、その声の裡から呼び醒したのです。自分は、すでに老い、日本は、また過去の日本でない。しかしながら、今の国民の精神は、昔の国民の精神と少しも異らないのを知つたのであります。大義のために、一身を捧ぐる犠牲的精神と、報恩奉仕の至誠の感情が、それでした。

「若き日本」（『中央公論』昭和一二年一〇月）

明治政府初の対外戦争を前に振起した幼き日の「情熱と感激」が、四〇年の時を隔て再振起したと、未明は語る。そして、「大義のために、一身を捧ぐる犠牲的精神と、報恩奉仕の至誠の感情」こそが、日本人の不変の倫理観（エートス）であると説く。

なお、「天に代りて不義を討つ」云々は、大和田建樹作詞の軍歌「日本陸軍」の一節で、この曲は出征時に流す定番曲だった（注5）。銃後の戦争表象がテキストに織り込まれている点に、事変のアクチュアリティが感じられよう。

その後の未明は、国士振りをますます深め、偏狭なナショナリストへと変貌して行く。例えば、日本人の喫緊の課題は何かを問う、翌昭和一三年一月のアンケートで、未明は「止むを得ざる固有名詞等の他は、新聞、雑誌の原稿に於ても、またお互同志の話中に於ても、外国語を挿入せざること。衒学的であらざれば、外国崇拝の観念に他ならぬからである」（「手近かな処にある我々の戒心し、実行し、警告しなければならないこと」『近きより』昭和一三年一月）と答え、外国語の禁止を挙げた。自身は早大英文科の出身であるにもかかわらず、である。

さらに、翌月の感想「トルストイ」（『真理』昭和一三年二月）では、「今や、世界は唯物思想と精神主義の戦ひの裡に置かれてゐる。また機械的な国際主義と自主的な民族運動との対立せる渦中にあるのであります」と発言。国際主義（共産主義）対民族主義が、世界の対立軸であると情勢分析した。

感想「祖国と真実を愛するもの」では、後者の立場から、前者の思想の持ち主を批判している。

真の愛国者は、いつまでも祖国のために命を捨てることを考へてゐる。そして祖国の特

殊性を認識し、優越感を有してゐる。之に反して抽象的な国家観や、真理のための真理を叫ぶ輩は、自分達の兄弟や友人を見殺しにしても、尚ほ外国の所謂同志なるものと、手を握らうといふのであります。

「祖国と真実を愛するもの」（『祖国』昭和一三年七月）

大正期の未明は、「労働祭は、全世界の無産階級の結束すべき日だ。正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）と叫ぶ階級闘争主義者であり、プロレタリア国際主義の立場から「外国の所謂同志なるものと、手を握らう」としていたわけだから、右記の発言は変節・転向以外の何物でもない。

だが、同種の情勢認識を踏まえた国際主義（共産主義）批判は、この時期、執拗に反復されている。例えば、「結局民族主義と人民戦線の思想戦であります。この長期戦に対し日本は、此際先づ国内の矛盾を一掃し、以て国民一致団結して、いかなる難関も押切らなければなりません」（「漢口攻略後の内外情勢に対する貴下の見通し、並びに希望」『祖国』昭和一三年一〇月）、「唯物思想に立脚する共産主義と、人間性の解放に立つ民族主義とが、必ず今後の闘争となるであらうが、この理想と信念の上に、先づ児童の教化に取りかからなければならぬ。児童教化こそ急務であります」（「長期戦下の文化国策に直言する！」『日本学芸新聞』昭和一三年一一月一日）といった発言が、それである。まさしく、反共の民族主義者と言ってよい。

かくして、日中開戦後、未明の民族主義的思想は深化し、「東亜新秩序」（近衛文麿内閣）や「大東亜共栄圏」（東条英機内閣）の理念を喧伝するなど、その国策追従は、敗戦まで留まることを知らなかった**（注6）**。児童文学界では、「日本児童文学建設の為に奉仕して来た恩人」（槇本楠郎「現童話壇と小川未明の存在」『生活学校』昭和一一年六月）、「現今我国児童文学の最高位に在る小川未明さん」（楠山正雄「未明童話集を読む人々の為に」『未明童話集　赤い蝋燭と人魚』冨山房、昭和一三年一二月）などと尊敬されてやまない未明であったから、後進への影響は少なからぬものがあっただろう。そして、この転向の起点となった作品こそ、次節で論じる、童話「僕も戦争に行くんだ」に他ならないのである。

本作が掲載された雑誌『お話の木』についても、一言しておきたい。この雑誌は、昭和一二年五月から昭和一三年七月まで、間を挟んで計九号発行された童話雑誌で、発行所は子供研究社。児童文学界の権威たる未明を主宰者に据え、表紙の題字上には、「小川未明主宰童話雑誌」と横書きされている**（注7）**。編集を務めたのは、未明門下の童話作家・奈街三郎

である。奈街の回顧録「『お話の木』が倒れるまで」（鳥越信他編『新選日本児童文学』第二巻、小峰書店、昭和三四年五月）によると、未明は創刊当初から「君ィ、つづくだろうね、大丈夫だろうね？」と経営面を心配していたらしい。が、懸念通り、売り上げは伸びず、結局一年あまりで廃刊となった（注８）。

短命に終わった『お話の木』だが、流石に主宰者というだけあって、同誌に対する未明の熱の入れようは、一方ならぬものがあった。未明は毎号欠かさず、創作童話を寄せているし――掲載作は、その後、『未明童話集　お話の木』（竹村書房、昭和一三年四月）へ収録された――、扉の巻頭言も、ほとんど毎号欠かさず書いている。また投稿欄では、童話や綴り方の選評を丁寧に綴っているし――童謡・自由詩の選評は北原白秋が担当していた――、読者との触れ合いの場である「未明会」という名の交流会も定期開催していた。

本誌について、紅野敏郎は「横光利一と井伏鱒二という二人の昭和文学の代表者が、小川未明主宰の雑誌に寄稿している点がなんといっても興味深い。彼らの代表作ではないが、「赤い鳥」時代ではなく、そののちの童話雑誌に文壇の作家がそっと協力している風景、それ自体、私には好ましい風景と思えてならぬ」（「雑誌・探索　未明主宰「お話の木」」『国文学　解釈と鑑賞』平成三年三月）と記しているが、横光や井伏の他、宇野浩二・佐藤春夫・春山行夫といった多彩な執筆陣を迎えることができたのは、「童話作家宣言」（大正一五年）以前、文壇の第一線で活躍していた未明の人脈・権威を活用し得た故だろう（注９）。

雑誌『お話の木』は、小川未明が心血を注いで育んだ生涯唯一の主宰童話雑誌であり、童話「僕も戦争に行くんだ」は、他でもない、このような自らの拠点で発表された転向・国策協力文学なのである。

二、童話「僕も戦争に行くんだ」――国民精神総動員運動下の転向

それでは、このような小川未明の思想上の変遷および雑誌『お話の木』との接点を踏まえつつ、童話「僕も戦争に行くんだ」を読んで行こう。

はじめに押さえておかなければならないのは先行研究である。本作に関する独立した作品論は、現状存在しないが、これまで何人かの論客が、自著や全集の解説などで部分的に論及してきた（注１０）。山中恒と小埜裕二に共通するのは、本作を未明の国策協力の端緒の作品として位置付ける見方である。山中は「未明はこれまでの創作理念を一擲（いってき）して、国策に呼応すべく方向転換の先駆けを演じたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月、一二五頁）と、小埜は「「僕も戦争に行くんだ」が、戦争協力に向かう未明文学の

嚆矢となった。それ以前の童話では、「餌のない針」「研屋の述懐」「池についての話」等で戦争を否定していたから、まさに百八十度の急激な転換であった」（「解説」『小川未明新収童話集』第四巻、日外アソシエーツ、平成二六年二月）と、それぞれ指摘している。

さらに山中は、この急激な右旋回の要因を、「国難」に機敏に反応してしまう、明治人特有のナショナリズムに見た。

> 未明は日華事変をまさしく国家の非常事態と認識理解し、翻然、国体原理主義へ本卦還りしたとしか思えない。未明が一二、三歳の少年期に日清戦争、二二、三歳の青年前期に日露戦争というように、国難と称された戦争時代の国内の雰囲気を体験していたことも無関係ではないだろう。未明は初めて学校で富国強兵の国是を教育勅語と共に押し付けられた、最初の世代でもあった。
>
> 山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月、一二五頁）

前節で紹介した随想「若き日本」（『中央公論』昭和一二年一〇月）には、日清戦争と日中戦争を二重写しにし、往年の「情熱と感激」を再振起させる未明の姿が活写されていたから、山中の見立ては、正鵠を得ていると評価すべきだろう。

とは言え、先行研究に不満がないわけではない。①本作を国策協力の走りとして位置付け、②その要因を明治人特有のナショナリズムに求める山中や小埜の主張に対して、筆者は基本的には賛同するのだけれど、①を論証するためは、本作が本当に国策協力文学と呼ぶに値するのか、精緻なテキスト分析を行うことが必要ではなかろうか。先行論にはそれがない。また、②未明の急激な右旋回の背景に明治人特有のナショナリズムがあるのは間違いないとしても、果たして転向の要因はそれだけか。同時代の政治的・文化的状況も、重要な圧力因子として、作用していたのではないか。筆者は、おおよそ以上のような問題意識に基づき、以下「僕も戦争に行くんだ」の精読を試みる。

まず、本作が国策協力文学と呼ぶに値するかという問題だが、結論から先に言えば、答えは是（イエス）である。本作の舞台は、戦時に突入した日本の町――固有名はない――なのだけれど、主人公の少年・勇（ゆう）ちゃんを囲む市井の大人たちは、一様に明るく、好戦的である。

一部「光る玉」では、敵機の来襲に関するレクチャーを学校で受けたという警防団員のおじさんが、勇ちゃんに向けて、「いや、何が来たつて、大丈夫さ。ははは」と快笑しているし、二部「飛行機」では、勇ちゃんのお父さんが、夕べの茶の間で、「少年航空兵が出征し

て、花々しい手がらを立てたと（新聞に――引用者注）書いてあるぞ！」と、子どもに言外の喝を入れている。さらに、三部「戦場へ」では、召集を控えた溶接工場のおじさんが、「これでも、砲兵でさあ。敵の飛行機を打ち落とす勇士です。戦場で、みんなが勇ましく戦ってゐると考へると、血が、かつかつと熱して、かうしてぢつとしてゐられませんし、仕事なんか手につきません」と語り、出征に対する自らの興奮を隠すことがない。

興味深いのは、このような周囲の大人たちの言動に感応して、戦時下のあるべき児童へと成長を遂げて行く、勇ちゃんの姿である。すなわち、警防団員の発言を聞いた勇ちゃんは、安眠できなくなるほど戦場の兵士に思いを馳せ（「勇ちやんは、床の中へ入つてからも、戦場へ行つてゐる、兵士のことを考へると、なかなか眠れませんでした」）、お父さんの発言を聞いた勇ちゃんは、少年航空兵のように立派であれかしと願う父の思いを忖度する（「そして、さういはれた言葉のうちには、お前方もしつかりせんければならぬぞ、とおつしやつてゐることが、よく分りました」）。

そして、三部末のラストシーンで、勇ちゃんはとうとう自らも、参戦・報国の決意を固めたのであった。

> 勇ちやんは、青空を見て、何かしらん、大きな力に感激しました。足先から、髪の毛の先まで、ぞくぞくとして、ぢつとしてはゐられませんでした。そして、「僕も、戦争に行くんだ！」と、叫ぶと、人の通らない、さびしい路の方へ、自転車を無茶苦茶に走らせたのであります。

物語が進行するにつれて、勇ちゃんは憂国・愛国の情を深め、ついにはタイトル通り、「僕も、戦争に行くんだ！」と咆哮したである。

つまり、本作は、どこにでもいる普通の小学生が「小さな国士」へ成長を遂げる成長物語なのであり、その意味では、一介の労働者が革命的主体へと飛躍する通俗的プロレタリア文学の反動的反転と言えよう。単純と言えば、あまりに単純である。

さて、では、かかる国策協力の要因は明治人特有のナショナリズムだけなのか、というのが二つ目の問いであった。私の答えは否（ノー）である。筆者は、日中開戦後、第一次近衛文麿内閣によって開始された「国民精神総動員運動」の存在が、当時の未明の右旋回に大きな役割を果たしていたと考えている。どういうことか。

国民精神総動員運動（以下、精動と略す）は、国民を日中戦争へ動員するために展開され

た、官製国民運動である。「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」が三大スローガンだ。その要諦は、各種国家行事の開催を通して、国家への自己犠牲的精神を、国民内に幅広く涵養することにあった（注11）。

第一次近衛内閣は、昭和一二年八月、「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定したのを皮切りに、同年九月には、政府主催の国民精神総動員大演説会を東京・日比谷公会堂で開催。一〇月には、運動の推進団体である国民精神総動員中央連盟を組織し、国内の戦争協力体制構築に努めた。歴史学者の大串潤児によれば、「日中戦争勃発の「緊張感」は「挙国一致」の風景を出現させた」のであり、「一九三七年の秋までに、すでに地域では、応召動員・出征兵士の見送り行事がとりくまれ、銃後講演会などの後援組織による前線への慰問品送付、献金運動、勤労奉仕体制がつくられつつあった」（『「銃後」の民衆経験』岩波書店、平成二八年五月、三四・三六頁）。

そして、勇ちゃんが「僕も、戦争に行くんだ！」と叫ぶ直前、目撃していたのは、まさにこのような精動の一環として取り組まれた、「出征兵士の見送り行事」に他ならない（図1・2）。

町の中を、沢山の人々が、ぞろぞろとつづいて、出征軍人を見送るのであります。先頭に、町会旗や、祝出征といふ幾本かの大きな旗を立て、その後から、めいめいは、手に、手に、小さい日の丸の旗を持つて、ついて行きました。男ばかりでなく、女もゐます。子供もゐます。在郷軍人の服装をしたものもあれば、羽織袴のもの、労働服のもの、また、急いで駆けつけた風に見える、エプロン姿のおかみさんもあります。天に代りて不義を討つ　忠勇無双のわが兵は　歓呼の声に送られて　今ぞ出で立つ父母の国　勝たずば生きて還らじと……と、声張り上げて、一斉にうたつて行くのであります。

随想「若き日本」（『中央公論』昭和一二年一〇月）と同様、ここでも大和田建樹作詞の軍歌「日本陸軍」が引用されているのは、特筆に値しよう。未明や勇ちゃんの戦意は、精動のつくった舞台装置――軍歌「日本陸軍」の流れる出征風景――を契機として、発揚している／させられているのである（注12）。

だから、小川未明の転向・国策協力を考える時、明治人特有のナショナリズムという世代論のみをもって解とすることは、おそらく適切ではない。多くの作家・知識人がそうであるように、未明もまた、政府の主導する官製運動に付和雷同してしまった凡庸な転向者に過ぎ

ない。私たちは、時局へ容易に押し流されてしまう、未明の凡庸さにこそ注目するべきなのである。

三、雑誌『お話の木』の児童表象 ――理想的愛国少年の造形

さて、以上見てきた通り、童話「僕も戦争に行くんだ」は、小川未明の岐路を別つ、凡庸な、あまりに凡庸な転向・国策協力文学なのであった。次に本節では、本作発表後、雑誌『お話の木』掲載の未明童話に現出した児童表象を確認したい。また、昭和一二年前後の未明の童話観の検証を通して、これらの児童表象が帯びる固有の意味について考察を加える。

「神に祈る」(『お話の木』昭和一二年一一月)は、「僕も戦争に行くんだ」の翌月に発表された、扉の言葉である(**注13**)。画家・小谷良徳の挿絵が付されており、文章は極めて短い。

> 遠い、山々に、もう雪が来ました。八幡様の境内の銀杏の木は、真黄色になつて、ちやうど炎の燃え立つたやうです。風が吹くと、火の子のやうに葉が飛び、熟した実がポトポト大地へ落ちました。けれど、これを拾ふ子供もありません。前を通ると、正しく頭を下げて、お父さんや、お兄さんの、武運長久を祈るのでした。

ここで描出されているのは、熟れた銀杏の実には目もくれず、神＝八幡様に父兄の「武運長久」を祈る、子どもの姿である(**図3**)。年端の行かぬ子どもが、遊びより祈りを優先させるところに、銃後の少年少女らしい、いじらしさがあり、祈りを捧げる神がキリストや仏陀ではなく、天皇家の祖先たる八幡神(応神天皇)であるところに、ささやかな皇道精神の発露があろう。

「友情」(『お話の木』昭和一二年一一月)は、「神に祈る」と同号に掲載された三人称童話。主人公は小学生の誠さんである。誠さんの友人・小沢は、母に「小沢といふ子と、遊んではいけませんよ」と危険視される劣等生だが、実は出征した兄を思う気立ての優しい少年だった(「ああ、僕の兄さんは、戦争に行つたんだよ。僕、兄さんは、今頃どうしてゐるだらうなと思つて、ハーモニカを吹きながら歩いてゐるうちに、知らない遠方まで行つてしまつたのだ」)。反面、小沢は「兄さんは、生きて帰らないといつたよ。僕もお母さんも、あきらめてゐるのだ。国のために死ぬんだもの」と、兄の死を諦念している風でもあり、これまたいじらしい。

最終的に小沢の善良さは誠さんの母にも伝わり、母親は自らの不見識を悟ったのであった。親族の安否を気遣いつつも、国家奉仕の帰結としての戦死を受け入れる小沢の姿には、家族愛と祖国愛の共在が認められよう。

「嵐の中」（『お話の木』昭和一三年一月）は三人称童話。主人公は小学生の武（たけ）ちゃんだ。武ちゃんは、文字通り嵐の中、出征兵士を見送る愛国少年である（**図４**）。

眼をさますと、寒い朝でした。まだ風はやまずに、ひゆうひゆうといつて鳴つてゐました。ふと、武ちやんは、耳を澄しました。風の叫びの間から、歌の声がきこえて来るやうな気がしたからです。「歓呼の声に送られて……」けふもまた出征する兵士があるのです。学校で、先生から、雪の降る遠い戦場で、お国のために戦つてゐる兵士の話をきいて、いつも感激してゐる武ちやんは、「見送りに、行かなければならない」と、いつて、はね起きました。

引用は短いが、「歓呼の声に送られて……」は、大和田建樹作詞の軍歌「日本陸軍」である。随想「若き日本」（『中央公論』昭和一二年一〇月）や「僕も戦争に行くんだ」と同様、国民精神総動員運動下の儀式（セレモニー）――軍歌「日本陸軍」の流れる出征風景――は、ここでも出現し、作中人物の心身のあり方を規定している。

「僕も戦争に行くんだ」の勇ちゃんと異なり、武ちゃんは「万歳」「僕も、戦争に行くんだ！」とは叫ばないけれど、この翌日、「自分の持つてゐる戦争の絵本や、雑誌」を女中のきくに渡し、彼女の弟へ送るよう申し付けたのは、彼なりの愛国心の発露に他ならない。

かくして、「僕も戦争に行くんだ」以後、未明は主宰雑誌『お話の木』を舞台に、戦時色の濃厚な文芸作品を複数発表していたのであった（**注１４**）。雑誌全体としても、昭和一二年一〇月号がひとつの分水嶺であることは間違いなく、これ以降、巽聖歌「旗」、武内俊子「港」、山内秋生（やまのうちしゅうせい）「日清戦話」、金谷金治「事変ニュース」、宮里良保「焼夷弾と毒ガス」（以上、昭和一二年一〇月）、三浦藤作「北清事変」、天ケ瀬行雄「上海特別陸戦隊の話」（同一一月）、与田準一「村の出征」、山内秋生「日露戦話」、上田良作「敵前渡河と〝トーチカ〟の話」（昭和一三年一月）、巽聖歌「村で」、津野久一「銃後の子供」、杉山和夫「お馬の出征」（同七月）等、「支那事変」や過去の日本の戦争を題材とした、戦意発揚を促す読み物が続出するようになる（**注１５**）。

そして、このような同時代言説の中で生まれた未明童話は、主要な作中人物が、いずれも

銃後の少年の理想化された姿に仕立て上げられる特徴を有していた。すなわち、銀杏の実には目もくれず肉親の「武運長久」を念じる「神に祈る」の子どもたちや、兄の生を案じつつも死を観念する「友情」の小沢少年、台風の中、勇んで出征兵を見送りに出かける「嵐の中」の武ちゃんの姿がそれである。

紙幅の都合上、内容の紹介はできないが、同時期に『お話の木』以外で発表された「秋の暮」（『台湾日日新報』昭和一二年一一月三・四日）、「まだ冬だけれど」（『教育行童話研究』昭和一三年一月）、「オヂイサンノフエ」（『幼稚園』昭和一三年一～九月）といった諸作品にも、このような「挙国一致」「尽忠報国」を体現する愛国的児童像は形象化されている。

さて、では、未明がかかる銃後の少年少女像を繰り返し描出したことには、一体どのような意味があったのだろうか。冒頭述べた通り、それは昭和一二年前後の未明の童話観と密接に関わる。

「赤い蝋燭と人魚」など、佳作を数多く著した大正期の未明が、自己の純真な夢を大人・子どもを問わず訴える文学の一形式として童話を捉えていたのに対し（注16）、戦中期の未明は、児童を善導・教導するための教育の一形式として童話を捉えていた。

坪田譲治・窪川（佐多）稲子・豊島与志雄らが席を囲んだ座談会での、未明の発言を見てみよう。

> 児童生活の認識から始つて児童の代弁となり、児童の生活に訴へその中に美しいもの、高尚なもの、或ひは正義感等を入れ、芸術的に教化していく、そこに児童文学として童話の本領があり、また文学的存在の理由があると思ふのです。
>
> 「「児童文学」座談会　「風の中の子供」を中心として」（『教育』昭和一二年四月）

ここで未明は、児童に美や正義の観念を注入し、「芸術的に教化していく」ことこそが、「童話の本領」であると自説を展開している（注17）。さらに、教育運動家・松永健哉の「教育者として最も優れた見解と技術とを持つた人々が、文学を書くやうになつてほしい」「作家としてよりも教育者としての地位を、はつきりと意識した場合に、良い作品が生れると思ひます」との発言に対しては、「非常に同感です」と賛同してもいた。

つまり未明は、教師と生徒の指導・被指導関係を、童話作家と読者の関係にも類比的に適用していたのである。その意味で、童話とは、作家が信じる徳目を児童へ内蔵（ビルトイン）させるための説法書に他ならない。日中開戦後、未明は自作に、精動思想の現身（うつしみ）たる善良な愛国少年を

多数登場させることで、銃後の少年かくあるべしと教化に励んでいたと言えよう。

以後、大東亜戦争へ突入し、戦局が悪化するに連れて、説教の内容が次第に過激化して行く――敵国・米英への罵倒や「大東亜共栄圏」イデオロギーの鼓吹が始まる――のは、次の**九章「日本少国民文化協会への結集　――童話「頸輪」**で見ていく通りである。

四、文学者と日中戦争　――迫りくる総翼賛体制のただ中で

さて、ここまで筆者は、日中戦争下、「国民精神総動員運動」へ追従し、戦意高揚を煽る、小川未明の姿を辿ってきた。大正・昭和初期、社会主義者として活躍した未明のかかる変貌は、転向以外の何物でもないわけだが、しかしもちろん、当時時流に掉さした文学者は、ひとり未明のみではない。故に本節では、日中戦争期の文学者の動向を包括的に素描し、文学史の主潮を視野に収めることで、未明の国策協力の同時代性を明らかにしたい。それは未明の凡庸さの内実を問う作業でもある。

まずは改めて、時代背景を簡単に整理しておこう。昭和一二年七月七日の盧溝橋事件を契機として勃発した日中戦争は、日本を満州事変以来の準戦時体制から完全なる戦時体制へと移行せしめた。七月二九日、北京市通州で、日本人居留民二〇〇名以上が惨殺された通州事件は、国民の反中国感情を高め、以後国内では、官民相まって、「暴支膺懲（ぼうしようちょう）」のスローガンが連呼されることとなる。

第一次近衛文麿内閣は、蔣介石・毛沢東の国共合作からなる抗日運動の根絶を掲げ、その戦線は、中国東北部から、中国全土へと一挙に拡大して行った。帝国陸海軍の増長は著しく、前年の昭和一一年には、民間右翼・北一輝に感化された陸軍の皇道派青年将校が永田町一帯を制圧する、二・二六事件が生起している。昭和一二年当時、我が国では、軍部の政治的影響力拡大を背景に、帝国主義的拡張政策が断行されていたのである。

そして、このような政治の趨勢は、当然、文壇にも影響を与えずにはおかなかった。都築久義が、「こうして政府が掲げた支那事変の遂行と勝利、国論の統一と挙国体制の確立という国策に、文壇がすみやかに反応を示し、やがて多くの文学者がこれに協力し、ついには推進役をつとめるにいたったことは周知の事実である」（「国策文学について」『国文学　解釈と鑑賞』昭和五八年八月）と指摘するように、あるいは山田敬三が、「日中戦争を第二段階とする「十五年戦争」の中期に入って、政治と文学とは、もはや一定の距離を保つことさえ許されなくなり、これ以後、日本の文壇はほとんど戦時色一色に塗りつぶされたかの如き観を呈することになる」（「文学とナショナリズム」山田他編『十五年戦争と文学』東方書店、

平成三年二月）と指摘するように、日中開戦後、ほとんどすべての文学者は、戦争協力へ舵を切っていったのである。

例えば、文芸評論家・板垣直子の次のような同時代評は、その事情をよく伝えていよう。

> 文芸家がいかにして国策に参与しうるかの討議は、既に事変の勃発時に十分に近い程なされた。解決として、文学者が銃後を建設するためのいかなる用意もあることが明らかにされた。思想に於いて国策に反しないことと、題材を時勢に沿はしめることが暗黙の間に約束された。文芸が社会的関心をえるやうになり始めた過去数年以来、当局が文学を国策に利用しようとする風を示しはじめた。当局の方から進んで、文学者に接近しようとする企が幾度も催された。両者の接近は戦争文学を中にして一層達せられた。
>
> 板垣直子『事変下の文学』（第一書房、昭和一六年五月、三八九頁）

ここで板垣は、「思想に於いて国策に反しないことと、題材を時勢に沿はしめること」が、暗黙裡に共有された文学者の共通認識であったと語っている。もし、この認識の枠の外に出て、筆を振るおうものなら、その書き手は即、監獄送りとなったであろう。国策への追随は、売文で身を立てる者の、生存戦略でもあったのである。

かくて、文学者の多くは、好むと好まざると、戦争協力の立場を宣明するようになる。小林秀雄の次のような一文は、その代表例である。

> 戦争に対する文学者としての覚悟を、或る雑誌から問はれた。僕には戦争に対する文学者の覚悟といふ様な特別な覚悟を考へる事が出来ない。銃をとらねばならぬ時が来たら、喜こんで国の為に死ぬであらう。僕にはこれ以上の覚悟が考へられないし、又必要だとも思はない。一体文学者として銃をとるなどといふ事がそもそも意味をなさない。誰だつて戦ふ時は兵の身分で戦ふのである。文学は平和の為にあるのであつて、戦争の為にあるのではない。文学者は平和に対してはどんな複雑な態度でもとる事が出来るが、戦争の渦中にあつては、たつた一つの態度しかとる事は出来ない。戦は勝たねばならぬ。
>
> 小林秀雄「戦争について」（『改造』昭和一二年一一月）

初出の雑誌『改造』は、『文藝春秋』『中央公論』『日本評論』と並ぶ、当時の四大総合誌の

ひとつであるが、作家・小林はこの大メディアで、「喜こんで国の為に死ぬ」と言明していた。また末明同様、国際主義（共産主義）を、「歴史的必然病患者」「敗戦主義思想」として、鋭く批判してもいた（注１８）。愛国と反共の抱き合わせである。

そして本来、このような戦争奉仕や反共攻撃に立ち向かうべきはずのプロレタリア文学陣営は、この時期、完全に瓦解していた。本多秋五が、転向文学が「心ならぬ転向」から「心からの転向」へ移行する画期と見るところの、島木健作『生活の探求』（河出書房）が発表されたのは、童話「僕も戦争に行くんだ」と同じ、昭和一二年一〇月のことである（注１９）。徳永直がプロレタリア文学の白眉「太陽のない街」の絶版声明を出したのも、この年の冬だ（注２０）。

既に政治の領域では、昭和一〇年の袴田里見逮捕をもって、日本共産党中央委員会は壊滅し、残された山川均・荒畑寒村・猪俣津南雄・大森義太郎ら、非共産党系マルクス主義者の労農派グループも、昭和一二・一三年の人民戦線事件で一掃されてしまった。被検挙者の青野季吉は、一年余りの拘置所生活を送った後、転向を遂げ、中西伊之助は、非転向を貫きつつも、以後敗戦まで沈黙を守ることとなる。

衰滅したプロレタリア文学とは対照的に活況を呈したのが、戦争文学・従軍ルポルタージュの類である。雑誌『改造』が、「支那事変増刊号」（昭和一二年一〇月）、「上海戦勝記念臨時増刊号」（同一一月）、「臨時増刊南方支那号」（同一二月）といった特集を、ほぼ毎月組んでいた事実からも明らかなように、開戦以来、中国戦線に対するジャーナリズムの関心は一般に高まっていた。故に各新聞・雑誌社は、お抱えの作家を現地特派員として派遣し、報告記事を提供させていたのである。著名なところでは、『中央公論』の林房雄や尾崎士郎、『文藝春秋』の岸田国士、『改造』の三好達治、『主婦之友』の吉屋信子、『東京日日新聞』の吉川英治、『毎日新聞』の林芙美子等の名前が挙げられよう。

各人、細かな差異はあるだろうが、彼らもまた、大きくは戦争支持者だった。例えば、上海へ赴いた林は現地から、「断つておきますが、僕はミルクに水を割つたやうな平和主義や、敗戦主義に通じて祖国の滅亡を願ふ非戦論に絶対に反対です」「戦はざる国民には滅亡があるのみです。一国の非戦論は敗戦主義と亡国に通じます」（「上海戦線」『中央公論』昭和一二年一〇月）と、「平和主義」や「非戦論」を痛罵している。末明・小林の姿勢と重なる。

ちなみに林は、昭和一一年に「プロレタリア作家廃業」を宣言し、日本主義へ向かった転向者だが、昭和一〇年頃から、左翼の衰退と軌を一にして、文壇で「日本的なもの」が脚光を浴び始めた現象は注目に値しよう（注２１）。保田與重郎・亀井勝一郎らの日本浪曼派や、

佐藤春夫・倉田百三らの新日本文化の会が台頭したり、横光利一・萩原朔太郎らのいわゆる「日本回帰」が起こるのは、まさしく、この時期である。文壇全体が右傾化していたのである。

さて、戦争文学の代表作と言えば、何と言っても、火野葦平の小説「麦と兵隊」を措いて他ない（注22）。徐州作戦の従軍日記の形式で綴られた本作は、前線の実情を知りたいと願う銃後の国民の圧倒的歓迎をもって迎えられ、一〇〇万部を超えるミリオンセラーとなった。一介の青年文学者は一躍、時代の寵児へと飛躍したのである。

本作の魅力はもちろん、火野自身が陸軍歩兵伍長・玉井勝則として従軍していた実体験からくる、描写の臨場感（リアリティ）にあるわけだが、しかし、作中の語り手・火野伍長が、単なる現地報告に留まらない、ナショナリズムの喚起も併せて行っている点は、見落とすべきではないだろう（注23）。

私は祖国といふ言葉が鮮かに私の胸の中に膨れ上つて来るのを感じた。それは無論私が今日突然抱く感懐ではないけれども、特にこの数日眼のあたりに報告された兵隊のたとへやうなき惨苦とともに、私の胸の中に、それは、ひとつの思想のごとく、湧いて来た。（中略）兵隊は、人間の抱く凡庸な思想を乗り超えた。死をも乗り超えた。それは大いなるものに向つて脈々と流れ、もり上つて行くものであるとともに、それらを押し流すひとつの大いなる高き力に身を委ねることでもある。又、祖国の行く道を祖国とともに行く兵隊の精神でもある。私は弾丸の為にこの支那の土の中に骨を埋むる日が来た時には、何よりも愛する祖国のことを考へ、愛する祖国の万歳を声の続く限り絶叫して死にたいと思つた。

火野葦平「麦と兵隊」（『改造』昭和一三年八月）

ここで語られているのは、祖国のために命を投げ出すことは決して惜しくはないという軍人の感懐であり、「祖国の行く道を祖国とともに行」かんとする軍人の忠誠である。自らの生命を喜んで国家に捧げようとする、火野伍長の精神は、当時の施政者が望む忠勇義烈の皇軍像そのものであったと言ってよい（注24）。

作家は国策プロパガンダの手段として使える――政府はそのことに気付いた。だからこそ、「麦と兵隊」のミリオンヒット以後、政府は著名な作家たちを積極的に登用し、前線へ派遣するようになる。いわゆる、ペン部隊である（注25）。昭和一三年八月、内閣情報部

は、日本文芸家協会会長の菊池寛を呼び出し、作家たちの武漢作戦従軍を要請。これを快諾した菊池は、すぐさま組織化に動き、九月、久米正雄・丹羽文雄・瀧井孝作・白井喬二・林芙美子らの陸軍班と、菊池・佐藤春夫・吉川英治・小島政二郎・吉屋信子らの海軍班、総勢二〇名以上を、戦地へ出立せしめた。施政者にとっては、作家のペンの力を利用して、銃後の世論を都合よく誘導できるメリットがあり、作家たちにとっては、手厚いもてなしで、中国各所を大名旅行できる旨味があった。

もとより、作家であるからには、見聞を広め、創作の素材を得たいという文学的野心もあっただろう。松本和也は、昭和一〇年前後に文壇を賑わせた私小説論議の帰結として、当時、文学（者）には、社会性という規範が強く求められるようになっていたと、『昭和一〇年代の文学場を考える』（立教大学出版会、平成二七年三月、一五三～一七四頁）で指摘している。ともあれ、ここに文学者の本格的な職域奉公が始まったのである。

ペン部隊の成功は、半官半民の御用文学団体乱立の端緒となった。農民文学懇話会・大陸開拓文芸懇話会・海洋文学協会・経国文芸の会・国防文芸連盟・輝ク部隊といった諸団体が、それである。これらの団体は、「〇〇文学（文芸）」の肩書に示される各領域の国策振興に文学者を動員しようとするもので、政治と文学の露骨な癒着以外の何物でもなかった（**注26**）。

例えば、農民文学懇話会の発会式の席上、時の農林大臣・有馬頼寧（よりやす）は、「島木健作君が「国策の線に沿つて積極的に活動する」といはれたことは誠に有難いことであるが、農民文学は既成の国策に沿ふことでなく、寧ろ今後真に農村を救ふ国策をたてるその原動力となつて欲しいと思ふ」（「農民文学懇話会の発会に臨んで」『文芸年鑑』昭和一四年一〇月）と述べ、農村救済の原動力となるよう、島木ら作家たちを鼓舞している（**注27**）。島木・高見順・徳永直・葉山嘉樹・湯浅克衛ら、旧左翼の書き手の多くが身を寄せた、これらの諸団体は、最終的に、日本文学報国会へ吸収・統合されることとなる。

それでは、児童文学界の状況はどうか、と言えば、こちらも大勢変わりはない。菅忠道が、「文壇一般をとらえていた文学の国策化は、生産文学の強調として現われ、産業報国会風の工場文学、勤労精神高揚の農民文学など、さまざまな形態を生み出していたが、児童文学もこの流れにまきこまれていった」（『日本の児童文学　増補改訂版』大月書店、昭和四一年五月、二九六・二九七頁）と指摘するように、日中開戦後、多くの児童文学者は国策協力へ傾斜して行ったのである。三節までに記した、未明や雑誌『お話の木』の動向は、その風潮の一端を如実に伝えていよう。

なお、日中戦争下の児童文学者の国策協力に関しては、次の**九章「日本少国民文化協会への結集　――童話「頸輪」」**の第一節「「児童読物改善ニ関スル指示要綱」から日本少国民文化協会設立まで」でも、論述している。

大衆児童読み物の分野では、講談社が、皇軍兵士の武勇伝や戦争美談を散りばめた「支那事変少年軍談」シリーズを刊行するなど、戦意高揚を煽る戦記物語は、書店に溢れかえっていた（**注２８**）。販売部数の面から言って、未明ら芸術系童話作家の諸作品よりも、むしろこちらの方が、児童一般に与えた影響は大きいだろう。

他方、数の上では僅少ながら、国策への屈服を潔しとしない文学者たちもいた。芸術的抵抗派と総称される作家たちである（**注２９**）。石川淳「マルスの歌」（『文学界』昭和一三年一月）、中野重治「歌のわかれ」（『革新』昭和一四年四～八月）、堀辰雄「菜穂子」（『中央公論』昭和一六年三月）等が、その代表的作品だ。永井荷風・谷崎潤一郎・徳田秋声といった大家たちも、自己の芸術的境地に深く沈滞することで、時局への帰服を回避していた。大政翼賛会が結成されてなお、「この頃は夕餉の折にも夕刊新聞を手にする心なくなりたり。時局迎合の記事論説読むに堪えず。文壇劇界の傾向に至つは（ママ）寧ろ憐憫に堪ざるものあればなり」（「断腸亭日乗」昭和一五年一〇月一五日）と日記に綴る荷風の反骨精神は、なかなか逞しい。

無論、これらの「抵抗」は、「深夜叢書」に代表されるフランスの対独レジスタンス文学運動と異なり、政治的影響力がほぼ皆無――すなわち、自己満足と紙一重――の微温的なものに過ぎないわけだが、国策協力者が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）し、検閲官が一行一句に目を光らせる当時の政治状況を鑑みれば、やはり抵抗と呼ぶに値するものだろう。

なお、獄中非転向を貫いた宮本顕治や蔵原惟人、単身中国へ渡り、「日本人民反戦同盟」を結成の上、反戦活動を展開した鹿地亘のように、過酷な情勢にあって、日本帝国主義と闘い続けた左翼文学者もごく少数ながらいた。彼らもまた、無力ではあったけれど、その事実は忘れるべきではない。

このように、日中戦争下の文学史の主潮は、「麦と兵隊」のメガヒットからペン部隊の創設を経て、各種肩書文学の叢生に至る、積極的国策追従の流れであった。芸術的抵抗派や本格的抵抗派も傍流としているにはいたが、その数は少なく、政治的影響力は限りなくゼロに等しかった。そして、戦時下の小川未明は、元社会主義者でありながら、前者の流れに与することで、時代の主流派との同衾を遂げていたのである。かかるごくありふれた多数派への恭順・迎合の姿勢こそ、筆者の言う凡庸さの内実に他ならない。

小括

以上、本章では、日中戦争時の小川未明の動向を知るべく、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）に関する作品分析を、作中の戦争表象――とりわけ、軍歌「日本陸軍」――へ着目しつつ、行った。

その結果、明らかになったのは、本作が第一次近衛文麿内閣で発動された「国民精神総動員運動」の影響下にある、極めて時局的な転向・国策協力文学であること、また童話を児童教化の手段と見做す当時の未明の童話観が、本作および同時期の童話を、極めて教化色の強い内容に染め上げていたということである。つまり本作は、日中戦争下、ごく普通の小学生が精動思想を獲得し、「小さな国士」へ成長を遂げる成長物語であり、そこには、未明自身の戦争支持の立場が露骨に反映されていた、と言える。

そして、未明が辿った、このような国策協力者としての道行きは、時の文壇の主潮に掉さす、すこぶる同時代的なものでもあった。主潮とはすなわち、火野葦平「麦と兵隊」（『改造』昭和一三年八月）に代表される戦争文学の流行↓ペン部隊他、各種御用文学団体の乱立↓日本文学報国会の結成へと至る、一連の流れを指す。

この揺るぎない主線の脇では、労農派活動家四〇〇名余りが逮捕された第一次人民戦線事件（昭和一二年一二月）や経済学者・矢内原忠雄が東大を追われた矢内原事件（同一一月）など、国策にうべなわない社会主義者や自由主義者に対する徹底的な弾圧が展開されていたが、かつて「階級闘争」を叫んだ未明が、これらの国家暴力に異議申し立てをすることは、ただの一言としてなかった。また、永井荷風・堀辰雄・中野重治等、一部の作家が歩んだ芸術的抵抗の道とも、未明は無縁だった。

日中開戦後の小川未明は凡庸な転向者に過ぎなかった、という殺伐とした結論を、私たちは直視しなければならないのである。

注

1　本作は、近年ようやく、小埜裕二編『小川未明新収童話集』第四巻（日外アソシエーツ、平成二六年二月）に再録された。

2　小埜裕二は、「〈童話作家宣言〉以後の未明の童話は、それ以前の童話に比べ、あまり評価されてこなかった」「結局、後半期の未明童話は、十分吟味されることもないまま現在まで放置されてきた」（「概説」『小川未明全童話』日外アソシエーツ、平成二四年一二

月）と、大正一五年の「童話作家宣言」以降の未明童話の評価の低さ、注目の少なさを指摘している。また、戦時中の未明の歩みが戦後十分に掘り起こされていない点について、山中恒は、「日本の児童文学最高の作家とされてきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月、二五〇頁）と批判的に記している。

3　例えば、昭和一二年一月のアンケート「私の憂ひ、私の喜び（又は希望）」（『婦人之友』）で、未明は「人類が戦争を忌避する傾向」が「私の喜び（希望）」であると回答しているが、昭和一三年九月のアンケート「貴下は銃後の戦ひを如何に戦ひつつあるや？」（『祖国』）では一転、「家庭防火群の一員として、家族と共に忠実に働きつつあります」と、戦時体制下における自らの献身を誇っている。

4　明治期の小説「霰（あられ）に霙（みぞれ）」（『新小説』明治三八年三月）において、「三千余万」は、主人公の小学生「私」に、日本人の同胞感覚を鋭く意識させる唱歌として歌われていた（「三千余万兄弟共よ。――私は日本の国に住んでるものは皆な兄弟であるのをきいて、今更誰でも彼でも一層親しく思ふ」）。また、大東亜戦争末期の童話「太平洋」（『少国民の友』昭和一九年四月）には、幼少期、「三千余万」を小学校で歌ったという老人が、戦争応援歌「太平洋行進曲」（横山正徳作詩）を聞いて、往年のナショナリズムを甦らせる、本作と類似した描写がある。

5　「日本陸軍」は、日露戦争開戦直後に発表された歌で、全体は出陣・斥候・工兵・砲兵・歩兵・騎兵・輜重（しちょう）兵・衛生隊・凱旋・平和の計一〇節の構成を取る（後に、爆撃隊・機関銃隊・戦車隊・電信隊・皇軍凱旋の五節が追加された）。音楽文化研究家の長田暁二は、同歌について、「第1（ママ）節が「出征」の事を述べているところから、太平洋戦争中も召集令状を受けた若者の出征時には必ず高吟していたし、軍歌演習や行軍の際にも良く歌っていた」と、自著『戦争が遺した歌』（全音楽譜出版社、平成二七年六月、一一八頁）で解説している。

6　六章・九章参照。

7　奈街三郎「『お話の木』が倒れるまで」（鳥越信他編『新選日本児童文学』第二巻、小峰書店、昭和三四年五月）によると、『お話の木』という題号の名付け親は、主宰者の未明である。他に、「ランドセル」「小さな靴」「石ころ」等の案が、未明から出されたらしい。

8　雑誌の質について、向川幹雄は「主宰者である未明は創刊号の「花咲く前」を初め毎号作品を発表し、白秋も多く寄稿したが、さりとていい作品が残らなかった」（『日本近代児童

文学史研究Ⅳ』兵庫教育大学向川研究室、平成一二年三月、九九頁）と、否定的に総括している。一方、続橋達雄は「昭和十二年三月号で廃刊となった酒井朝彦たちの『児童文学』誌のあとを埋める芸術的な児童雑誌の役割を果たした観がある」（「解説」『定本小川未明童話全集』第一一巻、昭和五二年九月）と述べ、その同時代的には稀有な芸術的児童雑誌としての役割を肯定的に評価している。

9　雑誌の原稿依頼は「先生の名刺の紹介状を持って、三人（奈街三郎・佐藤義美・柴野民三――引用者注）でまわりました」と、奈街は『お話の木』が倒れるまで」（同前）へ記している。柳田国男には、「お話を新しく作るということには、反対の立場にあるから」との理由で、執筆を断られたそうだ。

10　本文で挙げた以外の先行論（部分的論及）としては、他に以下のようなものがある。続橋達雄「作品としての結晶度はそれほどでなく、平凡な作品であるが、日中戦争初期の未明の心情が吐露されており、また、夜学に通う少年とか酸素溶接場の主人などゆたかでない人びとに眼をとめているところに未明童話の特徴がみられる」（「解説」『定本小川未明童話全集』第一一巻、講談社、昭和五二年九月）／関英雄「だが『お話の木』でのわたしの最大の衝撃は、小川未明が題名からして「僕も戦争に行くんだ」（六号、十二年十月）という創作を発表したことだった。（中略）（本作には――引用者注）未明らしい少年の純情の描き方はあったが、その純情はかつての反戦童話「野ばら」とは反対の思想に組込まれていた。この作品が十二年七月の日中大戦勃発後の作であることに、勃発以前の「花の咲く前」とのはっきりした段差があった。わたしは突放された寂しさを覚えたがそれを人にいう気はしなかった」（『体験的児童文学史』後編、理論社、昭和五九年一二月、二〇五頁）／千花子「日中戦争が始まったのは昭和一二年七月であるが、周知のとおり未明はこの戦争に強い衝撃を受け、6「僕も戦争に行くんだ」（「お話の木」昭和12・10）を発表した。この童話は、その後、未明が戦争に加担していく最初の作品である」（「未明童話集　お話の木」小埜裕二編『解説　小川未明童話集45』北越出版、平成二四年三月）／相川美恵子「小川未明は日中戦争の開始に対してもっとも早く呼応した児童文学作家のひとりであった。彼は自分が主宰している月刊雑誌『お話の木』（子供研究社、一九三七年一〇号（ママ））に、短編「ぼく（ママ）も戦争に行くんだ」をいち早く載せている。（中略）「赤い蝋燭と人魚」（『朝日新聞』一九二一年二月一六～二〇日付）を書いていた小川未明はどこに行ってしまったのだろう」（「日中戦争と児童文学」鳥越信・長谷川潮編『はじめて学ぶ日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房、平成二四年四月）

11　精動の具体的な取り組みや政府側の意図について、歴史学者の北河賢三は、次のように概括している。「神社・皇陵の参拝、勅語奉読式、戦没者慰霊祭、遺家族の慰問、出征兵士・「英霊」・傷痍軍人の送迎、建国祭への協力、武道・ラジオ体操の奨励、清掃などの勤労奉仕、国防献金など、さまざまな儀式や行事をとおして、天皇制イデオロギーを浸透させて国民統合を強め、自発的な戦争協力体制づくりに力が注がれた」（『国民総動員の時代』岩波ブックレット、平成元年四月、九頁）

12　「日本陸軍」等の軍歌が、国民の戦意を掻き立て、天皇制国家への（自発的）服従を促す役割を果たした由、戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代』（吉川弘文館、平成二二年八月）は、次のように指摘している。「《敵は幾万》や《日本陸軍》といった明治期の「軍歌」と称される楽曲は、軍隊のみならず国民の戦意昂揚や意識喚起といった役割を担った音楽であり、その後、十五年戦争期という「戦争の時代」に至るまで脈々と生き続けることになるものであった。いわゆる「軍歌」と括られる音楽は、軍隊組織の規律のみならず結局は天皇制のもとでの臣民の規律化を促し、求める音楽として機能していったと考えることができよう」（九頁）

13　雑誌『お話の木』昭和一二年五～一一月号に掲載された、未明の扉の言葉は、小埜裕二編『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』日外アソシエーツ、平成二八年六月）では、いずれも「感想」と区分されているが、これらの巻頭言には一定の物語性が認められることから、一概に「感想」とは決め付け難い。故に本稿では、未明童話の一端として、分析の対象に加える。

14　逆に、「僕も戦争に行くんだ」より前の『お話の木』掲載童話――「花の咲く前」（昭和一二年五月）、「相撲」（同六月）、「白い雲」（同七月）、「真昼のお化」（同八月）、「眼鏡」（同九月）――には、特段の戦争表象は見受けられない。最終号に載った、季節外れのタイトルの童話「雪の降つた日」（昭和一三年七月）も、事情は同様である。

15　例えば、津野は「皆さんは支那の方々で戦つて居られる皇軍の勇ましい働きぶりをお聞きですね。日本は今、兵隊さん許りでなく、誰もが一つ心になつて、一生懸命に働かねばならない大事な時です。忠義な兵隊さんの事を考へて、無駄遣ひや食物の好き嫌ひもやめ、これからのお国は私達で守らうといふ強い覚悟を持つ事が大切です」（「銃後の子供」）と述べ、中国戦線の兵士の奮闘を引き合いに出しながら、子どもに祖国防衛を訴えている。

16　小川未明「序」（『赤い蝋燭と人魚』天佑社、大正一〇年五月）、「私が童話を書く時の心持」（『早稲田文学』大正一〇年六月）参照。なお、未明の全盛期とも言うべき、大正一〇

年時の童話観については、三章五節で論じた。

１７　同種の童話観を示した発言としては、他に次のようなものがある。「芸術としての童話こそ、常に児童の心をして、善美、高尚、純粋なるものに憧憬せしめ、もつて明朗なる人間性を養ひ、道理の弁別について過（あやま）たず、よく自己の行為を反省せしむるに足るものです」（『お話の木』を主宰するに当りて宣言す」『お話の木』昭和一二年五月）／「（童話は――引用者注）芸術の力によつて、児童をして、善美、高尚、純粋なるものに憧憬せしめ、明朗なる人間性を養はせるものでなければならない。故に童話作家は、子供達の世界と親しき関連を保ち、作家の理想が彼等のなかに培はれるものである」（「重大なるその使命」『日本学芸新聞』昭和一二年六月一日）

１８　以下、小林。「自分一人の身の持てない様な社会道徳が意味がない様に、自国民の団結を顧みない様な国際主義は無意味である。僕は、国家や民族を妄信するのではないが、歴史的必然病患者には間違つてもなりたくはないのだ」「僕はただ今度の戦争が、日本の資本主義の受ける試煉であるとともに、日本国民全体の受ける試煉である事を率直に認め、認めた以上遅疑なく試煉を身に受けるのが正しいと考へるのだ。この試煉を回避しようとする所謂敗戦主義思想を僕は信じない。極言すれば、そんなものは思想とさへ言へないのだ」

１９　以下、本多『転向文学論』（未来社、昭和三二年八月）より。「島木健作の『生活の探求』（前篇は三七・一〇、続篇は三八・六、河出書房から単行出版）があらわれて、転向文学は第二の段階に入る。外的強制に屈伏した「心ならぬ」転向ではなく、自分の過去を積極的に清算する「心から」の、あるいは幾分の後めたさを残しながらも「半分は心から」の転向を語る文学が、ここにはじまるのである」（二一一頁）

２０　『太陽のない街』其他著作絶版を宣言　徳永直氏が大転回」（『読売新聞』昭和一二年一二月二六日夕刊）参照。

２１　河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉』（花書院、平成二一年三月）参照。

２２　村上兵衛「「聖戦」と戦時下の文学」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）参照。

２３　黒古一夫『戦争は文学にどう描かれてきたか』（八朔社、平成一七年七月）参照。

２４　逆に、中国人民への殺傷・略奪・強姦など、施政者の意に反する皇軍の姿を描いた作家は、懲罰の対象となった。石川達三「生きてゐる兵隊」（『中央公論』昭和一三年三月）の筆禍事件は、その代表例である。石川は同作で、新聞紙法違反の罪に問われ、中央公論社の編集者とともに、禁固四ヵ月、執行猶予三年の有罪判決を受けた。掲載号の『中央公論』も

発禁処分となった。

２５　櫻本富雄『文化人たちの大東亜戦争』（青木書店、平成五年七月）、渡辺考『戦場で書く　火野葦平と従軍作家たち』（ＮＨＫ出版、平成二七年一〇月）参照。

２６　平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭和三八年一二月）参照。

２７　中谷いずみ「日中戦争の時代」（『コレクション　戦争と文学』別巻、集英社、平成二五年九月）参照。

２８　山中恒『少国民戦争文化史』（辺境社、平成二五年一〇月）、『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）参照。

２９　小笠原克「芸術的抵抗と非順応」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）、海老井英次「抵抗としての沈黙　――永井荷風『断腸亭日記』の世界」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

図１　日の丸の小旗を持った人々が出征を見送っている（画・前島とも子）

図２　町内には日章旗と並んで、「武運長久」「義勇奉公」と記した旗幟が掲げられている

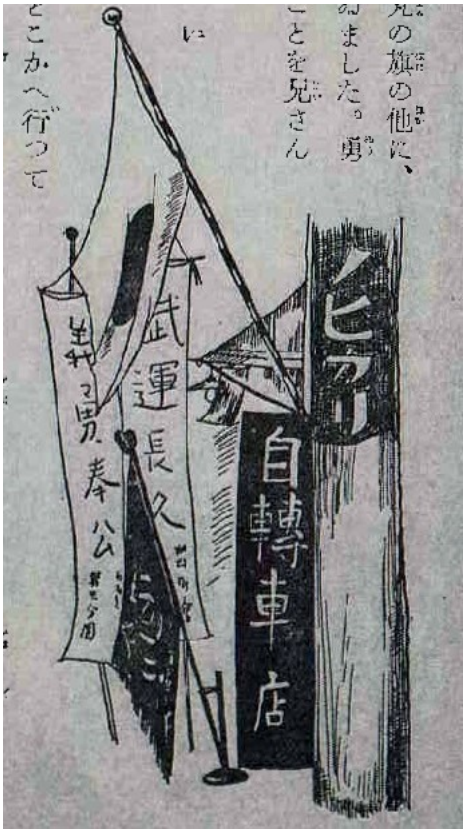


図３　幼い少年少女が父兄の武運長久を八幡神に祈っている（画・小谷良徳）

図４　図１と同じく出征風景。右側の女性の襷の文字「国防」は、昭和７年発足の国策協力団体・国防婦人会を指す（画・木俣武）

九章　日本少国民文化協会への結集　――童話「頸輪」

はじめに

日本少国民文化協会は、大東亜戦争開戦直後の昭和一六年一二月二三日（皇太子の誕生日）に発足し、総則に「本会ハ皇国ノ道ニ則リ国民文化ノ基礎タル日本少国民文化ヲ確立シ以テ皇国民ノ錬成ニ資スルヲ目的トス」（「設立趣意書・定款並諸規定」）と定める、児童文化分野の国策協力団体である。翌昭和一七年二月一一日（紀元節）、情報局講堂で開催された発会式へは、時の東条英機首相や谷正之情報局総裁が参列し、祝辞を述べるほど、政府も肩入れする団体だった。そして小川未明は、この団体の設立・運営に深い関わりを持っていた。

しかるに、未明と少文協の接点をつまびらかにした先行研究は、現状存在しない。というのも、昭和期の未明の行状自体、これまであまり注目されてこなかったからである。なかんずく、満州事変以降、十五年戦争下のそれは、研究の不毛地帯とさえ言ってよいだろう（注1）。

未明研究史における、かかる惨状は何故生まれたのか。大きく三つの理由が挙げられる。一つは、未明の代表作が大正期に集中しているため昭和期への関心が比較的薄かったこと（注2）、二つは、「日本児童文学の父」のあられもない戦争協力が無視ないし隠蔽の対象となっていたこと（注3）、三つは――前二項とも密接に関連するが――書誌が未整備だったことである。この内、一・二については研究者の怠慢（あるいは限界）。三に関しては、近年小埜裕二が、二冊の書誌本『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、平成二四年一二月）、『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（同、平成二八年六月）を編み、状況は飛躍的に改善しつつある（注5）。

本章は、少文協誕生の起点である「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）以来、未明が少文協の設立にどのようなかたちで関わり（一節）、協会内部でどのような言動を取っていたのか（二節）、また童話を紡いでいたのか（三節）、その全容を明らかにすることを目的とする。さらに、かかる未明の事績が、時の文壇・論壇の思潮と如何なる連関を有していたのか、大東亜戦争期の文学者の動向の包括的な素描を通して、両者の関係の究明を試みる（四節）。射程に入れる期間は、少文協が解散する（昭和二〇年一〇月）までの、おおよそ七年あまりだ。

それはすなわち、日中・大東亜戦争下の小川未明の足跡の一端を、跡付ける作業に他ならない。とりわけ、大東亜戦争下の未明の動向を探ることが、本章の主な課題となる。小埜裕

二の労作の助けを借りながら、研究の更地に、一石を投じたい。

一、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」から日本少国民文化協会設立まで

小川未明は、日本少国民文化協会の設立に、どのようなかたちで関わっていたのか。本節では、関係資料を紐解き、両者の関連を明らかにしたい。

少文協の起源は、昭和一三年一〇月の「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（『出版警察資料』昭和一三年八・九・一〇月合併号）にあると言われている（注6）。これは内務省警保局図書課の佐伯郁郎が中心に取りまとめた文章で、児童読物を扱う出版社に対し、各種改善を命じる指示書だった。

具体的には、「廃止スベキ事項」として、「附録（オマケ）」「卑猥ナル挿画」「内容ノ陰惨、猟奇的ニ渉ル読物」等を、「編集上ノ注意事項」として、「日本精神ノ確立ニ資スルモノタルコト」「生産ノ知識、科学知識ヲ与ヘルモノヲ取入ルルコト」「日支ノ提携ヲ積極的ニ協調スルヤウ取計ラフコト」等を、それぞれ挙げている。児童文化研究者の浅岡靖央は、この内、廃止事項については、「これが国家からの指示であることを度外視すれば、むしろ良識的と言えるものがほとんどである」（「戦争政策としての少国民文化」『子どもの文化』平成二二年七・八月）と評価する一方、注意事項については、「国民精神総動員の趣旨は相応に盛り込まれている」と、日中戦争下の「国民精神総動員運動」（昭和一二年八月～）の影響を指摘している。さしずめ、功罪相半ばするといったところか（注7）。

佐伯は、要綱を作成するにあたって、九名の専門家に協力を依頼した（注8）。未明・坪田譲治・百田宗治（ももたそうじ）・山本有三・城戸幡太郎（きどまんたろう）・波多野完治・佐々木秀一・西原慶一・霜田静志の九人である。未明の答申書は次のようなものだ。

> 児童教化によつて、社会の矛盾を除去し、善美の国家を建設したいと思ひます。国家の力にて、児童にとりて、有害なるものを除き、健全な教化に邁進したならば、今後十年にして日本精神を体得した立派な国民が養成されることによつて面目を一新するでありませう。私は善い世の中を造ることがせめて戦争に犠牲となつた幾百万の霊を慰める唯一の途であると考へてゐます。先ず最も今日の社会の悪趣味を反映した夥しい赤本類の絶滅です。そこには何等の高き理想がありません。
>
> 「児童雑誌に対する理想案」（『出版警察資料』昭和一三年七月）

ここで未明は、「善美の国家を建設」するという観点から、国家が出版物へ統制を加えることに、諸手を上げて賛成している。引用文で言及している「赤本類の絶滅」の他に、彼は「おまけといふものの廃止」や「敬神、忠孝、仁義、友愛、誠実、同情、憐憫、自己犠牲、協力奉仕等の日本精神の確立」も進言しているが、これらはいずれも、要綱の文面に反映されている点が確認できよう（注９）。

また内務省は、書類での指示のみならず、強硬策にも打って出た。この年の九月から一二月にかけて、漫画三〇数種を発売禁止処分、絵本三種を削除処分に付したのである（注１０）。さらに内務省は、要綱の理念を徹底させるため、出版業者・編集者の組織的編成を試みる。すなわち、日本児童絵本出版協会（昭和一三年一一月）、関西児童絵本卸業協会（同一四年四月）、青葉会（同一四年五月）といった団体を、内務省斡旋のもと、新設させたのである。他方、文部省は、昭和一四年五月、図書推薦制度を児童書の分野にまで拡大。良書の普及を目指した。

かくして、内務省が主導する児童図書の浄化措置は一定の進展を勝ち取ったわけだが、佐伯の回顧録「日本少国民文化協会の設立まで」（『新児童文化』昭和一七年五月）によれば、これは必ずしも満足のいく内容ではなかったという。というのも、内務省の業者指導は「徒らに追従するか、内心の狼狽を押しかくして傍観するかの何れか」を生むに過ぎなかったし、文部省の図書推薦は、既刊書に限定される故、「皇国民育成上から必要とする図書を、業者の自由裁量を超えて積極的に出版せしめるといふことは、この制度を以てしては不可能」だったからである。要は、指導が生ぬるい、ということだ。

そんな中、昭和一五年七月、第二次近衛文麿内閣が成立し、新体制運動が叫ばれるようになると、児童文化の領域でも、強力かつ一元的な指導機関樹立の機運が高まっていく。

昭和一五年九月には、未明・佐伯郁郎・百田宗治・山本有三・城戸幡太郎・波多野完治・阪本越郎の七名が発起人となり、神田如水会館で、「児童文化新体制懇談会」を開催。三〇人余りが参加した、この異様に出席者の多い懇談会で、未明は児童文化界の一致結束を訴えた。

私は児童文化に携はるものは皆が新しい出発点にかへり力を合せてその健全な発展を図るべきだと兼ね兼ね考へてゐた。現在の如き多種多様な団体の分立、混乱を極める無組織は自由主義社会の残滓に過ぎない。旧体制下においてはそれでもよかつたであらうが今はも早許されない。私達の新体制確立は一刻を争ふ要請である。新体制の精神に

徹してこの際各団体は即時一斉に解消して新しい一つの組織の下に結集し、我々に課せられた大きな使命の達成に捨身邁進すべきである。幸いに今日は各方面の指導的な人々が集つてゐる。ここで我々が協心戮力（りくりょく）して相図れば必ずや立派なものが作れると考へます。

「座談会　児童文化の新体制」（『日本読書新聞』昭和一五年一〇月五日）

児童文化界における「多種多様な団体の分立」は、「自由主義社会の残滓」であり、「各団体は即時一斉に解消して新しい一つの組織の下に結集」すべきというのが、未明の主張である。波多野がまとめた当懇談会の結論（「一、各種児童文化団体の大同団結は必須の大前提である」「二、各部門を共通一貫した指導理念の確立闡明が必要である」「一、如何に困難でも絶対にやり遂げねばならぬ」）も同様であり、一同その進路へ舵は切られた。

昭和一五年一〇月、大政翼賛会が発足すると、その文化部が、この組織化を担当することになる。同年一二月には、翼賛会本部へ関係者を集め、「日本児童文化協会（仮称）創立準備懇談会」を主催した。翌昭和一六年三月以降は、情報局に職務の管轄が移ったけれど、六月一〇日、「日本児童文化協会設立要綱案」を確定、八月一日、設立連絡会を開催、八月一三日、未明を含む創立委員七九名が決定、八月一八日、第一回創立準備委員会を開催と、新団体設立へ向けた手筈は、着実に整えられていく。

八月の二つの会合に関して、前述の佐伯文書「日本少国民文化協会の設立まで」には、「次いで、小川未明、村岡花子、山田徳兵衛氏等の少国民文化各分野の代表者十一名の協会設立に関する要望が述べられ」（八月一日）、「この委員会では、小川委員の発言によつて実行委員、分科委員の詮衡（せんこう）が当局に一任され」（八月一八日）と記述があるから、未明は新団体の運営に対して、意欲的な提言を行っていたようだ。八月一日には、「協会は協会の利益を計る利益団体でなく真に国家のための団体とならねばならぬ」（「児童文化に衆智　各界から意見を聴く」『朝日新聞』昭和一六年八月二日）と、国家の利益を最優先する旨の発言も行っている。なお、この八月の段階で、山本有三の提起により、「日本児童文化協会」から「日本少国民文化協会」への名称変更が、おおむね決定した（**注11**）。

滑川道夫の回想にも注目したい。少文協の文学部会幹事を務めた滑川は、設立準備会での未明の様子を、次のように書き記している。

少国民文化協会設立の会合などでしばしば目撃したところであるが「われわれ日本人

は、この非常時局にあたつて……」と卓を叩かんばかりに愛国的熱情を吐露して少国民文化建設を叫んでゐる氏の姿は、実に国民生活童話建設の先駆者といつた感銘を与へる。明治の小波氏に対比すべき童話の先覚者であり先駆者であり得たばかりでなく、今なほあくことなき前進に前進を続けようとする意欲は、全くたくましきかなである。

滑川道夫「現代の童話文学と童話作家」
（『少国民文学試論』帝国教育会出版部、昭和一七年九月）

少文協が設立された昭和一六年の時点で、未明は五九歳。還暦直前ながら、血気盛んであり、「愛国的熱情を吐露して少国民文化建設を叫んで」やまなかったようだ。

確かに、この時期の未明の座談会に目を通すと、「他の生長すべき部分を犠牲にして、今の日本のために尽して行くならば、それを信じて行くのが正しいと教へるのが、今の児童文化ぢやないかと思ふんです」（「座談会　児童文化の建設」『公論』昭和一五年一一月）などと発言しており、戦時下とは言え、児童を国家奉仕へ導くことにためらいがない。

また、少文協の庶務幹事を務めた二反長半（にたんおさなかば）も、戦後、少文協設立時の未明のエピソードを、著書に綴っている。二反長はある日、佐伯に速達で呼び出され、未明を新団体の隊列へ加えるよう、要請を受けたらしい（「君、大事業をやってくれんか。（中略）大御所の日本的童話の小川さんをひき出して旗をあげるんだ。児童文化団体の統合をやる」二一八・二一九頁）。児童文学界の権威たる未明を新団体の神輿として担ぐためである。

早速、二反長が高円寺の未明邸へ赴き、依頼したところ、未明はすこぶる乗り気だったという。

「君、君、これは、今、日本は大変な戦争をしているのだから文学者といっても、見物しているわけにはいかないよ。新体制によった統合団体をつくること、これはぜひやらなければいかん。わたしは大賛成だ、佐伯さんにそう伝えてくれ。もちろん君の少年文芸懇話会も解消ということになろうし、童話作家協会、それからも一つあったな。加藤武雄、吉田甲子太郎（きねたろう）らの少年少女作家画家協会、この三つが合併すれば、ほかは問題でない。が、童話作家協会がどうかな」

二反長半『児童文学の展望』
（大阪教育図書、昭和四四年八月、二二一・二二二頁）

この発言は、先に紹介した「座談会　児童文化の新体制」での発言と同趣旨であり、この時期、未明が、児童文化団体の統一に情熱を燃やしていた事実がよくわかる（注１２）。「しかし、先生の意気込みがすごいので、ほんとに私はおどろいた」（二二二頁）、「が、ともかく、私は小川先生の意気込みにうたれた」（二二三頁）と、二反長は当時の心境を回想している。

小川未明の力添えもあり、昭和一六年末、日本少国民文化協会は無事産声を挙げた。「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）から、「児童文化新体制懇談会」（同一五年九月）を経て、少文協建設へ至る過程で、未明は佐伯郁郎ら行政官僚と積極的に連携し、児童文化を統制する側に回っていたのである。二反長半の挿話から窺い知れる通り、ある面、未明の社会的影響力を知悉した役人に、利用されていた側面も否定できないだろう。

二、日本少国民文化協会での発言・行動　――打倒米英の扇動

それでは、自らも一肌脱ぎ、創建した日本少国民文化協会で、小川未明はどのような言動を取っていたのだろうか。本節では、この点をつまびらかにしたい。

まず、少文協の組織と事業について、あらましを述べる。冒頭「総則」を引いた通り、この団体は、「皇国ノ道」に則った「少国民文化」の確立を通して「皇国民ノ錬成」を目指す社団法人で、主管官庁は情報局と文部省。銀座三越百貨店の六階に事務所を構え、最盛期は一〇〇名超の職員と、約二〇〇〇名の会員を抱えていた（注１３）。浅岡靖央が指摘するように、まさしく、「戦中において唯一存在を許された公的な児童文化団体」（「１９４０年体制の児童文化」『別冊　子どもの文化』平成一八年七月）に他ならない。

主事業は、大きく分けて二つある。一つは、「少国民文化財」の統制だ。少文協には、文学・絵画・童話・遊具・紙芝居・舞踊・音楽・出版・演劇・映画・蓄音機レコードの一一部会――後に遊具から生活用品が分離して一二部会――があり、これらのジャンルの創作物および創作者を「皇国ノ道」、すなわち、大東亜戦争遂行へ資するよう教導することが、「設立趣旨の眼目」（小野俊一理事長「日本少国民文化協会の使命」『少国民文化』昭和一七年六月）だった（注１４）。しかし実際、配給を統御する権限は、紙芝居以外得られない。日本出版文化協会や日本玩具統制協会といった他の統制機関に、その権限を先取りされていたからである。

二つ目の事業は、各種イベントの開催である。「大東亜少国民大会」（昭和一七年一二月）、「全国少国民「ミンナウタヘ」大会」（同一七・一八年一一月）といった戦意高揚を煽る催

し物や、「少国民向きよい本の選び方展覧会」（同一七年四・六月）、「戦時下の玩具与へ方展覧会」（同一八年二・三月）といった良質の「少国民文化財」を紹介する展示会が、それに当たる（注15）。だが、戦局悪化に伴い、昭和一九年以降は、挺身隊による就業先・疎開地への児童慰問が、もっぱらとなった。

次に、少文協内部での未明の発言を見てみよう。少文協には『少国民文化』『少国民文学』『少国民文化協会報』という三つの定期刊行物が存在するのだが、未明はこれら全誌へ寄稿している。

『少国民文化』は少文協の中央機関誌（注16）。編集長は、百田宗治（ももたそうじ）（後に内田克己）が務めた。昭和一七年六月から同一九年一二月までの間、計三〇冊が刊行されている。佐伯郁郎の「機関誌「少国民文化」について」（『日本少国民文化協会報』昭和一八年一月一五日）によると、売れ行きはあまり芳しくなかったようだ（注17）。この内、未明は創刊号に童話「頸輪」を、昭和一八年八月号に感想「母は祖国の如し」を寄せている（注18）。前者の分析は次節へ譲り、ここでは後者の内容を検討したい。

「母は祖国の如し」は母性賛美の一文である。おかずの魚をあげる、夜鍋で子の靴下を縫う等、我が子のために犠牲的に尽くす母のエピソードを縷々紹介した後、未明は次のような言葉で文章を締めくくる。

かうして、少年は、母親の犠牲的な愛によつて大きくなりました。もし彼に、日本の悪口をいふものがあらば、顔を赤くして怒つたであらうが、また、彼の母について、何か批評するものがあつたら、彼は、直に躍りかかつてその者を打ち懲らさずには置かなかつたでせう。それ程、母は彼にとつて祖国の如く貴く、神聖で、関係は宿命で、絶対なものでありました。

「母は祖国の如し」（『少国民文化』昭和一八年八月）

ここでは、母の偉大さ、神聖さ、あるいは母子関係の宿命性が、祖国日本のそれと、オーバーラップさせられている。執筆時期はやや遡るが、この、母＝祖国の観念は、童話「頸輪」の母犬にも、図式通り形象化されており、両者を一連なりに崇める、未明の着想の反復性が確認できる。

ところで、当号の『少国民文化』の特集は「戦ふ日本母性」であり、「母は祖国の如し」はその巻頭へ掲載された一文である。未明以下、高須芳次郎「日本母性の伝統」、石井庄二

「たらちねの母」、暉峻義等「母の勤労」、竹内てるよ「母も戦ふ」、今井邦子「母性賛歌」、岡不可止「松陰の母」、佐藤得二「母に寄せて」といった、詩・歌・評論が載せられている。

紙幅の都合上、すべてを紹介するわけにはいかないが、これらの論考が、単純な母性の称揚に留まらない、国策利用的な視点を有していた点は注意が必要だろう。例えば、暉峻は「母の勤労としての子女の陶冶こそは、秀れたる科学技術、創意と工夫の原動力である」と、化学技術の進展に占める子育ての重要性を説いているし、佐藤は「それ（家族国家の実現――引用者注）に当つて先づ打破すべきは母性の狭い愛情である。その一家族にしか行亘らぬ差別的愛情を、せめて隣組の十数家族に平等に行交はせる事である」と、家族国家の構築に占める母性拡張の重要性を説いている。子育てや家族愛といった私的な事柄を、国家の大事へ直結させようとする姿勢が目に付く。

また、同時期には、日本文学報国会と読売新聞社の提携による「日本の母」顕彰運動が、誌面化（「日本の母（一～四九）」『読売新聞』昭和一七年九月九日～一〇月三一日）・書籍化（『日本の母』春陽堂、昭和一八年四月）されてもいた（注19）。少文協も後援団体の一つで、加藤武雄・坪田譲治・坪井栄ら、文学部会所属の作家を派遣している。「母は祖国の如し」は、銃後の母のあり方が焦点化する、このような時局と軌を一にした、母性敬仰のテキストであると言える。

『少国民文学』は少文協文学部会の機関誌。直接の編集は、吉田甲子太郎と二反長半が務めた。昭和一八年五月から七月までの間に、計三号が刊行された後、本誌の『少国民文化』へ統合されている（注20）。東苑書房の雑誌『学芸少国民』の編集権を譲り受け、改名の上、発行したものであるため、発行所は少文協ではなく東苑書房だった。部会誌という外郭性もあり、『少国民文化』と比べて、「編集上のいくらかの気軽さ」（滑川道夫「「少国民文学」の性格」『少国民文学7』エムティ出版、平成三年六月）はあったらしい。未明は同誌の六月号へ、感想「何故新人に至嘱するか」を寄稿している。

「何故新人に至嘱するか」は、新人童話作家への期待を記した一文である。巻頭言のため、文章は短い（引用は全文ではない）。

> 今の子供達が、ものに対する見方、考へ方が、全く新となつた時に、東亜新秩序の建設も、昭和維新も、真に達成されるのである。そして、ここに熱き意を致すものこそ、今の新人作家達でなければならぬと私は深く信ずる。なぜなら、新人等が、少国民文学の領野に来り、蹶起するのは、かかる高遠な理想があつてからであらう。今迄の多くの作

家達が金のためにもしくは名誉のために、筆を採りつつあつたのが、一に愛国心の迸りから書くところに、その貴さがあるのである。

「何故新人に至嘱するか」（『少国民文学』昭和一八年六月）

ここで未明は、新人作家が筆を取る動機は、「東亜新秩序の建設」「昭和維新」という「高遠な理想」故、すなわち「愛国心の迸りから」であると決めつけている。そうでない作家の存在を、言外に否定しているわけだ。吉田の「文学部会の雑誌のこと」（『少国民文化協会報』昭和一八年二月一五日）によれば、同誌発行の狙いは「新人のための修錬道場」をつくることにあった。未明は巻頭言の場で、かかる「道場」の方針を、高らかに宣明していたと言える（**注21**）。

『日本少国民文化協会報』は、少文協の会報。昭和一七年一一月から同一九年二月までの間、計一四号が発行された。この内、未明は昭和一八年一月一五日号に、感想「童話精神の昂揚」を寄せている。

「童話精神の昂揚」は、戦時下の未明の童話観が露わになっている一文である。それは次のようなものだ。

今日私達の信念と努力如何によつては、東亜新秩序の建設が案外早く実現さるものと考へられる。そのためには、国民感情の自然発露である童話が、国内に於ける思想の統一を画するに役立たなければならぬばかりでなく、もつて、東亜全体の人間性に強き紐帯を結ぶ具たらしめなければならぬことも単なる希望ではないのであります。この精神を信念を有するならば、童話文学作家たるもの、現下の自然現象に対して、もつと感情が鋭敏でなければならぬし、国策に対して、殉教者的態度に出なければならぬのであります。

「童話精神の昂揚」（『日本少国民文化協会報』昭和一八年一月一五日）

童話が「国内に於ける思想の統一を画するに役立」ち、「東亜全体の人間性に強き紐帯を結ぶ具」たること、言い換えれば、家族国家や「大東亜共栄圏」の実現に資することこそ、未明にとっては重要だった。童話作家は、「国策に対して、殉教者的態度に出なければならぬ」とまで、彼は断じている。

「赤い蝋燭と人魚」など、佳作を数多く著した大正一〇年前後の未明――あるいは全盛期

かもしれない――にとって、童話とは、作者が子どもの心へ立ち返り、自己の純真な夢を訴える文学形式に他ならなかったわけだが（注２２）、この段階では一転、「国策」という価値基準が前景化してしまっている。

さて、以上、未明が筆を揮った主要三誌を確認してきたが、少文協には、これらの定期刊行物の他に、協会が編集を担った単行本が別途存在する。すなわち、『九軍神の御霊に捧ぐ少国民作品集』（童話春秋社、昭和一八年七月）、『少国民詩』（帝国教育会出版部、昭和一九年二月）、『少国民科学』（国民図書刊行会、昭和一九年九月）、『少国民文化論』（国民図書刊行会、昭和二〇年二月）の四冊である。この内、未明は『少国民文化論』へ、感想「解放戦と発足の決意」を寄稿している。

「解放戦と発足の決意」は、未明の大東亜戦争観が刻まれた一文である。彼は次のような立場から、この戦争を正当化していた。

> この度の第二次世界戦争こそは、人類生存の目的に対して、見解を異にする、物心両者、世界観の対立である。故に、その勝敗の如きも、民族の興亡と文化の存滅にかかはる、重大なる結果をもたらすものである。思ふに、国家として、独立、自由の矜持なくんば、何の国家と称し、民族といひ得よう。我が日本は、実にそれ故に東亜後進諸民族のために、これまで搾取と暴戻（ぼうれい）を恣（ほしいまま）にしたる、米英の鉄鎖を断ち、永遠にその禍根を絶たんとして立上つたのである。
>
> 「解放戦と発足の決意」（『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）

「搾取と暴戻を恣にしたる、米英」に対する「東亜後進諸民族」解放の戦い――それが未明の抱く大東亜戦争観である。これはもちろん、当時施政者が喧伝していた「大東亜共栄圏」構想以外の何物でもない。

ともあれ、真珠湾攻撃以来、米英を打倒すべき横暴なアジアの支配者と見做す未明のスタンスは一貫していた。例えば、未明は開戦直後、「つひに世界史的転換期が来た。人類は長い間、思想に経済に英国の支配下にあつた。この鉄鎖を断ち切る暁は、思ひきり明朗となる。我が国の文化とて、幾十年自己の本領を忘れて米英的だつたことであらう」（「自主的文化」『読売新聞』昭和一六年一二月一五日）と述べ、大東亜戦争が米英の世界支配の軛（くびき）を断つ画期となる由、高らかに宣言している。それだけ、米英を敵視しているのである。この辺りは、次節で検討する、童話「頸輪」の世界観と通底するものがあろう。

行動面では、少文協発足当初から、未明は島崎藤村・北原白秋・佐藤紅緑（こうろく）らと、文学部会の「相談役」を務めた（「役員名簿」）。発会式直後に、全国二五都市で開催された、少国民文化宣揚講演会（昭和一七年三月二一～三〇日）へは、弁士として参加。武井武雄らと、青森・秋田・山形の三県を回っている（「協会の活動」『少国民文化』昭和一七年六月）。同年一〇月の文学部懇親大会では、前述の藤村・白秋・紅緑ら六氏とともに、「先輩功労者」として表彰され、感謝状と記念品の贈呈を受けた。未明は「先輩代表」として、謝辞を述べている（「協会の活動」『少国民文化』昭和一七年一二月）。昭和一九年一〇月には、久留島武彦と「第一回少国民文化功労賞」を受賞。情報局総裁賞と金一〇〇〇円を受け取った（「協会特報」『少国民文化』昭和一九年一一月）。

以上、日本少国民文化協会における、小川未明の発言と行動の軌跡を辿ってきた。すなわち、未明は、少文協の定期刊行物全誌（『少国民文化』『少国民文学』『日本少国民文化協会報』）と、協会が編集に携わった単行本『少国民文化論』へ、感想・童話を寄せており、それらはいずれも、「聖戦」遂行下の祖国日本を嘆賞する、時局色の強い内容を持っていたのである。一方、協会での行動は、年齢の問題もあってか、限定的だ。各種表彰は目立つが、少文協内部の実務を、第一線で担っていたわけではない。

三、童話「頸輪」――アジアを統べる母

続いて、議論の俎上へ上げなければならないのは、『少国民文化』創刊号（昭和一七年六月）へ掲載された、童話「頸輪」である。この作品は、小川未明が日本少国民文化協会の出版物へ著した唯一の童話であり、前節で紹介した感想「解放戦と発足の決意」（『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と同様、未明の大東亜戦争観が露わになっている点で、極めて興味深い内容を持つ。

まずは、書誌を簡単にさらっておこう。本作は初出後、同年一一月発行の童話集『僕はこれからだ』（フタバ書院成光館）へ初収された。しかしその後は、近年小埜裕二の編んだ『小川未明新収童話集』第六巻（日外アソシエーツ、平成二六年三月）へ採録されるまで、全集類を含め、一切活字化されていない。追って論じる通り、大東亜戦争を欧米列強からのアジア解放の戦いと位置付ける本作は、戦後の言語空間において、忌避ないし隠蔽の対象となっていたのだろう。

このような事情も関連してか、児童文学研究分野における「頸輪」の作品論は、何一つ残されていないのが現状である。管見の範囲では、戦中戦後、行動をともにした童話作家仲間

の菅忠道・関英雄・二反長半（にたんおさなかば）と、戦時中「少国民」の側にいた山中恒が、戦後、断片的に回顧・言及しているのみである。例えば、菅は「未明は、情熱と信念をもって、具象的な童話の言葉で、戦争に奉仕することを自分自身の使命としていた。ことに太平洋戦争の段階では、アジアの解放を願って、聖戦に協力を惜しまなかった。日本少国民文化協会の機関誌「少国民文化」創刊号の「頸輪」には、その「解放戦」への願いが、はげしい激情をこめて、象徴的に描かれていた」（『日本の児童文学　増補改訂版』大月書店、昭和四一年五月、三〇二頁）と述べ、「聖戦」推進者たる未明の、アジア解放への「願い」が注入された作品として、本作を読み解いている。

では、その「願い」は、具体的にどのようなかたちで描出されていたのだろうか。それは菅の「象徴的に描かれていた」という指摘と関わる。

本作には、不慮の事故から、首に時計の皮紐を固く結ばれ、発狂寸前の「痩せた小犬」と、犬殺しと果敢に戦うほど勇猛な「黒色の日本犬」が登場する。両者はそれぞれ別個の犬として登場し、関係は不明なのだが、作品末、主人公・信一（国民学校四年）の弟・武夫（同二年）の情報によって、母子であることが判明する。それを知った信一は、母犬が子犬の皮紐を噛み切るであろうことを予想し、大歓喜した。『日本の児童文学』に直接の記述はないが、菅の言う「象徴」とは、この母子関係に、日本とアジア諸国の関係がアナロジーされているという意味だろう。つまり、母犬が子犬を救うように、皇国日本が欧米列強の植民地支配に苦しむアジア各国を解放へ導くという類比である。

もっとも、このような着想は、菅や筆者の独創ではない。関・二反長・山中の三人も、ほぼ同種の見立てを行っている（**注23**）。二反長は「きつい頸輪でしめられた犬を大国に侵略されたジャバ、スマトラになぞらえ、これらの民族が自分でその頸輪を断ち切れない運命にあり、その頸輪をたち切ってやる母犬を、日本としてヒユ表現しているのである。私は、氏から直接その意図を聞いて、はじめてうなずいた次第だったが、氏は聖戦と称した日本の侵略（？）（ママ）をそのように信じ切っていたと見えた」（『児童文学の展望』大阪教育図書、昭和四四年八月、二一六・二一七頁）と記し、本作には、頸輪で苦しむ子犬＝大国に侵略されるジャワ島・スマトラ島、頸輪を断ち切る母犬＝侵略を止める日本という「ヒユ表現」が存在する旨、指摘している。しかも二反長は、未明から「直接その意図を聞い」たのだそうだ。

だが、これらの先行論は、主旨には同意できるものの、具体的なテキスト分析が一切行われていない欠点を持つ。つまり、話がおおむね総論的で、実際、どのようなアナロジーが、どのような思想的背景のもと、働いているのか、定かでないのである。

よって本論では、先行論を踏まえつつ、本作の母犬・子犬表象の内容と意味を、今一度掘り下げたい。以下、子犬の影に関する叙述である。

> ちやうど、また道の乾いた土の上に映る、哀れな動く灰色の影は、青々とした太洋に横はる、ジヤバ、スマトラの形によく似てゐました。これ等の島々は、寄生したオランダや、イギリスや、アメリカのために、生血を吸ひ取られて、はかなくかげろふの如く、渺茫（びょうぼう）とした海原の裡に、消えかからうとしてゐるのでした。この民族とこの小犬は、共に同じ運命であることを信一に思はせたのでした。「蘭印は、自力で、鉄の箍（たが）を切断できないし、小犬は、自分で、頸に巻きついた、皮紐を噛み切ることが出来ないのだ」

子犬の影は、オランダ・イギリス・アメリカに「生血を吸」われる、ジャワ島・スマトラ島といった島々の形に「よく似て」おり、子犬とこれら南洋諸島の民族は「共に同じ運命」なのであった。括弧内は信一の心中の声だが、ここでも彼は、「自分で、頸に巻きついた、皮紐を噛み切ることが出来ない」子犬と、「自力で、鉄の箍を切断できない」オランダ領東インドを、同一視している。

一方、母犬について信一は、作品末、「アジヤの鉄環を断ち切つたのは、アジアのお母さんである日本だ！　その母犬は、きつと皮紐を噛み切つてやるだらう」と独白し、「皮紐を噛み切」る母犬と、「アジヤの鉄環を断ち切」る「アジアのお母さん」日本のイメージを、二重写しにしている。子犬＝欧米に植民地化されるアジア諸国、母犬＝アジア解放の救世主・日本という類比（アナロジー）は、間違いなく存在するのである。

では、犬の母子へ、このようなアジアの指導・被指導関係を仮託する発想の基底にあるものは何か。言うまでもなく、それは、大東亜戦争の大義である「大東亜共栄圏」の理念に他ならない。折しも、時の東条英機首相は、昭和一七年一月の施政方針演説で、「大東亜共栄圏建設の根本方針は、実に肇国（ちょうこく）の大精神に淵源するものでありまして、大東亜の各国家及び各民族をして各々其の所を得しめ、帝国を核心とする道義に基く共存共栄の秩序を確立せんとするに在るのであります」（『大東亜戦争に直面して　東条英機首相演説集』改造社、昭和一七年二月、五・六頁）と述べ、大日本帝国を中核とする、アジアの再編成を謳っていた（**注24**）。本作の母子表象は、かかる国是とパラレルの関係にあり、その意味で、極めて同時代的かつ政治的な色彩を帯びているのである。

「大東亜共栄圏」の理念は、他の作中人物からも見て取れよう。本作冒頭には、「いまま

で、いぢめられてゐた（アジアの――引用者注）国々は、日本を有難がつて、喜んでゐるだらうな」という信一の発話に対して、次のように応答する姉の姿が捉えられている。

「さうですとも、自分達の国を取返してもらつたんですもの、急にのびのびと手足が伸ばされて夢かと思つてゐるにちがひありません。全く生れ変つたやうに、生々としたでせうね。それも、同じアジヤ人である日本のお蔭です。長い間アジヤが英米に苦しめられたのを、日本は我慢に我慢してゐたが、つひに勘忍袋（ママ）の緒が切れて起ち上つたからです。そのはち切れた勢が、このやうに大陸の方々へ飛火したのですから、もう英米だつて手がつけられないでせう。これから、ぐんぐんと反対にアジヤは成長して、新しい人類の誇りとなるやうな歴史を創り出すのです」と、姉さんは、頬を美しく紅くしながら、頼母しさうに、弟をご覧になりました。

ここで姉は、「いままで、いぢめられてゐた」アジアの国々に「自分達の国を取返して」あげる存在、そしてアジアをかつてない「成長」へ導く存在として、日本を位置付け、誇っている。前述の日本＝「アジアのお母さん」という定義と同様、ここにも、日本をアジアの指導者と見做す「大東亜共栄圏」のイデオロギーが露呈している。そして、このイデオロギーは、ひとり未明のみならず、『少国民文化』創刊号という言語空間に横溢していた(注25)。

「聖戦」の大義に感応し、頬を紅潮させていたのは、姉ではない。当の未明自身であったのだ。「頸輪」発表の前月、未明は雑誌の座談会で、次のような発言を行っている。

然し今日、日本が与へられた東亜共栄圏の建設といふものは、これは民族が総がかりでもつて作らなければならぬ一つの理想だと思ひます。それは東亜共栄圏をつくる一つの理想、何故にアジヤといふものが互に提携して行かなければならないか、それからアジヤにはまた共通の理念といふものがありますが、それからこのやはり日本が今このアジヤ共栄圏を作るために、どれだけの苦しみを為しつつあるかといふこと、さういふことが、僕は各作家の立場によつて深さが違つて来ると思ひます。兎に角まあアジヤの共栄圏を作るといふ課題があり、それを実現せんとすることは我々の使命とされて居る。総ての教育は、その同じ方向へ、同じ目的に向つて進むべきものと思ひます。

「小川未明先生に訊く　創作童話の座談会」（『新児童文化』昭和一七年五月）

「大東亜共栄圏」の正義性を、揺るぎなく確信する未明（注26）。未明にとって、「大東亜共栄圏」とは、「民族が総がかりでもつて作らなければならぬ一つの理想」であり、「総ての教育は、その同じ方向へ、同じ目的に向つて進むべきもの」なのであった。

したがって、教化の対象は、当然児童にも向かっている。前述の童話集『僕はこれからだ』の序文「子供達に」では、「アジア民族」を苦しめる米英への憎悪を煽り、国家奉仕を指嗾する未明の姿が確認できるし（「いま、日本が先頭に立つて、暴慢な英米と戦ひ、世界秩序の建直しに邁進してゐることをご存じでせう。もし、さうしなかつたならば、私達のアジア民族は、彼等のために苦しめられて、終には身動きすら出来なくなる運命にあつたのです。さう聞くならば皆さんは、歯ぎしりをして、早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか」）、童話「太平洋」（『少国民の友』昭和一九年四月）の語り手は、「アジアの国々」を植民地支配する米英を「おそるべき悪魔」とまでラベリングしている（「大東亜戦争は、米英にくるしめられてゐる、アジアの国々を、日本が助けて、そのおそるべき悪魔の手からすくひ出すためにおこつたものです」）。

当時、「少国民」だった山中が、「未明はこの時期、如何なる思い違いや、誤認があったにせよ、疑いもなく天皇制ファシストの走狗だったのである」（『撃チテシ止マム』辺境社、昭和五二年三月、一三〇頁）と手厳しく指弾するのも、あるいは仕方がないことかもしれない。

このように、童話「頸輪」の子犬と母犬には、欧米に屈従を強いられるアジアと、その解放者たる日本の姿が、存分に仮託されていた。その露骨とさえ言える隠喩は、小川未明の「大東亜共栄圏」への心酔が、もたらした結果に他ならない。『少国民文化』創刊号という磁場で、未明は大東亜戦争の大義をためらいもなく鼓吹し、国策協力者の相貌を露わにしていたのである。

四、文学者と大東亜戦争 ――「大東亜共栄圏」構想の魔力

さて、ここまで確認してきたように、大東亜戦争下の小川未明は、官許の御用児童文化団体・日本少国民文化協会で健筆を揮う、国策協力者以外の何者でもなかった。筆者は暴露主義的・糾弾主義的に未明を批判する立場には立たないけれど――もとより、その資格はない――、それは厳然たる事実である。しかし、当時、国策に与した文学者がひとり未明のみではないことも、また事実であろう。本節では、大東亜戦争下の文学者の動向を包括的に素描し、文学史の主潮を視野に収めることで、未明の国策協力の文学史的位置を明らかにしたい。

昭和一六年一二月八日の大東亜戦争開戦は、多くの日本人に、ある種の解放感をもって受

け入れられた。石油の全面禁輸や資産凍結を伴う、折からの経済封鎖――いわゆる、ＡＢＣＤ包囲網――は、日本人に祖国存亡の危機を意識させるとともに、アメリカ・イギリスを中心とした連合諸国に対する憎悪を掻き立てていたからである。

帝国海軍の真珠湾奇襲作戦は、国民の間にわだかまるこの鬱積（フラストレーション）感を、一挙に吹き飛ばすものだった。ドナルド・キーンが、「真珠湾攻撃および米英に対する宣戦布告を知って、大多数の日本人は快哉を叫んだ。それは教育のない者も、知識人も同じだった」（『日本人の戦争』文春文庫、平成二三年一二月、四四頁）と指摘するように、一二月八日、大衆・知識人を問わず、ほとんどすべての日本国民は、ラジオから流れるアメリカ太平洋艦隊撃滅の報に、内心、いくばくかの不安を感じながらも、拍手喝采を送ったのである。

現在、「一二月八日」に関する文学者の記録は数多く残されているが、これらの文章に貫流するものも、ある種の清々しさである（注２７）。例えば、伊藤整は、当日の印象について、次のように記述している。

> 日米交渉が難関にぶつかつてゐることは、数日来の新聞で読んでゐた。いづれ避けがたい衝突が来て、日本が太平洋でアメリカと相撃つ日があるだらう、といふ予測は、私の胸に国難といふ文字どほりの感じを与へてゐた。（中略）ところが、この日、我海軍航空隊が大挙ハワイに決死的空襲を行つたといふニュースを耳にすると同時に、私は急激な感動の中で、妙に静かに、ああこれでいい、これで大丈夫だ、もう決まつたのだ、と安堵の念の沸くのをも覚えた。この開始された米英相手の戦争に、予想のやうな重つ苦しさはちつとも感じられなかつた。方向をはつきりと与へられた喜びと、弾むやうな身の軽さとがあつて、不思議であつた。
>
> 伊藤整「十二月八日の記録」（『新潮』昭和一七年二月）

ここで伊藤は、真珠湾攻撃の報に接し、「方向をはつきりと与へられた喜びと、弾むやうな身の軽さ」を感じたとする、晴れやかな心境を綴っている。開戦に伴うこのような解放感は、伊藤のみならず、小林秀雄・河上徹太郎・竹内好・武者小路実篤・尾崎一雄等、多くの文学者が筆写しており、当時の作家たちの最大公約数的な心境と言ってよいだろう（注２８）。二節で若干紹介したように、未明もまた、同様の感懐を披歴している（注２９）。

開戦は、詩人たちをして、愛国詩・戦争詩の創作へと突き動かした。高村光太郎の次のような詩は、開戦初期の代表的作品である。この作品に刻印された時代性を正しく理解するた

めに、中村武羅夫の随想と併せて読んでみたい。

記憶せよ、十二月八日。／この日世界の歴史あらたまる。／アングロ・サクソンの主権、／この日東亜の陸と海とに否定さる。／否定するものは彼等のジャパン、／眇（びょう）たる東海の国にして／また神の国なる日本なり。／そを治しめたまふ明津御神（あきつみかみ）なり。／世界の富を壟断（ろうだん）するもの、／強豪米英一族の力、／われらの国に於いて否定さる。／われらの否定は義による。／東亜を東亜にかへせといふのみ。／彼等の搾取に隣邦ことごとく痩せたり。／われらまさにその爪牙（そうが）を摧（くだ）かんとす。／われら自ら力を養ひてひとたび起つ、／老弱男女みな兵なり。／大敵非をさとるに至るまでわれらは戦ふ。／世界の歴史を両断する／十二月八日を記憶せよ。

高村光太郎「十二月八日」（『婦人朝日』昭和一七年二月）

今、正に時は至つたのである。自ら戈（ほこ）を取るも取らざるも、我等一億の蒼生が聖旨を奉戴して鉄の結束を以て起つべき時は、遂ひに来たのである。東亜制覇に対するアメリカの野望を粉砕すると同時に、米英の飽くなき搾取に虐げられて来たアジヤ百年の屈辱の歴史を覆すべき時は来たのである。アジヤを蚕食（さんしょく）してゐる米英の勢力を、アジヤの天地から駆逐して、アジヤの民を解放し、アジヤの天地をして、真にアジヤ民族のものたらしむべき時は、遂ひに来たのである。この使命は、我等日本国民の上にかけられたものであり、この尊くして聖なる使命完遂のために、聖戦の火蓋は切られたのである。

中村武羅夫「日米英開戦と文学者の覚悟」（『新潮』昭和一七年一月）

高村の詩は、一二月八日の偉大を歌い上げた記念碑的作品だが、注目するべきは、彼が欧米列強（白色人種）をアジアの侵略者と見做し、本戦争の意義を、かかる外敵の排除に見出している点であろう。「東亜を東亜にかへせ」とは、まさしくその謂いである。そして中村もまた、「アジヤを蚕食してゐる米英の勢力を、アジヤの天地から駆逐して、アジヤの民を解放し、アジヤの天地をして、真にアジヤ民族のものたらしむ」こと、すなわち、アジアの民族自決の実現こそが、本戦争の「聖なる使命」であると主張している。

つまり、端的に言えば、両者に共通するのは、アジア人のためのアジアを求める志向である。周知の通り、大東亜戦争の大義は「自存自衛」と「大東亜共栄圏建設」の二枚看板だが、高村・中村の両テキストは、この戦争を、西洋諸国を相手取った、アジア奪還のための神聖

な戦いと位置付けている点で、極めて国策呼応的と言える。筆者の言う時代性とは、これだ。

高村に限らず、開戦後の詩人たちは、おしなべて勇ましい。例えば、三好達治は、「ああその恫喝／ああその示威／ああその経済封鎖／ああそのＡＢＣＤ線／笑ふべし　脂肪過多デモクラシー大統領が」（「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」『捷報いたる』スタイル社、昭和一七年七月）と、アメリカのルーズベルト大統領を、その身体的特徴をあげつらいながら痛罵しているし、自身、渡米経験を持ち、英文詩の著作もある野口米次郎は、「米英撃滅、時は今、／罪膺懲（ようちょう）の楽は鳴る。／ああ聖戦の、火は燃える／搾取陣営、影薄し」（「米英撃滅歌」『八紘頌一百篇』冨山房、昭和一九年六月）と、かつての留学先の「撃滅」「膺懲」を叫んでいる。斎藤茂吉も、老齢ながら、「にくにくし敵にむかひて甚猛の能動戦の時はいたれる」（「戦運」『朝日新聞』昭和一九年一〇月一七日）と、「にくにくし敵」に対する「能動戦」の必要性を吟唱した。皆一様に、胸中に沸き立つ愛国の情を詩化していたのである。

そして、このような文学者の内発的・外発的な愛国心をひとつに糾合した組織が、昭和一七年五月に結成された、日本文学報国会である。この団体は、目的に「本会ハ全日本文学者ノ総力ヲ結集シテ、皇国ノ伝統ト理想トヲ顕現スル日本文学ヲ確立シ、皇道文化ノ宣揚ニ翼賛スルヲ以テ目的トス」（「定款」）と定める社団法人で、会長は徳富蘇峰。約三〇〇〇名の会員が集った、文学者の一大国策協力機関である。

中里介山と内田百閒の他、ほぼすべての作家が参集したとされ、旧プロレタリア文学陣営では唯一孤塁を守っていた中野重治や宮本百合子でさえも入会している。その経歴から、参加を拒まれることを恐れた中野は、入会を斡旋してくれるよう、菊池寛に手紙で懇願し、この哀訴の書は後に流出しているが、これなどは仕事を得るためとは言え、実に痛々しい内容を持つ（**注３０**）。中野にとっては、消し去りたい過去であろう。

言うまでもなく、同会の狙いは、文学並びに文学者を国策に沿うかたちで、統制することにあった。領域は異なれど、その点、日本少国民文化協会と同様である。発会式の際、内閣総理大臣兼大政翼賛会総裁の東条英機は、「今後大政翼賛、臣道実践の理念に基きまして国民運動の一翼ともなつて政府の文学に対する政策に協力し益々文学報国の為に強く尽瘁（じんすい）せられることを強く御期待申し上げ」（「祝辞」『日本学芸新聞』昭和一七年六月一五日）ると祝辞を述べているが、同会において、文学者は、「大政翼賛、臣道実践の理念」に殉じ、「文学報国」を実践するよう、強く求められていたのである。要は、ペンをもって、国に尽くせということだ。

かくて、同会では、機関紙『日本学芸新聞』『文学報国』を発行する他、大東亜文学者大

会の開催、文芸報国講演会の実施、『愛国百人一首』『国民座右銘』の選定、『辻詩集』『辻小説集』の発行（建艦献金運動）等、様々な奉仕事業を展開することになる。

なかでも、東京と南京で計三回開催された、大東亜文学者大会は、日本文学報国会最大のイベントと言ってよい。この大会には、中国・満州・蒙古・朝鮮・台湾といった「大東亜共栄圏」の国々の文学者が一同に集い、「大東亜精神の樹立」「大東亜精神の強化普及」等の議題が議論された。第一回大会で、横光利一は、「大東亜精神の樹立並にその強化徹底を期してわれ等茲（ここ）に根本を論じ、緊急の課題を議し、不動の信念を確立し得たるは真に欣快に堪へざる所なり。（中略）全東洋の運命もまたこの大戦の完遂にかかれり。われ等アジヤの全文学者、日本を先陣とし、生死を一にして偉大なる日の東洋に来らんがため力を尽さむ」（「大会宣言」『日本学芸新聞』昭和一七年一一月一五日）と、大会宣言を発している。全会一丸となって、「大東亜共栄圏」構想へ挺身していたのである（注３１）。

相前後して、文学者の戦地派遣も、活発化するようになる。ペン部隊に代表される、日中戦争時の従軍は、おおむね、作家の自発性に参加の有無が委ねられていたのに対し、大東亜戦争期のそれは、国民徴用令に基づく強制だった。作家たちは「白紙」によって招集され、軍属として、東南アジア諸国、すなわち「大東亜共栄圏」の国々へ出立せしめられたのである（注３２）。

人によってバラつきはあるが、徴用の期間は半年から数年。今、著名なところを記せば、マレー方面の井伏鱒二・北川冬彦・海音寺潮五郎、ビルマ（ミャンマー）方面の高見順・小田嶽夫・清水幾多郎、フィリピン方面の火野葦平・尾崎士郎・三木清、ジャワ・ボルネオ（インドネシア）方面の阿部知二・北原武夫・大宅壮一、海軍関係の石川達三・丹羽文雄・坪田譲治といった名前が挙げられる。文学史上、「南方徴用作家」と呼ばれる一群が、ここに誕生したのである。

彼らの使命は、南進した日本が占領下に置いた「大東亜共栄圏」の国々で、「文化工作」を実践することにあった。文化工作とは何か。それは、①日本語の普及等を通して現地住民を皇民化する対占領地宣伝、②機関紙の発行等を通して戦意と聖戦思想を自軍兵士に植え付ける対軍隊宣伝、③英語放送等を通して敵国に情報戦を仕掛ける対敵宣伝の大きく三つに大別される（注３３）。①の宣撫活動が最重要ミッションだ。

現地滞在中、あるいは帰還後、徴用作家たちは、南方での体験を基にした小説や紀行文を、数多く著した（注３４）。なかには、山本和夫『花咲くビルマ戦線』（成徳書院、昭和一八年七月）、中島健蔵『緑のマライ』（同光社、昭和一九年五月）、神保光太郎『なかよしだいと

うあ』（国民図書刊行会、昭和二〇年一月）のような、児童向けの読み物もあった。神谷忠孝によれば、これらのテキストはいくつかのタイプに分類できるものの、数の上でもっとも多いのは、「大東亜共栄圏の思想を信じ、体制側の眼によって都合のよい部分だけを報道するもの」（「南方徴用作家」『北海道大学人文科学論集』昭和五九年二月）であるという。未明が童話「頸輪」で心酔したように、「大東亜共栄圏」構想は、信じるに足る正義として、多くの文学者を魅惑していたのである。

このイデオロギーを思想的な立場から下支えしたのが、京都学派の知識人たちである。俗に「京都学派四天王」と呼ばれる、高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高の四名は、雑誌『中央公論』誌上で三回にわたる座談会を開催（**注35**）。その様子は後に、『世界史的立場と日本』（中央公論社、昭和一八年三月）へまとめられた。

議論の核心は、大東亜戦争を、西洋中心の世界秩序を塗り替える一大決戦と位置付け、東洋の雄・日本の変革者としての役割＝「世界史的立場」を説いた点にある（**注36**）。彼らによれば、世界史を突き動かす原動力は、ドイツの歴史学者・ランケが言うところの「モラリッシェ・エネルギー」（道義的生命力）であり、日本人にはこれが備わっているとされた。つまり、噛み砕いて言えば、道義に満ちた日本人には西欧の政治的・経済的・文化的覇権を粉砕し、新たな世界秩序を打ち立てる力がある、という話である。読者にしてみれば、大変聞き心地のよい日本人論と言えよう。事実、この座談会は、好評をもって迎えられた。高坂らは、刻下の国策である「大東亜共栄圏」構想を正当化する論理を、ジャーナリズムの場で宣布していたのである。

これ以外にも、当時の文壇・論壇では、西欧近代に対し、日本ないしアジアの優位性を見出そうとする議論が散見される。小林秀雄・亀井勝一郎ら、『文学界』同人が主宰した座談会「近代の超克」（『文学界』昭和一七年九・一〇月）――西谷・鈴木ら、京都学派の知識人も参加した――は、その代表例であろう。また、青年たちの心を奪った、保田與重郎・蓮田善明ら、日本主義のイデオローグの著作も、同じ系譜に位置付けられ得る。紅野謙介が、「ヨーロッパ、そしてその延長としてのアメリカに対峙し、これを超克、統合する主体としてのアジアという思想図式に多くの作家も思想家も組み込まれた」（「太平洋戦争前後の時代」『コレクション　戦争と文学』別巻、集英社、平成二五年九月）と指摘するように、この時期、文学者・知識人の間では、ヨーロッパ対アジア、あるいは西洋対東洋という対決構図が、現実的（アクチュアル）な時代認識として浸透していたのである。

かかる状況下にあって、表立って国策に異を唱える文学者――勇気ある非国民――は、ほ

とんど皆無だった。しかし、にもかかわず、当局に危険分子と見做された者は、徹底的な弾圧・監視の対象とされた（注３７）。例えば、獄中の夫・宮本顕治を獄外から支援していた宮本百合子は、開戦の翌日に検挙され、翌年意識不明で倒れるまで、約七ヶ月間拘禁されている。半殺しである。あるいは、谷崎潤一郎は、小説「細雪」（『中央公論』昭和一八年一月～）の連載を、軍部の介入によって、中止せしめられた。投獄と発禁が縦横無尽に駆使され、言論統制は一段と強まった、と言える。

事態が深刻なのは、このような言論統制に与する勢力が、当の言論界内部にも巣食っていた点であろう。当時、『中央公論』の編集長を務めた黒田秀俊は、後に「「文芸世紀」のＮ氏や国文学の藤田徳太郎氏、短歌の太田水穂氏、俳句の小野蕪子（ぶし）氏などが、しきりに密告や摘発をやっているというううわさの流れたのもこのころのことであった」（『知識人・言論弾圧の記録』白石書店、昭和五一年一月、二二一頁）と回顧し、文壇・歌壇・俳壇・国文学界で暗躍した、密告者（スパイ）の存在を示唆している。すなわち、同業者を官憲に売り渡す、獅子身中の虫が跳梁していたのである。上からの弾圧と下からの相互監視によって、自由な言論は完全に枯渇せしめられた――そう断言して差し支えない。

もちろん、戦時下の文学者の動向を、翼賛か抵抗かという二分法で裁断することは、適切ではないだろう。白か黒かで割り切れないテキストを残した、太宰治・坂口安吾・花田清輝のような事例も存在するからである。また、正面から政府批判は行わずとも、日記で「近年軍人政府の為す所を見るに事の大小に関せず愚劣野卑にして国家的品位を保つもの殆無し。歴史ありて以来時として種々野蛮なる国家の存在せしことありしかど、現代日本の如き低劣滑稽なる政治の行はれしことは未曾（いまだかつ）て一たびも其例なかりしなり」（「断腸亭日乗」昭和一八年六月二五日）などと軍部批判を展開する、永井荷風のような作家もいるにはいた（注３８）。鵺的な国策協力者や隠微な消極的抵抗者の姿は、少数ながら認められるのであって、その事実は無視すべきではない。

とは言え、時の多数派はやはり、自発的に国策と合一化する、積極的国策協力者のグループであろう。先にも紹介したように、この時期、多くの文学者は、「大東亜共栄圏」構想に魅惑されていた。一例として、金子光晴が少女雑誌へ寄せた詩を見てみたい。

アジヤは一つの家族。／いたいけな妹ビルマは／永らく別れて他人の家で／つらい悲しい日を送つた。／待ち焦れた晴れの日、／独立の日がビルマにも来た。／燦（さん）たる孔雀の旗が／瑠璃の空を飛翔（とべ）る日が。／ビルマの娘たちは、茴香（ういきょう）や／睡蓮の花をつんで

捧げる。／みほとけの前に、又、たよる肉身（ママ）／ををしい日本の兄の胸に。

金子光晴「ビルマ独立をうたふ」（『日本少女』昭和一八年一〇月）

一篇は、日本とビルマ（ミャンマー）を兄妹――「ををしい」兄と「いたいけな妹」――に準え、「アジヤは一つの家族」であることを歌う詩であるが、どこか既視感はないだろうか。そう、この詩はまさしく、犬の母子に日本とアジア諸国の指導・被指導関係を仮託する童話「頸輪」と、内容的に、相似形をなす作品なのである。戦後長らく「抵抗派詩人」として評価されてきた金子でさえ、このような詩を詠んでいるところに、「大東亜共栄圏」構想の魔力の強度が窺えよう。

無論、後世を生きる私たちが、今現在の時点から、「大東亜共栄圏」構想を批判することは容易い。それは日本の侵略を正当化するための方便に過ぎない――そう一笑に付す向きが大半かもしれない。しかし人間は誰しも、自分を取り巻く時代状況から、決して自由ではいられない。戦時下を生きる多くの文学者にとって、アジア解放という崇高な理想を掲げるこの思想は、大義ある思想として、魅力的に映ったのである。

以上見てきた通り、大東亜戦争下の文学史の主潮は、日本文学報国会という一元化された御用文学団体のもとで、「聖戦」勝利を叫ぶ、積極的国策追従の流れであった。そして、本戦争を「聖戦」たらしめる思想的バックボーンには、東条英機内閣が呼号した「大東亜共栄圏」の理念があり、論壇においては、京都学派の知識人たちが、この理念を正当付ける理論的枠組みを提供していた。高村光太郎・中村武羅夫・横光利一・金子光晴以下、多くの文学者は、この理念に同調し、同調しない（素振りを見せた）者は、官憲の弾圧の対象になるか、同業者の密告の対象となった。半殺しにされた宮本百合子は、その悲劇的事例である。

作家を国策協力者という汚名から救抜したいがためか、日本の近代（児童）文学研究では、作家の言説の端々から抵抗の痕跡を見つけ出そうとする――あるいは、それを過大に評価しようとする――涙ぐましい努力が、ともすれば散見されるけれど、こと小川未明に限って言えば、そのような努力は無駄である。二・三節で紹介した感想や童話に露見している通り、大東亜戦争下の未明は、「大東亜共栄圏」構想の熱烈なる信奉者として、時の流行思想（トレンド）を謳歌し、国策協力の第一線に立っていたのである。客観的に見て、救抜の余地はない。

小括

以上、本章では、大東亜戦争期の小川未明の動向を知るべく、彼が児童文化分野の国策協

力団体である日本少国民文化協会と、どのような接点を有していたのか、包括的な検証を行った。両者の関係をつまびらかにした先行研究は、これまで存在しなかったからである。

検証の結果、明らかになったのは、少文協発足の起点である「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（昭和一三年一〇月）から、「児童文化新体制懇談会」（同一五年九月）を経て、同団体設立（同一六年一二月）へ至る全過程において、未明が佐伯郁郎ら行政官僚と積極的に連携し、児童文化を統制する側に回っていたこと、また『少国民文化』『少国民文学』『日本少国民文化協会報』等、少文協の機関誌類に、国家奉仕を使嗾する文章を、かなりの数、寄せていたということである。本戦争の大義である「大東亜共栄圏」の理念が濃厚に仮託された、童話「頸輪」（『少国民文化』昭和一七年六月）は、その代表例だ。

もとより、かかる「大東亜共栄圏」構想への心酔は、文学史上、ひとり未明のみに見られる現象ではない。この時期、日本文学報国会へ集った多くの文学者は、アジア解放を訴える「大東亜共栄圏」のイデーに、少なからず魅惑されていた。たとえ、日本の南進が、石油や天然ゴム等の天然資源の獲得を目的とする、帝国主義的拡張政策の帰結に過ぎなかったにせよ、そこには紛れもなく、岡倉天心の「亜細亜は一つなり」（『東洋の理想』明治三六年二月）という主張以来脈打つ、アジア主義の理想が外装されていたからである。換言すれば、「大東亜共栄圏」構想は、単なる政治的なスローガンに留まらない、思想的に強度のある国策だった、と言える。そして、この優れて蠱惑的なイデオロギーに、高村光太郎・中村武羅夫・横光利一・金子光晴以下、並み居る文学者が魅了されてしまったのである。

したがって、大東亜戦争下の小川未明の国策協力は、時の文壇・論壇の主潮と連なる、極めて同時代的な道行きであったと結論付けられるだろう。当時、未明が著したテキスト群からは、表立った反戦的言辞は無論、芸術的抵抗の痕跡すら見出しようがない。黒を灰色と言い繕う詭弁は、土台不可能なのである。

注

1　もちろん、「不毛」とは、相対的に実りが貧しいという意味で、先行論が皆無であるわけではない。例えば、続橋達雄は「未明童話集『日本の子供』の一考察」（『野州国文学』昭和五二年一二月）、「未明童話集『夜の進軍喇叭』序論」（『野州国文学』昭和五四年一一月）、「未明童話集『赤土へ来る子供たち』考」（『野州国文学』昭和五六年一二月）で、日中戦争期の未明の童話集を分析している。

2　小埜裕二は、「概説」（『小川未明全童話』日外アソシエーツ、平成二四年一二月）で、未明の作家生活の分水嶺を、大正一五年の「童話作家宣言」に置き、「〈童話作家宣言〉以後の未明の童話は、それ以前の童話に比べ、あまり評価されてこなかった」「結局、後半期の未明童話は、十分吟味されることもないまま現在まで放置されてきた」と、「宣言」以降の作品の評価の低さ、注目の少なさを指摘している。

3　例えば、山中恒は「日本の児童文学最高の作家とされてきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月、二五〇頁）と指摘している。事実、戦後刊行された『定本小川未明童話全集』全一六巻（講談社、昭和五一年一一月～同五三年二月）や『定本小川未明小説全集』全六巻（講談社、昭和五四年四～一〇月）には、昭和戦前期の戦争協力的な童話・感想類が、ほとんど掲載されていない。

4　未明作品の書誌は、これまで前記『童話全集』一四巻、『小説全集』六巻所収の作品年表がもっとも充実していたが、感想類を扱った『小説全集』の年表は、とりわけ限界があった。

5　小埜裕二は、前記『童話全集』未収録童話四五四篇を収録した、『小川未明新収童話集』全六巻（日外アソシエーツ、平成二六年一～三月）も刊行しており、近年、未明研究は、新たな局面へ突入していると言える。

6　山本明「一五年戦争末期の雑誌（三）　――少国民文化協会の出版物」（『評論・社会科学』昭和六〇年五月）、佐藤広美「児童文化政策と教育科学」（『東京都立大学人文学報』平成五年三月）、浅岡靖央『児童文化とは何であったか』（つなん出版、平成二六年七月）参照。

7　浅岡が語る「指示要綱」の「良識的」な面については、鳥越信も「要綱の狙いが最初、主として俗悪な赤本的出版物に向けられていたこともあって、この統制には一面革新的な側面も含まれていた」（「日本少国民文化協会について」『文学』昭和三六年八月）と述べ、出版物の改善措置として機能した点を、一定評価している。

8　佐伯は、『少国民文化をめぐって』（日本出版社、昭和一八年一一月、一九四頁）で、「わたしは厚かましくも、紹介状も持たないで、名刺一枚でこれらの先生方を訪ねて廻ったものである。事情を説明すると諸先生は、喜んで承諾して下さつて、積極的に協力を申し出て下さつた」と追想し、答申を依頼した折、未明ら識者が好意的な反応だった由、書き留めている。

９　浅岡靖央は、「戦争政策としての少国民文化」（『子どもの文化』平成二二年七・八月）で、「ただ、けっして忘れてならないことが一つある。少国民文化政策は、児童読物統制以来、国が独善的・強権的に推し進めたものではなく、官民合同によって立案され実施されたという事実である」と語り、「指示要綱」に端を発する、少国民文化政策の官民一体性を強調している。

１０　菅忠道は、内務省の処分が「俗悪児童読物」の進出を抑える一方、「芸術的な児童文学」の復興をもたらしたとする見解を、『日本の児童文学　増補改訂版』（大月書店、昭和四一年五月）で示している。「この措置によって、俗悪児童読物の横行はおさえられ、良心的な文化性の高いものに進出の道が与えられたことは確かである。冬の季節にたえてきた芸術的な児童文学に、ようやく陽春がめぐってきたと思われた。童話作家のなかには、ストックをはたいても追いつかぬほど、インフレ景気に恵まれた人も出るありさまであった」（二八五頁）

１１　浅岡靖央「児童文化から少国民文化へ」（『国際児童文学館紀要』平成一九年三月）は、「日本児童文化協会」を「日本少国民文化協会」へ名称変更するよう進言したのは、山本有三であるという立場を前提に、その発言の時期を探った論考である。浅岡は、「八月一八日における山本の発言には「少国民」という言葉は含まれていなかったと考える。（中略）その上で山本は、その後に開かれた起草委員会において、「児童」に代えて、「少国民」としたい旨の発言を行ったと推測する」と結論付けているが、八月一八日の創立準備委員会の様子を報じた翌日の新聞記事には、「山本有三委員より当協会は設立の趣旨から見て〝児童〟といふより〝少国民文化協会〟とした方がよく、その方が子供に次の国民たるの覚悟を持たせる」（「児童文化協会発足」『朝日新聞』昭和一六年八月一九日）云々といった記述がある。したがって、浅岡の結論は誤りだろう。

１２　もちろん、二反長の記す未明の発話が、一言一句、当時の正確な再現であるとは、筆者は思わない。記憶の減衰や作家的脚色は、当然あると考えられる。しかし、同時代の諸資料を勘案すると、未明が児童文化団体の統合に「大賛成」していたとする論旨は、間違いなさそうだ。

１３　「銀座三越に少国民室」（『読売新聞』昭和一七年二月六日）、鳥越信「日本少国民文化協会について」（『文学』昭和三六年八月）、二反長半『児童文学の展望』（大阪教育図書、昭和四四年八月）参照。

１４　少文協の「定款」第四条には、協会の事業として「少国民文化財ノ生産、配給ニ関ス

ル企画指導並ニ斡旋」「少国民文化財生産者ノ再教育並ニ養成指導」が、定められている。

15　なお、少文協は「少国民文化財」の制作を、直接的には行っていないが、唯一の例外に、情報局と連携して作った「愛国いろはかるた」がある。今、任意の数枚を挙げれば、い＝「伊勢の神風敵国降伏」、ほ＝「ほまれは高し九軍神」、か＝「輝く胸の傷痍記章」（「日本少国民文化協会制定　愛国いろはかるた」『少国民文化』昭和一八年一〇月）といった具合である。

16　雑誌の新規発刊は、当時法律上、許されていなかったため、『少国民文化』は『新児童文化』（有光社）の発行権を献納させて、創刊された。関英雄によれば、同誌編集長の巽聖歌は、「佐伯氏に頼まれたんじゃあ、いやとはいえなかった。惜しかったが仕方がない」（『体験的児童文学史』後編、理論社、昭和五九年一二月、二九五頁）と語り、諦めの気持ちだったという。

17　佐伯はこの文章で、弁解的な口調ながら、同誌の販売実績が今一つな点を認めている。「否定論者の中には、「少国民文化」の売行きの香ばしくない点を誇大に指摘してゐる向きもあるやうである。（中略）「少国民文化」のやうな性格を有する雑誌を発行して、最初から採算を見込むなどははなはだしい認識不足である。ある点まで採算を無視しなければ、このやうな雑誌はやれるものではない」

18　本稿で触れる機会はなかったが、山本和夫の「小川未明論」が、『少国民文化』（昭和一八年一〇・一二月）へ二回にわたって連載されている事実を、付記しておきたい。

19　国家奉仕の見地から、母性を称揚する昭和一八年の出版物としては、他に、山口愛川『日本の母』（六合書院、昭和一八年二月）、進藤喜美『日本の母』（富文館、昭和一八年四月）等がある。なお、大東亜戦争下の母性利用に関しては、岩淵宏子「戦時下の母性幻想」（岡野幸江他編『女たちの戦争責任』東京堂出版、平成二六年九月）が詳しい。

20　わずか三号で消えた『少国民文学』だが、後に一号だけ復活を遂げている。昭和一九年一一月に、みたみ出版株式会社から発行された『少国民文学』である。これは、文学部会会員の野長瀬正夫が編集を務めた雑誌で、情報局文芸課長の井上司朗（逗子八郎）や佐伯郁郎も文章を寄せていた。滑川道夫は、本誌は編集責任・発行元が異なるため、「復刊ではなく新雑誌と見るべき」だが、執筆陣・創刊目的（＝新人育成）の共通性という点で、「明らかに前誌の系譜に位置付けられる性格をもっている」（「「少国民文学」の性格」『少国民文学7』エムティ出版、平成三年六月）と指摘している。

21　巻頭言で新人全体に物申せるほど、この時期、未明は童話界の大家として君臨してい

た。巽聖歌は、「僕はかういふことを言つてよいかどうかしりませんが、今の一部の人達の童話が悪くなつたのは、小川先生のせゐと思ふんです。（笑声）というのは、先生の亜流が多いからです。小川先生はそれだけの影響力をもつたといふか、気力をもつ作家です。小川先生の存在は厳然たるものです」（「小川未明先生に訊く　創作童話の座談会」『新児童文化』昭和一七年五月）と、その影響力の大きさを指摘している。また、『現代童話四十三人集』（フタバ書院、昭和一八年一二月）は、未明の還暦祝いに、友人・後輩・門弟らが編んだ童話集だが、戦時中にこのような本が出されること自体、極めて異例だろう。

２２　小川未明「序」（『赤い蝋燭と人魚』天佑社、大正一〇年五月）、「私が童話を書く時の心持」（『早稲田文学』大正一〇年六月）参照。なお、大正一〇年時の未明の童話観については、三章五節で論じた。

２３　関英雄『体験的児童文学史』後編（理論社、昭和五九年一二月）、山中恒『撃チテシ止マム』（辺境社、昭和五二年三月）、同『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）参照。

２４　栄沢幸二は、東条の「大東亜共栄圏」観について、日本国内の「秩序原理」（＝家族国家観）を、アジア諸国へ同心円的に拡大したものだとする見方を、『「大東亜共栄圏」の思想』（講談社現代新書、平成七年一二月）で示している。「東条首相の、各民族にその処ないし所を得しめるという秩序原理は、事実上、天皇制国家の正統イデオロギーともいうべき、身分的な上下の君臣・父子・兄弟の関係を規律する、上の下のものに対する指導・愛護と、下の上のものに対する信従・畏敬の縦の道徳からなる秩序原理のことであり、これを親の国日本と共栄圏内の諸民族・諸国家との関係を律する原理にまで拡大・適用したものでしかなかった。そこに支配していたのは、指導と被指導や愛護と畏敬・信従の支配原理であった。またアジアの同胞としての身内意識やこれに対する肉親の情は、この原理を支える心理的な基盤になっていたように思われる。東条にとっての大東亜共栄圏とは、したがって日本と共栄圏内の諸民族・諸国家の関係が上下の階層的な関係に位置づけられ、指導・信従と愛護・畏敬の原理からなる、和気あいあいの一大家族国家圏でなければならなかったのである」（一〇六頁）

２５　小野俊一「日本少国民文化協会の使命」、東条英機「日本少国民文化協会の発足を祝す」、奥村喜和男「民族、国家発展の基底」参照。また、雑誌巻頭の口絵では、「スマトラ」「バタビア」「ビルマ」の住民から歓迎を受ける皇軍兵士の様子が、「聖戦五ヵ月、我が南方占領地の諸地域には早くも復讐の鍬（くわ）建設の斧が原住民の献身的協力の下に逞ましく揮はれ

てゐるが、一方南方占領地の児童に対する教育、宣撫の方策も着々具体化の途につきつつあると伝へられる。激烈な戦火の下でも皇軍の将兵は戦に強いばかりでなく子供とすぐ仲良しになり住民の限りない信頼を浴びてゐる」といったキャプションとともに紹介されている。

26　例えば未明は、「児童出版の使命」（『出版普及』昭和一七年三月）で、「曠古の大理想たる東亜共栄圏の建設は、目的とするところ、人類の解放であり、徳化であるところ、正にその行動は、正義に立脚するといふことが出来る」と断言している。また、未明の次女・岡上鈴江は、戦中、「大東亜共栄圏」の理念に共鳴する未明の様子を、次のように自著『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）で振り返っている。「自分が生まれた郷土、祖国を愛する念が人一倍強かった父は、また純情で単純で信じやすい性格だったから、「アジアの諸民族は欧米とは本質的に異なる特性を持っている。欧米の植民地支配下で苦しむアジアの弱小国をすくい団結して新しいアジアをきづこう」という東亜共栄圏の理念がとなえられると、強い関心をもってその記事をのせた新聞に見入った。「おとうさんはほんとうに信じていられたんだよ。小さな国が大きな強い国に支配され、しぼられているけれど、どんな民族もその国はその民族の手で治められるべきだ。日本はそれに力をかしてやろうとしているのだっていわれてねえ」と、母は後年、私に語ってくれた。母にいわれるまでもなく、私自身父が目を輝やかせて、「列強にいじめられ搾取されている弱い民族をたすけてやり、各々そのところを得さしめるという理念はすばらしい」といっていたことを思い出す」（一八一・一八二頁）

27　村上兵衛「「聖戦」と戦時下の文学」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）参照。

28　小林秀雄「三つの放送」（『文藝春秋　現地報告』昭和一七年一月）、河上徹太郎「光栄ある日」（『文学界』昭和一七年一月）、竹内好「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」（『中国文学』昭和一七年一月）、武者小路実篤「十二月八日」（『大東亜戦争私感』河出書房、昭和一七年五月）、尾崎一雄「十二月八日と文学者」（『文学報国』昭和一八年一二月一日）等参照。

29　「自主的文化」（『読売新聞』昭和一六年一二月一五日）

30　高橋新太郎「文学者の戦争責任論ノート（二・四）」（『国語国文論集』平成四年三月／同六年三月）参照。

31　櫻本富雄『日本文学報国会』（青木書店、平成七年六月）参照。

３２　櫻本富雄『文化人たちの大東亜戦争』（青木書店、平成五年七月）参照。

３３　神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』（世界思想社、平成八年三月）、木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、平成一六年四月）参照。

３４　井伏鱒二『花の町』（文藝春秋社、昭和一八年一二月）、今日出海『比島従軍』（創元社、昭和一九年一一月）、武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、昭和一九年一二月）、三木清「比島人の東洋的性格」（『改造』昭和一八年二月）、坪田譲治「インドネシアの子供」（『日本評論』昭和一九年一月）等。

３５　「世界史的立場と日本」（昭和一七年一月）、「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」（昭和一七年四月）、「総力戦の哲学」（昭和一八年一月）。

３６　中澤千磨夫「知性の限界　――〈近代の超克〉における京都学派の正負」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）、鈴木貞美『『文藝春秋』とアジア太平洋戦争』（武田ランダムハウスジャパン、平成二二年一〇月）参照。

３７　平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭和三八年一二月）、小笠原克「芸術的抵抗と非順応」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）参照

３８　海老井英次「抵抗としての沈黙　――永井荷風『断腸亭日記』の世界」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

Ⅳ部　戦後リベラリズム　――再転向と晩年

一〇章　再転向者の軌跡　――反戦・民主主義への旋回

はじめに

本章は、戦後の小川未明の再転向の軌跡を通史的に振り返るための章であり、直接的には、**六章「転向者の軌跡　――階級闘争から八紘一宇へ」**の続編という位置付けである。

先の論考において、筆者は、大正期、社会主義者だった未明が、戦中、国家主義者へ転向していく過程を、彼の個人史・作品の両面を追うことで辿っていった。山中恒が「日本の児童文学最高の作家とされてきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月、二五〇頁）と指摘するように、従来、未明神話の陰に隠れ、断片的にしか論じられてこなかった未明の「転向者」としての側面を通史的に明らかにすることは、先行研究にない、意義のある作業だと考えたからである（**注1**）。

かいつまんで要約するならば、大正―昭和戦前期の未明の転向は、大きく三つの観点から特徴付けられるだろう。一つは、資本家階級と労働者階級間の階級対立の認識が天皇制イデオロギーたる家族国家観によって融解してしまった点。二つは、民衆の受難に寄り添う反戦意識が施政者目線の日中・大東亜戦争賛美によって一掃された点。三つは、資本主義批判の動機が格差批判のヒューマニズムから資本主義がもたらす人間性の堕落へとシフトした点である。いずれも、ダイナミックな路線転換と言える。

しかしながら、未明の転向はこれで終わりではない。戦中、「苟（いやし）くも生を皇土に享けるものは一木一草と雖も皇土のために役立つべき」（「当面の児童文化」『報知新聞』昭和一五年一二月一～五日）と天皇制国家への忠誠を説いていた未明は、戦後、「戦争がわるいのだ！」（「戦争は僕を大人にした」『童話』昭和二二年二・三月）と叫ぶ、反戦と民主主義の提唱者となって行く。あられもない状況追随、あられもない再転向だ。

本章が目指すのは、先の六章で触れることができなかった、昭和戦前―戦後の再転向の軌跡を、丁寧に跡付けることに他ならない。

一、戦後民主主義の影響

大正期、「正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」『時事新報』

大正一一年五月一日夕刊）と階級闘争を推進し、戦中、「八紘一宇の精神こそ、全人類を救ふに足るものでありませう」（「我を思はば国家を思へ」『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）と聖戦を礼賛していた小川未明だが、戦争に負けると、今度は反戦と民主主義の旗振り役となる。電光石火の如き変わり身の早さだ。本節では、昭和戦後期の未明の足跡を追いたい。

敗戦翌年の昭和二一年三月、未明は児童文学者協会（現、日本児童文学者協会）の結成に参加した。この会は、関英雄・佐藤義美・奈街三郎ら中堅どころの児童文学作家が主導のもと、設立した団体で、未明は中野重治・坪田譲治・浜田広介などの大家とともに、創立発起人となっている。

会の創立趣意書は次の通りである。

日本がいま新しい夜明を迎へようとしてゐる時、児童文学者の使命もまことに重大であります。軍国主義の教育にゆがめられた児童の精神を解放し、児童に真の人間性が何であるかを知らせ、児童の自由な創造的な生活を培ふために清新な文芸の沃野を拓く事こそわれわれのねがひであります。

（「児童文学者協会創立趣意」（『日本児童文学』昭和二一年九月）

ここで会は、戦前の軍国主義教育を、児童の精神を「ゆがめ」た元凶として否定している。代わりに対置するのが民主主義で、綱領には「民主主義的な児童文学を創造し普及する」、規約には「この会は民主主義文化の建設のために自由で芸術的な児童文学を創造し普及することを目的とする」と定め、民主主義を重要視する路線を敷いた（『日本児童文学』同前）。GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）主導の「民主主義革命」が遂行されていた、当時の時代風潮が感じられる（**注2**）。

もっとも、未明は前年まで、官許の御用児童文化団体・日本少国民文化協会へ所属し、民主主義を「敵性文化」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）呼ばわりしていた人物である。国民を「陛下の赤子」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）と呼んでもいた。社会主義から国家主義へと同様、ここには明確な思想的変節がある。だがこの変節について、未明の口から反省や後悔の言葉が語られることは、片言隻句としてなかった。

機関誌『日本児童文学』創刊号で行われた、「一、児童文学の再出発に際して作家として

最も反省すべき点」「二、再出発に当つての抱負」を問うアンケートへ、未明は次のような回答を寄せている。

> 敗戦の結果国民はたしかに卑屈となり無気力となつてゐる。戦争に責任なき児童も貧血症にかかつてゐる。それをこれまでのやうな生やさしいいい子主義や、通俗文学の類でどうなるものでもない。彼等の勇気と明朗性を取戻すものは、独り高き情熱に燃える芸術の力だけである。此際作家は外的な解放運動の他に、内的に彼等が自己を発見し、解放に導く任務がある。それには先づ作家自らの自己革命を必要とするであらう。
>
> 「児童文学者の反省と抱負」（『日本児童文学』昭和二一年九月）

この文章からは、戦中、国策協力を担った点への自省が欠落している。「自己革命」は語られるが、それ以前にあるべき「自己批判」はない。アンケートへ答えた作家は未明を含めて二七名。編集部は「作家自身の内面的な反省の声をききたかつたのであるが、編集部の出題が言葉不足だつたためか、省みて他をいふやうな回答や、あまりに一般的な原則論を送つてきた回答が多かつたことは遺憾」と遺憾の意を表明した。

また、同号の随想「子供たちへの責任」においても、未明は自身の戦争責任に関して、他人事のような発言を繰り返している。

> 戦争中はいかなる言葉をもつて子供たちを教へたか。指導者らには何の情熱も信念もなく、ただ概念的に国家のために犠牲になれといひ、一億一心にならなければならぬといつて、形式的に朝晩に奉仕的な仕事を強制して来た。そして日本は一番正しいのであるし、敵は残忍であり醜悪であるといふことを言葉に文章に信ぜせしめようとして来た。それが終戦後の態度はどうであるか、今までの敵を賛美し、まちがつてゐたことを正しいといひ、まつたく反対のことを平然として語つてゐる。
>
> 「子供たちへの責任」（『日本児童文学』昭和二一年九月）

旧指導者層の戦争動員および戦後の変わり身の早さを指弾する未明。が、先のアンケートと同様、ここには日本少国民文化協会の役員として聖戦勝利を叫んでいた、自身の振る舞いに対する反省的論及は見られない。

この文章について、長谷川潮（うしお）は「小川未明は、「子どもたち（ママ）への責任」（「日本児童文学」

創刊号、一九四六・九）という文章を書いたが、それは他の「指導者ら」だけを批判するものだった。すなわち未明には、戦争責任の自覚はなかった」（「戦時下の戦争児童文学の場合」『日本児童文学』平成七年八月）と、砂田弘は「ここで語られていることは、じつは未明自身の戦中・戦後の足跡と重なり合っているのだが、批判は自分自身には向けられず、もっぱら他人事として語られている」（「戦争責任はどう問われてきたか」『日本児童文学』平成七年八月）と、未明の無反省振りを指摘しているが、正しい指摘だろう。

昭和二四年一〇月、未明は児童文学者協会の初代会長へ就任。機を見るに敏と言うべきか、敗戦後の未明は、反戦と民主主義を盛り込んだ童話・随筆を次々と発表していく。未明は何等の反省なきまま、戦後という時代の主潮に便乗して行ったのである。

上笙一郎は、この無反省を後押ししたのは、当の児童文学者協会の作家たちに他ならないと批判している。

> だけれども、私は、皇道主義から民主主義へという思想の変化が、いささかの自己反省もともなわずにおこなわれてしまったことがすべて未明一個の責任であるとは思わない。そこには、大衆児童文学の作家をのぞく日本の児童文学者すべてが、当然負わなければならぬ責任もあったのではないだろうか。具体的にいえば、昭和二一年三月日本児童文学者協会創立のとき、未明は選ばれて初代会長の椅子についたのだが、この会の創立趣旨には、たしか、侵略戦争に協力しなかったことを会員資格とするという一項があったと記憶している。こういう会の会長に選んだことで、未明を安心させ、そのことが未明の自己検討をはばんでしまったという一面がなかったとはいえない。とすれば、未明を児童文学者協会の会長に選んだ児童文学者たちにも、当然のこととして一半の責任があったのである。
>
> 上笙一郎「戦後の小川未明の思想」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）

未明の会長就任時期については上の思い違いだろう。「侵略戦争に協力しなかったことを会員資格とするという一項」が、趣意書・綱領・規約に明文化されていたわけでもない。ただし、関英雄は、「あの当時の時勢のなかでは、やはり戦争中あまりはっきりと軍国主義の片棒をかついだ人は積極的には誘わないというふうな申し合せを発起人会でしました」（関・山室静他「座談会　戦後児童文学の諸問題」『近代文学』昭和三四年二月）と語っており、「申し合せ」程度はあったようだ。

いずれにせよ、児文協には、創立総会で「児童文学界の戦争責任明確化及び戦責出版社七社（講談社・主婦之友社・旺文社・興亜日本社・公論社・山海堂・家の光協会――引用者注）への不執筆動議」（「協会ニュース」『日本児童文学』昭和二一年九月）を決議しながら、「無キズの者は少ない」（関英雄「民主主義文学の三十年」日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』東京書籍、昭和五三年一二月）ことを理由に、うやむやにしてしまった経緯がある。同業者の無批判が未明の無反省にお墨付きを与えたとする上の指摘は頷けよう。

ちなみに、児童文学者の戦争加担に関しては、戦後二反長半（にたんおさなかば）が、「ところが児童文学者の中で、小林多喜二を見つけることは困難であった。いや、ついに小林多喜二なしに終戦を迎えたというのが真実であろう」（『児童文学の展望』大阪教育図書、昭和四四年八月、二〇五頁）と述べ、全員有罪の烙印を押している。

このような批判なき環境の中で、昭和二〇年代、未明は世俗の権威を上塗りしていった。昭和二一年一二月、これまでの業績が認められ、野間文芸賞を受賞。昭和二六年五月には、小林秀雄とともに芸術院賞を受賞した（注3）。昭和二七年一一月には、皇族・高松宮宣仁（のぶひと）と、帝国劇場で、自作「赤い蝋燭と人魚」の舞踊を鑑賞している。さらに、昭和二八年一一月には、永井荷風・川端康成とともに芸術院会員へ推された。同月、文化功労者として表彰、終身年金を獲得している。昭和二五年一一月には、『小川未明童話全集』全一二巻が、昭和二九年六月には、小説と感想を収めた『小川未明作品集』全五巻が、それぞれ講談社から発行開始された。敗戦から一〇年、戦後日本における未明の社会的地位は、不動のものになったと言えよう。周囲の要請もあるのか、この頃から自身の半生を振り返る、回顧録的な文章の執筆が目立つようになる（注4）。

昭和二〇年代後半に入ると、いわゆる「童話伝統批判」が本格化する。これは、鳥越信ら早大童話会の宣言「「少年文学」の旗の下に！」（『少年文学』昭和二八年九月）に端を発する論争で、未明は古き伝統童話を象徴する存在として、徹底した批判を浴びた。鳥越・古田足日・いぬいとみこといった戦後デビューの若手作家（少国民世代）が、その中心的論客である。

批判の主眼としては、未明童話における①散文性の欠如、②社会変革の意志の欠落、③現実の子ども読者の軽視の三点が大きく挙げられる（注5）。論争の詳細やその評価については、本章のテーマと逸れるのでこれ以上触れないが（**一二章四節参照**）、少なくともこの時期、児童文学界という狭いコップの中の争いであるにせよ、未明は生涯最大の批判に晒された。当時の状況を、西本鶏介は「それまで日本児童文学の巨星と信じて疑わなかった未明が

あたかも文化大革命のように否定されてしまったのです。未明否定者にあらざれば児童文学者にあらざるといった風潮が、ぼくたちのまわりにうずまいていました」（「伝統は克服されたか　未明・広介・譲治の再評価」『日本児童文学』昭和四九年一月）と回想している。

だが、老境へ入った未明が、これらの論戦に応じることはなかった。いや、できなかったと言うべきか。未明の次女・岡上鈴江は、昭和二七年末、第二の高円寺の家に移り住んだ時点で、未明は既に相当程度老化していたと回顧している。

> 足が思うように軽くあがらず、自分の気持ではあげたつもりの足が地面につっかかって身体の安定を失い、前のめりになるのだった。（中略）そのうえ、ただでさえはや口でわかりにくい言語はますます聞きづらくなっていく。父のいっていることがわからず、何度かききかえすうちに、気短かな父はいらいらして怒鳴りちらしてしまう。かかりつけの医者は定期的に診にきたが、血圧などをはかったあと、いつも同じように、「別に異常はない、かるい脳軟化症だけれど、これは老人病でいたしかたがない」といい、「病気を進行させないため、過労や刺激をさけ、ルチンをおのみになってください」といって帰っていった。
>
> 岡上鈴江『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月、二〇一・二〇二頁）

脳軟化症とは脳へ酸素が行き渡らず、脳の一部が壊死する疾患で、今でいう脳梗塞のことだ。晩年の未明は、身体の自由が利かず、知的に衰えていた。当然、創作数は減っている。

またリアリズムをベースにしたそれらの作品は、大正期のロマンチシズム時代の作品群ほど称賛を集めなかった。晩年に限らず、戦後の未明童話は、同時代・後世を通して、おおむね評価が低い。

例えば川崎大治は、「近年小川さんが、ますます生活的な童話に主力をそそぐようになつてから、かえつて作品は、児童から離れるような傾向にある。そして、初期の空想的社会主義時代のロマンチツクな、激しい人類愛の熱情にもえた頃の作品に、かえつて、児童は大きな魅力をかんじている」（「小川未明」『日本児童文学』昭和二三年六月）と論評。西本は戦後作品について、「あの目をみはるイメージの美しさも、奔放な空想力も影をひそめてしまって」おり、代わりに「説教臭く」、「もはや戦後を生きる作家ではな」かったと論じている（「解説」『定本小川未明童話全集』第一四巻、講談社、昭和五二年一二月）。

昭和三六年五月、小川未明は脳出血で倒れ、死去した。七九歳だった。死後、昭和天皇か

ら金一封を送られている（注6）。

二、「戦争が悪いのだ！」――反省なき反戦

かくして、敗戦後の小川未明は、児童文学者協会の結成に参加。それまでの聖戦賛美をかなぐり捨て、反戦と民主主義の唱導者となって行く。この過程で、過去の戦争責任が問われることはなかった。それどころか未明は、「日本児童文学の父」として戦後社会に地歩を固め、芸術院会員・文化功労者など、数々の栄誉をものにすることとなる。本節では、戦後の未明の思想傾向を作品に即して分析してみたい。

八・一五以後の未明を特徴付けるのは、第一に反戦意識である。ただし、大正期の反戦意識が、国家と民衆の利害相反という社会主義的な――その意味ではやや観念的な――対立図式を根拠としていたのに対して、戦後のそれは、日中・大東亜戦争の完敗という現実の敗戦体験に基づいている。

「悲しみを知らない噺」（『社会』昭和二一年九月）は三人称童話。主人公は、消息不明の出征兵士を息子に持つ地主だ。戦争孤児を育てる和尚が、地主宅を訪れ、孤児園への支援を求めるのが、おおよその物語の筋である。和尚は、「いや、こんどの戦争では、お気の毒な方が、どれ程ゐるか知れません。何にしても、戦争ばかりは、地獄にまさる、この世の地獄ですぞ」と、戦争＝「この世の地獄」という見方を披歴。戦後の困窮について、「子供には罪がありません。みんな大人の犯した悪の報いです」と因果応報を語る。地主もまた、「和尚さんが、いはれたやうに、子供に罪はない。凡てが大人の責任なんだ」と感じ入る。先の大戦の惨禍に対する生々しい実感と、「一億総懺悔」（東久邇宮稔彦内閣）的な雰囲気が濃厚である。

「新しい町」（『幼年クラブ』昭和二二年八月）は三人称童話。主人公は少年・勇吉だ。勇吉はお母さんと露天で商いをしながら、戦争へ行った父の帰りを待っている。隣の露天商は、「どくへびがすんでいるジャングルで病死した、おい」を持つ下駄屋のお爺さんで、勇吉とは仲が良い。

ある日、様子のおかしい「せの高い男」が通りを徘徊し、店を覗いては「ここは、げただな。げたばかりか。こんなものたべられない」「ここは、ろうそく、マッチ、かやりせんこう、色紙、みんなたべられないものばかりだ」などと、食べ物へ異常に執着した様子を見せる。聞けば、この男はニューギニアからの帰還者で、戦時中は、蛇やトカゲ、青虫を食べていたらしい。お母さんは「おきのどくに、気がへんなんですね」と憐れみ、お爺さんは「せ

んそうが、わるいんだ」と呼応する。勇吉も「目にいっぱいなみだを」浮かべる。この作品では、食へ固執する南方戦線の復員兵の言動を通して、「気がへん」になるほどの後遺症をもたらす、戦争の非惨が強調されている。

「戦争は僕を大人にした」(『童話』昭和二二年二・三月)は三人称童話。主人公は少年・清吉だ。戦争で未帰還の父、残された母子という家族設定は、「新しい町」と同様である。清吉は、母の言い付けで用足しへ出向く途中、悪童に「お化(ばけ)」と罵られて泣く、お婆さんを目撃する。

清吉は子どもらを追い払い、お婆さんを慰めると、彼女は「わたしも、家を焼かれて、身寄りはなし、知り合のところで、厄介になつてゐるが、寒さのため、持病のリユウマチがでて、お薬を買ひに行つた……」と、涙ながらに身の上を語った。父のいない清吉以上に、「お化」は孤独な境遇だった。清吉はお婆さんの「あはれな影を見送つた」後、「戦争がわるいのだ!」と叫ぶ。ここから物語は、かつて空襲の夜、猛火の中、母と逃げ惑い、母が涙した時点(「お前、帰らうつて、どこへ帰へるの。もうお家はないんだよ」)へと遡る。本編では、戦後と戦時下の二人の女性の涙を通して、戦争が如何に人間を苦しめるものか、描出している。

ことほど左様に、戦後の未明童話には、日中・大東亜戦争を素材とした反戦意識の横溢したものが多い。大正期の童話「野薔薇」(『大正日日新聞』大正九年四月一二日夕刊)や「強い大将の話」(『読売新聞』大正九年一一月一五~一八日)が、特定の時代、特定の戦争を名指ししないメルヘンな反戦表象であったのとは、対照的である。

とは言え、これらの作品には、かつて自身がその戦争へ協力した過去に対する反省が、致命的なまでに欠けている。戦後、「戦争がわるいのだ!」と作中人物に語らせている未明は、戦時中、「東亜新秩序」(近衛文麿内閣)や「大東亜共栄圏」(東条英機内閣)の理念に共鳴し、「然るに今度の事変は、私達に民族的の自覚を促した。(中略)即ち、私達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある。それ故にすべての作家は、文学行動を通して、翼賛し協力しなければならぬのだ」(「新しき児童文学の道」『都新聞』昭和一六年五月一二・一三日)などと、戦意高揚を煽っていたのではなかったか。この思想的変節について無反省の態度を貫いたことは、未明という人間の大きな特徴だ。

第二の特徴は、民主主義の推進である。

今はたしかに文学革命のときである。戦後旧文化は破壊され、道義、慣習はもとより、

秩序は混乱し、善悪の標準すら失われた。しかるに代るべき新道徳は起つていない。特権階級や金持が横暴であつて、弱肉強食が平気で行われている限り人権の平等、分配の公正の事実のあろうはずがなく、真の民主主義はありえない。

「現下の所感」（『児童文学新聞』昭和二五年三月一日）

この文章は、児童文学者協会の機関紙『児童文学新聞』創刊号へ寄せた一文だ。副題は「会長を受諾して」。一面のトップ記事として扱われている。「特権階級や金持」の横暴、「弱肉強食」の社会を、「真の民主主義」の観点から批判しようというのが、全体の論旨である。文末では、「資本力の攻勢」に対して、「真の民主主義への新しき芽を擁護しなければならない」と重ねて語られる。

戦前、「吾等の文化は、民主々義的な、敵性文化の類似であつてはならぬのである」「自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と民主主義・自由主義を否定し、「日本の家族制度は、日本精神を中軸とする、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか？」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）と狂信的（ファナティック）な家族国家論を唱えていた人間と、よもや同一人物とは思われない。

「心の芽」（『少国民の友』昭和二一年二月）は三人称童話。主人公は青年・正吉だ。正吉は幼少期、不慮の事故から右足に障害を負い、「碌々学校へも行かず」、町の縫箔（ぬいはく）屋へ弟子入りをする。手先の器用な正吉は、主人の代わりをするほどの腕前となったが、戦争の最中、縫箔屋は商売にならず、まもなく閉店しまった。

戦後、成人となり、主人と再会した正吉は、近日行われる総選挙について、次のような説諭を受ける。

「これからは、だまされてはいけないし、強くならなければならん。そして、真に、自分達のためになり、力のない者の味方になる、正しい人間を選挙するのだ。いままでは、そういふあたりまへのことすら出来なかつたが、いよいよそれができる、自由な時代になつたのを、知つてゐるね」

「はい、自由主義の時代でせう」

「さうだ、自分が正しいと信じたとほりにする、それが何より貴いことなのだよ」

続けて、「金とか、学問とかいふことより、何よりみんなが正しい考を持つ人間となることが大切なんですね」と問う正吉に、主人は「それが、民主主義なんだよ」と応答。主人の教えを受けた正吉は、以後誰に投票しようか、「暇があれば、選挙候補者の演説を聞き歩く」ようになる。

つまり本編では、戦時中、痛罵の対象だった民主主義や自由主義が、青年の指針とすべき理念・価値観として称揚されているのである（注7）。「猫も杓子も自由主義といひ、民主主義といふ」（本多秋五「芸術　歴史　人間」『近代文学』昭和二一年一月）時代の、典型例だ（注8）。

第三の特徴は、私欲への嫌悪である。

> みなさん、世界じゅうのすべての財産や、品物は、すべて、わたしたち人間が作ったものです。お金や、たべものや、そのほかの、いろいろの欲望のために、いやしい、まちがった考えをおこす人がいますが、これは、人間が、自分たちの作った物質にまけているので、ほんとうの人間は、物質よりえらいものであるということを知らないからです。
>
> 「人間のとうとさ」（『少年クラブ』昭和二六年三月）

また、金銭にこだわってはいけないということも（幼少期、両親に――引用者注）厳しく説ききかされていました。よその家へ使に行って、その御苦労賃にとお菓子などをいただいて帰ることはありましたが、金銭をもらうことは固く禁じられていました。ものの考えかたが物質的に偏ることを厳に戒められていたのです。（中略）そういう遠い日のことをおもうと、現代の社会にはあまりにも精神教育が欠けているとおもわざるをえません。世の中は進んだのかも知れませんが、金がありさえすれば何でも出来るという世の中を私は肯定する気にはなれないのです。

「自分を失ってはいけない」（『社会教育』昭和二六年七月）

「お金や、たべものや、そのほかの、いろいろの欲望」「金がありさえすれば何でも出来るという世の中」を肯んじ得ない未明。未明には、物欲・金銭欲・名誉欲など、資本主義が昂進する人間の私欲全般への嫌悪がある。濃淡はあれ、この私欲への嫌悪は、大正・昭和戦前・昭和戦後と一貫していよう（注9）。

だが、大正・昭和戦前期の未明が、私欲の増幅器たる資本主義を「階級闘争」や「日本精

神」のスローガンで直接弾劾していたのに対し、昭和戦後期の未明は、資本主義という制度（システム）そのものへの批判をさほど行わない。代わりに、個人の私欲への惑溺を、精神論的に戒めようとする傾向がある。

「金で買えない仕合せ」（『こども朝日』昭和二三年七月）は三人称童話。主人公は、「田舎の貧しい家」に生まれ育ったヤスケじいさんだ。ヤスケは少年期に東京へ奉公へ出されて以来、「人間は、いつでも正直に、よく働かなければならぬ」という亡き母の教えを墨守し、清貧に生きている。ある日、ヤスケのもとに、戦後成金のサキチ親方が現れ、母の思い出の品であるバラの高額売買を持ちかけてきたが（「おじいさん、いくらでも金を出しますが、このばらを、私にゆずつてくれませんか？」）、ヤスケは拒否。ヤスケの拒絶を通して、金に釣られない心の清白が讃えられている。

「託児所のある村」（『文学教育』昭和二六年一〇月）は三人称童話。地方の託児所を舞台とした群像劇だ。子どもたちや若い「保母さん」は愉快に時を過ごしているが、ある日東京から、「ぴかぴか光」る勲章やダイヤモンドの指輪を身に着けた役人の一行が見学へ来ると、「冷たい空気が、あたりを流れ」る。

近くで写生中の青年画家は、訝る一行に、「お役人や、金持や、学者は、自分等の仲間でない、いつも上の方にいて、命令するものだと思つているから、きゆうに、いつしよになつて、わらつたり、話したりすることができぬのです」と説明。自身の画家としての功名心を問われると、「とんでもない、それは名誉欲の強い人のことです」と否定する。「しかし、自然は、いつ見ても平和で、美しい。人間も、まちがつた考えや、欲望さえ持たなければ、互に親しみ合うことが出来て、美しいにちがいがありません」。欲望を絶った先に、美しい共存共栄の社会が訪れるというのが、画家の主張だ。この主張には、未明の理想がよく仮託されていよう。

「きよくただしく」（『五年の学習』昭和三一年一月）は随筆。児童雑誌の新年号に書かれた一文だ。この随筆で、未明は「きみたちはいま、人生のかどでに立っている。その出発にあたって、きみたちはじぶんにほこりをもち、つねに正しい、美しいものに目をむけ、きたない、まちがったものから、じぶんをまもらなければいけない。（中略）わるいかんきょうにまけず、美と正義にかんげきする人間になろう」と、タイトル通り、「きよくただしく」生きるよう、児童を鼓舞している。小学生向けの文章だから、対峙すべき「きたない、まちがったもの」「わるいかんきょう」が何を指すのか、具体的には明示されていない。しかし、サキチ親方や役人の一行に象徴される大人の私欲も、当然、そこに含まれると考えていいだ

ろう。

戦後の小川未明は、人間が資本主義の悪風に染まり、我欲にまみれた存在とならないよう、様々なかたちで訓戒を垂れていたのである。

三、日本近代転向史上の位置（2）——社会的制裁を免れた新生リベラル

さて、ここまで筆者は、昭和戦後期の小川未明の足跡と思想的旋回を、資料に即して辿ってきた。最後に本節では、敗戦に伴う、かかる未明の再転向が、日本の近代転向史において、どのような位置を占めているのかという問題を、俯瞰的な視座から考察したい。

はじめに確認しておきたいのは、転向の有無および程度である。話を振り出しに戻すようだが、そもそも、戦後転向の有無を判別する際の、主要な指標（メルクマール）は一体何だろうか。鶴見俊輔の簡明な解説によれば、それは、戦中の（超）国家主義との決別である。

> 一九四五年（昭和二十年）八月十五日、日本政府は、連合国政府にたいして無条件降服した。それ以後日本国家を敗北させた連合国の武力が、日本国民に国家制度ぐるみの転向をしいる力としてはたらいた。超国家主義者の指導を排除して平和国家を建設することが、ソ連をふくめて、連合諸国の同意した日本再建の共通目標だった。（中略）敗戦にさいしての日本の公人のおこなった国家主義の反省が、敗戦転向の主題となる。
>
> 鶴見俊輔「第三篇の要約」
>
> （思想の科学研究会編『共同研究転向　改訂増補版』下巻、平凡社、昭和五三年八月）

昭和戦前期の転向が、社会主義・共産主義思想の放棄の如何を主要な基準としたのに対し、昭和戦後期の転向は、戦中の国家主義思想の放棄を基準とするものであった。そして、前者の転向を導いた力が、思想検察・特高警察を手足とする日本国内の統治権力であったのに対し、後者のそれは、ＧＨＱを出先機関とする戦勝国、すなわちアメリカであった**（注１０）**。

したがって、戦後転向は、立場の違いこそあれ、戦時中国策に追従した、ほとんどすべての国民が直面した現象であったと言ってよい。藤田省三が、「敗戦による国家機構の崩壊・天皇制批判の自由化によって、戦争中の「国民」にほとんど隈なく行き渡っていた日本主義世界像は脆くも潰えた」（「昭和二十年、二十七年を中心とする転向の状況」『共同研究転向改訂増補版』下巻）と指摘するように、敗戦に際し、多くの日本人は、自らの国家主義的世界観に修正を加えることを余儀なくされたのである。

未明もまた例外ではない。筆者は、**Ⅲ部「国家主義――転向と国策協力」**で、戦中の未明が、天皇制や日中・大東亜戦争を賛美してやまない、狂信的（ファナティック）な国家主義者である事実を指摘したが、戦後の未明が上記の対象を称えることは、一切なくなってしまったからである。代わりに称揚されるのは、民主主義や反戦平和といった、極めて戦後的なイデオロギーだ。未明は言わば、即席の新生リベラルとして、生まれ変わったのである。戦後転向の指標（メルクマール）たる戦中の（超）国家主義との決別――敗戦に際し、未明がいち早くこれを成し遂げたことは、火を見るより明らかであろう。

その点、未明とは対極に位置するのが小林秀雄である。敗戦後、小林は、今次の大戦に対する認識を問われ、「僕は歴史の必然性といふものをもつと恐しいものと考へてゐる。僕は無知だから反省なぞしない。利口な奴はたんと反省してみるがいいぢやないか」（荒正人・小田切秀雄他「小林秀雄を囲んで」『近代文学』昭和二一年二月）と回答。「一億総懺悔」（東久邇宮稔彦内閣（ひがしくにのみやなるひこ））の風潮が世を覆う中、大東亜戦争の歴史的必然性を主張し続けた。このような小林の反時代的な身の処し方は、未明の尻軽な時局便乗とは、対蹠的な位置にあると言える。

それでは、かかる戦後転向は、未明にとって、真摯な内的反省（自己批判）を伴うものであったのだろうか。次に問いたいのは、反省の有無である。従前繰り返し述べているように、答えは「無」なのだが、とは言っても、このような問いは必ずしも的外れなものではない。思想的立場を大幅に転換する以上、過去の言動に対して批判のメスを入れることは、当然あってよい事柄のように思われるし、多数派ではなかったにせよ、そのような作家は実際存在したからである。

例えば、戦時中、「記憶せよ、十二月八日。／この日世界の歴史あらたまる。／アングロ・サクソンの主権、／この日東亜の陸と海とに否定さる」（「十二月八日」『婦人朝日』昭和一七年二月）といった愛国詩を数多く物し、日本文学報国会の詩部会長も務めた高村光太郎は、敗戦後、岩手県花巻の山村で七年間の蟄居生活を送った。高村は、中央文壇とは隔絶した僻遠の地に身を置くことで、自らに流刑の罰を科したのである。そして、そこで書かれた「暗愚小伝」（『展望』昭和二二年七月）等の詩作は、戦時下の自己と今一度向き合い、その誤りをつぶさに切開する、自己批判に満ちたものであった。高村は記す。「おのれの暗愚をいやほど見たので、／自分の業績のどんな評価をも快く容れ、／自分に鞭する千の非難も素直にきく。／それが社会の約束ならば／よし極刑とても甘受しよう」（「暗愚小伝」）。

昭和三〇年代、武井昭夫とともに文学者の戦争責任問題を鋭く追及した吉本隆明は、戦後

の高村について、「文学者の戦争責任の問題を、もっともはげしく戦後の文学的出発にあたって自分に課した文学者をあげるとき、どうしても、高村光太郎をその筆頭にあげざるをえない」「戦後の文学的な出発を、戦争期の言動と理念にたいする自省からはじめ、それがどの文学者よりも際立っていた」（『高村光太郎　増補決定版』春秋社、昭和四五年八月、一四二・一四三頁）と述べ、その内省の徹底を高く評価している（注11）。ちなみに、未明と高村は、それぞれ明治一五・一六年生まれであり、世代的には同世代の文人である。

あるいは、日中戦争開始後、プロレタリア文学の名作として名高い『太陽のない街』（戦旗社、昭和四年一二月）を絶版にした徳永直は、戦後、同作を復刊するに際して、自己批判を行った。徳永は、「（絶版――引用者注）声明の動機は勿論特高警察、憲兵隊及び保護観察所の包囲に敗北したからである。しかし自分のこの行為は支那への侵略戦争への加担、読者への裏切りといふ結果を招いたことを認めねばならぬ」（『太陽のない町（ママ）』の復刊」『東京新聞』昭和二一年二月二〇日）と書き、自らの国家権力への「敗北」や侵略戦争への「加担」、読者への「裏切り」を、すべて認めている（注12）。そして、「これで私の自己批判が完了したとは思ってゐない」と記し、「自己批判」の継続を誓っている（注13）。短い文章ではあるが、徳永は世間から非難を浴びかねない恥を、あけすけに晒しているのである。

児童文学界でも自らの誤りを公にする者はいた。例えば、一節で紹介した児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』創刊号のアンケート、「児童文学者の反省と抱負」（昭和二一年九月）で、未明の弟子筋にあたる奈街三郎は、「人からかれこれ言はれない先にまたじぶんのことをたなにあげて人のことを言ふまへに、ぼくはまづ自己の不明をあからさまにぶちまけ、痛烈に愧（はじ）入り、深刻に詫びたい気持ちでいっぱいだ」と陳謝している。さらに、「作家としての真摯な自己反省、するどい自己批判のメトオド（ママ）は、やはり今後の作品行動にしかないだらう」と述べ、「真摯な自己反省、するどい自己批判」の上に今後の創作活動を展開する旨、抱負を語っている。編集部が遺憾の意を表明したように、奈街のような謝罪例は決して多くはないけれど、それでも反省の弁を述べた児童文学者は少なからずいたのである（注14）。

しかし、残念ながら、と言うべきだろうか。戦後の未明には、このような過去の言動に対する反省的言辞は、まったく見られない。一・二節で紹介してきた通り、新憲法に基づく戦後的価値観を形象化したテキストは、数多く著されているのだが、それと矛盾を来す、過去の国家主義的言動について、今現在の視点からどのように考えているのか、反省の余地はないのか、我が身に鞭打つ批判的総括を試みた形跡が少しもないのである。

なお、戦中から戦後へと同様、大正から戦中にかけての転向も相当激しいが、こちらに関しても未明には反省した様子がない。未明の無反省は筋金入りだ。

未明は何故反省しないのだろうか。内的な動機に絞って言えば、ここには当然、自己の非を認めたくないというプライドや、世間からの非難を回避したいという保身が介在していたと考えられる。「日本児童文学の父」や「日本のアンデルセン」といった敬称に象徴される、高潔で偉大なイメージ――それは戦後長い時間をかけて蓄積されてきたイメージである――とは逆に、未明は存外、小心で処世に長けた人物であったのではないかというのが、筆者の私見だ。未明が備え持つ、ある種の俗物性を、私たちは見過ごすべきではない。

最後に問いたいのは、社会的制裁の有無である。昭和二〇年一〇月のＧＨＱによる人権指令以後、我が国では政治犯の釈放、特高警察の解体、戦争協力者の公職追放といった各種の民主化が一挙に進み、この外発的な「民主主義革命」に呼応するかたちで、文壇内部でも文学者の戦争責任を追及する気運が高まった。筆者の言う社会的制裁とは、一義的には、上記の戦責追及を指す。そして、一節で若干触れたように、戦後の未明が無反省を貫き得たのは、かかる制裁の有無と、おそらく無関係ではない。

文学者の戦争責任の問題と、戦後真っ先に向かい合ったのは、雑誌『近代文学』へ集った同人たちである（注１５）。荒正人・小田切秀雄・佐々木基一といった若き批評家は、昭和二一年一月に、タブロイド紙『文学時標』を創刊し、常設した「文学検察」欄で、既成文壇人の戦争加担を舌鋒鋭く攻撃した。「軍国主義の文豪　吉川英治」「歌壇ファッショの元兇　斎藤瀏」「海軍御用作家　岩田豊雄」「性根をなほせ　上田広」「俳壇の害虫　富安風生（ふうせい）」といった扇情的な表題からも、その批判の熾烈さは推察できよう（注１６）。

荒は当時、「十二月八日の大詔を拝してこの戦争は聖戦だといつた連中が、終戦の詔書を拝してすぐ民主主義者になつてゐるが、この転向が黙認されてゐる、さういふ文学的環境に対して僕たちは憤慨に堪へないのだ」（荒・小田切他「座談会　文学者の責務」『人間』昭和二一年四月）と述べ、戦犯文学者の安易な転向が黙認されている現状に対し、怒りをぶちまけている（注１７）。

日本共産党系の文学団体である新日本文学会でも、戦犯追及はなされたが、ここでも『近代文学』の同人が重要な役割を果たした。昭和二一年三月に開催された、同会の東京支部創立大会で、提案・可決された議案「文学における戦争責任の追及」の提案責任者は、他ならぬ小田切である（注１８）。以下、その論旨を見てみよう。

日本文学の堕落のその直接の責任者・堕落への指導者はゐなかつたか。人民の魂たるべき文学者にしてかへつて侵略権力のメガフオンと化して人民を戦争へ駆り立て、欺瞞と迎合とによつて支配者の恥しげもない婢女となつた者、特にその先頭に立つた者はなかつたか。自己の批判者が特高警察や憲兵やその他の力によつて沈黙させられたとき奇貨おくべからずとして飛び廻つた者、或は自分の文学上の敵を「赤だ」とか「自由主義だ」とかいつて密告し挑発して特高警察へ売り渡した文学者はゐなかつたか。（中略）すべてこれらはゐた。吾々は以下にその主なる者の名を挙げる。

小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」（『新日本文学』昭和二一年六月）

小田切はこう言って、菊池寛・久米正雄・中村武羅夫・横光利一・佐藤春夫ら、戦犯文学者二五名をリストアップし、「文学の世界からの公職罷免該当者」として、弾劾・追放の狼煙を上げたのである。「吾々は彼等が退くまでその責任の追及をやめぬであらう」と語る、小田切の鼻息は荒い（注１９）。

だが結局、『近代文学』同人や新日本文学会が主導する、これらの追及の火の手が未明に及ぶことはなかった。また、昭和三〇年代以降、吉本隆明・武井昭夫の『文学者の戦争責任』（淡路書房、昭和三一年九月）等によって、戦責追及の第二幕が切って落とされたが、ここで糾弾の対象となったのは、主に壺井繁治・窪川鶴次郎・岡本潤といった共産党系左翼文学者の戦争協力であって、未明に批判の矛先が向けられることはなかった。あるいは、ゴシップ的な筆調で戦後知識人の欺瞞を暴露した『進歩的文化人　学者先生戦前戦後言質集』（全貌社、昭和三二年四月）等の通俗ジャーナリズムの攻撃からも未明は無縁だった。一節で紹介した上笙一郎や二反長半（にたんおさなかば）の証言からも明らかなように、もとより全員有罪の児童文学界に、自浄作用はなかった（注２０）。つまり、戦後の未明はあらゆる勢力からの批判をすり抜け、権威の毀損を免れたのである。

未明は何故批判されなかったのだろうか。最大の要因は、彼が子どもの文学の住人だった点であろう。戦後、戦責追及のメインターゲットとされたのは、大人の文学の住人、すなわち既成文壇の構成員であって、児童文学者の戦争責任は、そもそも追及すべき課題として、広範な認知を得ていなかった可能性が高い。何と言っても、児童文学界は、児童とその父母を顧客とする相対的に小さな業界に過ぎないし、文壇内部の序列（ヒエラルキー）から言っても、一段低く扱われるのが常だったからである。要は、二流・二軍の文学者など、論じるに値しないということだ。

敗戦当時、関英雄は「児童文学の世界が一般からは無視され勝ちな世界であり、その作家たちの多くもいはゆる「文壇」からはハミ出してゐるので、問題を喚起する者がなければ、すべては不問に付されてしまふかも知れない」（「児童文学の展望」『新日本文学』昭和二一年六月）と述べ、その社会的注目の少なさ故、児童文学界の戦責問題が見過ごされてしまうかもしれない旨、懸念を表明しているが、ことは関の懸念した通りに進行してしまったのである。端的に言えば、未明は児童文学界というニッチな業界のぬるま湯の中で、甘やかされてしまったのだ。戦後の未明の無反省を可能たらしめた外在的要因――それは、既成文壇・児童文学界・ジャーナリズム以下、あらゆる勢力からの社会的制裁の欠如に他ならない。

かくして、昭和戦前―戦後期の小川未明の再転向は、戦中の国家主義思想をいち早く清算し、「民主主義革命」に与した完全同調型として、また社会的制裁の欠如を奇貨に自己批判を回避し続けた無反省型として、日本の近代転向史の中に位置付けることができるだろう。

小括

以上見てきた通り、戦中から戦後にかけて、未明は国家主義者から反戦・民主主義の伝道者へと変貌を遂げる。社会主義の放擲に次ぐ再転向だ。本章では最後に、この間の未明の再転向を、大きく三つの観点から振り返りたい。

一つは、日中・大東亜戦争の推進が、反戦の呼号へと反転した点である。未明は戦中、近衛文麿内閣、東条英機内閣がそれぞれ提起した「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」の理念に同調し、日中・大東亜戦争を積極的に礼賛していた。例えば、「我が日本は、実にそれ故に東亜後進諸民族のために、これまで搾取と暴戻（ぼうれい）を恣（ほしいまま）にしたる、米英の鉄鎖を断ち、永遠にその禍根を絶たんとして立上つたのである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と、連合国との戦いの正義性を確信している。

ところが、敗戦後の未明は「戦争ばかりは、地獄にまさる、この世の地獄ですぞ」「みんな大人の犯した悪の報いです」（「悲しみを知らない噺」『社会』昭和二一年九月）と、戦争の悲劇・愚昧さを、童話の作中人物へ嘆かせるに至った。しかも自身の戦争責任に関しては、一言半句たりとも反省の弁を語らない。あまりにも無節操な、朝令暮改振りである。

二つは、政治体制の理想が、天皇を頂点とする家族国家から民主主義へシフトした点である。戦中の未明は、天皇を「国民の父」に、国民を「陛下の赤子」に見立て、国家を一つの家族に準える家族国家観を信奉していた。例えば、「日本の家族制度は、日本精神を中軸と

する、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか？　上下三千年、これがために和協一致が保たれたのである」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）といった発言がそれである。

しかるに、戦後の未明は、「真の民主主義への新しき芽を擁護しなければならない」（「現下の所感」『児童文学新聞』昭和二五年三月一日）と説き、「暇があれば、選挙候補者の演説を聞き歩く」（「心の芽」『少国民の友』昭和二一年二月）民主青年を、自作の主人公に据えている。天皇を核とする家族国家への愛慕は、雲散霧消してしまったのである。

三つは、資本主義批判の質が、制度に対する弾劾から、個人の私欲を戒める方向へ転じた点である。戦中の未明は、資本主義こそ、民衆を堕落させる諸悪の根源と見做し、徹底した痛罵を浴びせていた。例えば、「資本主義は、いろいろの分業を産み、人間を機械に隷属せしめ、人間を退化せしめたのだ」（「日本的童話の提唱」同前）と述べ、人間の「退化」の原因を資本主義に帰責させている。

翻って戦後の未明は、資本主義というシステムそのものへの批判を、さほど行わない。むしろ、人々が資本主義から悪影響を受け、欲望にまみれた存在とならないよう、個人の心がけを糺そうとする傾向が顕著である。成金に母の思い出のバラを売り渡さないヤスケじいさん（「金で買えない仕合せ」『こども朝日』昭和二三年七月）や、「人間も、まちがつた考えや、欲望さえ持たなければ、互に親しみ合うことが出来て、美しいにちがいがありません」（「託児所のある村」『文学教育』昭和二六年一〇月）と欲望の放棄を説く青年画家は、未明の反私欲の祈念が具現化した存在だろう。制度の糾弾より、人心の啓発に、力点が置かれている。

そして、上記三点に特徴付けられる戦後の未明の再転向は、日本の近代転向史上、次のような位置を占めていると言えるだろう。すなわちそれは、程度的には、戦中の（超）国家主義からＧＨＱ主導の「民主主義革命」へいち早く移行した完全同調型であり、形式的には、過去の己が振る舞いに対して、決して内的反省（自己批判）を加えない無反省型であった。既成文壇・児童文学界・ジャーナリズム等の関係各界が、未明の戦争責任を不問に付したこと――すなわち、社会的制裁の欠落――が、このような無反省を後押しする外在的要因として機能していた点は、見過ごすべきではない。

周囲の無批判に勢いを得たかつての国家主義者は、即席の新生リベラルとして生まれ変わり、戦後社会を再出発して行ったのである。未明はまたもや、脱皮したのだ。

注

1　山中恒の『戦時児童文学論』（大月書店、平成二一年一一月）は、昭和戦前期の未明の国策協力を詳述した労作だが、本書は戦中の歩みのみに焦点を合わせているため、大正・戦後の足跡や、三者の前後比較は論じられていない。なお、未明の変節については、鳥越信も「ともかくこんなにはげしくゆれ動いた作家は珍しいと思うが、もっとふしぎなのは、そうした未明への否定的・批判的な評価はほとんどなく、常に未明はその時々の日本児童文学の頂点に立つ作家として、高い評価を与えられてきた点である」（「小川未明」『鑑賞日本現代文学』第三五巻、角川書店、昭和五七年七月）と指摘している。

2　児童文学者協会の綱領・規約は、蔵原惟人・中野重治・宮本百合子らが設立発起人を務めた、新日本文学会の綱領草案「民主主義的文学の創造とその普及」、規約草案「本会ハ民主主義文学ノ創造ト普及トヲ目的トスル」（『新日本文学　創刊準備号』昭和二一年一月）と、ほとんど変わらない。加えて両団体は、民主主義文化の建設を目指す日本民主主義文化連盟へともに加盟しており、児童文学者協会は、菅忠道・関英雄・奈街三郎の三名を評議員として送っていた。

3　未明の次女・岡上鈴江によると、芸術院賞受賞に際しては、大正時代、未明を監視していた特別高等警察の刑事からも、祝いの手紙が送られてきそうだ。「父と母は感慨無量な面持ち」（『父小川未明』新評論、昭和四五年五月、九六頁）であったと、岡上は回想している。

4　「童話を作って五十年」（『文藝春秋』昭和二六年二月）、「童話に生きる」（『中学時代』昭和二六年八月）、「人生案内」（『ニューエイジ』昭和二六年一〇月）、「児童文学」の夜明けへ」（『読売新聞』昭和二八年八月二四日）、「常に希望をもつ」（『中学時代』昭和二九年二月）、「童話と私」（『改造』昭和二九年六月）、「私の一転機」（『週刊朝日』昭和三三年五月一四日）等。

5　宮川建郎「さよなら未明　――「童話伝統批判」と現代児童文学の成立」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年四月）参照。

6　「故小川未明氏に金一封」（『朝日新聞』昭和三六年五月一三日夕刊）参照。

7　「心の芽」の初出誌である『少国民の友』（昭和二一年二月）を紐解くと、未明に限らず、全体として、民主主義賛美の色調が濃厚である。例えば、同誌の巻頭論文、平貞蔵「民主主義とはどういふことか」では、民主主義という政治思想の歴史的来歴を概観した上で、「連合国からさういはれなくとも民主主義の国、民主主義的な人間になるのがほんたうなのです。（中略）また国がほんたうに進歩するのにも民主主義が最もよいのです」と結論付

けている。あるいは、米陸軍中尉のエイリーン・R・ドノーヴアン「進駐軍よりおくる　日本の子どもたちへ」では、「アメリカでは、民主々義的精神の漲つてゐないところはありません」「アメリカの子供たちは、大変程度の高い文明生活の中に、一人の責任ある社会人として養成されてゐます」と、民主主義を実践するアメリカの子どもの教育レベルの高さを褒め称えている。

８　秋山清・小野十三郎らが編集責任者を務めた雑誌『コスモス』の創刊の辞でも、戦中・戦後の文学者の変節は、「敗戦の今日ではまた風の吹き廻しで猫も杓子も民主々義を唱へ昨日まで反動的国家主義の笛を吹いてゐた者までが恬然として自由の歌手に早変りするといふさはぎです」（「創刊について」『コスモス』昭和二一年四月）と批判されている。繰り返しになるが、未明もまた、そのひとりであった事実は疑い得ない。

９　例えば、大正期の評論「新社会の人間たらしむべく」（『女性』大正一二年三月）には、「私は、ある金持の細君が、病気で熱の高い子供を女中に委して、自分達は、自動車に乗つて芝居を見に行つたといふ事実を、ある人から聞かされた時に、其時、私は、この無恥、薄情の女をどんなに心で憎んだか知れない。「プロレタリアには、そんなものはない」と、さへ私は、叫んだのです」との記述があり、子どもの看病より「自己享楽」を優先させるブルジョア夫人への憎悪が表明されている。あるいは、昭和戦前期の評論「発足点から出直せ」（『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）には、「独り芸術家だけでなかつたが、金にさへなり、同時に虚名を博される場合には、往々人たることの矜持を忘れて、裸になつて踊ることも辞さなかつたでありませう。世間もまた新聞や雑誌の上で有名にさへなれば、その人を成功者として、特別に扱ひ、羨望したのであります。資本主義が、人間をして堕落させること、大概此の如くであります」との記述があり、金と名声に浮かれる成功者の様子を裸踊りに譬えている。

１０　鶴見は、ＧＨＱが日本人の思想矯正のために駆使した、具体的な手段として、以下の事柄を挙げている。「占領軍のつかった強制力は、戦争裁判、公職追放、軍国主義的教科書の使用禁止、ラジオ・映画・新聞・雑誌の検閲など。各種の国家主義的運動に財源を提供してきた層が、財閥解体と農地改革で余力をうばわれたことも、国家主義者の転向への間接の強制力としてはたらいた。国家主義的な人びと全体のうしろだてとなってきた勅語と欽定憲法とが、天皇人間宣言と平和憲法によっておきかえられたことも、国家主義者の転向への強制力としてはたらいた」

１１　以下、吉本。「戦争期に、年少のわたしが、おおくの影響をうけた文学者のうち、横

光利一は、敗戦の打撃から立ちあがれないままに、病没した。太宰治は、敗戦の痛手の対症療法として自ら課したデカダンスをつきつめて自殺した。保田与重郎は沈黙し、戦後挑発的にかかれたその批評は卒読にたえぬくらい無残のていをなしている。小林秀雄もまた然り。ひとり、高村光太郎のみは、悪びれず戦争責任に服し、改訂すべき思考を改訂し、改訂すべきではないとしんじたものを主張したまま、文学的活動をつづけ、その強靭さは、別格をなした」（一四一頁、傍点原著者）

12　浦西和彦「徳永直「太陽のない街」発表年月・共同印刷争議・設定年月・絶版について」（『国文学』昭和四八年一二月）参照。

13　中野重治も、「創立大会の報告」（『新日本文学』昭和二一年三月）の「八、文学者の戦争責任追及」で、好むと好まざると今次の戦争に協力した、民主主義文学者の自己批判の必要性を説いている。「今回の侵略戦争において日本の文学者は欺瞞され強制されて協力したものもある。又積極的にこれを支持し協力したものもある。これに対して民主主義文学者は、自己批判の問題としてとりあげねばならない。いかなる文学者が、いかなる場面において、いかなる作品をもつて、侵略闘争（ママ）を支持しそれに協力する役割を果したか。又文学と文学者の活動を組織的暴力的に破壊しようとした文学者や文学団体はどんなものがあるか。これを文学者及び文学の問題として、どこまでも自己批判的に追及しなければならない」

14　児童文学者の反省の弁には、例えば、次のようなものがある。中川正文「ああいふ悪い時代には、だれもが、あんな風に便乗迎合するのは、やむをえないことであつたのだと、ニヤニヤと笑つて過せる卑猥な神経を、いまこそ根こそぎに苅りとらねばなりません。自分をさへ見失つた、みぢめなにんげんに堕ちこんでいつたのは果してだれの罪であつたかといふことを、自分をふくめて、鞭うちたいと思ひます」／武田亜公「私どもは今度の帝国主義戦争に於て不覚にも少なからぬ動揺を来し、心とちぐはぐな行ひまでやつて来たことは大いに反省を要する。自己の個人的な生活や、ただ単なる保身的な立場から心にもない仕事をなすが如きは最も恥づべきことではなかつたらうか」／槇本楠郎「無謀な侵略戦争下にあつては、作品や評論を発表しようとする時、作家・評論家・編集者等は、程度の差こそあれ、誰しも反動政府の方策に追随または妥協せしめられたことである。これを強く反省し、今後は自由闊達に生きるため、お互ひに大いに革命的民主主義に徹せねばならぬと思ふ」

15　高橋新太郎「文学者の戦争責任論ノート（一）」（『国語国文論集』平成三年三月）、飛鳥井雅通「民主主義文学運動　――作家たちの戦争責任をふくめて」（『国文学　解釈と教材の研究』昭和四〇年一一月）、荻久保泰幸「文学者の戦争責任論争」（『国文学　解釈と鑑

賞』昭和四五年六月）等参照。

16　この他、「十年代の悪典型　島木健作」「耄碌旦那の繰言　佐藤春夫」「常習転向者　藤沢桓夫」「無恥なる孤独者　青野季吉」「ヒトラーの再現を望むもの　芳賀檀（まゆみ）」等。同紙の「発刊のことば」（昭和二一年一月一日）には、「おもへ！　われら青春の日に目撃した惨事の数々を……。日本ファシズムが文学に加へた蛮行と凌辱は、消えることのない瘢痕と化し、いまなほ疼きを覚えるのだ。（中略）だが、かれらファシストたちと陰に陽に力をあはせた作家、評論家がゐたことを忘れることはできない。その最大なるものは、『聖戦』文学の製造者とその支持者である。かれらは銀三十枚とキリストを換へたユダのごとく、卑小な野心、些（いささ）かの生活の資をえんとして、文学の純潔を娼婦のやうに自らの手で泥土に委ねたのであつた」との記述があり、戦時中、国策に与した文学者が、裏切者のユダに準えて、徹底弾劾されている。

17　よほど腹に据えかねるのか、荒の批判の矛先は、同じ左翼陣営内部にも向けられている。荒は、藤森成吉が新日本文学会の設立発起人に名を連ねている件に関して、「ところで、戦争責任の疑ひ無きにしも非ざる藤森成吉が「新日本文学会」の発起人になつて、民主主義文学者糾合の先頭に立つたりしてゐることは、政治的感覚もさうだが、それ以上に芸術への愛情を欠いてゐるからだと邪推するが、如何」（「同人雑記」『近代文学』昭和二一年二月）と、疑義を呈している。

18　小田切は、同議案の提案責任者を引き受けるに至った経緯について、会全体の雰囲気と自分の意志の二つが作用した由、「文学と戦争責任」（『現代の眼』昭和四〇年八月）で綴っている。「結局わたしが提案責任者にされてしまったのだが、いまでも記憶にあざやかなのは、多くの出席者のあいだにはこのていどのことではあきたらないという気分が一方にあり、同時にまた、自分自身が提案責任者にされるのはイヤだ、ということがあって、なかなか責任者がきまらず、結局のところその席での最年少者で経歴もとぼしいわたしにおしつけられたという面と、その場の空気からして、わたし自身がひきうけて前文・後文にあるようなことを進んではっきりと言っておく必要があろうと考えたために、結局のところわたしとしては責任者となることを拒まなかった、という面とがある」

19　小田切は、同号に発表した評論「新文学創造の主体」（『新日本文学』昭和二一年六月）でも、「吾々は終戦までの自分自身がどうあつたかを自らきびしくかへり見、追及し、その実態を究めることでこれを克服せねばならぬ。口を拭つたところからは新しい文学精神の輝きなぞ生れて来はしない」と述べ、文学者が自らの戦争責任を徹底的に追及する必要性を

説いている。

２０　砂田弘は、「戦争責任はどう問われてきたか」（『日本児童文学』平成七年八月）で、「「民主主義的児童文学の創造と普及」を綱領に掲げて創立された協会が、小川未明を会長に選んだという矛盾に象徴されているように、児童文学の戦争責任の問題は、清算されないままで、いまも私たちの前に残されているのである」と記し、未明を児童文学者協会の初代会長に据える「矛盾」を犯した児童文学界には、戦後五〇年を経てなお、戦争責任の問題が未清算のまま滞積している由、主張している。

一一章　反転するイデオロギー　――童話「兄の声」

はじめに

小川未明「兄の声」は、大東亜戦争敗戦直後の昭和二一年四月、雑誌『子供の広場』へ掲載された短編童話である。現代仮名遣い・当用漢字が内閣告示によって施行される昭和二一年一一月以前の作品であるため、本文は全文、旧仮名旧漢字。挿絵は画家・富樫寅平が描いた。初出後は、童話集『赤い雲のかなた』（小峰書店、昭和二四年一月）へ初収されたのを皮切りに、昭和二〇年代・五〇年代に刊行された、講談社版の二度の全集にも採録されている。戦後の未明童話の代表作のひとつと言って、差支えなかろう（注1）。

物語は、主人公の語り手・僕（武ちゃん）が、特攻隊員の兄（義ちゃん）の思い出を振り返る形式で進められる。回顧されるエピソードは、召集前の日常生活から特攻直前の一時帰宅の様子まで多岐に渡るのだが、注目すべきは、本作の兄が、それ自体、天皇制国家主義の権化とも言うべき特攻隊員――戦時中は「救国の恩人」「至誠の華」などと賛美された――でありながら、自由や平和という理念を信奉する、戦後的な価値の体現者として造形されている点だろう。兄が弟に残した遺言「お前は、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」はその象徴である。

だからこそ、と言うべきか。これまで本作は、未明の平和への希求が具現した作品として積極的に評価される反面（船木枳郎・菅忠道）、戦中の戦争推進言説との矛盾を指摘する際の主要な論拠ともなってきた（乙骨淑子・上野瞭）。本作をめぐる評価は、言わば、肯定派と否定派の二派に分立しているわけである。しかし、どちらの立場の論者も、部分的な品評に留まるのみで、独立した作品論を著していないのは、先行研究の限界という他ない。つまり、双方とも、自説を十分に立論し切れてはいないのである。

そこで本章では、以下、おおよそ後者の立場から、童話「兄の声」が、戦中の国家主義的言説とは明確に位相を異にする、戦後の再転向文学であることを論証したい。故に筆者は、まず、敗戦の前年、昭和一九年に書かれた四篇の国策協力童話の分析を行い（一節）、それらの童話群に頻出する航空兵表象と、「兄の声」のそれが、如何に背馳しているか、両者の比較を通して明らかにする（二節）。次に、八・一五後の未明の随筆や評論、並びに同時代の未明評の検討を介して、彼が自身の戦争責任問題について決して向き合わず、ＧＨＱ施政下の時局に便乗した点、また、周囲の児童文学関係者も誰ひとり彼の思想的旋回を批判し得なかった点を、つまびらかにする（三節）。さらに、敗戦後の文学者の動向の包括的な

素描を通して、未明の左傾言説の裏にある文学史的背景を解き明かす（四節）。

日中戦争後、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）で、社会主義思想を清算し、国策協力の姿勢を鮮明化した小川未明は、こと敗戦に至るや、またしても恥じらいなき再転向を遂げた。筆者は、未明を貶める意図も資格も持ち合わせていないけれど、それは紛れもない事実である。

一、海鷲と陸鷲 ——昭和一九年の国策協力童話

敗戦の前年、昭和一九年に、小川未明は計五篇（「太平洋」「ニイサントアヲ」「タカトウミワシ」「ユウキチノスキナヒト」「ボクモウテルゾ」）の童話を著した。が、これらの童話の内、『定本小川未明童話全集』全一六巻（講談社、昭和五一年一一月～同五三年二月）へ収められているのは、わずか一篇（「ニイサントアヲ」）に過ぎない。残りは、戦時色が強すぎるため、掲載を見送られたのであろう（注2）。つまるところ、隠蔽である。

そこで本節では、「兄の声」を読解するに先立ち、従来黙殺されてきた、これら四篇の国策協力童話を俎上に載せたい。同作の航空兵（特攻隊）表象と戦時下のそれが、如何に異なるかを、剔抉するためである。

「太平洋」（『少国民の友』昭和一九年四月）は三人称童話。主人公は少年・良吉だ。良吉は、兄と姉の三人兄弟だが、「人一倍の愛国家であつたにいさん」は、出征後、「敵の潜水艦におそはれて」遭難。姉と良吉は、敵国・米英への報復を誓う。

しかし、けなげな良吉の姉は、いつまでもかなしんでゐませんでした。女ながら奮起して、兄の職業（床屋——引用者注）をつぎ、弟を学校へ送り、りつぱな人間にすることを決心したのです。そして、弟をはげまし、自分は、銃後婦人のつとめをよくつくしました。「良ちやん、ゆうかんな飛行兵となつて、にいさんのあだをうたなければいけませんよ」と、姉は、弟に向かつて、いひました。「ねえさん、僕は、なるとも。しんぱいしなくて、いいよ。僕は、このごろ、毎夜、敵機を追ひかけるゆめを見るのだよ」

兄の亡失後、「銃後婦人」と化した姉は、仇討ちのため、「ゆうかんな飛行兵」となるよう弟を鼓舞し、良吉もその志を、毎夜夢に見るまで内面化している。良吉は、周囲の大人が空襲避難の話をしていると、「いよいよ敵機が来襲しさうだから、どこへ避難したら、安全だらうなどと話してゐたぢやないか。あんなことをいつて、男が、はづかしくないのかね」と激

怒するほどの、熱血漢だ。

そして物語は、作品末、良吉が「をぢさん、僕も、ぢきに若鷲になるのですよ」と叫び、床屋の客が「お前さんも、飛行兵になるのかね。さうなくてはならぬ。あいつらをやつけ(ママ)なくて、何のじいうも、幸福もあつたものか」と呼応するところで終わる。「若鷲」は、帝国陸海軍の航空兵の別称で、当時、海軍の飛行士は「海鷲」、陸軍の飛行士は「陸鷲」と呼ばれていた。「若鷲」「荒鷲」「神鷲」は、これらの総称である。本作の少年主人公・良吉は、報復・報国のために、空の「鷲」を目指す、家族愛に満ちた皇国少年として造形されている。

「タカトウミワシ」(『良い子の友』昭和一九年五月)は三人称のカタカナ童話。主人公はタカノコ(鷹の子)だ。タカノコはある日、籠に捕らえられたホホジロ(頬白)を発見し、助けようとするが、自身も人間の仕掛けた霞網によって拿捕されてしまう。と、そこに現れたのが子どもの兄弟で、航空兵志望の兄は、将来、海鷲になろうとする自分と同様、未来ある鳥であるタカノコを解放してあげた(「ドウシテ　ニガスノ」ト、フシギサウニ　オトウトハ　キキマシタ。「ダッテ、ボク　モウヂキ、ウミワシニ　ナルノヂャナイカ」ト、アニガ　イヒマシタ」)。これを恩義に感じたタカノコは、作品末、兄が出征したと聞き、「モウイッタノカ。ソレナラ　ワタシモ　イッテ　オンガヘシヲ　シナケレバ　ナラヌ。ワタシハ、テキノ　メダマヲ　ツツイテ　ヤル」と、恩人への助太刀を誓うのである。

物語の話型は、伝統的な動物報恩譚――民話「鶴の恩返し」からジブリ映画「猫の恩返し」まで連綿と継承されている――なのだが、報恩の手段が敵兵の眼球破壊である点に、拭い難い時局性が露見していよう(**注3**)。端的に言って、血生臭いのである。

「ユウキチノスキナヒト」(『良い子の友』昭和一九年七月)は三人称のカタカナ童話。主人公は少年・ユウキチだ。ユウキチの「スキナヒト」とは海軍の航空兵で、好きな人というより憧れの対象に近い。そんなユウキチはある日、隣家のおじさんの紹介によって、現役の海鷲と面会する機会を得る(「キミハ　大キク　ナッタラ、ウミワシニ　ナリタイト　イッタネ。ココニ　オイデノ　カタハ、ユウカンナ　アラワシ　ダ。ソロモンデ　テキキヲ八ダイモ　ウチオトサレタ　シュクンシャ　ダ」)。ユウキチは、「ヒゴロ　ソンケイスル、ウミワシノ　ユウシヲ　ミテ、メヲ　ミハリ」、海鷲が戦死の覚悟を語るや、「オニイサン、ソノ　アトニハ、ボクタチガ　ツヅキマス」と絶叫する。殉国の誓いと言ってよかろう。

また、本作のユウキチは、蜘蛛を見て、「ズルイ　ヤツ　ダ。ヨワイ　ムシタチノ　イキチヲ　スッテ、マルマル　フトッテ　キルノ　ダラウ。ベイ・エイ　ミタイ　ダナ」と米国や英国を連想しているけれど、この蜘蛛と米英を同一視する着想は、「大東亜共栄圏」イデ

オロギー以外の何者でもない（注4）。「ヨワイ　ムシタチノ　イキチヲ　スッテ、マルマルフトッテ　キル」蜘蛛に、アジア後進諸国を植民地支配する両国の姿が、重ね合わせられているのである。

「ボクモウテルゾ」（『良い子の友』昭和一九年九月）は一人称のカタカナ童話。主人公はボクことマサチャンだ。マサチャンは少年航空隊入りする友人・セイチャンの出征を見送った後、在りし日のセイチャンとの思い出を回想する。このセイチャンは、米国の主力爆撃機・B‐29を批判し（「テキガ　日本ヲ　バクゲキ　スル　タメニ　ツクッタノ　ダ」）、その撃滅を誓うほどの愛国少年なのであった（「イクラデモ　ヤッテ　コイ。ミンナ　タタキオトシテ　ヤルゾ」ト　セイチャンハ、ゲンコツヲ　フリアゲマシタ」）。

そして作品末、追想を終えたマサチャンは、「ボクモ　セイチャンニ　マケヤシナイ、テキニ　マッシャウメンカラ　ブツカッテ　イク。サウシテ　クヮイブツノ　一バン　ダイジナ　シンザウヲ　ネラッテ　ウツ。テキキハ　ヒ　ヲ　フイテ　ツヰラク　スル　ダラウ。タシカニ　ボクニモ　デキマス」と述べ、自らもセイチャンに伍する空の戦士となることを決意するのである。

さて、以上本節では、未明が昭和一九年に著した四篇の童話を検討してきたわけだが、これらの童話には、おおよそ以下のような共通の筋書き（プロット）が見受けられよう。すなわち、①物語の主人公格は航空兵（海鷲・陸鷲）志望の少年であり、②彼らは、兄弟や友人など、周囲の人物の出征によって愛国心を喚起され、③自らも参戦・報国への決意を叫ぶ、というのがそれである。「タカトウミワシ」は、主人公が動物なので、やや筋立てが異なるけれど、それ以外の童話は皆、この図式を反復している。政府主導のもと、官民一体となって少年航空兵の勧誘を行っていた時流の影響が窺える（注5）。

また、「大東亜戦争は、米英にくるしめられてゐる、アジアの国々を、日本が助けて、そのおそるべき悪魔の手からすくひ出すためにおこつたものです」（「太平洋」）などと、交戦国・米英への敵愾心を露骨に煽っている点も見逃せないポイントだ。

当時、読者の側だった少国民世代――昭和一桁生まれ――の児童文学作家には、昭和戦中期の未明の国策協力を非難する向きが少なくない。例えば、山中恒（昭和六年生まれ）は、「未明はこの時期、如何なる思い違いや、誤認があったにせよ、疑いもなく天皇制ファシストの走狗だったのである」（『撃チテシ止マム』辺境社、昭和五二年三月、一三〇頁）と弾劾。乙骨淑子（昭和四年生まれ）は、「紙数の関係とはいえ、作品集に収録できないような作品をなぜ書いたか、それを書かせたものは作者の何であったか、という検討をぬきにして放置

してしまう事は、未明の評論や作品を読んで戦争へ行ったかもしれぬ数多くの青少年に対しても心に残るものを感じる」（「小川未明ノート　――文学革命のゆくえ」『文学』昭和四〇年五月）と、未明作品に影響を受け、勇んで戦地へ馳せ参じたかもしれない若者（の死）に思いを馳せている（注6）。

彼らは自らが使嗾された――戦後的な観点から振り返れば、騙された――世代であるだけに、憤りもひとしおなのであろう。事実、そのような怒りを向けられても仕方がない言動を、この時期の小川未明は繰り返していたのである。

二、童話「兄の声」　――空疎な遺言

かくして、サイパン島・テニアン島・グアム島の日本軍が全滅し、太平洋の制空権・制海権を完全に失いつつあった――米軍の本土空襲への地ならしが着々と進みつつあった――昭和一九年、小川未明は、帝国陸海軍の航空兵として活躍することを夢見る少年烈士を繰り返し描出していた。以下、本節では、これらの航空兵表象を念頭に置きつつ、童話「兄の声」を読んで行こう。

はじめに整理しておきたいのは先行研究である。冒頭述べた通り、本作に関する独立した作品論は現状存在しないが、研究者や児童文学作家の部分的論及は、複数見受けられる（注7）。

本作を未明の平和への志向が具現した作品として肯定的に評価するのは、船木枳郎（しろう）と菅忠道の二人だ。弟子筋の船木は、「「兄の声」は戦後の作品ですが、「金歯」と同じく美と平和の世界への憧れを描いています」（「否定と理想の文学」『赤い雲のかなた』小峰書店、昭和二四年一月）と留保抜きに師匠を称賛。菅は、「小川未明の戦後いちはやい作品「兄の声」（「子供の広場」創刊号、昭和二十一年）は、たしかに〝戦争と平和〟の問題に対決してはいた」と一定の評価を与えた上で、「老大家の悲壮なまでの取り組みかたにもかかわらず、晩年の未明の思想と創作方法では、主題の重さも戦争体験のずっしりした質量感も、表現しきれなかった」（『日本の児童文学　増補改訂版』大月書店、昭和四一年五月、三六〇・三六一頁）と、その限界も指摘している。

一方、戦中期の国策協力との絡みから、本作を否定的に評価するのは、乙骨淑子と上野瞭の二人だ。両者が問題視するのは、作品末、主人公の僕（武（たけ）ちゃん）が聞く、特攻隊員の兄の遺言「お前は、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」である。この遺訓について、乙骨は、「「兄の声」（昭和二一年）の特攻隊で死んだ兄がいう「真に自

由と正義と平和のためにつくせ！」という言葉はしらじらし」（「小川未明ノート　――文学革命のゆくえ」『文学』昭和四〇年五月）いと断罪。上野は、「敗戦翌年の作品『兄の声』の結末部で、「おまえは、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」と、「兄」に叫ばせたが、この場合の「自由」や「正義」や「平和」は、戦中に否定した「自由」とは別のものだというのだろうか」（「戦時下の児童文学＝小川未明の場合」『ネバーランドの発想』すばる書房、昭和四九年七月）と、戦中、愛や自由を「小市民的な思想」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）呼ばわりしていた、自身の言動との整合性を糺している（注8）。

前節でも記した通り、乙骨と上野は、大東亜戦争期に少年時代を過ごした少国民世代なわけだけれど、戦中から戦後にかけて、多くの大人が辿ったコペルニクス的転回――天皇制国家主義から反戦・民主主義への移行――に対する怒りは、「兄の声」評価において、公然と裸出していよう。そしてその怒りは、彼ら自身、銃後の少国民として調教され、あわや戦死を余儀なくされていたかもしれないだけに、至極当然のものと言わなければならない。

そこで筆者は、戦中・戦後の背離を問題視する乙骨・上野の着眼を踏まえつつ、以下、より精緻に童話「兄の声」の思想的旋回を明らかにしたいと思うのである。読解の核となるのは、言うまでもなく、航空兵の兄がどのように表象されているのか、という点だ。

結論から先に言うと、本作の兄は、文化を愛し、権力を忌む、平和志向の好青年として表象されている。この兄は、召集前、会社勤めをしていたのだが、職務外の「買ひだしや、家事の雑役」を押し付けようとする上司に対しては断固背き、「そんなひまがある時は、映画を見たり、レコードを聞いたり」して過ごす、文化愛好青年なのであった。「外国物では、アベマリヤとか、粗朴ながら、血のつながりに、哀愁をもよほす日本の俚謡」がお気に入りのレコードで、音楽を聴くと「美しい、絵のやうな景色が、目に浮かんでくるよ」云々と、弟にロマンティックな空想の詳細を語っている。

また、この兄は、「会社で、上の者が権力によつて、下の者をおさへつけようとするのを見て、何より不愉快に思」う、反権力的な人物でもあった。会社の居心地を問う友人に対しては、「考へてごらんなさい。命令と服従しかないところに、いつたい、なごやかさなどといふものがありませうか」と、上意下達の会社のシステムを批判。上役へ媚びる同僚に対しては、「自分からこのんで、奴隷にならうとしてゐる」と、その奴隷根性を軽蔑している。

このような兄が、「命令と服従」を統制の原理とする軍隊に順応できるとは、到底思えない。特攻の直前、暇乞いをするべく一時帰宅した兄は、ただひたすら涙を流すだけである。

ある日、だれか玄関へ来たやうな気はいがしたので、姉が出てみると、立つてゐたのが兵隊すがたの兄だつたので、姉は、びつくりして、「まあ、義ちやんなの？　お母さん、義ちやんが帰つてきましたよ……」と、さけんだ。その声をきいて、母も、僕も、ころげるやうにとび出しました。兄は、泣いてゐるのです。「さあ、早くお上り、どうしたの」といつて、母も泣きました。（中略）姉も、「義ちやん、どうかしたの？」と、いつて、兄の顔をのぞくやうにしました。兄は、あとから、あとから、目にあふれ出る涙を、手の甲でふきながら、頭を左右にふつて、「みんなの顔が見られて、うれしいのだ」と、わづかに答へたのです。

本作の航空兵は、出征やその結果生じる戦闘行為について、何ら積極的な感情を持ち合わせていない。物語の語り手である弟が、「美と平和を愛する兄」「美と平和をこの上なく愛した兄」と繰り返し規定した通りの、心優しい平和主義者として造形されている。

したがって、昭和一九年の国策協力童話群の航空兵表象と「兄の声」のそれは、明確に様相を異にしていると言わなければならないだろう。前者にあって後者にないもの、それは猛々しい戦意である。昭和一九年の海鷲・陸鷲志願者は、「僕は、このごろ、毎夜、敵機を追ひかけるゆめを見るのだよ」（「太平洋」）、「イクラデモ　ヤッテ　コイ。ミンナ　タタキオトシテ　ヤルゾ」（「ボクモウテルゾ」）と息巻く小戦士であり、「大東亜共栄圏」イデオロギーに基づく米英批判を展開していたのであった（「ユウキチノスキナヒト」）。が、「兄の声」では、このような戦意が完全に消失してしまっている。

逆に、戦後の航空兵には、戦中は痛罵の対象だった、自由や平和という価値への志向が注入されている。兄の会社組織批判や、遺言「お前は、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」は、その産物だ。敗戦を挟む、わずか一・二年の間に、航空兵が叫ぶ思想的言辞は、一八〇度転換したのである。次節で記す通り、これは敗戦の結果、時代の思潮となった戦後民主主義的価値観を未明がいち早く受容した結果であろう。初出誌『子供の広場』にも、上記の価値観は横溢していた（**注９**）。

だが、問われなければならないのは、兄の遺言に象徴される、そのような戦後的価値への信奉を、作者・未明が、臆面もなく特攻隊員に仮託してしまってよいのかという点である。なぜなら、号泣して死地へおもむいた本作の兄――さらに言えば、帝国陸海軍の無数の特攻隊員――は、戦中、未明がかくあるべしと国家主義的イデオロギーを吹き込んだ、勇敢な海鷲・陸鷲志願者たちの末路であり、若者を生還の見込みのない「十死零生」の戦法（**注１０**）

へ追いやった責任の一端は、当の未明にも確実に存在するからである。

この点に関する自責の念が言明されないまま物語られる兄の戦後的な訓戒は、乙骨が批判する通り、「しらじらし」いし、空疎な遺言と評価せざるを得ない。童話「兄の声」には、自身の戦争協力に対して自己批判の回路を持たない／持てないまま、戦後社会という新しい時局に便乗していった、小川未明の反省なき再出発のあり方が克明に記録されているのである。

三、秘匿された聖戦賛美 ——八・一五後の未明

最後に本節では、敗戦後、小川未明が辿った反省なき再出発の軌跡を、評論や随筆など、童話以外のテキストを参照しながら、辿って行きたい。また、周囲の識者の同時代評に着目することで、戦後の児童文学界における、未明評価の特徴を明らかにする。

八・一五後の未明の左旋回を示す、もっとも有意な指標のひとつは、民主主義に対する評価の変遷であろう。この点、童話「兄の声」の前月に発表された随筆「春同じからず」は、極めて興味深い内容を持つ。

> たとへ今時の革命が、与へられたる革命にせよ、そして、また自然に、必至に、発生したるものの如き情熱に欠けてゐるにせよ、曠古の大革命たることに変りはない。なぜなれば、民主々義は、今や汪渾として、全世界を震撼しつつある、輝かしき思潮であるからである。いかなる国柄と雖も、恐らくこの外に立ちて、洗礼を受けぬことは到底許されぬであらう。曾て、多くの国々は、冷厳な権力下の重圧裡に包じこめられてゐた。また国民は、封建制度に束縛され、監視の眼から脱する能はず、苦しめられて来たのである。しかるに、図らずも、民主々義革命の峰火は、其等の国々に独立の曙光を与へ、民衆に、人間性解放の希望を約束したのであつた。
>
> 「春同じからず」（『随筆人』昭和二一年三月）

本随筆で、「全世界を震撼しつつある、輝かしき思潮」、あるいは「民衆に、人間性解放の希望を約束」する思想として賞賛されている民主主義は、そのわずか一年ほど前まで、「吾等の文化は、民主々義的な、敵性文化の類似であつてはならぬのである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と、「敵性文化」呼ばわりされていた概念である。時節に合わせて、価値判断を一変させる変わり身の

早さは、さながら風見鶏と言ってよい。

一〇章「再転向者の軌跡　――反戦・民主主義への旋回」でも既に記した通り、未明は自身の戦争責任については、一切口をつぐんだまま――総括を回避したまま――、反戦・民主主義という戦後社会の新たな価値体系（パラダイム）へ、適応して行ったのである**（注１１）**。この時期、未明は「作品は、純芸術であるべきだ、単にイデオロギーで引きずっていくようなのは、功利的と見なされよう」（「小川未明・坪田譲治・浜田広介の語る」『日本読書新聞』昭和二三年五月一二日）と、文学にイデオロギーを持ち込むべきではない旨、発言しているが、実際は、上記の反戦・民主主義思想を注入した童話作品を複数執筆していた**（注１２）**。

一方、戦後の未明の左傾化が、大正期に傾倒した社会主義思想への先祖返りでない点は注意が必要だろう**（注１３）**。戦中、「君に忠にし、親に孝にし、国家を愛することは、人間としての、日本人としてのよろこび」（「指導者自らが燃え立たずば」『新しき児童文学の道』フタバ書院成光館、昭和一七年二月）であると語っていた未明は、戦後もなお、「祖国を悪くいふものは、己れの母親を他人の前で批評すると等しい」（「独自に生きん」『月刊読売』昭和二一年一月）と断言する愛国者であり、国民を階級によって二分する階級闘争史観には、極めて否定的だった。

例えば、共産主義者の取り締まりを目的とする「非日活動委員会」の設置の是非を問うアンケートに対し、未明は「反対　日本を愛し、民族を愛せざるものは一人もないと思います。ただ解放の手段を異にするだけです。同胞を信じ、友人を信じ、人間性を信ずべきです。階級闘争を激化すべきでない」（「非日活動委員会に関する諸家の意見」『世界評論』昭和二四年五月）と回答している。未明の志向は、あくまでも、国家や民族という枠の中での政治的リベラリズムに留まっているのである。

さて、同時代の未明評も確認しておきたい。昭和二一年から二五年の間の五年間に、未明は計三六冊の童話集を刊行しているが、これらの大量の著書のほとんどは旧作の再録であり、作品の選定にあたっては、外部の作家や編集者が関わっていた。つまり、自選ならぬ、他選童話集なのである**（注１４）**。どうして、その経緯がわかるのかと言えば、上記の童話集には多くの場合、かかる編者の「まえがき」や「あとがき」が付されているからだ。そして、それらの短文によって、私たちは、書物の成立過程のみならず、当時の未明評価の一端を窺い知ることができる**（注１５）**。

程度の差こそあれ、ほぼすべての解説に共通するのは、未明を偉大な文豪として讃える視点である**（注１６）**。例えば、奈街三郎は「〝文学は人なり〟と申しますが、先生にお目に

かかりますと、いかにもこのような美しい童話をお書きになる方だと、そのたびにふかい感銘を新しくいたします。お目にかかつた人はだれでも先生が好きになり、心から尊敬の念を湧かせます」（「あとがき」『幼年童話集　まあちゃんととんぼ』国文館、昭和二二年八月）と未明を絶賛。関英雄は、日本社会党の片山哲内閣総理大臣が、幼少期、未明童話の愛読者だった事実を紹介した上で、「ヨーロッパの子どもたちに、アンデルセンの童話が宝となつているように、日本の子どもたちに小川先生の童話は、いつまでも宝としてのこるものです」（「あとがき」『青い釦（ぼたん）』啓明出版社、昭和二三年一月）と、その作品の恒久的価値を讃えている。

逆に、戦時中の国策協力に関する、批判的な論及はまったくない。そのような事実そのものが、隠蔽されていると言って差支えないだろう。例えば、坪田譲治は、「小川先生の童話は世界のどこに出しても、どんな立派な童話に比べても、決して恥しくないものであります。（中略）このような文学が、もつと子供の方々に読まれて、もつと国民の尊敬を受けていたら、こんな太平洋戦争というようなものは起らず、起つていても、今裁判になつているような、ザンギヤク行為などという不名誉なことは行われなかつたように思われます」（「あとがき」『兄弟の山鳩』東西社、昭和二二年一〇月）と述べ、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）以来、聖戦遂行の立場で筆を取ってきた未明文学の歴史を完全に黙殺している。その他の論者も大同小異だ。

したがって、阪本越郎（えつろう）が「自己の東洋的虚無感を押し切つて、人道主義や社会主義へ働きかけようとしたり、又熱烈な愛国者として正直に行動しようとすることが、情熱の赴くままに為され、自ら氏の人間的魅力ともなつてゐるのである」（「未明童話について　父兄に」『未明童話　青いランプそのほか』文寿堂出版部、昭和二一年一〇月）と、肯定的にではあれ、戦時中の未明の「熱烈な愛国者」としての振る舞いについて言及しているのは、むしろ例外的事例に属するのである。

以上見てきた通り、戦後の小川未明は、自身の戦争責任問題に対する内省を峻拒（サボタージュ）し続けた。また、周囲の児童文学関係者も、八・一五以前の前歴について、決して言挙げしなかった。昭和二一年一二月に野間文芸賞を受賞した未明は、以後、過去を封印したまま、「日本児童文学の父」として、戦後社会に確固たる地歩を固めて行くのである。その権威に揺らぎが生じるのは、古田足日「さよなら未明」（『現代児童文学論』くろしお出版、昭和三四年九月）に代表される、「童話伝統批判」以降のことだ。

四、文学者と敗戦 ――「大日本帝国」の崩壊

かくて、八・一五後の小川未明は、ＧＨＱ発の「民主主義革命」へいち早く便乗。即席の新生リベラルとして、再出発を遂げた。最期に本節では、敗戦後の文学者の動向を包括的に素描し、文学史の主潮を視野に収めることで、未明の左傾言説の裏にある文学史的背景を明らかにしたい。射程に入れるのは、日本がポツダム宣言を受諾した昭和二〇年八月から、朝鮮戦争が勃発した同二五年六月までの、おおよそ五年あまりだ。

改めて言うまでもないが、十五年戦争は日本の完敗で終わった。広島・長崎への二度にわたる原爆投下は決定的だった。日本各地の都市は、軒並み焦土と化し、民間人を含め、多数の死傷者が出た。旧厚生省の調査によれば、先の大戦に伴う死者は、軍人・軍属が約二三〇万人、民間人が約八〇万人だったと言われている（注17）。しかも、戦火に散った軍人・軍属の内、半数以上は、戦場での戦闘死ではなく、栄養失調や感染症等による餓死・病死だったという（注18）。哀しいかな、靖国神社へ祭られている「英霊」の多くは、飢えやマラリアで野垂れ死んだ人たちなのである。

一方、戦時中、「一億玉砕」「生きて虜囚の辱めを受けず」と国民・兵士を煽っていた戦争指導者は、切腹の末果てた陸軍大臣・阿南惟幾（これちか）など、ごく少数の例外を除いて、自ら自決する道を選ばなかった。「戦争犯罪人」として、ＧＨＱのお縄にかかり、「生きて虜囚の辱めを受け」た。大日本帝国憲法下、「現人神（あらひとがみ）」として君臨した昭和天皇は、「人間」の地位に転落した。帝国は、海外の植民地をすべて失い、琉球諸島と北方四島を占領された。

したがって、既に言い古されていることだが、八月一五日は、断じて「終戦の日」ではない。明治維新以後、対外戦争に連戦連勝してきた「大日本帝国」が、一敗地に塗れ、崩壊した、「敗戦の日」なのである。

大東亜戦争中、日本の勝利を願って汗した多くの文学者にとって、敗戦の衝撃は一方ならぬものがあった（注19）。日本文学報国会の詩部会長を務めた高村光太郎は、敗戦の翌々日、次のような慟哭の詩を発表している。

> 綸言一たび出でて一億号泣す／昭和二十年八月十五日正午／われ岩手花巻町の鎮守／島谷崎神社々務所の畳に両手をつきて／天上はるかに流れ来る／玉音の低きとどろきに五体をうたる／五体わななきてとどめあへず／玉音ひびき終りて又音なし／この時無声の号泣国土に起り／普天の一億ひとしく宸極（しんきよく）に向つてひれ伏せるを知る／微臣恐惶ほとんど失語す／ただ眼を凝らしてこの事実に直接し／荷（いやしく）も寸毫も曖昧模糊をゆ

るさざらん／鋼鉄の武器を失へる時／精神の武器おのづから強からんとす／真と美と
到らざるなき我等が未来の文化こそ／必ずこの号泣を母体として其の形相を孕まん

高村光太郎「一億の号泣」（『朝日新聞』昭和二〇年八月一七日）

本詩において、描かれているのは、玉音放送が知らせる敗戦の現実に、「号泣」し、「五体」を震わせ、あるいは「失語」する、高村以下、日本国民の姿である。ありふれていると言えば、ありふれた八月一五日の表象だが、たとえ月並みであっても、これが敗戦の日の日本国民のもっとも典型的な姿ではあっただろう。

ところで、敗戦後の『朝日新聞』に目を向けると、他の文学者も、高村と似た悲嘆・苦悶の念を披瀝している。すなわち、斎藤茂吉の短歌「詔書拝誦」（昭和二〇年八月二〇日）や大佛次郎の随想「英霊に詫びる」（同八月二一日）が、それである。斎藤は歌う。「聖断はくだりたまひてかしこくも畏くもあるか涙しながる」。斎藤は、神州日本が敵国・米英へ敗れた現実に、むせび泣いているのである。彼ら国策協力者が勇んで参加した、日本文学報国会・大日本言論報国会・日本少国民文化協会といった御用（児童）文学団体は、昭和二〇年秋までに、相次いで解散となった。

一方、敗戦を、屈辱ではなく、解放として捉える文学者もいた。旧プロレタリア文学の作家たちである（注20）。彼らにとって、満州事変後の約一五年間は、特高警察と思想検事の暴力によって肉体と精神の自由を奪われた、地獄以外の何物でもなかった。とりわけ、厳しい政治状況の中でも節を曲げなかった非転向作家に、権力の弾圧は重くのしかかった。彼ら政治犯に自由を与えたのは、日本政府ではなく、アメリカだった。昭和三年以来、「獄中一八年」を過ごした、徳田球一・志賀義雄ら日本共産党幹部が、当初、アメリカ進駐軍を「解放軍」と規定した所以もそこにある。己が思想を固守し続けた左翼作家にとって、八・一五は、新時代の幕開けを告げる解放記念日だったのである。

かくして、昭和二〇年一二月、蔵原惟人・中野重治・宮本百合子ら九名の創立発起人は、新日本文学会を結成。志賀直哉・広津和郎・野上弥生子らを賛助員に迎え、民主主義文学者の幅広い結集を目指した。数少ない非転向作家のひとりである宮本は、同会発足に際して、次のような抱負の言葉を語っている。

民主なる文学といふことは、私たち一人一人が、社会と自分との歴史のより事理に叶つた発展のために献身し世界歴史の必然な動きを胡魔化すことなく映しかへして生きて

ゆくその歌声といふ以外の意味ではないと思ふ。そして、初めは何となく弱く、或は数も少いその歌声が、やがてもつと多くの、全く新しい社会各面の人々の心の声々を誘ひ出し、その各様の発声を錬磨し、諸音正しく思ひを披歴し、新しい日本の豊富にして雄大な人民の合唱として行かなければならない。新日本文学会は、さういふ希望の発露として企てられた。雑誌「新日本文学」は、人から人へ、都会から村へ、海から山へと、苦難を経た日本の文学が、今や新しい歩調でその萎へた脚から立ち上るべき一つのきつかけを伝へるものとして発刊される。

宮本百合子「歌声よ、おこれ」（『新日本文学　創刊準備号』昭和二一年一月）

ここで宮本が登場をこいねがっている「歌声」とは、もちろん、民主主義の「歌声」である。はじめは、少数の先覚者からなるその歌声が、労働者大衆の間へ響き渡り、「雄大な人民の合唱」となって欲しい、新日本文学会はその歌声の起点でありたいと、希望を語っているのである。

自身の長期投獄、獄中にいる夫・宮本顕治の後方支援など、戦時中、様々な艱難辛苦を耐え忍んできた宮本だけに、晴れやかで、躍動感溢れる文章と言えよう。先に見た、高村や斎藤の暗い啼泣とは対照的だ。また、同じように民主主義を賛美していても、宮本と小川未明では言葉の重みが段違いに異なる。というのも、未明は結局のところ、敗戦に際し、突如民主主義者へ豹変した、にわかリベラルに過ぎないからである。彼の民主主義賛美には、実践の裏打ちがまったくないからである。血で購った言葉ではないのだ。

さて、戦後の文壇の左バネとして機能したのは、新日本文学会だけではない。前章で記したように、雑誌『近代文学』の同人も重要な役割を果たした。同人とは、荒正人・本多秋五・平野謙・埴谷雄高・佐々木基一・山室静・小田切秀雄の七名を指す。いわゆる、「七人の侍」である（注21）。

侍たちは、敗戦時、おおよそ三〇歳代であり、昭和初年の左翼運動全盛期にマルクス主義の洗礼を受けながらも、満州事変以降の「暗い谷間」の時代の中で、雌伏の時を過ごさなければならなかったという共通の経験がある。だからこそ、自由にものが言える戦後は、彼らにとって「第二の青春」（荒正人）に他ならなかった。荒らは、小林多喜二を始めとする旧プロレタリア文学作家の過度な政治主義を批判する「政治と文学論争」や、既成文壇人の戦争責任を追及する「文学者の戦争責任論争」で、批判の最前線に立ち、戦後日本の評論を牽引した。つまり、端的に言えば、『近代文学』グループとは、新日本文学会の創立発起人に

代表される戦前来の共産党指導部へ批判意識を持った、マルクス主義系文学者といったところだろう。

敗戦は、戦争中、活躍の場を与えられなかったベテラン勢にも、復活の場を与えた。永井荷風・谷崎潤一郎・志賀直哉といった老大家が、それである（注２２）。

例えば、日中開戦以来、政府・軍部への批判を、日記「断腸亭日乗」へ密かに記し続けてきた荷風にとって（八・九章四節参照）、盆の玉音放送は、喜ばしい吉報だった。この日の日記には、「S君夫婦、今日正午ラヂオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、雞肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ」との記述があり、鶏肉と葡萄酒で祝宴を挙げた由、綴られている。以後、荷風は、「浮沈」（『中央公論』昭和二一年一～六月）、「踊子」（『展望』昭和二一年一月）、「勲章」（『新生』昭和二一年一月）等、戦時中、掲載の当てなく書き溜めていた小説を次々と発表し、文壇の拍手喝采をさらった。かつての芸術的抵抗派は、風俗小説家として、見事な再起を遂げたのである。

あるいは、谷崎潤一郎の場合はどうか。昭和一八年、軍部の介入によって、小説「細雪」（『中央公論』）の連載を中止させられた谷崎は、以後も官憲の目を盗んで、続編を書き継ぎ、同作を原稿用紙換算約一五〇〇枚の一大長編に仕立て上げた。そして戦後、上中下の三巻本として発売されるや、「細雪」はベストセラーとなり、毎日出版文化賞・朝日文化賞を受賞した。文豪・大谷崎は、ここに不動の地位を築いたのである。また、志賀直哉も、小説「灰色の月」（『世界』昭和二一年一月）等を著し、短編の名手として存在感を示した。昭和二二年二月に再建された日本ペンクラブでは、会長職を務めている。

なお、未明は、これらの大家と世代的には同世代（明治一〇年代生まれ）の文人だが、万余の読者を唸らせるような、もしくは文学史に名を留めるような傑作を、戦後、残すことはできなかった。しかし、にもかかわらず、名声だけはいよいよ高まっていったところに、今日へ至るまで続く、戦後の未明評価の特異性がある。つまり、作品の質と作家に対する評価が、正比例していないのである。これは先に三節で記したように、あるいは次の**一二章四節「童話伝統批判　――少国民世代による告発」**で記すように、児童文学界の追随者（エピゴーネン）たちが、多分に下駄を履かせていた――内輪褒めに徹していた――結果と見るべきだろう。

この他、敗戦直後、活躍した文学者の流派（エコール）には、坂口安吾・太宰治・織田作之助・石川淳らの無頼派（新戯作派）（注２３）、野間宏・梅崎春生・椎名麟三・武田泰淳らの第一次戦後派（注２４）、石坂洋次郎・舟橋聖一・丹羽文雄・田村泰次郎らの中間小説のグループ（注

２５）等が挙げられる。これらの作家たちは、闇市・キャバレー・パンパンといった戦後の風俗や、自身の深刻な戦争体験を題材にした作品を物し、読者の支持を獲得した。「肉体の門」（『群像』昭和二二年三月）で一世を風靡した田村など、一部の作家は、ジャーナリズムの寵児と化した。

他方、戦時中、プロパガンダの文学を書き連ねていたものの、実際の戦場ないし軍隊での経験はなく、世事にも疎い道学者気質の未明は、過去の戦争や現下の風俗をアクチュアルに描くことはできなかった。あらゆる意味で、もはや戦後は、未明の時代ではなかったのである。

最期に児童文学界の状況を押さえておこう。ＧＨＱの五大改革指令――女性の解放・労働組合の育成・教育の自由化・経済の民主化・秘密警察の解体――に象徴される、戦後の「民主主義革命」の旋風の中で、児童文学界では、後に文学史上、「民主主義児童文学」と呼ばれる作品が数多く生み出されていた（注２６）。その書き手の結集軸となったのが、綱領の冒頭に「民主主義的な児童文学を創造し普及する」と掲げ、創立された、芸術系児童文学作家の最大組織・児童文学者協会（後の日本児童文学者協会）である（注２７）。未明がこの団体の初代会長を務めた来歴は、既に前章へ記した通りだ。軍国主義から民主主義へ、日本少国民文化協会から児童文学者協会へ――日本の敗北という現実が生み出した、この揺るぎない趨勢に、未明以下、多くの児童文学者が、率先して与していったのである。

彼らの創作発表の舞台となったのは、「良心的児童雑誌」と総称される雑誌群である。『子供の広場』（昭和二一年四月～）、『赤とんぼ』（昭和二一年四月～）、『銀河』（昭和二一年一〇月～）、『少年少女』（昭和二三年二月～）といった雑誌が、それだ。例えば、本章で論じた未明の反戦童話「兄の声」が掲載されたのは、『子供の広場』である。あるいは、こちらはプロパーの児童文学者ではないが、竹山道雄の名作「ビルマの竪琴」が連載されたのは、『赤とんぼ』（昭和二二年三月～同二三年二月）である。戦後の文壇・論壇では、新旧雑誌の創刊・復刊が相次いでいたわけだが、児童文学の領域でも多数の雑誌が刊行されており、それらの雑誌が、新たに反戦・民主主義の旗振り役と化した児童文学者の檜舞台となっていたのである。

このように、文学者は敗戦後、焦土と化した祖国を見つめながら、様々なかたちで再出発を遂げた。無頼派（新戯作派）・第一次戦後派・中間小説の中堅・若手、旧芸術的抵抗派の老大家等、その顔触れは多岐にわたる。これらの作家たちの文学的・思想的傾向を一言で括ることは難しいが、彼らの中で、もっとも政治的に勢いがあったのは、ＧＨＱ発の「民主主

義革命」へ呼応した新日本文学会や雑誌『近代文学』のグループであろう。つまり戦時中、苦汁をなめさせられていた左翼・リベラルが、反撃を開始したのである。そして、未明を始めとする児童文学界の人々も、この方向に掉さしていた。かつての国家主義者・未明は、またもや、時代の主流派と同衾する道を選んだのである。

大正・戦中・戦後にかけて、小川未明は社会主義・国家主義・戦後リベラリズムという相異なる政治思想を渡り歩いたわけだが、その時々のもっとも旬な流行思想へ接近し、同調するのが、未明の一貫した行動様式であると言えるだろう。純朴なようでいて、なかなか抜け目のない男なのである。

小括

以上、本章では、小川未明の童話「兄の声」（『子供の広場』昭和二一年四月）に関する作品分析を、戦中・戦後の航空兵（特攻隊）表象の比較を通して、行った。

その結果、明らかになったのは、昭和一九年の国策協力童話の航空兵が、猛々しい戦意を有し、敵国・米英を憎む、愛国烈士として造形されているのに対し、本作の航空兵は、自由や平和といった戦後民主主義的価値を志向する、心優しい平和主義者として造形されていることである。つまり、八・一五を挟むわずか一・二年の間に、作中の航空兵表象は、一変してしまったのだ。本作には、自身の戦争協力に対して自己批判の回路を持たない／持てないまま、戦後社会という新しい時局に便乗していった、未明の反省なき再出発――恥じらいなき再転向――のあり方が克明に記録されているのである。

もとより、かかる未明の左傾化は、「民主主義革命」の旋風が巻き起こる当時の時代状況にあっては、すこぶる同時代的な現象であったと言うべきだろう。敗戦後の文学界では、無頼派（新戯作派）・第一次戦後派・中間小説の中堅・若手、旧芸術的抵抗派の老大家等、様々な勢力が台頭していたが、とりわけ政治的に勢いがあったのは、新日本文学会や雑誌『近代文学』へ集った左翼・リベラルの一群だったからである。未明が初代会長を務めた児童文学者協会（後の日本児童文学者協会）も、この陣営の一員だった。戦後の未明の左旋回の裏には、このような文学史的背景があるのである。

ところで、小田切秀雄を始めとする雑誌『近代文学』の同人は、この時期、菊池寛・横光利一・高村光太郎ら名のある大作家を、戦犯文学者として糾弾し、文学者の戦争責任をめぐる問題は、文壇内部で、かまびすしく議論されるようになる（**一〇章三節参照**）。Ⅲ部で記した行状を考えれば、未明も当然、焦点化されていいようなものだが、幸か不幸か、当時の

児童文学界は彼の追随者（エピゴーネン）のみで、そのような自浄作用は発揮されなかった。

結果、小川未明は、高村光太郎のような真摯な自己批判を経ることなく、そしてまた、児童文学界の長老としての権威を失うこともなく、昭和戦後期の日本社会を生き延びて行ったのである。

注

1　例えば、続橋達雄「戦後の未明童話序説（1）」（『野州国文学』昭和五七年三月）は、菅忠道『日本の児童文学　増補改訂版』（大月書店、昭和四一年五月）の「兄の声」評を引用した上で、「戦後の未明の作家活動が「兄の声」からはじまる、とするのは、右の見解にみられるように一般的である。これは、その創作活動からみても、ほぼ妥当な見解であろう」と記している。

2　近年、小埜裕二が二冊の書誌本『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、平成二四年一二月）、『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（同、平成二八年六月）を編むまで、存在が明らかになっていなかった作品は多数存在するが、昭和一九年の五篇の童話に関しては、既に『定本小川未明童話全集』第一四巻（講談社、昭和五二年一二月）の作品年表へ、書誌情報が記載されている。

3　この他、海鷲と陸鷲の呼称について解説を加えるワシノオヂイサン（鷲のお爺さん）とタカノコ（鷹の子）の会話も、時局性が露わになっている場面と言えよう。「カイグンノ　ヒカウキヲ　ウミワシ、リクグンノ　ヒカウキヲ　リクワシト　イフノサ」「ニッポンノ　ヒカウキハ、セカイデ　イチバン　ツヨイト　イフネ」「サウトモ、オレノヤウニ　ツヨイカラ　ウミワシ、アラワシト　イッテ　キルノ　ダヨ」ト、オヂイサンハ　ジマンシテ　イヒマシタ」

4　「大東亜共栄圏」という理念への未明の心酔については、九章で詳述した。

5　雑誌『飛行少年』『航空少年』の発行や、映画「決戦の大空へ」（東宝、昭和一八年）、「君こそ次の荒鷲だ」（松竹、昭和一九年）の制作等、航空兵のリクルートを主たる目的とする青少年向けの宣伝（プロパガンダ）活動は、同時代的に、かなり活発だった。この辺りの事情については、櫻本富雄『燃える大空の果てに』（日本図書センター、昭和六一年八月）が詳しい。

6　戦中期の未明作品が若者の軍隊志願を促した可能性については、昭和三年生まれの上野瞭も、「戦時下の児童文学＝小川未明の場合」（『ネバーランドの発想』すばる書房、昭和

四九年七月）で、触れている。「未明は、自分の美学をこうした設定で形象化し、それなりの満足や充実感を味わったかもしれないが、そこから先の問題は、読者の味わった感動の行方である。それは、死に直結する可能性がある。少くとも、この一回限りの生を、みずから問い直すこともなく、戦場に向ける（あるいは、向けた）可能性がある」

7　本文で取り上げた以外の部分的論及としては、他に、五十嵐康夫「戦後の小川未明」（『日本児童文学』昭和四七年一月）、西本鶏介「解説」（『定本小川未明童話全集』第一三巻、昭和五二年一一月）、続橋達雄「戦後の未明童話序説（2）」（『野州国文学』昭和五八年一二月）がある。先の評価軸を踏まえると、五十嵐論は否定的で西本論は肯定的。続橋論は、とりたてて是非の判断を下していない。

8　上野が批判的に引用している当該の文章は、「今、自由主義時代の童話を省みるに、これには「愛」「自由」「同情」それらのものが取扱はれてゐるが、畢竟個人主義的な立場からであり、小市民的な思想に過ぎなかつた」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）である。「自由」を軽んじる同種の発言としては、他に、「自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）等が挙げられる。

9　例えば、本誌巻頭の「創刊のことば」には、「全日本の少年少女諸君、子供は子供で、しつかり腕をくまう。さうして、どんな困難でも乗りきつて、文化の国、平和の国、民主日本をつくりあげよう」、巻末の「子供会をつくらう！」には、「みんなで、民主主義の日本を明かるく、美しく、ゆたかな国にしてゆかう」との文言が、それぞれある。また、松本慎一の評論「世界は一つに」では、日本の平和国家としての再生や国際協調の必要性が説かれている。

10　敵艦を発見できなかったり、エンジントラブルを起こしたりして、志を遂げられず帰還した特攻失敗者には、組織から容赦ない制裁が加えられる場合もあった。例えば、陸軍の特攻隊「振武隊」に所属した大貫健一郎は、知覧出発後、米軍機に迎撃され、徳之島へ不時着。命からがら逃げ戻ると、「振武寮」という特攻失敗者のための専用施設に隔離される。そして上官から、「おまえら、軍人のクズがよく飯食えるな。命が惜しくて帰ってきたんだろうが、そんなに死ぬのが嫌か」「卑怯者。死んだ連中に申し訳ないと思わないか」「おまえら人間のクズだ。軍人のクズ以上に人間のクズだ」（二一〇頁）などと罵倒を浴びせられた挙句、「軍人勅諭」の清書や反省文の執筆を命じられたという（大貫健一郎・渡辺考『特攻

隊振武寮』講談社、平成二一年七月）。「特攻」という美談を毀損する恐れのある兵士は、徹底した隠蔽・再教育の対象となっていたのである。

１１　戦後の未明の自省なき左旋回については、上笙一郎も「くりかえすようになるが、これら戦後の作品には、たしかに戦争にたいする観方の変化と、皇道主義から民主主義へという思想の変化はあった。しかし、けっして、皇道主義から民主主義に転じたプロセスとその悩みは、かえり見られているのではない。というよりも、そのような悩み自体が、はじめから存在した形跡が見られないのである」（「戦後の小川未明の思想」『日本児童文学』昭和三六年一〇月）と、批判的に論及している。

１２　「心の芽」（『少国民の友』昭和二一年二月）、「悲しみを知らない噺」（『社会』昭和二一年九月）、「戦争は僕を大人にした」（『童話』昭和二二年二・三月）、「新しい町」（『幼年クラブ』昭和二二年八月）等。詳しくは、一〇章二節を参照されたい。

１３　大正期の未明の社会主義思想の内実については、Ⅱ部の各章の他、六章一・二節で分析を加えた。

１４　戦後、未明の他薦童話集は多数出版されていたため、編集者は作品の重複を避けるのに苦労したようだ。例えば、塚原健二郎は「しかし、終戦後出た未明童話集の中には、編者のある本も、二三に止らない様子だから、自分の好きな作品などと云っても案外他の本と重複しないともかぎらない。重複は、読者にとっても、迷惑であるが、編するものにとっても、愉快なことではない」（「まえがき」『花と人間の話』三杏社、昭和二三年一一月）と、その苦しい胸の内を語っている。また、当時の「国語国字改革」の風潮が影響したのだろう、編集者の判断で、カタカナ童話をローマ字表記へ改める試みもなされていた。実践者の阪本越郎（えつろう）は、「日本人の新しい進歩のためには、これからローマ字がどんどん読み書き出来なければなりません。これからの文化の新しい建直しや、日本の新しい世界的な発展のためにも、日本語は改良されなければなりません」（「読者の皆さんへ」『未明童話　赤い魚と子供そのほか』文寿堂出版部、昭和二二年一月）と、ローマ字学習の必要性を熱弁している。

１５　逆に、著書の解説以外の未明評は、この時期（昭和二一～二五年）、ほとんど見当たらない。管見の限り、川崎大治「小川未明」（『日本児童文学』昭和二三年六月）や坪田譲治「わが師・わが友」（『故里のともしび』泰光堂、昭和二五年一一月）が、目に入るくらいである。

１６　未明への賛辞が呈されている、本文で紹介した以外の解説は、他に、山内秋生（やまのうちしゅうせい）「解説」（『山の上の木と雲の話』紀元館、昭和二二年一月）、北原益憲「あとがき」（『僕の通る

みち』南北書園、昭和二二年二月）、滑川道夫「読者のために」（『角笛を吹く子』雁書房、昭和二二年六月）、岡上鈴江「あとがき」（『花の咲く前』小学館、昭和二二年七月）、中安瓚三「お母さまがたへ」（『おやうしとこうし』海住書店、昭和二三年一一月）、加藤てる緒「この童話集を読まれる人々へ」（『よつぱらい星』人文書房、昭和二五年一月）等がある。

１７　厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』（ぎょうせい、昭和五三年四月）参照。

１８　藤原彰『餓死した英霊たち』（青木書店、平成一三年五月）参照。

１９　鈴木醇爾「文学者の八月十五日」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

２０　沼沢和子「民主主義文学の歌声」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）、関口安義「民主主義文学」（長谷川泉編『日本文学新史　現代』至文堂、平成三年二月）参照。

２１　本多秋五『物語戦後文学史（全）』（新潮社、昭和四一年三月）、巌谷大四「はなばなしき復興」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）、安藤宏「評論の季節」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

２２　浅見淵「復活する大家群」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）、中島国彦「持続する文学精神」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

２３　奥野健男「無頼派の作家たち」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）、矢島道弘「無頼の魂　――戦後における無頼派の作家たち」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

２４　進藤純孝「「戦後派」文学の明暗」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）、石崎等「実存と崩壊感覚」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）、荻久保泰幸「戦後派文学」（長谷川泉編『日本文学新史　現代』至文堂、平成三年二月）参照。

２５　巌谷大四「はなばなしき復興」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）、森英一「風俗小説と中間小説」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）参照。

２６　猪野省三「解説」（『日本児童文学大系』第五巻、三一書房、昭和三〇年五月）、菅忠道『日本の児童文学　増補改訂版』（大月書店、昭和四一年五月）、関口安義「民主主義児童文学」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）、奥山恵「民主主義児童

文学」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年四月）、同「第二次世界大戦後の戦争児童文学Ⅰ」（鳥越信・長谷川潮編『はじめて学ぶ日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房、平成二四年四月）参照。

27　なお、同時期には、児童文学者の後藤楢根を中心として、日本童話会も結成されている。同会の機関誌は『童話』である。

一二章　老いゆきてなお国士　――童話「ふく助人形の話」

はじめに

小川未明という作家について語る時、多くの人がまずもって思い浮かべるのは、「赤い蝋燭と人魚」であり、「野薔薇」であり、つまるところ、大正童話であろう。しかし、児童文学史上に燦然と輝く、これらの代表作の影には、歴史の彼方へ埋没し、一顧だにされない、膨大な数の作品群が存在する。例えば、昭和戦後期のテキストがそれだ。

顧みられない最大の要因は、おそらく、テキストの質にある。未明童話の系譜は、大正一五年の「童話作家宣言」を分水嶺として、ロマンチシズム時代とリアリズム時代のおおよそ二期に大別されるが、前者と比して、後者の評価は、おしなべて低い（注1）。川崎大治による、「近年小川さんが、ますます生活的な童話に主力をそそぐようになつてから、かえつて作品は、児童から離れるような傾向にある。そして、初期の空想的社会主義時代のロマンチツクな、はげしい人類愛の熱情にもえた頃の作品に、かえつて、児童は大きな魅力をかんじている」（「小川未明」『日本児童文学』昭和二三年六月）との論評は、かかる評価の傾向を如実に象徴していよう。身も蓋もない言い方をしてしまえば、後期の未明童話は、駄作ということだ。

そして、このような評価の低さは、研究の貧しさとも直結している。昭和戦後期の未明に関しては、これまで、上笙一郎「戦後の小川未明の思想」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）、五十嵐康夫「戦後の小川未明」（『日本児童文学』昭和四七年一月）、続橋達雄「戦後の未明童話序説（1～3）」（『野州国文学』昭和五七年三月～同五九年三月）等の論稿が著されてきたが、いずれの論も概論的で、広範な一次資料に即して、老年期の足跡を追駆しているとは言い難い。とりわけ、敗戦直後の混乱期を経過した後の最末期の文業は、研究史上の死角と断じても、過言ではないのである。

そこで本章では、未明が泉下の客となるまでの最後の約一〇年間――昭和二六～三六年／満六九～七九歳の期間――を「晩年」と定義した上で、この晩年における未明の人と作品を包括的に再考したい。

すなわち筆者は、この時期に記された随筆・評論・童話の分析を通して、老人・未明が老いゆきてなお、日本国家・民族の行く末を案じる老国士であり（一節）、執筆量を減じながらも、こと絶筆に至るまで教化色の強い童話を紡ぎ続けていた事実を、明らかにする（二節）。また、晩年の未明が繰り返した民族賛美言説の背景に、どのような文壇的・論壇的潮流があ

るのか、考察を加える（**三節**）。さらには、当時の未明評の検証を通して、昭和三〇年前後に児童文学界で勃発した「童話伝統批判」が、単なる表現形式への批判に留まらない、戦時下の国策協力に対する告発という側面を備え併せていた事実を、新たに提示し、同運動の再評価を図る（**四節**）。

つまり本章は、従来放置されてきた、小川未明研究史の欠落箇所を補填するための試みだ。作家の傑作・秀作に研究が集中するのは世の常であり、当然の人情に違いないが、駄作として捨て置かれているテキストと向き合うことでしか見えてこない風景もある。

一、警世する老国士 ——最後の一〇年間

本節では、小川未明が死没するまでの直近約一〇年間（昭和二六〜三六年）に著した、随筆・評論類を読み直し、研究史上、なおざりにされてきた、晩年の未明の事績・思想傾向を明らかにしたい。

戦中、天皇制国家主義の忠実な信徒だった未明が、こと敗戦に至るや、反戦・民主主義の唱道者へ変貌を遂げた姿は、既に**一〇章「再転向者の軌跡 ——反戦・民主主義への旋回」**へ記した通りだが、晩年の未明の政治的立場も、依然リベラルである。

例えば、日本国憲法に対する未明のスタンスは、明確な「護憲」だった。

> たとえ押付けられた憲法であつても、また過ちの功名としても、軍備を否定した一事はたしかに我国の傑作であつた。これは、そうなくてはならぬ人類の誇るべき理想であり、貴ぶべき観念である。私達はこれを空想としてでなく、真に実現しなければならぬ義務があるのである。（中略）国民は断固として憲法を守り、殺戮、略奪を否定して、協力と創造の途を拓くべきである。ここにのみ、民族の存続が考えられる。この際、正義を愛し、勇気に富む青年は、飽迄も輝かしき憲法を守り通さなければならぬ。
>
> 「人類の理想と反する政治」（『世界』昭和二八年一〇月）

ここで未明は、日本国憲法が米国に「押付けられた憲法」である側面は一定認めながらも、戦争放棄や戦力不保持を謳った憲法九条を「我国の傑作」として賞賛している。そして、「国民は断固として憲法を守」るべきであると説いている。改憲派が、戦後憲法を批判・否定する際の論拠として用いる押し付け憲法論には、決して与していない。

また、過去半世紀、人類にどのような進歩があったかを問う女性誌のアンケートに対し、

未明が挙げた答えは「ユネスコの発足」だった（「ユネスコの発足。良心の発動機関が表面化したことは、過去半世紀に於ける特筆すべき偉業であります。世界が利慾に狂奔する際にかかわらず、理性の勝利に帰するからです」「過ぐる半世紀の歴史の中にどんな進歩のあとを見出されますか、来るべき半世紀にどんな期待を寄せられますか」『婦人之友』昭和二八年四月）。教育・科学・文化の国際交流を通じて、世界平和の実現を目指すユネスコは「良心の発動機関」であり、その始動は「特筆すべき偉業」であると称賛している。

だが、ユネスコ的な国際協調を讃える反面、未明のリベラリズムは極めて自国中心主義的でもあった。この時期、未明は「日本はアメリカでもなく、また、ソ連でもありません。日本は、日本であります」（「児童文学者としての自覚」『日本児童文学』昭和三一年七月）と、日本国家の独自性を強調しているし**（注2）**、「人と土地とは有機的な関係があるもので、国土を措いて人間はないのです。それから考へても、インターナショナルなどといふのは空想です」（「童話を作って五十年」『文藝春秋』昭和二六年二月）と、インターナショナリズムを明確に否定している。

戦後の未明の左傾化が、大正期の社会主義思想への先祖返りではなく、国家や民族という枠の中での政治的リベラリズムに留まっている点は、先の**一一章三節「秘匿された聖戦賛美――八・一五後の未明」**で記したけれど、この傾向は晩年に至って、より顕著になっているように思われる。

その根拠は、国家や民族という観念に対する、老人・未明の尋常一様ではない肩入れだ。例えば彼は、国家と国民の関係について、次のような考えを披瀝している。

> 国民精神、国家に対する国民的観念というものは、本質的には超時代的であり、どの時代にあつても、その時代の愛国者、国を思う人が誠意を尽し、自分の一生を犠牲にして民衆のため、国民のために戦つて来たという伝統的な流れの中に息づいている。即ちそれは単なる流行ではなくして、幾世紀もかかつて作られた不易の「芸術品」とも言うべきものなのである。作家とか芸術家はその認識をもつて、長い間民族が伝統的に受継いできた今日までの思想を、再び子供達に自覚させ悟らせることを義務としなければならない。
>
> 「童話と私」（『改造』昭和二九年六月）

歴史的には、近代国民国家成立以降の産物であるはずの「国民精神」や「国家に対する国民

的観念」が、「超時代的」な伝統、「不易の「芸術品」」として尊崇されている点が興味深い。国民国家の生成する愛国心が、超歴史的な真理であるかの如く、内面化されてしまっているのである。

また、民族への欽慕も熱烈である。この時期、未明は、「殊にこのごろの子供たちは沢山の苦しい目にあっている。この子供らにこそ父祖から伝わった民族の誇りを失わせず日本のすぐれた民族遺産を知らせて、自負と誇りを持つように教えたい」（「児童文学」の夜明けへ」『読売新聞』昭和二八年八月二四日）と、「父祖から伝わった民族の誇り」「日本のすぐれた民族遺産」の継承を訴えているし、子どもの読書について、「やはり民族精神のあるものを読ませたい」（「御談議拝聴」『厚生』昭和二八年五月）と、児童への「民族精神」の注入を主張している。

さらに未明は、「報本反始、憐憫の情、正義の観念、忍苦、勤勉等も、やはり一つの人間性であり、国土と人間の関係の中に自然に発生し、発展した日本民族特有の美しい感情であるのだ。子供の教育も亦、こうした道義観の上に立つて行われるべきであろう」（「国土に培われた道徳」『国民』昭和二六年四月）とも語り、子どもの教育は、「日本民族特有の美しい感情」に基づいて行われるべきである旨、自説を展開している。「私の考え方は、保守的、反動的であるといわれるかもしれないが」云々と本人自ら弁明している通り、未明の発想は極めて復古主義的だ。戦時中との違いは、これらの価値観をもって、民主主義や自由主義といった外来の進歩思想を攻撃していない点に尽きる。

さて、では、このような国家や民族への傾倒をもたらした思想的・社会的要因は一体何なのだろうか。前者の思想的要因に関しては、①明治一五年生まれという世代に起因する明治人特有のナショナリズムや、②武家の出自および少年期の頼山陽『日本外史』の耽読に由来する忠君愛国思想の潜在が指摘できよう（**注3**）。

後者の社会的要因に関しては、③戦後、芸術院賞（昭和二六年）を授与されたり、芸術院会員や文化功労者（同二八年）へ推挙された結果、日本国家並びに天皇家との距離が、かつてなく近接していた事実が挙げられる（**注4**）。加えて、④同時期、文学における民族性を問い直す、竹内好らの「国民文学論争」が文壇・論壇を席巻していた史実を踏まえれば、かかる発言は、上記の論争に対する未明なりの応答であったと言えるかもしれない。

とりわけ、筆者は、①と④の要因が重要であると考える。④に関しては、三節「**知識人と民族　――竹内好「国民文学論争」の興隆**」へ譲るとして、ここでは①について、若干の論及を試みたい。

すなわち、①明治一五年生まれという世代に起因する明治人特有のナショナリズムについてだが、少・青年期に日清・日露戦争を体験し、愛国心を発揚させた未明は、もともとナショナリズムへの親和性が高く、それが日中・大東亜戦争下の国策協力の内在的動因となった、とする指摘は、これまでの先行研究で数多くなされてきた（注5）。一種の世代論的な分析である。

また、こちらはさらに大雑把な世代論だが、政治学者の丸山真男は、「全体としての明治の思想は「天下国家」の問題に対する熾烈な現実的関心に裏付けられていた。そこではインテリゲンツィアは顕在的でなくとも少なくとも潜在的な「政治青年」であつた」（「明治時代の思想」『世界歴史事典』第一八巻、平凡社、昭和二八年一〇月）と述べ、拭い難い「天下国家」意識、「政治青年」的傾向を、明治の知識人の特徴として挙げている。程度の差こそあれ、戦中―戦後を貫く未明の国家主義的・民族主義的傾向には、かかる世代的な特質が大きく寄与していたに違いない。

未明の次女・岡上鈴江は、未明の死の直前、「父のなかには、文学者と同時にひとりの国士が住んでいるような気がします。文学書のほか、ついニ、三年前まで、社会・経済の新刊書が机の上にのっていました」（上笙一郎・横谷輝「小川未明　岡上鈴江氏に聞く」『中学教育』昭和三六年五月）と語っているが、政治・社会問題に対する揺るぎない関心は、良きにつけ、悪きにつけ、彼の文業を規定する素因であり続けた。「近頃の日本人は高い正義感を抛（なげう）ってしまいました。高い犠牲的精神を失ってしまいました。かくて、社会は腐敗してしまったのです」（「自分を失ってはいけない」『社会教育』昭和二六年七月）などと、戦後の日本人の精神の退廃を嘆く姿は、いかにも未明らしい。

晩年の小川未明は、老いゆきてなお、日本国家・民族の行く末を案じ、警世する、老国士だったのである。

二、童話「ふく助人形の話」――世直しの文学

随筆・評論の次は童話である。本節では、小川未明が逝去するまでの直近約一〇年間（昭和二六～三六年）に著した、創作童話の質と量を検討したい。

まず、量だが、晩年の未明が執筆した童話および出版した童話集の数をリスト化すると、**表1**のようになる。やはり、寄る年波には勝てなかったのだろう。全盛期の創作力――例えば、代表作「赤い蠟燭と人魚」を著した大正一〇年には、童話四〇篇、小説二四篇を物していた――とは比べるべくもない執筆量である。この点に関しては、未明自身、「これからも

精一杯書き続けてゆく決意でも、齢のせいかやはり簡単には書けなくなつた」（「童話と私」『改造』昭和二九年六月）と、自らの筆の先細りを自覚していた（注6）。

そして、最終的な途絶は、昭和三二年に訪れる。小埜裕二が「敗戦時六五歳であった未明は、昭和三二年頃まで執筆活動を続けるが、ほぼこの年を境に執筆がやむ」（「解説」『小川未明新収童話集』第六巻、日外アソシエーツ、平成二六年三月）と指摘するように、戦後、勢いを減じながらも、僅かに湧き出していた創作の源泉は、この年、ほとんど完全に枯渇した（注7）。昭和三三年から三六年に没するまでの四年間、未明は一切、新作童話を紡いでいない。次女・岡上鈴江の回顧録によると、最晩年の未明は、自由な歩行や発話がままならず、大方自宅で寝たきりになっていたという。「父の身体は目に見えて弱っていった。それをみつめながら、肉体の衰えを防ぐことができないのは、いかにももどかしかった」（『父小川未明』新評論、昭和四五年五月、二一六頁）と、岡上は回想している（注8）。

さて、次いで、質はどうか。紙幅の都合上、すべての作品を考察するわけにはいかない故、ここでは分析対象を、未明の最終作である、童話「ふく助人形の話」（『日本児童文学』昭和三二年五月）に絞りたい。

「ふく助人形の話」は三人称童話。ある町の雑貨店の店頭に飾られている福助人形と、とある一家の関わりを描いた短編作品だ。作中、一家は、福助人形とその所有者である雑貨店の主人を様々に批判し、作品末、その福助人形は、台風によって破砕される――物語の筋は、おおよそこんなところである。初出誌を紐解くと、見開き二段組みで左右二頁ほどの字数しかないため、短編というより、掌編と呼んだ方が適切かもしれない。先行研究は、管見の限り、存在しない。

本作で注目するべきは、福助人形および雑貨店の主人に対する、一家の批判の内容である。福助人形とは、もともと江戸時代に生まれた巨頭短躯の福の神だが、子どもの祖母は、この福助人形について、「ちえが、頭に、ありあまると、しぜん大きくなるのだ。どうして、金もうけをしようかという考えばかりで、あたまが重くて、じゆうに、動けなくなるのだ」と論評。福助の頭がでかいのは、「金もうけ」の策謀を始終めぐらせている結果であると、軽侮している。子どももまた、「ごうまんんそうに見えるふく助人形を、どことなく、げびたふうていの人物にもおもえた」と、本来、縁起の良い招福神であるはずの福助を、「ごうまんそう」「げびたふうてい」と蔑視してやまない。ある意味、罰当たりとさえ言えよう。

一家の厭悪は、福助人形の所有者である、雑貨店の主人にも向かっており、こちらに対する批判は、さらに痛烈である。

「おばあさん、あのざっか店は、金かしをして、困ったものを苦しめて、ざいさんを大きくしたんだという、世間のひょうばんですね」と、ははが、いいました。「そうかい、そんなことでも、しなければ、いまの世の中では、金持ちなんかには、なれないのだよ」と、おばあさんは、いわれました。「いやなことですね、人のうらみをかってまでして、金もうけをするなんて、それは、人間のすることでは、ありませんね」と、ははが、いっていました。

母と祖母の会話によれば、福助人形を店頭に並べる雑貨店店主は、貧乏人から利息を巻き上げて財産を築いた悪辣な金貸しであり、彼の行いは、断じて人間の所業ではない。本作の主人は、にわかには救い難い、金の亡者として罵倒されているのである。

それでは、本作において、福助人形＝金儲けの権化、雑貨店の主人＝よこしまな拝金主義者という等号が成立し、両者が並々ならぬ憎悪を受けているのは、一体何故なのだろうか。これは、巷間はびこる金銭崇拝を社会の病毒と見做す、当時の未明の問題意識の反映に他ならないと、筆者は考える（注9）。

世間の人々は、金さえあれば、人間の幸福が得られるものと思っている。勤労によつて生き、信義を重んじ、職責を果たさなければならぬのを忘れている。無形の徳にこそ、人間としての、真の喜びがあり、誇りがあるのを知らない。金のためなら、奴隷になつても、恥と思わなければ、このごろは、不正に対しても、また、今までの如く憤りを感じなくなつた。かつて排斥した富くじや、勝負くじが、平気で登場し、小学校では、生徒達の貯蓄心をあおるあまり、子供銀行の私設を許している。かくの如く、何事にも金という心を抱かせる。これに反して、道義や、精神的のことは、少しも説かれていない。

「豆鉄砲から」（『小川未明作品集』第五巻、講談社、昭和三〇年一月）

未明にとって、「金さえあれば、人間の幸福が得られるものと思っている」世間の人々は、「無形の徳」を忘れた強欲の徒であり、「富くじ」「勝負くじ」「子供銀行」の解禁は、このような貪婪（どんらん）な守銭奴を増長させる、看過しがたい悪弊だった。

図1で見られる通り、ラスト、福助人形は台風の到来によって五体を破壊され、相伴って、雑貨店も廃業を余儀なくされるわけだけれど、作者・未明は、金の隠喩たる福助人形や雑貨店店主を、自然災害という神の一撃に打たせることで、自らが問題視する金銭への隷属的な

惑溺を弾劾していたと言えよう（注１０）。

人心・社会の悪風を糺し、善導せんとする教化の意識は、大正一五年の「童話作家宣言」以降、未明の童話世界を領知して行くわけだが、晩年もその点、変わりはない。「ここで、私は童話論をするつもりはないが、芸術は、作者の倫理観、人生観を本として、より善い社会、より美しい社会、より正しい社会を建設せんとするにあります」（「人生案内」『ニューエイジ』昭和二六年一〇月）とは、未明の志向を示す雄弁な「童話論」だ（注１１）。「僕は恋愛を童話に入れるのはいかんと思います」（「日本の児童文学のあけぼの」『新児童文化』昭和二六年六月）と語る旧弊な老大家は、世の正道を説く世直しの文学を、こと絶筆に至るまで、紡ぎ続けていたのである（注１２）。

なお、童話「ふく助人形の話」は、僅かな字数しかない小編であるにもかかわらず、「子ども／こども」「ふく助／ふくすけ」「ざっか店／ざっかてん」等、表記の揺れが散見される。老衰という他ない。

三、知識人と民族 ――竹内好「国民文学論争」の興隆

かくして、晩年の小川未明は、基本的には戦後民主主義的価値観を受容したリベラリストでありつつも、日本国家・民族を愛慕し、その未来を憂えてやまない、愛国者としての側面も備え併せていたのであった。本節では、晩年の未明が繰り返した民族賛美言説（一節参照）の背後に、どのような文壇的・論壇的潮流があるのか、明らかにしたい。

以下、具体的に注目したいのは、中国文学者の竹内好の問題提起によって発生した「国民文学論争」である。この論争は、竹内の評論「近代主義と民族の問題」（『文学』昭和二六年九月）に端を発する論争で、一言で言えば、文学における民族性の回復の是非を問う論争である。無論、提起者の竹内が、日本人の民族性を再評価する立場に立っていたことは、論を俟たない。追って紹介する通り、この論戦には、文壇・国文学界・日本共産党の一言居士が参加し、それぞれ思いの丈を語った。国民文学論争は、日本近代文学史上、有数の論争へと発展したのである。

それでは何故、この時期、文学者・知識人たちは、「民族」という語をめぐって、かまびすしく議論を戦わせたのだろうか。背景には、昭和二五年前後に東アジアで確立した、東西冷戦構造の問題がある（注１３）。昭和二四年、毛沢東が中華人民共和国を建国し、翌年、金日成の韓国進軍に伴い、朝鮮戦争が勃発すると、アメリカの対日占領政策は、それまでの民主化援助から反共の防壁構築へと一変した。俗に、逆コースと呼ばれる現象である。そし

て、時の吉田茂内閣は、米国の要請に沿うかたちで、警察予備隊の創設やレッドパージを推進。サンフランシスコ講和条約への調印と日米安全保障条約の締結によって、西側陣営に属することを明確化させた。

このような状況下、我が国の言論界では、アメリカへの政治的・軍事的従属を脱し、真の独立を勝ち取ろうとする気運が、高まるようになる。とりわけ、日本共産党を始めとする左翼陣営の人々の間では、資本主義陣営の盟主たる米国との決別は、彼らの親玉であるソビエト連邦（コミンフォルム）も要請する喫緊の課題であった。この時期、多くの文学者・知識人をして、民族の再評価へと向かわしめた背景には、以上のような対米自立への渇望＝反米ナショナリズムがあったのである。換言すれば、国民文学論とは、米国という強大な宗主国に対する服従を潔しとしない（左翼）知識人が、自己の日本人としてのアイデンティティを、今一度強化しようとする試みだったと言えよう。

では、国民文学論争の参加者は、実際、どのような主張を行っていたのだろうか。まずは、論争の口火を切った、竹内好の発言を見てみたい。

> 近代主義は、日本文学において、支配的傾向だというのが私の判断である。近代主義とは、いいかえれば、民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する、ということだ。しかし、この傾向は、日本に近代文学が発生したときに生じたのではない。二葉亭にはあきらかに、二つの要素の相剋が見られる。この相剋はある時期まで続いた。それがなくなって、一方の傾向だけが支配的になったのは、だいたい「白樺」による抽象的自由人の設定の可能が開けて以後だろうと思う。（中略）民族は不当に卑められ、抑圧されてしまった。抑圧されたものが反発の機会をねらうのは自然である。
>
> 竹内好「近代主義と民族の問題」（『文学』昭和二六年九月）

竹内によれば、白樺派以後の日本近代文学は、「民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する」ことによって成立する「近代主義」の文学であり、その意味で、根無し草の文学である。階級を前面に打ち出したプロレタリア文学は、その極北だ。竹内は、日本の近代文学が、自由や階級といった普遍的価値を重んじるあまり、日本人としての「素朴なナショナリズム」を切り捨ててきた点を問題視しているのである。

そして、戦時中の日本浪曼派の猖獗（しょうけつ）は、このナショナリズムの切り捨てと無関係ではない、というのが、竹内の見立てである。「近代主義が民族主義との対決をよけたことが、逆

に民族主義を硬化させ、無制約にさせた」「社会革命がナショナリズムを疎外したために、見捨てられたナショナリズムは帝国主義と結びつくしか道がなかった」と、竹内は見る。したがって、竹内にとっての興るべき国民文学とは、民族という要素（ファクター）を包摂した文学、ということになる。それこそが、従来の近代文学の不完全性を補完する――「文壇文学と大衆文学の乖離」（「国民文学の問題点」『改造』昭和二七年八月）を埋める――ことになると考えたのである。要は、文学における民族主義の再評価だ。

ちなみに竹内は、昭和一六年末の大東亜戦争開戦に際し、「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」（『中国文学』昭和一七年一月）という宣言文を書いた聖戦賛美者だが**（九章四節参照）**、多くの文学者・知識人と異なり、自身の過去の行状に関する隠蔽を、戦後、決して行わなかった**（注14）**。「すべての言語表現は自分の血肉とともにあり、その責任は一生つきまとうと考えている。この宣言だって例外ではない」「これは文章書きの宿命である。いったん公表された文を取り消すことはできない。それが血肉と一体なのだから」（「謎」『中国』昭和四七年一〇月）とは、竹内の弁である。自己の発言に対する責任を最後まで引き受けようとする竹内の姿勢は、時流のおもむくままに変節を繰り返した、未明の軽薄な転向人生とは、対蹠的な位置にあると言える。

さて、竹内の次は、国文学者である。昭和二六年、歴史学研究会が「歴史における民族の問題」（五月）を、日本文学協会が「民族と文学」（六月）を大会テーマに掲げる等、この時期、民族に対する関心はアカデミズムの領域でも高まっていた。ここでは、上代文学研究者・西郷信綱の発言を紹介したい。

> 人民への蔑視とむすびついて、私たちには日本民族を過少に評価し、その悪口をいい、民族伝統を頭から否定することが、ともすれば進歩的であることのように考える傾向がつよかったとおもう。しかしこの考えが文化や文学の発展法則にそむいた考えであり、結局、自分一個のみじめさを民族に転嫁した教養的駄弁でしかないことは、明らかだ。正直に、そして地道に古代からずっと日本文学の歴史を研究してみたとき、私たちはその成果とその可能性が果して貧しかったといえるだろうか。断じてそうはいえない。しかもこの伝統をうけつぎ、それを革命的に発展させることによってしか新しいものは生れてこないのである。私たちは日本文学の偉大さの意識をもっと自信たっぷりと身につけ、自分たちの仕事が新しい民族文化の創造につよくつよくつながっている意義、またつながらねばならぬものであることを、もっと積極的に自覚する必要がある

とおもう。

西郷信綱「文学における民族」（『文学』昭和二六年九月）

この文章は、先の竹内の評論と同じく、雑誌『文学』の特集「日本文学における民族の問題」へ掲載された文章である。そして、その内容的核心は、大正期以降の文学者の進歩主義的・コスモポリタニズム的傾向を批判し、民族伝統の止揚を促すことにあった。

ところで興味深いのは、このように民族文化再評価の必要性を強調する西郷が、右派や保守の論客ではなく、マルクス主義者であったという点である。西郷が所属し、『文学』の編集にも携わっていた日本文学協会は、当時、マルクス主義系国文学者の牙城であった。

綾目広治は、「スターリン批判（一九五六年）以前においては、いまだ左派はスターリン主義を金科玉条にしていたのであるが、そのスターリン主義とはインターナショナリズムを基調とする本来のマルクス主義から大きく逸脱して、民族主義をいわば表看板に打ち出している〈社会主義〉だったのである。したがって、当時の政治的思想的文脈から言えば、左派が民族や国家を語ることは、むしろ当然であったのである」（「ナショナルな思考の限界 国民文学論争をめぐって」『近代文学研究』平成一八年三月）と述べ、スターリン批判以前、民族や国家をめぐる言説が左派の領分に属していた事実を指摘しているが、往年の西郷も、スターリン主義の影響を受けていたと見るべきだろう。実際、先の本文中、彼はスターリンの民族賛美発言を引用し、自説を補強していた（注15）。

もちろん、かかる民族文化の礼賛は西郷に限らない。他の日文協所属の国文学者も行っていた。例えば、中世文学研究者の永積安明（ながづみ）は、「民族のための文学、国民のための文学が、近代的な自我の確立の文学、小市民的な自己形成の文学にとってかわらねばならぬことを、ぼくたちわ率直に主張すべきである」（「文学的遺産のうけつぎについて」『文学』昭和二七年三月、傍点原著者）と述べ、「民族のための文学」が旧来の近代文学に代置されるべきである旨、断言している。永積もまた、文学における民族的伝統の継承を力説していたのである。

最後に確認したいのは、日本共産党の国民文学論である。この時期、共産党は、いわゆる「五〇年問題」で所感派（主流派）と国際派（反主流派）に分裂し、激しい内部対立を抱えていたわけだが、戦後の平和革命路線を批判し、アメリカ帝国主義に対する民族解放闘争を唱えた所感派の党員が、国民文学の構想に積極的だった。所感派系の文学者・野間宏の発言を見てみよう。

もちろん私たちの創造しようとする国民文学は日本民族がサンフランシスコ条約以来、全く奪われてしまった自分の国を取り返し解放して行くというたたかいのなかで生みだされてくるものであるということ、このことはいつもはっきり考えられていなければならないことである。国民解放、それはナチス占領軍からフランス民族を解放し、また日本帝国主義から中国民族を解放した国民解放と同じように、アメリカ軍から日本民族を解放するたたかいである。それ故に私たちの国民文学はこれらの国民解放文学がレジスタンス文学とよばれるように、あくまでもレジスタンス文学抵抗文学なのであり、このことを置いて国民文学を考えようとするとき、また私たちは全く道を失うことになるだろう。

野間宏「国民文学について」（『人民文学』昭和二七年九月）

ここで野間は、「日本民族がサンフランシスコ条約以来、全く奪われてしまった自分の国を取り返し解放して行くというたたかいのなかで生みだされてくる」文学こそが、あるべき国民文学の姿であると論じている。つまり、アメリカの占領支配からの脱却に資する、対米レジスタンスの文学こそが、野間の理想とする国民文学なのである。その点、竹内と比べ、政治的な色彩の濃い国民文学論であると言えよう。

では何故、野間がそのような発想をするのか、と言えば、それは先にも述べた通り、彼が所感派系の共産党員であるからに他ならない。共産党は、昭和二六年一〇月の第五回全国協議会（五全協）で、新綱領「日本共産党の当面の要求」（五一年テーゼ）を採択し、来るべき革命の性質を「民族解放民主革命」と規定した（注16）。アメリカ帝国主義の奴僕と化した吉田反動政府を打倒し、日本民族の独立を勝ち取ることが、もっとも重要な政治方針となったのである。したがって、対米レジスタンス文学の必要を説く野間の国民文学論は、かかる党の方針と軌を一にしたものであると言えるだろう。野間の文学論は、すなわち、所感派の文学論なのである（注17）。

以上、ここまで筆者は、竹内好・西郷信綱・野間宏の国民文学論を概観してきた（注18）。細かな差異はあれ、これらの論者は皆、民族という概念を肯定的に評価し、文学へ注入しようとした点で一致している。幾分、理屈っぽい嫌いはあるけれど、彼らはそのことによって、明治維新以後の近代文学の不完全性が克服されると考えたのである。

最左派の共産党員ですら民族主義を鼓吹していた——今日的な観点から振り返るならば、これはいかにも奇異かもしれない。しかし、サンフランシスコ講和条約調印前後の日本にあ

って、左翼が民族の価値を唱道することは、決して珍しい現象ではなかった。例えば佐藤泉は、「一般に戦後の言説空間にあってナショナリズムはもっぱら保守派、右派の専有物であり、いわゆる進歩派はナショナリズムに対し批判的な立場だと理解されている。ところが、五〇年代は、むしろ逆に、国民、民族の語り手は、左派勢力の方だった」（「一九五〇年代国民文学論」『軍記と語り物』平成一九年三月）と述べ、一九五〇年代、ナショナリズムが左翼の所有物であった事実を指摘している。民族をめぐる語りは、右派ではなく、左派のお家芸だったのである。

さて、してみれば、一節で見た未明の民族賛美が、かかる五〇年代の言語空間の磁場の上に成り立っていたことは、もはや自明だろう。「この子供らにこそ父祖から伝わった民族の誇りを失わせず日本のすぐれた民族遺産を知らせて、自負と誇りを持つように教えたい」（「児童文学」の夜明けへ」『読売新聞』昭和二八年八月二四日）、「作家とか芸術家は（中略）長い間民族が伝統的に受継いできた今日までの思想を、再び子供達に自覚させ悟らせることを義務としなければならない」（「童話と私」『改造』昭和二九年六月）といった未明の民族賛美は、国民文学論争に代表される、このような民族文化再評価の潮流のもとに、展開されていたのである。

右派的な言説であれ、左派的な言説であれ、小川未明の発言が、時の政治状況と無関係に発せられることは、基本的にない。時代の影響を受けずにはいられない男、それが未明なのである。

四、童話伝統批判 ――少国民世代による告発

さて、ここまで私たちは、小川未明がその晩年に記した随筆・評論・童話について、当時の文壇・論壇の潮流との関連も視野に入れながら、考察を加えてきた。最後に本節では、未明が死へ至る直近約一〇年間（昭和二六～三六年）の同時代評をつぶさに検討することで、彼が周囲の児童文学関係者からどのような世評を受けていたのか、検証したい。

昭和二〇・三〇年代の未明評を語るに際し、絶対に無視し得ないのは、古田足日の「さよなら未明」（『現代児童文学論』くろしお出版、昭和三四年九月）を始めとする「童話伝統批判」の一群である。それは、児童文学史上の特記事項でもある。しかし、同時期、未明の偉大を褒め称える勢力が、依然かなりの数存在したことも、見落としてはならない史実であろう。興味深いのは、これらの礼賛者の未明賛美が、おおむね二つの基本型（プロトタイプ）――あるいは紋切型（ステレオタイプ）――を反復している点だ。

一つは、未明を日本の近代童話の祖と位置付ける言説である。例えば、滑川道夫は、「「めでたしめでたし」で終る、おとぎばなしを克服して創作童話期をきり開いていったのは、明治四三年処女童話集「赤い船」の作者小川未明の児童文学である」（「未明の童話」『日本読書新聞』昭和二六年一月三一日）と評しているし、鹿島鳴秋は、「いうまでもなく、文学としての童話の地位を確立したのは、わが小川未明先生である」（「小川未明先生と童謡」『教育音楽』昭和二六年三月）と断言している。もしくは、関英雄の「明治の末から今日に至る、日本の半世紀を代表する児童文学作家を唯一人挙げるとすれば、当然小川未明を挙げなくてはならない。それは、未明が、わが国の近代的な童話文学の創始者であり」（「小川未明論」『文学』昭和二九年一二月）云々といった評言も同種のものだ。類例はこの他、枚挙に暇がない（**注19**）。

二つは、未明とアンデルセンの功績を類比的に捉える言説である。例えば、大木雄二は、「童話文学の創始者ともいうべきアンデルセンは、そのすぐれた作品を、世界の児童のたのしい贈物としましたが、わが未明先生もまた、はげしい情熱とこころの美しさを、日本の児童の贈物とされるのであります」（「あとがき」『ひらがな童話集』金の星社、昭和二六年九月）と論評。酒井朝彦も、「小川先生は、五十年の文学生活において童話文学としての創作八百篇におよび、その量においても、芸術性の高貴さにおいても、アンデルセンに優るとも、決して劣らぬものでありますことは、多くの人びとの認識するところで、日本はもとより、世界の童話文学に、永遠の光輝をはなつものと思います」（「愛と正義の作家小川未明先生」『ニューエイジ』昭和二九年三月）と、両作家の偉功を併記して讃えている。こちらも類例は、掃いて捨てるほどあり、引用し足りないほどだ（**注20**）。

ところで、筆者が重要だと思うのは、これらの膨大な数の賛辞と、その帰結として進行していた未明の権威化は、彼の負の歴史の隠蔽を前提として成り立っていたという点である。ここで言う負の歴史とは、もちろん、「八紘一宇」を叫び、「聖戦」遂行を喧伝した、日中・大東亜戦争下の言動に他ならない。敗戦直後の昭和二〇年から二五年にかけて、周囲の児童文学関係者が誰ひとり、戦後の未明の変節を言挙げしていない経緯は、既に**一一章三節「秘匿された聖戦賛美　――八・一五後の未明」**で指摘した通りだけれど、昭和二六年以降も、事情は同様である。

岡上鈴江「父未明の歩んだみち」（『小川未明集』ポプラ社、昭和三二年一二月）や、馬場正男「小川未明の人と作品」（『中学生文学全集』第二二巻、新紀元社、昭和三三年八月）のように、この時期、未明の足跡を通史的に振り返る文章は数多く執筆されているが、戦時中

の未明の振る舞いに関しては、いずれの論者も皆、無視・黙殺している。中には、塚原健二郎の「昭和十二年は、小川さんの五十五歳の時であります。民族を愛する小川さんは、髪を染めるほどの思いで、児童の身近に立たれたのでありますが、考える一本の葦である小川さんの作品の中へ登場する児童の姿は、時代の要請する勇ましい軍国の少年となることはできなかったのです」（「かいせつ」『日本児童文学全集』第二巻、河出書房、昭和二八年三月）といった論及の如く、日中戦争下の未明童話について、完全な出鱈目を吹聴している人物もいるから驚きだ（注21）。

極め付けは、同じ頃、講談社より刊行された『小川未明童話全集』全一二巻（昭和二五年一一月～同二七年六月／昭和三三年一一月～同三四年四月）および『小川未明作品集』全五巻（昭和二九年六月～同三〇年一月）である。前者は童話、後者は小説・評論・随筆類を採録した、未明文学の決定版だが、これらの著作は、戦時中の国策協力的な作品群がまったく掲載されていない欠点を持っていた。

前者の編集委員を務めた滑川道夫によると、不掲載の理由は、「出版社の意向」であったという（「そのような作品は、出版社の意向もあって本全集には収録しなかった」「解説」『小川未明童話全集』第一〇巻、昭和三四年三月）。また、後者の編集委員を務めた山室静によると、それは「紙幅の関係」であったそうだ（「紙数の関係もあって『新しき児童文学の道』（昭和十七年）からは一篇も収録しえなかったが、これはさしてマイナスにはなってゐないと思ふ」「解説」『小川未明作品集』第五巻、昭和三〇年一月）。

しかし、掲載へ至らなかった理由が何であるにせよ、戦後民主主義的な価値観に照らせば恥部以外の何者でもない戦時下の言説が、全集という聖典（カノン）から、周到に排除されていた事実は注目に値しよう。繰り返すが、先に挙げた基本型に代表される、昭和二〇・三〇年代の未明賛美は、未明の権威を毀損する恐れのある、このような負の歴史の隠蔽の上に、成立していたのである。

そして、「童話伝統批判」の隠された功績は、これまで誰も論難し得なかった未明の国策協力を、初めて正面から暴露・剔抉した点にあるのではないか、というのが、筆者の私見だ。周知の通り、「童話伝統批判」は、鳥越信ら早大童話会の宣言「「少年文学」の旗の下に！」（『少年文学』昭和二八年九月）に端を発する児童文学界の論争で（注22）、その核心は、詩的な童話から散文的な少年小説への転換を促すことにあった（注23）。

だが、このような表現形式に対するアンチテーゼと並行して、鳥越ら若手作家は、本来批判の趣旨とは必ずしも関係のない、過去の戦争協力についても、問題視する姿勢を取ってい

たのである。

私は、未明の戦時中の態度――それは童話集「夜の進軍喇叭」、「日本の子供」及び評論集「新日本童話」にくわしい――を以て、「野ばら」等をはじめとする未明の文学活動そのものを抹殺するつもりはない。けれどもこの未明の戦争犯罪の解明をボイコット乃至は合理化することによっては、決して未明そのものを理解することは出来ぬし、従って、「野ばら」等に示された未明の優れた点も、同時に正しくは評価できるものではないということだけは、はっきりと指摘しておきたいと思う。

鳥越信「船木枳郎『小川未明童話研究』」（『日本文学』昭和二九年六月）

戦時中の未明の行状を「戦争犯罪」と言い切ったのは、恐らく鳥越が初だろう。いぬいとみこもまた、「戦争中は、「軍」のいう大東亜共栄圏の理想にも「美」を見出して、真心から「童話による聖戦への奉仕」を説く（昭和１６）というような、また「僕（ママ）らも戦争に行くんだ」（昭和１２）というような作品をいち早く書くような痛ましい状態」（「小川未明」『子どもと文学』中央公論社、昭和三五年四月）について、否定的に論及している。

戦時中に少・青年期を過ごした鳥越信（昭和四年生まれ）やいぬいとみこ（大正一三年生まれ）は、小川未明の文学的スタンスのみならず、過去の政治的スタンスをも串刺しにして批判することで、年長世代が樹立した未明神話に風穴を開けようとしていた**（注２４）**。「童話伝統批判」は、かつて未明ら大家から戦争協力を使嗾された少国民世代による、禁忌（タブー）への挑戦であり、一〇年越しの告発でもあったのである**（注２５）**。

小括

以上、本章では、小川未明が没するまでの最後の約一〇年間――昭和二六～三六年／満六九～七九歳の期間――を「晩年」と定義した上で、この晩年における未明の人と作品を包括的に検討した。というのも、最末期の未明に関する研究は、これまでほとんど着手されていない状況にあったからである。

検討の結果、明らかになったのは、老人・未明が、憲法九条やユネスコの発足を褒めそやすリベラリストとしての側面を持つ反面、インターナショナリズムを明確に否定する、自国家・自民族中心主義者であったこと、また、老衰によって執筆量を減じながらも、こと絶筆に至るまで、教化色の強い童話を紡ぎ続けていたということである。人生最後の童話「ふく

助人形の話」（『日本児童文学』昭和三二年五月）は、戦後日本人の金銭崇拝を弾劾するべく紡がれた、世直しの文学に他ならない。

そして、かかる老国士の民族賛美言説の背景には、サンフランシスコ講和条約調印（昭和二六年九月）前後に国内でうねり高まった、民族文化再評価の気運があった。中国文学者の竹内好が主導した「国民文学論争」は、その代表例だ。当時の左派には、「民主と愛国」（小熊英二）が共存していたのである。

ところで、昭和二〇・三〇年代は、未明の弟子筋に当たる人々が、依然、膨大な数の賛辞を贈る一方、鳥越信・古田足日ら「童話伝統批判」の一群が台頭していた時期でもある。彼らの運動（ムーブメント）は、従来、詩的な童話から散文的な少年小説への転換を促す表現形式上の批判として理解するのが通例だったわけだが、本章では、過去の戦争協力に対する政治的――あるいは倫理的――な批判でもあった点を、付け加えて指摘した。

日中・大東亜戦争下に少・青年期を過ごした――したがって、国家奉仕を使嗾された――鳥越ら少国民世代は、小川未明とその周辺者が隠蔽し続けてきた負の歴史を剔抉することで、未明の権威を毀損しようと試みていたのである。因果はめぐったのだ。

注

1　例えば、小埜裕二は、後期の未明童話について、「〈童話作家宣言〉以後の未明の童話は、それ以前の童話に比べ、あまり評価されてこなかった」「結局、後半期の未明童話は、十分吟味されることもないまま現在まで放置されてきた」（「概説」『小川未明全童話』日外アソシエーツ、平成二四年一二月）、「小説家・童話作家である未明の二つの側面のうち、童話作家の側面は今も息づいているが、その側面も前半期の大正期童話に光があたっているのみである」（「解説」『小川未明新収童話集』第一巻、日外アソシエーツ、平成二六年一月）と、その評価の低さ、注目の少なさを指摘している。

2　未明は、冷戦構造を構成する米国・ソ連の両大国に対して、極めて批判的な態度を取っていた。「今や、二つの帝国主義は、互に秘策をつくして、或は残忍に、或は陰険に、人間性を無視して、世界の覇者たらんとしている。しかし我国は、その何れにも属してはならぬ」（「人間の理想と反する政治」『世界』昭和二八年一〇月）／「元来私はイデオロギーを好まなかつた。これは大きな問題であるが、例えば今日ソ連に於てみられる労働者・農民を基調とする唯物史観の階級的なイデオロギーと、アメリカの水爆実験に際しても顕著だつた資

本主義的科学尊重のイデオロギーは、どちらも人類のためだとは言いながら、やはり何等かの点で人間を束縛するものに他ならない」（「童話と私」『改造』昭和二九年六月）

3　①②の潜在については、既に一章・六章・八章で検討したので、参照されたい。

4　例えば、未明はこの時期、皇族・高松宮宣仁（のぶひと）と「赤い蝋燭と人魚」の舞踊を鑑賞したり（昭和二七年一一月）、昭和天皇や大達茂雄文部大臣と会食している（「天皇、芸術院会員と昼食」『読売新聞』昭和二九年三月二三日夕刊）。また、政治家・吉田茂の著書『回想十年』（全四巻、新潮社、昭和三二年七月～同三三年三月）に、吉田の偉大を讃える帯文を寄せたりもしていた。

5　菅忠道「日本の児童文学と小川未明」（『文学』昭和三六年一〇月）、上笙一郎「戦後の小川未明の思想」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）、砂田弘「評伝　小川未明」（同編『新潮日本文学アルバム　小川未明』新潮社、平成八年三月）、山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）、小埜裕二「解説」（『小川未明新収童話集』第四巻、日外アソシエーツ、平成二六年二月）参照。

6　新聞のインタビュー記事「書斎めぐり　作家・小川未明氏」（『毎日新聞』昭和二八年一一月二三日）でも、未明は「このごろも時々書いていますが、目も悪いので……それでも童話を書くことは自分の天職だと思って責任をもって書いています」と答え、婉曲的な口調ながら、自らの身体的衰えについて言及している。

7　童話以外のテキストは、翌昭和三三年に、「私の一転機」（『週刊朝日』昭和三三年五月一四日）、「とうといいのちと母の愛」（『こころに光を　3年生』実業之日本社、昭和三三年六月）の二篇の随筆が発表されたのをもって、跡を絶つが、後者は奈街三郎の代筆である旨、明記されている。弟子の船木枳郎（しろう）は、この時期、「かつて童顔肥躯の先生は今は高齢となられて肉体は、やや衰え、執筆も意に任せないですが」（「未明童話の見方・与え方」『未明童話宝玉集』東光出版社、昭和三二年二月）と書き記しており、未明の執筆力が衰えていた様子が窺える。

8　岡上は、別の回顧録『父未明とわたし』（樹心社、昭和五七年五月、一八九頁）でも、晩年の未明について、「足が不自由で、ずーっと家の中にばかり蟄居していた父」と書き記している。

9　晩年に書かれた、本文で取り上げた以外の金銭崇拝批判としては、次のようなものがある。「みなさん、世界じゅうのすべての財産や、品物は、すべて、わたしたち人間が作ったものです。お金や、たべものや、そのほかの、いろいろの欲望のために、いやしい、まちが

った考えをおこす人がいますが、これは、人間が、自分たちの作った物質にまけているので、ほんとうの人間は、物質よりえらいものであるということを知らないからです」（「人間のとうとさ」『少年クラブ』昭和二六年三月）／「そういう遠い日のことをおもうと、現代の社会にはあまりにも精神教育が欠けているとおもわざるをえません。世の中は進んだのかも知れませんが、金がありさえすれば何でも出来るという世の中を私は肯定する気にはなれないのです」（「自分を失ってはいけない」『社会教育』昭和二六年七月）／「すべてが金で解決されてくるので植民地的な文化だけが発達してくるのですね。これは嘆かわしいことです」（「御談議拝聴」『厚生』昭和二八年五月）

10　ちなみに、代表作「赤い蝋燭と人魚」でも、人魚を売買した老夫婦や香具師（やし）は、最後、「大暴風雨（おおあらし）」という神の一撃によって、襲撃されている。この末尾の場面について、上笙一郎は、「『赤いろうそくと人魚』に、封建遺制のつよい近代日本の児童問題が反映しているということは常識となっているが、ここには未明が現実の社会の矛盾に立ち向かっていきようとする意思――すなわち生命力がある。最後に暴風雨という自然力を要請しなければならなかったところに、未明が、みずからの立ち向かった現実の矛盾を統一する理論を持ちえなかった事実を見ることができる」（「小川未明の評価について」『日本児童文学』昭和三三年六月）と評しているが、絶筆たる「ふく助人形の話」においても、問題の解決に「自然力」が招喚されている点は、未明童話の特質を考える上で極めて興味深い。

11　童話を人心・社会改革の手段と見做す童話観が露わになっている晩年の文章は、この他、次のようなものがある。「童話は素朴な形式の文学であるが、人間性が至純を求めるとき、必然に生れた理想主義の文学であります。児童に美と正義とをおしえるばかりでなく、おとなへは少年時代への郷愁を通して、現在の生活を反省させるものです。民族の道徳が頽廃しているといわれる今日こそ、新しい力強い童話文学が起るべきときであります」（「序」『小学生どうわ一ねん』宝文館、昭和二七年五月）／「しかし本当のロマンティシズムは社会を改革して美しい社会を作り上げることであり、文学はそれを実現するものだと考えていたし、この信念は現在でも少しも変っていない」（「児童文学」の夜明けへ」『読売新聞』昭和二八年八月二四日）／「いまの児童文学は商業的なジャーナリズムと結びついて子供達のそういう卑俗な欲望と妥協しないと売れないものだから、いいものを書き切れないのだが、何が人間としてほんとに美しいものか、人間の美や正義への高い感激こそ一番尊いものだということ、そういうものを作品の中に生かして、次の時代の子供達の心を養う固い信念を持つた文学者が生れてくれるといいのですが……」（「児童文学の最長老・小川未明氏」『東

京新聞』昭和二九年二月六日）。加えて、周辺者の証言としては、未明の次女である岡上鈴江も、「父のことばから感ずることですけれども、やはり子どもの文学というものは、児童教化ということが根本にあると思うのです。子どもに正しさ、正義感、責任感を強く持たせたい、美しい夢を持たせたいということは、強く持っていると思います」（滑川道夫「解説」『小川未明童話全集』第一二巻、講談社、昭和三四年四月）と語っている。

１２　紙幅の都合上、逐一内容を紹介することは控えるが、「おじいさんと孫」（『北海道新聞』昭和三一年一月三日）、「よろこびがらす」（『小学二年生』昭和三一年四月～同三二年三月）、「くちまねするとりとおひめさま」（『小学一年生』昭和三二年四月～同三三年三月）等、本作以外の晩年童話にも、教化の意識は散見される。

１３　久保田芳太郎「国民文学論争」（『国文学　解釈と鑑賞』昭和四五年六月）、佐藤勝「国民文学論の周辺」（佐藤・古林尚編『戦後の文学』有斐閣、昭和五三年五月）、島村輝「浮沈する「国民」と「文学」　「国民文学論争」という問題系」（『文学』平成一六年一一月）、高橋啓太「竹内好の「政治」と「文学」　国民文学論を中心に」（『日本近代文学会北海道支部会報』平成二二年五月）等参照。

１４　小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉　戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、平成一四年一〇月）参照。

１５　西郷が引用したスターリンの発言は以下の通り。「プロレタリア文化は、民族的文化を廃棄するものではなくして、寧ろそれにその内容を与えるものである。そしてまた反対に、民族的文化は、プロレタリア文化を廃棄するものではなくして、それに形式を与えるものである。民族的文化という合言葉は、ブルジョワジーが権力を握っており、民族の結合がブルジョワ支配の保護の下に行われる限りにおいて、ブルジョワジーの合言葉であった。民族的文化という合言葉は、プロレタリアートが権力を握り、民族の結合がソヴェート権力の保護の下に、完成せられ始めた時に、プロレタリア的な合言葉となった」（引用元不明）

１６　神山茂夫編『日本共産党戦後重要資料集』第一巻（三一書房、昭和四六年一〇月）参照。

１７　野間の国民文学論は、共産党の政治路線の影響が濃厚である由、本多秋五と臼井吉見は、次のように指摘している。本多「野間宏の『国民文学について』」（人民文学、五二・九）は（中略）ひと口にいって、竹内好の提出した問題を文学プロパーの領域で深めず、共産党の政治路線に引き込んだものであった」（『物語戦後文学史（全）』新潮社、昭和四一年三月、四八一頁）／臼井「右によれば、野間宏たちのめざす国民文学というのは、サンフランシス

コ条約から国民を解放するための、「レジスタンス文学」でなければならぬというのである。広範な内容をふくむべき国民文学の名において、文学をこのように特殊なものに規定し、共産党の政治的目標をそのまま文学の目標たらしめようとしたところに、この論の特色は、あざやかに示されている。が、これは野間宏という、ひとりの文学者の意見であるよりは、かれが当時属していた『人民文学』派、つまりは共産党の主流派のそれであったとみるべきであろう」（『近代文学論争』下巻、筑摩書房、昭和五〇年一一月、三二九頁）

18　なお、本稿で触れる機会はなかったが、伊藤整・臼井吉見・福田恒存等、竹内らが推進する国民文学論に懐疑的ないし批判的な見解を示した文学者・知識人も複数存在する。竹内好・伊藤整「新しき国民文学への道」（『日本読書新聞』昭和二七年五月一四日）、臼井吉見「うえざあ・こっく　国民文学」（『群像』昭和二七年七月）、福田恒存「国民文学について」（『文学界』昭和二七年九月）等参照。

19　大木雄二「いうまでもなく、先生は日本の誇りともいうべき文学者であります。（中略）ことに児童文学における先生は、童話を文学にまでたかめた恩人であります。日本の童話は、先生によってはじめて近代文学としての条件を得たともいえるとおもいます」（「あとがき」『ひらがな童話集』金の星社、昭和二六年九月）／山内秋生（やまのうちしゅうせい）「小川未明は、この面における革新的先駆者であつた。すなわち、在来の童話の形式主義を打破し、単なる児童の弄賞の範囲を乗り越えて、童話をして、はじめて近代文学の一分派としての存在を確立するに至らしめた、作家としての第一人者であつた」（「解説」『赤い蝋燭と人魚』角川文庫、昭和二八年一月）／坪田譲治「とにかく、ここに小川未明先生という人が現れ、文学としての童話を完成した訳であります。これは児童文化にとって、まさに歴史的なことで、永く記録されなければなりません」（「小川未明論」『児童文学入門』朝日新聞社、昭和二九年一月）／無署名「処女作「赤い船」以来、童話を書きつづけること五十年、その数は八百編の多きに達し、童話をして文学の地位にまでたかめたのは、一に未明先生の力による」（「筆洗」『東京新聞』昭和二九年四月一五日夕刊）／高山毅「小川未明（一八八二―）は、「赤い船」（一九一〇年）によって、童話を近代文学の地位にまで高めた功労者であり、真の意味での近代児童文学は、これによってはじまったといわれるくらいだ」（「小波、未明、広介、譲治、賢治」『日本文学講座』第七巻、東京大学出版会、昭和三〇年）／上笙一郎「この未明が、日本の児童文学の歴史の上ではたした役割は、児童文学をはじめて文学とよべるものにしたという点にあるといえます。（中略）未明の童話は、おもしろおかしいものでしかなかった日本の児童文学を、どこへ出してもはずかしくない文学にまで高めたのです」（「小川未明」

『幼児と保育』昭和三五年四月）／無署名「大正期の傑作「赤い蝋燭と人魚」（１９２１）が端的に示すように、幻想的詩情とヒューマニズムとを基底とした作風をもって、おとぎ話的児童文学を近代文学に高めた」（「未明と『赤い船』」『玉川百科大辞典』第一五巻、誠文堂新光社、昭和三五年九月）等。

２０　後藤楢根「小川未明先生のことを、「日本のアンデルセン」という人がありますが、わたくしは、「世界の小川未明」と考えています」（「子供の味方・小川未明先生」『毎日小学生新聞』昭和二六年四月一日）／坪田譲治「童話と言えば、アンデルセンという名が頭にうかぶかも知れません。しかしアンデルセンはデンマークの人です。日本では、この本の作者小川未明先生が童話の代表者です。「赤いローソクと人魚」だの、「月夜と目がね」なんかは、アンデルセンの「マッチ売の娘」や、「一本足の兵隊」に比べられるお話です」（「あとがき」『うずめられた鏡』金の星社、昭和二九年六月）／山室静「このこと（「童話作家宣言」――引用者注）によつて日本の児童文学はアンデルセンに比すべき無比の童話作家を占有することになるのだが、小説界が特異な感覚とするどい良心をもつ独自な作家を失ふことになつた損失は、児童文学界がえたプラスによつても簡単には相殺されないであらう」（「解説」『小川未明作品集』第四巻、講談社、昭和二九年一〇月）／高山毅「小川未明は〝東洋のアンデルセン〟といわれているほどで、明治も終りに近い一九一〇年（明治四十三年）に最初の童話集「赤い船」を出し、童話を近代文学の地位にまで高め、これまでに八百編以上の童話を書きました」（「かいせつ」『昭和児童文学全集』第一巻、東西文明社、昭和三三年一月）／上笙一郎「日本のアンデルセン――とさえ俗にいわれる小川未明ですが、残念ながら、決定的な研究はまだ出ていません」（「小川未明研究のために」『日本児童文学』昭和三三年一一月）／滑川道夫「アンデルセンが、西欧、いや欧米の近代児童文学を確立させたように、日本の児童文学において、前近代性を過去のものとしたのは、未明の偉大な業績であった」（「解説」『小川未明童話全集』第七巻、講談社、昭和三四年二月）等。

２１　日中戦争下の未明童話には、塚原が存在を否定する「時代の要請する勇ましい軍国の少年」が、繰り返し登場する。詳しくは、八章二・三節を参照されたい。

２２　当時の新聞は、早大童話会グループの台頭を次のように伝えている。「さきごろ、古稀をこえた童話文学界の長老小川未明の、文化功労賞受賞祝賀会が盛大に開かれたが、あまた祝辞、賛辞の述べられた中で、ただ一人未明童話を批判する者があって、ざわめきが起つた。温暖無風なる童話世界にも近ごろ批判者が現れたのである。それは学生たちを中心とする「早大童話会」のグループで」（「落丁集　こぼればなし」『日本読書新聞』昭和二九年五

月一〇日）

２３　新宮輝夫「「少年文学の旗の下に」から二十年」（『日本児童文学』昭和四九年一月）、続橋達雄『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）、横山信幸「未明否定論争と近代児童文学観」（『近代文学試論』昭和五三年一一月）、宮川建郎「さよなら未明　――「童話伝統批判」と現代児童文学の成立」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年四月）参照。

２４　古田足日（昭和二年生まれ）は、「未明に対する盲目的追随をすてることです。盲目的追随からは、なんの発展も生まれません」「未明を水か空気かのように無批判にうけいれている人びとがいます。（中略）既成観念によりかかり、自分の目で未明を見ようとしない人びとですから、未明否定論が出ても、その否定論に挑戦しようとはしません」（「自分のうちにある伝統の戦いを　いわゆる未明否定について」『日本児童文学』昭和三六年一〇月）と語るなど、未明とその追随者には批判的だが、管見の範囲では、過去の戦争協力に対する批判は行っていない。

２５　時期は下るが、戦時中の未明の国策協力に関して、もっとも激烈な批判を展開した少国民世代の作家は、私見では、山中恒（昭和六年生まれ）である。『撃チテシ止マム』（辺境社、昭和五二年三月）や『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）といった著作に、その批判的態度はよく表れている。

表１　晩年の童話・童話集数

年次	童話	童話集
昭和 26 年（69 歳）	9	9
昭和 27 年（70 歳）	11	8
昭和 28 年（71 歳）	9	3
昭和 29 年（72 歳）	9	7
昭和 30 年（73 歳）	4	4
昭和 31 年（74 歳）	2	2
昭和 32 年（75 歳）	3	5
昭和 33 年（76 歳）	0	2
昭和 34 年（77 歳）	0	0
昭和 35 年（78 歳）	0	0
昭和 36 年（79 歳）	0	1

図１　台風で破砕した福助人形（作者不詳）

結論　本論の成果　――三代を生きた文人

一、詩業　――明治詩人としての未明

以上、本論では、全Ⅳ部一二章にわたって、小川未明の総合的再考を試みてきた。最後に結論では、これまでの議論を各部ごとに今一度整理し、本論の到達点を示したい。

Ⅰ部「詩業」で筆者が明らかにしたことは、未明が優れた明治詩人として、活躍していた事実である。すなわち、明治期の未明は、漢詩や口語自由詩を紡ぐ詩人として、旺盛な活動を展開していた。

とりわけ、漢詩の質は目覚ましい。未明、否、当時の健作少年は、明治二八年から三四年――満年齢で、一三歳から一八歳――までの約六年間、新潟の高田中学に在籍していたのだが、この時期の彼は、すこぶる質の高い五言絶句や七言絶句を残していたのである。

その腕前を示す根拠となるのが、作品に組み込まれた押韻・平仄・出典だ。押韻とは句の末字に脚韻を施すこと、平仄とは詩句に課せられた音の規則性のこと、出典とは詩句の背景にある題材のことで、いずれも、漢詩の技巧を判別する際の主要な指標（メルクマール）となっている。そして未明は、若輩の身でありながら、これらの技巧をほとんど完璧に使いこなしていた。並みの中学生ではない。

では、未明は何故、このような良質の漢詩を作ることができたのだろうか。それは、少青年期の漢学受容と無関係ではないだろう。新潟・高田藩（榊原藩）の下級士族の家庭に生まれた未明は、小学校へ上がる以前から、近所の私塾で、『論語』や『日本外史』等の漢籍を学んでいた。長じて、高田中学へ入ると、幕末の思想家・佐久間象山の高弟である北沢乾堂の家に下宿し、漢詩の個人指導を授かった。高田中学の文芸部や、地元の旧下級士族の子弟で構成される少年グループ・切偲会にも籍を置き、文芸の研鑽を積んだ。

高田中学中退後、未明は東京専門学校（早稲田大学）へ進学するのだが、当初は、二松學舎で漢学を学ぶことを考えていたらしい。『唐詩選』『三体詩』『山陽詩抄』といった漢詩集や、『古詩韻範』『詩語粋金』『詩韻群玉』といった作詩の教本を、少青年期に愛読していた旨の発言も残っている。未明が優れた漢詩を物すことができたのは、かかる個人史的背景に拠るところが大きい。

しかし、より巨視的な視座で捉えるならば、未明の作詩能力は、また時代の産物でもあっただろう。一般に漢文学は、明治維新以後、欧化政策によって一掃されたものと考えられがちであるが、実は明治三〇年代半ばごろまで、かつてない隆昌を誇っていたからである。幕

末ないし明治初頭に生まれ育った夏目漱石・森鴎外・幸田露伴らには、到底及ばないにせよ、明治一〇年代生まれの知識人の漢学的教養は、なお豊潤であった。同世代人としては、明治一二年生まれの永井荷風や河上肇も、優れた漢詩を残している。明治一五年生まれの未明は、荷風や河上と並び、漢詩・漢文という前近代の教養を血肉化し得た、最後の方の世代に当たると言える。

児童文学史上、童話作家であると同時に、漢詩人であるような人物は、ほとんどいない。未明と後続の児童文学作家とを分かつ決定的な分岐が、ここにはある。

明治詩人としての未明のもうひとつの側面、それは口語自由詩の紡ぎ手としての姿である。本論では、漢詩に加え、未明が著した生涯唯一の詩集である『あの山越えて』(尚栄堂、大正三年一月)の検証を行った。同書は最低、五版を重ねており、売れ行きは好調だったようだ。

ところで、この詩集の特異な点は、掲載されている六九の詩篇の初出が、総じて、独立した詩ではなく、明治三〇・四〇年代の小説に内包されている点である。つまり、小説の登場人物の吟唱する詩歌や、小説の地の文・会話文がそのまま、あるいは幾分かの修正を加えられて、詩として収録されているのである。筆者の分析の結果、本書の詩の原形には、詩歌(三〇%)、地の文・会話文(六三%)、童謡(七%)の三つの種類があることが明らかになった。また、初出から詩集への詩化に際しては、無改稿(一三%)、部分改稿(五五%)、全面改稿(三二%)の三つのテキスト改変の型が存することが明らかになった。

平安朝の歌物語(「伊勢物語」「大和物語」等)以来、物語の作中に詩歌が織り込まれる事例は山ほどあるし、物語へ挿入された詩を詩集へ載録した立原道造のような事例も僅少ながら存在するが**(注1)**、小説の地の文や会話文を詩に転化してしまうのは、極めて特殊なケースだろう。日本文学史上、類例のない珍奇な詩集を、未明は書き残していたのである。

他方、詩の成立過程の奇抜さと異なり、詩で詠まれている題材そのものは、決して珍しくはない。いやむしろ、凡庸ですらある。本詩集で、主に描かれているのは、作者の郷土(ふるさと)である。

すなわち、本書の詩篇には、未明の郷土である越後・新潟の自然が存分に表象されていた。例えば、作中多用される「雪」「白」「灰色の空」といった詩句は、越後の厳しい冬を想起させてやまない性質のものだ。あるいは、詩「妙高山の裾野にて」の「妙高山」のように、越後のローカルな地名が、そのまま詩材化されている例もある。高田中学の同窓である相馬御風が、本詩集を評して、「「あの山越えて」を読んで居ると、ずつと以前の君を思ひ出すと共

に、僕は小供の頃の自分や越後の自然が思ひ出されて、たまらなく好い気持になる」（「三月の作品を読んで　五作家に寄する手紙（四）」『読売新聞』大正三年三月一八日）と感嘆しているのは、故なきことではないのである。

それでは、『新体詩抄』（明治一五年八月）以来の日本近代詩史において、『あの山越えて』は、どのような文学史的位置を占めているのだろうか。本論では、この点についても、考察を行った。筆者の結論は、『あの山越えて』は日本の口語自由詩運動の傍系に位置付けられ得る、というものである。

何故か。それは、本書の六九の詩篇の大半が、文語ではなく口語、定型ではなく非定型で書かれた、口語自由詩だからである。そして、これらの口語詩が生まれるに至った背景には、明治四〇年前後に詩壇を席巻した口語自由詩運動や、この運動で第一線を担っていた、親友・相馬御風の影響があると、強く推定されるからである。御風や川路柳虹と異なり、未明は詩壇をリードする詩論や実作を残すことはなかったけれど、明治期口語自由詩運動に随伴する脇役として、ひっそりと、本詩集を産み落としていた。文語定型詩から口語自由詩へ——詩壇を画するこの一大運動（ムーブメント）に、未明もまた、一詩人として参加していたのである。

序論で記した通り、従来、小川未明の詩人としての活動は、未明＝童話作家という通念が先行するあまり、十分に検討されないまま、放置されてきた。しかし、未明の漢詩や口語自由詩は、質が高く、独創性に満ち、また同時代の文学史の潮流とも歩みを同じくするものであることが、**Ⅰ部「詩業」**の論述の結果、明らかとなった。未明は、自己の文学者としてのキャリアの起点を漢詩に持つ、優れた明治詩人だったのである。

二、社会主義　——革命的知識人としての未明

Ⅱ部「社会主義」で筆者が明らかにしたことは、小川未明が社会変革を志す革命的知識人として、活動していた事実である。すなわち、大正期の未明は、アナキズムや共産主義思想に傾倒する急進左翼として、華々しい活躍を見せていた。

例えば、大正九年、大杉栄・堺利彦・山川均らとともに、社会主義者の大同団結組織である、日本社会主義同盟の設立発起人に名を連ねた事実は、社会運動史上、よく知られている。が、話は何もこれに留まらない。大正期の未明は、治安維持法の先駆けとなった「過激社会運動取締法案」の制定反対運動を主導したり、ロシア飢饉救済を目的とする東大新人会の演説会へ出演する等、時事問題に対応したアクチュアルな闘争の現場へ、積極的に顔を出していた。労働者の祭典であるメーデーに、出版従業員組合の組合員として参加し、警察官を靴

で蹴り飛ばしたという、あわや逮捕の武勇伝も残っている。勇ましい。

文壇においては、左派系の文芸・思想雑誌で健筆を揮った。『社会主義』『種蒔く人』『解放』『労働文学』『文芸戦線』といった媒体がそれである。また、日本プロレタリア文芸連盟、日本無産派文芸連盟、日本左翼文芸家総連合といった左派系の文学団体にも、数多く出入りし、プロレタリア文士として存在感を示した（注2）。結果、未明の自宅には、特別高等警察の刑事が、定期的に監視へ訪れるようになる。

しかし、それもそのはず。社会主義時代の未明は、特高が監視したくなるのも思わず頷けるような、過激な資本主義批判を展開していた。「資本主義の道徳は、無産者に、特権階級の犠牲者たることを強めるばかりでなく、それを正当たりとするものである。資本主義制度の下には、正義がない。道徳がない。宗教がない。芸術がない」（「プロレタリヤの正義、芸術」『解放』大正一一年八月）といった発言が、それである。

富の偏在を生み、持つ者と持たざる者の格差を必然化する資本主義制度を、未明は全面否定していた。批判の根底にあるのは、貧者の苦しみをどうにかして根絶したいというヒューマニズムである。

そして未明は、このようなブルジョアとプロレタリアの間の階級格差を実力で解消するべく、階級闘争の唱道者となって行く。曰く、「労働祭は、全世界の無産階級の結束すべき日だ。正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」『時事新報』大正一一年五月一日夕刊）。曰く、「自己の悩みは、即ち自己の属する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならない」（「闘争を離れて正義なし」『中央公論』大正一一年七月）。さながら、革命家のアジテーションである。

猛々しく階級闘争を呼号する一方、反戦の志向も濃厚であった。恨みのない善人同士が国家の都合で敵味方に分かたれる悲哀を描いた童話「野薔薇」（『大正日日新聞』大正九年四月一二日夕刊）や、英雄面をして帰国した凱旋将軍が戦争遺族の悲嘆に直面する童話「強い大将の話」（『読売新聞』大正九年一一月一五～一八日）は、反戦童話として、名高い作品だろう。社会主義時代の未明は、戦争における国家と民衆の利害を相反するものとして捉え、主に後者の立場から、作家的想像力を働かせていたのである。

さて、Ⅱ部で論じた、童話「時計のない村」（『婦人公論』大正一〇年一月）や小説「血の車輪」（『文学世界』大正一一年一〇月）は、いずれも、上記の社会主義思想が反映した作品として、読み解き得るテキストである。というのも、「時計のない村」には、相互扶助のユートピアを良しとする未明の夢が、村人たちの内紛と和解を通して、諧謔（ユーモラス）的に描かれている

からであり、「血の車輪」には、国家の戦争を悪と見做す未明の反戦思想が、民衆を戦地へ送る老将校の横暴を通して、悲劇的に描かれているからである。未明の左傾化の軌跡を、両作に見出すことは容易い。

ところで、興味深いのは、これらの二作品にはどちらも、科学技術に対する嫌悪の念が描き込まれている点である。すなわち、「時計のない村」の「時計」は、村人の互助と協和を乱す近代時間秩序の編成者として、「血の車輪」の「汽車」は、民衆を轢殺する殺人機械として、それぞれ表象されている。しかし、旧ソビエト連邦や日本共産党が、戦後長らく、原発を推進・擁護してきた来歴からもわかるように、本来の進歩思想としての社会主義は、生産力の拡大をもたらす科学技術（テクノロジー）を、肯定的に捉える思想である。社会主義者にとって、文明の発展は、何ら忌むべき事柄ではない。

したがって、「時計のない村」「血の車輪」両作に流露する――そして、人間未明の基層にある――反科学技術的心性（テクノフォビア）は、未明の社会主義思想のある種の欠陥を告げ知らせていたと見るべきだろう。未明は社会主義者であった。が、原則的な社会主義者ではなかったのである。

もちろん、ここで筆者は、未明がつまらない左翼だったと言いたいわけではない。社会主義の正統（オーソドキシー）とは幾分乖離していたにせよ、大正期の未明は、十二分に革命的であった。むしろ、これまでの小川未明研究は、未明の革命性を過少評価していたのではないか――筆者はそう考えている。

何故なら、旧来の先行研究は、未明＝アナキズム系作家という通説に拘泥するあまり、未明のマルクス主義的な側面を見逃してしまうのが常だったからである。山室静や西本鶏介の論が代表的事例だ（**注3**）。

だが、筆者は本論で、大正期の未明が、階級闘争や唯物史観を是認し、マルクス・レーニン・ロシア革命を賛美するマルキスト的な側面を有していたこと、周囲の文壇人も彼のボル派的な側面を一定認めていたことを、同時代の一次資料の分析を通して、明らかにした。つまり、大正期の未明は、アナボル双方の要素が混在する未分化の社会主義者だったのであり、未明＝アナキスト（空想的社会主義者）という一元的な解釈は、相当な誤謬を含んでいるのである。未明がマルクス主義と決別し、批判の舵を切るのは、アナボル対立が本格化した昭和期以降のことだ。

未明＝アナキスト図式の瓦解は、大正期に紡がれた様々なテキストの解釈を一変させるだろう。そのもっとも顕著な例が、大正一五年に発せられた「童話作家宣言」である。小説

の筆を折り、童話へ専心することを誓った、この「宣言」は、従来、初期プロレタリア文学運動の開拓者で、アナキスト系作家の未明が、折からのマルクス主義の台頭に融合できず、童話へ逃れたと解釈するのが一般的だった。が、筆者は今回、マルクス主義に親和的でありつつも、自己を階級闘争へ同定し切れなかった革命的知識人の敗北として、宣言を読み直した。言い換えれば、未明は、アナキストとしてマルキストに敗れたのではなく、マルキストとして階級闘争に挫折し、童話を通して人心を変える道を選んだのである。

ロシア革命が現実のものとなり、社会主義が当代きっての「現代思想」として君臨していた情勢下にあって、社会主義思想・運動とどのように向き合い、身を処するかは、大正期の知識人に突き付けられた倫理的課題であった。有島武郎の「宣言一つ」(『改造』大正一一年一月)を始め、当時の文壇・論壇では、「知識人と革命」の関係性を問う言説が数多く生まれている。そして、未明もまた、この時代を揺るがす現代思想と如何に向き合うべきか、知識階級(インテリゲンチャ)の一員として、熱心に模索していたのである。

大正年間をアナボル未分化の革命的知識人として駆け抜けた小川未明の歩みを、**Ⅱ部「社会主義」**では、追跡した。

三、国家主義 ――転向者としての未明

Ⅲ部「国家主義」で筆者が明らかにしたことは、小川未明が十五年戦争下の国策を褒めそやす転向者として、活動していた事実である。すなわち、昭和戦前期の未明は、家族国家観や「大東亜共栄圏」構想へ帰服する国策協力者として、政府の施策を後押ししていた。

もっとも、十五年戦争の序盤、すなわち、満州事変の段階では、未明はまだ、社会主義思想の影響下にあった。例えば、この時期の代表作である童話「青空の下の原つぱ」(『週刊朝日』昭和七年一月三～二四日、全四回)には、社会主義的階級意識の残余が、濃厚に認められる。また、昭和一〇年まで、アナキスト系の解放文化連盟に毎月カンパを寄せ、アナキズムへの共感を吐露していたと、かつて秋山清は、雑誌のインタビュー等で証言している**(注4)**。

だが、小林多喜二の虐殺(昭和八年二月)や京大・滝川事件(同四月)に象徴される、当時の厳しい言論・思想統制下にあって、未明の左翼ラディカリズムが、大正期ほどの光彩を放っていない点は、否定するべくもない事実であろう。

以後、未明は思想的後退を重ね、日中戦争を機に完全な転向を開始。その画期となる作品が、盧溝橋事件の勃発直後に発表された、童話「僕も戦争に行くんだ」(『お話の木』昭和一

二年一〇月）である。この童話は、主人公の小学生・勇ちゃんが、溶接工場のおじさんの出征を見送った後、「万歳」「僕も、戦争に行くんだ！」と叫ぶ短編で、研究史上、未明の国策協力の嚆矢の作品と位置付けられている。

そして、本作以降、未明は明確に右傾化し、その国策協力は、敗戦まで留まるところを知らなかった。赤本漫画等を取り締まる児童図書の浄化指令書「児童読物改善ニ関スル指示要綱」の作成（昭和一三年一〇月）や、日本文学報国会と相似形を成す、官許の御用児童文学団体・日本少国民文化協会の創設（同一六年一二月）には、未明も民間有識者・委員として、深い関わりを持っている。少文協設立後は、『少国民文化』『少国民文学』『日本少国民文化協会報』『少国民文化論』といった協会の刊行物で、祖国の聖戦を褒め称える文章を立て続けに発表した。戦時中の未明は、国家の施策に批判なく付き従う、偉大なるイエスマンだったのである。

言説面では、社会主義時代には見られなかった、天皇制の賛美が始まった。すなわち、「すでに、いまの日本は個人主義を許さない。全体の利福のために行動しなければならぬ。職能の別はあつても、共に同じ陛下の赤子で、兄弟である。始めから、貴賤の別も、階級の別ちのあらう筈がない」「日本の家族制度は、日本精神を中軸とする、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか？　上下三千年、これがために和協一致が保たれたのである」（「日本的童話の提唱」『報知新聞』昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）といった類の発言がそれである。

天皇と国民を親と子の関係に準え、両者の情緒的一体性を統治の原理に据える、家族国家観は、戦前日本の有力な支配イデオロギーだった。昭和戦前期の未明は、このイデオロギーを信奉し、ついには、天皇を日本のみならず世界の家長へ戴く「八紘一宇」のスローガンを唱えるにまで至る。

日本の左翼・リベラルの弱点は、今も昔も、天皇制批判がろくすっぽできず、いつの間にかそれに取り込まれてしまう点にあるわけだが（注5）、未明においても、かつて保持していた階級対立の認識は、家族国家観によって融解してしまったと見るべきだろう。天皇という至上の権威を崇めることで、国民間の階層差は無化し、ブルジョアもプロレタリアも、「陛下の赤子」「皇室中心の一大家族」として、等しく横並びになってしまったのである。

日中戦争・大東亜戦争を翼賛・輔翼する姿勢も顕著である。未明は語る。「いま、日本が先頭に立つて、暴慢な英米と戦ひ、世界秩序の建直しに邁進してゐることをご存じでせう。もし、さうしなかつたならば、私達のアジア民族は、彼等のために苦しめられて、終には身

動きすら出来なくなる運命にあつたのです。さう聞くならば皆さんは、歯ぎしりをして、早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか。（中略）私達は、もはや自身の幸福について考へる時でない。すべからく国家の安危を考へなければならぬ時である」（「子供達に」『僕はこれからだ』フタバ書院成光館、昭和一七年一一月）。

この文章は、大東亜戦争下に出版された、ある童話集の序文だが、ここで未明は、「アジア民族」を苦しめる英国・米国への憎悪を煽り、子どもに戦争協力を焚き付けている。使嗾している。

発言の背景にあるのは、欧米列強の植民地支配を打ち破り、日本を盟主とする共存共栄の新秩序を打ち立てようと呼号した東条英機内閣の国策、「大東亜共栄圏」構想に対する心酔だ。日本とアジア諸国の指導・被指導関係を犬の母子へ仮託した、童話「頸輪」（『少国民文化』昭和一七年六月）を始め、右記の理念を言祝ぐテキストは、同時代上、多数見受けられる。十五年戦争下の未明は、日本のアジア進出を正当化するために喧伝された、「アジアモンロー主義」「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」といった標語（スローガン）に、深く心を奪われていたのである。

従前述べた通り、社会主義時代の未明は、戦争における国家と民衆の利害を相反するものとして捉え、民衆側の受難に寄り添う姿勢を堅持していた。が、国家主義時代は一転、施政者目線の聖戦賛美によって、その立場が逆転してしまっている。かつての反戦作家は、忠実なる帝国の臣民へと様変わりしてしまったのである。

それでは、かかる未明の転向は、日本の近代転向史上、どのような位置を占めていると言えるだろうか。整理しよう。

まず、時期の問題だが、これは先にも述べた通り、昭和一二年の日中戦争を契機になされたものと見るのが妥当である。満州事変下の弾圧が、日本共産党員（およびそのシンパ）をメインターゲットとしていたのに対し、日中戦争期は、無政府主義者・社会民主主義者・自由主義者・宗教者にまで、有形無形の圧力が加えられていた。第一次近衛文麿内閣の発動した「国民精神総動員運動」が直接の原因である。未明の転向は、「挙国一致」が国是となる、このような強大な同調圧力の中で、生起したのである。

次に、程度の問題。戦前日本の検事・森山武市郎は、自著『思想犯保護観察法解説』（昭徳会、昭和一二年三月、六二〜六五頁）で、転向のレベルを五段階に分けているが、未明の転向は、その最高位に位置するものである。すなわち、「日本精神を体得して実践躬行の域に到達せる者」（六五頁）という区分が、それだ。未明は、当時の思想検察の基準に照らし

て、極めて優良な模範的転向者だった。偽装転向を疑う余地はない。

最後は、反省の有無。未明は、自身の思想的変節について、まったく反省しない無反省型の転向者である。この点、中野重治・村山知義・高見順といったプロレタリア文学の諸作家が、その「転向文学」で、転向に伴う恥の意識や裏切りの意識を表出していたのとは、対照的である。未明には、自らの言動を批判的に顧みる自己批判の精神が、とにかく欠落しているのである。

もちろん、日中戦争をきっかけに、戦争協力へ走った文学者は、ひとり未明のみではない。日中戦争後の文学史の主潮は、火野葦平の小説「麦と兵隊」（『改造』昭和一三年八月）のメガヒットから、ペン部隊他、各種御用文学団体の乱立を経て、日本文学報国会の結成へと至る、積極的国策追従の流れであった。「大東亜共栄圏」構想の信奉者など、掃いて捨てるほどいた。逆に、この流れに抗う、芸術的抵抗派や本格的抵抗派は、ごく僅かな数しかいなかった。したがって、未明の歩みは、時の文壇の主流派と軌を一にする、極めて同時代的な道行きだったと評価できるだろう。

以上見てきた通り、昭和戦前期の小川未明は、階級闘争から家族国家へ、反戦から聖戦賛美へ移行した、本式の転向者であった。アナボル未分化の革命的知識人が、国家の尻馬に乗る国策協力者へ変容していく過程を、**Ⅲ部「国家主義」**では、解き明かしたのである。

四、戦後リベラリズム ——再転向者としての未明

Ⅳ部「戦後リベラリズム」で筆者が明らかにしたことは、昭和戦後期の小川未明が、反戦・民主主義を唱える再転向者として、活動していた事実である。すなわち、日中開戦後、社会主義思想を清算し、戦争協力の姿勢を鮮明化した未明は、終戦の詔勅が渙発されるや、いち早く、ＧＨＱ発の「民主主義革命」へ鞍替えしていた。

八・一五後の未明の左旋回を示す、有意な指標のひとつは、民主主義に対する評価の変遷である。何と言っても、戦時中の未明は、「吾等の文化は、民主々義的な、敵性文化の類似であつてはならぬのである」「自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と記し、民主主義を「敵性文化」呼ばわりしていたからである。

ところが戦後、その態度は一変する。曰く、「たとへ今時の革命が、与へられたる革命にせよ、そして、また自然に、必至に、発生したるものの如き情熱に欠けてゐるにせよ、曠古

の大革命たることに変りはない。なぜなれば、民主々義は、今や汪渾として、全世界を震撼しつつある、輝かしき思潮であるからである。いかなる国柄と雖も、恐らくこの外に立ちて、洗礼を受けぬことは到底許されぬであらう」（「春同じからず」『随筆人』昭和二一年三月）。

かつて、「敵性文化」と唾棄していた民主主義は、日本が敗れるや、「全世界を震撼しつつある、輝かしき思潮」へと、評価が急変してしまった。時局迎合も甚だしい。

秋山清や小野十三郎が編集委員を務めた、雑誌『コスモス』は、その創刊の辞で、「敗戦の今日ではまた風の吹き廻しで猫も杓子も民主々義を唱へ昨日まで反動的国家主義の笛を吹いてゐた者までが恬然として自由の歌手に早変りするといふさはぎです」（「創刊について」昭和二一年四月）と戦後の文学者の変節を揶揄しているが、自身の前言を顧みない未明の民主主義賛美は、まさに、かかる風潮の典型的事例と言える。

折しも、戦後の文学界では、戦勝国・アメリカがもたらした「民主主義革命」へ呼応するかたちで、日本共産党系の新日本文学会や雑誌『近代文学』のグループが、活発な活動を展開していた。戦時中、徹底弾圧されていた左翼・リベラルの一群が、反撃の狼煙を上げたのである。日本少国民文化協会の解散後、創立された、児童文学者協会（現、日本児童文学者協会）も、この陣営の一員だった。したがって、戦後の未明の左傾言説は、これらの新興勢力に同調した結果、発せられたものと見るのが妥当であろう。形勢変化を悟るや、未明はすぐさま、宗旨替えしたのである。

さて、変わったのは、民主主義に対する評価だけではない。先の大戦に対する評価も様変わりしてしまった。すなわち、日中・大東亜戦争下の未明は、「私達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある。それ故にすべての作家は、文学行動を通して、翼賛し協力しなければならぬのだ」（「新しき児童文学の道」『都新聞』昭和一六年五月一二・一三日）、「大東亜戦争は、米英にくるしめられてゐる、アジアの国々を、日本が助けて、そのおそるべき悪魔の手からすくひ出すためにおこつたものです」（「太平洋」『少国民の友』昭和一九年四月）と語る、「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」構想の信奉者だったわけだが、敗戦後、そのような聖戦賛美は、ことごとく消え失せてしまったのである。

代わりに全面化するのは、戦争の悲劇を嘆じ、平和を希求する、反戦の言説である。例えば、敗戦の翌年に書かれた、童話「兄の声」（『子供の広場』昭和二一年四月）の少年航空兵は、自身、天皇制国家主義の権化とも言うべき特攻隊員でありながら、自由や平和といった戦後民主主義的価値を貴ぶ、平和主義者として造形されている。そして未明は、この作中人物をして、「お前は、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」など

と、叫ばせている。つい前年まで、子どもに戦争協力を焚き付けていた童話作家は、一転、反戦平和の旗振り役へと豹変してしまったのである。

特記するべきは、このようなあられもない手の平返しが、何らの自己批判を経ることなく、成し遂げられた点であろう。昭和戦前期の転向と同様、未明は戦後の再転向に関して、一切反省や謝罪の言葉を口にしていない。自己の非を認めたくないというプライド、ないし、世間からの批判を回避したいという保身が、それを遮ったと考えられる。敗戦後、直ちに誤りを認めた高村光太郎や徳永直とは、この点、対照的だ。「童話の神様」が備え持つ、ある種の俗物性を、私たちは見過ごすべきではない。

それにしても、このような歴然たる転向歴にもかかわらず、未明は何故、無反省を貫き得たのだろうか。最大の要因は、社会的制裁の欠如である。未明を囲繞する児童文学界の住人は、彼を「日本児童文学の父」「日本のアンデルセン」と崇め立てるのみで、戦時中の振る舞いを等閑に付した。知らない仲ではない、童話界の偉大な先輩を批判することに、同業者として、あるいは同志として、ためらいがあったのだろう。

また、戦時中の国策協力に関して、児童文学者の多くは、脛に傷を持つ身であった。二反長半（にたんおさなかば）は、児童文学者の戦争加担について、「ところが児童文学者の中で、小林多喜二を見つけることは困難であった。いや、ついに小林多喜二なしに終戦を迎えたというのが真実であろう」（『児童文学の展望』大阪教育図書、昭和四四年八月、二〇五頁）と述べ、全員有罪の烙印を押している。彼らは、他人の戦争責任をとやかく言う資格を、持ち合わせていなかったのである。もし、批判し得るとしたら、それは自己批判との抱き合わせで行うしかない。そして、その厳しい道が歩まれることはなかった。

では、児童文学界の外部、すなわち、一般の文壇やジャーナリズムからの批判はなされなかったのだろうか。なされなかった。小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」（『新日本文学』昭和二一年六月）や吉本隆明・武井昭夫『文学者の戦争責任』（淡路書房、昭和三一年九月）等、文学者・知識人を対象とした戦責追及は、戦後、それなりの盛り上がりを見せていたが、未明がこれらの論者の標的（ターゲット）となることは、結局なかった。児童文学者の市場（マーケット）は狭く、その文壇的地位も低いため、彼らの過去は、十分な社会的関心を集めなかったのである。

かくて、周囲の無批判に勢いを得た未明は、無反省を貫いたまま、昭和二〇年代、世俗の栄誉を恣（ほしいまま）にして行く。児童文学者協会の初代会長への就任や、文化功労者・芸術院会員への選出などが、それだ。かつての国家主義者は、即席の新生リベラルとして生まれ変わり、

戦後社会に確固たる地歩を固めて行ったのである。

もっとも、戦後の未明の左傾化が、大正期に傾倒した社会主義思想への先祖返りでない点は注意が必要だろう。未明の志向は、あくまでも、国家や民族という枠の中での政治的リベラリズムに留まっているのである。例えば彼は、憲法九条を高く評価する一方、階級闘争やインターナショナリズムを明確に否定していた。

とりわけ、晩年の未明は、自国家・自民族中心主義的な傾向が顕著である。人生最後の童話「ふく助人形の話」(『日本児童文学』昭和三二年五月)は、金の隠喩たる福助人形の破砕を通して、戦後日本人の金銭崇拝を弾劾した作品だが、本テキストからは、老いゆきてなお、祖国の明日を憂う、老国士の面影が看取できる。そして、晩年の未明のかかる民族賛美言説の背景には、サンフランシスコ講和条約調印(昭和二六年九月)前後に国内の言論界でうねり高まった、民族文化再評価の気運があったと見て、間違いないだろう。中国文学者の竹内好が主導した「国民文学論争」は、その代表例だ。

ところで、本論では、児童文学史上の一大事件である「童話伝統批判」の再評価も行った。鳥越信・古田足日らが主導した、この運動は、従来、詩的な童話から散文的な少年小説への転換を促す表現形式上の批判として理解するのが通例だったわけだが、実際は、過去の戦争協力に対する政治的(倫理的)批判という側面も備え併せていたのである。「童話伝統批判」は文学運動であると同時に政治運動であった——という断定は、幾分乱暴としても、戦時中、戦争協力を使嗾された少国民世代の怒りが、本運動に介在していたのは間違いない。未明は言わば、二重の意味で論難されていたのである。

もっとも、童話伝統批判が本格化したのは、未明の最晩年であり、老衰で寝たきりの未明が、上記の批判へ応答・応戦することはなかった。いや、できなかった。ともあれ、この運動をもってして、童話界の偉人(レジェンド)たる未明の権威に、初めて揺らぎが生じたのである。

ことほど左様に、昭和戦後期の小川未明は、家族国家から民主主義へ、聖戦賛美から反戦平和へ移行した、反省皆無の再転向者であった。世紀の国策協力者が、戦後レジームへ便乗し、やがて後進から批判されるに至る過程を、**Ⅳ部「戦後リベラリズム」**では、つまびらかにしたのである。

五、小川未明の転向とは何だったのか ——表層と深層の二重構造

「童話の神様」は転向者だった——そのことに疑いの余地はない。それでは、小川未明の転向は、総体(トータル)として、どのような構造を有していたのだろうか。本節では、未明の思想世界

の構造的解明を試みるとともに、幾分感想めくが、上記の転向について、筆者なりの評価を下したい。言うなれば、本論の総まとめである。

これまで、縷々論じてきた未明の転向を、構造として図示すると、**図1**のようになる。未明の思想の流れを、表層と深層の二重構造によって理解しようというのが、本図の狙いである。

まず、表層とは何か。それは、未明が大正・昭和戦前・昭和戦後の各時期に帰服した、政治的イデオロギーである。Ⅱ～Ⅳ部で詳述した通り、未明は、社会主義・国家主義・戦後リベラリズムといった各期の流行思想を、いち早く受容しては使い捨てにする、大勢順応的な風見鶏であった。目端が利くと言うべきか、彼は自己の政治的立場を、その時々の政治状況に合わせて、変移させ続けたのである。この厳然たる転向歴は、誰ひとりとして、否定のしようがないだろう。

他方、未明には、上記のような変遷を経ても変わらない、思想的核があった。筆者が深層と呼ぶものである。図下部で提示した、「儒教的倫理観」や「明治の精神」が、それにあたる。以下、順を追って説明したい。

「儒教的倫理観」は、未明が少青年期に、越後・新潟で身に着けた道徳心（モラリティ）である。幼少の未明が、近所の漢学塾で、『論語』を始めとする四書五経や『日本外史』等の漢籍を素読し、深い感化を受けていた経緯は、既に**Ⅰ部「詩業」**で論述した。中学時代、幕末の思想家・佐久間象山の弟子宅へ下宿し、漢詩の手ほどきを受けていた経歴も振り返った。未明は後年、「私は子供のころから漢学じゅく（塾）で漢詩や漢籍を学び民族的な精神文化に興味を持ち東洋精神とでもいうか自分を理想にまで高め世道人心につくすという考え方を持っていたが、これは一生私を支配した」（「児童文学」の夜明けへ」『読売新聞』昭和二八年八月二四日）と記し、若年時の漢学体験が自己の価値観の形成に絶対的な影響を与えた由、述懐している。

実際、未明の人と文章から、儒教の影響を見て取ることは、さほど難しくない。これは、続橋達雄や滑川道夫らの先行論でも、かねて指摘されている旧説である**（注6）**。

具体的にはどういうことか。例えば、儒教には、父子・夫婦・君臣の間のあるべき道徳を説いた「三綱」の教えがあるが**（注7）**、未明は郷里の父母へ毎月欠かさず生活費の仕送りをする、大変親思いの孝行息子であった**（注8）**。父母を案じる手紙も、大量に送っていた**（注9）**。両親の死後は、実家の春日山神社に、父母の慰霊碑まで建立している。未明は、儒教が説く親への「孝」を忠実に実践していた、と言える。

また、未明は文学者でありながら、女性との浮ついた話が一切ない、奥さん一筋の愛妻家であった。永井荷風・谷崎潤一郎・太宰治らに顕著な女道楽とは、ついぞ無縁であり、研究者としては幾分退屈なほど、操の固い人生を送っていた。結果、夫婦生活は円満を極めた。未明と妻・キチは、生涯「貞」を貫いた、と言える。

あるいは、儒教は、人間が備えるべき五つの徳目として、仁・義・礼・智・信の「五常」を挙げているけれど――先の「三綱」と併せて、「三綱五常」と総称される――、これらの徳目が未明の内部に深く根を下ろしていた点は、疑いを得ない。

とりわけ、郷里の英雄・上杉謙信が重んじた「義」の観念に、未明は終始徹底した関心を寄せていた。「知行一致。義を見てせざるは勇なきなり。これらの言葉がいつも頭の中にあつて、私を叱つたり、励したりしました。人間は正しいことに臆病であつてはなりません。善しと信ずることは断固として行はなければなりません」（「人生案内」『ニューエイジ』昭和二六年一〇月）とは、未明晩年の言葉である。正義への献身が常に自己の関心事であったと、ここで未明は回顧している。

ちなみに、「義」の反対概念は「利」である。代表作「赤い蝋燭と人魚」から、絶筆童話「ふく助人形の話」へ至るまで、人間の私利私欲への嫌悪は、未明のテキストに一貫して貫流しているモチーフだが、かかる反私欲の姿勢は、上記の儒教道徳から説明され得る性質のものだろう。

二つ目の思想的核は、「明治の精神」である。これはやや漠とした概念だが、補助線としたいのは、政治学者・松本三之介の研究だ。松本は、自著『明治精神の構造』（岩波書店、平成五年一一月、一三～二六頁）で、明治人固有の精神的特質を三つ挙げている。すなわち、①国家的精神、②進取の精神、③武士的精神の三点である。松本によれば、国家的精神とは、国家をめぐる問題に対して強い関心や情熱を抱くナショナリスティックな精神のこと、進取の精神とは、新しい制度や文物を進んで取り入れようとする実験的精神のこと、武士的精神とは、武士道のモラルを下地とした公共的精神のことである。

松本の分析は、「明治人」という不特定多数を対象とした、ある種の世代論であり、学問的な厳密性を欠く嫌いがあるけれど、あながち的外れとも言い難い。これらの精神態度は、明治一五年生まれの未明にも、確かに見受けられるように思われるからである。

国家的精神を例にして考えてみよう。筆者は、日中戦争後の未明の転向の要因のひとつとして、国難に機敏に反応してしまう明治人特有のナショナリズムを挙げた山中恒らの先行論を、本論で引用・追認した**（六・八章）**。あるいは、戦後の未明の左傾化が、国家や民族

という枠の中での政治的リベラリズムに留まっている点を指摘した（一一・一二章）。つまり未明には、日本国家の行く末を案じる愛国者としての側面が終始一貫して存在した、というのが、筆者の見立てである。逆に、国家を超えるインターナショナリズムの観念には、存外冷淡であった。

武士的精神という名の公共的精神も、間違いなく有していたと思う（注１０）。そもそも、新潟・高田藩（榊原藩）の下級士族の家系に生を享けた未明は、出自からして、武家の血筋を引いていた。そして、明治維新以前、士農工商の「士」が、「農工商」を斥けて、特権的・排他的に政治を担う階層であったように、未明も、政治や経済といった公的な事象に対して、猛烈な関心を寄せ続けた。

児童文学者の後藤楢根は、在りし日の未明について、「お酒が入ると、先生は、大声で天下国家を論じられた。そこには越後の古武士の姿があった。文学の話に移ろうとすると、先生は、「君、酒を飲むとき、そんな話はよそう」といって、全然相手にしてくれなかった」（「慈愛溢れる古武士の面影」『定本小川未明童話全集』第七巻月報、講談社、昭和五二年五月）と追懐しているが、「天下国家」を弁じる「古武士」とは、言い得て妙だろう。未明は、恋愛等の私的事柄より、政治等の公的事柄へ興味関心を抱く、強烈なパブリックマインドの持ち主だったのである。

さて、してみれば、未明の思想世界における表層と深層は、従と主の関係にあったと結論付けなければならない。つまり、未明の転向は、一方で、時代の主潮へ付和雷同する俗物的な時局追随であったわけだが、他方で、自己の「儒教的倫理観」や「明治の精神」と照らして相応しい理想社会を実現するために、その時々の流行思想を選び取る、主体的な行為でもあったのである。両者は別に矛盾しない。

そしてこの場合、社会主義・国家主義・戦後リベラリズムといった個々の流行思想は、その思想的優越性が如何に熱弁されても、未明の思想構造全体の中では、表層上のイズムに過ぎない。だから、いずれの思想の受容も、不徹底なまま終わってしまうのである。筆者が先に論じた、未明の社会主義思想の非原則性は、その一例だ。

未明の思想的核は表層上のイズムにはない。明治期に培った「儒教的倫理観」や「明治の精神」にこそあるのである。それこそが、未明の深層へ横たわる最大の規範、不動の価値体系であったのである。

ところで、今さら言うまでもないことかもしれないが、筆者は未明の転向を、あまり高く評価していない。もとより、人間は変わる。だから、転向は誰にでも起こり得る。一概に否

定すべき現象ではない。しかし、作家・知識人が、自らの転向に際し、「何故、自分は立場を変えるのか」という弁明や反省の意を公にしないならば、彼・彼女の言説を信じ、あるいは行動した読者に対して、不誠実の誹りは免れないだろう。発言を真に受けた読者を、置き去りにしてしまうことになるからである。率直に言って、未明の転向、というより、転向後の身の処し方は、対読者（社会）の観点から見て、誠実性に欠ける振る舞いだったように思う。

筆者は筆者なりに未明という人間が好きだが、自己の発言の責任と向き合わない／向き合おうとしない作家・知識人を評価することは、やはりできない。後世を生きる私たちが、反面教師としなければならない男だろう。皮肉に聞こえるかもしれないが、私たちは、巷間、傑作と名高い大正童話より、決して褒められたものではない彼の転向に、多くを学ぶべきなのである。ダメだからこそ、学び得るのである。

明治・大正・昭和の三代を生きた文人・小川未明は、時の政治状況に応じてイデオロギーの看板を掛け替える、比類なき転向者であった。が、未明の内部には、明治（ないし明治以前）の倫理感や時代精神が、時代を横断して、常に躍動していた。その意味で、彼は終生明治人であったと、断言できる。近代日本の政治動向に右往左往し続けた、浅ましくも逞しい、ひとりの明治人の姿を、本論では掘り起こしたのである。

六、今後の課題

さて、以上をもって、本編は終わりである。最後に本節では、残念ながら未消化のまま終わってしまった今後の課題を、大きく二つ記し、結びと代えたい。

第一の課題は、封書や葉書といった一次資料（史料）の入手である。序論でも述べた通り、本論は、近年、小埜裕二が編んだ二冊の書誌本『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、平成二四年一二月）、『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（同、平成二八年六月）の成果を背景に、未明の実人生と作品を追い直した実証研究である。この実証性の強度について、筆者はささやかな自負を持っているが、と同時に、その限界も認めざるを得ない。すなわち、本論には、一次資料（史料）の雄とも言うべき、封書・葉書・日記類の引用が、ほとんどないのである。

何故ないのか。それは、これらの資料（史料）が、一般にはあまり公にされていない、未公開資料だからである。未明の書簡類については、新潟県上越市の春日山神社記念館――未明の実家である春日山神社に併設された記念館である――が封書六六通、葉書三四五通を所蔵している他（**注１１**）、同市の小川未明文学館が、ある程度の数所有していると推定さ

れるが、遺族への配慮もあるのだろう。今日へ至るまで、十分に公表されていない。また、書簡の一部は、神田神保町の八木書店等、作家の原史料を扱う古書店に流出していると考えられるが、こちらに関しても、しっかりとした目録調査はできていない。

しかし、雑誌・新聞・単行本での公的発言のみならず、親族・友人・知人へ宛てた、書簡での私的発言をも把握することができていたら、筆者は未明の人となりを、もう少し正しく理解することができただろう。そして、筆者の未明論は、もう少し血の通ったものとなっていただろう。未入手が悔やまれる。

第二の課題は、書籍としての体系性である。巻末の初出一覧で示したように、本論は、これまで雑誌や紀要へ寄稿した計一三本の単著論文を、博士論文としてまとめ直したものである。そのため、各章の内容的密度は、それなりに濃いものになっていると思うが、他方、一冊の本としての体系性は、必ずしも高いとは言えない状態にある。

具体的には、どういうことか。例えば、本論の**三章・四章・八章・一一章**は、もともと、各童話・小説の作品論――「時計のない村」論・「血の車輪」論・「僕も戦争に行くんだ」論・「兄の声」論――として書かれた論文であり、冒頭の「はじめに」では、主として作品論としての問題提起がなされている。すなわち、各作品のこれまでの先行研究を概観し、その問題点を指摘するとともに、自論の方向性を示すといった作業がそれである。この作業は、作品論を書く際の、ひとつの約束事ではあるのだが、一冊の書物としてまとめる際には、異なる記述の仕方が必要だろう。

つまり、各章の目的が、当該時期（大正後期・日中戦争期・敗戦期）の未明の理解にあることを明確に打ち出した上で、その目的を実現するための一手段として、個別の作品の分析を位置付ける、といった記述である。端的に言えば、非作品論的＝通史的な導入だ。この点に関するリライトが、本論では十分にできなかった。

筆者は今後、日本学術振興会の研究成果公開促進費や本学の学術成果刊行助成制度を活用して、本論を書籍化することを視野に入れているが、その際は、読者の可読性を上げるべく、独立・完結した単行本としての体系的な論述を心掛けたい。既発表論文の単なる寄せ集めでは、ダメだと思う。

以上、①封書や葉書など一次資料（史料）の入手、②書籍としての体系性の二点が、筆者が積み残した今後の課題である。もとより、課題はこの限りではないが、まずは自分の目に付くところから、一歩一歩、研究を進展させていく所存だ。

末尾になるが、本博士論文を完成させるにあたっては、和田博文先生、中村三春先生、水

溜真由美先生、牧角悦子先生の四氏に、大変お世話になった。心より御礼申し上げる。

注

1　丸山薫他監修『立原道造全集』第一巻（角川書店、昭和四六年六月）の「編註」参照。

2　**Ⅱ部「社会主義」**では、原則的に大正期の事績・文業の話をしているが、日本無産派文芸連盟および日本左翼文芸家総連合への加入は昭和初期である。

3　山室静「彼は上杉謙信の崇拝家の父君ゆずりの精神家で、正義と真理のために戦うべく筆をとったのだが、その立場は人道主義とクロポトキン流の相互扶助を基調にするもので、マルクス流の唯物論と階級闘争説にはほとんどまったく無縁だった」（「解説」『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五一年一二月）／西本鶏介「未明がアナーキストとして社会主義の立場に立ったのも、大衆運動の指導者たらんとするためではなく、あくまで貧しい人々への共感と同情であり、すべての人間が平等に幸福であってほしいと願う理想主義的な思いからである。従って階級的な闘争を唯一の歴史の推進力とするマルクス主義者とは行動を共にすることはできなかった」（「解説」『定本小川未明童話全集』第九巻、講談社、昭和五二年七月）

4　秋山清「《聞き書き》社会思想家としての小川未明」（『日本児童文学』昭和四九年一月）、「あおぞらと未明さん」（『定本小川未明童話全集』第一二巻月報、講談社、昭和五二年一〇月）参照。

5　例えば、思想家・内田樹の「天皇主義者」宣言（「私が天皇主義者になったわけ」『月刊日本』平成二九年五月）は記憶に新しい。また、目下迫りくる平成三一年の改元に関して、天皇制の廃止を唱える左翼・リベラルは、現状ほとんど皆無である。小谷野敦は、共和主義の立場から、身分制度としての近代天皇制を全否定しているが（『天皇制批判の常識』洋泉社、平成二二年二月）、このような反天皇制を公言する言論人は、我が国において、極めて稀少だろう。

6　続橋達雄「考えてみると四書五経を中心とする漢文学の素読は、文字を覚えさせ、文章構成や文章に内在するリズム感をいつのまにか養っていく。「自伝」の、省略の多い短いセンテンスをつみ重ねた文章も一つには漢文学の素養から来ている。さらに、未明の晩年のエッセイ「人生案内」では、〈知行一致。／義を見てせざるは勇なきなり〉などを力をこめて語っている。『論語』「為政篇」の〈見義不為、無勇也〉と並べ、明の王陽明が唱えた《知行

合一≫を強調しているところ、思弁的な朱子学よりは実践的な陽明学を思わせる漢文学の読みとり方である。というのは、漢文学に内在する倫理思想の実践的志向が、幼少年期のかれの脳裏に強烈な印象となって刻みこまれたことを意味する。まして、私塾の師が文章に没入しそれを涙ながらに読むという直接的体験の重さは、はかりしれぬ影響をかれにおよぼしたことであろう」（『未明童話の研究』明治書院、昭和五二年一月、一五・一六頁）／滑川道夫「しかも未明は、小さいときから、漢学塾で強勉（ママ）され、漢詩・漢文に才能をみがいています。いきおい東洋的な志向・東洋風な考え方が形成され身についていたと思われます。明治十五年生まれで明治期に身につけた、漢学的教養や儒教的教学思想が基本的に生かされていたように思われます。その基盤の上にやがて西欧近代文化を学びとっていくのですが、そういう、東洋的思念は、生涯ぬけきらないで、生きているようです。アナーキズムおよび社会主義思想の摂取のしかたにもそれがあるように思われます」（「未明童話における南と北の思想」『日本児童文学の軌跡』理論社、昭和六三年九月）

7　儒教の教えに関しては、宇野精一『儒教思想』（講談社学術文庫、昭和五九年一〇月）、土田健次郎『儒教入門』（東京大学出版会、平成二三年一二月）、加地伸行『儒教とは何か　増補版』（中公新書、平成二七年一一月）等の文献を参照した。

8　以下、岡上鈴江『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）より。「何より私の印象に深かったのは、両親が毎月祖父母の生活費を送っていたことである。どんなに自分たちの生活が苦しい時でも、それだけは欠かさなかった。（中略）今考えると、それはそのころのお金にしてはかなりの額で、不安定なとぼしい収入の中から、よくあれだけのお金を送ったものだと感心させられるのである」（一五八頁）

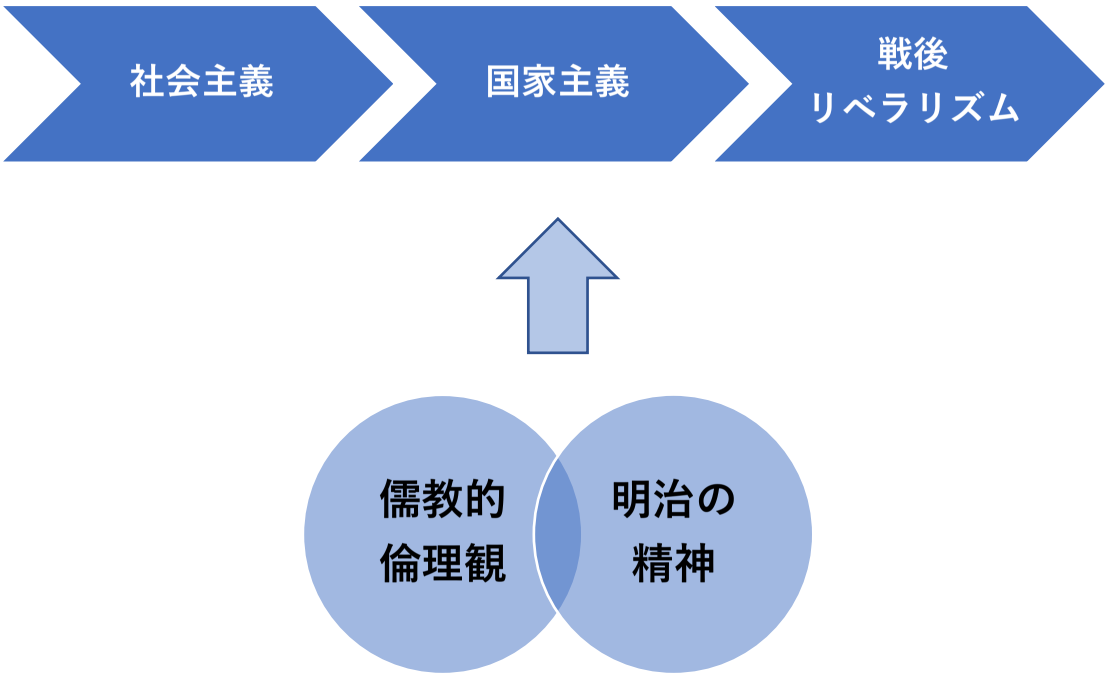
9　未明の遺品を数多く保存・展示する、春日山神社記念館が発行したＢ５版三つ折りのリーフレット「春日山神社参拝のしおり」（同神社の売店で配布）には、次のような記述がある。「手紙類　古里の小川家へ寄せられた手紙で葉書３００通、封書６０通は、昭和２年から約１０年間の物で、父を頼む、母を頼むと言う手紙はほぼ１０日に一度出されており、未明の孝心を示すものとして感動をよぶ。実際は父母宛の物もあったはずで、古里への手紙の回数はもっと多かったと思われる」。なお、手紙の一部は、中村昌司「新資料　未明書簡　断片一〇通」（日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書３　小川未明』野島出版、昭和五二年一〇月）で翻刻されている。

10　続橋達雄は、未明の「士族意識の強さは、かれの人間観や倫理意識をその根底から支えているものの一つ」（『未明童話の研究』明治書院、昭和五二年一月、一四・一五頁）であ

ると指摘している。そして、未明が書いた「武士道の精神こそは永久に、日本人の精神であり、信条でなければならない」（「治安維持法案の反道徳的個条」『新人』大正一四年三月）といった文章を、同書で例示している。

11　小川清隆『童話作家小川未明資料　記念館シリーズ第二集』（春日山神社記念館、平成八年一月）参照。

図１　小川未明の思想の流れ



初出一覧

各章の元となった論文は以下の通りである。なお、博士論文への収録にあたっては、全編にわたり、大幅な加筆・修正を施した。

序論　書き下ろし

一章　「小川未明の漢詩　――高田中学時代の詩業」（『日本漢文学研究』平成三〇年三月）

二章　「詩人としての小川未明　――詩集『あの山越えて』の考察」（『東洋大学大学院紀要』平成三〇年三月）

三章　「小川未明「時計のない村」論　――ユートピアンの夢」（『日本文学文化』平成三〇年三月）

四章　「小川未明「血の車輪」論　――反テクノロジーという基層」（『國語國文研究』平成三〇年六月）

五章　「小川未明の知識人批判　――「童話作家宣言」の真意をめぐって」（『社会文学』平成二八年八月）

六章　「転向者・小川未明（上・下）　――階級闘争から八紘一宇へ」（『日本文学文化』平成二八年二月／同二九年二月）

七章　「小川未明と満州事変　――後退するラディカリズム」（『層　映像と表現』平成三一年三月掲載予定）

八章　「小川未明「僕も戦争に行くんだ」論　――国策協力の起点」（『日本近代文学会北海道支部会報』平成二九年五月）

九章　「小川未明と日本少国民文化協会　――日中・「大東亜」戦争下の歩み」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』平成二九年一一月）

一〇章　「小川未明の再転向　――敗戦以後」（『東洋大学大学院紀要』平成二九年三月）

一一章　「小川未明「兄の声」論　――反転するイデオロギー」（『日本文学』平成三〇年二月）

一二章　「小川未明の晩年　――最後の一〇年間」（『社会文学』平成三〇年二月）

結論　「秘された恥部　――小川未明の転向をめぐって」（『日本児童文学』平成三〇年九月）

参考文献

■全集・書誌・事典

秋田雨雀他編『小川未明童話全集』全一二巻（講談社、昭和二五年一一月～同二七年六月／昭和三三年一一月～同三四年四月）

青野季吉他編『小川未明作品集』全五巻（講談社、昭和二九年六月～同三〇年一月）

武田泰淳他監修『定本小川未明童話全集』全一六巻（講談社、昭和五一年一一月～同五三年二月）

山室静他編『定本小川未明小説全集』全六巻（講談社、昭和五四年四～一〇月）

小川英晴他編『定本小川未明童話全集』別巻（大空社、平成一四年三月）

小埜裕二編『小川未明新収童話集』全六巻（日外アソシエーツ、平成二六年一～三月）

小埜裕二編『解説　小川未明童話集４５』（北越出版、平成二四年三月）

小埜裕二編『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、平成二四年一二月）

小埜裕二編『小川未明Ⅱ　全小説・随筆』（日外アソシエーツ、平成二八年六月）

大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』全三巻（大日本図書、平成五年一〇月）

日本近代文学館編『日本近代文学大事典』全六巻（講談社、昭和五二年一一月～同五三年三月）

■単行本

浅岡靖央『児童文化とは何であったか』（つなん出版、平成二六年七月）

安藤英男『日本漢詩百選』（大陸書房、昭和五二年一二月）

一海知義『漱石と河上肇』（藤原書店、平成八年一二月）

井上寿一『アジア主義を問いなおす』（ちくま新書、平成一八年八月）

入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』（研文出版、平成元年二月）

臼井吉見『近代文学論争』全二巻（筑摩書房、昭和三一年一〇月～同五〇年一一月）

宇田正『近代日本と鉄道史の展開』（日本経済評論社、平成七年五月）

宇野精一『儒教思想』（講談社学術文庫、昭和五九年一〇月）

栄沢幸二『「大東亜共栄圏」の思想』（講談社現代新書、平成七年一二月）

江口圭一『十五年戦争小史　新版』（青木書店、平成三年五月）
江口圭一『十五年戦争研究史論』（校倉書房、平成一三年五月）
エドワード・W・サイード『知識人とは何か』（平凡社ライブラリー、平成一〇年三月）
大岡信『蕩児の家系』（思潮社、昭和四四年一二月）
大串潤児『「銃後」の民衆経験』（岩波書店、平成二八年五月）
大久保利謙『日本全史１０　近代Ⅲ』（東京大学出版会、昭和三九年一一月）
大杉重男『小説家の起源　徳田秋聲論』（講談社、平成一二年四月）
大貫健一郎・渡辺考『特攻隊振武寮』（講談社、平成二一年七月）
岡田芳郎『明治改暦』（大修館書店、平成六年六月）
岡上鈴江『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）
岡上鈴江『父未明とわたし』（樹心社、昭和五七年五月）
岡本宏『日本社会主義政党論史序説』（法律文化社、昭和四三年一一月）
小川清隆『童話作家小川未明資料　記念館シリーズ第二集』（春日山神社記念館、平成八年一月）
小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふる里の百年』（小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月）
小川未明文学館編『小川未明の世界』（上越市、平成一八年一〇月）
小川未明文学館編『御風と未明』（上越市、平成一九年二月）
小川未明文学館編『小川未明の東京　童話作家宣言まで』（小川未明文学館、平成二〇年九月）
荻野富士夫『思想検事』（岩波新書、平成一二年九月）
小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉　戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、平成一四年一〇月）
長田暁二『戦争が遺した歌』（全音楽譜出版社、平成二七年六月）
小田嶽夫『童話のおじさん　小川未明物語』（理論社、昭和三九年五月）
片山社秀『未完のファシズム』（新潮社、平成二四年五月）
加地伸行『儒教とは何か　増補版』（中公新書、平成二七年一一月）
上笙一郎『未明童話の本質』（勁草書房、昭和四一年八月）
上笙一郎編『小川未明論集』（日本図書センター、平成五年六月）
神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』（世界思想社、平成八年三月）

神山茂夫編『日本共産党戦後重要資料集』第一巻（三一書房、昭和四六年一〇月）
柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社、昭和五五年八月）
河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉』（花書院、平成二一年三月）
北河賢三『国民総動員の時代』（岩波ブックレット、平成元年四月）
木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、平成一六年四月）
栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代　増補新版』（インパクト出版会、平成一六年一月）
黒古一夫『戦争は文学にどう描かれてきたか』（八朔社、平成一七年七月）
黒田秀俊『知識人・言論弾圧の記録』（白石書店、昭和五一年一月）
厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』（ぎょうせい、昭和五三年四月）
合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、平成二六年二月）
小島健司『明治の時計』（校倉書房、昭和六三年二月）
小関和弘『鉄道の文学誌』（日本経済評論社、平成二四年五月）
小谷野敦『天皇制批判の常識』（洋泉社、平成二二年二月）
坂本多加雄『知識人　大正・昭和精神史断章』（読売新聞社、平成八年八月）
櫻本富雄『燃える大空の果てに』（日本図書センター、昭和六一年八月）
櫻本富雄『文化人たちの大東亜戦争』（青木書店、平成五年七月）
櫻本富雄『日本文学報国会』（青木書店、平成七年六月）
佐藤伸宏『詩の在りか　口語自由詩をめぐる問い』（笠間書院、平成二三年三月）
思想の科学研究会編『共同研究転向　改訂増補版』全三巻（平凡社、昭和五三年二～八月）
菅忠道『日本の児童文学　増補改訂版』（大月書店、昭和四一年五月）
鈴木貞美『『文藝春秋』とアジア太平洋戦争』（武田ランダムハウスジャパン、平成二二年一〇月）
砂田弘編『新潮日本文学アルバム　小川未明』（新潮社、平成八年三月）
関英雄『体験的児童文学史』後編（理論社、昭和五九年一二月）
袖井林二郎『拝啓マッカーサー元帥様　占領下の日本人の手紙』（大月書店、昭和六〇年八月）
高田文化協会編『郷土の小川未明』（さ・さ・ら書房、昭和四七年一二月）
高橋美代子『小川未明童話論』（新評論、昭和五〇年一〇月）
土田健次郎『儒教入門』（東京大学出版会、平成二三年一二月）
続橋達雄『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）

堤一郎『近代化の旗手、鉄道』（山川出版社、平成一三年五月）
角山栄『時計の社会史』（吉川弘文館、平成二六年三月）
寺崎昌男・成田克矢編『学校の歴史』第四巻（第一法規出版、昭和五四年五月）
ドナルド・キーン『日本人の戦争』（文春文庫、平成二三年一二月）
戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代』（吉川弘文館、平成二二年八月）
鳥越信編『日本児童文学史年表』全二巻（明治書院、昭和五〇年九月～同五二年八月）
二反長半『児童文学の展望』（大阪教育図書、昭和四四年八月）
日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書3　小川未明』（野島出版、昭和五二年一〇月）
日本児童文学学会編『日本児童文学概論』（東京書籍、昭和五一年四月）
日本児童文学学会編『研究＝日本の児童文学』全五巻（東京書籍、平成七年八月～同一五年七月）
羽生康二『口語自由詩の形成』（雄山閣、昭和六四年一月）
濱口晴彦『日本の知識人と社会運動』（時潮社、昭和五二年一〇月）
原田勝正『明治鉄道物語』（筑摩書房、昭和五八年一〇月）
原田勝正『日本の鉄道』（吉川弘文館、平成三年三月）
平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭和三八年一二月）
平野謙『文学・昭和十年前後』（文藝春秋、昭和四七年四月）
藤田省三『《新編》天皇制国家の支配原理』（影書房、平成八年三月）
藤原彰『餓死した英霊たち』（青木書店、平成一三年五月）
船木枳郎『増補　小川未明童話研究』（八木書店、昭和四二年四月）
本多秋五『転向文学論』（未来社、昭和三二年八月）
本多秋五『物語戦後文学史（全）』（新潮社、昭和四一年三月）
松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える』（立教大学出版会、平成二七年三月）
松本三之介『明治精神の構造』（岩波書店、平成五年一一月）
丸山薫他監修『立原道造全集』第一巻（角川書店、昭和四六年六月）
三浦叶『明治漢文学史』（汲古書院、平成一〇年六月）
向川幹雄『日本近代児童文学史研究Ⅳ』（兵庫教育大学向川研究室、平成一二年三月）
村山吉廣『漢学者はいかに生きたか』（大修館書店、平成一一年一二月）
森岡ゆかり『文豪だって漢詩をよんだ』（新典社新書、平成二一年四月）

文部省編『学制百年史　資料編』（帝国地方行政学会、昭和四七年一〇月）
山中恒『撃チテシ止マム』（辺境社、昭和五二年三月）
山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）
山中恒『少国民戦争文化史』（辺境社、平成二五年一〇月）
吉本隆明・武井昭夫『文学者の戦争責任』（淡路書房、昭和三一年九月）
吉本隆明『高村光太郎　増補決定版』（春秋社、昭和四五年八月）
吉本隆明『マチウ書試論・転向論』（講談社文芸文庫、平成二年一〇月）
渡辺考『戦場で書く　火野葦平と従軍作家たち』（ＮＨＫ出版、平成二七年一〇月）
『近代作家追悼文集成』第三七巻（ゆまに書房、平成一一年二月）

■雑誌掲載・単行本収載論文

相川美恵子「日中戦争と児童文学」（鳥越信・長谷川潮編『はじめて学ぶ日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房、平成二四年四月）
秋山清「アナキスト・小川未明」（『文学』昭和三六年一〇月）
秋山清「《聞き書き》社会思想家としての小川未明」（『日本児童文学』昭和四九年一月）
浅岡靖央「１９４０年体制の児童文化」（『別冊　子どもの文化』平成一八年七月）
浅岡靖央「児童文化から少国民文化へ」（『国際児童文学館紀要』平成一九年三月）
浅岡靖央「戦争政策としての少国民文化」（『子どもの文化』平成二二年七・八月）
浅見淵「復活する大家群」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
飛鳥井雅通「民主主義文学運動　――作家たちの戦争責任をふくめて」（『国文学　解釈と教材の研究』昭和四〇年一一月）
綾目広治「ナショナルな思考の限界　国民文学論争をめぐって」（『近代文学研究』平成一八年三月）
安藤宏「評論の季節」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
五十嵐康夫「戦後の小川未明」（『日本児童文学』昭和四七年一月）
池川敬司「文語定型詩から口語自由詩へ」（和田博文編『近現代詩を学ぶ人のために』世界思想社、平成一〇年四月）
石崎等「実存と崩壊感覚」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
伊豆俊彦「知識人の問題　「宣言一つ」前後」（『日本文学』昭和五四年一月）

猪野省三「解説」（『日本児童文学大系』第五巻、三一書房、昭和三〇年五月）
猪口篤志「日本漢詩概説」（『新釈漢文大系　日本漢詩』上巻、明治書院、昭和四七年八月）
猪熊葉子「小川未明」（続橋達雄他編『講座日本児童文学』第六巻、明治書院、昭和四八年九月）
岩淵宏子「戦時下の母性幻想」（岡野幸江他編『女たちの戦争責任』東京堂出版、平成二六年九月）
巌谷大四「はなばなしき復興」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
上野瞭「戦時下の児童文学＝小川未明の場合」（『ネバーランドの発想』すばる書房、昭和四九年七月）
内田樹「私が天皇主義者になったわけ」（『月刊日本』平成二九年五月）
浦西和彦「徳永直「太陽のない街」発表年月・共同印刷争議・設定年月・絶版について」（『国文学』昭和四八年一二月）
海老井英次「抵抗としての沈黙　――永井荷風『断腸亭日記』の世界」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
大澤真幸「ブルカニロ博士の消滅」（『現代詩手帖』平成八年一一月）
大和田茂「同盟名簿から見た文学者」（『初期社会主義研究』平成二〇年二月）
大和田茂「発掘・日本社会主義同盟名簿　（付）趣意書、規約草案、宣言等」（『初期社会主義研究』平成二〇年二月）
大和田茂「一枚の写真から　同盟結成に向けた関西・名古屋遊説の意味」（『初期社会主義研究』平成二二年六月）
小笠原克「芸術的抵抗と非順応」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
荻久保泰幸「文学者の戦争責任論争」（『国文学　解釈と鑑賞』昭和四五年六月）
荻久保泰幸「戦後派文学」（長谷川泉編『日本文学新史　現代』至文堂、平成三年二月）
奥田修三「大正期「知識階級」論」（『立命館大学人文科学研究所紀要』昭和三九年三月）
奥野健男「無頼派の作家たち」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
奥山恵「民主主義児童文学」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年四月）

奥山恵「第二次世界大戦後の戦争児童文学Ⅰ」（鳥越信・長谷川潮編『はじめて学ぶ日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房、平成二四年四月）
小田切秀雄「文学と戦争責任」（『現代の眼』昭和四〇年八月）
乙骨明夫「口語自由詩論その他」（日本近代詩論研究会他編『日本近代詩論の研究』角川書店、昭和四七年三月）
乙骨淑子「小川未明ノート　――文学革命のゆくえ」（『文学』昭和四〇年五月）
加藤禎行「「汽車論」の隠喩　夏目漱石「草枕」をめくって」（『日本近代文学』平成一二年五月）
上笙一郎「小川未明の評価について」（『日本児童文学』昭和三三年六月）
上笙一郎「戦後の小川未明の思想」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）
上笙一郎「小川未明」（日本児童文学学会編『日本の童話作家』ほるぷ出版、昭和四六年九月）
上笙一郎「「小川白洲」と「切偲会」」（『信州白樺』昭和五五年四月）
神谷忠孝「南方徴用作家」（『北海道大学人文科学論集』昭和五九年二月）
神田喜一郎「日本の漢文学」（『岩波講座　日本文学史』第一六巻、昭和三四年一月）
木下彪「森槐南と国分青厓」（『明治文学全集』第六二巻月報、筑摩書房、昭和五八年八月）
木村小夜「小川未明「赤い蝋燭と人魚」とその周辺」（『福井県立大学論集』平成一九年七月）
木村小夜「研究動向　小川未明」（『昭和文学研究』平成二一年三月）
木村政樹「〈知識人〉言説の歴史を再考する」（『有島武郎研究』平成二五年六月）
久保田芳太郎「国民文学論争」（『国文学　解釈と鑑賞』昭和四五年六月）
紅野謙介「『中学世界』から『文章世界』へ　――博文館・投書雑誌における言説編成」（『文学』平成五年四月）
紅野謙介「太平洋戦争前後の時代」（『コレクション　戦争と文学』別巻、集英社、平成二五年九月）
紅野敏郎「小川未明入門」（『日本文学全集』第四二巻、講談社、昭和四一年一二月）
紅野敏郎「雑誌・探索　未明主宰「お話の木」」（『国文学　解釈と鑑賞』平成三年三月）
小森陽一「〈知識人〉の論理と倫理」（『講座昭和文学史』第一巻、有精堂出版、昭和六三年二月）
佐々木幸綱「夜汽車」（『国文学　解釈と教材の研究』昭和五三年一〇月）
佐藤泉「一九五〇年代国民文学論」（『軍記と語り物』平成一九年三月）

佐藤広美「児童文化政策と教育科学」（『東京都立大学人文学報』平成五年三月）
佐藤勝「国民文学論の周辺」（佐藤・古林尚編『戦後の文学』有斐閣、昭和五三年五月）
佐藤宗子「児童文学における「音」・試論」（『千葉大学教育学部研究紀要』平成三年二月）
渋谷百合絵「小川未明「白刃に戯る火」論 ――「童話作家宣言」の文学史的意義をめぐって」（『東京大学国文学論集』平成二六年三月）
島村輝「浮沈する「国民」と「文学」 「国民文学論争」という問題系」（『文学』平成一六年一一月）
新宮輝夫「「少年文学の旗の下に」から二十年」（『日本児童文学』昭和四九年一月）
進藤純孝「「戦後派」文学の明暗」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
菅忠道「解説」（『日本児童文学大系』第三巻、三一書房、昭和三〇年六月）
菅忠道「日本の児童文学と小川未明」（『文学』昭和三六年一〇月）
鈴木醇爾「文学者の八月十五日」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
砂田弘「戦争責任はどう問われてきたか」（『日本児童文学』平成七年八月）
関肇「明治三十年代の青年とその表現の位相 ――『中学世界』を視座として」（『学習院大学文学部研究年報』平成六年三月）
関英雄「小川未明論」（『文学』昭和二九年一二月）
関英雄「民主主義文学の三十年」（日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』東京書籍、昭和五三年一二月）
関良一「文語詩と口語詩」（『国文学 解釈と教材の研究』昭和四五年九月）
関口安義「民主主義児童文学」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
関口安義「民主主義文学」（長谷川泉編『日本文学新史 現代』至文堂、平成三年二月）
高橋啓太「竹内好の「政治」と「文学」 国民文学論を中心に」（『日本近代文学会北海道支部会報』平成二二年五月）
高橋新太郎「文学者の戦争責任論ノート（一～八）」（『国語国文論集』平成三年三月～同一〇年三月）
高橋世織「「夜汽車」からの眺め」（『日本文学』昭和六〇年一一月）
高橋春雄「転向文学の季節」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
都築久義「国策文学について」（『国文学 解釈と鑑賞』昭和五八年八月）

続橋達雄「小川未明の童話宣言・覚え書」（『野州国文学』昭和五〇年三月）
続橋達雄「解説」（同編『日本児童文学大系』第五巻、ほるぷ出版、昭和五二年一一月）
続橋達雄「未明童話集『日本の子供』の一考察」（『野州国文学』昭和五二年一二月）
続橋達雄「未明童話集『夜の進軍喇叭』序論」（『野州国文学』昭和五四年一一月）
続橋達雄「未明童話集『赤土へ来る子供たち』考」（『野州国文学』昭和五六年一二月）
続橋達雄「戦後の未明童話序説（1～3）」（『野州国文学』昭和五七年三月～同五九年三月）
坪田譲治「小川未明論」（『児童文学入門』朝日新聞社、昭和二九年一月）
鶴見俊輔「国民というかたまりに埋めこまれて」（鶴見・鈴木正・いいだもも『転向再論』平凡社、平成一三年四月）
外池力「転向論」（『政経論叢』平成二六年三月）
鳥羽耕史「傷痍軍人」（石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』ひつじ書房、平成二五年三月）
鳥越信「解説」（『新選日本児童文学』第一巻、小峰書店、昭和三四年三月）
鳥越信「日本少国民文化協会について」（『文学』昭和三六年八月）
鳥越信「小川未明」（『鑑賞日本現代文学』第三五巻、角川書店、昭和五七年七月）
中川智弘「小川未明の童話作品における時間描写の特性」（『福井大学初等教育研究』平成二八年三月）
中澤千磨夫「知性の限界　――〈近代の超克〉における京都学派の正負」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
中島国彦「持続する文学精神」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
中谷いずみ「日中戦争の時代」（『コレクション　戦争と文学』別巻、集英社、平成二五年九月）
中村三春「未明童話の様式論　――『赤い蝋燭と人魚』を読み直す」（日本児童文学学会編『研究＝日本の児童文学』第三巻、東京書籍、平成七年八月）
滑川道夫「未明童話における南と北の思想」（『日本児童文学の軌跡』理論社、昭和六三年九月）
滑川道夫「「少国民文学」の性格」（『少国民文学7』エムティ出版、平成三年六月）
西本鶏介「伝統は克服されたか　未明・広介・譲治の再評価」（『日本児童文学』昭和四九年一月）
沼沢和子「民主主義文学の歌声」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治」（『賢治研究』平成一七年七月）

信時哲郎「宮沢賢治論」（『国文学　解釈と鑑賞』平成二一年六月）
野間宏「解説」（『日本プロレタリア文学大系』第六巻、三一書房、昭和二九年一一月）
長谷川潮「戦時下の戦争児童文学の場合」（『日本児童文学』平成七年八月）
畠山兆子「未明文学における「詩」の意味　――『詩集あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に」（『梅花女子大学文学部紀要』昭和六〇年一二月）
原子朗「ラフカディオ・ハーンと未明を語る」（『ネバーランド』平成一八年七月）
日高昭二「解説　一九二二（大正十一）年の文学」（『編年体　大正文学全集』第一一巻、ゆまに書房、平成一四年七月）
廣畑研二「山辺健太郎旧蔵「日本社会主義同盟名簿」」（『大原社会問題研究所雑誌』平成二一年一〇月）
廣畑研二「もう一つの日本社会主義同盟名簿」（『初期社会主義研究』平成二二年六月）
藤井正「日本社会主義同盟の歴史的意義　「大同団結」から「共同戦線」へ」（増島宏編『日本の統一戦線』上巻、大月書店、昭和五三年五月）
藤田省三『共同研究転向』中・下巻の総論についての補注」（思想の科学研究会編『共同研究転向』第六巻、東洋文庫、平成二五年三月）
古田足日「さよなら未明」（『現代児童文学論』くろしお出版、昭和三四年九月）
古田足日「自分のうちにある伝統の戦いを　いわゆる未明否定について」（『日本児童文学』昭和三六年一〇月）
松村友視「解説　一九二〇（大正九）年の文学」（『編年体　大正文学全集』第九巻、ゆまに書房、平成一三年一二月）
丸山真男「明治時代の思想」（『世界歴史事典』第一八巻、平凡社、昭和二八年一〇月）
箕輪真澄「小川未明」（日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書2　社会派の文学』野島書店、昭和五一年七月）
宮川建郎「さよなら未明　――「童話伝統批判」と現代児童文学の成立」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年四月）
宮川健郎「私たちは、どこにいるのか、どこへ行こうとしているのか」（『児童文学研究、そして、その先へ』上巻、久山社、平成一九年一一月）
宮川健郎「児童文学という概念、テクストとしての児童文学」（『日本近代文学』平成二六年一一月）
宮川健郎「未明童話を読み直す季節　小川未明研究の現在」（『小川未明文学館紀要』平成二

八年三月）
村上兵衛「「聖戦」と戦時下の文学」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）
本山恭子「小説家としての小川未明論　――『童話作家宣言』を中心に」（『立教大学日本文学』昭和三九年一一月）
森英一「風俗小説と中間小説」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
矢島道弘「無頼の魂　――戦後における無頼派の作家たち」（『講座昭和文学史』第三巻、有精堂出版、昭和六三年六月）
安田杏子「収蔵資料紹介　福田正夫宛小川未明書簡」（『小川未明文学館館報』平成二一年五月）
山田敬三「文学とナショナリズム」（山田他編『十五年戦争と文学』東方書店、平成三年二月）
山田稔「小川未明における思想と美学」（『文学』昭和三六年一〇月）
山室静「小川未明論」（『現代日本文学全集』第七〇巻、筑摩書房、昭和三二年二月）
山本明「一五年戦争末期の雑誌（三）　――少国民文化協会の出版物」（『評論・社会科学』昭和六〇年五月）
横山信幸「未明否定論争と近代児童文学観」（『近代文学試論』昭和五三年一一月）
若林敦「詩集『あの山越えて』　――小説との対応」（『小川未明文学館館報』平成二一年五月）
「資料（1）　日本社会主義同盟報告　（付）成立後の同盟の活動・加盟団体の概況」（『初期社会主義研究』平成二〇年二月）

■ウェブサイト

上越市・小川未明文学館（http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimei-bungakukan/）